

(財)大阪府文化財センター調査報告書 第201集

吹田操車場遺跡Ⅳ

吹田市

# 吹田操車場遺跡Ⅳ

吹田（信）基盤整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

二〇一〇年三月

財団法人  
大阪府文化財センター

2010年 3 月

財団法人 大阪府文化財センター

(財)大阪府文化財センター調査報告書 第201集

吹田市

# 吹田操車場遺跡Ⅳ

吹田（信）基盤整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

財団法人 大阪府文化財センター







第6地区南半全景（南西から）



# 序 文

吹田操車場遺跡は大正12年から昭和59年まで操業した、当時、東洋一と称された吹田操車場を中心に広がる遺跡です。

平成10年度から財団法人大阪府文化財センター（当時は財団法人大阪府文化財調査研究センター）は当遺跡の調査を行なってまいりました。今回は平成19・20年度および平成21年度5～7月に行なった発掘調査について報告しています。

これまでの調査成果によると吹田操車場遺跡では、古墳時代以降の遺構が検出され、旧石器時代以降の遺物が出土しました。

今回の調査でも弥生時代から中・近世にかけての遺構を検出しました。主に奈良、平安時代と推定される掘立柱建物、土坑、溝等で構成された集落跡を多く含みます。他に、弥生時代の土坑群、中世前半の集落跡やそれ以降の耕作地跡も見つかっています。

当地は淀川の支流である安威川・神崎川の右岸に近く、古代の官道であった三島路も近辺を通っていたようです。古墳時代の吹田須恵器窯跡群、古代の官衙窯であった吉志部瓦窯や七尾瓦窯も近隣に位置します。又、東寺の荘園であった垂水荘も近隣にあったことが、文献から窺えます。

周辺の様相を知るに、吹田操車場遺跡においても、様々な物資が行き交っていたであろうことは、想像に難くありません。たとえば、今回の調査にて、出土することがまれな平安時代の遺物、中国越州窯系青磁碗が見つかっておりますが、当遺跡の性格の一端を如実に物語っていると考えられます。

このように、古の人々の足跡を示す遺構や遺物は、地域の文化を復元する貴重な資料となり、文化財に対する意識をより高めてくれるものと確信いたします。

最後になりましたが、発掘調査及び遺物整理事業の実施にあたり、多大なご協力を頂きました独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構西日本支社、日本貨物鉄道株式会社関西支社吹田機関区、大阪府教育委員会、吹田市教育委員会、吹田市立博物館はじめ、関係各位に深く感謝いたします。今後とも、当センターの事業にご協力をお願い致しますとともに、これからも広く、みなさま方の文化財に対するご理解とご協力をお願いいたします。

平成22年3月

財団法人 大阪府文化財センター  
理事長 水野 正好





# 例 言

1. 本書は大阪府吹田市芝田町地内他に所在する吹田操車場遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、吹田（信）基盤整備工事に伴う吹田操車場遺跡発掘調査として、平成19年（2007）5月1日～平成20年（2008年）11月30日の間、独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構国鉄清算事業西日本支社の委託を受け、大阪府教育委員会の指導の下、財団法人大阪府文化財センターが実施した。現地における調査は平成19年（2007年）5月1日～平成20年（2008年）11月30日および平成21年（2009年）5月7日～平成21年（2009年）7月14日の間に行った。遺物整理作業は平成20年（2008年）12月1日～平成21年（2009年）12月31日の間に行い、平成22年3月31日本書の刊行を以って完了した。
3. 調査および整理作業は以下の体制で実施した。
  - [平成19年度（2007年度）]  
調査部長 赤木克視、調整課長 田中和弘、中部調査事務所長 小野久隆、調査係長 松岡良憲、副主査 岡本圭司、技師 亀井 聡、専門調査員 影山美智与
  - [平成20年度（2008年度）]  
調査部長 赤木克視、調整課長 田中和弘、中部調査事務所長兼調査係長 寺川史郎、副主査 岡本圭司、技師 亀井 聡（平成20年10月迄）、専門調査員 赤松佳奈
  - [平成21年度（2009年度）]  
調査部長兼調査課長 福田英人、調査課調整グループ長 金光正裕、調査課調査グループ長 寺川史郎、中部総括主査 秋山浩三、主査 村上富喜子、副主査 岡本圭司
4. 遺物撮影は調査グループ主査 片山彰一が、木製品の保存処理・樹種同定・骨の同定は調査グループ主査 山口誠治、専門調査員 橋本俊範が行った。
5. 発掘調査および整理作業の過程で以下の諸氏ならびに諸機関にご指導・ご教示を賜った。記して感謝の意を表したい。（五十音順、敬称略）
  - 大脇 潔（近畿大学教授）、賀納章雄（吹田市教育委員会）、近藤康司（堺市教育委員会）、田中充徳（吹田市教育委員会）、西山昌孝（千早赤阪村教育委員会）、畑中英二（財団法人 滋賀県文化財保護協会）、林 修平（甲賀市教育委員会）、平尾政幸（財団法人 京都市埋蔵文化財研究所）、増田真木（吹田市教育委員会）、宮崎泰史（大阪府教育委員会）、森村健一（堺市教育委員会）
6. 発掘調査において、以下の機関に分析を委託した。
  - 放射性炭素年代測定：(株) パレオ・ラボ
  - 花粉・珪藻分析：(株) 古環境研究所
  - 花粉・珪藻・珪酸体分析および種実の分析：パリノ・サーヴェイ（株）
7. 本書の作成では、以下のとおり執筆分担を行い、編集は村上・岡本が担当した。
  - 第Ⅰ・Ⅱ章は村上・岡本、第Ⅲ章第1節は亀井、第2節1～5は岡本、第2節6～9は岡本・赤松、第3節は岡本、第4・5節は村上、第Ⅳ章は委託分析の結果を掲載した。第Ⅴ章は第1節を岡本、第2節を村上が担当した。
8. 本調査に関わる写真・実測図などの記録類は当センターにおいて保管しており、広く活用されることを希望する。

# 凡 例

1. 遺構実測図の基準高は、東京湾平均海面（T.P.）を使用し、挿図や本文での表示は省略した。
2. 座標値は世界測地系（測地成果2000）で表示し、単位はmである。
3. 全体図および遺構実測図の方位は座標北を示す。
4. 現地調査および遺物整理に際しては、当センターの『遺跡調査基本マニュアル』に則って実施した。
5. 土層断面図の土色は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』2006年版 農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修を用いた。
6. 遺構名は、地区毎に設定した通し番号の後ろに遺構の種類をつけて表示している。但し、掘立柱建物等、遺構の集合体については、個別の遺構番号のほかに、遺構の種類を先に、通し番号を後ろにした表示を別途記している。例：第6地区2溝、建物2
7. 縮尺は、遺構面全体図が400分の1、遺構平面図が80分の1、断面図が40分の1を原則として用いる。
8. 挿図および写真図版のキャプションでは、平成19・20年度調査分は年度記述を省略して地区名から記し、平成21年度調査分は年度を含めて記述した。
9. 遺物実測図は原則として4分の1縮尺であるが、古銭は2分の1、石鏃は3分の2、曲物は8分の1で表した。写真図版の縮尺は不統一である。
10. 掲載遺物は通し番号を与えて表示し、本文・挿図・写真図版ともに遺物番号は一致する。
11. 本書を作成するにあたり、以下のものを引用および参照した。
  - （財）大阪府文化財調査研究センター 1999年 『（財）大阪府文化財調査研究センター調査報告書 第42集 吹田操車場遺跡』
  - （財）大阪府文化財調査研究センター 2001年 『（財）大阪府文化財調査研究センター調査報告書 第66集 吹田操車場遺跡・吹田操車場遺跡B地点』
  - （財）大阪府文化財センター 2008年 『（財）大阪府文化財センター調査報告書 第180集 吹田操車場遺跡Ⅲ』
  - 吹田市史編さん委員会 1981年 『吹田市史』 第1巻 吹田市役所
  - 吹田市史編さん委員会 1990年 『吹田市史』 第8巻 吹田市役所
  - 吹田市都市整備部・吹田市教育委員会 2004年 『吹田操車場遺跡－市営岸部中住宅建替工事に伴う発掘調査報告書－』
  - 独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構 吹田市教育委員会 2008年11月 『吹田操車場遺跡確認調査報告書－吹田操車場跡地地区（仮称）の整備事業に伴う埋蔵文化財確認調査－』
  - 中世土器研究会編 1998年 『概説 中世の土器・陶磁器』 真陽社
  - 中世土器研究会 1988年 『中近世土器の基礎研究Ⅳ』
  - 齋藤孝正 2000年 『日本の美術 6 No.409 越州窯青磁と緑釉・灰釉陶器』 至文堂
  - 古代の土器研究会編 1992年 『古代の土器 1 都城の土器集成』
  - 古代の土器研究会編 1993年 『古代の土器 2 都城の土器集成Ⅱ』
  - 古代の土器研究会編 1994年 『古代の土器 3 都城の土器集成Ⅲ』

長岡京跡発掘調査研究所 1979年 『長岡京跡 発掘調査研究所調査報告書 第1集』

高槻市教育委員会 1991年 『高槻市文化財年報 昭和63・平成元年度』

宇野隆夫 1984年 「後半期の須恵器—平安京・京都出土品にみる中世的様相の形成—」 『史林』

67巻6号 史学研究会





# 目 次

巻頭図版

序 文

例 言

凡 例

第 I 章	調査に至る経過と方法	1
第 1 節	調査に至る経緯と経過	1
第 2 節	調査・整理の方法	2
第 II 章	遺跡の位置と環境	4
第 1 節	地理的・歴史的環境	4
第 2 節	吹田操車場遺跡の既往の調査	4
第 III 章	調査成果	7
第 1 節	基本層序	7
第 2 節	平成19・20年度の調査	15
1.	第 1 地区の調査	15
(1)	遺構面の概要	15
(2)	第 3 面の遺構	17
(3)	第 4 面の遺構	21
(4)	第 5 面の遺構	21
(5)	第 5－2 面の遺構	28
2.	第 2 地区の調査	39
(1)	遺構面の概要	39
(2)	第 2 面から第 4 面の遺構	42
(3)	第 5 面の遺構	46
(4)	第 5－2 面の遺構	51
3.	第 3 地区の調査	52
(1)	遺構面の概要	52
4.	第 4 地区の調査	52
(1)	遺構面の概要	52
(2)	第 3 面の遺構	54
(3)	第 4 面の遺構	55
(4)	第 5 面の遺構	56
(5)	第 5－2 面の遺構	57
5.	第 5 地区の調査	57
(1)	遺構面の概要	57

(2) 第4面の遺構	58
(3) 第5面の遺構	58
6. 第6地区の調査	59
(1) 遺構面の概要	59
(2) 第1面の遺構	60
(3) 第2面の遺構	76
7. 第7地区の調査	76
(1) 遺構面の概要	76
(2) 第1面の遺構	78
(3) 第2面の遺構	81
8. 第8地区の調査	87
(1) 遺構面の概要	87
(2) 第3面の遺構	87
(3) 第4面の遺構	93
(4) 第5面の遺構	93
9. 第9地区の調査	100
(1) 遺構面の概要	100
(2) 第2面の遺構	102
(3) 第3面の遺構	102
(4) 第4面の遺構	102
(5) 第5面の遺構	103
第3節 平成21年度の調査	104
1. 第1地区、第2地区の調査	104
2. 第3地区の調査	106
第4節 平成19・20年度調査出土遺物	112
1. 第1地区出土遺物	112
2. 第2地区出土遺物	127
3. 第3地区出土遺物	131
4. 第4地区出土遺物	132
5. 第5地区出土遺物	132
6. 第6地区出土遺物	133
7. 第7地区出土遺物	139
8. 第8地区出土遺物	141
9. 第9地区出土遺物	144
第5節 平成21年度調査出土遺物	145
1. 第1地区出土遺物	145
2. 第2地区出土遺物	145
3. 第3地区出土遺物	145

第IV章	自然科学分析	151
	第1節 放射性炭素年代測定	151
	第2節 花粉・珪藻・植物珪酸体分析	154
	第3節 花粉・珪藻分析	166
	第4節 種実同定	178
第V章	まとめ	191
	第1節 遺構のまとめ	191
	第2節 出土遺物のまとめ	195

## 挿 図 目 次

図1	調査位置図	1
図2	地区割図	3
図3	遺跡分布図	5
図4	調査区と既往の調査位置図	6
図5	第1地区 北東壁断面図	8
図6	第2地区 南西壁断面図	9
図7	第3・第4・第5地区 北西壁断面図	10
図8	第6地区 中央畦断面図	11
図9	第7地区 南東壁東部、第8地区南西壁断面図	12
図10	第7地区 西壁・第8地区南東壁断面図	13
図11	第9地区 南東壁・凸部南西壁断面図	14
図12	第1地区 第3面 全体図	16
図13	第1地区 第3面 北部遺構群 平面図	18
図14	第1地区 第3面 北部遺構 断面図	19
図15	第1地区 第3面 南部遺構群 平面図	20
図16	第1地区 第3面 南部遺構 断面図	21
図17	第1地区 第4面 全体図	22
図18	第1地区 第5面 全体図	23
図19	第1地区 第5面 遺構 断面図	24
図20	第1地区 第5面 北西部遺構群 平面図	25
図21	第1地区 第5面 321土手状遺構及び周辺の遺構断面図	26
図22	第1地区 第5面 北東部遺構群 平面図	27
図23	第1地区 第5面 194井戸 平・断面図	28
図24	第1地区 第5面 175土坑 土師器皿出土平面図	28
図25	第1地区 第5面 南部遺構群 平面図	29
図26	第1地区 第5面 南部遺構 断面図	30

図27	第1地区	第5-2面	全体図	……………	31	
図28	第1地区	第5-2面	北部遺構群	平面図	…………… 32	
図29	第1地区	第5-2面	北東部柵列1・2	平・断面図	…………… 33	
図30	第1地区	第5-2面	263・264井戸	平・断面図	…………… 34	
図31	第1地区	第5-2面	131・265井戸	平・断面図	…………… 35	
図32	第1地区	第5-2面	南部遺構群	平面図	…………… 36	
図33	第1地区	第5-2面	南部遺構	断面図(1)	…………… 37	
図34	第1地区	第5-2面	南部遺構	断面図(2)	…………… 38	
図35	第2地区	第3面	全体図	……………	40	
図36	第2地区	第3面	15池	断面図	…………… 41	
図37	第2地区	15池	獣骨及び五輪塔火輪出土	平面図	…………… 42	
図38	第2地区	第3面	31井戸	平・断面図	…………… 42	
図39	第2地区	第5面	全体図	……………	43	
図40	第2地区	第5面	建物1	平・断面図	…………… 44	
図41	第2地区	第5面	建物2	平・断面図	…………… 45	
図42	第2地区	第5面	建物3	平・断面図	…………… 46	
図43	第2地区	第5面	柵列1	平・断面図	…………… 47	
図44	第2地区	第5面	柵列2	平・断面図	…………… 47	
図45	第2地区	第5面	柵列3	平・断面図	…………… 48	
図46	第2地区	第5面	柵列4	平・断面図	…………… 48	
図47	第2地区	第5面	111・117柱穴	平・立面図	…………… 49	
図48	第2地区	第5面	350井戸	平・断面図	…………… 50	
図49	第2地区	第5-2面	自然流路	平面図	…………… 51	
図50	第3地区	第1面	全体図及び	主要遺構	断面図	…………… 52
図51	第4地区	第3面	全体図及び	主要遺構	断面図	…………… 53
図52	第4地区	第4面	全体図及び	柵列1・2	断面図	…………… 54
図53	第4地区	第4面	主要遺構	断面図	…………… 55	
図54	第4地区	第5面	全体図及び	主要遺構	断面図	…………… 56
図55	第4地区	第5面	87溝	断面図	…………… 57	
図56	第4地区	第5面	25土坑、26・27ピット	平・断面図	…………… 57	
図57	第4地区	第5-2面	全体図及び	88溝	断面図	…………… 58
図58	第5地区	第4面	全体図及び	3・4流路	断面図	…………… 59
図59	第5地区	第5面	全体図及び	5溝	断面図	…………… 60
図60	第6地区	第1面	全体図	……………	61	
図61	第6地区	第1面	379池、380・381井戸	平・断面図	…………… 62	
図62	第6地区	第1面	南側	遺構平面図	…………… 64	
図63	第6地区	第1面	建物1、20・21ピット	平・断面図	…………… 66	
図64	第6地区	第1面	建物2	平・断面図	…………… 67	

図65	第6地区	第1面	建物3・6	平・断面図	68	
図66	第6地区	第1面	建物4	平・断面図	69	
図67	第6地区	第1面	建物5	平・断面図	70	
図68	第6地区	第1面	遺構	断面図	71	
図69	第6地区	第1面	61土坑	平・断面図	72	
図70	第6地区	第1面	22・68土坑	平・断面図	72	
図71	第6地区	第1面	269・359土坑	平・断面図	73	
図72	第6地区	第2面	全体図		74	
図73	第6地区	第2面	375流路	断面図	75	
図74	第7地区	第1面	全体図		77	
図75	第7地区	第1面	22池	断面図	78	
図76	第7地区	第1面	22池 貯水施設	平面図 及び 断面模式図	79	
図77	第7地区		道路状遺構	平・断面図	80	
図78	第7地区		旧地形と調査区関係図		80	
図79	第7地区	第2面	全体図		82	
図80	第7地区	第2面	建物1	平・断面図	83	
図81	第7地区	第2面	建物2・3	平・断面図	84	
図82	第7地区	第2面	溝	断面図	85	
図83	第7地区	第2面	14・66溝	平・断面図	86	
図84	第8地区	第3面	全体図		88	
図85	第8地区	第3面	遺構	断面図	90	
図86	第8地区	第4面	全体図		91	
図87	第8地区	第5面	全体図		92	
図88	第8地区	第5面	建物1、柵列1	平・断面図	94	
図89	第8地区	第5面	建物2・3	平・断面図	95	
図90	第8地区	第5面	柵列2	平・断面図	96	
図91	第8地区	第5面	70井戸	平・断面図	96	
図92	第8地区	第5面	土坑	断面図	97	
図93	第8地区	第5面	溝	断面図	98	
図94	第8地区	第5面	54・116(115)土坑	平・断面図	99	
図95	第9地区	第2面・第4面	全体図		101	
図96	第9地区	第5面	全体図		102	
図97	平成21年度	第1・第2地区	平面図及び	層序柱状図	104	
図98	平成21年度	第3地区	層序柱状図		106	
図99	平成21年度	第3地区	第1面	全体図	106	
図100	平成21年度	第3地区	第2面	全体図	107	
図101	平成21年度	第3地区	第2面	建物1	平・断面図	108
図102	平成21年度	第3地区	第2面	柱列1	平・断面図	109

図103	平成21年度 第3地区 第2面 100土坑、204ピット 断面図	109
図104	平成21年度 第3地区 第2面 110土坑 断面図	110
図105	第1地区 第1～3層、第3面遺構 出土遺物	113
図106	第1地区 第4層 出土遺物(1)	114
図107	第1地区 第4層 出土遺物(2)	115
図108	第1地区 第4層 出土遺物(3)	117
図109	第1地区 第5面 土器集中部 出土遺物(1)	118
図110	第1地区 第5面 土器集中部 出土遺物(2)	119
図111	第1地区 盛土(整地土) 出土遺物	121
図112	第1地区 第5面 321土手状遺構他 出土遺物	121
図113	第1地区 第5面 北東部遺構群 出土遺物	123
図114	第1地区 第5面 175土坑 出土遺物	124
図115	第1地区 第5面 ピット 出土遺物	124
図116	第1地区 第5-2面 遺構 出土遺物	125
図117	第1地区 第5-2面直上 出土遺物	126
図118	第2地区 第3面 15池 出土遺物	127
図119	第2地区 第3面、第3・4層 出土遺物	128
図120	第2地区 第5面 350井戸 出土遺物(1)	128
図121	第2地区 第5面 350井戸 出土遺物(2)	129
図122	第2地区 第5面 建物2、ピット 出土遺物	130
図123	第2地区 第5面 110土坑、121溝 出土遺物	130
図124	第2地区 第5面 40落込み 出土遺物	131
図125	第4地区 出土遺物	132
図126	第6地区 第1層 出土遺物	133
図127	第6地区 第1面 建物、ピット 出土遺物	133
図128	第6地区 第1面 溝、土坑 出土遺物	134
図129	第6地区 第1面 61土坑 出土遺物	135
図130	第6地区 第1面 22土坑 出土遺物	137
図131	第7地区 出土遺物	140
図132	第8地区 第1面、第2～第4層、第3面 遺構 出土遺物	141
図133	第8地区 第5層、第5面 遺構 出土遺物	142
図134	第9地区 出土遺物	144
図135	平成21年度 第3地区 第2面 柱穴、ピット、96土坑 出土遺物	146
図136	平成21年度 第3地区 第2面 100土坑 出土遺物	147
図137	平成21年度 第3地区 第2面 100土坑、110土坑 出土遺物	149
図138	暦年較正結果	153
図139	主要珪藻化石群集の層位分布	158
図140	主要花粉化石群集の層位分布	159

図141	植物珪酸体含量の層位分布	160
図142	吹田操車場遺跡発掘調査における花粉ダイアグラム	170
図143	吹田操車場遺跡発掘調査における珪藻ダイアグラム	175

## 表 目 次

表 1	測定試料及び処理	151
表 2	放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果	152
表 3	珪藻化石の生態性区分と環境指標種群	155
表 4	珪藻分析結果	157・158
表 5	花粉分析結果	159
表 6	植物珪酸体含量	160
表 7	吹田操車場遺跡発掘調査における花粉分析結果	169
表 8	吹田操車場遺跡発掘調査における珪藻分析結果	174
表 9	大型植物遺体同定分析結果	179・180
表10	各遺構における種実遺体の産状	181
表11	各地区主要遺構変遷概念表	193
表12	遺物一覧表	197～204

## 写 真 目 次

写真 1	第7地区南東壁面 焦土跡断面	7
写真 2	第9地区北東壁面 旧国鉄軌道敷跡断面	11
写真 3	珪藻化石	163
写真 4	花粉化石	164
写真 5	植物珪酸体	165
写真 6	吹田操車場遺跡発掘調査の花粉	176
写真 7	吹田操車場遺跡発掘調査の珪藻	177
写真 8	種実遺体（1）	186
写真 9	種実遺体（2）	187



# 巻頭図版目次

第6地区南半 全景（南西から）

# 写真図版目次

- 図版1 第1地区
1. 第3面 全景（北西から）
  2. 第3面 北部 土坑群（西から）
  3. 60土坑（南東から）
  4. 58土坑（南から）
  5. 61土坑（南から）
- 図版2 第1地区
1. 第3面 全景（東から）
  2. 第3面 南部遺構群（南東から）
  3. 40溝 断面（南から）
  4. 第3面 21ピット（南東から）
  5. 第5面 14ピット（西から）
  6. 第5面 19ピット（南東から）
- 図版3 第1地区
1. 第5面 北部 全景（西から）
  2. 第5面 北西部遺構群（北西から）
  3. 第5面 254溝（南西から）
  4. 第5面 211ピット（南から）
  5. 第5面 250土坑（南から）
  6. 第5-2面 266溝（南西から）
- 図版4 第1地区
1. 第5面 北部 全景（北東から）
  2. 第5面 北東部遺構群（南東から）
  3. 175土坑 土師器皿出土状況（南から）
  4. 第5面 北東部遺構群（北から）
  5. 第5面 北東部遺構群（北西から）
- 図版5 第1地区
1. 第5-2面 南部 全景（北から）
  2. 第5-2面 南部遺構群（南西から）
  3. 131井戸（南東から）
  4. 162溝 断面（北東から）
  5. 87ピット（南から）
- 図版6 第1地区
1. 第5-2面 北部 全景（西から）

- 2. 第5-2面 北部遺構群 全景(東から)
  - 3. 275土坑(北東から)
  - 4. 266溝 検出状況(南西から)
  - 5. 270溝 断面(西から)
- 図版7 第1地区
- 1. 265井戸(南から)
  - 2. 265井戸 遺物出土状況(南から)
  - 3. 263井戸(南東から)
- 図版8 第1地区
- 1. 268溝 南壁断面(南から)
  - 2. 268溝 北壁断面(南から)
  - 3. 308土坑 断面(南西から)
- 図版9 第2地区
- 1. 第3面 耕作痕(南から)
  - 2. 第4面 耕作痕(南西から)
- 図版10 第2地区
- 1. 15池 西断面(北西から)
  - 2. 15池 中央断面(北西から)
  - 3. 15池 東断面(北西から)
  - 4. 15池 獣骨出土状況
  - 5. 15池 五輪塔火輪出土状況
- 図版11 第2地区
- 1. 31井戸 断面(北東から)
  - 2. 30井戸 断面(北東から)
- 図版12 第2地区
- 1. 第5面 全景(南から)
  - 2. 第5面 東部 全景(北西から)
  - 3. 第5面 東部 全景(北西から)
  - 4. 第5面 北端部ピット群(北西から)
  - 5. 第5面 西部 全景(北西から)
- 図版13 第2地区
- 1. 第3面 拡張部 全景(北西から)
  - 2. 第3面 拡張部 全景(南東から)
  - 3. 第5面 拡張部 全景(北西から)
  - 4. 第5面 350井戸 断面(北東から)
  - 5. 第5面 350井戸 曲物出土状況(北東から)
  - 6. 第5面 建物2 111柱穴 遺物出土状況
  - 7. 第5面 建物2 117柱穴 遺物出土状況(南東から)
- 図版14 第3地区
- 1. 第1面 全景(南東から)
- 第4地区
- 2. 第2面 全景(南東から)
  - 3. 第3面 全景(西から)
- 図版15 第4地区
- 1. 第5面 全景(北東から)
  - 2. 第4面 全景(北西から)
  - 3. 第5面 26ピット 軒丸瓦出土状況(北東から)
  - 4. 第5面 87溝 断面(北東から)

5. 第5-2面 88溝 (北東から)
- 図版16 第5地区
1. 第4面 全景 流路埋没状況 (東から)
  2. 第5面 全景 (南東から)
  3. 第5面 8流路 断面 (南西から)
- 図版17 第6地区
1. 南半 全景 (東から)
  2. 61土坑、建物2・3周辺 (北東から)
  3. 359土坑 遺物出土状況 (南東から)
  4. 2溝 (右)、288溝 (左) 断面 (北東から)
  5. 26溝 断面 (南東から)
  6. 2溝 断面 (南西から)
- 図版18 第6地区
1. 建物1 (南西から)
  2. 22土坑 (北東から)
  3. 建物5 114柱穴 断面 (南東から)
  4. 22土坑 断面 (北西から)
  5. 建物2、3土坑 (南西から)
  6. 229土坑、231・230ピット 断面 (南東から)
  7. 292ピット 遺物出土状況 (東から)
  8. 建物2 93・95柱穴、94ピット (右)、229土坑 (左) 遺物出土状況 (南東から)
- 図版19 第6地区
1. 61土坑 遺物出土状況 (南から)
  2. 61土坑 遺物出土状況 (南から)
  3. 61土坑 遺物出土状況 (南東から)
- 図版20 第6地区
1. 北半部 全景 (北東から)
  2. 379池 (南から)
  3. 375流路 (南東から)
- 図版21 第7地区
1. 西半 全景 (北東から)
  2. 第2面 東半 全景 (南西から)
  3. 第2面 建物1 (南から)
  4. 建物1 60柱穴 断面 (南東から)
  5. 建物1 61柱穴 断面 (南西から)
  6. 第2面 2溝 断面 (北東から)
- 図版22 第7地区
1. 第2面 西半 全景 (南から)
  2. 66溝 (東から)
  3. 49・50・51溝 検出状況 (南から)
  4. 47・48溝 (東から)
  5. 建物2 (南から)
  6. 47溝 断面 (西から)
  7. 48溝 断面 (東から)

- |      |      |                             |
|------|------|-----------------------------|
|      |      | 8. 建物3 36柱穴 断面(南から)         |
|      |      | 9. 建物3 40柱穴 断面(南東から)        |
| 図版23 | 第7地区 | 1. 第1面 22池周辺(南から)           |
|      |      | 2. 22池 貯水施設(南から)            |
|      |      | 3. 22池 断面(南東から)             |
| 図版24 | 第7地区 | 1. 第1面 耕作痕(南から)             |
|      |      | 2. 第1面 道路状遺構上面(南西から)        |
|      |      | 3. 第1面 1~3畠状遺構(南西から)        |
|      |      | 4. 道路状遺構下面(南西から)            |
|      |      | 5. 第1面 下面 鋤溝群(東から)          |
|      | 第8地区 | 6. 第3面 北半 耕作痕(鋤溝)検出状況(南西から) |
|      |      | 7. 第3面 耕作痕(畝間溝)検出状況(東から)    |
|      |      | 8. 第4面 南半 耕作痕(鋤溝)検出状況(南東から) |
| 図版25 | 第8地区 | 1. 第3面 土坑群(南西から)            |
|      |      | 2. 30土坑(南東から)               |
|      |      | 3. 10土坑 断面(南西から)            |
|      |      | 4. 26井戸(南東から)               |
|      |      | 5. 第5面 全景(南東から)             |
| 図版26 | 第8地区 | 1. 建物1(南東から)                |
|      |      | 2. 建物2(東から)                 |
|      |      | 3. 建物3、40溝(南から)             |
|      |      | 4. 建物2 64柱穴 断面(北東から)        |
|      |      | 5. 54土坑 西側断面(北から)           |
|      |      | 6. 建物3 87柱穴(南西から)           |
|      |      | 7. 116土坑 遺物出土状況(南東から)       |
|      |      | 8. 70井戸 断面(東から)             |
|      |      | 9. 37・40溝 断面(西から)           |
| 図版27 | 第8地区 | 1. 第5面 西半(東から)              |
|      | 第9地区 | 2. 第5面(北東から)                |
|      |      | 3. 第5面 凸部(南東から)             |
| 図版28 | 第1地区 | 1. 北東壁                      |
|      |      | 2. 南東壁                      |
|      | 第2地区 | 3. 南西壁                      |
|      | 第4地区 | 4. 北東壁                      |
|      | 第6地区 | 5. 北西壁、380井戸                |
|      | 第7地区 | 6. 南西壁(西から)                 |
|      | 第8地区 | 7. 南東壁                      |
|      |      | 8. 南東張り出し部壁                 |

- 図版29 平成21年度  
第1地区 1. 第3面（南東から）  
第2地区 2. 第3面（南西から）  
第3地区 3. 第1面（南西から）
- 図版30 平成21年度  
第3地区 1. 第2面 全景（北東から）  
2. 第2面 全景（南西から）
- 図版31 平成21年度  
第3地区 1. 100土坑（北から）  
2. 110土坑（北西から）  
3. 46・47柱穴（北東から）  
4. 107柱穴（北東から）  
5. 62ピット（北東から）  
6. 120ピット（西から）  
7. 66ピット（北東から）  
8. 37ピット（北東から）
- 図版32 第1地区 第2～3層、第3面遺構 出土遺物
- 図版33 第1地区 第4層 出土遺物（1）
- 図版34 第1地区 第4層 出土遺物（2）
- 図版35 第1地区 第4層 出土遺物（3）
- 図版36 第1地区 第5面 321土手状遺構他 出土遺物
- 図版37 第1地区 第5面 北東部遺構群 出土遺物
- 図版38 第1地区 第5面 175土坑 出土遺物
- 図版39 第1地区 第5面・第5－2面 遺構、第5－2面直上 出土遺物
- 図版40 第2地区 第3面 15池 出土遺物
- 図版41 第2地区 第5面 350井戸 出土遺物
- 図版42 第2地区 第5面 建物他、第4地区 出土遺物
- 図版43 第6地区 第1面 遺構、包含層 出土遺物
- 図版44 第6地区 第1面 61土坑 出土遺物
- 図版45 第6地区 第1面 22土坑他 出土遺物
- 図版46 第7地区 出土遺物
- 図版47 第8地区 出土遺物
- 図版48 第9地区 出土遺物
- 図版49 平成21年度 第3地区 鋤溝群、第1層、第2層、柱穴（建物1）、ピット 出土遺物
- 図版50 平成21年度 第3地区 柱穴（建物1）、柱穴（柱列1）、ピット 出土遺物
- 図版51 平成21年度 第3地区 100土坑、110土坑 出土遺物



# 第 I 章 調査に至る経過と方法

## 第 1 節 調査に至る経緯と経過

吹田操車場遺跡は、吹田市芝田町と岸部中町地内に所在する遺跡である。当遺跡は昭和42年（1967年）操車場内の道路・水路整備に伴う、吹田市教育委員会による事前調査で、中世の遺物を包含することが初めて確認された。

平成10年（1998年）当時の日本国有鉄道清算事業団近畿支社によって、JR梅田貨物駅の機能の半分を吹田操車場跡地へ移転する計画があがった。同社は大阪府教育委員会と協議の後、移転用地内全域を対象として、確認調査を行うことになった。調査は（財）大阪府文化財調査研究センターに委託され、遺跡の範囲、遺構の有無、遺構面の枚数、遺構の種類等を確認するため、61箇所におよぶ確認調査が行われた。この調査の結果、操車場建設時の盛土によって保護される形で下の遺構がほぼ全域で残っていることがわかり、旧石器から近世に至る幅広い時代の複合遺跡であることが判明した。

平成12年には、日本鉄道建設公団国鉄清算事業本部西日本支社は吹田信号場基盤整備工事による貨物

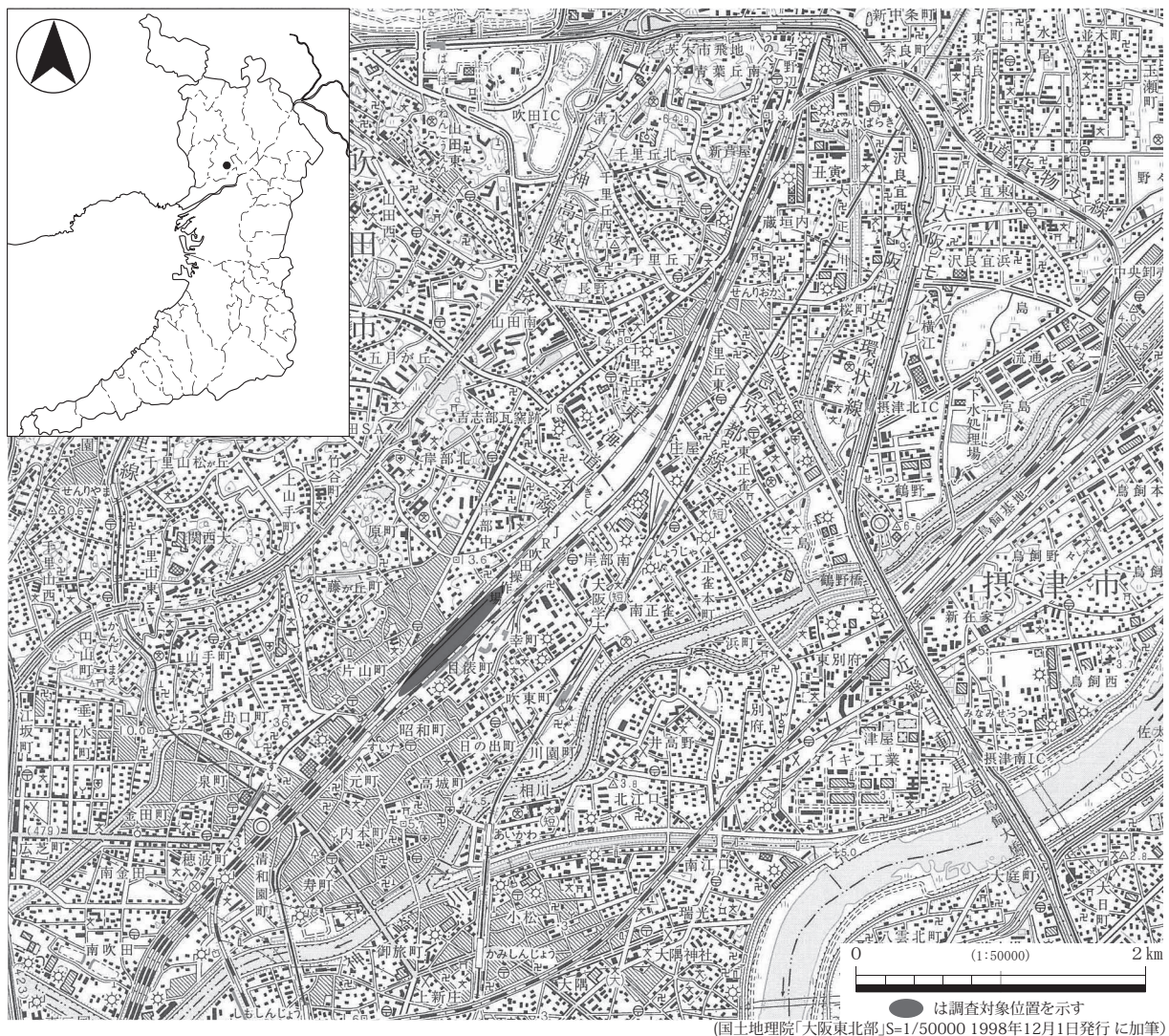


図 1 調査位置図



駅舎および倉庫建設計画に際し、上記の調査結果をふまえ、大阪府教育委員会と協議した。その結果、予定地の発掘調査を同センターが実施することになった。この調査と並行し、吹田操車場の南に貨車区の改良工事を行うこととなり、建替えの対象となった貨車庫の試掘調査を大阪府教育委員会文化財保護課が実施した。その結果、新たな遺跡が発見され、吹田操車場遺跡B地点として、同じく、同センターが発掘調査を実施した。

(財)大阪府文化財センターは平成18年から平成19年にも、同じく吹田信号場基盤整備工事に伴い調整池6箇所と、それを結ぶ導水管部分を対象に発掘調査を実施した。

今回、平成19年から平成20年にかけて、引き続き吹田信号場基盤整備工事に伴う発掘調査として、調整池4箇所(C7、C8、C9、C10)、防火水槽4箇所(B3、B4、B5、B7)、導水路部分を、また平成21年5月から7月にかけて、JR第二・第三職員通路部付け替え(ポンプ施設部含む)について発掘調査を実施した。本書はこれらの調査の成果について報告する。

## 第2節 調査・整理の方法

**調査区割** 遺物の取り上げ、写真撮影に対し、当センターマニュアルに基づき国土座標(第Ⅵ座標系)を基準とした区画を使用した。(図2参照)第Ⅰ区画は大阪府の南西端 $X = -192,000\text{m}$ ・ $Y = -88,000\text{m}$ を起点に、府域を南北15、東西9区画に分割している。一区画は南北6km、東西8kmとなる。第Ⅱ区画は第Ⅰ区画を16区画に分けた。一区画は縦1.5km、横2.0kmとなる。第Ⅲ区画は第Ⅱ区画を東西20分割、南北15分割する一辺100mの区画である。第Ⅳ区画は第Ⅲ区画を東西、南北ともに10分割した一辺10mの区画である。

**調査区の呼称** 調査時は事業者との調整を円滑に行うため、工事名称と当センターマニュアルによる調査区名称を併用した。その対応関係は以下のとおりである。(図2参照)

C7地区が第1地区、C8地区が第2地区、B3地区が第3地区、B4地区が第4地区、B5地区が第5地区、C9地区が第6地区、導水路東地区と導水路中地区の大半(中-1)が第7地区、導水路中地区の一部と導水路西地区の東半、およびB7地区とC10地区が第8地区、導水路西地区の西半が第9地区である。

**遺構名** 平成19・20年度および平成21年度の各調査における調査区毎に1からの通し番号を付与した。

**掘削方法** 吹田操車場造営時の盛土、操車場造営直前の耕作土を機械掘削し、それ以下は人力掘削により遺構検出を行った。

**遺構面と層** [盛土]を0として、上から順に番号を与え、各遺構面はその上面を覆う層と同じ番号で記した。

**遺構図** 検出した遺構は、平成19・20年度調査では、ヘリコプターによる空中写真測量により、1/50、1/100の平面図を作成するとともに、必要に応じ平面図、断面図、立面図を1/10、1/20で実測した。平成21年度調査については1/20の平面図、断面図と、必要に応じて1/10の平面図を手作業により実測した。報告書掲載の遺構図はこれらを編集して作成した。

**写真撮影** 各調査区の全景写真は一部、高所作業車を用いて行った。記録は通常35mmモノクロおよびリバーサルのフィルムを用い、報告書掲載分については主に6×7フィルムを使用した。

**試料分析** 第1地区265井戸出土の種子およびその他の鑑定を実施した。成果については第Ⅳ章に記した。

**整理作業** 主要遺構について実測図を編集し、遺構挿図についてはデジタルトレースを行った。遺物は洗浄、注記、接合後、実測および必要なものについては拓本を行った。実測図は各地区の遺構毎に版下作成した後、従来の手作業によるトレースを行った。

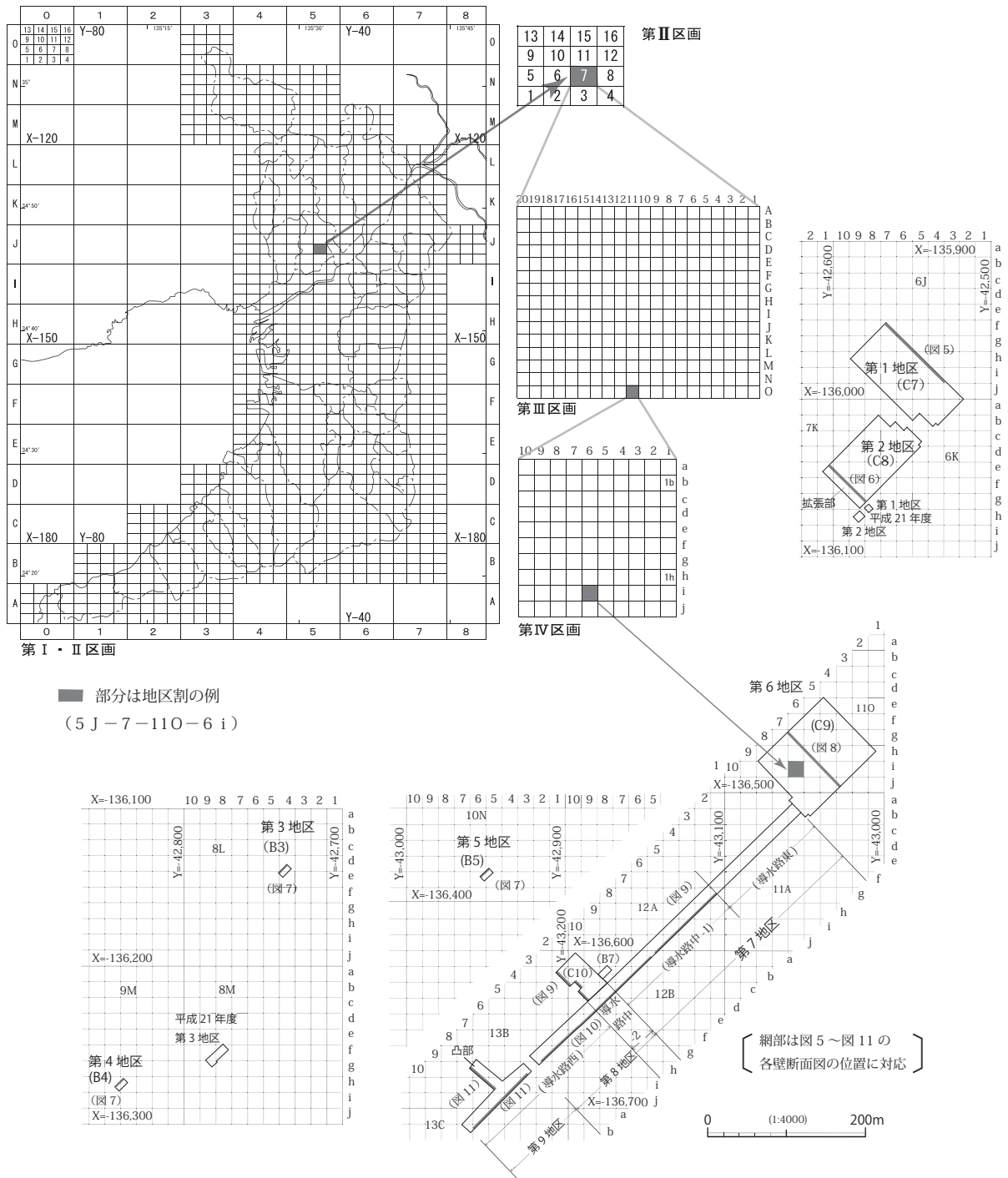


図 2 地区割図



## 第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

### 第1節 地理的・歴史的環境

吹田操車場遺跡は吹田市芝田町他に所在する。遺跡は淀川、安威川、神崎川の右岸に位置し、大阪層群の隆起により形成された千里丘陵の南側の沖積平野に立地する。

吹田市内では旧石器時代以降、各時代の遺跡がみられる。以下に吹田操車場遺跡周辺の各時代の主要な遺跡について説明する。

旧石器時代の遺物としては吉志部遺跡周辺から出土したナイフ形石器、削器、錐状石器や、高城遺跡出土のナイフ形石器などがある。

縄文時代では中ノ坪遺跡などの有舌尖頭器、高浜遺跡では船元式土器、七尾瓦窯下層遺構では船橋式土器、目俵遺跡では長原式土器が出土している。

弥生時代では垂水遺跡、北泉遺跡で前期から後期の遺物が出土しており、垂水遺跡では後期の建物遺構や遺物が検出された。七尾東遺跡では建物遺構、土器、石器など、垂水南遺跡、榎坂遺跡でも後期を中心に遺物が多く出土している。ことに垂水遺跡では近江、東海、四国、山陰、などの土器も多く出土しており、他地域との交流が盛んであったことが窺える。

古墳時代では集落遺跡、須恵器窯跡、古墳があげられる。集落遺跡として、垂水遺跡では仿製鏡や韓式系土器、初期須恵器が、五反島遺跡では土師器、初期須恵器、鉄剣が出土している。垂水南遺跡では古墳時代前期の建物、水田、榎坂遺跡では建物遺構が検出されている。千里丘陵において須恵器の窯は多く、最古の吹田32号窯では初期須恵器が焼かれた。6世紀に須恵器の窯は最盛期を迎えるが、8世紀前半には生産を停止する。瓦の生産は8世紀初頭から七尾瓦窯跡で操業開始された。七尾瓦窯跡出土の瓦が難波宮跡出土の瓦と同範であることから、難波宮の官瓦窯とされた。また、8世紀末には吉志部瓦窯で平安京の瓦が生産されたが、長くは続かず短期で終了した。

古墳は数少ないが、横穴式石室をもつ吉志部古墳、木芯粘土室に組合式石棺を収めた新芦屋古墳があげられる。また、須恵器窯跡等からは陶棺の破片が出土している。

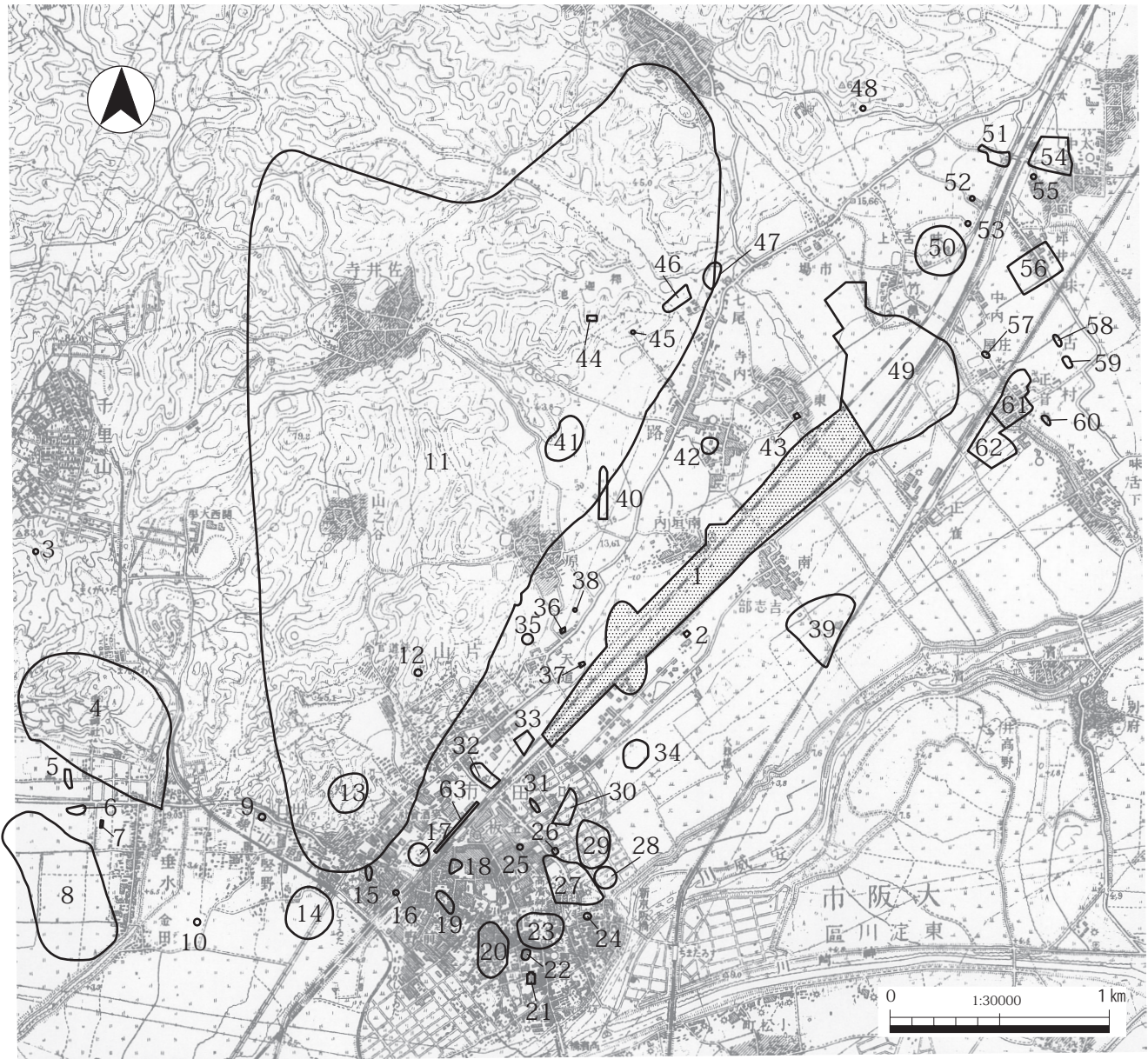
平安時代の吹田市では、文献によると、春日領、東寺領の荘園が存在した。垂水南遺跡では東寺領垂水荘との関連が窺える墨書土器が出土し、蔵人遺跡では垂水荘蔵人村との関連があるとされる平安時代の人々の生活痕跡が検出された。

### 第2節 吹田操車場遺跡の既往の調査

吹田操車場遺跡の発見は昭和42年の操車場改良工事において中世遺物が出土したことによる。

平成10年度にJ R梅田貨物駅の機能の半分を吹田操車場跡地へ移転するため、61箇所を確認トレンチを設け、(財)大阪府文化財センター(当時は(財)大阪府文化財調査研究センター)が発掘調査を行った。その結果、操車場建設時の盛土や古墳時代から近代の遺構を検出し、旧石器時代以降の遺物が出土した。

平成12年には貨物駅舎と倉庫の建設および貨車区の改良工事に際し、事前にA・B地区、およびC地区の調査を当センターが行った。A地区からは古墳時代前期の大溝が調査区を貫く形で検出した。平安

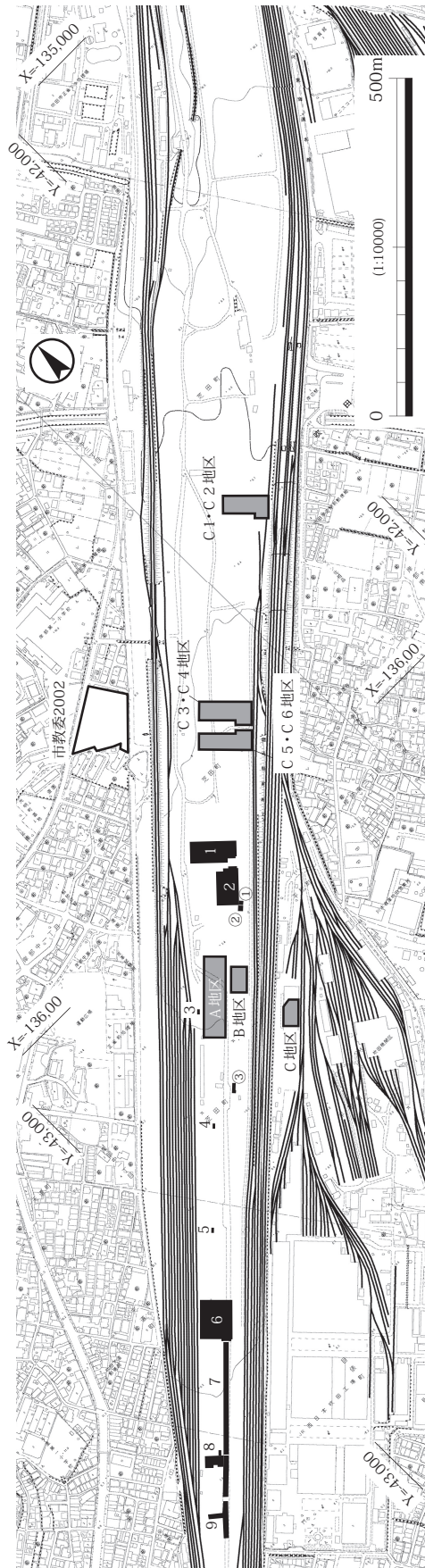


(地理調査所「吹田」S=1/25000 大正12年測量図 1929年修正測図に加筆)

- |                 |                |                 |            |                 |
|-----------------|----------------|-----------------|------------|-----------------|
| 1. 吹田操車場遺跡      | 14. 豊嶋郡条里遺跡    | 27. 高城 B 遺跡     | 40. 原東遺跡   | 52. 千里丘2丁目所在遺跡  |
| 2. 吹田操車場遺跡 B 地点 | 15. 西の庄遺跡      | 28. 吹田城城推定地     | 41. 吉志部遺跡  | 53. 千里丘3丁目所在遺跡  |
| 3. 垂水西原遺跡       | 16. 西の庄遺跡 B 地点 | 29. 高城遺跡        | 42. 岸部中遺跡  | 54. 千里丘東2丁目遺跡   |
| 4. 垂水遺跡         | 17. 吹田城遺跡      | 30. 高畑遺跡        | 43. 岸部東遺跡  | 55. 千里丘東3丁目所在遺跡 |
| 5. 垂水中遺跡 B 地点   | 18. 本町遺跡       | 31. 昭和町遺跡 B 地点  | 44. 吉志部瓦窯跡 | 56. 千里丘東4丁目遺跡   |
| 6. 垂水中遺跡        | 19. 浜の堂遺跡      | 32. 片山遺跡        | 45. 吉志部古墳  | 57. 庄屋1丁目所在遺跡   |
| 7. 垂水中遺跡 C 地点   | 20. 都呂須遺跡      | 33. 片山荒地遺跡      | 46. 七尾瓦窯跡  | 58. 庄屋2丁目所在遺跡   |
| 8. 垂水南遺跡        | 21. 宮之前遺跡 B 地点 | 34. 目依遺跡        | 47. 七尾東遺跡  | 59. 東正雀第1地点     |
| 9. 北泉遺跡         | 22. 宮之前遺跡      | 35. 円塚古墳        | 48. 似禪寺山遺跡 | 60. 東正雀第2地点     |
| 10. 金田遺跡        | 23. 高浜遺跡       | 36. 片山芝田遺跡      | 49. 明和池遺跡  | 61. 東正雀遺跡       |
| 11. 吹田須恵器窯跡群    | 24. 神鏡町遺跡      | 37. 天道遺跡        | 50. 峰前寺跡   | 62. 正雀1丁目遺跡     |
| 12. 吹田32号窯跡     | 25. 朝日町遺跡      | 38. 片山芝田遺跡 B 地点 | 51. 千里丘遺跡  | 63. 西の庄東遺跡      |
| 13. 片山公園遺跡      | 26. 昭和町遺跡      | 39. 中ノ坪遺跡       |            |                 |

図3 遺跡分布図





大阪府建築都市部総合計画課「大阪府デジタル地形図  
(北部大阪、東部大阪)」2003に加筆

図4 調査区と既往の調査位置図

時代後期には条里制を施工した水田を検出した。B地区では古代末から中世にかけての遺構面から連続と続く畦畔を検出した。C地区では谷地形から火山灰層を検出し、旧谷の形成が7300年前以前であることが判明した。

平成13年には吹田市営岸部中住宅建替工事に伴う吹田市教育委員会による事前調査で、8箇所が試掘調査された。平成14年には拡大調査が行われ、北西から東南方向の谷状地形や流路群が検出された。主な出土遺物は中世土器と二次的な堆積の可能性がある弥生土器等であり、東海系の弥生土器が比較的多く出土している。

平成18・19年には信号場基盤整備工事に伴い、C1・C2地区、C3・C4地区、C5・C6地区の調査を(財)大阪府文化財センターが行った。その結果、C1・C2地区からは古墳時代後半から飛鳥・奈良時代にかけての群集土坑、飛鳥・奈良時代と平安時代の掘立柱建物を検出した。近世では耕地開発の痕跡を検出した。主な出土遺物には、土坑出土の円面硯、包含層出土の墨書土器、緑釉・灰釉陶器等がある。

C3・C4地区、C5・C6地区では、古墳時代に流路であった場所が、古代には湿地状になり、古代末には新たな流路と落込みが形成された。その後、盛土が施され平坦化し、古代末から中世初め頃には集落の存在する可能性が推測された。中世後半から近世にかけて流路の両岸に耕作地が広がる。流路は近世になり幅が狭まり、大型土坑の溜池状施設が造られた。近世から近代にかけて埋没した自然流路中央に大溝を掘り直し、調査区北側では平坦地化が行われた。主な出土遺物に自然流路出土の古墳時代の山陰系土師器がある。

平成19年には吹田市教育委員会により、操車場跡地内のまちづくり用地の確認調査が59箇所のトレンチを設けて行われた。その結果、谷状地形のほか、中世以前の可能性がある農耕関連溝や、飛鳥時代の建物跡、平安時代のピット、古墳時代後期の大型土坑のまとまりなどが検出された。遺物では国府型ナイフ型石器、古墳時代後期から飛鳥時代にかけての焼成不良須恵器や飛鳥時代の陶硯片などが出土した。

吹田市教委調査区

センター-既往調査区

今回調査区  
(○の中の数字は平成21年度調査)

# 第Ⅲ章 調査成果

## 第1節 基本層序

吹田操車場遺跡は大正期から昭和期にかけて建設された操車場の地下に存するため、操業時のバラスト層や建設時の盛土層を除去しなければ、調査対象となる遺構面は現れない。上部のバラスト層は層厚0.50～0.75mを測り、いわゆるレール・枕木の下位の道床部分に相当するが、当地が操車場という性格から調査区のほぼ全域に堆積している。第7地区付近では、このバラスト層内に最大2つの焦土層を確認することができた(写真1)。これらは、1945年6月から8月にかけて度々行なわれた空襲によるものである可能性が高い。また、上位は直径50mm前後の砕石で構成されるが、下位は上位よりもやや小振りの砂利(川原石)で構成されており、より軌道のずれ難い構造に変化したことがわかる。下部の盛土層は、層厚0～2mを測り、黄褐色の地山土や旧表土のブロックで構成される。地形の低位な部分を中心に検出し、高所では地山の削平が著しいことから、操車場建設時に大規模な造成が行なわれたことは明らかである。昭和2年発行二万五千分一地形図には、片山地区を西へと伸びる引込線や、その延長上に崖面が記されていることから、丘陵を削り出した土砂が造成に利用されたものと推測する。

これらの操車場に関連する土砂を除去すると、明治期の旧耕作土が現れ、これより以下に最大6つの遺物包含層を確認した。

今回の調査区は、吹田操車場の西半部に長く分布することから、広範な堆積状況や地形を確認することができた。現在は、操車場の建設により平坦な地形が広大に開けてみえるものの、調査の結果、調査区によって包含層の数や厚みが大きく異なることや標高差の存在することが明らかとなり、以前は起伏に富んだ地形であったことがわかった。

現地調査ではそれぞれの調査区が離れていたために層序の統一を図れない状況も生じたが、本書では、操車場建設以前の耕作土や旧表土を、大別した第0層から第5層という共通の層序名を用いて報告する。また、それぞれの遺物包含層を除去した遺構面を第0面から第5面とし、本来は耕作土上面が旧地表面となる場合も耕作痕等の検出を目的に、上記と同様の除去面を報告対象とした。なお、部分的に分層が可能な場合は、新たな層番号を付与せず、枝番号を設定して対応した。

**第0層**は、操車場建設時の盛土を除去した直下に現れる暗灰色シルトの耕作土である。層厚は0.15～0.50mを測り、調査区のほぼ全域に認められる。断面観察において、畠の畝溝や水田畦畔、耕地境等の残存が非常に良好であり、操車場建設直前の耕作土がそのままの状態で見ることがよくわかる。第7地区と第8地区の一部では、上層の操車場建設時の盛土が無く、バラスト層の直下に版築状の整地された盛土を検出した(写真2)。この盛土は操車場に平行して連続し、法尻に第0層が収斂する状況を確認した。詳細は後述するが、明治9年に開通した東海道線の路盤用築堤と推測され、これに連続する第0層上面が明治期の耕作面と考えられる。第0層は機械掘削の対象としたが、明治期の貴重な近代遺構である線路跡や関連遺物を確認したため、同層除去面を便宜

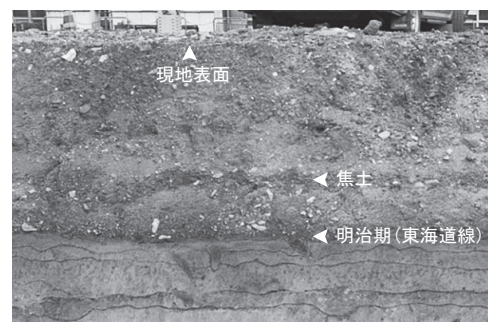
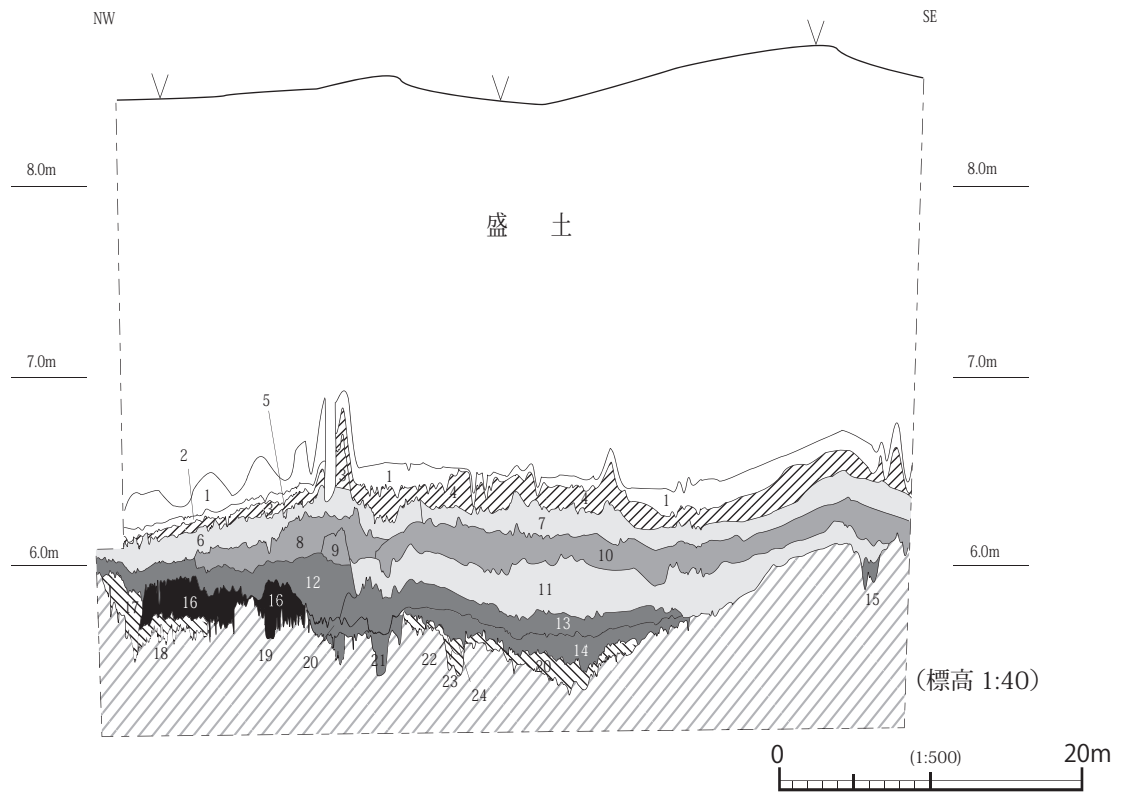


写真1 第7地区南東壁面 焦土跡断面



- |  |   |
|--|---|
| 1. 黒褐 7.5YR3/1 粗砂少混シルト                                 | 13. 黒褐 2.5Y3/2 シルト混細砂 (粗砂若干、3mm以下の礫を少し含む 炭・焼土を含む)             |
| 2. 褐灰 7.5YR5/2 細砂混シルト                                  | 14. 黒 10YR1.7/1 シルト～細砂 (Fe・植物遺体を含む)                           |
| 3. 黄灰 2.5Y5/1 細砂～粗砂少混シルト (粗砂～細砂、Feを少し含む)               | 15. 黄灰 2.5Y5/1 シルト混粘土 (下方に細砂を少し含む ラミナ・Feあり) [162溝]            |
| 4. 褐灰 10YR4/1 粗砂礫少混シルト (1cm大の礫を若干含む)                   | 16. 褐灰 7.5YR5/1 細砂～粗砂少混シルト (地山 褐灰 7.5YR6/1 シルトを含む) [盛土 (整地土)] |
| 5. 黄灰 2.5Y4/1 細砂～粗砂少混シルト (Feを若干を含む)                    | 17. 褐灰 7.5YR4/1 細砂～粗砂混シルト (褐灰 7.5YR6/1 シルトを棒状に含む)             |
| 6. にぶい褐 7.5YR6/3 細砂少混シルト (1cm大の礫、Feを含む)                | 18. 褐灰 7.5YR5/1 粗砂少混シルト (地山を少し含む) [遺構埋土]                      |
| 7. にぶい黄 2.5Y6/4 細砂～粗砂少混シルト (Feを含む)                     | 19. 黄灰 2.5Y4/1 粗砂～礫混シルト (地山を少し含む) [遺構埋土]                      |
| 8. 黒褐 7.5YR3/1 細砂～粗砂混シルト (Feを若干含む) [第3層と第4層の整地土]       | 20. 黒 5Y2/1 シルト混細砂 (灰 10Y6/1 粘土混シルトが少しブロック状に入る)               |
| 9. 褐灰 10YR4/1 粗砂少混シルト (黄褐 10YR5/6 シルトを少し含む) [12のブロック土] | 21. 黄灰 2.5Y4/1 シルト混細砂に灰 10Y6/1 粘土～シルトがブロック状に入る [266溝]         |
| 10. 黄灰 2.5Y6/1 細砂～粗砂少混シルト (3mm大の礫含む、Feを含む)             | 22. 黒褐 2.5Y3/1 シルト～細砂 (灰黄 2.5Y7/2 シルトがブロック状に入る) [266溝]        |
| 11. 黒褐 10YR3/1 シルト～粗砂 (炭・3mm大の礫を含む)                    | 23. 灰 7.5Y5/1 細砂  |
| 12. 黒褐 7.5YR3/1 細砂～粗砂少混シルト                             | 24. 黒 7.5Y2/1 シルト～細砂 (同色の細砂を下方にラミナ状に含む) [266溝]                |

図5 第1地区 北東壁断面図

的に第0面として、当時の周辺状況の復元を試みた。

**第1層**は、第0層の下層に検出した灰色シルト層である。第1・2地区、および第6地区以西において確認され、層厚は0.05～0.20mを測る。これらの調査区においても全域に検出することは困難であり、残存が散漫な状態にあることや、第0層に土質が酷似することから、東海道線建設以前の耕作土の残滓と推測する。この第1層を除去した下面である、第2層上面を**第1面**とした。遺構としては、犁溝や井戸・池などを検出した。18世紀以降の遺物が散見できることから、第1面は近世の耕作面と考えられる。

**第2層**は、第3地区を除く調査区のほぼ全域において検出した。橙褐色を呈する砂質シルト層であ



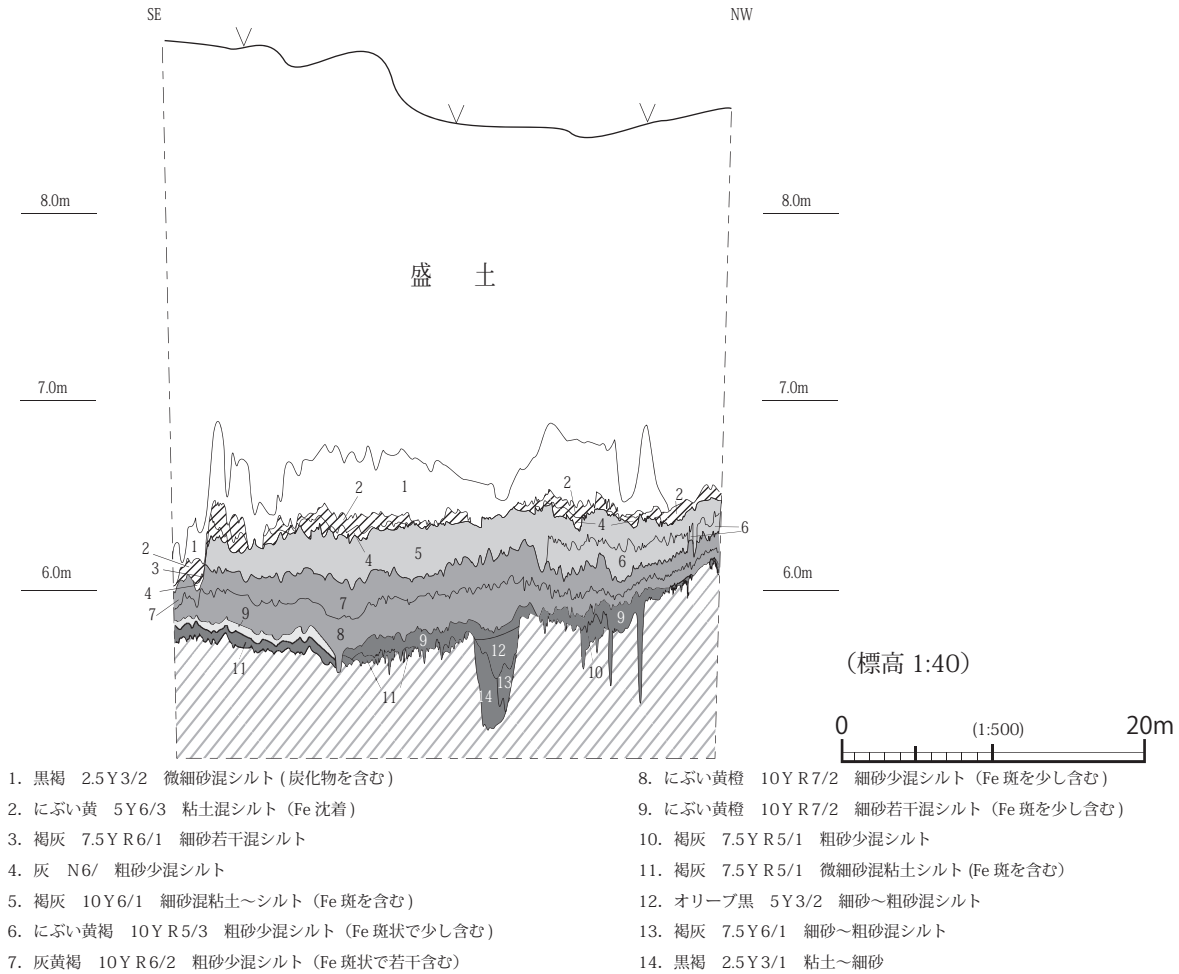


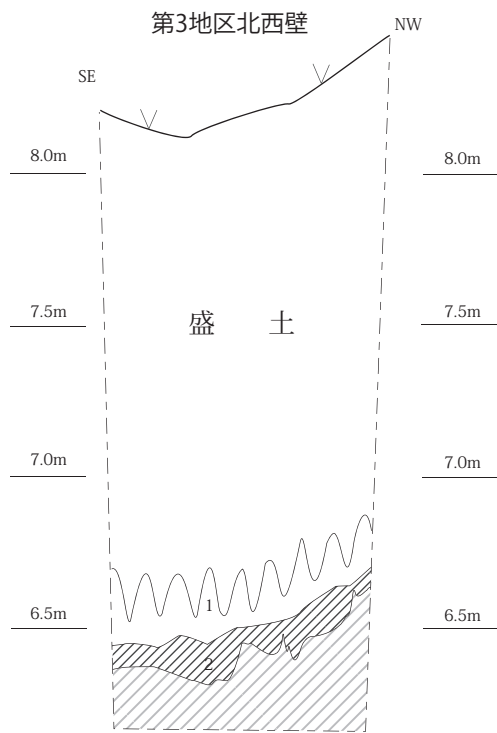
図6 第2地区 南西壁断面図

り、層厚は0.05～0.30mを測る。同層は遺物の包含が非常に少なく、均質に攪拌され、植物根による斑鉄が発達することから、長らく耕土として利用されていたと推測する。層中から出土したわずかな遺物から、16～18世紀の旧表土と考えられる。第2層を除去した下面を**第2面**とし、第1面と同様、遺構として犁溝や畦畔を検出したことから、耕作面であったと推測する。

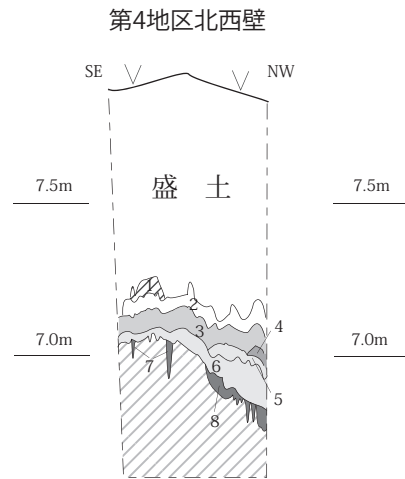
**第3層**は、第3・5地区を除く大半の調査区において検出した。灰褐色を呈する砂質シルト層であり、層厚は0.1～0.25mを測る。均質に攪拌されており、斑鉄やマンガン斑の形成が顕著である。層中の出土遺物から、15～16世紀代の中世耕作土と考える。第3層を除去した下面を**第3面**とする。検出した遺構面の大部分において鋤溝等の耕作痕を確認したが、一部で地割境の畦畝や土坑群を検出した。

**第4層**は、第3・7地区を除く大半の調査区において検出した。灰色のシルト層であり、層厚は0.10～0.35mを測る。土壌化がやや弱く、斑鉄の形成も少ない。同層を除去した**第4面**において、第1・2地区の一部や第7・8地区では耕作痕を検出したが、第4地区では土坑やピットを確認するなど、調査地によって遺構検出の状況に差異が現れる。上層までと異なり、地形の変化も認められることから、周辺一帯に耕地化が進む直前の旧地表と考えられる。同層中からは中世前半を中心とする遺物が出土している。

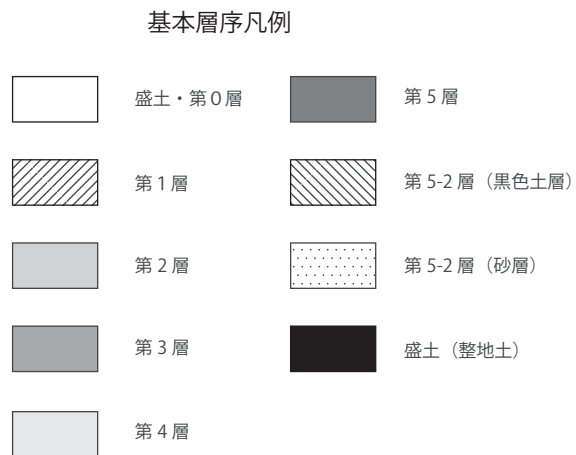
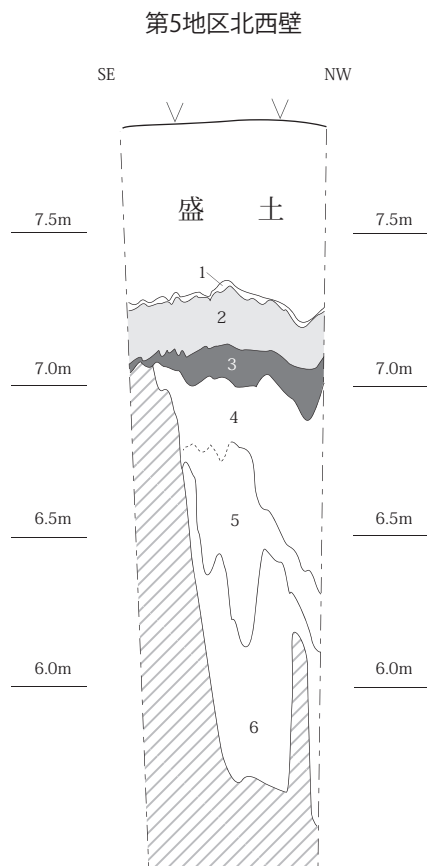
**第5層**は、第3地区を除くほとんどの調査区において検出した。いずれの調査区においても土壌化が



1. 暗灰 N3/ 細砂混シルト
2. 灰 N4/ 細砂混シルトに オリーブ 5Y6/6 シルト混細砂を少し含む



1. 褐灰 10YR5/1 粗砂(3mm大)混シルト(地山を少し含む)
2. 褐 7.5Y4/4 シルト混粗砂(Fe, Mnを少し含む)
3. 褐 7.5Y4/4 粗砂混シルト(Fe, Mnを少し含む)
4. 褐 7.5YR4/6 シルト混礫(1mm大)(Fe, Mnを少し含む)
5. 褐灰 10YR4/1 粗砂混シルト(地山を少し含む)
6. 褐灰 7.5YR5/1 粗砂少混シルト(Feを少し含む)
7. 褐灰 7.5YR5/1 粗砂少混シルト(Feを少し含む)
8. 褐 7.5YR4/4 シルト混粗砂



1. 褐灰 10YR5/1 粗砂(3mm大)混シルト(地山を少し含む)
2. 灰 N4/ 粗砂混シルト[第4層か]
3. 黄灰～黒褐 2.5Y4/1～3/2へ漸移的に色・土質が変化[第5層か]
4. 黄灰 2.5Y6/1 シルト混細砂(微細Mn粒あり ラミナ不明瞭)
5. にぶい黄褐 10YR5/4 シルトをわずかに含む細砂(Mnあり Fe沈着著しい ラミナあり)
6. 黒 5Y2/1 粘土混シルト(地山をブロックで含む 炭化物を多く含む)

(標高 1:25)

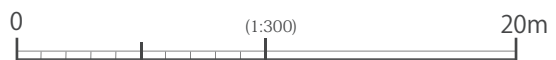
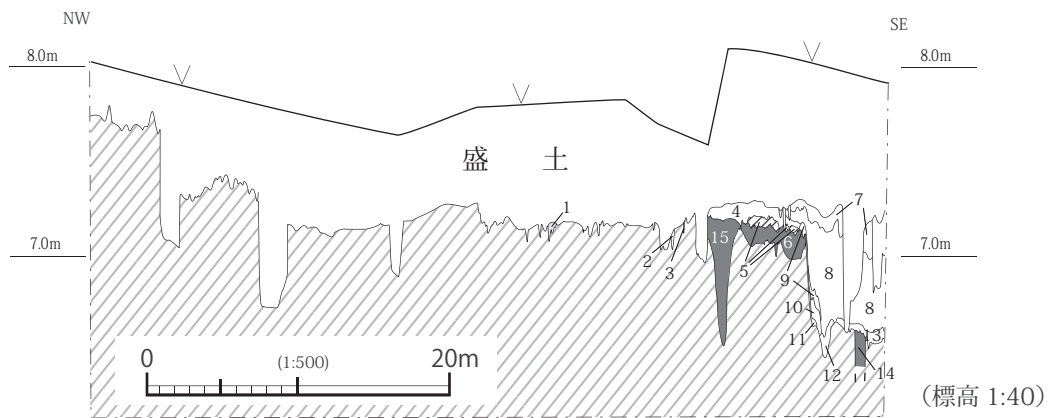


図7 第3・第4・第5地区 北西壁断面図



- |  |   |
|--|---|
| 1. 黄灰 2.5Y5/1 細砂少混粘土～シルト                                     | 9. 灰白 5Y7/2 シルト～粗砂(6:4) と灰 7.5Y4/1 シルト～粗砂(1:1)の混合               |
| 2. 地山の土に灰白 2.5Y7/1 粗砂混粘土～シルト                                 | 10. 灰 7.5Y4/1 シルト～粗砂 に灰白 7.5Y7/2 シルト～粗砂をブロックで少し含む               |
| 3. 地山の土に黄灰 2.5Y6/1 シルト(Mnを含む)                                | 11. 灰白 7.5Y7/2 シルト と灰 7.5Y5/1 粗砂少混シルト(1:1)の混合<br>(炭を若干含む)(遺構埋土) |
| 4. 灰白 5Y7/1 粗砂と明黄褐 10YR6/6 粗砂(1:1)の混合<br>(明黄褐色10YR6/6は斑状に入る) | 12. 11とほぼ同じ(灰白 7.5Y7/2 シルト～粗砂を少し含む)                             |
| 5. 褐灰 10YR6/1 粗砂(Mnを斑状に若干含む)                                 | 13. 灰 5Y6/1 シルト混粗砂(3:7)に地山の土を若干含む                               |
| 6. 褐灰 10YR5/1 粗砂(Mnを斑状に少し含む、Feを斑状に少し含む)                      | 14. 灰 5Y5/1 シルト と明褐 2.5Y7/6 シルトの混合                              |
| 7. 浅黄橙 10YR8/4 シルト～粗砂礫(5mm大以下)[地山を盛土として利用]                   | 15. 褐灰 10YR4/1 シルト～粘土(下方に地山の土をブロックで若干含む)[2溝埋土]                  |
| 8. 灰 7.5Y4/1 シルト～粗砂(Feを若干含む)                                 | ※ 地山:浅黄橙 10YR8/4 シルト～粗砂礫(5mm大以下)                                |

図8 第6地区 中央畦断面図

顕著に認められる。しかし、高位では鉄分やマンガンの沈着が著しい黒褐色の砂混じりシルト層を呈する一方、低位では炭化物を多く含む暗灰色の砂質シルトと、地形によって残存状態や土質に大きな差異が確認される。また、低位な地形に共通する現象として、第5層の分化が認められる。第1地区中央から第2地区東部にかけて、第7地区西部付近では、暗灰色の粘土・シルト層が0.50m以上と厚く堆積しており、千里丘陵から派生する谷地形の存在したことが明らかである。第5層を除去した面を第5面とするが、高位では層中に遺物を多く含み、土坑やピット等の遺構を多数検出する一方、低位では遺物や遺構の出土はほとんど認められなかった。遺構群を伴う高位における出土遺物は奈良時代から平安時代を中心とするが、低位では同時代から弥生時代までの遺物がわずかにみられるのみである。

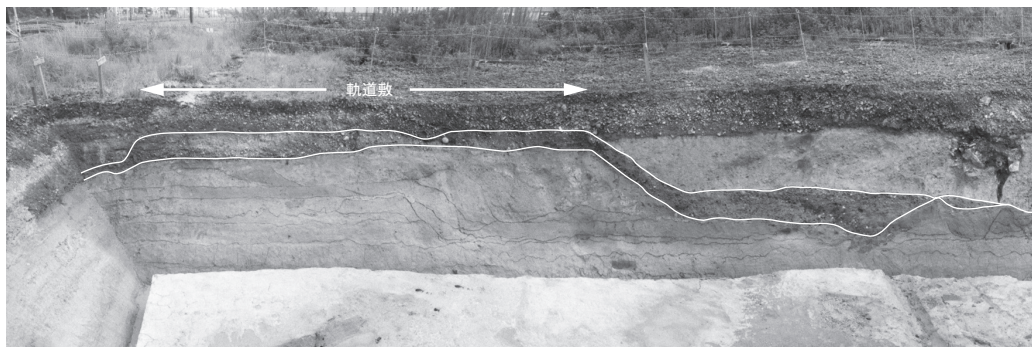
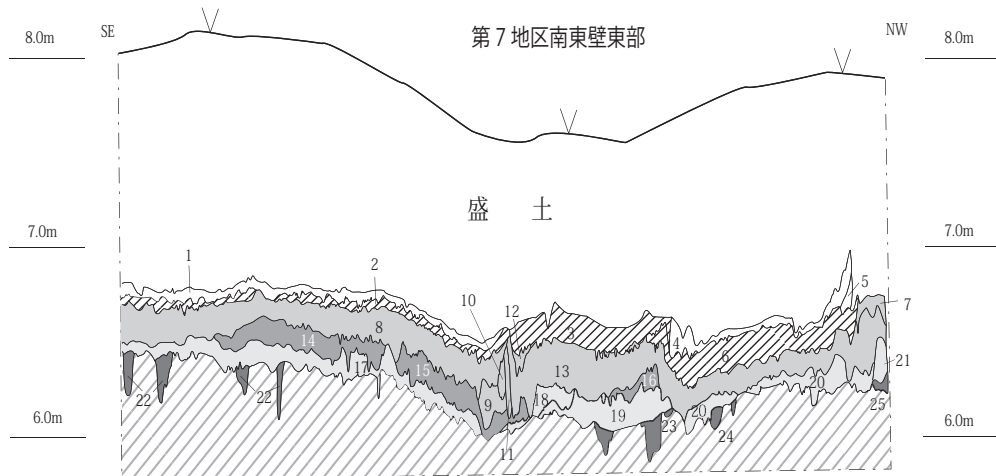
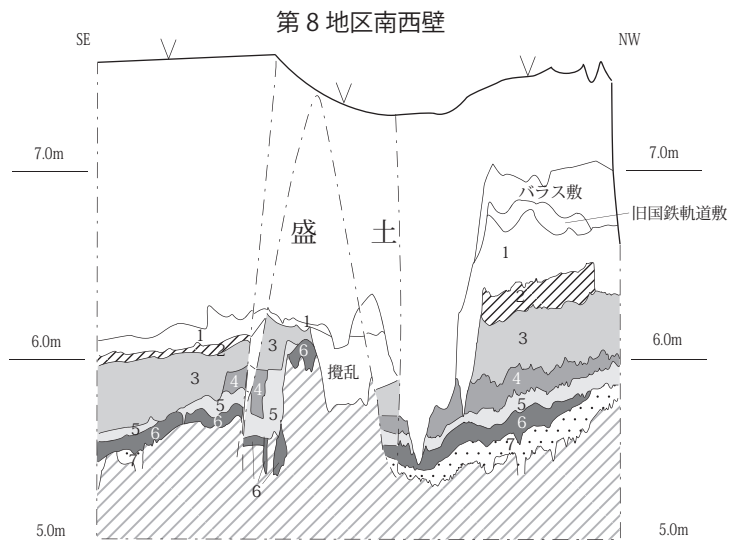


写真2 第9地区北東壁面 旧国鉄軌道敷跡断面





- |   |  |
|---|--|
| 1. 灰 N4/ シルト～粗砂                                     | 14. 褐灰 10YR6/1 シルト混細砂(Mnを斑状に少し含む)            |
| 2. にぶい黄橙 10YR6/4 シルト～細砂(Feを少し斑状に含む)                 | 15. 灰 N5/ 粗砂・細砂・シルト(4:3:3)の混合(Mn斑を若干含む)      |
| 3. 黄灰 2.5Y6/1 細砂混シルト(Fe若干含む)                        | 16. 褐灰 10YR5/1 粗砂・細砂・シルト(6:3:1)の混合(Mn斑を少し含む) |
| 4. 黒褐 2.5Y3/1 シルト<br>(2.5Y6/6 明黄褐粘土～シルトがブロックで多く混じる) | 17. 褐灰 10YR5/1 シルト混細砂(Mn, Feを若干斑状に含む)        |
| 5. にぶい黄橙 10YR7/3 シルト混細砂                             | 18. 紫灰 5RP6/1 粘土～シルト(Mn斑を多く含む)               |
| 6. 灰 5Y6/1 シルト混細砂                                   | 19. 灰 N6/ シルトと細砂(1:1)の混合(Fe斑を若干含む)           |
| 7. 明黄褐 10YR7/6 粗砂～細砂(Fe斑を少し含む)                      | 20. 黄灰 2.5Y6/1 シルト～細砂(Fe斑を少し含む)              |
| 8. 褐灰 10YR6/1 細砂～シルト(Mnを斑状に若干含む)                    | 21. にぶい黄褐 10YR5/3 シルト～粗砂(Fe斑を含む)             |
| 9. 灰 N6/ 粗砂・細砂・シルト(4:3:3)の混合(Mn斑を少し含む)              | 22. 灰 N5/ シルト～細砂(Mn斑少し含む)                    |
| 10. 褐灰 10YR5/1 シルト混細砂(Mn, Feを若干斑状に含む)               | 23. 褐灰 5YR4/1 シルト・細砂・粗砂(6:3:1)の混合(Mn斑多く含む)   |
| 11. 青灰 5PB6/1 シルト～細砂(Mn斑を少し含む)                      | 24. 黄灰2.5Y4/1 やや粘性強い粘土                       |
| 12. 黄灰 2.5Y6/2 シルト～細砂                               | 25. 褐 10YR4/6 粗砂多～シルト(Fe斑を多く含む)              |
| 13. 明黄褐 2.5Y6/6 シルト混細砂                              |  |



- |  |
|--|
| 1. 灰 N4/ シルト～粗砂 盛土 [旧国鉄軌道敷]                |
| 2. 暗灰黄 2.5Y4/2 シルト少し含む 細～粗砂(シルトをブロックで少し含む) |
| 3. 灰黄 2.5Y6/2 細砂～粗砂(灰白 2.5Y8/2 細砂を帯状に含む)   |
| 4. 黄褐 2.5Y5/3 シルト混 細砂～粗砂(シルトを微ブロックで少し含む)   |
| 5. 灰黄褐 10YR5/2 シルト混 細砂～粗砂(シルトを微ブロックで含む)    |
| 6. 灰黄褐 10YR4/2 細砂混シルト(粗砂～小礫を含む)            |
| 7. 黒 10YR3/1 細砂～粗砂混シルト                     |

(標高 1:40)

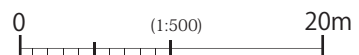


図9 第7地区 南東壁東部、第8地区南西壁断面図

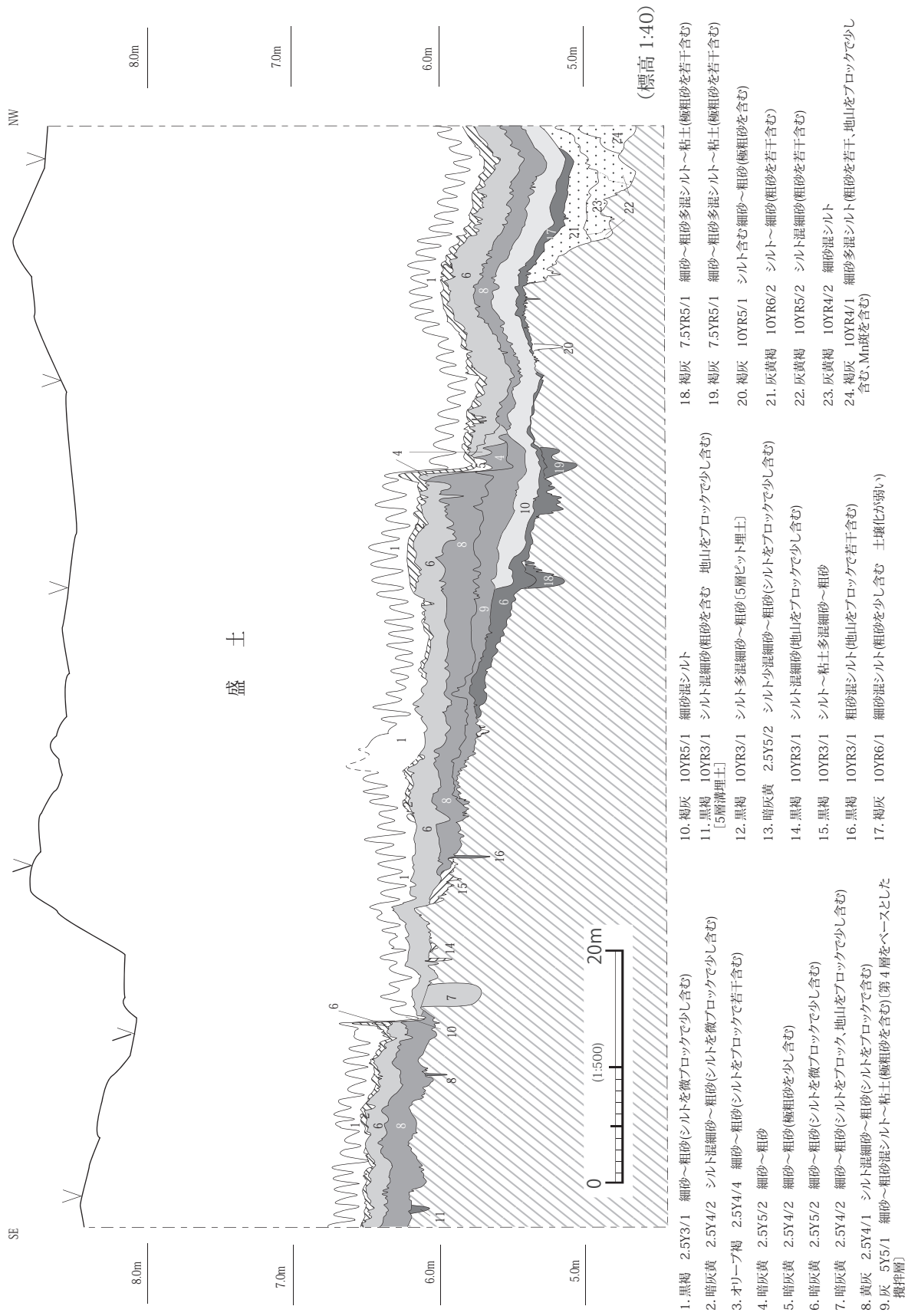


図 10 第7地区 西壁・第8地区南東壁断面図

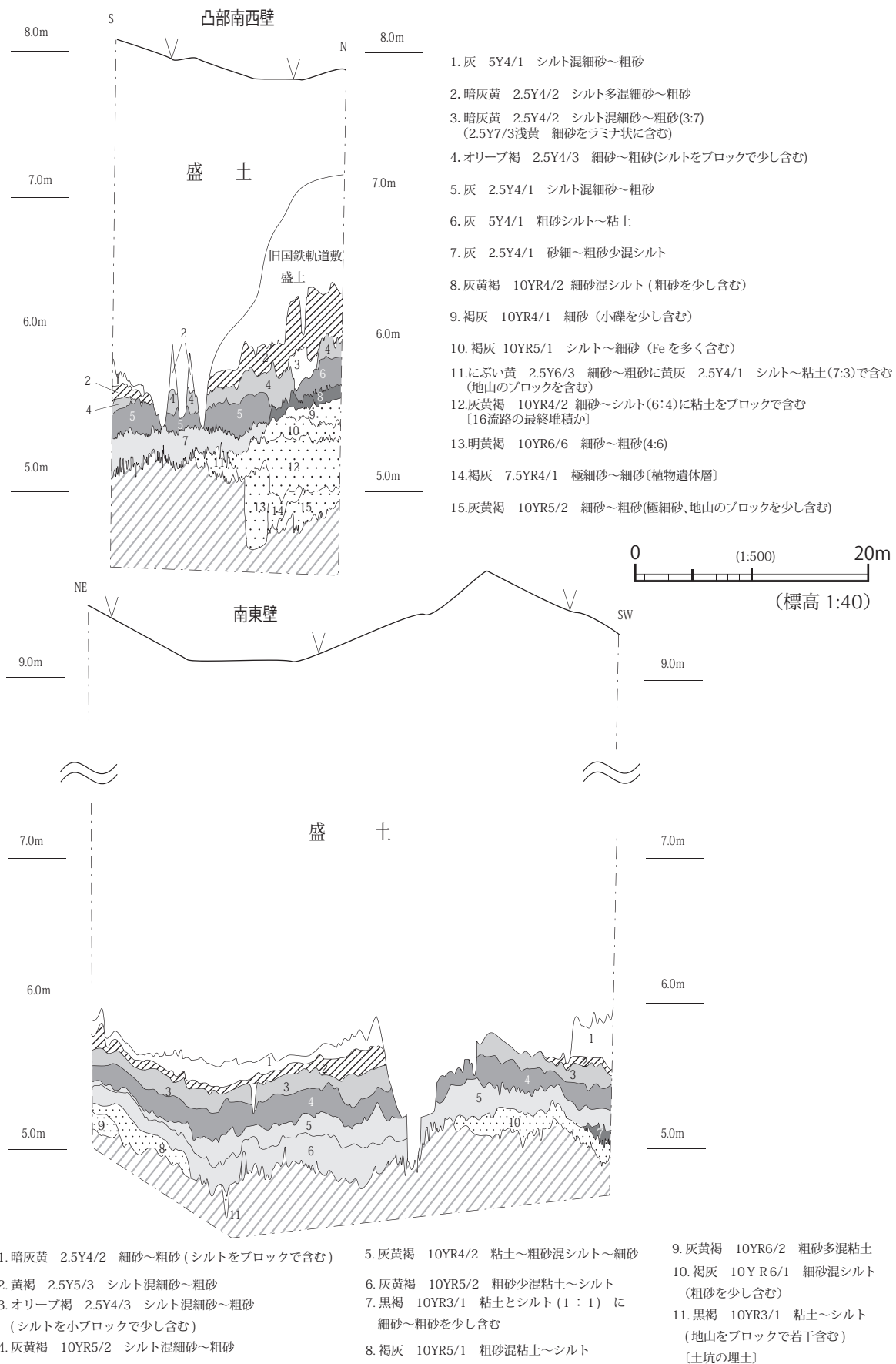


図 11 第 9 地区 南東壁・凸部南西壁断面図

## 第2節 平成19・20年度の調査

### 1. 第1地区の調査

#### (1) 遺構面の概要

第1地区の地表面は標高8.5m前後を測る。近代の旧耕作土層を除去して検出した。第1面はほぼ平坦な地形である。第2面から第5-2面は調査区の中央部が低く、北部と南部が微高地状を呈する。第3面から第5-2面の遺構はこの微高地上に集中する。

第1面、第2面とも近世以降の耕作面である。これらの面の基盤層は主にグライ化したシルト～粗砂の混合であり、畠作に伴う面と思われる。

第3面は調査区の北部の微高地及び南部の微高地に土坑、溝が集中する。調査区の中央部は遺構が少ない。基盤層はグライ化したシルト～粗砂の混合であり、水田耕作に伴う面であったと考えられる。北部の微高地が標高6.5m、中央部が標高5.7m、南部の微高地が標高5.9mを測る。同面で検出される遺構からは中世の遺物が散見され、当該時期と思われる。なお、61土坑からは奈良時代の七尾瓦窯産と同型式の軒丸瓦が出土している。

北部微高地の東側には、第3面以下に基本層序の第4層にあたる層は存在しなかった。ただし、下位の第5面を検出する途上、若干数の土坑等の遺構の輪郭がみつかったため、便宜的に第4面とした。

当面にて検出した遺構の大半は、鉄分等の鉱物が沈着し、面的に広がる感じでとらえたが、土質的には周辺との変化は余り見られないものである。当地域の第3層から第5層の層境は整地による攪拌及び強い土壌化の影響で、明瞭ではない。遺構の痕跡だけを見つけた可能性も考えられる。

第5層は調査区全域には存在せず、中央から北部域を中心に広がる。南半域は後世に削平を受けたものと思われる。北部東側は第5層のブロック土で盛土・整形することにより微高地部が形成されている。なお、第5層の北部東側の微高地縁辺部では、9世紀、10世紀を中心とする古代の土器が多数出土した。今回これらを「第5面土器集中部」と呼称し、一括して出土遺物を報告した。また、土器だけでなく、炭化した種実類も出土している。(第IV章第4節参照) また、この盛土(整地土)内からは9世紀頃の遺物が多く出土した。北部西側では土手状遺構を検出している。

南部の微高地部は第3面にて標高5.85mを測るが、当地の第4層、第5層が削平を受けており、第4面ないしは第5面相当の遺構が含まれていると考えられる。耕作溝跡や一部のピットが本来の第3面の遺構であり、土坑、建物の柱跡と考えられるピット群は基本層序の第4面以下の遺構と思われる。

第5面では土坑、溝、井戸、ピット等を検出している。北部の微高地は東西の2つの高まりに分かれる。西側は標高6.5m、東側は標高5.9mを測る。中央の低位部は標高5.4m前後である。

当地区の第5層は、さらに細分することが可能であり、上層及び第5層の除去面を第5面、下層除去面を第5-2面とした。

第5-2面では土坑、溝、井戸、ピットを検出している。北部西側の微高地がやや平坦化していることが確認された。標高は5.8mを測る。また、南部微高地の第5-2面相当面は標高5.8m前後である。第5-2層は第4層、第5層と同様、北部域に残存するのみである。上述の盛土(整地土)以外は当層の厚みは比較的薄く、第5層直下で第5-2面の遺構が検出されることもまれではなかった。また、当層が検出されない地域では、恣意的、便宜的に、出土遺物等の判別により当面の遺構としたものもある。

なお、下位の層は黄褐色のシルト混砂礫層である。無遺物層であった。また、一部、氾濫による粗砂

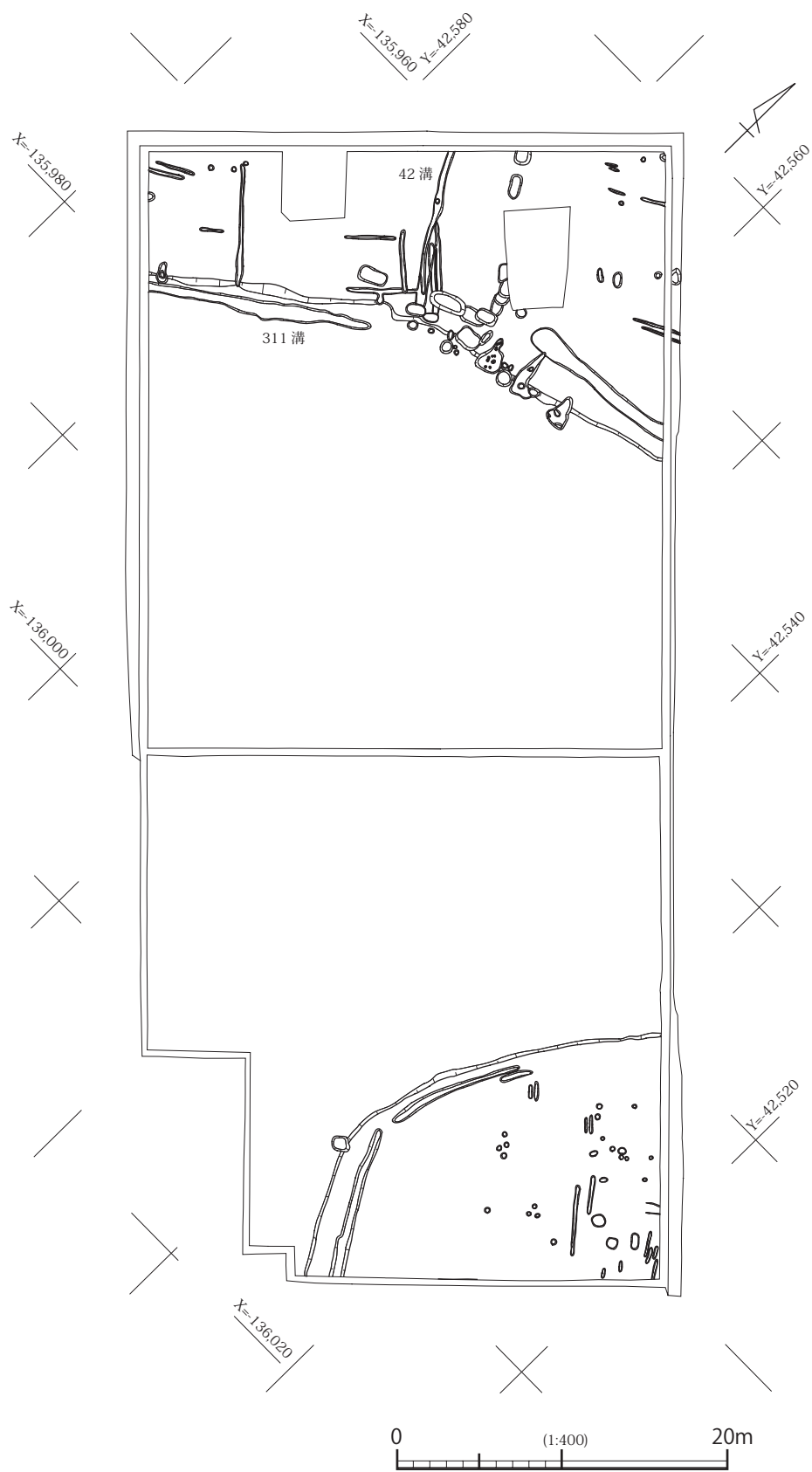


图 12 第 1 地区 第 3 面 全体图

礫堆積層も認められた。

(2) 第3面の遺構(図12~16、図版1・2)

#### 北部遺構群(図13・14、図版1)

調査区の北側には段状に整形された微高地が存在するが、特にその中央部に45土坑、58土坑、59土坑、60土坑、61土坑等の土坑を検出した。平面は隅円長方形、楕円形、不定三角形、円形である。一部の土坑は切り合い、本来の形が不明なものもある。これらの土坑は微高地状の高まりの裾というべき位置にある。

土坑の規模は長辺または長径0.6~3.1m、短辺または短径0.4~1.5m、深さ0.1~0.3mを測る。不定三角形を呈する59土坑、60土坑、61土坑はレベルの低いほうに「ハ」の字状にプランの広がりを持つ。また、遺構内に杭跡と思われるピットがある。円形の45土坑、58土坑は、やや深く0.5m強を測る。その形状、規模より円形の埋桶等が入っていた可能性があると思われる。

#### 44土坑(図13・14、図版1)

北部遺構群の西よりに位置する。平面は長形状を呈し、長径2.3m、短径1.1m、深さ0.3mを測る。埋土は3層に分かれ、下から植物遺体を含む黒褐2.5Y3/2シルト細砂層、黄灰2.5Y4/1粘土~シルト、最上層は暗黄灰2.5Y5/2細砂のブロックと灰10Y5/1シルトの混合した土が堆積している。

#### 42溝(図13・14、図版1)

北西から南東方向に走る長さ9.0m以上、幅0.5m程、深さ0.1mにも満たない小溝である。切り合う溝もしくは並行して走る溝があり、作り変えられた可能性がある。43土坑、44土坑、49土坑にも切られている。当溝を境に地形が異なることから、当地を区画する溝と考えられる。

#### 68溝(図13・14、図版1)

微高地の等高ラインにそって東西方向に走る長さ9.0m以上、幅0.8~1.5m程、深さ0.1m程の溝である。

59土坑、60土坑、61土坑の北に接することから、これらの遺構との関連が考えられるが、その性格は定かではない。

#### 70土坑(図13、図版1)

平面は楕円形状を呈し、長径1.0m、短径0.5mを測る。埋土は黒褐2.5Y3/2シルト混粘土に炭・焼土をわずかに含む。

#### 南部遺構群〔第3面〕(図15・16、図版2)

概要で述べたように南部微高地上の削平が激しく、第3面では、地山が部分的に露出するため、検出した遺構には本来それより下位の遺構面に属したものも混在していると考えられる。そこで、やや恣意的ではあるが、埋土の土質・色により遺構を分別し、上層の土に近似する遺構を第3面の遺構とした。耕作溝といくつかのピット等(図16)がそれにあたる。また、30溝、40溝も当面帰属の遺構と考えている。当面にあたるピットは灰7.5Y5/1シルト混粘土~細砂を粒状にわずかに含むものが多い。

#### 30・40溝(図15・16、図版2)

南部の微高地の縁辺部をなぞる様に位置する2本の溝である。一部途切れているが、本来は1条の溝であった可能性がある。30溝は長さ9.0m以上、幅0.5~0.9m、深さ0.2~0.3mの溝である。40溝は長さ8.0m、幅0.5m程、深さ0.1m程の溝である。これらの溝も雨落ちの流水を取り込む様な溝もしくは区画のための溝と考えられる。



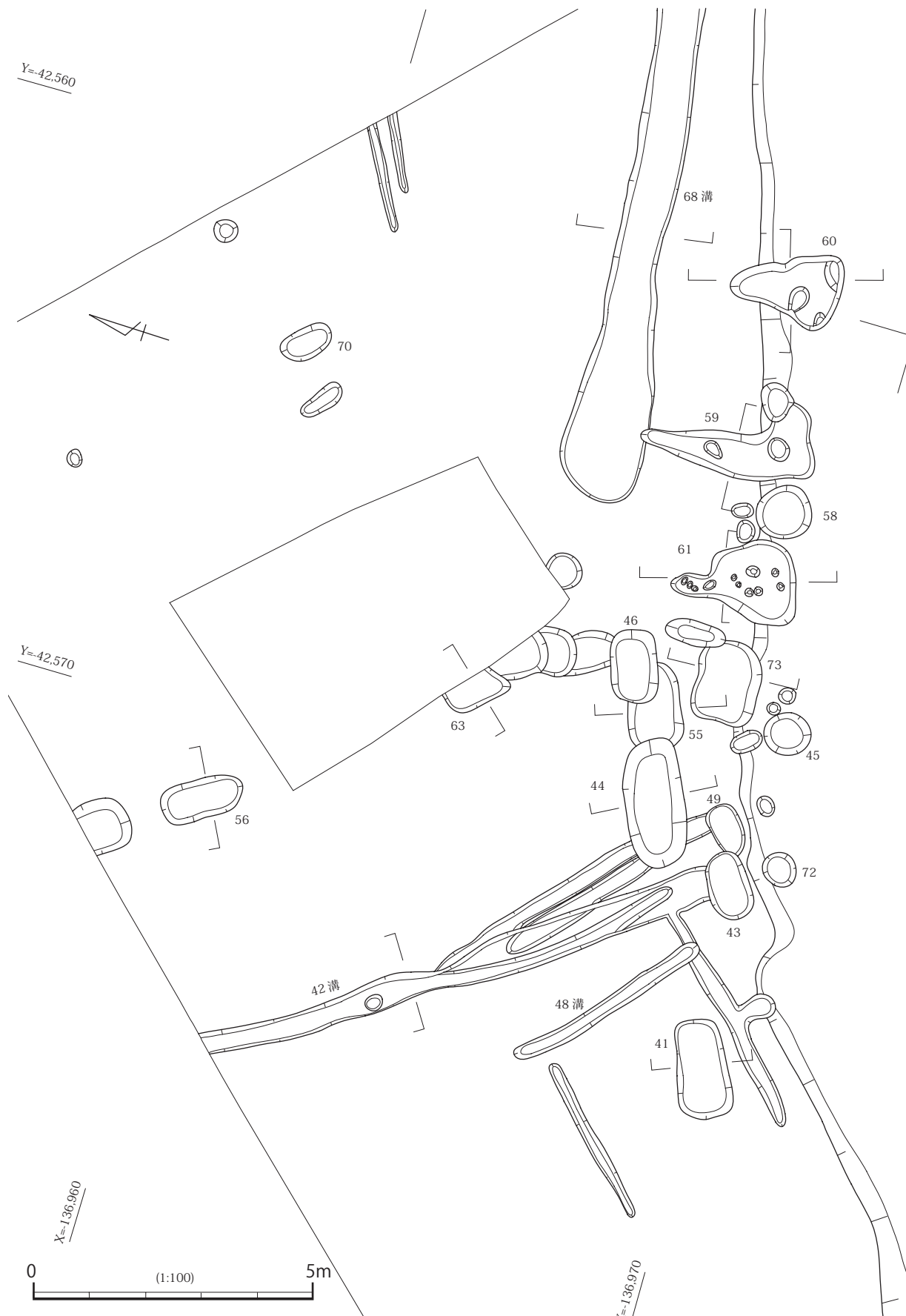


图 13 第 1 地区 第 3 面 北部遺構群 平面図

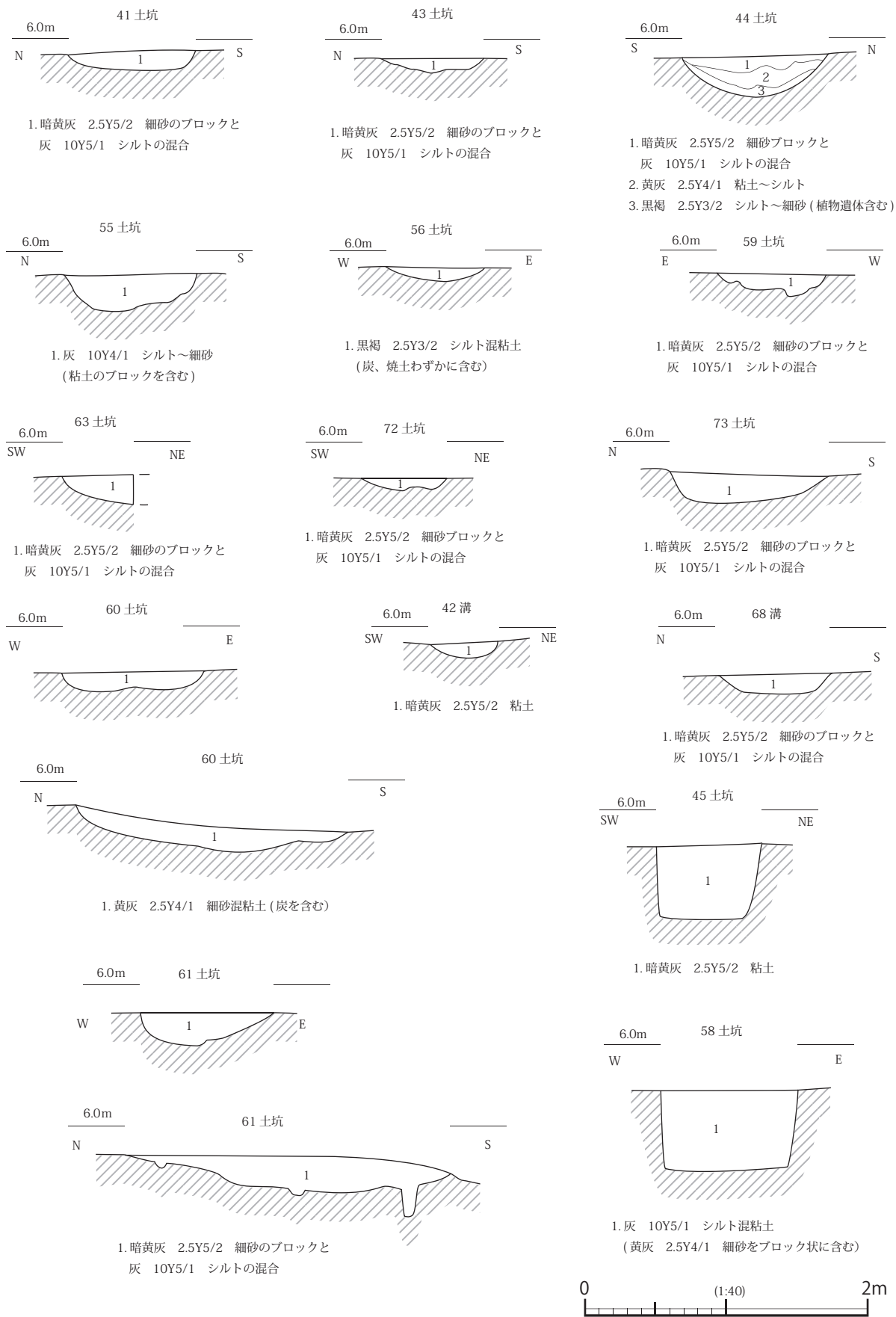


図 14 第 1 地区 第 3 面 北部遺構 断面図

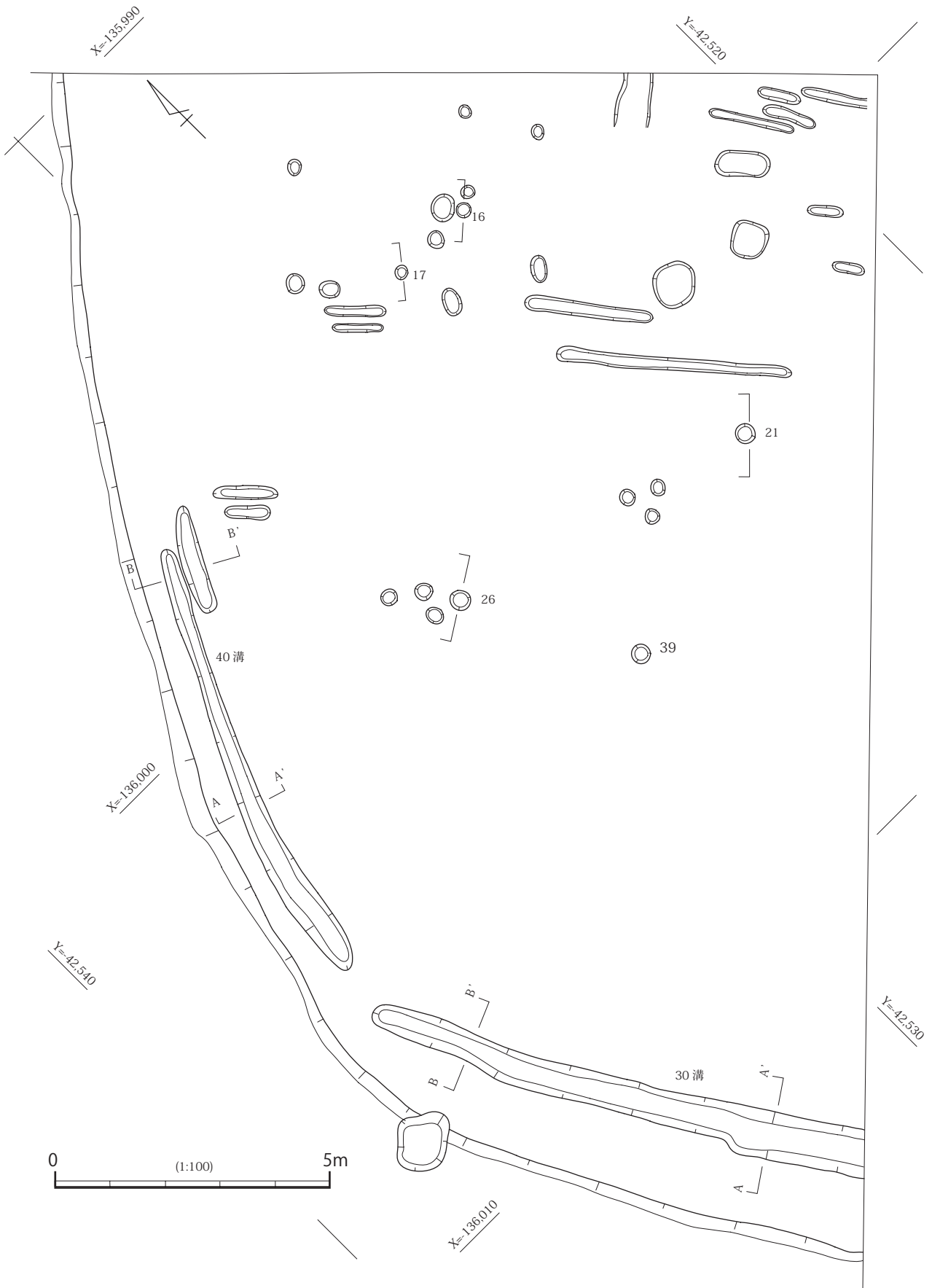


图 15 第 1 地区 第 3 面 南部遺構群 平面図

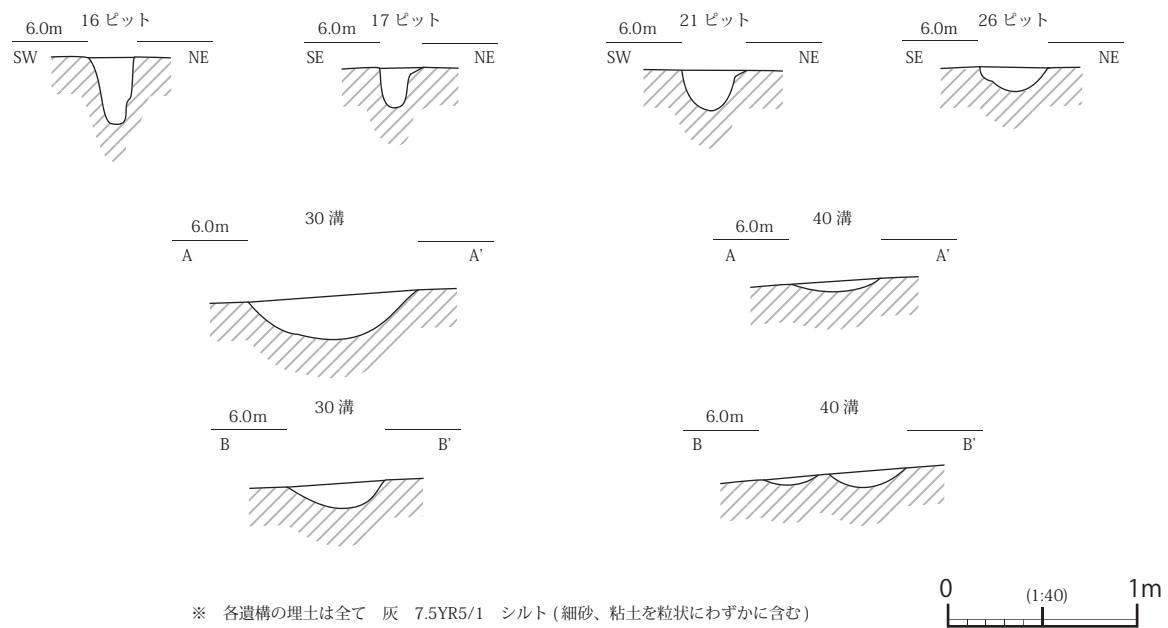


図16 第1地区 第3面 南部遺構 断面図

### 39ピット (図15)

南部遺構群の中央に位置する。平面は円形状で、直径0.4m、深さ0.2mを測る。埋土は灰7.5Y5/1シルトが入り、粘土～細砂を粒状にわずかに含む。

### (3) 第4面の遺構 (図17)

調査区北部東側の微高地にてピット、土坑、溝等の遺構を検出した。いずれもほとんど深度はなく、遺構としてもその痕跡を検出した限りと考えられる。

### 181ピット (図17)

185溝を切り、平面は楕円形状を呈し、長径0.5m、短径0.4mを測る。埋土は黒10YR2/1細砂にシルトが少し混じる。焼土・炭も含む。

### 191ピット (図17)

平面は楕円形状を呈し、長径0.8m、短径0.5mを測る。根石と思われる石が埋まっていた。埋土は181ピットと同じである。

### (4) 第5面の遺構 (図18～26、図版2～4)

### 321土手状遺構及び周辺のピット (図18・20・21)

調査区の北西端に位置する。周辺は北西から南東に向かって緩やかに下降する斜面を有するが、遺構は人為的な客土によって周囲より0.1～0.2mの高まりが形成される。長さ10.0m、幅3.0m程の方形を呈する土手状の遺構である。軸はN-55°-Eをとる。当遺構の土手上及び南側斜面部にて直径0.1～0.3m、深さ0.2m程のピットを25基検出し、このうち211・214・216・217の各ピットには木芯が残っており、何らかの構造物に伴う土盛と考えられる。

### 250土坑 (図18・20・21、図版3)

321土手状遺構の北に位置する。長さ6.8m、幅0.8～1.8m、深さ0.15m程の細長い不定形な土坑である。

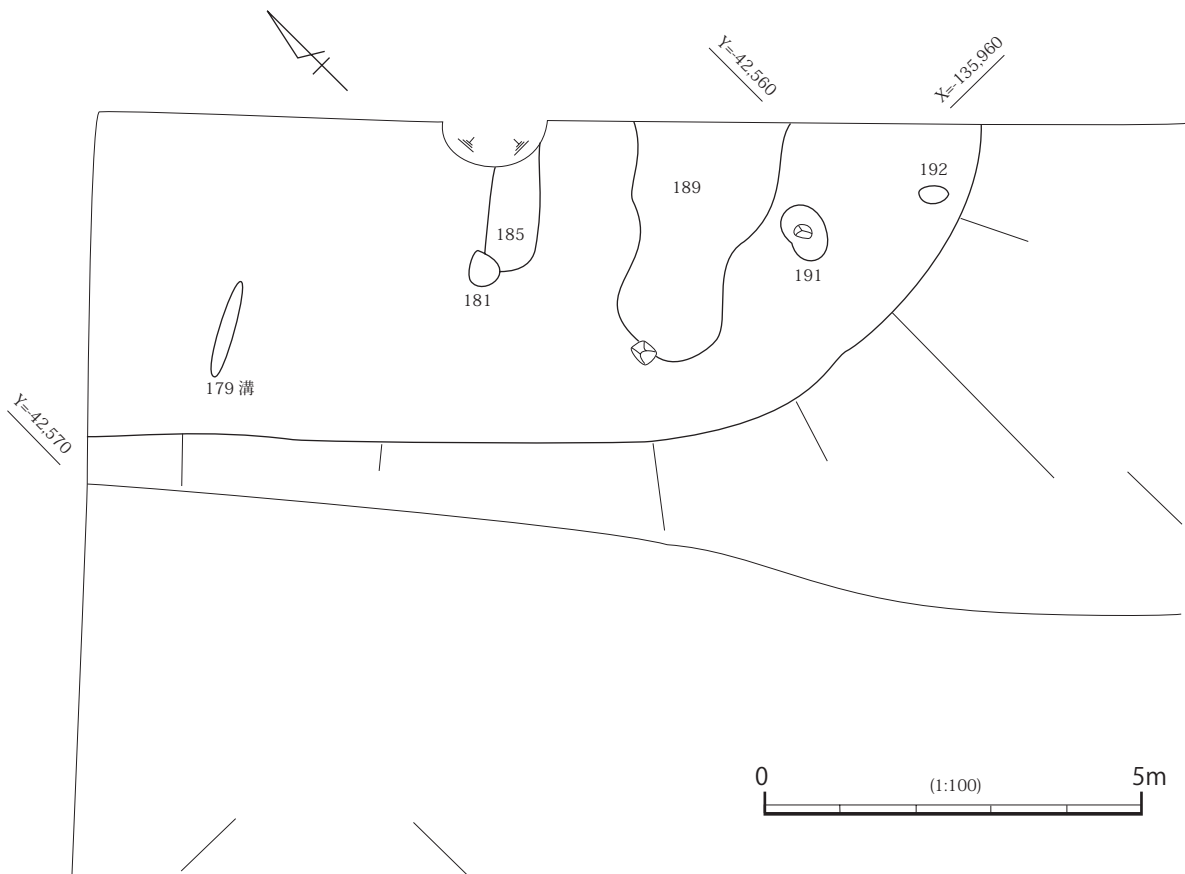


図17 第1地区 第4面 全体図

321土手状遺構と250土坑とがほぼ直角の位置関係となることから、何らかの区画とも考えられる。周辺の遺構は希薄だが、この区画の内部から土坑やピットがまとまって、20基以上検出された。土坑は313土坑、314土坑等、平面は隅円方形や楕円形であるものが多く、長辺または長径1.2~1.8m、短辺または短径0.6~1.0m、深さ0.05~0.1mを測る。これらの遺構は250土坑を含め、埋土に地山の土を含む黒2.5Y2/1シルト~細砂が単層で入る。ピットは直径0.2~0.4m程、深さ0.1m程である。

#### 258ピット (図20)

北西部遺構群の南側に位置する。平面は円形状を呈し、直径0.3m、深さ0.1mを測る。埋土は褐灰7.5Y5/1シルトに少量の細砂、焼土・炭を含んでいる。

#### 210溝 (図20・21)

長さ5.0m以上、幅0.7m、深さ0.15mの平面が細長く長方形に整った溝である。埋土は2層に分かれ、上層は黒10YR2/1シルト混細砂、焼土・炭を含む。下層は灰10Y5/1シルトである。

321土手状遺構とその周辺の遺構がどのような性格を持つか判然としないが、これらは工房等として機能した有機的に関連のある一連の遺構群であるかもしれない。

#### 254溝 (図18・19、図版3)

321土手状遺構の南側に5.0m離れ、ほぼ並行に走る。長さ5.0m、幅0.8m、深さ0.15m前後の平面が細長い長方形に整った溝である。埋土は地山の土を含む黒2.5Y2/1シルト~細砂が主に入る。規模、形状共に210溝と近似する。

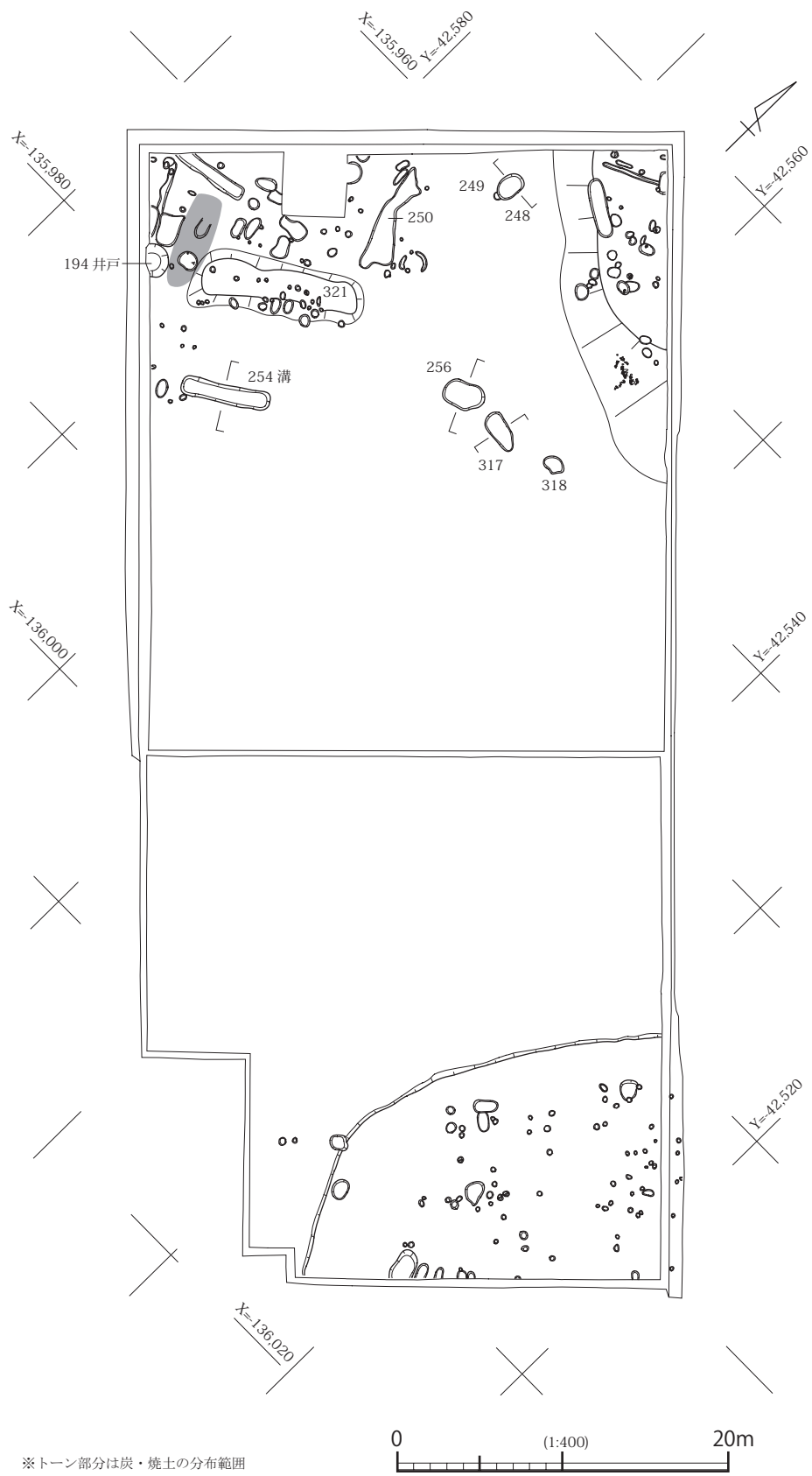


図 18 第 1 地区 第 5 面 全体図



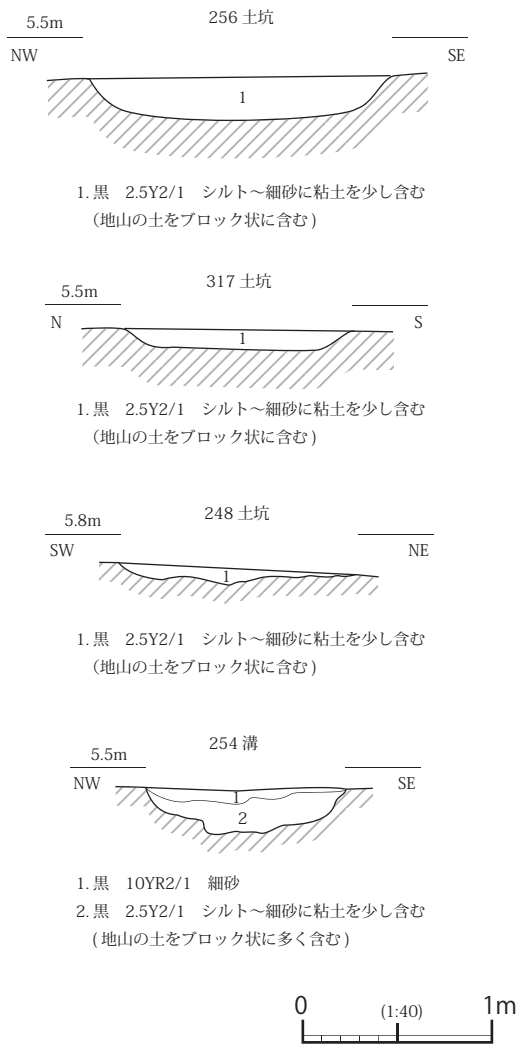


図19 第1地区 第5面 遺構 断面図

### 175土坑 (図22・24、図版4)

平面は楕円形を呈し、長径0.45m、短径0.35m、深さ0.1mを測る。埋土には黒10YR2/1焼土・炭混じりの細砂が入る。30枚以上の土師器皿が折り重なる形で出土した。土師器皿の時期は12世紀頃と思われる、同面で検出した他の遺構出土の遺物より新しい。当遺構は当面より上位の面にて押さえるべき遺構の可能性が高い。

### 196土坑 (図20)

北西部遺構群の南西に位置する。平面は楕円形状を呈し、長径1.2m以上、短径0.8m、深さ0.1mを測る。埋土は褐灰7.5Y5/1シルトに細砂を少量及び焼土・炭を含んでいる。

### 184ピット (図22)

北東部遺構群に位置する。平面は楕円形状を呈し、長径0.6m、短径0.4m、深さ0.1mを測る。埋土は黒10YR2/1の細砂にシルトを少しと、焼土・炭を含んでいる。

### 240ピット (図22)

北東部遺構群南側に位置する。平面は長形状を呈し、長径0.9m、短径0.6m、深さ0.1mを測る。埋土は184ピットと同じである。

### 194井戸 (図18・20・23)

遺構の半分は調査区外となる。直径は推定で2.0m、深さ0.8mを測る。埋土には灰色や黒褐色系の粘土～シルトが入り、ラミナがみられる。

### 256・317・318土坑 (図18・19)

平面は隅円方形、不定円形を呈する。一連に並ぶ土坑である。長径1.5～2.7m、短径1.0～1.7m、深さ0.05～0.15mを測る。

埋土はいずれも、黒2.5Y2/1シルト～細砂少混粘土(地山の土をブロック状に含む)である。

### 北東部遺構群 (図22、図版4)

平面が隅円方形や不定円形をとる土坑が第5面の遺構として北端部の微高地上に点在する。当地域のみ第4面の基盤層を掘削し、第5面を検出している。微高地を形成する土砂はブロックで土が混ざり、人為的な盛土(整地土)であると考えた。長辺または長径0.3～0.8m、短辺または短径0.3～0.6m、深さ0.05～0.5mを測る。埋土には黒10YR2/1焼土・炭を含む細砂が入るものが多い。

### 183・186・188・193・252土坑 (図22、図版4)

これらの輪郭が不明瞭な土坑から須恵器甕、土師器甕・杯等の8世紀の遺物が出土した。人為的に掘削された土坑というより、微高地の自然な窪み部分に遺物が溜まり、それを検出したものと思われる。

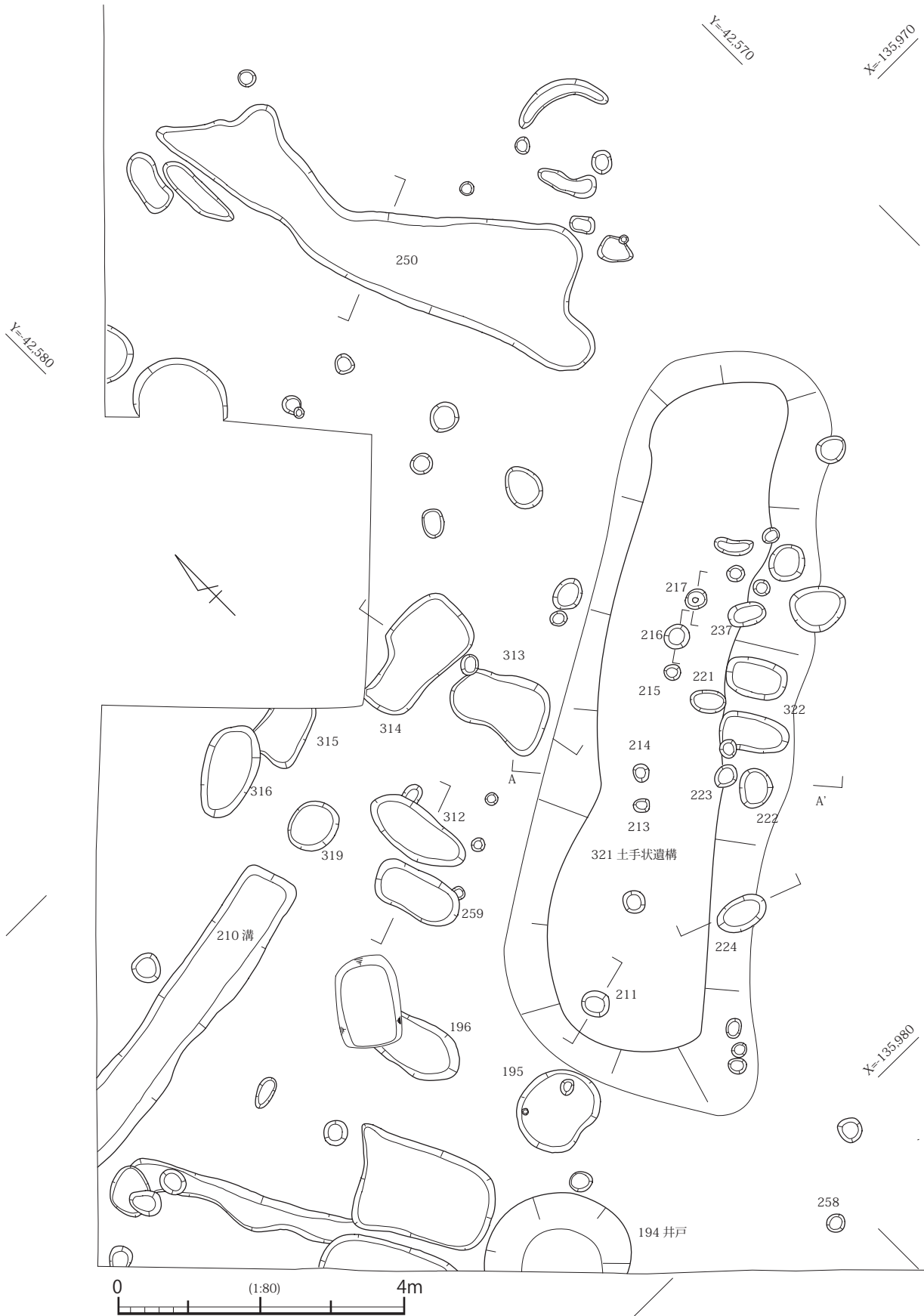


图 20 第 1 地区 第 5 面 西北部遺構群 平面图

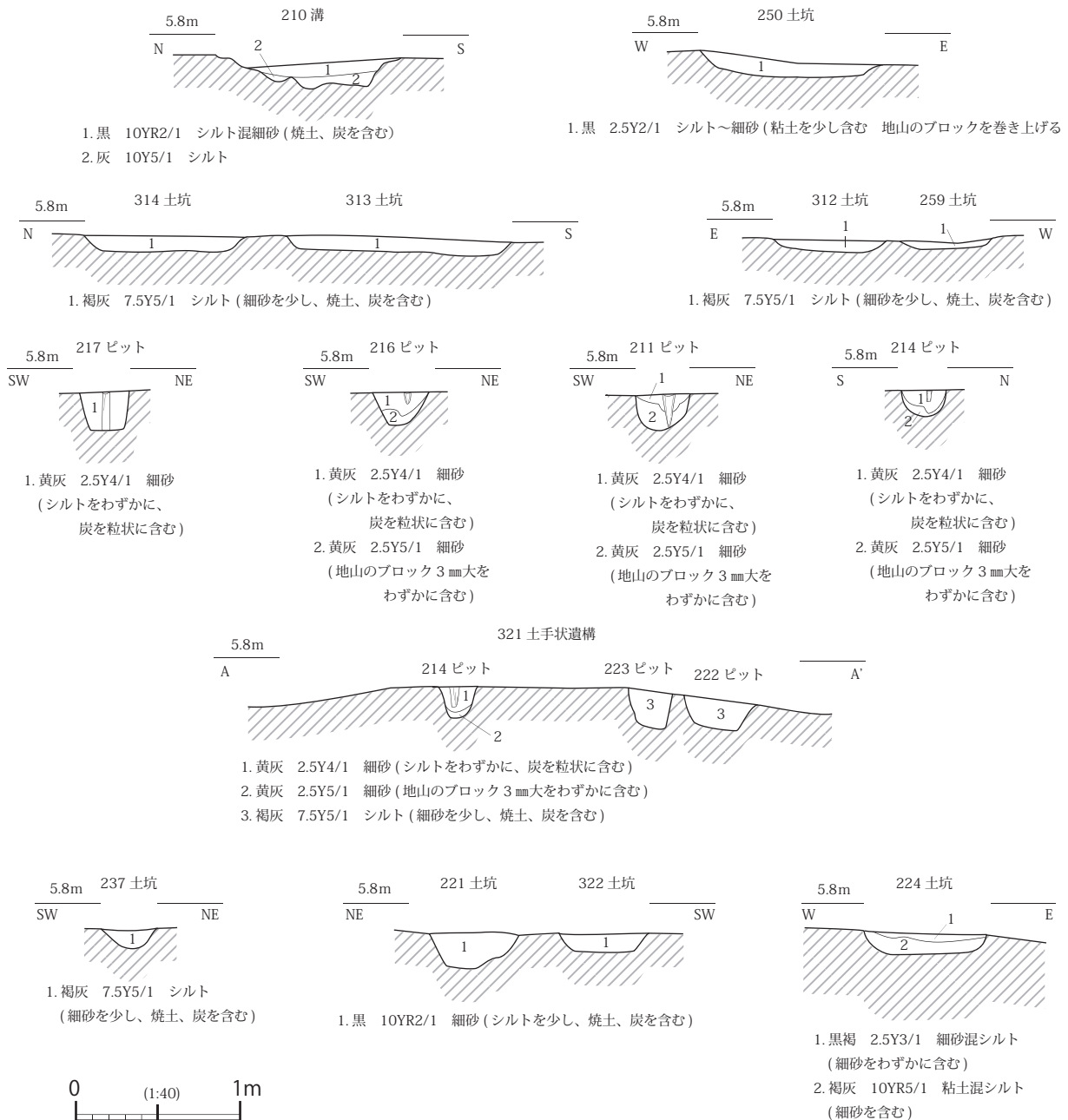


図 21 第 1 地区 第 5 面 321 土手状遺構及び周辺の遺構断面図

### 246ピット (図22)

北東部遺構群の北側に位置する。平面は円形状を呈し、直径0.4m、深さ0.2mを測る。埋土は下から黄灰2.5Y4/1シルトに細砂をわずかに含む。その上には灰5Y4/1のシルト～細砂に地山のブロック(1～3mm大)を下方に含む。最上層は184ピットと同じ埋土である。

### 253ピット (図22)

北東部遺構群の東側に位置する。平面は円形状を呈し、直径0.3m、深さ0.1mを測る。埋土は黒10YR2/1の細砂にシルトを少しと焼土・炭を含む。

### 261ピット (図22)

北東部遺構群の西よりに位置する。平面は円形状を呈する。直径0.3m、深さ0.1mを測る。埋土は

X=135,960

Y=42,570



图 22 第 1 地区 第 5 面 北东部遺構群 平面図

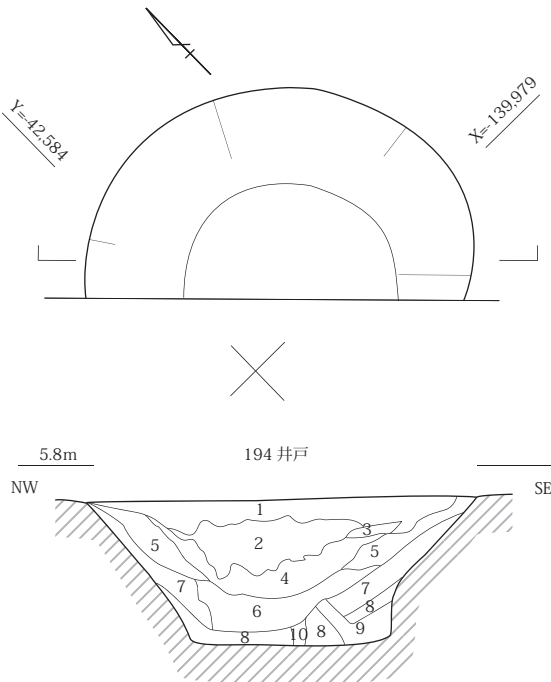


図23 第1地区 第5面 194井戸  
平・断面図

1. 黒 10YR2/1 粘土～シルト (細砂3～5cm大のブロックで含む)
2. 黄灰 2.5Y4/1 粘土 (下方に細砂をラミナ状に含む)
3. 黒 10YR2/1 粘土 (下方に細砂をラミナ状に含む)
4. 灰 5Y5/1 シルト (植物遺体少量含む)
5. 褐灰 10YR4/1 シルト～細砂 (それぞれ互層を成す)
6. 灰 10Y5/1 シルト～細砂 (細砂主に下方にラミナ状に入る)
7. 灰 10Y6/1 細砂 (下方にラミナみられる)
8. オリーブ灰 2.5GY6/1 細砂
9. オリーブ灰 2.5GY5/1 粘土
10. 緑灰 7.5GY6/1 細砂粘土 (細砂をわずかに含む)

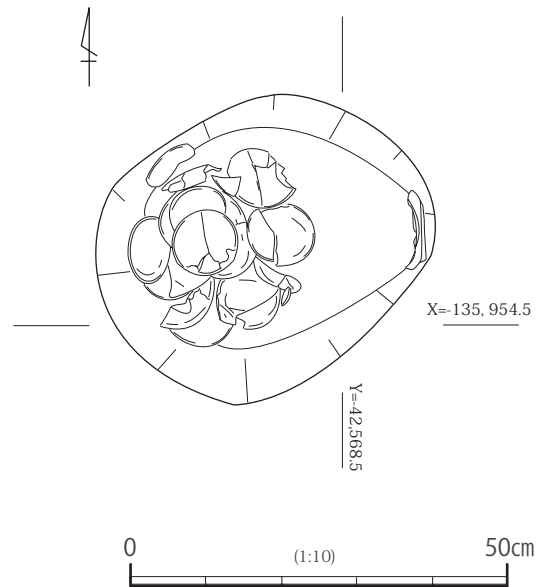
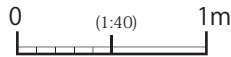


図24 第1地区 第5面 175土坑  
土師器皿出土平面図

253ピットと同じである。

#### 南部遺構群〔第5面〕(図25・26、図版2)

調査区南部には先述の第3面にて、基本層序における第4面ないしは第5面に帰属するピット、土坑が微高地上に展開する。しかし、遺物が出土した遺構はほとんどなく、確かなことは判らない。当面で検出した遺構群は微高地と共にさらに北側や西側の調査区外へ広がると考えられる。

ピットは円形で直径0.3m前後、深さ0.2～0.3m

前後である。埋土には黒褐10YR3/2シルト～細砂(炭を粒状で含む)が主に入る。明確な掘立柱建物は検出できなかった。

土坑は不定円形や隅円方形が多く、長辺または長径0.4～1.5m、短辺または短径0.5～1.0m、深さ0.05～0.15mと浅い。埋土は黄灰2.5Y5/1焼土・炭を粒状にわずかに含むシルトが入るものが多い。

#### (5) 第5-2面の遺構(図27、図版3・5～8)

当面も調査区の北部に溝、土坑、井戸等多数の遺構が集中する。微高地状の高まりが北端部に認められた。当地で柵列を2列検出している。小穴が連続する状況が見られ、建物のように間隔に規則性がないことから柵列と推定した。

#### 270溝(図27・28・34、図版6)

北東は調査区外へのびる。軸はN-60°-Eをとる。長さ33.0m、幅0.25～1.0m、深さ0.05m前後を測り、調査区の南東側で北端部の微高地付近に沿うアールを描き真東方向にさらに曲がる。底のレベルの高低差はほとんどない。埋土には黒褐2.5Y3/1細砂が入る。後世の周辺地形の改変による平坦化によ



图 25 第 1 地区 第 5 面 南部遺構群 平面図



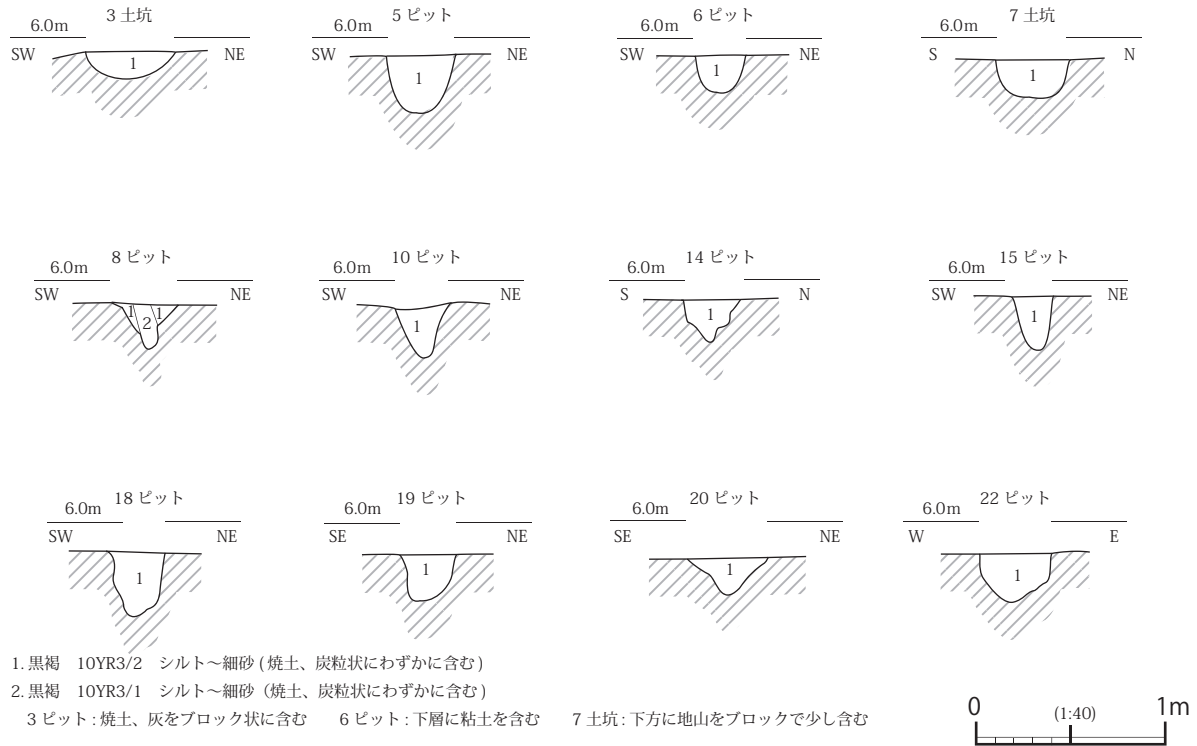


図26 第1地区 第5面 南部遺構 断面図

り、確かなことは不明であるが、自然地形の310落込みの形状から推測すると、地形の傾斜に直行して掘削された溝と考えられ、灌漑のために使用されたと思われる。7世紀頃の遺構と考える。

#### 275土坑 (図27・28・34、図版6)

平面は方形状を呈する。長辺3.0m、短辺2.5m、深さ0.1mを測る。これに、北東部に1.5mのびる張り出し部がとりつく。底面はほぼ平坦である。埋土には暗黄灰2.5Y4/2細砂に黒2.5Y2/1シルトをブロックで含むものが単層で入る。検出当初、竪穴住居跡の可能性を考えたが、土坑内は柱穴や周溝も認められず、それらしい確証は得られなかった。

#### 308土坑 (図27・28、図版8)

馬蹄形の輪郭を持つ259・309等の土坑が点在する。308土坑もその一つである。これらの土坑は埋土に黒褐色系のシルト～粗砂が入る。当遺構は輪郭が明確でなく、楕円形の土坑と捉えると長径1.8m、短径1.6mを測る。

このような土坑が東大阪市・八尾市の池島・福万寺遺跡で検出されており、地震等の地殻変動によってできた可能性が指摘されている。

#### 267土坑 (図28)

調査区北西部にあり、平面が楕円形状を呈し、長径0.9m、短径0.7m、深さ0.4～0.5mを測る。埋土は下から褐灰10YR5/1シルトに細砂を少しと粘土をブロック状に含む。上層は褐灰10YR4/1細砂混シルトに炭を含む。

#### 266溝 (図27・28・34、図版3・6)

長さ12.0m、幅1.0m、深さ0.2m前後を測る。埋土は単層で、灰7.5Y5/1細砂が入る。N-45°-Eをとり、直線的にのびる溝である。

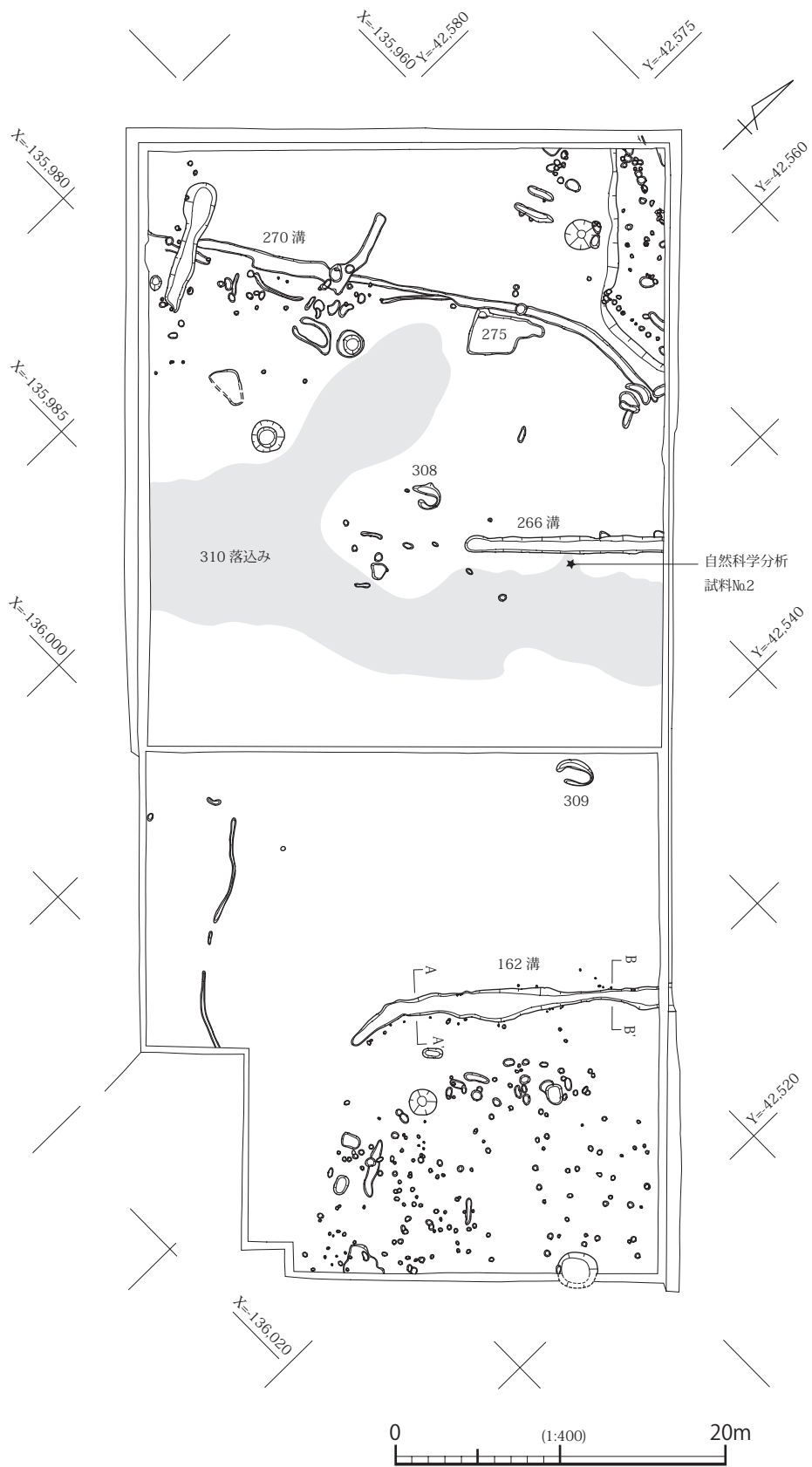


图 27 第 1 地区 第 5 - 2 面 全体图

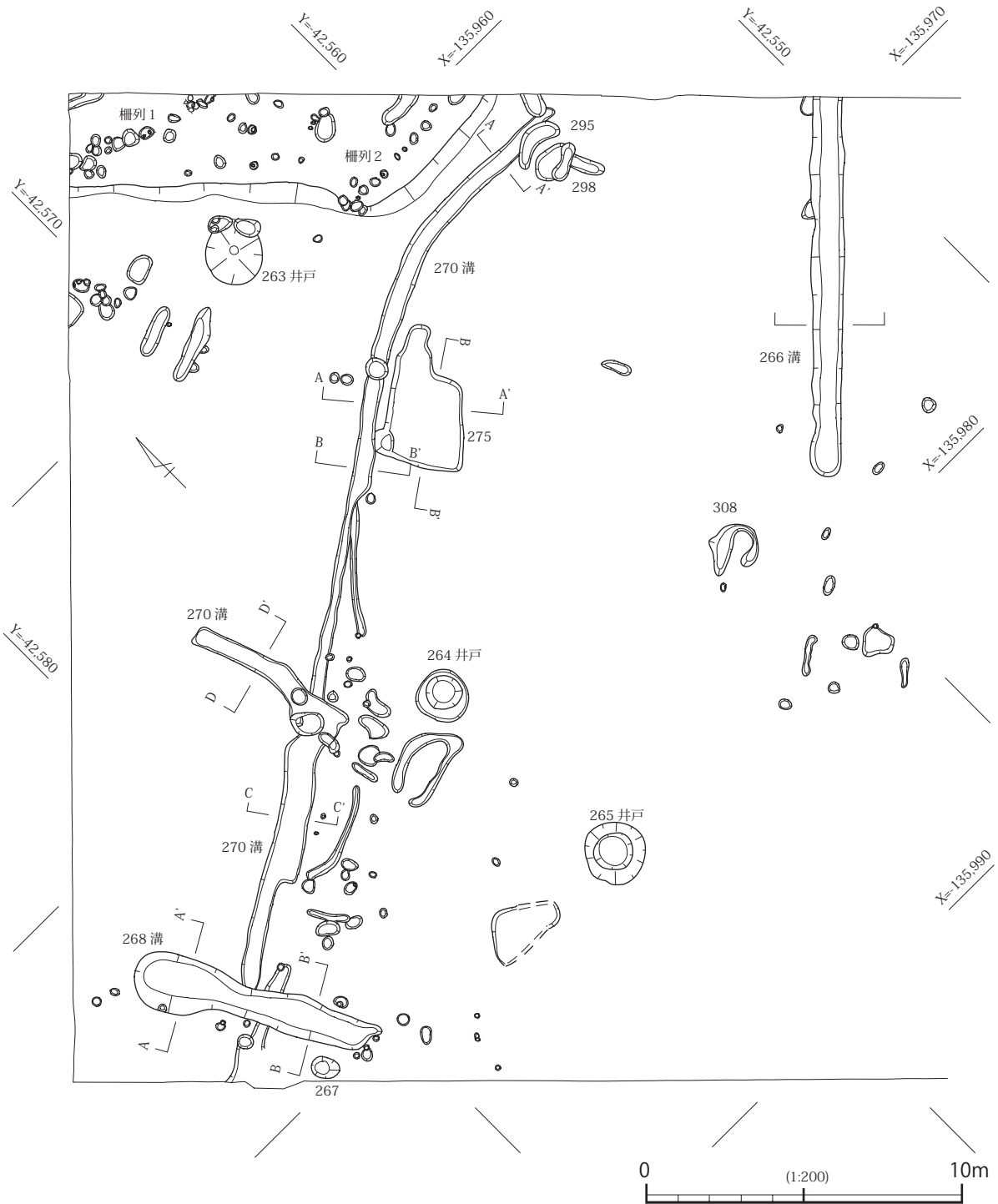


図28 第1地区 第5-2面 北部遺構群 平面図

268溝 (図28・34、図版6・8)

長さ8.0m、幅1.0~2.0m、深さ0.4m前後を測る。埋土には主に地山をブロックで含む黒~黒褐色系のシルト~粗砂が入る。南北に走る溝である。軸はN-25°-Wをとる。遺物には須恵器杯・蓋・すり鉢、土師器杯等が出土している。須恵器杯蓋は転用硯である。炭化種実も多く見られた。遺物は6~8世紀と時期幅があり、当溝の直上には第5面で検出した炭化層が広がっていた。

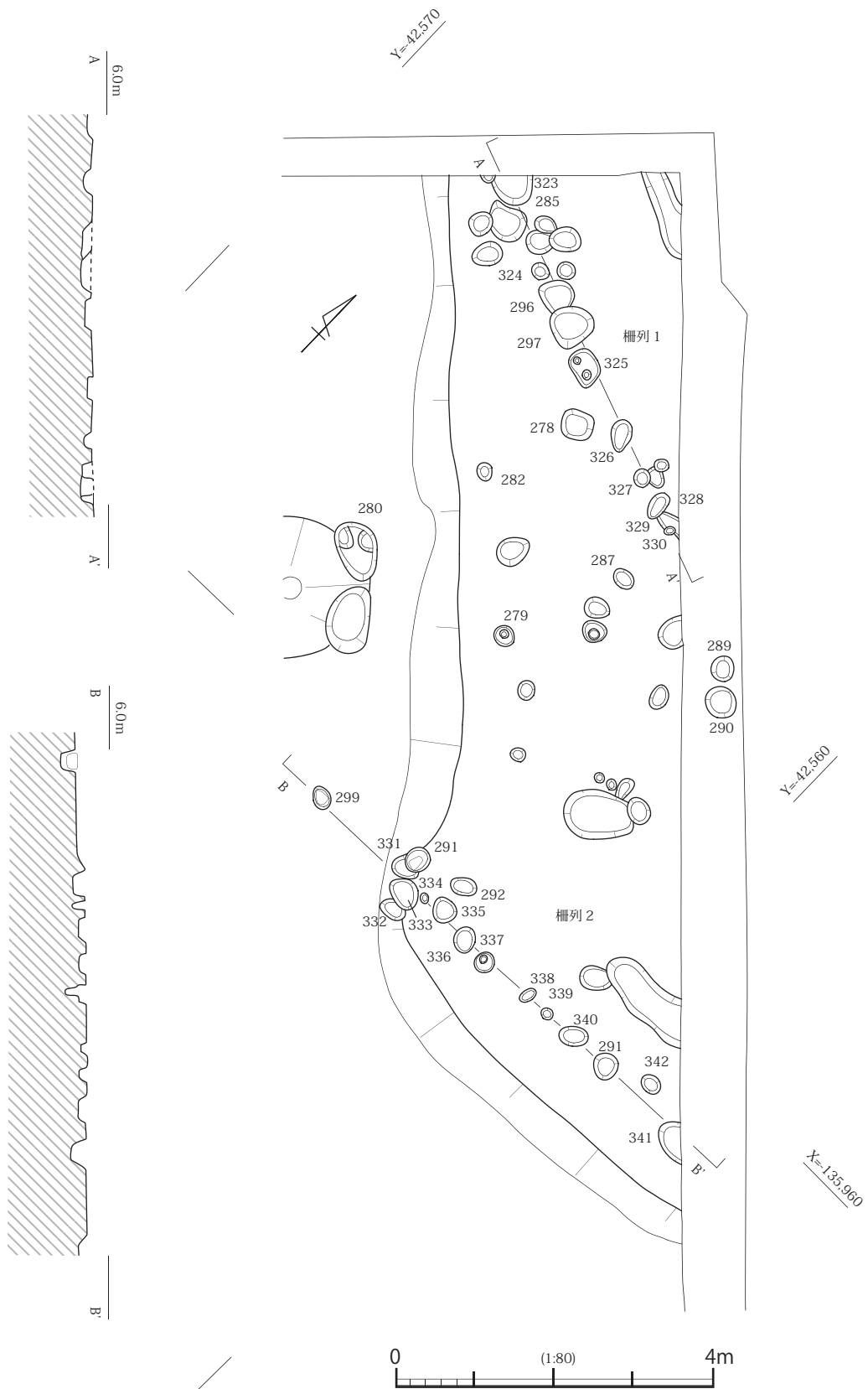


图29 第1地区 第5-2面 北东部栅列1·2 平·断面图

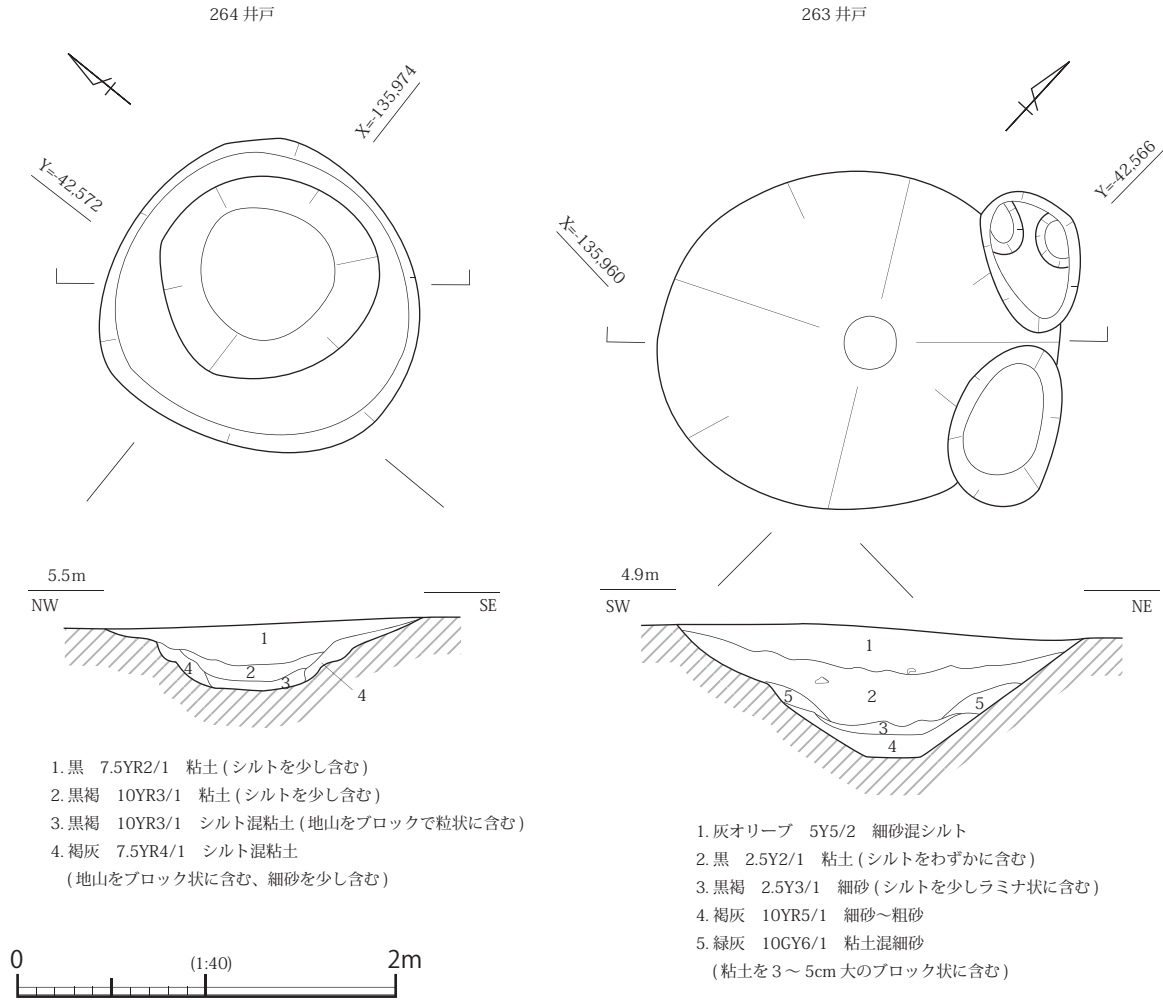


図30 第1地区 第5-2面 263・264井戸 平・断面図

### 263井戸 (図28・30、図版7)

直径は推定で2.2m、深さ0.7mを測る。一部、別のピットで壊されている。埋土にはグライ化の進んだ灰色や黒褐色系の粘土～細砂が入る。出土遺物は新しく、井戸の時期は第5面の時期まで遡る可能性もある。

### 264井戸 (図28・30)

直径は推定で1.7m、深さ0.35mを測る。埋土には主にグライ化の進んだ灰色や黒褐色系の粘土～シルトが入る。

### 265井戸 (図28・31、図版7)

直径1.9m、深さ0.9mを測る。埋土には主にグライ化の進んだ灰色や黒褐色系の粘土～シルトが入る。古墳時代後期の須恵器杯身・甗、瓢箪とその種実が出土している。帰属時期が判別できる当地区、当面検出の遺構の中で、古い部類に入ると考えられる。

### 柵列1 (図29)

長さ5.0m以上で、調査区外へのびる可能性がある。軸はN-70°-Wをとる。柱穴は円形、0.2～0.5mの間隔、直径0.2～0.3m、深さ0.1～0.2mを測る。

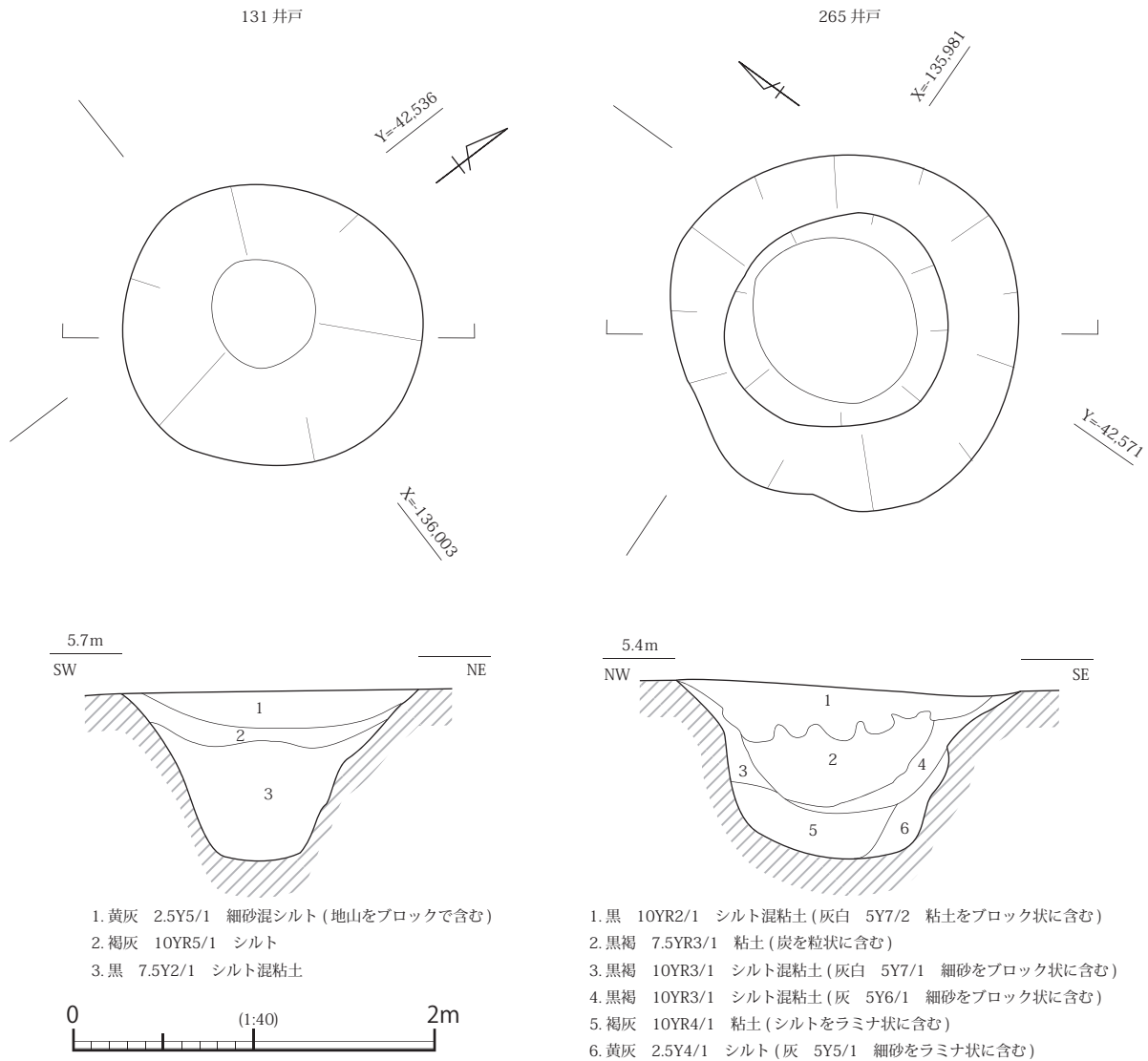


図31 第1地区 第5-2面 131・265井戸 平・断面図

## 柵列2 (図29)

長さ6.0m以上である。調査区外へのびる可能性がある。軸はN-87°-Eをとる。柱穴は0.2~0.5m間隔、直径0.2~0.3m、深さ0.1~0.2mを測る。

## 310落込み (図27)

第5層を除去すると調査区の北側と南側では黄褐色系のシルト~粗砂を主とする基盤層(地山)があらわれたが、調査区の中央やや北側を南西から北東方向にのびる第5層を埋土とする落込みを検出した。当落込みの長さは32m、幅6m前後を測る。落込みの下部は氾濫堆積層(砂)であったが、地山を形成する氾濫時の堆積と考え、全面を掘削しなかった。第2地区第5-2面下位の自然流路とつながる可能性が考えられる。

当落込みの最上部から採取した炭化物に対し<sup>14</sup>C年代測定を行ったところ、おおむね古墳時代前期の年代を得た。(第IV章第1節参照)

また、当落込みの直上にて、今回の出土遺物の中で最も古い時期に属する、縄文時代中~後期頃の凹





图 32 第 1 地区 第 5-2 面 南部遺構群 平面図

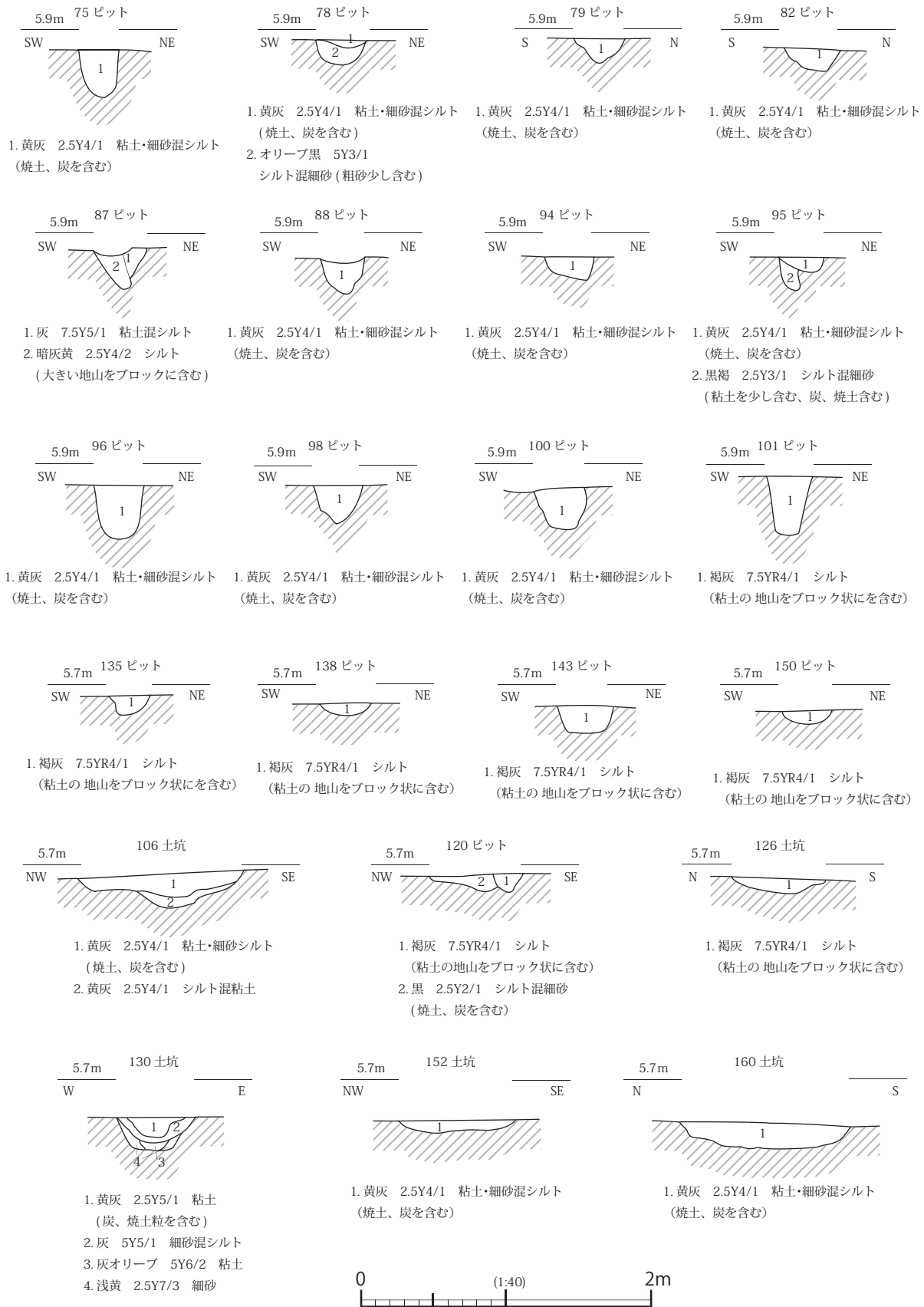


図 33 第 1 地区 第 5 - 2 面 南部遺構 断面図 (1)

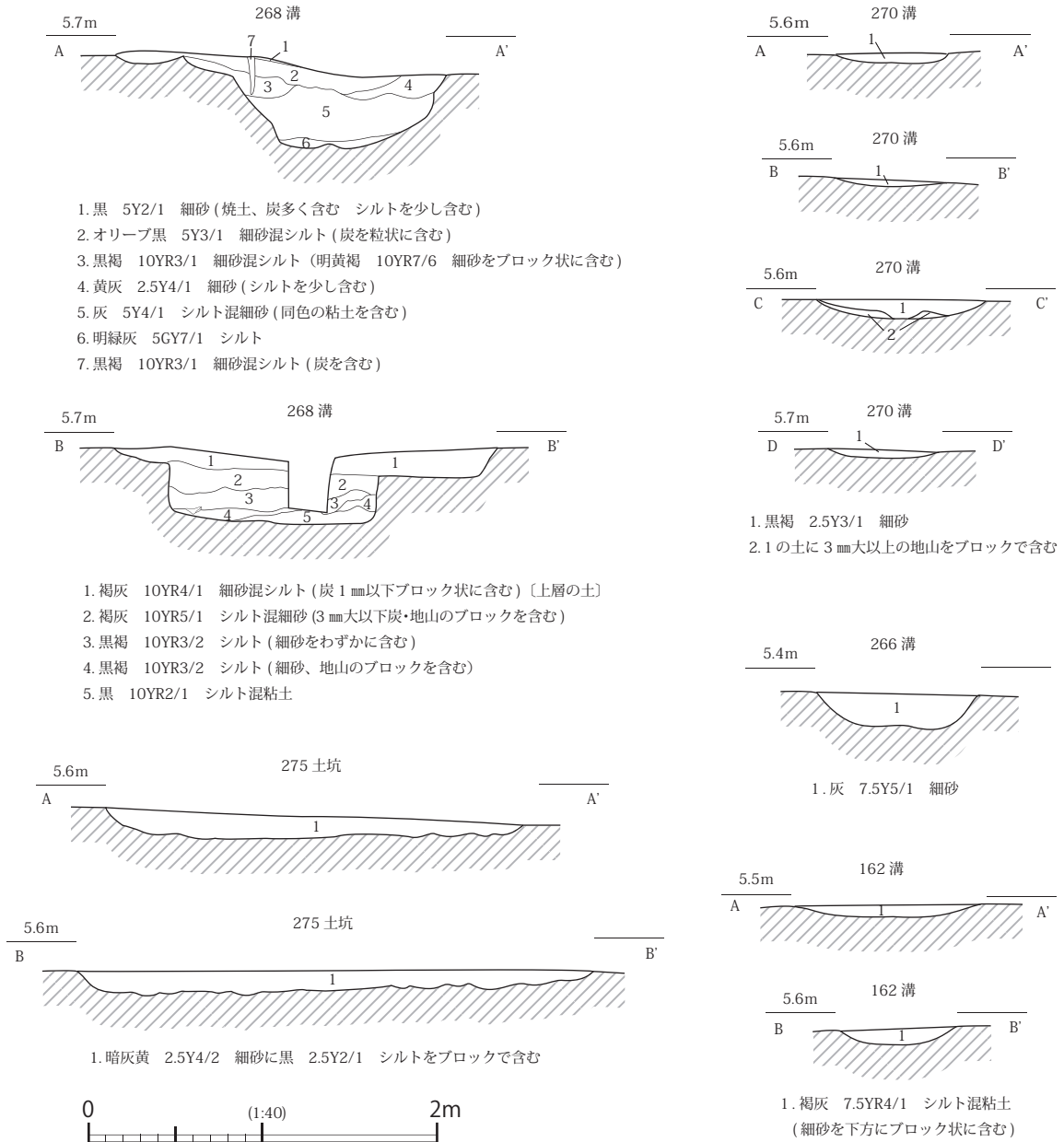


図34 第1地区 第5-2面 南部遺構 断面図(2)

基式石鏃が1点出土している。

**南部遺構群〔第5-2面〕** (図32~34、図版5)

南部微高地の第3面を掘り下げ、新たな面を検出した。当面にもピット、土坑が展開する。ただし、調査区の中央部は、第4層により大きく削平を受けており、北側の第5-2面の遺構群とは、層序関係から見た連続性は定かではない。当面での南部微高地上の遺構からは遺物の出土はなく、時期の詳細は判別し難い。遺構の埋土よりみると北側の第5面に相当するか、もしくはその時期に近い遺構面であるかもしれない。

よって、162溝以南の遺構群は、当調査区南側における最終遺構面の遺構群であるということで、第5-2面として便宜的に集約したことを断っておく。

ピットは直径0.3m前後、深さ0.2~0.4m程である。埋土には黄灰2.5Y4/1粘土~細砂混シルト(焼

土・炭を含む)や褐灰7.5YR 4/1シルト(粘土の地山をブロック状に含む)が入る。明確な掘立柱建物は検出できなかった。

土坑は不定円形や隅円長方形が多く長辺0.9~1.5m、短辺0.4~0.6m、深さ0.05~0.25mを測る。埋土にはピットと同じく黄灰2.5Y 4/1粘土~細砂混シルト(焼土・炭を含む)や褐灰7.5YR 4/1シルト(粘土の地山をブロック状で含む)が入るものが多い。井戸と思われる遺構も2基検出している。

微高地はさらに調査区外の東側に広がると考えられ、同地に展開するこれらの遺構群も、同様にさらに調査区外へ広がると考えられる。

#### 80井戸(図32)

長軸2.5m、短軸2.1mを測る。深さ0.6mと浅く、溜め井戸の様なものか。埋土は地山の土を含む褐灰7.5YR 4/1粘土~シルトが入る。

#### 131井戸(図31・32、図版5)

直径は推定で1.65m、深さ0.9mを測る。埋土には黒7.5Y 2/1シルトを含む粘土はじめ、灰色や黒褐色系の粘土~シルトが入る。

#### 162溝(図27・34、図版5)

南部微高地の縁辺部を走る溝である。北東へ調査区外にさらにのびる。長さ20m、幅0.5~2.0m程、深さ0.05~0.1m程の溝である。雨落ちの流水を取り込む、もしくは区画のための溝と考えられる。N-35°-Eをとる。底部のレベルの差はあまりない。瓦片、初期の瓦器片や弥生土器片が出土した。

## 2. 第2地区の調査

### (1) 遺構面の概要

第2地区の現地表面は標高8.5~9.0mを測る。調査区は第1面から第4面まで鋤溝・畝間溝跡と思われる耕作痕を検出した。第3面以下は主に微高地となる西側に耕作痕は集中し、東半部での鋤溝痕の検出は顕著ではない。東半部は第1地区の低地部と同様、水田耕作が主であった地域と思われる。

第2面からは、耕作痕、耕作に使用された可能性がある土坑、調査区の西北部にて当調査区の半分近くを占める15池を検出した。標高は第1面が6.1~6.5m、第2面が6.0~6.3m、第3面が5.7~6.15m、第4面が5.3~5.7mを測る。

第5面は、標高5.50~5.65mを測る。調査区の西側にて多数のピット、溝、土坑、井戸と掘立柱建物3棟と柵列4列を検出した。建物に重複してピットが検出されたことから、その全てを復元できなかったが、建て替えが行われていたことが推測される。建物の軸はほぼ同一の方向をとる。柵列は建物の軸に近似するものと、そうでないものとの2群に分かれる。一部の柱穴から土師質羽釜、黒色土器碗A類等が出土することから、10世紀代を中心とした平安時代の遺構群と考える。

以上のことから掘立柱建物で構成される10世紀頃の集落のあったことが想定され、この集落は遺構の広がりから考え、西側にさらに広がる可能性がある。

東側に向かい傾斜する地形は、第1地区中央部の地形である低地部分につながると考えられる。この箇所第2層から第5層までは灰褐色系の粘土混シルトで形成されている。東部域の遺構は、数基のピット、小溝数本と、耕作に伴うであろう段や畦畔の痕跡と思われる筋状の変色部を検出している。第1地区の低地部分と同様、水田域と考えられる。

### (2) 第2面~第4面の遺構(図35~38、図版9~11・13)

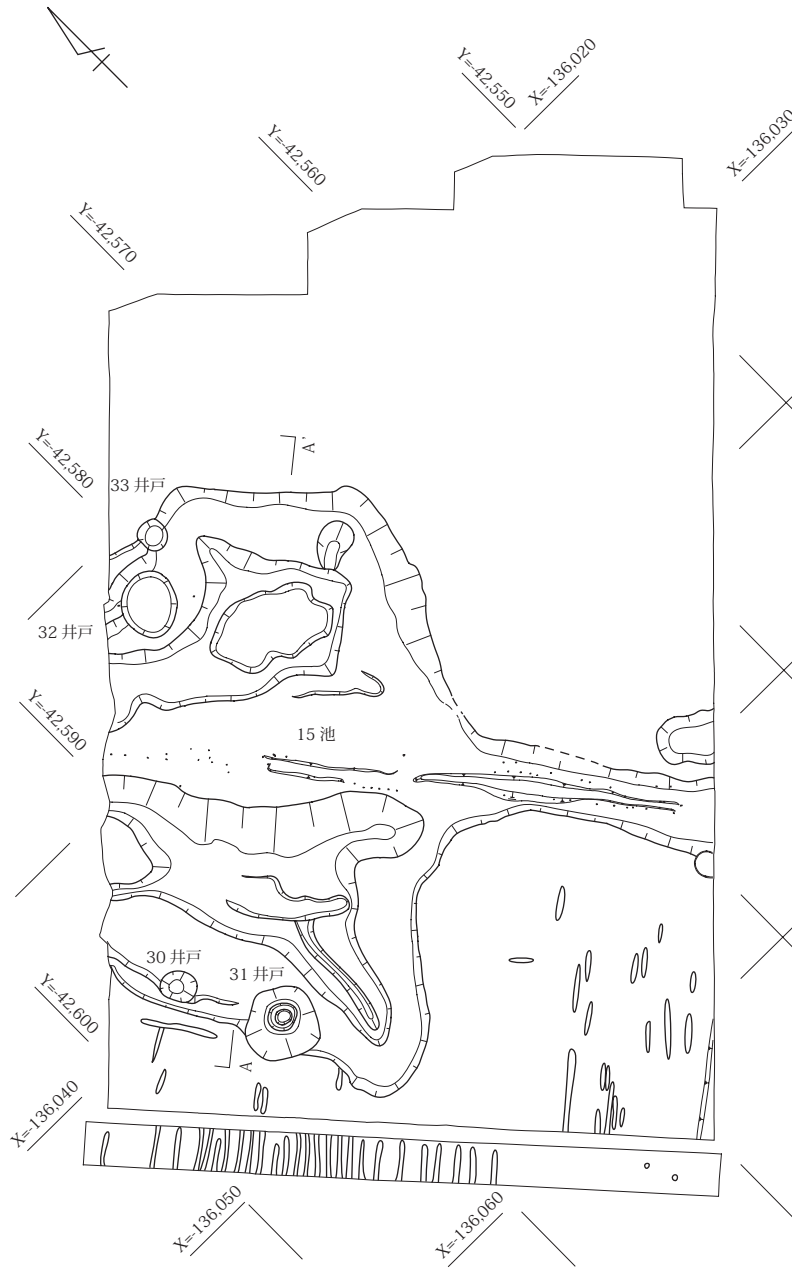
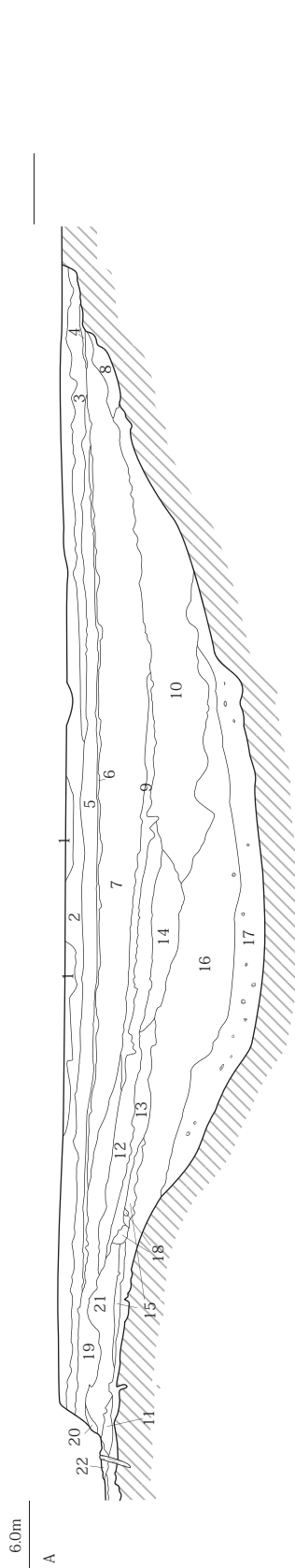
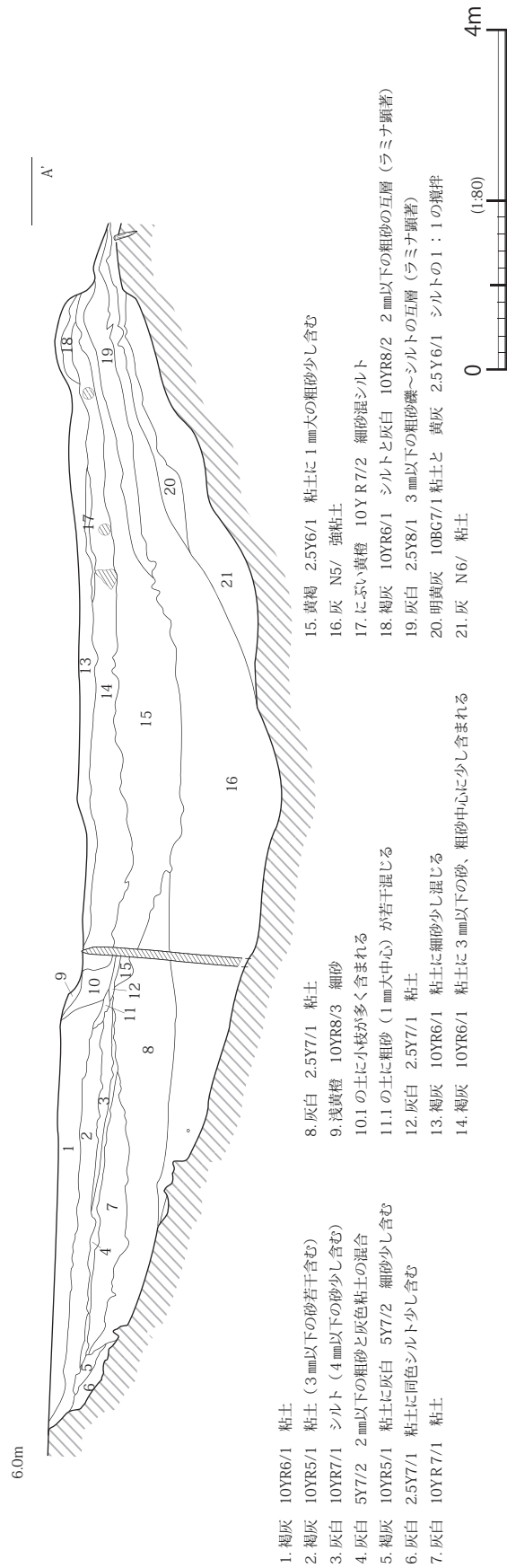


图 35 第 2 地区 第 3 面 全体图



1. 黄澄 10YR6/8 粘土～シルト Fe 多し (第2層下部の土、耕作の為の盛土)
2. 灰 N6/シルト (1～2mm以下の粗砂少し含む) に黄褐 2.5Y5/6 Fe 黄が着色
3. 褐灰 7.5YR5/1 2mm以下のシルト～粗砂に明褐 7.5YR5/6 の Fe 多く着色
4. 3の土に似るがシルトが多い 上からの Fe 黄の脱着で少しそまる
5. 灰白 5Y7/1 2mm以下の砂に少しシルト含む
6. 黄灰 2.5Y6/1 シルト (Fe を部分的に若干含む) (池埋土最終の泥)
7. 灰白 5Y7/1 粘土と灰 N4/粘土～シルトに明黄褐 2.5Y7/6 粘土～粗砂をブロックで含む (埋め戻しの層)
8. 黄灰 2.5Y5/1 粘土に灰白 2.5Y8/2 2mm以下の砂のラミナ少し含む
9. 灰 5Y5/1 粘土と中心部が灰白 5Y7/1 3mm以下の粗砂礫
10. 灰 5Y5/1 粘土に3mm以下の粗砂礫少し混じる (地山の土も若干混じる)
11. 黄灰 2.5Y4/1 粘土 に黄灰 2.5Y6/1 細砂若干含む
12. 褐灰 10YR4/1 粘土
13. 16の土に2mm以下の粗砂少し含む
14. 灰白 5Y7/1 3mm以下の粗砂礫と灰 5Y5/1 粘土の混合
15. 黄灰 2.5Y6/1 粗砂混シルト
16. 黄灰 2.5Y5/1 粘土～シルト (部分的に下方に地山の土や砂が入る)
17. 16の土の強粘土 (地山の土が下方中心に少し混じる)
18. 灰白 N8/ 1mm以下の砂 (踏込みか?)
19. 灰黄 2.5Y7/2 3mm以下の粗砂礫と灰 N6/ の 1:1:1の混合 (塊状)
20. 灰 5Y5/1 粘土・シルト・細砂 7:2:1の混合
21. 灰 5Y5/1 粘土に浅黄 2.5Y7/4 3mm以下の粗砂礫の 6:4の混合
22. 黄灰 2.5Y4/1 粘土に黄灰 2.5Y6/1 3mm以下の粗砂礫の 6:4の混合 (20と同じか)



1. 褐灰 10YR6/1 粘土
2. 褐灰 10YR5/1 粘土 (3mm以下の砂若干含む)
3. 灰白 10YR7/1 シルト (4mm以下の砂少し含む)
4. 灰白 5Y7/2 2mm以下の粗砂と灰色粘土の混合
5. 褐灰 10YR5/1 粘土に灰白 5Y7/2 細砂少し含む
6. 灰白 2.5Y7/1 粘土に同色シルト少し含む
7. 灰白 10YR7/1 粘土
8. 灰白 2.5Y7/1 粘土
9. 浅黄橙 10YR8/3 細砂
10. 1の土に小粒が多く含まれる
11. 1の土に粗砂 (1mm大中心) が若干混じる
12. 灰白 2.5Y7/1 粘土
13. 褐灰 10YR6/1 粘土に細砂少し混じる
14. 褐灰 10YR6/1 粘土に3mm以下の砂、粗砂中心に少し含まれる
15. 黄褐 2.5Y6/1 粘土に1mm大の粗砂少し含む
16. 灰 N5/ 強粘土
17. にぶい黄橙 10YR7/2 細砂混シルト
18. 褐灰 10YR6/1 シルトと灰白 10YR8/2 2mm以下の粗砂の互層 (ラミナ顕著)
19. 灰白 2.5Y8/1 3mm以下の粗砂礫～シルトの互層 (ラミナ顕著)
20. 明黄灰 10BG7/1 粘土と 黄灰 2.5Y6/1 シルトの 1:1:1の塊状
21. 灰 N6/ 粘土

図 36 第2地区 第3面 15池 断面図



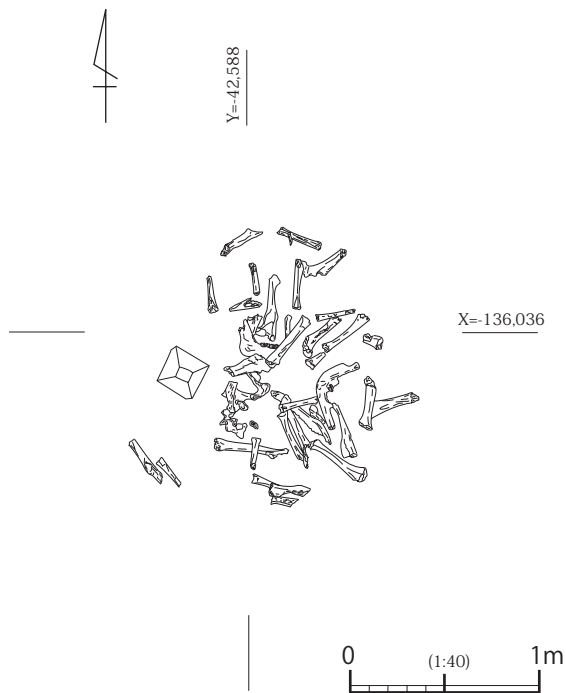


図 37 第 2 地区 15 池 獣骨及び  
五輪塔火輪出土 平面図

### 各面の耕作溝群

上述のように当調査区の西側地域で耕作溝を検出している。しかし、第 3 面以前の遺構は、その大半は 15 池により削平を受け、消失していると考えられる。なお、東側地域は遺構が希薄であるが、第 2 面から第 4 面の基盤となる層は粘土～シルトで形成されており、土地を区画するような段差や畦畔状の痕跡が若干認められるため、水田域であったと思われる。

耕作痕の方向は第 1・第 2 面では  $N-55^{\circ}-E$ 、第 3・第 4 面では  $N-60^{\circ}-E$  をとる。

### 15 池 (図 35・36、図版 9・10)

当池は第 2 地区の西側域の大半を占める。長径 30m、短径 20m 以上を測り、さらに北側調査区外に広がる。池の中央部分は南北に馬の背状に隆起し、これを境に池底部は東西に分かれている。池底の深さは西側が 2.2m、東側が 2.4m を測る。

南東辺は幅 3m 前後、深さ 0.5m 前後の溝がとりつき、調査区外へのびる。溝のレベルは北側より南側の方が 10cm 程低く、池に溜まった水は北側から南側へ流れたものと思われる。

池の周囲に耕作地が展開することから、主にこれらの灌漑用の施設として使用されたと考えるのが妥

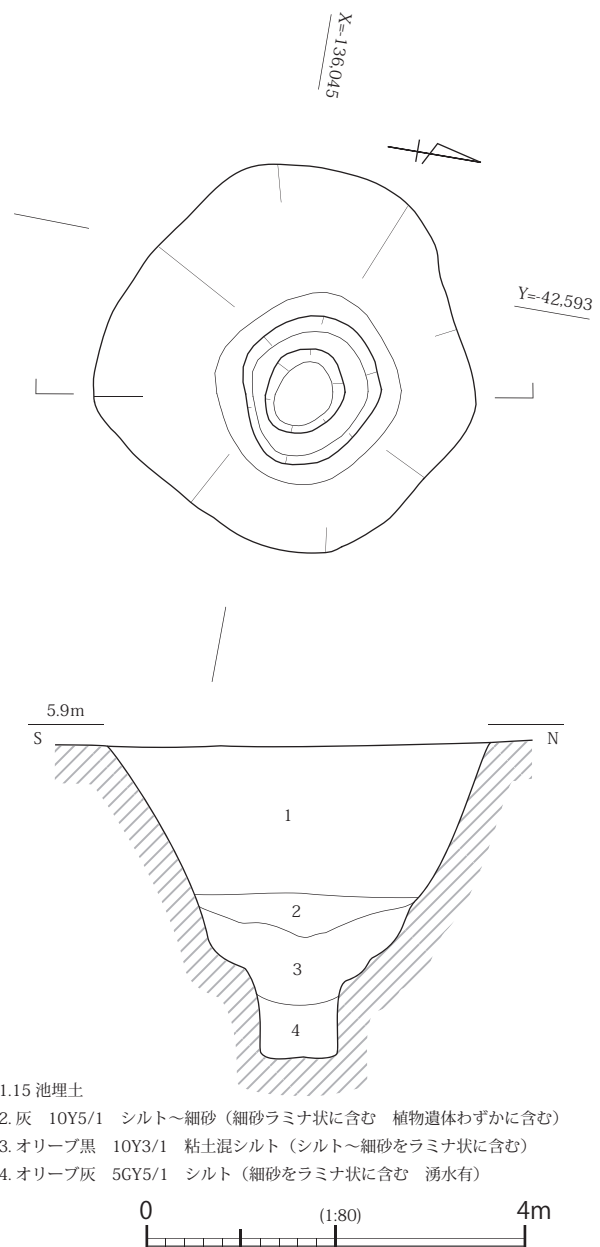


図 38 第 2 地区 第 3 面 31 井戸  
平・断面図

1. 15 池埋土
2. 灰 10Y5/1 シルト～細砂 (細砂ラミナ状に含む 植物遺体わずかに含む)
3. オリーブ黒 10Y3/1 粘土混シルト (シルト～細砂をラミナ状に含む)
4. オリーブ灰 5GY5/1 シルト (細砂をラミナ状に含む 湧水有)

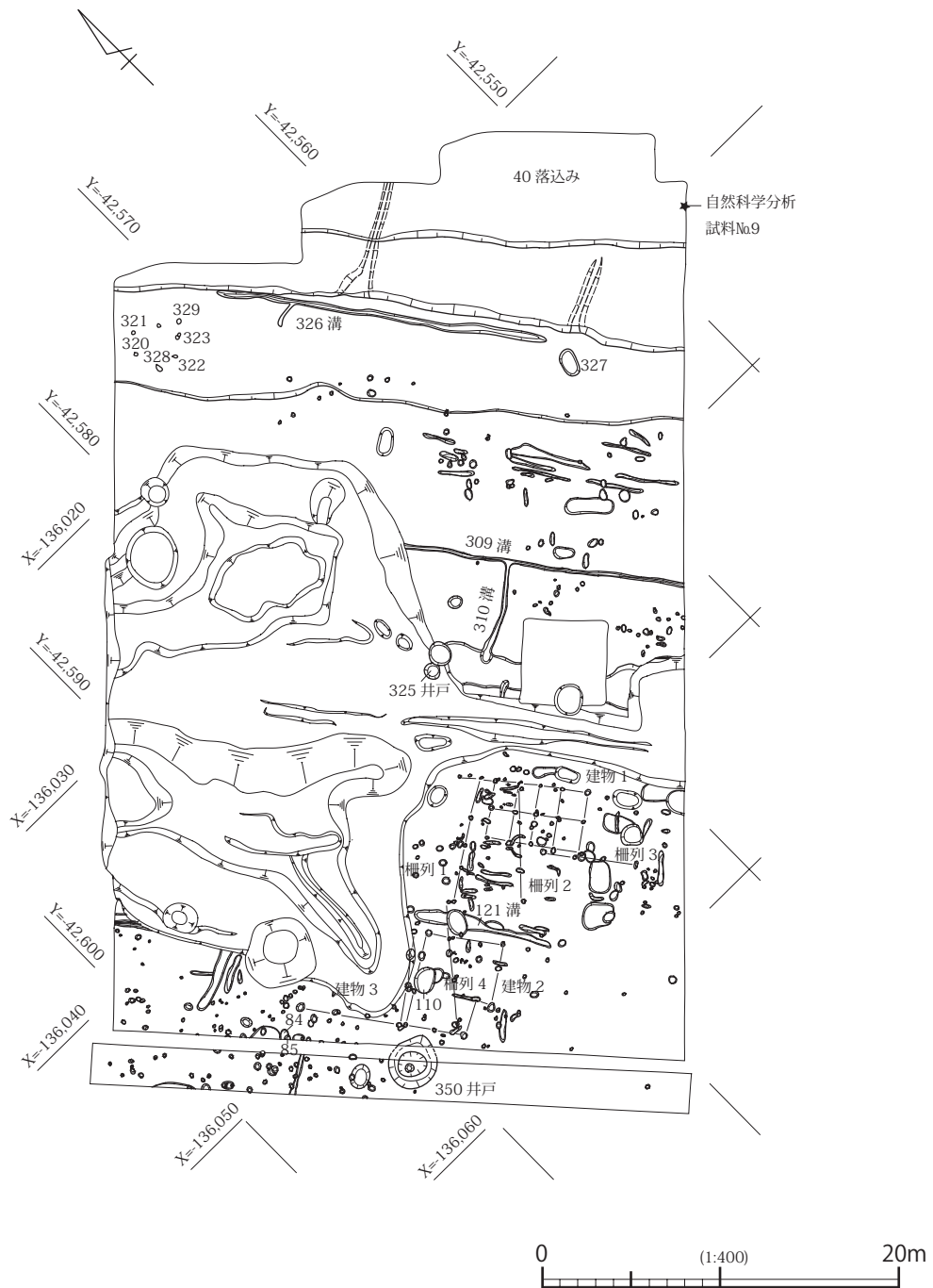


图 39 第 2 地区 第 5 面 全体图

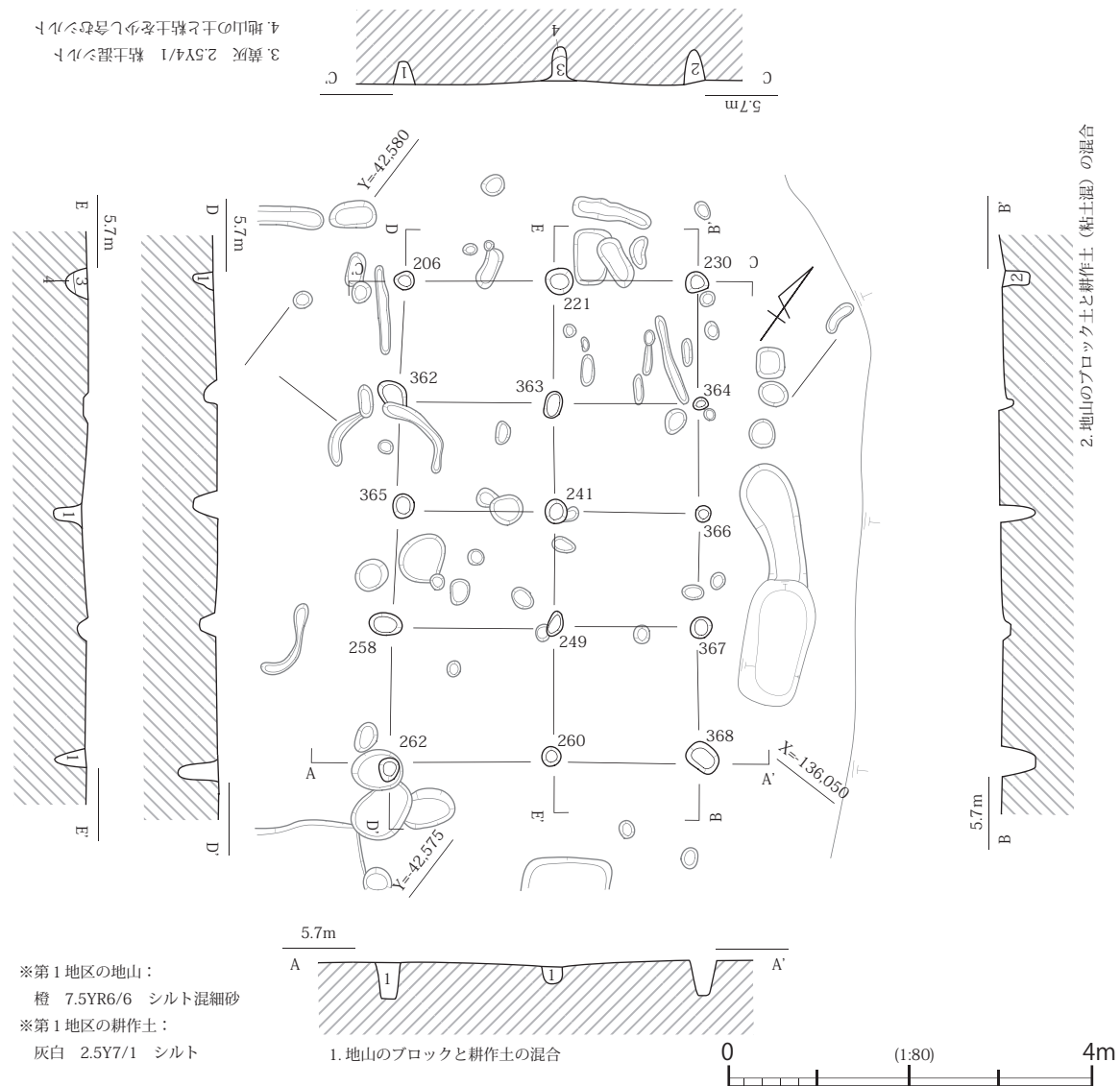


図40 第2地区 第5面 建物1 平・断面図

当といえよう。

当溝の上面では、同一の位置において15池の埋没後に構築された直線的に走る溝が認められた。当池は、近世の後半以降縮小し、その役目を終えたようであるが、溝は吹田操車場の建設に際して埋め立てられるまで、継続して使用されたと思われる。

池の埋土の下位から近世初頭の黄瀬戸椀、唐津焼皿等が若干出土している。また、中世前半の白磁壺底部も見つかっていることから、池の初源は近世よりさらに遡る可能性がある。その場合、第3面はもちろん第4面の構造物としても機能していた可能性が考えられる。ただし、池が拡張された時期があったとすれば、当初の池の形状は改築により失われたはずである。

他に、池底から牛馬骨を多数検出した。出土した骨を検討した結果、肋骨が含まれていないことが判明した。特に骨が多量に集中する箇所が池の北側に見られたが、これらの骨を取り除いた下に、五輪塔の火輪部分のみが見ついている。

7. 灰白 2.5Y7/1 シルトに極 7.5YR6/6 シルト～粗砂 (地山のブロック土と耕作土の混合 (地山の土多い))

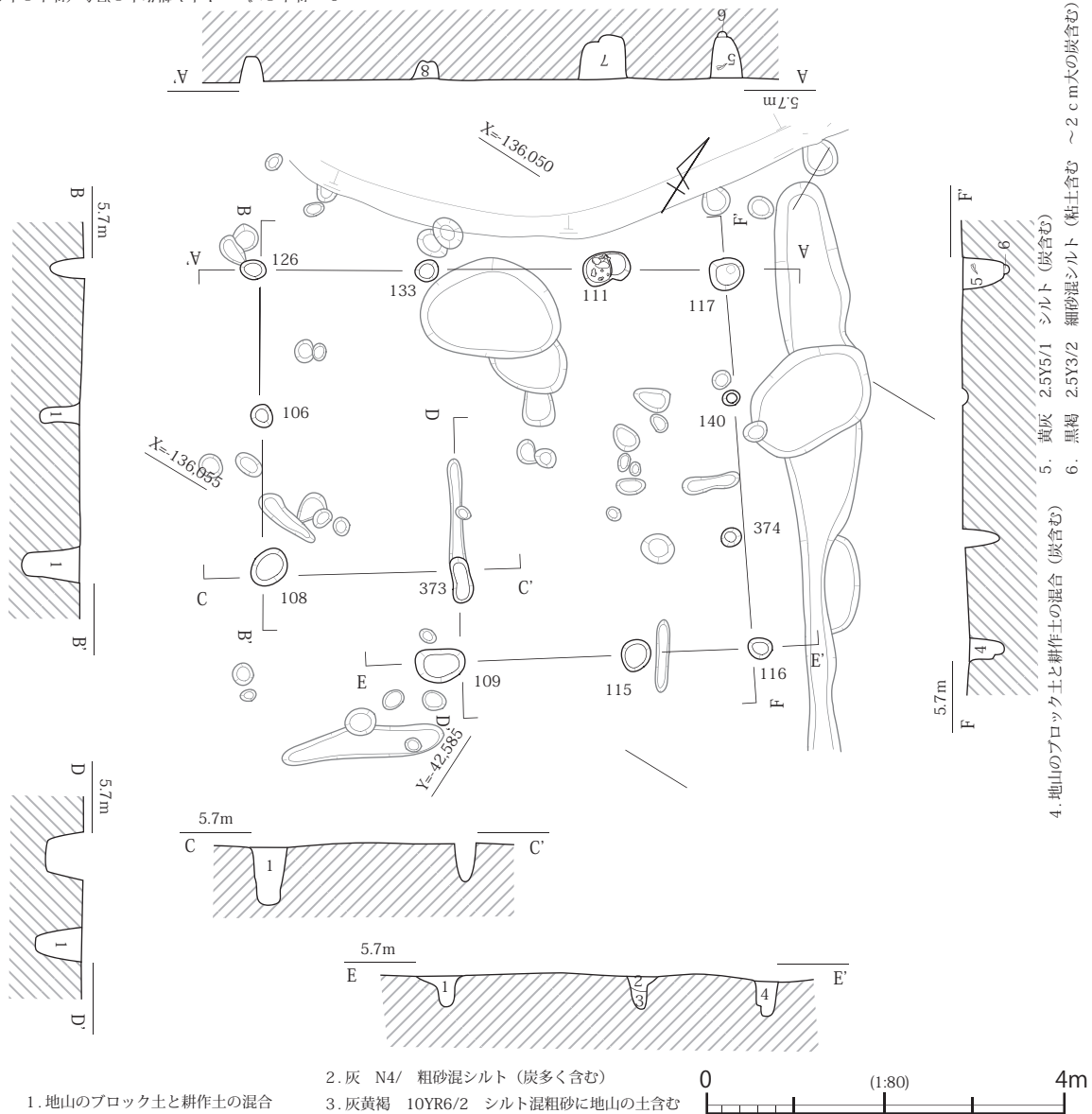


図41 第2地区 第5面 建物2 平・断面図

### 15池縁辺部の井戸 (図35・38、図版11)

15池の内側の縁辺部では30~33井戸が見つっている。これらの井戸の埋土から遺物は出土していない。このため、明確な時期は抑えられない。しかし、これらの井戸は池の埋土を除去した段階で検出している。よって、井戸が池より古いと思われる。

### 30井戸 (図35、図版11)

直径2.0m、深さ1.55m以上を測る。断面はロート状である。15池の東側縁辺部に位置する。井戸の下位に桶状の側板を持つ井戸枠を検出している。

### 31井戸 (図35・38、図版11)

30井戸の南側5mに位置する。直径4.0m、深さ3.3mを測る。断面は途中で段を持つロート状である。埋土の上方は15池の埋土が入り込む。下方はラミナが発達し、グライ化したオリーブ黒10Y3/1~オリーブ灰5GY5/1の粘土~細砂が入る。

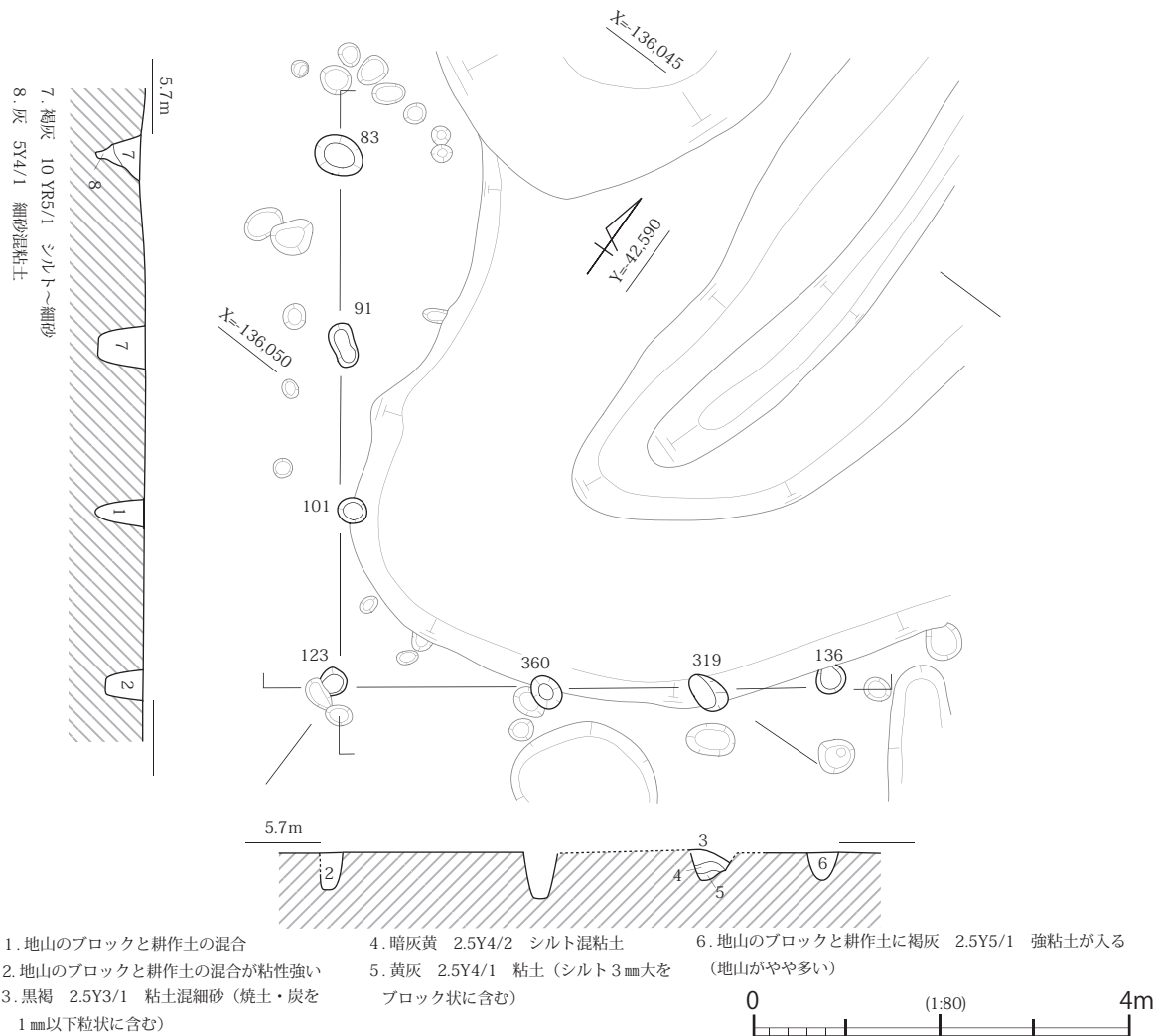


図42 第2地区 第5面 建物3 平・断面図

(3) 第5面の遺構 (図39、図版12・13)

**建物1** (図39・40、図版12)

調査区の南端やや中央よりに位置する。総柱の掘立柱建物である。主軸はN-35°-Wをとる。桁行4間、梁間2間である。規模は5.3×3.4mである。柱穴は1.2~1.8m間隔、直径0.3~0.5m、深さ0.1~0.5mを測る。埋土には灰白2.5Y7/1粘性のシルト(耕作土)に黄灰2.5Y4/1(地山の土)シルトをブロックで含む等が入る。

**建物2** (図39・41、図版13)

調査区の南端、建物1の西側に位置する。主軸はN-55°-Eをとる。桁行3間、梁間3間をとる。規模は5.3×4.2mである。建物は南隅の柱を欠いており、出入口の可能性が考えられる。柱穴は1.2~2.1m間隔、直径0.1~0.5m、深さ0.2~0.7mを測る。埋土には建物1と近似した地山のブロックと耕作土の混合等が入る。10世紀頃の遺構と考える。

**111柱穴** (図41・47、図版13)

建物2を構成する柱穴の一つである。長径0.5m、短径0.35m、深さ0.4mを測る。黒色土器片、土師器が出土した。

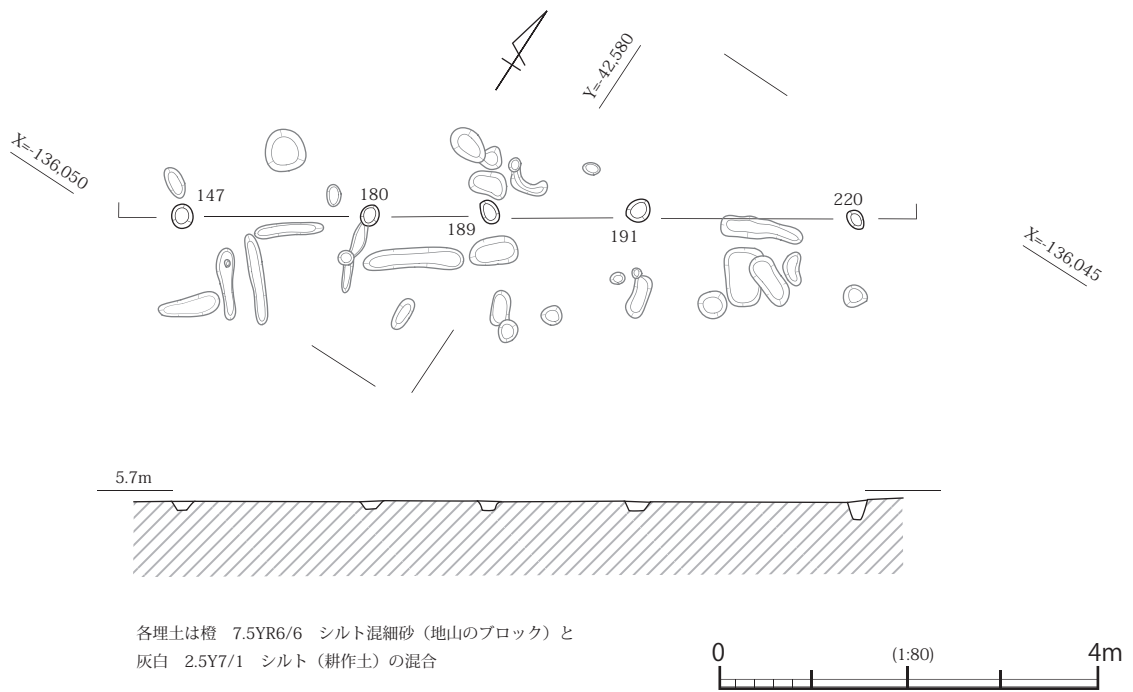


図43 第2地区 第5面 柵列1 平・断面図

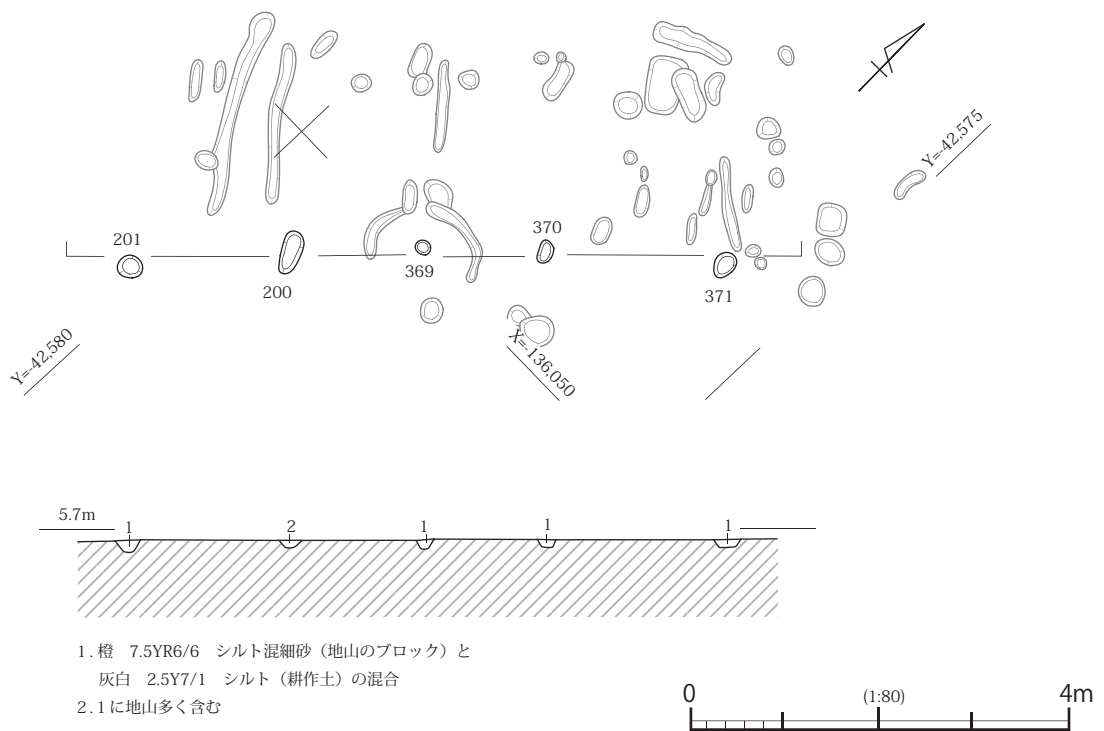


図44 第2地区 第5面 柵列2 平・断面図



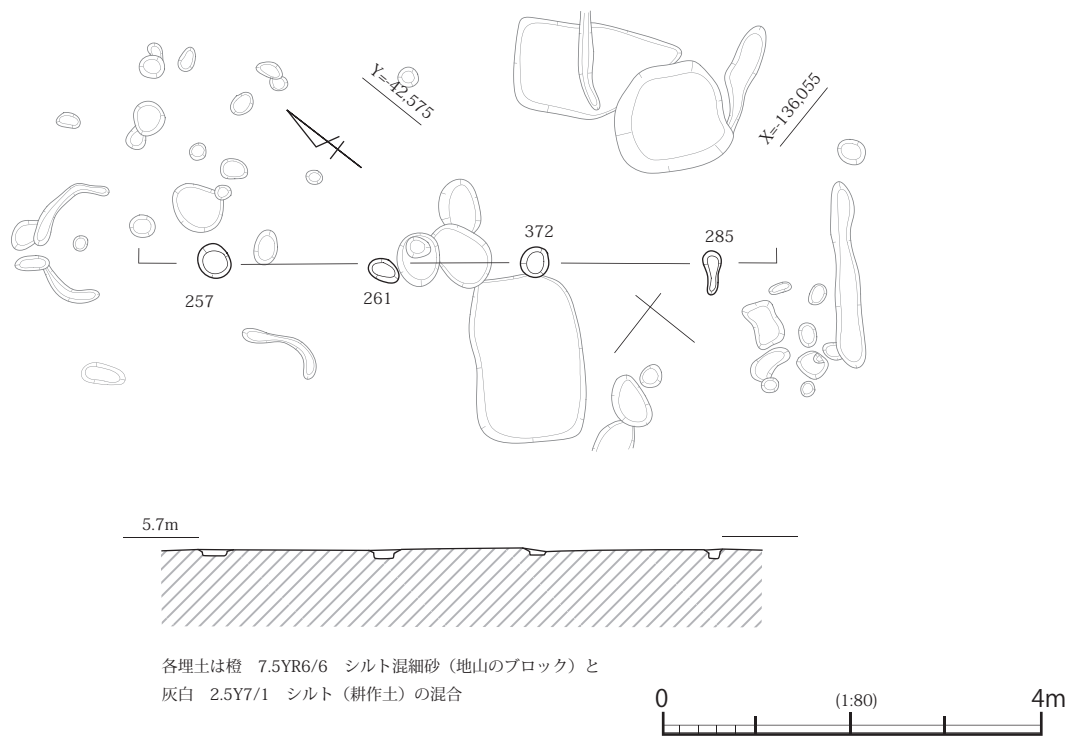


図45 第2地区 第5面 柵列3 平・断面図

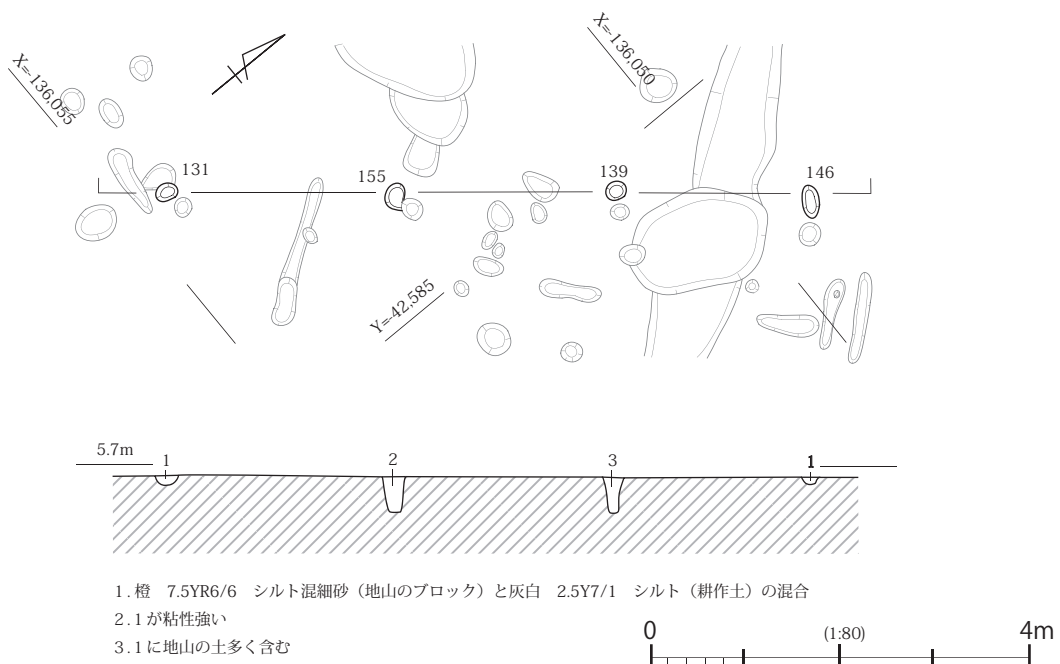


図46 第2地区 第5面 柵列4 平・断面図

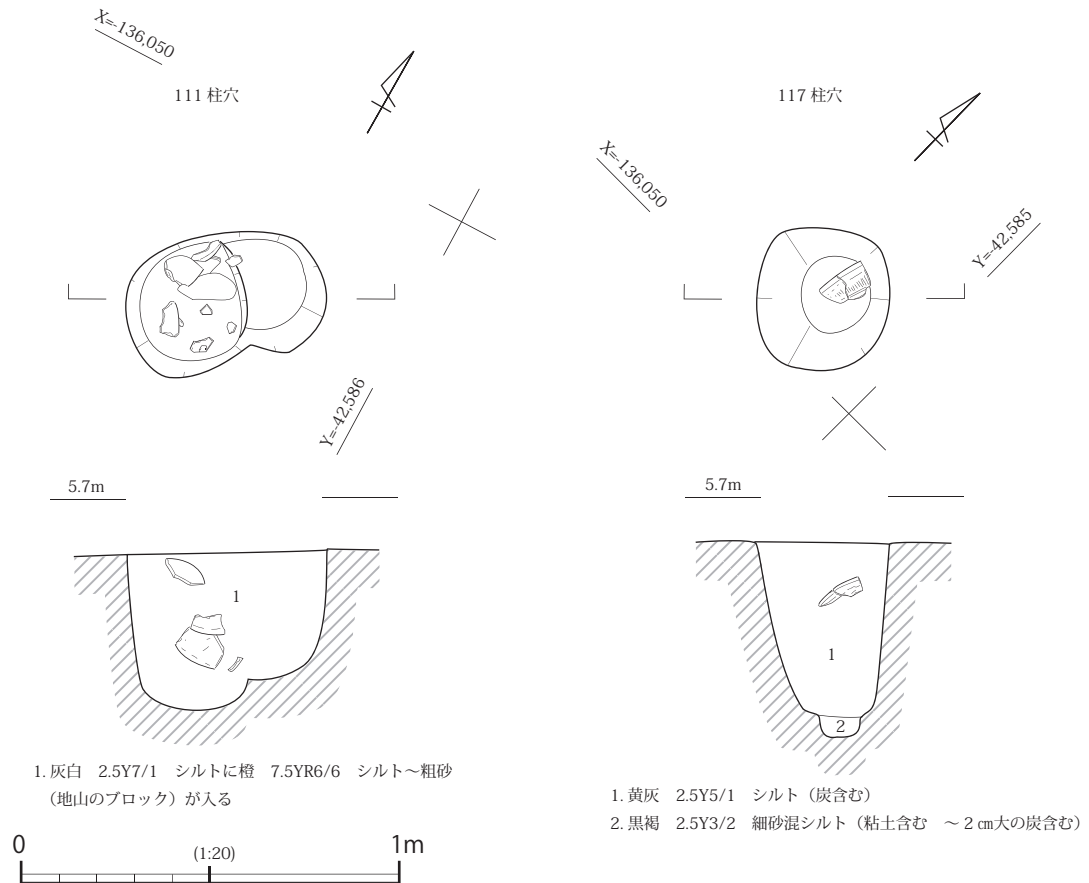


図47 第2地区 第5面 111・117柱穴 平・立面図

### 建物3 (図39・42)

調査区の南端、建物2の北に接する形で位置する。主軸はN-35°-Wをとる。大半が15池により削平を受けているので、詳細な規模は不明だが、柱の並びから桁行3間、梁間3間と考えられる。規模は5.6×5.3mである。柱穴は1.4~2.2m間隔、直径0.3~0.5m、深さ0.3~0.5mを測る。埋土には地山のブロック土と灰白2.5Y7/1シルト（耕作土）が混合したものや褐灰10YR5/1シルト～細砂等が入る。

### 柵列1 (図39・43、図版12)

建物1の北側に接する形でこれとほぼ並行して位置する。主軸はN-57°-Eをとる。4間、長さ7.0mである。柱穴は1.1~2.0m間隔、直径0.2m前後、深さ0.1m前後を測る。埋土は主に地山のブロック土と灰白2.5Y7/1シルト（耕作土）が混合したものが入る。

### 柵列2 (図39・44、図版12)

建物1と重複する形で位置する。同建物との新旧の関係は明らかでない。主軸はN-45°-Eをとる。4間、長さ6.35mである。柱穴は1.3~1.8m間隔、直径0.2m前後、深さ0.1m前後を測る。埋土は柵列1に近似する。

### 柵列3 (図39・45、図版12)

建物1の西に接する。主軸はN-40°-Wをとる。3間、長さ5.3mである。柱穴は1.6~1.8m間隔、直径0.2~0.3m、深さ1m前後を測る。埋土は柵列1に近似する。

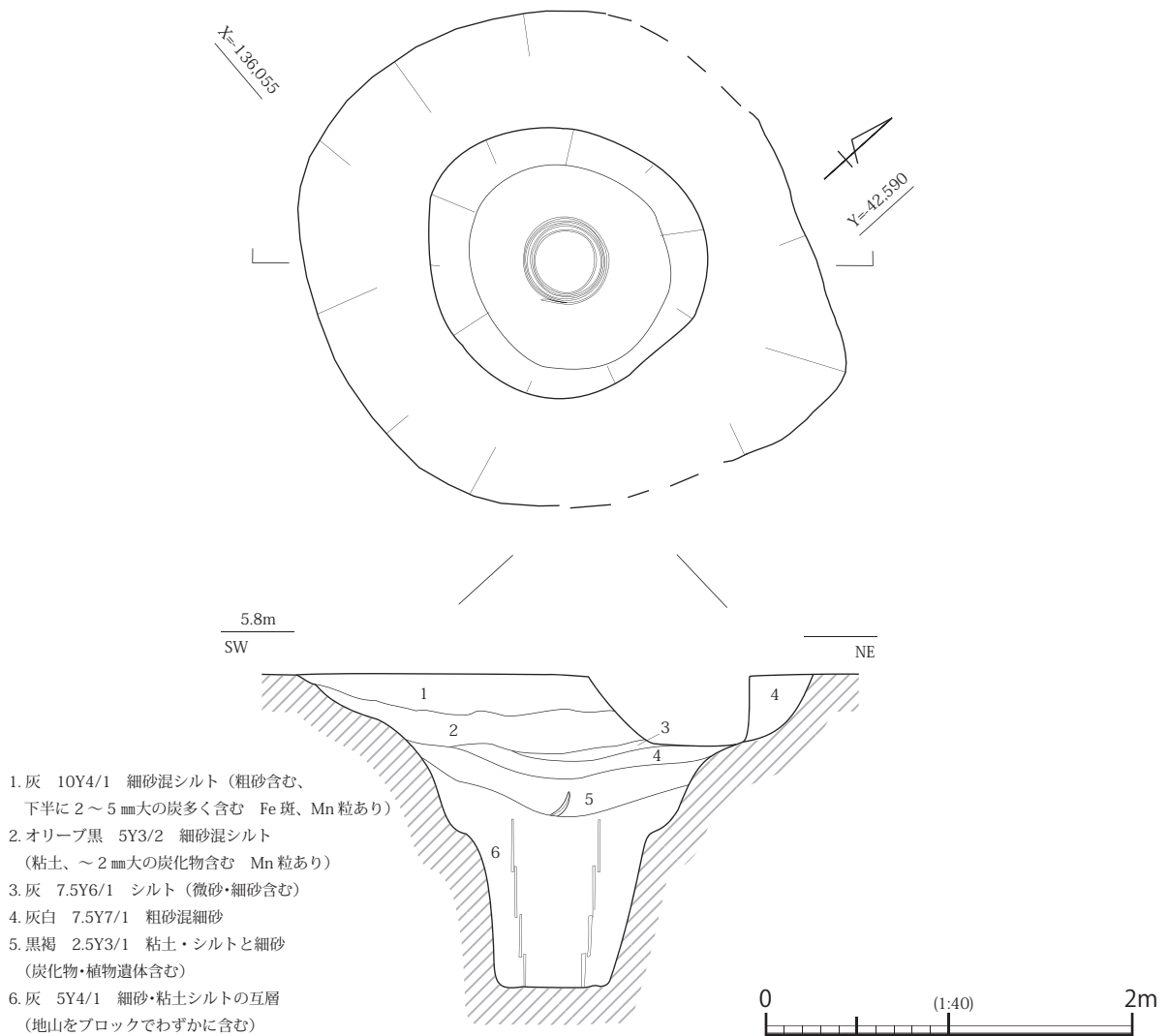


図48 第2地区 第5面 350井戸 平・断面図

#### 柵列4（図39・46）

建物2と重複する形で位置する。同建物との新旧の関係は明らかでない。主軸はN-40°-Eをとる。3間、長さ6.8mである。柱穴は2.0～2.3m間隔、直径0.2m前後、深さ0.1～0.4mを測る。埋土は柵列1に近似する。

#### 117柱穴（図41・47、図版13）

111柱穴の東隣に位置する。長径0.4m、短径0.33m、深さ0.53m、平面は隅円方形を呈する。土師質羽釜片が出土した。

#### 84・85ピット、110土坑（図39）

84ピットは調査区の西端に位置し、平面は楕円形状を呈し、長径0.6m以上、短径0.4m、深さ0.5mを測る。85ピットは84ピットを切っており、平面は楕円形状を呈する。長径0.2m以上、短径0.3m、深さ0.3mを測る。埋土は下層に灰5Y4/1細砂混粘土、上層は地山のブロックと灰白2.5Y7/1シルト（耕作土）の混合したものに、炭を含む。

110土坑は84・85ピットよりも少し東側に位置し、平面が楕円形状を呈し、長径1.6m、短径1.1m、

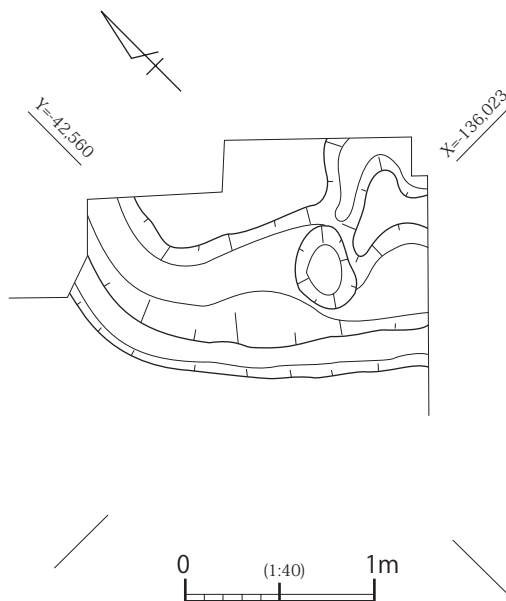


図49 第2地区 第5-2面  
自然流路 平面図

深さ0.1mを測る。埋土は地山のブロックと灰白2.5Y7/1シルト（耕作土）の混合したものである。

121溝は110土坑よりもさらに東側に位置し、細長くのびる。長さ7.9m、幅0.3～0.8m、深さ0.1mを測る。埋土は地山のブロックと灰白2.5Y7/1シルト（耕作土）の混合したものに炭を含む。

### 309・310溝（図39、図版12）

南側は調査区外へのび、北側は15池に削平される。主軸はN-38°-Wをとる。長さ16.0m、深さ0.1m、幅0.2mを測る。埋土は黄灰2.5Y5/1細砂で柵列1等の主要な埋土に近似するが粘性が強い。

310溝はこの309溝に対し「T」の字状にとりつく。西側域のピット群と東側の耕作域を画するかのよう位置にある。

### 40落込み（図39）

309溝の北東約8mの位置にあり、当溝に並行しながら北東方向に落ち込む3段の地形を検出した。埋土は主に橙7.5YR6/6の地山のブロックと黄灰2.5Y5/1細砂に粘土が混じった土が入る。

40落込みをさらに精査したところ、畦畔の痕跡と思われる帯状のわずかな高まりを検出している。

N-35°-Wの方向に走るものが1条、N-60°-Eの方向に走るものが12.5mの間隔で2条、並行に走る。段を有することと合わせ、当地域は、水田耕作に伴う遺構面と考えられる。

### 350井戸（図39・48、図版13）

建物2の西側に位置する。4段の曲物で井戸枠が組まれた350井戸を検出した。下部構造の井戸枠のみが残ったと考えられ、切り込み面に達していない上部構造は不明である。

当井戸は直径2.7×3.1m、深さ1.7mを測る。曲物の直径は48.0～38.4cmであり、下位の曲物ほど径が小さい。埋土には主に灰5Y4/1等灰色系細砂～粘土が入る。井戸内からは粗雑な「て」の字状口縁部を有す土師器皿や初期の瓦器椀が出土した。当調査区の第5面検出の遺構中、やや新しい時期（12世紀初頭）の遺構と考えられる。

### 北端部ピット群（図39、図版12）

北端部に直径0.3m、深さ0.2m前後の320等のピットが集中する所がある。埋土は主に褐灰10YR5/1地山をブロックで含むシルト細砂が入る。

#### （4）第5-2面の遺構（図49）

地山検出時に、調査区の南東隅に水成の堆積層を検出した。これらを除去すると自然流路を検出することができた。

### 自然流路（図49）

自然流路は調査区北端で蛇行し、第1地区へのびており、第1地区の北側で検出された310落込みに接続すると考えられる。流れはN-60°-Wをとり、北側でN-30°-Eへ大きく蛇行する。底面のレベルは2.7m前後を測り、あまり差がない。

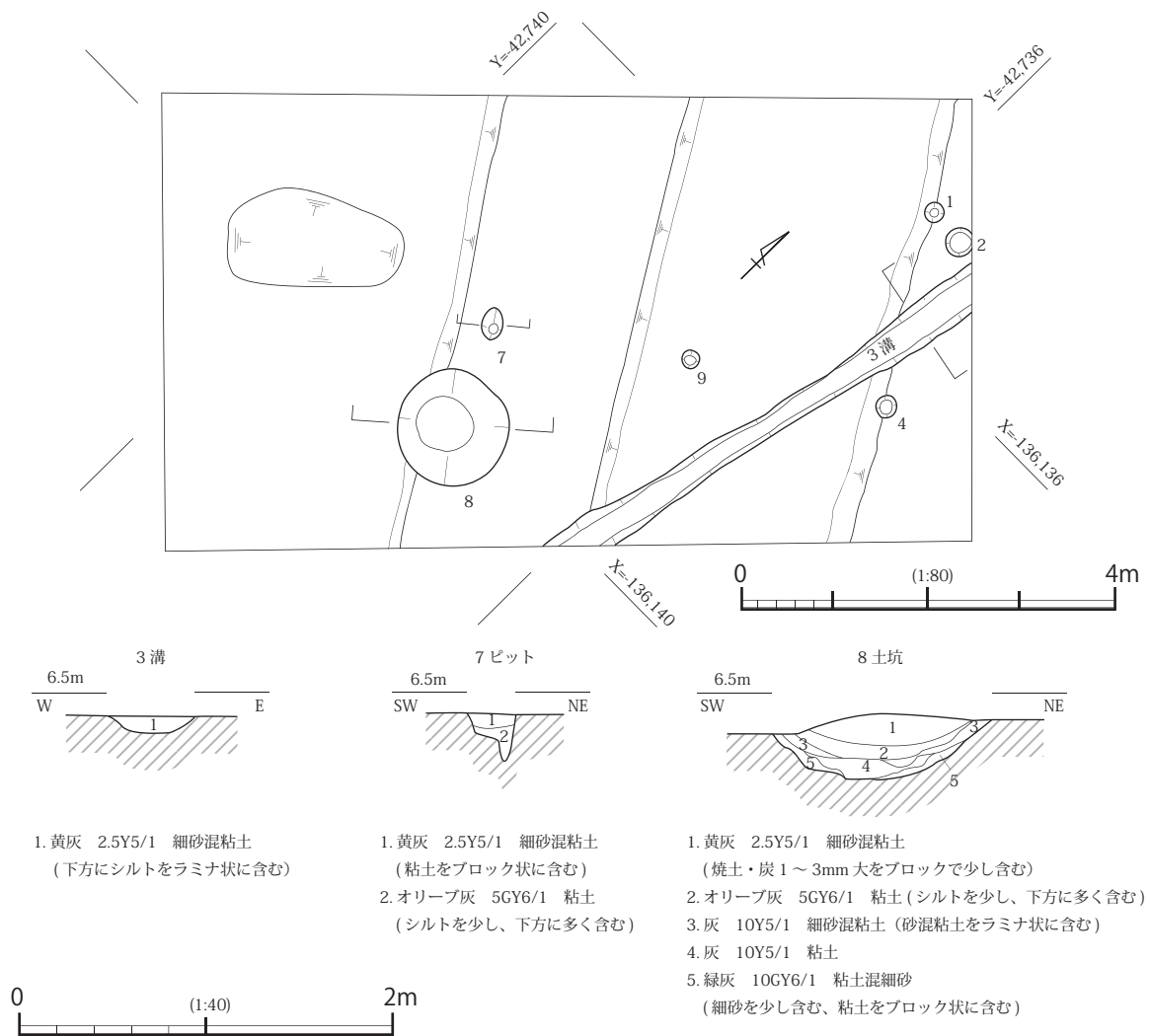


図50 第3地区 第1面 全体図及び 主要遺構 断面図

### 3. 第3地区の調査 (図50、図版14)

#### (1) 遺構面の概要

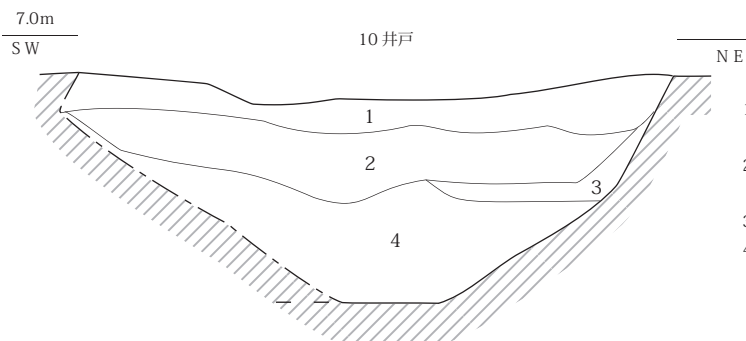
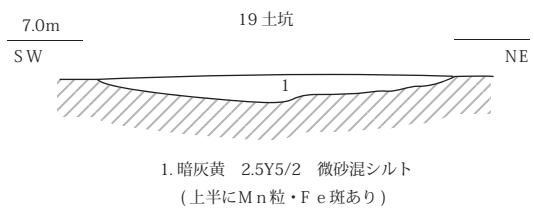
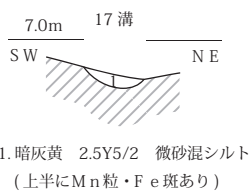
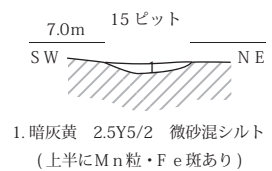
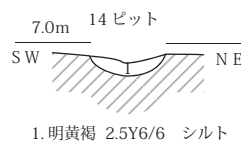
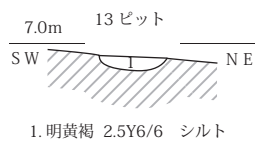
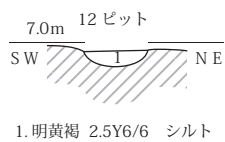
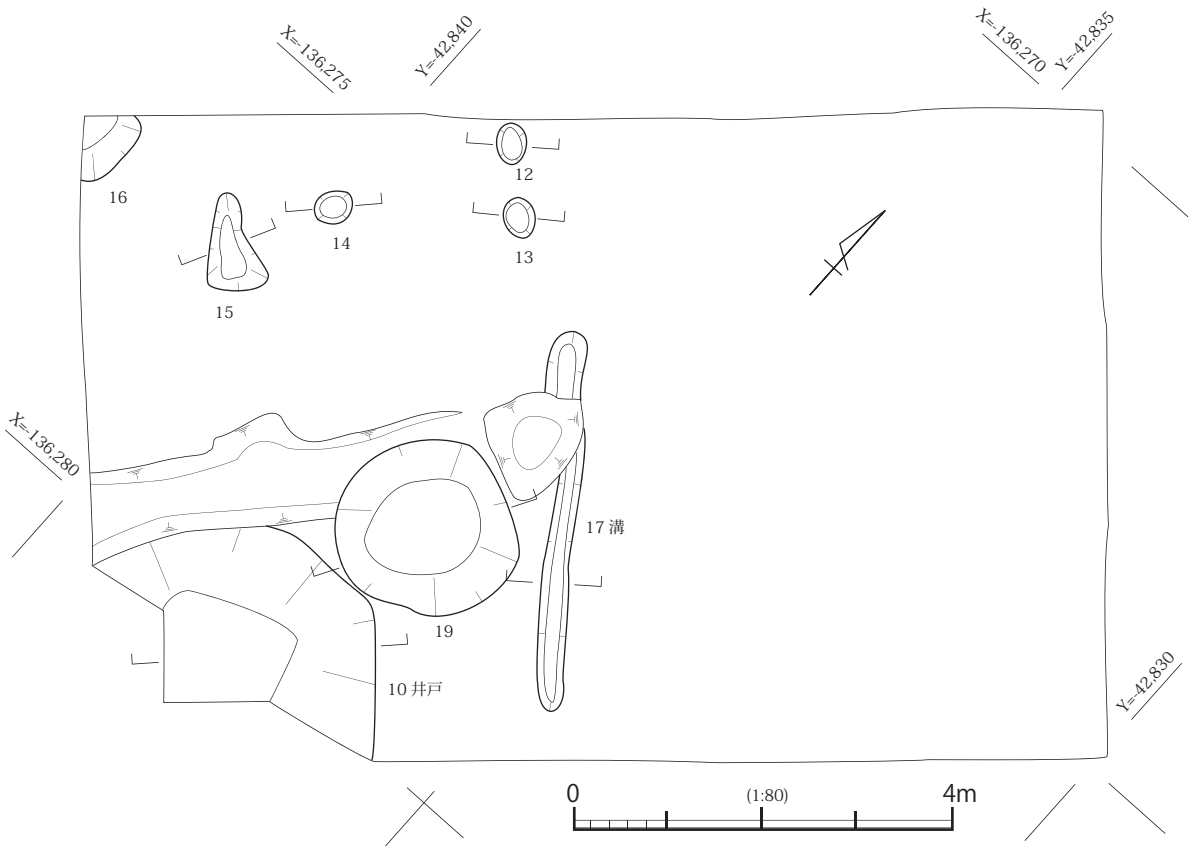
現地表面は標高8.1～8.5mを測る。吹田操車場造成時の盛土と近代の耕作土を除去すると、すぐに地山直上面である第1面があらわれる。標高6.3m前後を測る。遺構面はこの一面のみであり、柱穴と土坑、溝を検出している。

7ピットからは土師器片、黒色土器A類片等、古代の遺物が若干出土しているが、埋土には近代の耕作土と近似するオリーブ灰5GY6/1粘土が入り、遺物の判別だけでは時期を決定し難い。他に検出したピットも同様な埋土である。

### 4. 第4地区の調査 (図51～57、図版14)

#### (1) 遺構面の概要

当調査区の現地表面の標高は7.8～7.9mを測る。第1面、第2面では畝溝、鋤溝痕がN-38°-Wの方向にのびる状況を検出した。第1面が標高7.2m前後、第2面が標高7.1m前後を測る。第3面は標高



1. 暗灰黄 2.5Y5/2 細砂混シルト  
(粗砂含む、全体にMn・Fe斑あり)
2. 黄灰 2.5Y4/1 粘土～細砂 (青灰色の地山塊を含む、全体はブロック状)
3. 灰 7.5Y4/1 粘土シルト (東側ほど砂でラミナあり)
4. オリーブ灰 5GY5/1 細砂混シルト  
(青灰色地山塊、全体はブロック状2より塊状が大きい)

※第4地区地山：明黄褐 10YR6/6 粗砂少混シルト (Mnわずかに含む)



図51 第4地区 第3面 全体図及び 主要遺構 断面図



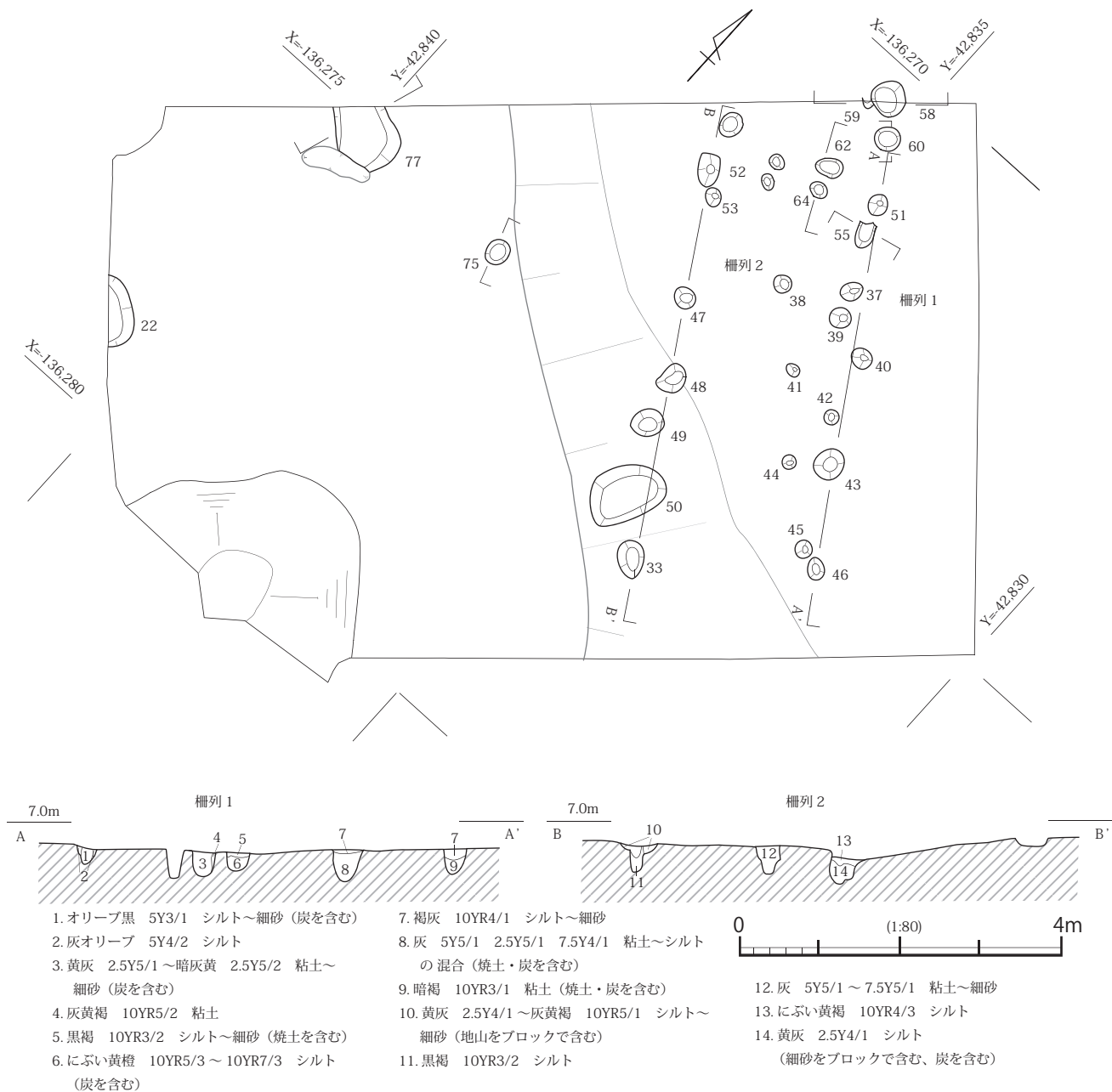


図 52 第 4 地区 第 4 面 全体図及び 柵列 1・2 断面図

6.8m前後を測り、井戸、土坑等を検出している。

第 4 面では 2 列の並行する柵列を検出した。標高は 6.65～6.85m を測る。第 5 面では多数の柱穴と直線にのびる 87 溝を検出した。第 5 面の東隅は盛土にて整地されることにより面が形成されていた。標高 6.45～6.95m を測る。この盛土層を除去後に第 5 - 2 面を検出した。当面では上の 87 溝と並行して 88 溝を検出した。

(2) 第 3 面の遺構 (図 51、図版 14)

12～15ピット (図 51、図版 14)

当面で検出したピットは総じて浅く、深さは 0.1m 程である。埋土には明黄褐 2.5Y6/6 地山をブロックで含むシルト等が入る。明確に建物と認識できる柱痕はなかった。

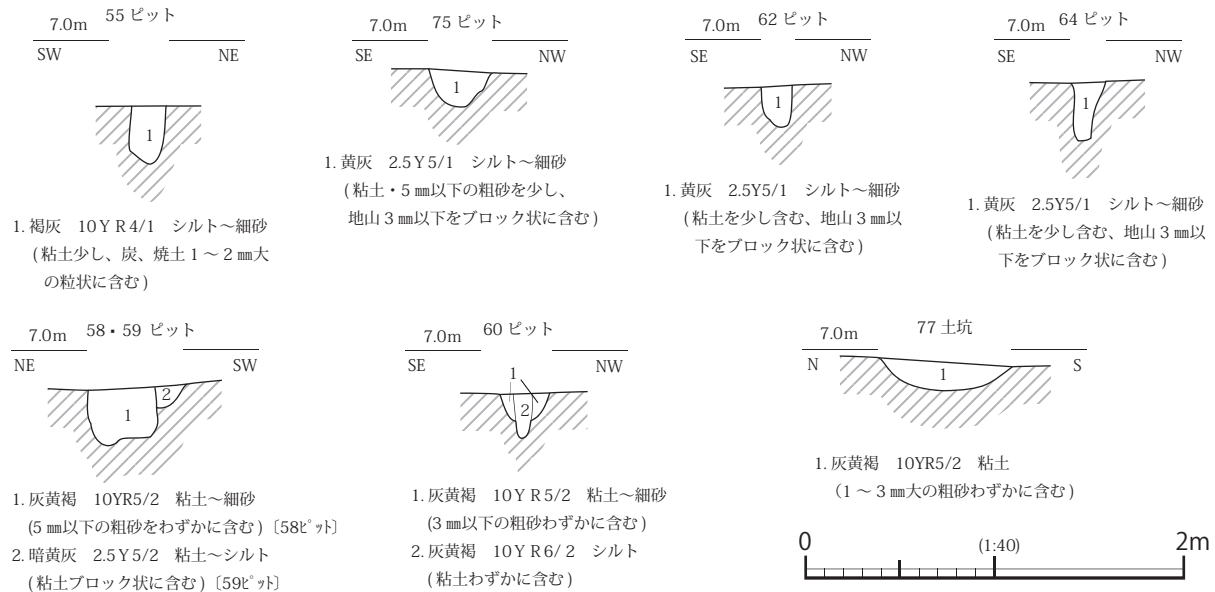


図53 第4地区 第4面 主要遺構 断面図

#### 17溝 (図51、図版14)

長さ4.0m、幅0.3m程、深さ0.1m程の溝である。鋤溝痕と思われるが、当面で検出された耕作痕はこれだけである。

#### 19土坑 (図51、図版14)

ピットと同様、深さ0.15mと浅く、直径2.0mの土坑である。地山の土をブロックで含むシルトが入る。

#### 10井戸 (図51、図版14)

調査区の南端で検出した素掘りの井戸である。南半が調査区外のため、全容は不明であるが、直径3.3m以上、深さ1.2mを測る。断面は逆「ハ」の字状を呈し、開口部が広がる。埋土には、ラミナが発達し、暗黒色系の粘土～シルトが堆積する。

#### (3) 第4面の遺構 (図53、図版15)

##### 柵列1 (図52、図版15)

N-32°-Wをとる。長さ4.6mである。柱穴は0.4～1.1m間隔、直径0.3m前後、深さ0.3～0.5mを測る。埋土は多様であるが、主に灰黄褐色系のシルト～細砂が入る。

##### 柵列2 (図52、図版15)

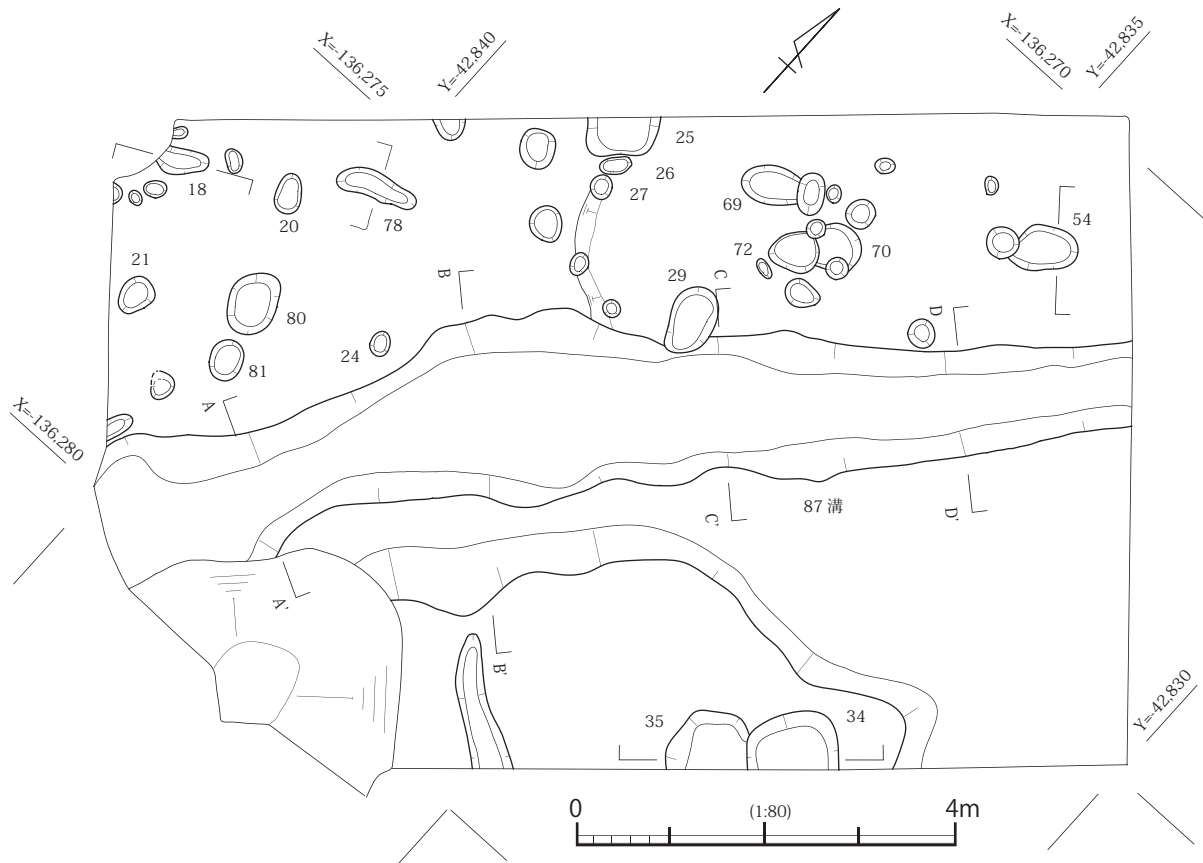
N-32°-Wをとる。柵列1と並行している。長さ5.0mである。柱穴は直径0.3m前後、深さ0.3m前後を測る。埋土は柵列1と近似し、灰黄褐色系のシルト～細砂が入るものが多い。

##### ピット群 (図52・53、図版15)

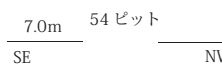
柵列の他にも多数のピットを検出しており、当地には掘立柱建物が存在したと思われるが、調査区が狭いこともあり、検出できていない。また、柵列1、2も調査区外へのびる可能性があり、掘立柱建物の一部を構成していた可能性も考えられる。

##### 45ピット (図52、図版15)

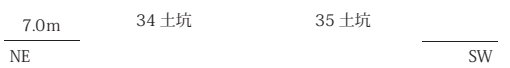
柵列1の46ピット横に位置し、平面が楕円形を呈し、長径0.3m、短径0.2m、深さ0.2mを測る。埋



78 土坑  
1. 褐灰 10YR4/2 シルト  
(細砂を含む、炭、焼土 1mm 以下をブロック状に含む)



54 ピット  
1. 褐灰 10Y R4/1 シルト～細砂  
(粘土少し、炭、焼土 1～2mm 大で粒状に含む)



34 土坑 35 土坑  
1. 灰黄褐 10Y R5/2 シルト～細砂 (シルト・細砂、5mm 以下の粗砂わずかに含む 炭、焼土を 3mm 以下のブロック状で上方にわずかに含む)  
2. にぶい黄褐 10Y R5/3 細～粗砂 (細砂多く、粗砂少し、焼土 3mm 以下のブロック状で上方にわずかに含む)



18 土坑  
1. 灰黄 2.5Y6/2 シルト～細砂



図 54 第 4 地区 第 5 面 全体図及び 主要遺構 断面図

土には下層は黄灰2.5Y4/1シルトに細砂ブロックがわずかと炭粒を含む。上層は褐灰10Y R4/1シルトに細砂がわずかと炭粒を含む。

(4) 第 5 面の遺構 (図54～56、図版15)

87溝 (図54・55、図版15)

当溝は幅0.9～2.0m、深さ0.5m、長さ11.0mを測り、遺構の両端とも調査区外に続く溝である。主

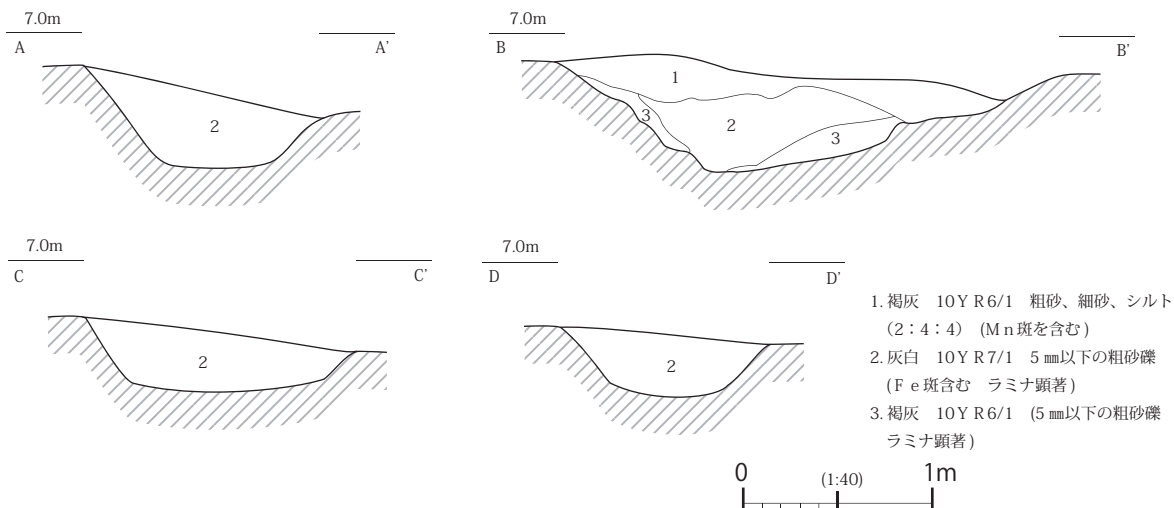


図55 第4地区 第5面 87溝 断面図

軸はN-40°-Eをとる。埋土はラミナの発達したシルト～砂礫が堆積する。下部の88溝と重複し、当溝の改修により作られたと考えられる。

#### 26ピット (図54・56、図版15)

26ピットの平面は不定形であり、大きさは0.3×0.2m、深さ0.2mを測る。白鳳時代の素弁蓮華文軒丸瓦の瓦当部分の裏側が水平に据え置かれ、根石として転用されていた。

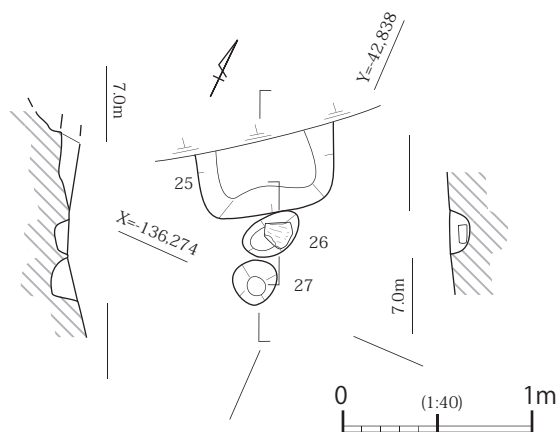


図56 第4地区 第5面 25土坑、26・27ピット 平・断面図

#### 34・35土坑 (図54)

いずれも調査区外へのびる。平面が隅円方形と思われる土坑である。34土坑は35土坑を切る。34土坑は長辺0.6m以上と思われる。短辺1.0m、深さ0.1～0.3mを測る。35土坑は長辺0.6～0.8m以上、短辺0.8～1.0m、深さ0.1～0.3mを測る。

(5) 第5-2面の遺構 (図57、図版15)

#### 88溝 (図57、図版15)

当溝は長さ8.0m以上、幅0.7～1.2m、深さ0.6mを測る。上面の87溝と同様、主軸はN-40°-Eをとる。南端は上面の10井戸に攪乱されているが、両端共に調査区外へのびると思われる。埋土はラミナの発達した粗砂礫であり、汜濫等によって一挙に埋まったものと思われる。

### 5. 第5地区の調査

#### (1) 遺構面の概要

当調査区の現地表面は標高7.8m前後を測る。吹田操車場造成時の盛土と近代の耕作土の下には中世～近世にいたる耕作土が堆積する。これらの堆積土層を除去した各面から鋤溝等の耕作に伴う遺構を検出した。基本層序の第3層～第4層は削平されており、第2層を除去した面が基本層序の第4面に相当すると考えられる。第4面、第5面からは溝、自然流路が見つかった。第4面は標高6.8m前後、

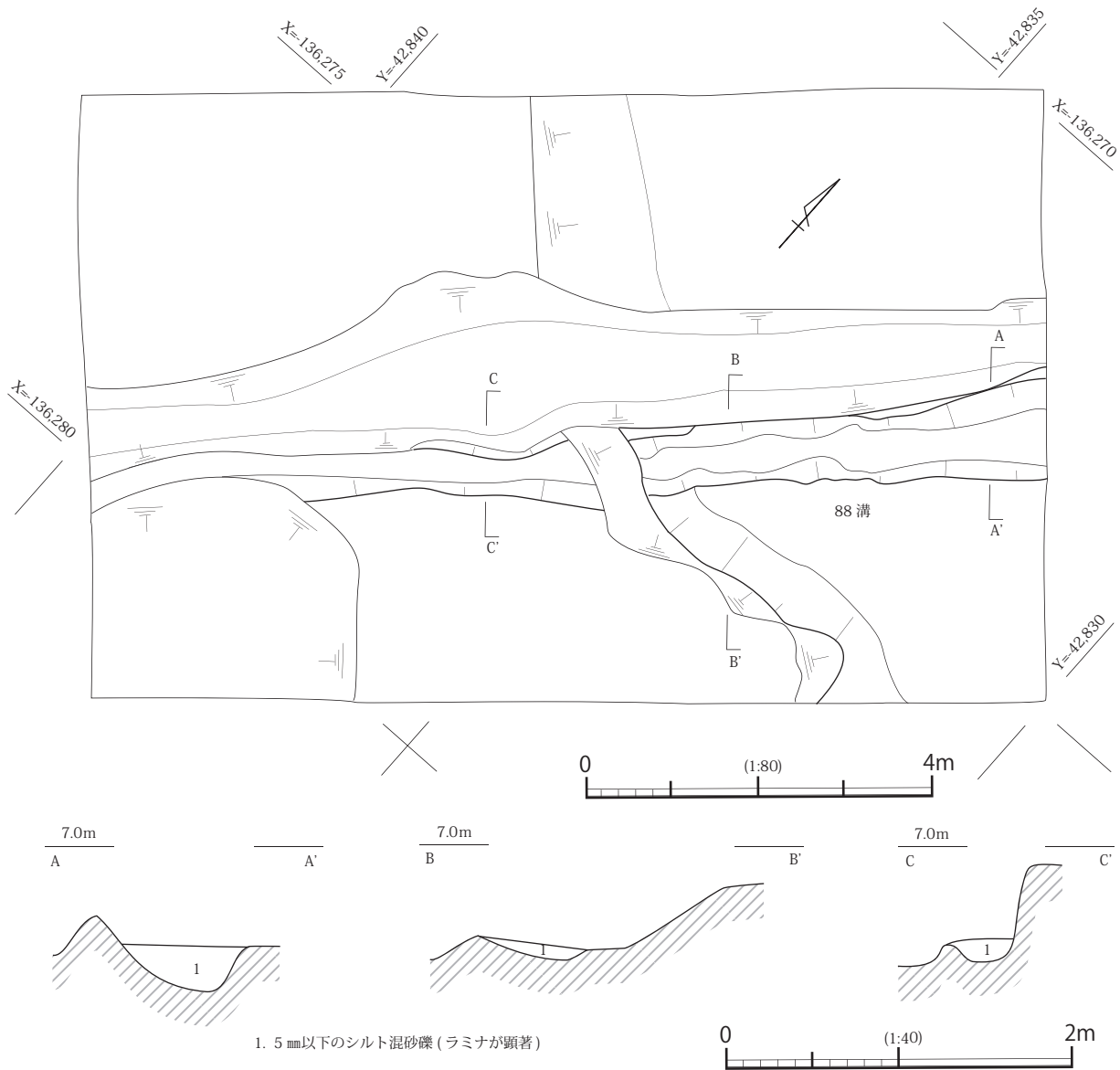


図57 第4地区 第5-2面 全体図及び 88溝 断面図

第5面は標高6.5~6.7mを測る。これらの遺構からは遺物が出土せず、詳細な時期は不明である。

(2) 第4面の遺構 (図58、図版16)

### 3・4流路 (図58、図版16)

調査区の東側に位置する。いずれも自然流路である。4流路が自然に埋没する過程で3流路へ縮小したと思われる。3流路は長さ7.5m、幅4.0m、深さ0.45mを測る。直線状に走り、主軸はN-35°-Wをとる。4流路は幅5m以上、深さ0.6m、主軸は北側でN-30°-WからN-45°-Eへと曲がる。両流路とも、両端は調査区外へのびる。

(3) 第5面の遺構 (図59、図版16)

### 8流路 (図59、図版16)

西から蛇行しながら南東方向にのび、調査区外へ抜ける自然流路である。西側の肩を検出した。長さ7.0m、幅4.5m以上、深さ2.3mを測る。ラミナの発達した粗砂礫で埋まる。

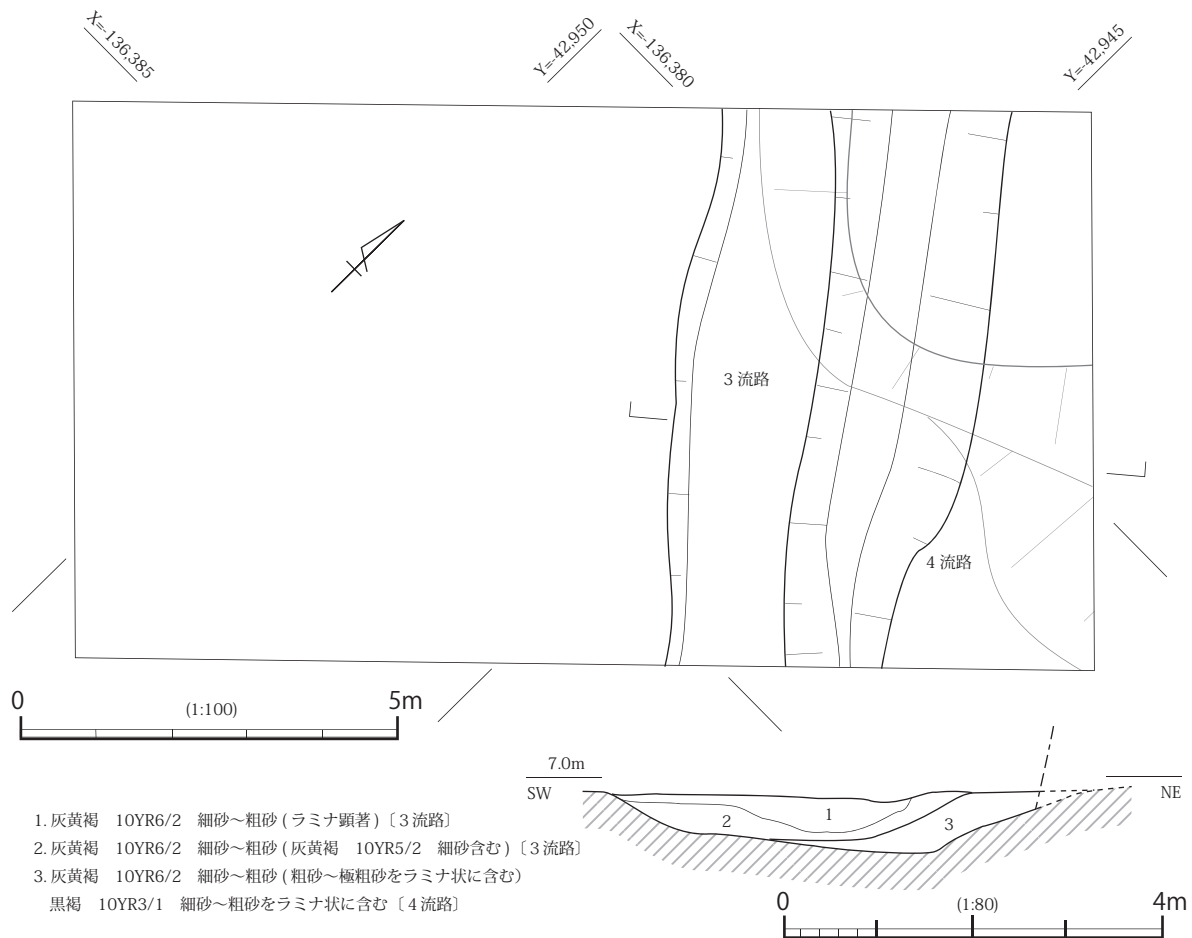


図 58 第 5 地区 第 4 面 全体図及び 3・4 流路 断面図

## 5 溝 (図59、図版16)

両端共に調査区外へのびる。残存長6.0m、幅1.0m程、深さ0.8~1.2mを測る。断面は「U」の字状を呈する。人為的に掘削された溝と考えられる。主軸はN-40°-Wをとる。

## 6. 第 6 地区の調査

### (1) 遺構面の概要

当調査区の現地表面は標高7.6~8.1mを測る。操車場造成時の盛土を機械掘削にて除去したところ、調査区南東の一部を除く大半において、いわゆる地山層である黄褐色粘土~シルト層まで達した。包含層は、調査区の南東側に黒褐色シルト（基本層序第 5 層）が部分的に残存するだけであった。

検出した遺構の埋土は基本層序に一致する土質であり、分類することが可能であったので、これらの全ての層を除去した後の面を第 1 面とし、近世~古墳時代までの遺構を当面より検出した。ただし遺構は、隣接する他の調査区で確認される層序と埋土が近似しているため、埋土によるおおよその分類が可能と考えた。そこで、灰色のシルトを含む粗砂を埋土に持つ遺構を近世、基本層序第 3 層と近似する黄灰色シルトを含む細砂~粗砂の埋土をもつ遺構を中世、基本層序第 5 層に近似する黒褐色シルトの埋土をもつ遺構を古代~古墳時代の所産と考える。また、第 1 面で検出した全ての遺構より下に位置する 375 流路を、第 2 面に帰属する遺構として別に報告する。



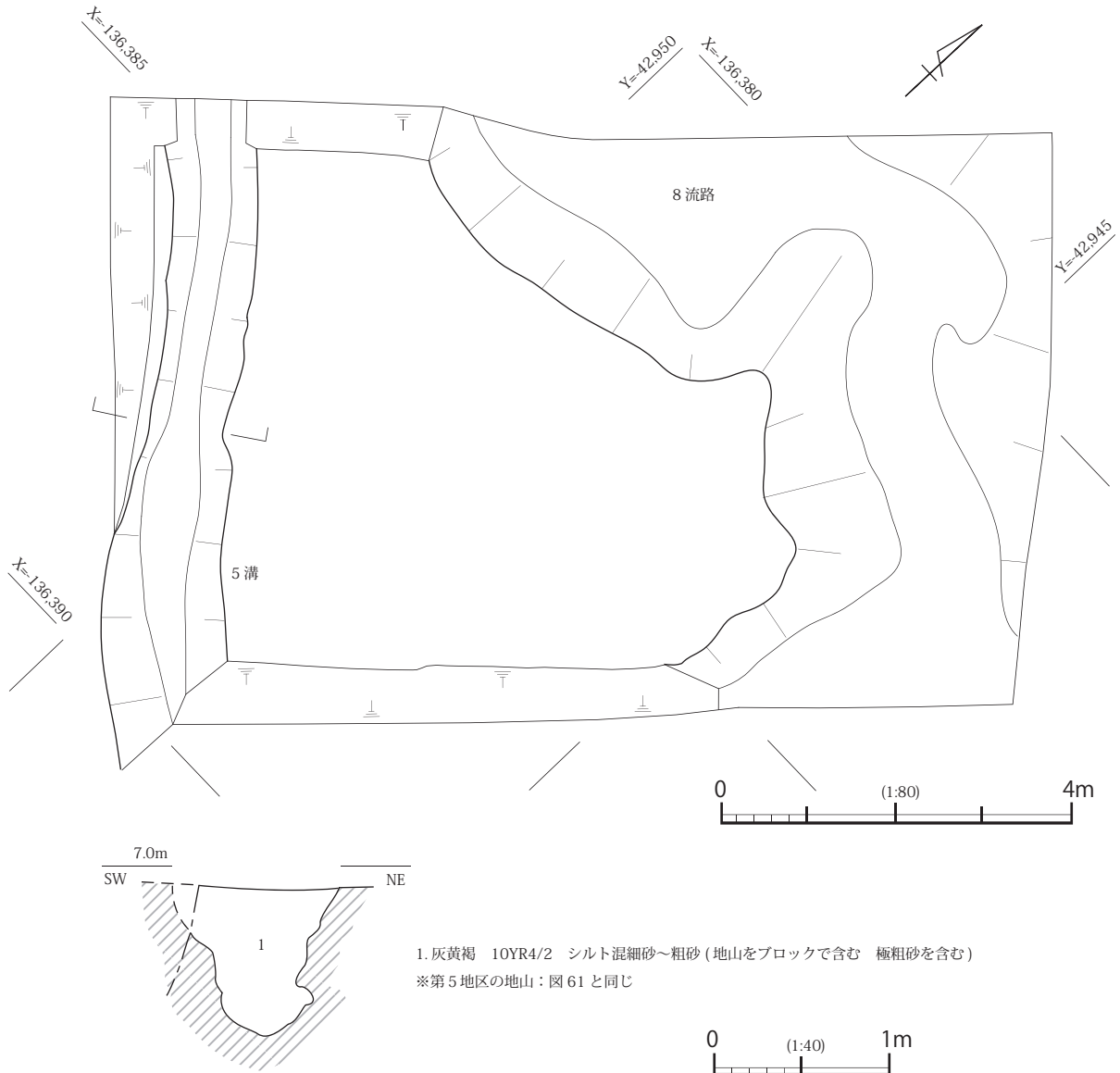


図59 第5地区 第5面 全体図及び 5溝 断面図

遺構は、南側から東側に集中しているように見えるが、これは、北西側が操車場の造成時に特に著しく削平を受けたためであろう。吹田操車場遺跡は、千里丘陵の裾野に位置するために、北西側が削平の影響を大きく受けており、南東側に包含層が残存していたことを考えあわせると、北西から南東に下降する地形が復元される。北西側の削平を差し引いたとしても、北西から南東への第1面での高低差は大きく0.65mに及んでいる。

(2) 第1面の遺構 (図60・61、図版17～20)

#### 中～近世の遺構

中世の遺構としては、井戸、池、耕作溝、ピット、土坑を検出した。全体的に遺構の残存状態は不良であるが、建物に復元される柱穴等は検出されず、井戸、池等と耕作溝と考えられる遺構を多数検出したことから、中世段階では耕作地が広がっていたと考える。井戸、池といった貯水施設は、北側にかたまって検出された。また、南側には耕作溝の他、何に使用したかは不明であるが、重複する土坑群を検

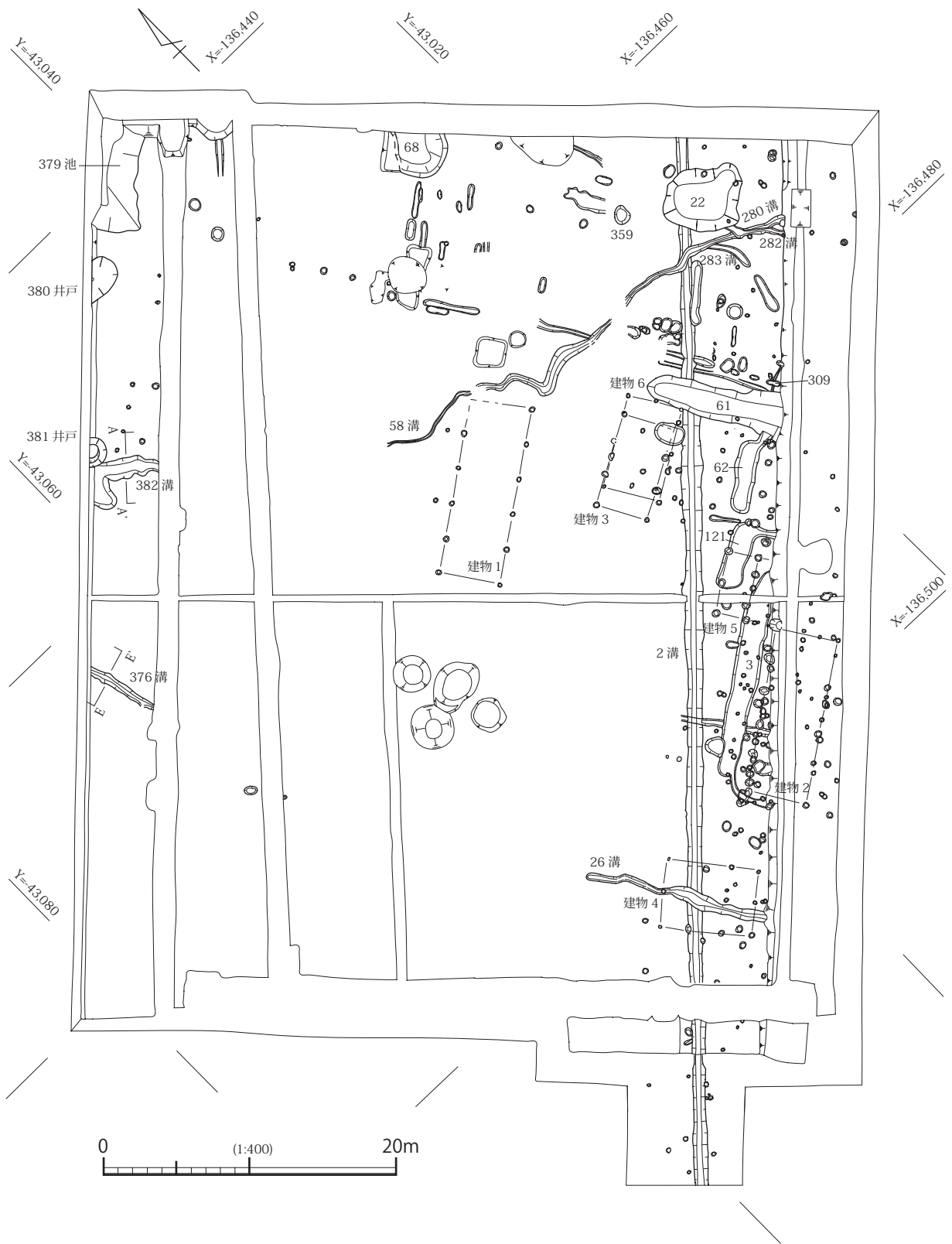
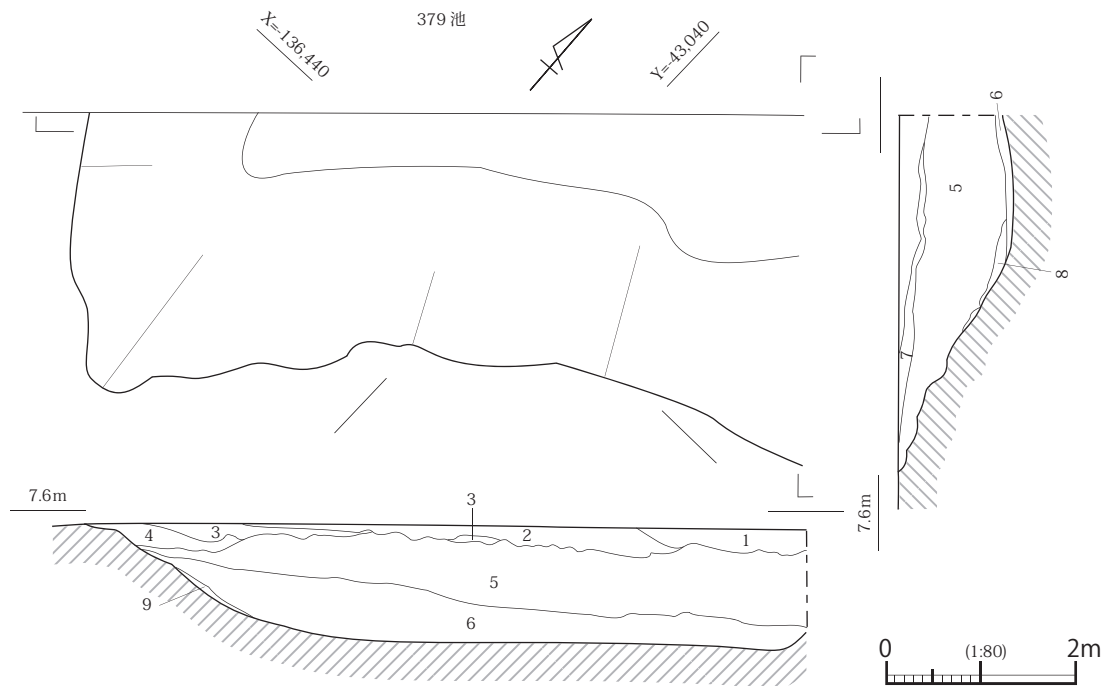
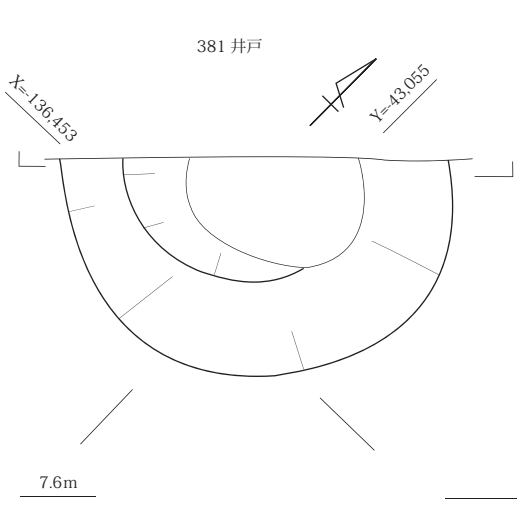


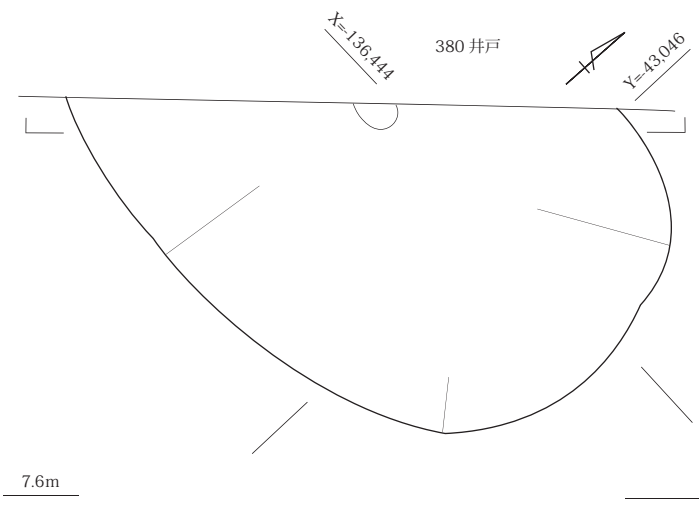
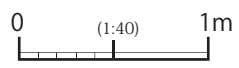
图 60 第 6 地区 第 1 面 全体图



- 1. 灰黄褐 10YR5/2 細砂混シルト (地山をブロックで含む)
  - 2. にぶい黄褐 10YR5/4 細砂～極粗砂
  - 3. 暗灰黄 2.5Y5/2 シルト混含む細砂 (粗砂を少し含む Fe沈着)
  - 4. 灰黄褐 10YR5/2 細砂混シルト (粗砂を含む)
  - 5. 灰 10Y4/1 粘土 (細砂のラミナ、炭を小片で含む)
  - 6. 灰 10Y5/1 粘土 (粗砂をブロックで含む)
  - 7. オリーブ褐 2.5Y4/3 シルト混細砂～粗砂 (5の小ブロックを少し含む)
  - 8. 黄褐 2.5Y5/3 細砂～粗砂 (粘土をブロックで含む)
  - 9. 暗灰黄 2.5Y5/2 細砂～粗砂 (粘土をブロックで含む)
- ※第6地区の地山：明黄褐 10YR7/6 シルト混細砂



- 1. 灰黄褐 10YR5/2 (粘土をブロックで2、10cm大の黒褐 10YR3/1 シルト混細砂をブロックで少し含む)
- 2. 灰 10Y5/1 細砂～粗砂多混粘土～シルト
- 3. 灰 10Y5/1 細砂～粗砂多混粘土



- 1. にぶい黄橙 10YR6/3 細砂～粗砂 (シルトをブロックで多く含む)
- 2. 灰黄褐 10YR5/2 シルト混細砂～粗砂 (黒褐 10YR3/1 シルト混細砂のブロックを少し含む)
- 3. 灰黄褐 10YR4/2 粘土～シルト (細砂、地山のブロック、炭片を含む)
- 4. 灰 10Y5/1 粘土～細砂 (粗砂をブロックで多く含む)
- 5. 明黄褐 10YR6/ 細砂～粗砂 (粘土をブロックで含む) - 肩のくずれた土
- 6. 灰 10Y4/1 細砂～粗砂多混粘土

図61 第6地区 第1面 379池、380・381井戸 平・断面図

出した。耕作溝には、N-35°-W方向を軸にして南北にのびるものと東西に走るものがあった。これは、当調査地周辺における現行の条里型地割が、N-33°-W方向にふっている方向と近似する。

近世の遺構としては、耕作溝を調査区の南東部を中心に若干検出した。また、調査区の中央部では攪乱とした近世後半～近代の井戸を数基発見した。

### 379池（図60・61、図版20）

調査区の北端に位置している。調査区外にのびているため、全体の形状は不明だが、検出した平面は長軸約7.6m、短軸約3.0mの不整な長方形を呈している。深さは検出面から約1.2mで、池の肩部はなだらかに傾斜し、底部は平坦に整えられている。

埋土は、滞水堆積と考えられるグライ化した粗砂をブロックで含む粘土層が、底から1.0mほど堆積し、その上部に攪拌されたシルト～粗砂が堆積していた。土砂の自然堆積によって機能が失われたため、埋め戻しされて、整地されたと考えられる。

遺物は、須恵質の甕、土師質の甕等があるが、いずれも小片であり、明確な時期は不明である。

### 380井戸（図60・61）

調査区の北端に位置する素掘りの井戸である。全容は明らかではないが、長径3.0m以上、短径2.0mの不整な楕円形を呈し、断面は播鉢状である。底面は青灰色粘土～シルトの湧水層に及んでいる。滞水堆積と考えられる粘土質の埋土が0.5mほど堆積し、上部はブロック土によって埋められている。

### 381井戸（図60・61）

調査区の北西側に位置する素掘りの井戸である。北西部分が調査区外に出ているため、全体は不明だが、平面は径約2.0mの不整円形を呈するものと考えられる。深さは、検出面から約0.45mで、底面は青灰色粘土～シルトの湧水層に及んでいる。

最下部の埋土に粘土質の滞水堆積がみられるが、その上部にはシルトのブロックが顕著に確認できるので、比較的短期間で人為的に埋め戻されたと推測される。

遺物は、瓦器、東播系須恵器の鉢、須恵質甕等、中世前半の遺物が出土するが、いずれも小片のため、明確な時期は不明である。

### 古代～古墳時代の遺構（図60・62～71、図版17～19）

当該期の遺構としては、主に掘立柱建物、溝、土坑、ピット等を検出した。特に南側で遺構が密に存在していた。埋土は黒褐色系のシルトが入るものが多い。掘立柱建物を構成する柱穴の中には直径が0.5m、深さ0.7mを超えるものもあった。掘立柱建物に重複してピットが検出されたことから、その全てを復元できなかったが、建て替えが行われていたことが推測される。

土坑は3mを超える大型のものもあり、焼土や炭層を含むものもあった。黒色土器椀、土師器皿・高台付杯、緑釉陶器椀、土師質羽釜等が出土した。

当時期に属する溝、建物等多くの遺構群はN-35°-E方向を主軸としているが、それとは方向を異にする真直ぐにのびる溝を検出した。2溝は重複する全ての遺構に切られるため、第1面の遺構では最も古いと考える。

### 建物1（図60・62・63、図版17・18）

調査区中央部の南よりに位置する。主軸はN-35°-E方向をとる。12.2×4.2mの桁行5間、梁間1間である。建物の柱穴は間隔が、桁行2.4m前後、梁間4.2m間隔、直径が0.25～0.36m、深さ0.12～0.3mを測る。埋土は褐灰7.5YR5/1粗砂混シルト等が入る。

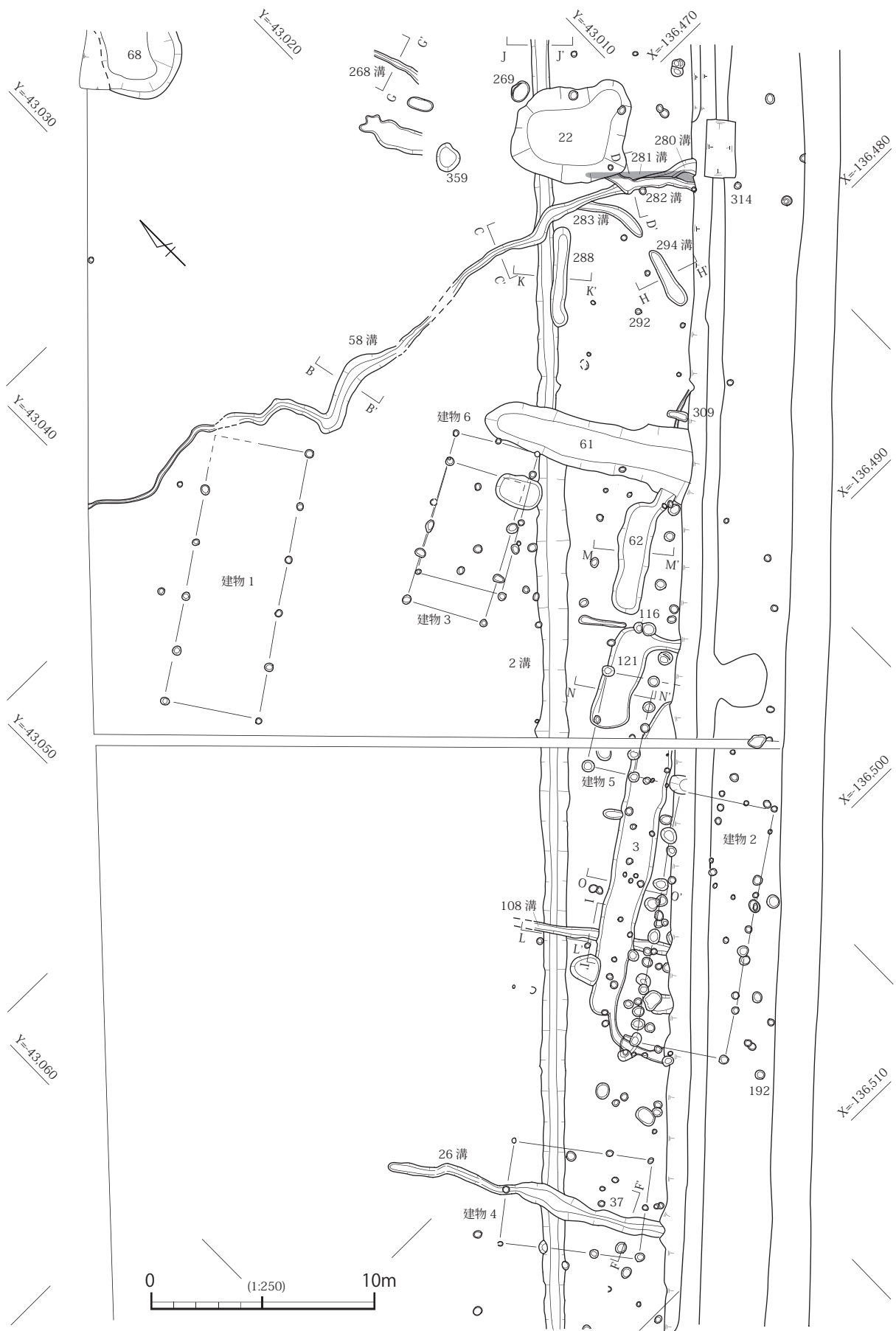


图 62 第 6 地区 第 1 面 南侧 遺構平面図

建物1の北西側にある20、21柱穴はそれらを結んだ線は主軸と並行し、同建物に属すると考えられるが性格は不明である。20柱穴が直径0.2m、深さ0.05m、21柱穴が直径0.24m、深さは、0.06mを測る。

#### 建物2 (図60・62・64、図版17・18)

建物1の南に位置し、同建物と主軸・規模が近似する。建物の主軸はN-35°-Eをとる。規模は11.4×4.2mの桁行5間、梁間1間である。主軸の西側柱穴は2.2~2.4m間隔であるが、梁間の1間の間隔が長く、棟持柱部分が削平されている可能性が考えられる。建物の柱穴は直径0.3~0.8m、0.6m前後が多い。深さは相対的に桁行の南側が浅い。埋土は主として、灰褐色系粘土~シルトと黄褐2.5Y5/4粘土~シルト(地山の2次堆積土)が混合する。10世紀頃の遺構と考える。

#### 192ピット (図62)

建物2の191柱穴の横に位置し、平面が円形状を呈し、直径0.4m、深さ0.1mを測る。

#### 建物3 (図60・62・65、図版17)

建物1の約5m南東側に位置する。建物の主軸はN-30°-Eをとる。規模は6.5×3.6mの桁行3間、梁間1間である。ただし、1間の間隔が長く、棟持柱部分が削平された可能性が考えられる。建物の柱穴は直径0.3~0.5m、深さは0.2~0.4mを測る。埋土は黒褐10YR3/1シルト混細砂~褐灰10YR6/1細砂~粗砂、黄褐2.5Y5/4細砂混粘土~シルト(地山の2次堆積土)等、多様である。建物6と重複して検出した建物である。

#### 建物6 (図60・62・65、図版17)

建物の主軸はN-30°-Eをとる。規模は6.6×3.8m、桁行3間、梁間2間である。建物の柱穴は直径0.2~0.6mを測り、0.2~0.3mが多い。柱穴の深さは0.1~0.4mを測るが、0.2m前後の浅いものが多い。埋土は黒褐10YR3/1粘土~シルト等が入る。

#### 建物4 (図60・62・66)

調査区の南端に位置する。建物の主軸はN-37°-Wをとる。建物の規模は6.3×4.6m、桁行3間、梁間2間である。柱穴は直径0.2~0.5mであり、0.3m前後が多い。柱穴の深さは0.1~0.4mであり、0.3m前後が多い。埋土には褐灰10YR4/1シルト混細砂や黄褐2.5Y5/4細砂混粘土~シルト(地山の2次堆積土)等が入る。11世紀頃の遺構と考える。

#### 37ピット (図62・66)

建物4の29ピットと45ピットのほぼ真ん中、40ピットと354ピットを結ぶ延長線上に位置する。平面が円形状を呈し、直径0.3m、深さ0.3mを測る。埋土の下層は黄褐2.5Y5/4細砂混じり粘土~シルト(地山のブロックが細かくなって土壌化したもの)に上層の小ブロックを含む。埋土の上層は黒褐10YR3/1シルト混細砂に炭の小片を少量含む。建物4の間仕切りとしての可能性を考える。

#### 建物5 (図60・62・67、図版18)

建物2の北側に約2m離れて位置する。削平により建物の北側のみが検出され、南側へのびると思われる。建物の主軸はN-33°-Wをとる。規模は桁行が2間以上で2m以上あり、梁間は2間の4.3mを測る。総柱建物の可能性がある。建物の柱穴は直径0.5m前後であり、深さは0.2~0.5mであるが、0.4~0.5mが多い。埋土には黒褐10YR3/1~褐灰10YR4/1地山の土を少し含むシルト混細砂等が入る。

#### 314ピット (図62)

調査区の東端に位置する。平面が円形状を呈し、直径0.3m、深さ0.1mを測る。埋土は黄褐2.5Y5/4細砂混粘土~シルト(地山のブロックが細かくなって土壌化したもの)が入る。





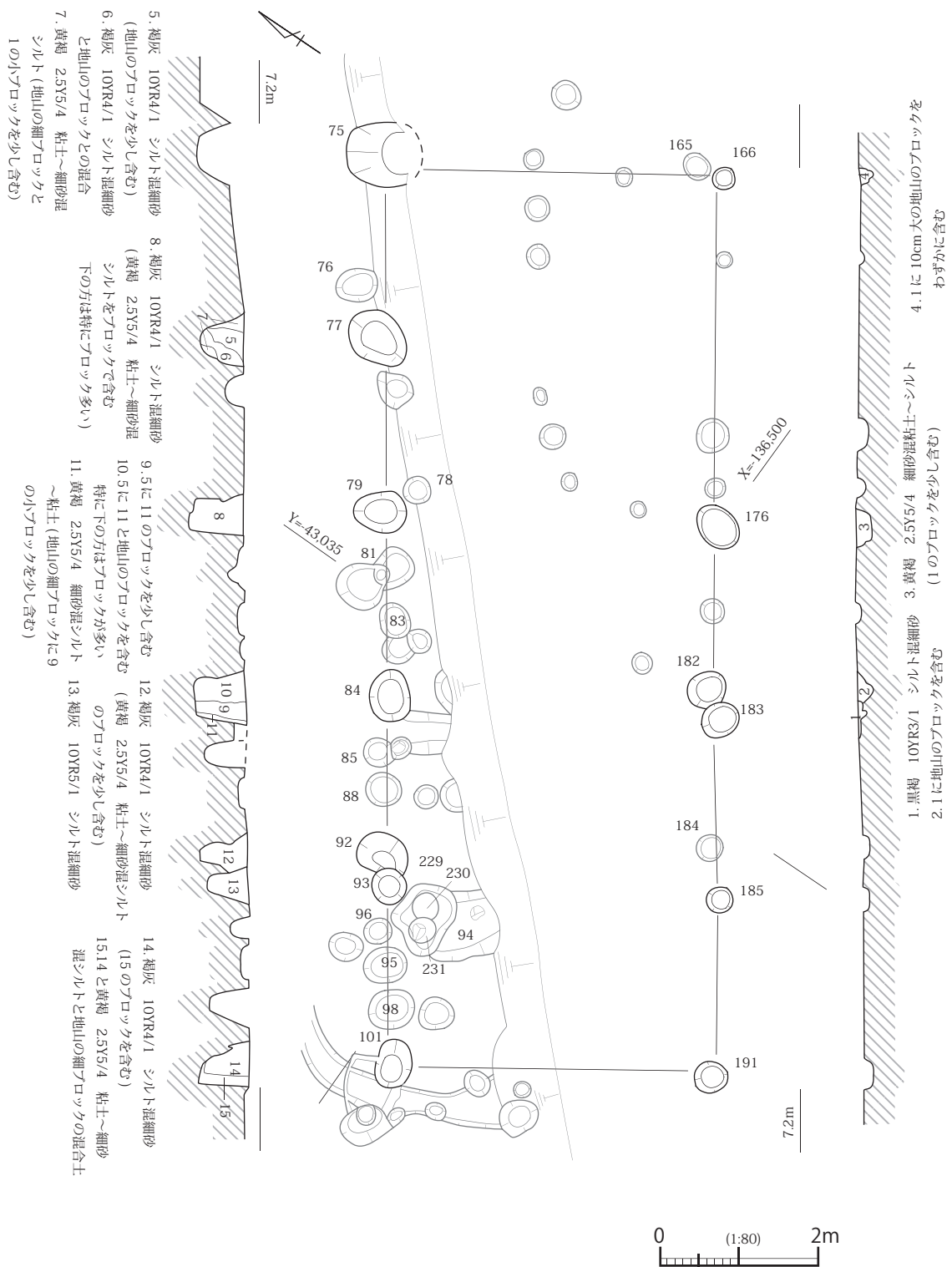


図 64 第 6 地区 第 1 面 建物 2 平・断面図

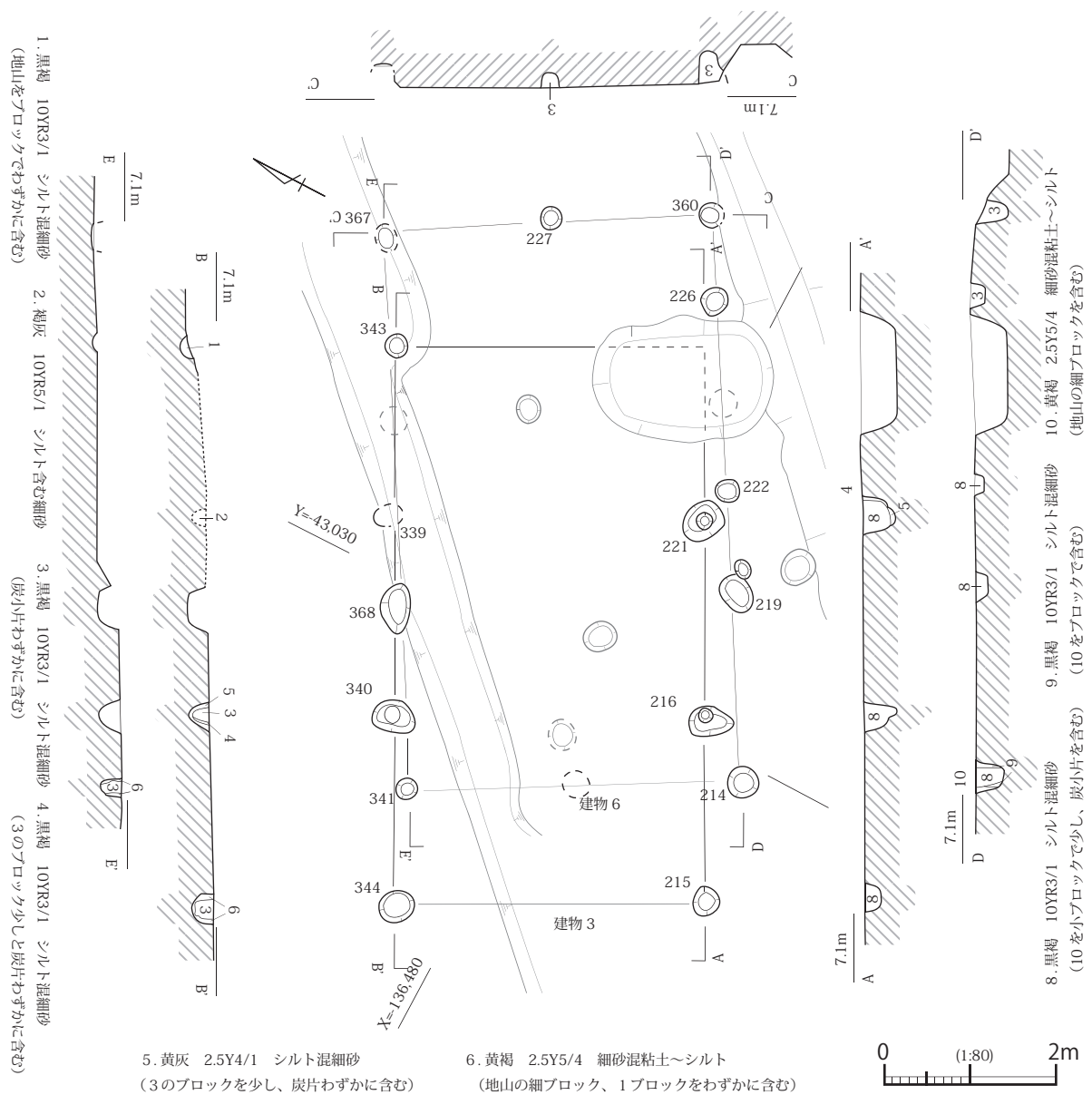


図65 第6地区 第1面 建物3・6 平・断面図

### 116ピット (図62)

調査区中央の南東よりに位置する。平面が楕円形状を呈し、長径0.5m、短径0.4m、深さ0.2mを測る。埋土には褐灰10YR4/1シルトを含む細砂〜粗砂に黒褐10YR3/1シルト混細砂のブロックが若干と炭小片をわずかに含む。

### 292ピット (図62、図版18)

調査区の西端近くに位置する。平面が円形状を呈し、直径0.3m、深さ0.2mを測る。埋土の下層は黄褐2.5Y5/4粘土〜細砂混シルト（地山のブロックが細くなって土壌化したもの）に上層の小ブロックを含む。上層は黄灰2.5Y4/1シルト混細砂に下層の小ブロックを少し含む。

### 382溝 (図60・68)

調査区の西北端に位置する。不定形であり、幅0.5~1.5m、深さ0.2mを測る。埋土には黒褐10YR3/1シルト〜粗砂が入る。

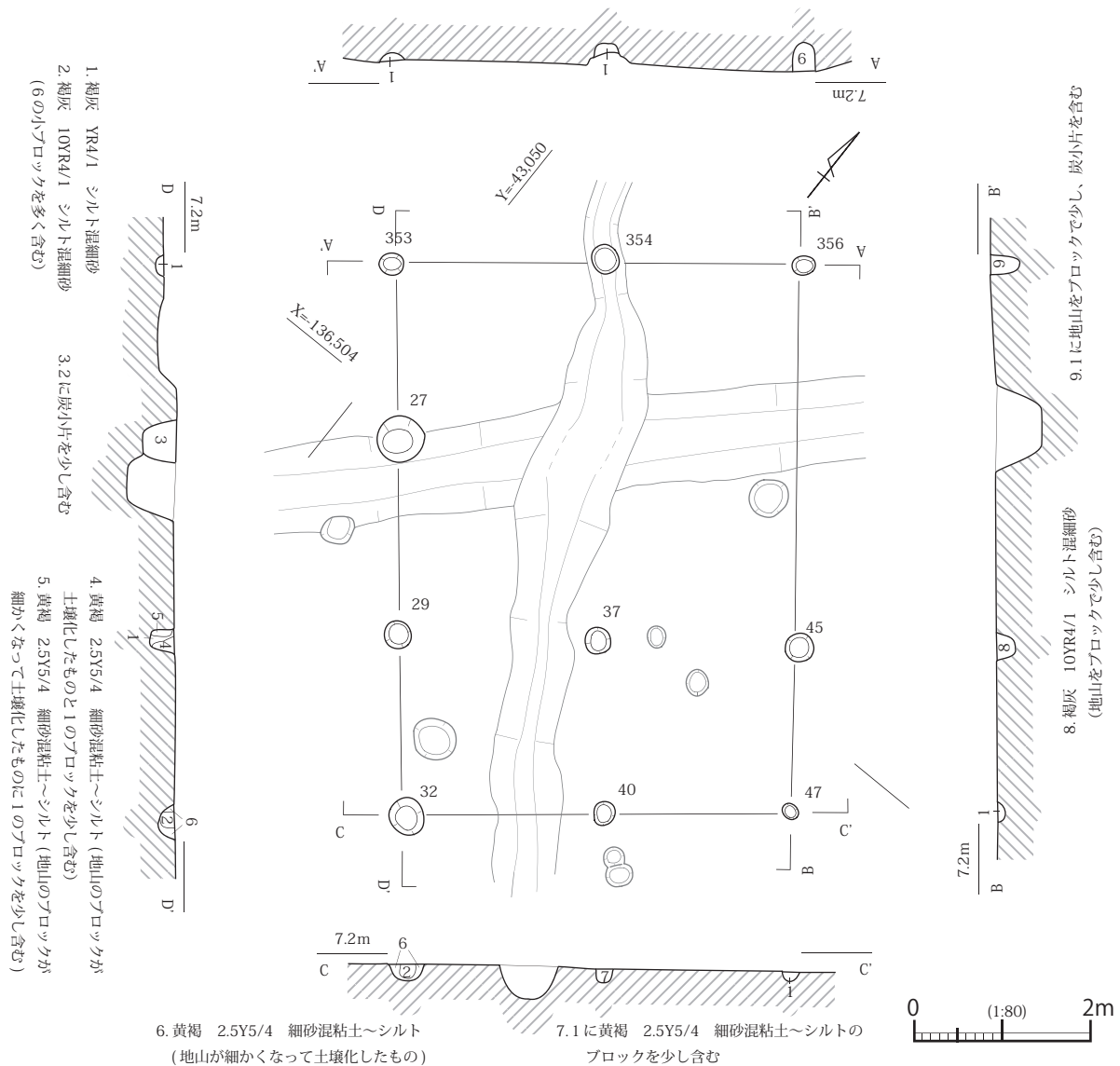


図66 第6地区 第1面 建物4 平・断面図

### 58溝 (図60・62・68、図版17)

調査区の中央より北東側に位置する。両端とも攪乱や削平により失われている。若干蛇行しながらもほぼ東西方向に走る。幅0.2~1.0m、深さは0.05~0.22mと浅い。埋土には砂礫が入り、一挙に埋まったようである。

### 281溝 (図62)

280、282溝を切っている。主軸は北西から南東方向に向けて調査区外へと伸びる。幅0.3m、深さ0.05m前後を測る。埋土も他の黒褐色系のシルト~粗砂とは異なり、黄灰色系粗砂混シルトである。遺物は出土していないが、埋土の土色・土質から考え、中世の溝と考えられる。

### 282溝 (図60・62)

すぐ東側に走る281溝に切られ、280溝を切っている。幅0.4m、深さ0.05~0.1mを測る。残存長は4.0mである。

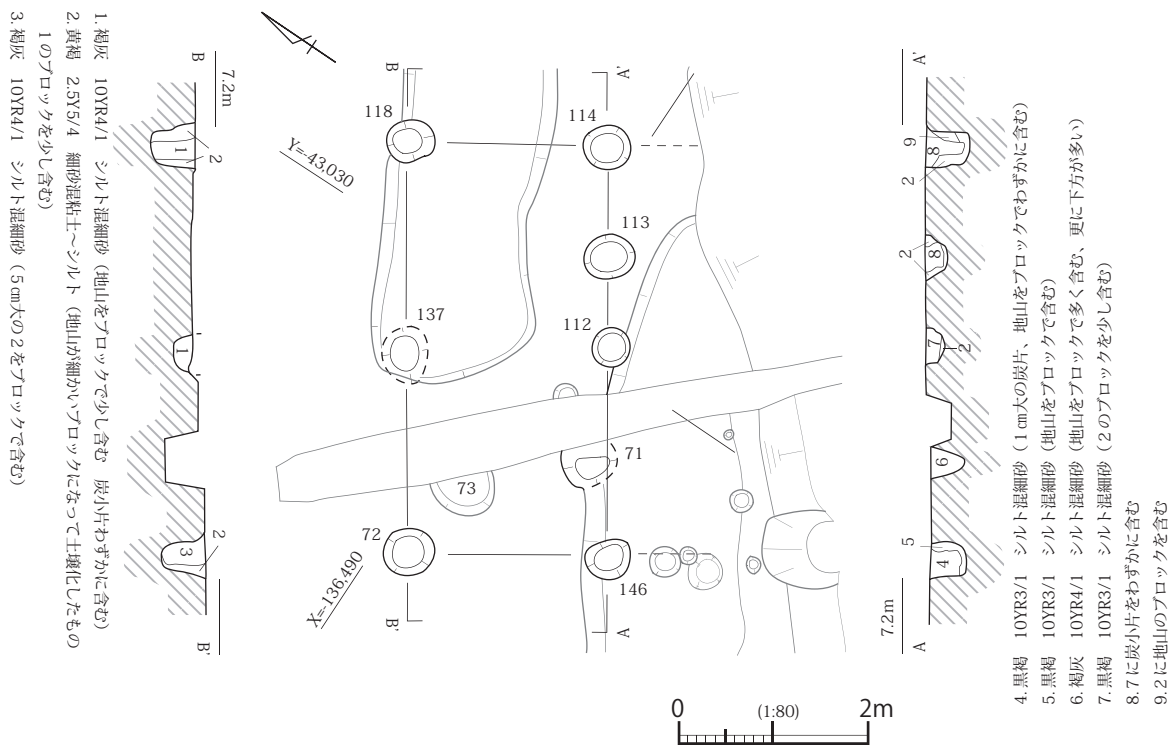


図67 第6地区 第1面 建物5 平・断面図

**26・376溝** (図60・62・68、図版17)

26溝は調査区の南側に位置し、主軸は北西から南東方向へと伸びる。幅0.4~0.7m、深さ0.05~0.35mを測る。

376溝は調査区の西側に位置し、主軸はほぼ南北方向をとる。幅0.6m、深さ0.2m前後を測る。底のレベルは南側が若干低い。北側は調査区外へのび、南側は後世の攪乱により削平されていると考えられる。約30m離れ、距離はあるが、この溝の延長上に26溝があたり、同一の溝である可能性が高い。

**268・294溝** (図62・68、図版17)

268溝は調査区の北東端に位置し、主軸はほぼ南北方向をとる。幅0.2m、深さ0.08mを測る。当溝は2mしか残存せず、南北共に削平されているが、南側に延長すると294溝にあたり、これらは一連の流れである可能性が考えられる。

294溝は調査区の東側に位置し、主軸はほぼ南北方向をとり、幅0.5m、深さ0.1m前後を測る。

**108溝** (図62・68)

調査区の中央よりやや南側に位置し、主軸は他の溝と異なり、北西から南東方向へふる。幅0.3~0.8m、深さ0.1~0.4mを測る。底部のレベルは南側が低い。砂礫層が埋土の中心で、一挙に埋まったと思われる。

**2溝** (図60・68、図版17)

調査区の長軸方向と並行に直線的に走る。主軸はN-45°-Eをとる。断面は「U」の字状を呈する。黒褐5YR3/1等、土壌化の進んだ黒色の粘土~シルトが入り、遺物はほとんど皆無であった。この溝は幅0.9~1.5m、深さ0.35~0.64mを測る。北東側は調査区外へ、南西側は第7地区の2溝へと続

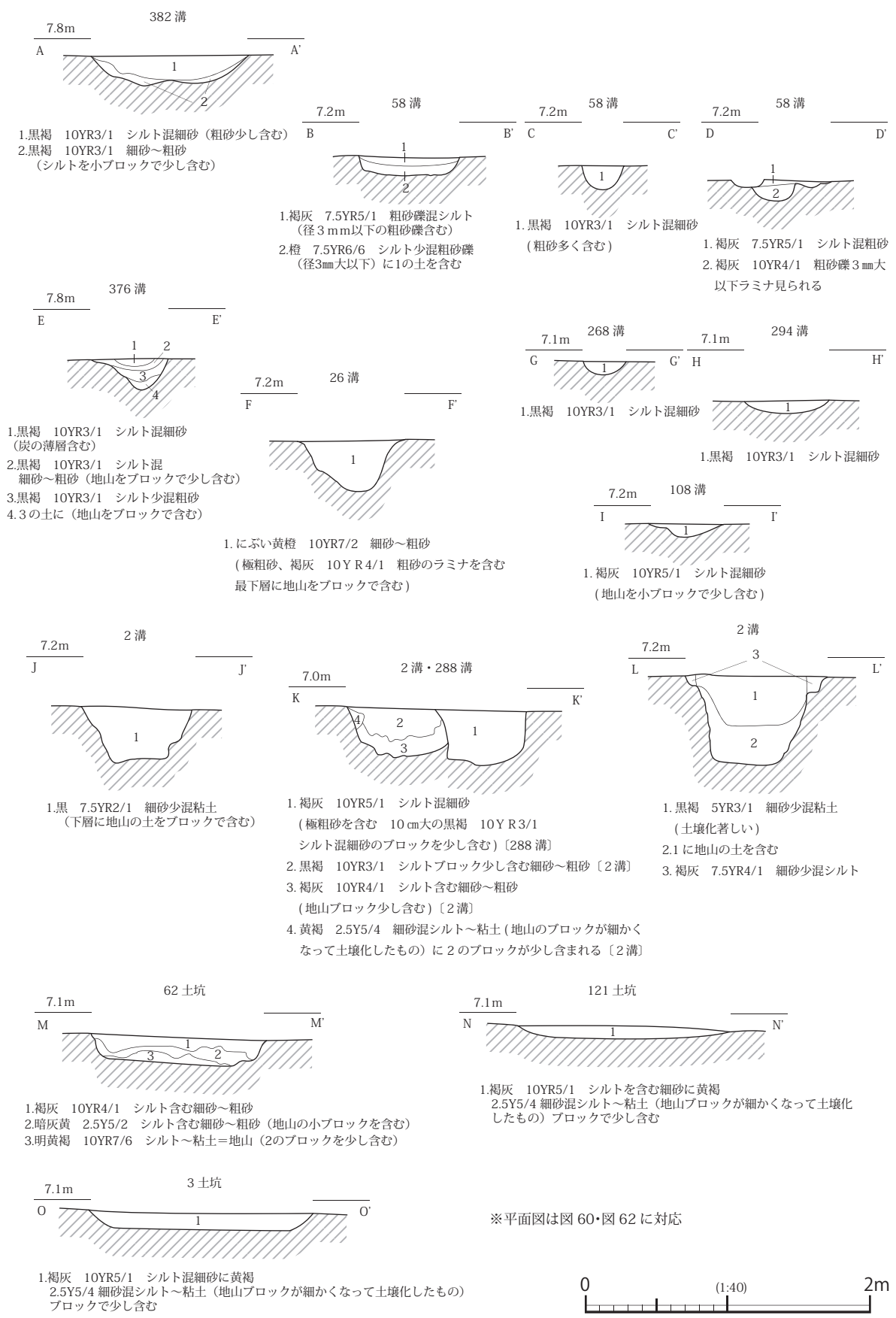
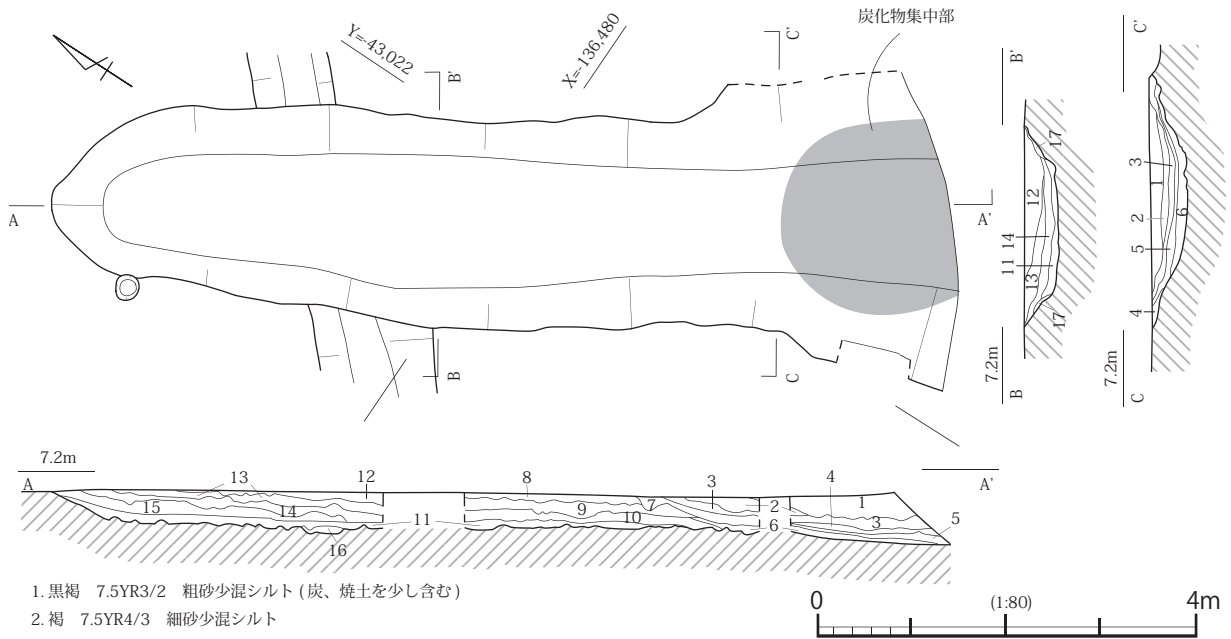


図 68 第 6 地区 第 1 面 遺構 断面図

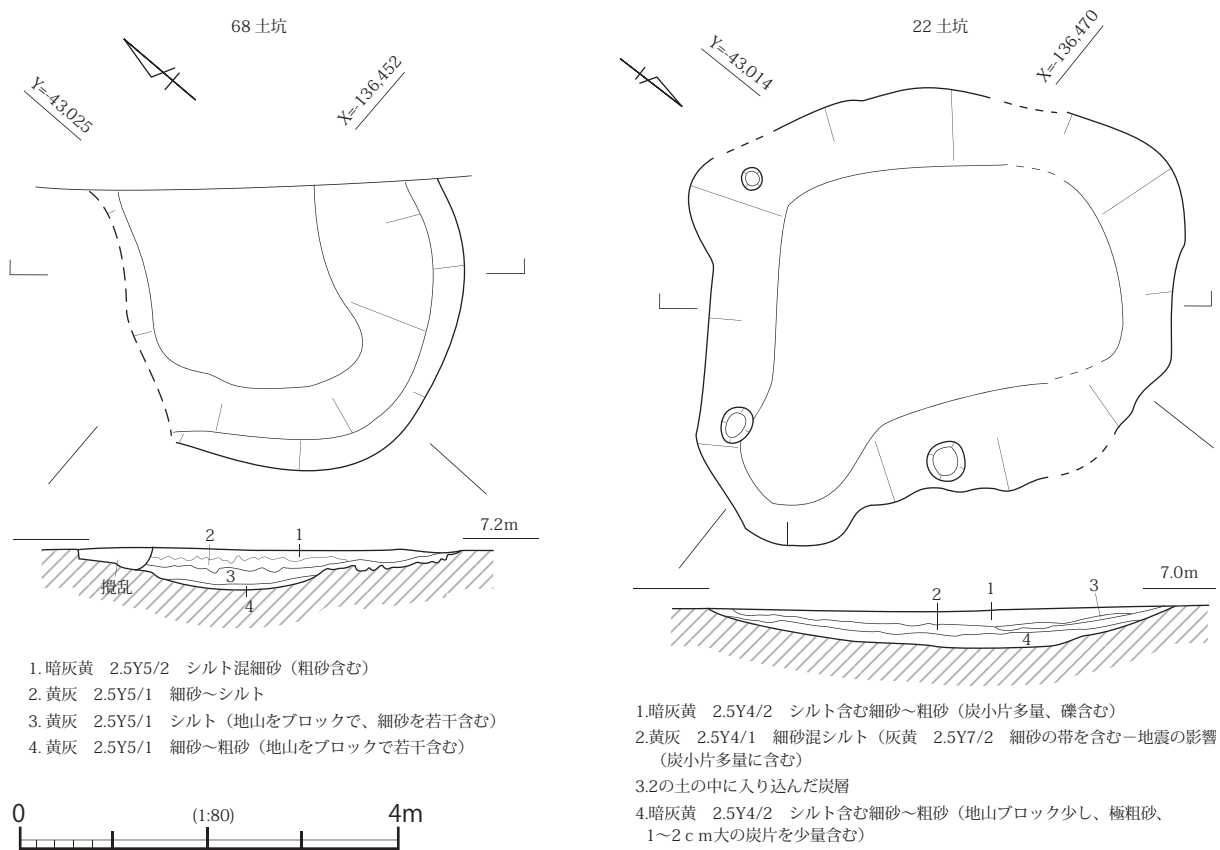




1. 黒褐 7.5YR3/2 粗砂少混シルト (炭、焼土を少し含む)
2. 褐 7.5YR4/3 細砂少混シルト
3. 灰褐 7.5YR4/2 細砂少混シルト
4. 褐灰 7.5YR4/1 細砂少混シルト (炭を若干含む)
5. 黒 7.5YR2/1 細砂少混シルト (炭を多く含む)
6. 褐灰 7.5YR5/1 粗砂少混シルト
7. 灰褐 7.5YR5/2 細砂少混シルトに明黄褐 10YR7/6  
シルトをブロックで少し含む (明黄褐色シルトは地山の土)
8. 灰褐 7.5YR6/2 粗砂少混シルトに明黄褐 10YR7/6  
シルトをブロックで含む (焼土を若干含む)
9. 灰褐 7.5YR4/2 粗砂少混シルトに明黄褐 10YR7/6  
シルトをブロックで少し含む

10. 褐灰 7.5YR5/1 粗砂若干混粘土
11. 褐灰 7.5YR5/1 粗砂若干混粘土に明黄褐 10YR7/6  
シルトをブロックで少し含む
12. 8と同質 焼土を少し含む
13. 灰褐 7.5YR5/2 粗砂少混シルトに明黄褐 10YR7/6  
シルトをブロックで含む
14. 灰褐 7.5YR4/2 粗砂少混シルトに明黄褐 10YR7/6  
シルトをブロックで少し含む
15. 褐灰 7.5YR4/1 粗砂少混シルトに明黄褐 10YR7/6  
シルトをブロックで少し含む
16. 褐灰 7.5YR4/1 粗砂少混シルトに明黄褐 10YR7/6  
シルトをブロックで含む  
[溝4埋土か]

図 69 第 6 地区 第 1 面 61 土坑 平・断面図



1. 暗灰黄 2.5Y5/2 シルト混細砂 (粗砂含む)
2. 黄灰 2.5Y5/1 細砂～シルト
3. 黄灰 2.5Y5/1 シルト (地山をブロックで、細砂を若干含む)
4. 黄灰 2.5Y5/1 細砂～粗砂 (地山をブロックで若干含む)

1. 暗灰黄 2.5Y4/2 シルト含む細砂～粗砂 (炭小片多量、礫含む)
2. 黄灰 2.5Y4/1 細砂混シルト (灰黄 2.5Y7/2 細砂の帯を含む—地震の影響  
(炭小片多量に含む)
3. 2の土の中に入り込んだ炭層
4. 暗灰黄 2.5Y4/2 シルト含む細砂～粗砂 (地山ブロック少し、極粗砂、  
1～2cm大の炭片を少量含む)

図 70 第 6 地区 第 1 面 22・68 土坑 平・断面図

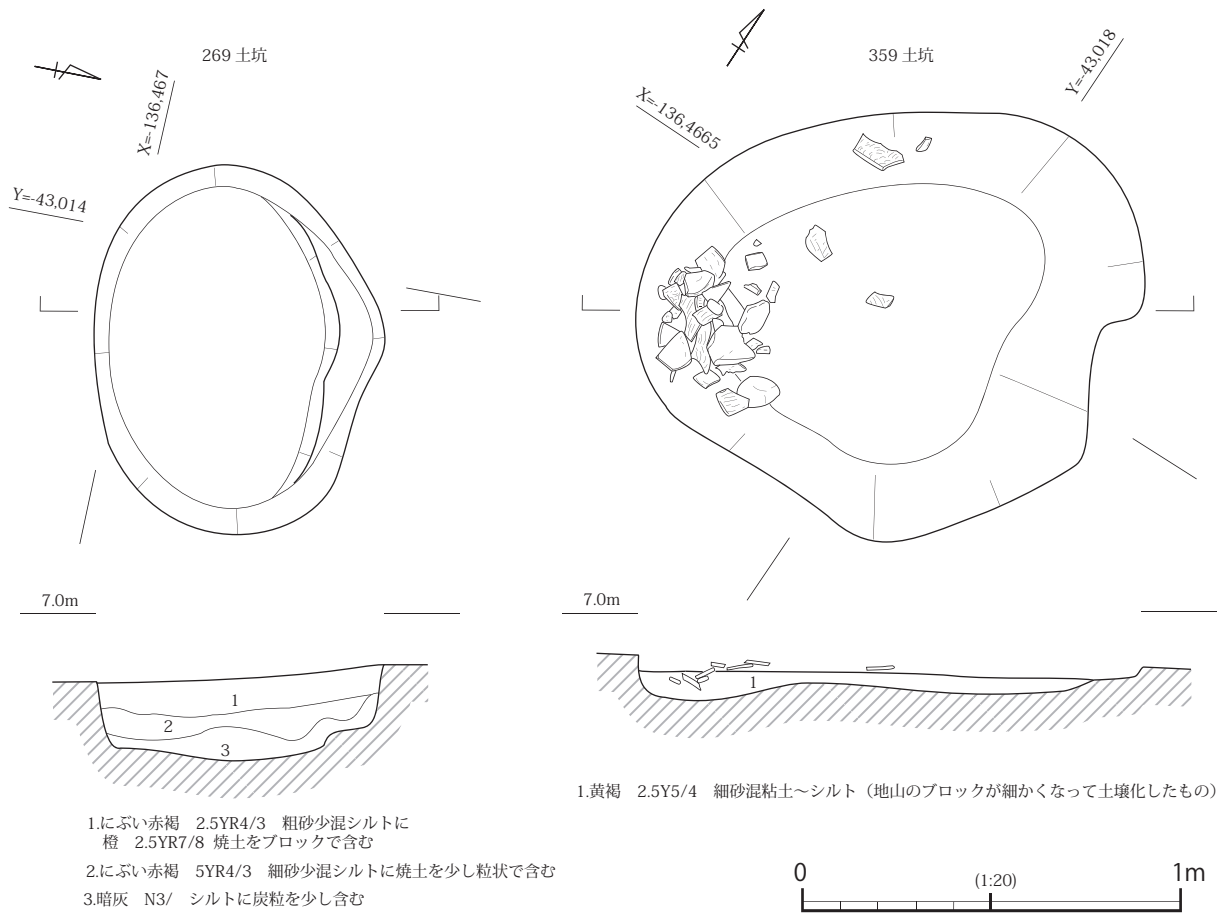


図 71 第 6 地区 第 1 面 269・359 土坑 平・断面図

く。溝底のレベルはわずかに西側が高いが、ほぼ一定である。重複する遺構には全て切られている。

### 288溝 (図62・68、図版17)

調査区の北東に位置し、2溝の南側肩を切って同溝と並行に走る。幅0.6m、深さ0.38～0.45mを測る。埋土は2溝同様、土壌化が進んでいる。

### 61土坑 (図60・62・69、図版17・19)

調査区の南東に位置する。北西から南東方向に直線的にのび、主軸はN-31°-Wをとる溝状の土坑である。南東側は近代の攪乱により壊されている。土坑の規模は、残存長9.6m、幅2.0～3.3m、深さ0.3～0.52mを測る。遺構の底面は船底状を呈し、南東に向かって下降する。北西端と南東端では0.25m程の差がある。埋土は細砂が少し混じる灰褐色のシルトと黄褐色の地山に由来するシルトのブロック状の混合である。比較的短期間にて埋め戻されたと考えられる。また、南東端では底部に焼土・炭化層が0.1m程の厚みで、2m前後の範囲に集中してみられたが、攪乱により、一部は削平されたと考えられる。10～11世紀頃の遺構と考える。

遺物は黒色土器A類碗、土師器皿・高台付杯、土師質羽釜、緑釉陶器碗等が出土している。また、焼土・炭化層内より焼米等の種実も多量に出土している。

### 3・62・121土坑 (図60・62・68、図版17・18)

3土坑は調査区の南東端の中央よりに位置し、建物2の主軸にほぼ並行する。西端は建物2の柱穴に

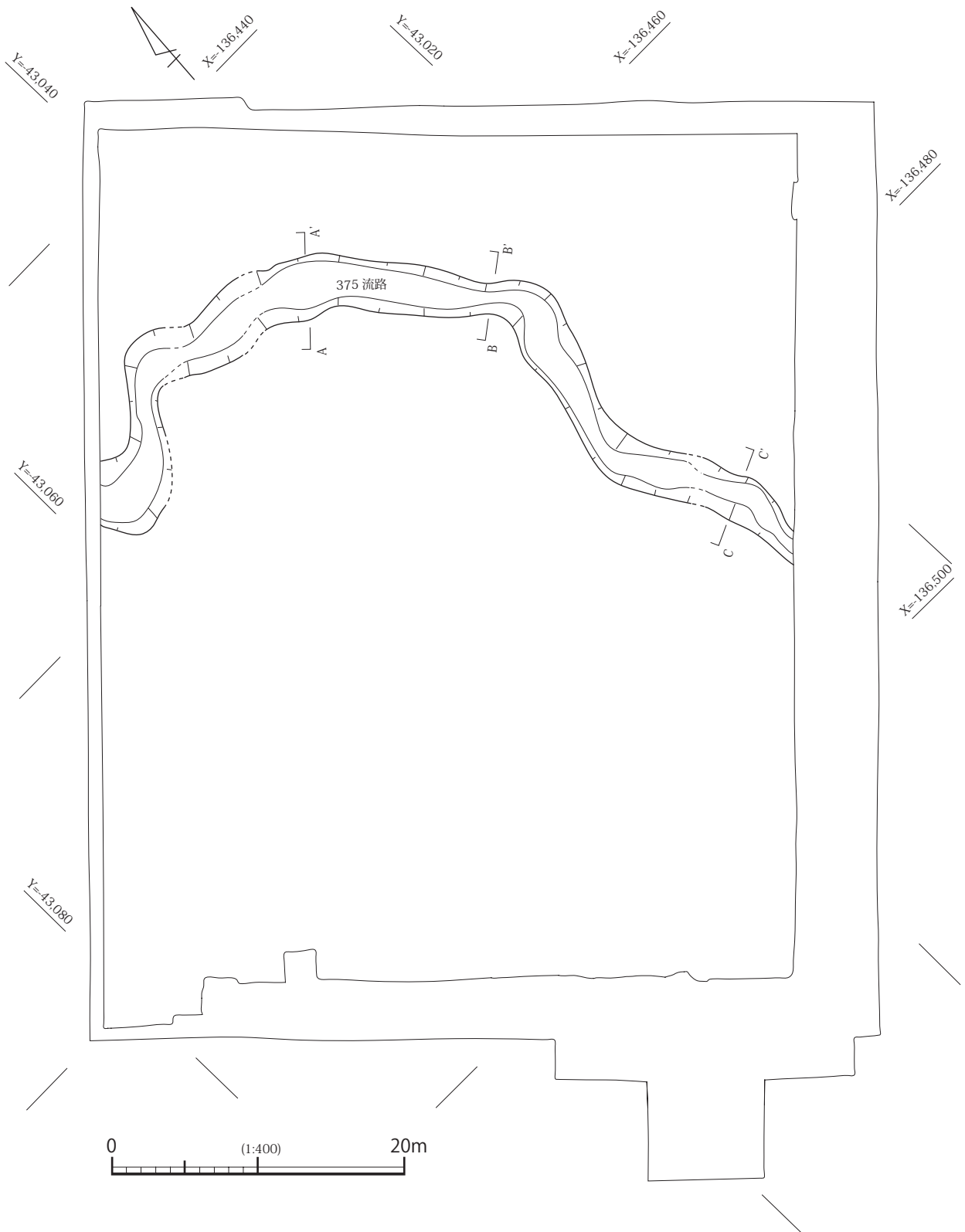
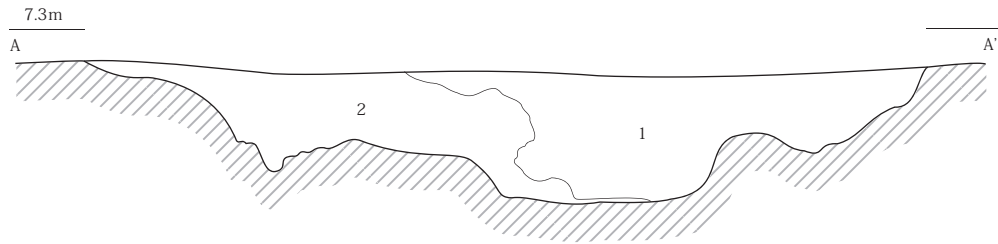
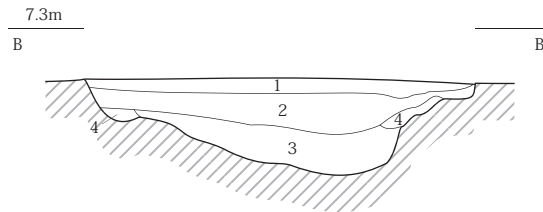


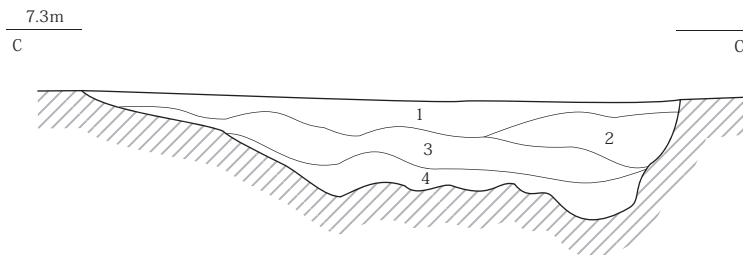
图 72 第 6 地区 第 2 面 全体图



1. 黄褐 10YR5/6～灰黄褐 10YR5/2 細砂～粗砂 (シルト、細礫含む) ラミナあり 下半中心に Fe 沈着
2. オリーブ灰 5GY6/1 粘土・シルト～細砂 部分的に Fe 沈着



1. にぶい橙 7.5YR7/4 粗砂～極粗砂 (シルトを小ブロックで少し含む) [埋没後土壌化した層]
2. にぶい黄橙 10YR6/3 細砂～極粗砂
3. 灰褐 7.5YR4/2 細砂～極粗砂 (明黄褐 10YR6/6 細砂～粗砂 (地山) のブロックを少し含む)
4. 3に地山ブロック多く含む (肩がくずれた部分)



1. にぶい橙 7.5YR7/4 粗砂～極粗砂 (シルトをブロックで少し含む) [埋没後土壌化した層]
2. 灰黄褐 10YR6/2 シルト混細砂～極粗砂 (明黄褐 10YR7/6 シルト～粘土の地山をブロックで含む)
3. にぶい黄橙 10YR6/3 細砂～極粗砂 (シルトをブロックで含む 中央部に集中的にMnの結晶化が見られる)
4. 3に地山 (粘土) のブロックを少し含む

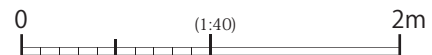


図 73 第 6 地区 第 2 面 375 流路 断面図

切られているが、桁行の縁部を並行に走る。同建物を区画する溝の可能性はある。土坑の長さ14.5m、幅2.0m前後、深さ0.1m前後を測り、溝状を呈する。遺構の底部から直径0.1～0.2m程のピットを多数検出している。南西側で幅0.4mの溝がとりつき、南へ折れる。建物5によって切られている。

62土坑は調査区の南東端の中央よりやや東に位置し、長軸4.5m、短軸0.7～1.5mの溝状を呈する。軸はN-55°-Eをとる。深さは0.2～0.4mを測る。断面は「U」の字状を呈する。掘立柱建物を区画するような溝であった可能性も考えられる。

121土坑は調査区の南東端のほぼ中央に位置する。62土坑の西側に並列し、平面の形状、規模も似る。土坑の幅は1.5m、深さは0.1～0.2mを測る。緩やかに立ち上がる船底状の底部をもつ。南側へ「L」の字状に0.5m幅に狭まりながら曲がる。建物5によって切られている。軸はN-60°-Eをとる。

### 309土坑 (図60・62)

調査区の中央よりやや東より、61土坑の東に位置する。平面は長形状を呈し、長径0.9m、短径0.4

m、深さ0.1mを測る。

#### 68土坑（図60・62・70）

調査区の北東端に位置する。北東側は調査区外へ、北西側は攪乱をうけ、規模は不明である。幅3m以上はある。深さ0.42mを測る。

#### 22土坑（図60・62・70、図版17・18）

調査区の東に位置する。平面は不整形の土坑で、規模は長径5.2m、短径4.2m、深さ0.4mを測る。埋土は主に炭混じりの黄灰色系のシルト～細砂が入る。下方から砂が湧き上がる様に多数の細かな縦糸状の痕跡を呈す。地震の痕であろうか。遺物は遺構底面を中心に、土師器皿、黒色土器A類椀・B類小型椀、灰釉陶器、輪羽口等が出土している。11世紀前半頃の遺構と考える。

#### 269土坑（図62・71、図版17）

22土坑のすぐ北側に位置する。楕円形状の土坑である。規模は長径が約1m、短径が0.8m、深さ0.3mを測る。埋土はシルトが主体で、細砂～粗砂を少し含む。焼土も含まれ、にぶい赤褐色を呈する。土師器皿、須恵器鉢、緑釉陶器、灰釉陶器が出土した。11世紀初頭頃の遺構と考える。

#### 359土坑（図60・62・71、図版17）

269土坑の西側に位置する。長径1.3m、短径1.1m、深さはごく浅く0.08mを測る。須恵器甕片、須恵質陶棺片等の遺物が出土している。

#### （3）第2面の遺構（図72・73、図版20）

調査区の北東域で375流路を確認している。

#### 375流路（図72・73、図版20）

調査区の北から南東側へ緩やかに曲がる。幅2～6m、深さ0.5～0.65mで、湾曲した外縁部にあたる東側が深い。流路は砂礫土で埋没しており、一時期に一挙に埋まったと思われる。自然流路と考えられ、中央部付近で乱杭跡を数箇所検出している。遺物は出土せず、時期は不明である。

## 7. 第7地区の調査

### （1）遺構面の概要

幅約8m、長さ約160mを測り、第6地区の南西端から第8地区の北東端までを第7地区として調査した。当調査区の現地表面は標高7.8m前後を測る。当地区は長く広いことから、調査手順を、4回に分けて調査した。

北東半側は、第6地区と同様、近世後半～近代の耕作土層によって、中世以降の包含層が部分的にしか残存していない状況であった。そのため、地山層である黄褐色粘土～シルト層まで一括して掘削し、同一面において近世前半～古代の遺構を検出した。南西半側は、基本層序第3層が広範囲に確認できたため、近代の耕作土層～第3層までを掘削した第4層上面を第1面として、近世前半～中世までの遺構を検出し、第4層～第5層を掘削した地山直上面を第2面として、中世～古墳時代の遺構を検出した。標高は第1面が6.9～7.2mを測る。

また、調査区南西部張り出しは、包含層の残存状況が不良であったため、これも近代の耕作土～第5層までを一括して掘削し、遺構面を一面のみ検出した。標高は6.1m前後を測る。

第2面（最終遺構（地山）面）における両端の高低差が、北東端で標高7.1m、南西端で標高6.0mの約1m強あり、操車場造成以前の旧地形も、北東が高く南西が低い状態だった可能性がある。

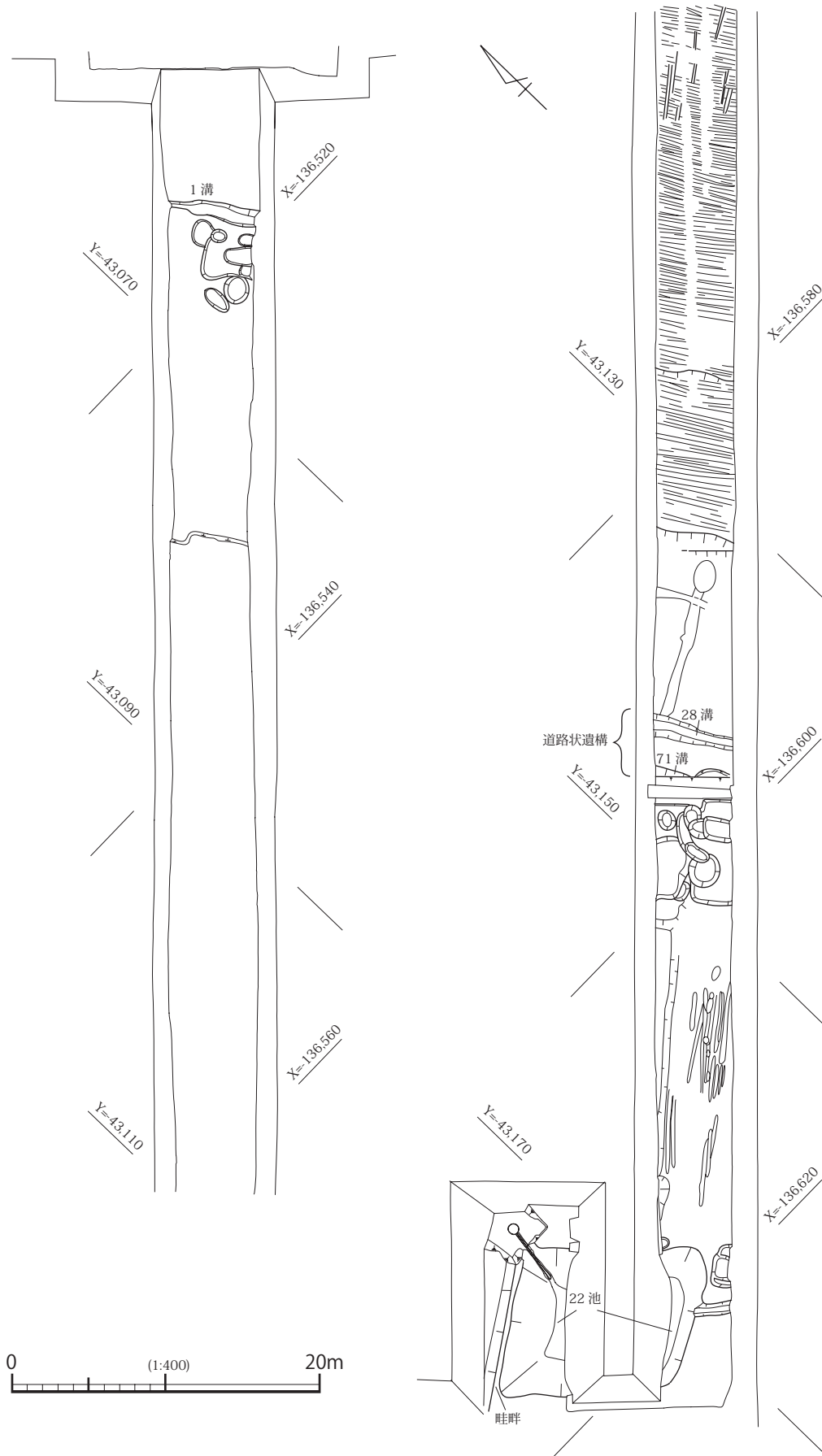


图 74 第 7 地区 第 1 面 全体图



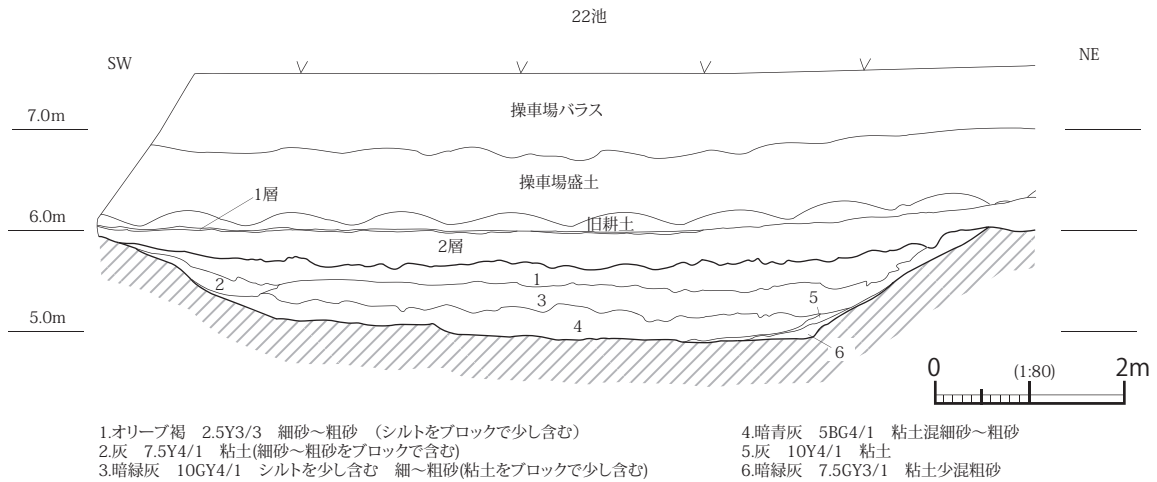


図75 第7地区 第1面 22池 断面図

(2) 第1面の遺構 (図74～76、図版23・24)

北東半側では、中・近世の土坑、溝、落ちを検出した。ただ、当調査区北東端に位置する1溝は、後述する道路状遺構から1町、ほぼ110mの位置にあり、坪境を示している可能性がある。また、1溝から南西方向の約22mの位置に段差が存在し、区画による土地利用の状況が窺える。

X = -136,560m、Y = -43,110m付近よりも南西側では、坪境の溝に平行して北西から南東方向にのびる耕作溝や、それらと直行する耕作溝、耕作に伴う段差と道路状遺構、樋で接続された池と井戸等を検出した。中世以降の当調査区には、耕作地が広がっていたものと推測する。

耕作溝は、おおむねN-35°-W方向に走る。また、ほぼ11～12mの間隔で、耕作に伴う段差を確認した。南西に向かって地形にあわせ段状に低く成形していく土地利用がなされていたようである。

道路と推測される硬くしまった盛土とそれに伴う溝を検出した。この道路状遺構を境とした東西域は耕作痕の方向が異なり、上記の坪境溝から1町離れた位置にあることから、坪境としての役割も担っていたと思われる。

調査区の南西端北側は、その大部分は22池がしめていた。他に第8地区に続く畦畔の基底部等を検出した。

**22池** (図74～76、図版23)

調査区南西半の南西端に位置する12.0×9.5mの歪んだ四角形状の池である。深さは検出面から約0.7mを測る。肩部はなだらかに傾斜し、底部は平坦に整えられている。埋土は滞水堆積部を除くと、粘土のブロックを含む砂層で、人為的に埋め戻されたと考えられる。

池の北隅で、杭が打たれ、径約0.1mの丸太材が敷き並べられている状況を検出した。護岸の可能性が考えられる。

法面の一部にシルト～細砂のブロック土を検出し、これを除去すると、長さ3.0m、幅0.3m、深さ1.2mの規模で、開削された跡が見つかった。その部分の最下部に、樋が設置され、隣接する井戸枠につながっていた。径約8cm、長さ約3.76mの竹筒が設置されていた。竹筒は、井戸枠桶に接続されていた。また竹筒の上面には、5×7cmの長方形の孔が空けられていた。ただし孔は、空けた時に切り取られた竹で蓋をされていた。

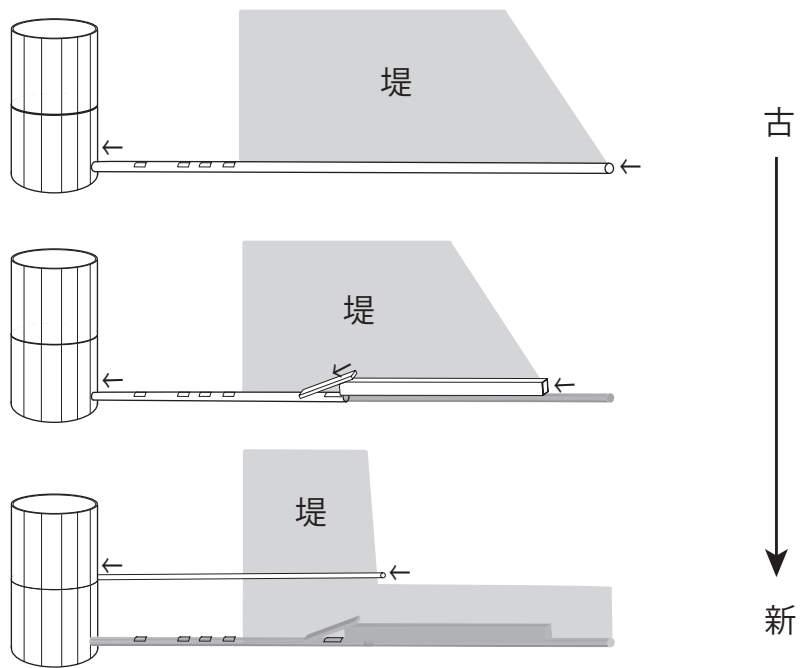
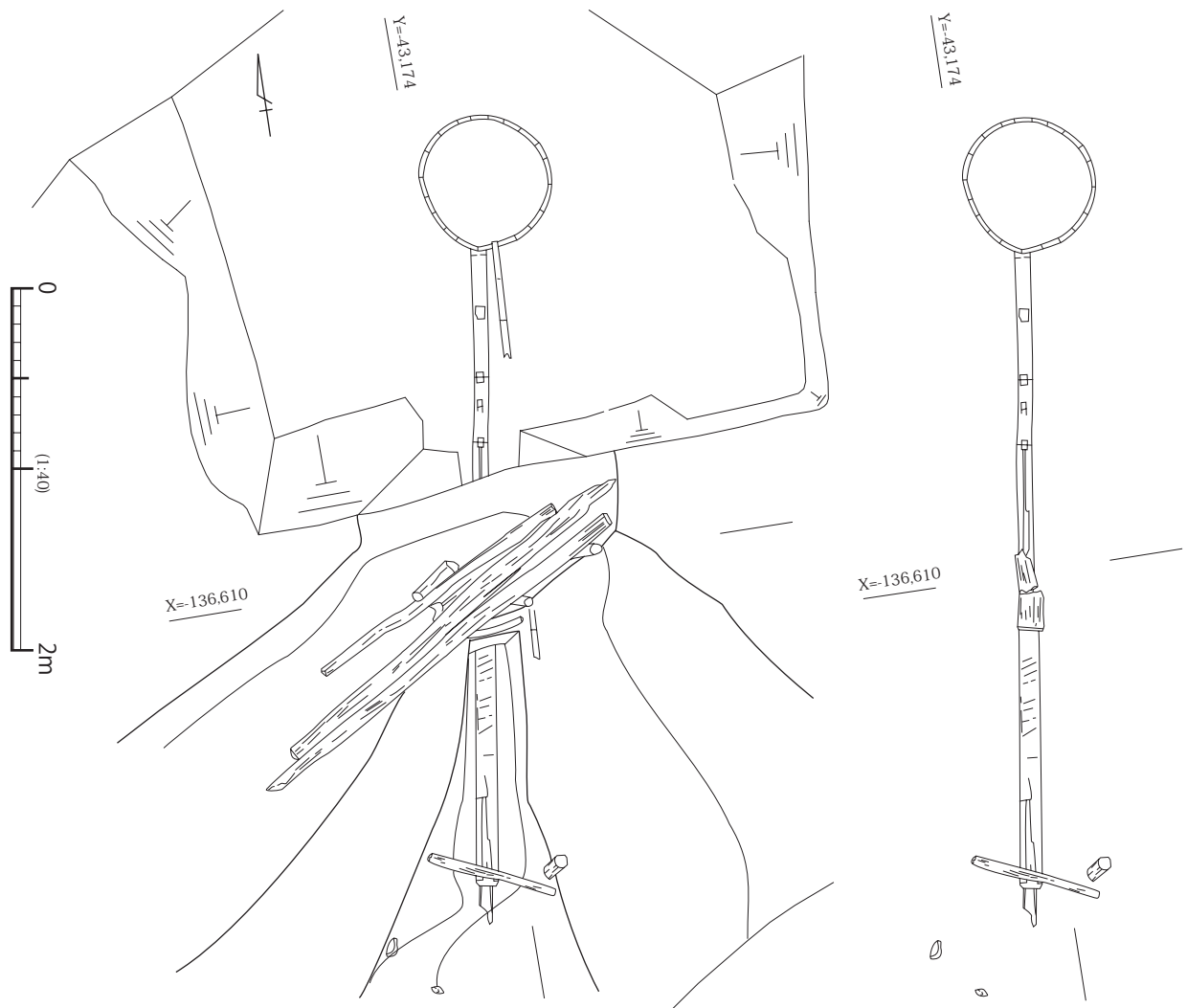
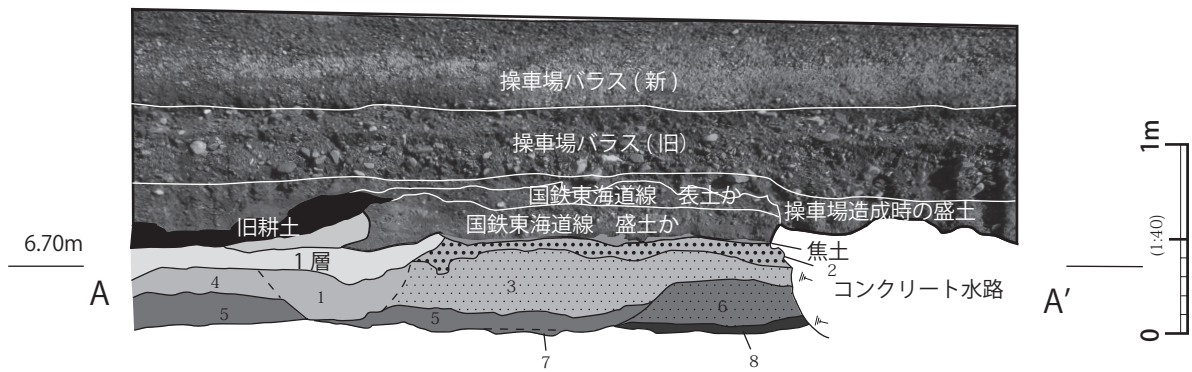
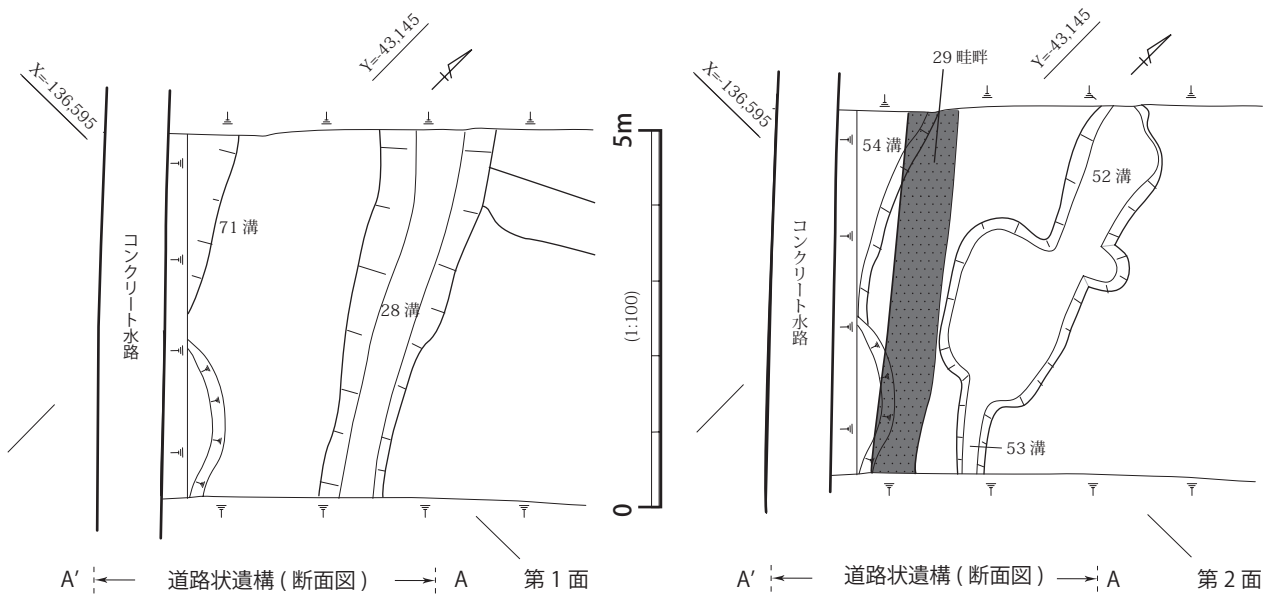
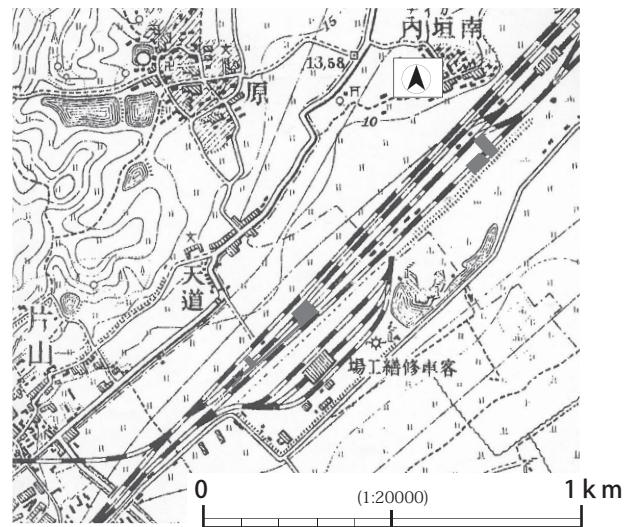


图76 第7地区 第1面 22池 貯水施設 平面図 及び 断面模式図



- |                                    |                                   |
|------------------------------------|-----------------------------------|
| 1. 暗灰黄 2.5Y4/2 粗砂(炭小片少し含む) [28溝埋土] | 5. 黄灰 2.5Y6/1 シルト混細砂 [3層]         |
| 2. 明黄褐 10YR7/6 細砂混粗砂 [2層表土]        | 6. にぶい黄褐 10YR5/3 シルト混粗砂 [29畦畔]    |
| 3. にぶい黄 2.5Y6/4 シルト~粗砂 [2層盛土]      | 7. 灰黄 2.5Y6/2 粗砂~シルト [53溝埋土]      |
| 4. 灰黄 2.5Y6/2 シルト混細砂 [2層]          | 8. 灰黄褐 10YR4/2 シルト混粗砂 (Fe沈着) [5層] |

図77 第7地区 道路状遺構 平・断面図



明治44年 (大日本帝国陸地測量部 明治44年発行)  
1/20000「吹田」を使用

大正12年 (大日本帝国陸地測量部 昭和2年発行)  
1/25000「吹田」を使用

図78 第7地区 旧地形と調査区関係図

竹筒のすぐ上部には、一辺が約10cmのほぼ正方形の木樋が竹筒に直接乗る状態で設置されていた。木樋は、長さ約1.5mと竹筒に比べると半分ほどの長さで、池側によって設置されていた。また木樋の北端に、長さ44×幅14cmの板を検出した。検出時、この板は土圧で割れていたが、状況を考えると、木樋と竹筒の間に斜めにたてかかっていたと推測される。また、この竹筒から0.5m上、北東側に0.1～0.2mずれた位置に直径5cmの別の竹筒を検出した。中央部分は残存していなかったが、推定長は2.3mで、片端は井戸枠の口縁部に乗っていた。

以上のことから、これらの貯水施設は、わずかながらいずれも池側の端が高くなっており、池から井戸に向かって水を流していたと考える。樋が重複しているのは、池の堆積物により機能が失われる度に、増設、付け替えを行ったためと推測される（図76）。

井戸の上部は、操車場造成時に著しく攪乱を受けて失われていたため、井戸の構造及び埋土は不明であるが、残存する桶の上部に、もう一段桶が存在していたことが推測される。

### 道路状遺構（図77・78、図版24）

X＝-136,595m、Y＝-43,145m付近で検出した、並行する溝とそれらにはさまれた硬くしまった整地土等の一連の遺構を、ここでは「道路状遺構」として報告する。なお、本来は第2面で報告すべき内容も、時系列の変化が判りにくいため、道路状遺構に関わる部分については一括して記述する。

レンガや焦土を含む締まった旧表土（耕作土）層下にて検出した第1面では幅約1.1m、深さ約0.3m、調査区を北西から南東に貫通する28溝とそれに並行する71溝を検出した。両溝にはさまれた幅約2m間に広がるにぶい黄色シルト～粗砂層は硬く締まる。71溝の南西側は近代のコンクリート水路によって大きく失われているため、南西側には不明な部分も多い。

第2面では、第3層に伴う29畦畔と53溝を検出した。52溝、54溝は壁断面では第4層を確認できないが、29畦畔よりも下にあり、同溝が下層の第5層を切っている状況が確認できたので第4面以前の遺構と考える。

52溝、53溝は、埋土が、シルト～粗砂の複雑なブロック土であったため、平面での切り合い関係から複数の土坑の可能性も考えられたが、全体として29畦畔に伴う側溝とするのが妥当であろう。

壁断面（図77）を観察すると、道路状遺構の最古の形状は29畦畔であり、幅が広く、里道として利用されていたと考えられる。

これらのことから、第2層由来の盛土は、29畦畔を拡張して造成されている。よって中近世には道路として使用されていたことが推測される。少なくとも中世には現地点になんらかの境界があったと考える。また第2層の直上に第1層の時期にあたると考えられる焦土を確認した。

ところで、明治44年の地図（図78左）によると、当道路状遺構の位置する場所には、亀岡街道と呼ばれる街道が通っていたようである。操車場が造成された後の大正12年の地図（図78右）を見ると、街道は当該調査区を通らず、南西方向に迂回したと推測される。

#### （3）第2面の遺構（図79～83、図版21・22）

第4層とわずかに残存する第5層を除去したため、埋土を異にする2時期の遺構を同一面で検出した。第4層を埋土とする中世の遺構としては、溝を検出した。

基本層序の第5層を埋土とする古代以前の遺構は、掘立柱建物3棟とピット、溝を検出した。他の調査区と同様に古代の掘立柱建物、溝、ピット等を検出した。

掘立柱建物は、X＝-136,560m、Y＝-43,110m付近とX＝-136,610m、Y＝-43,160m付近に集中

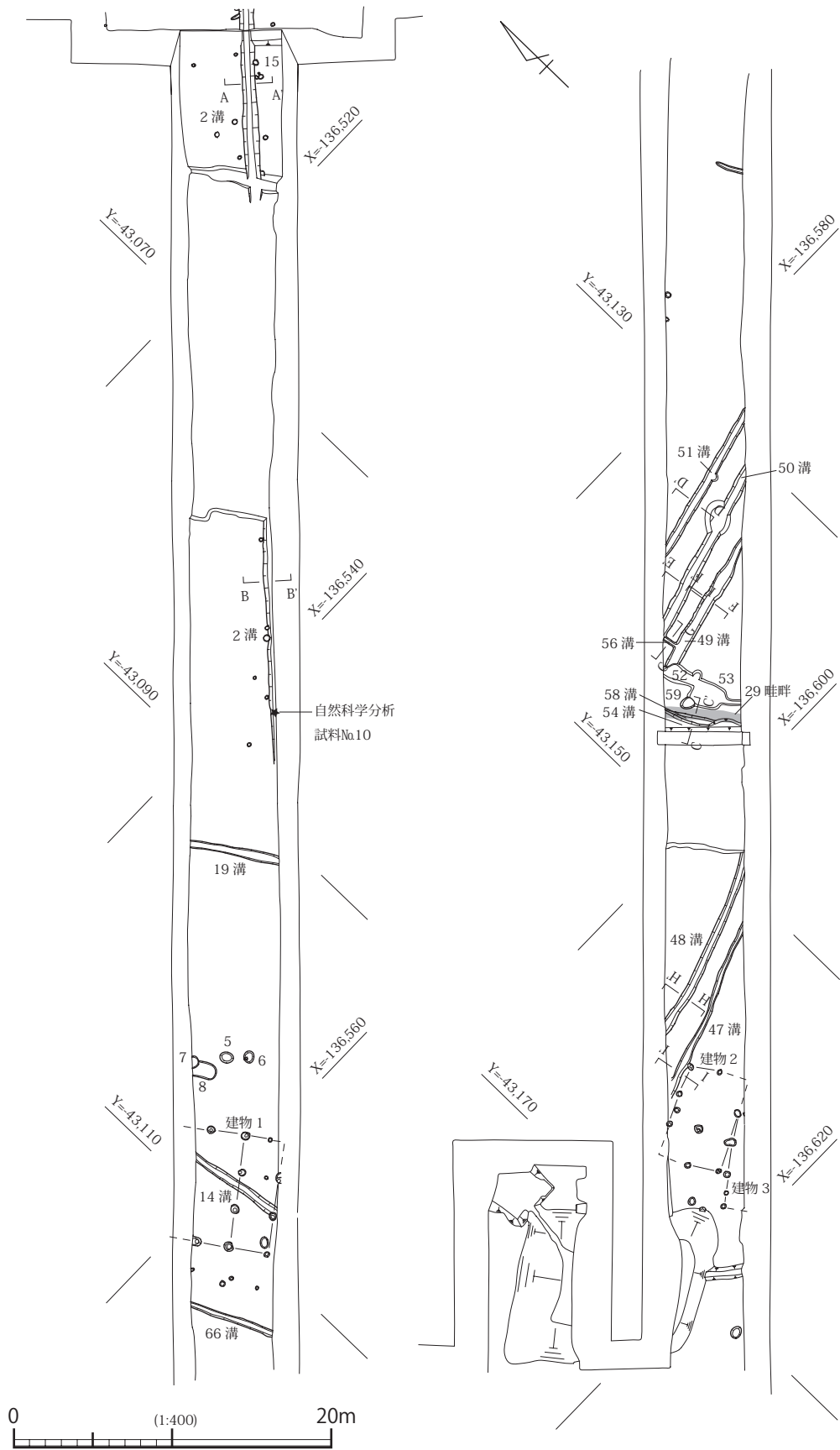


图 79 第 7 地区 第 2 面 全体图



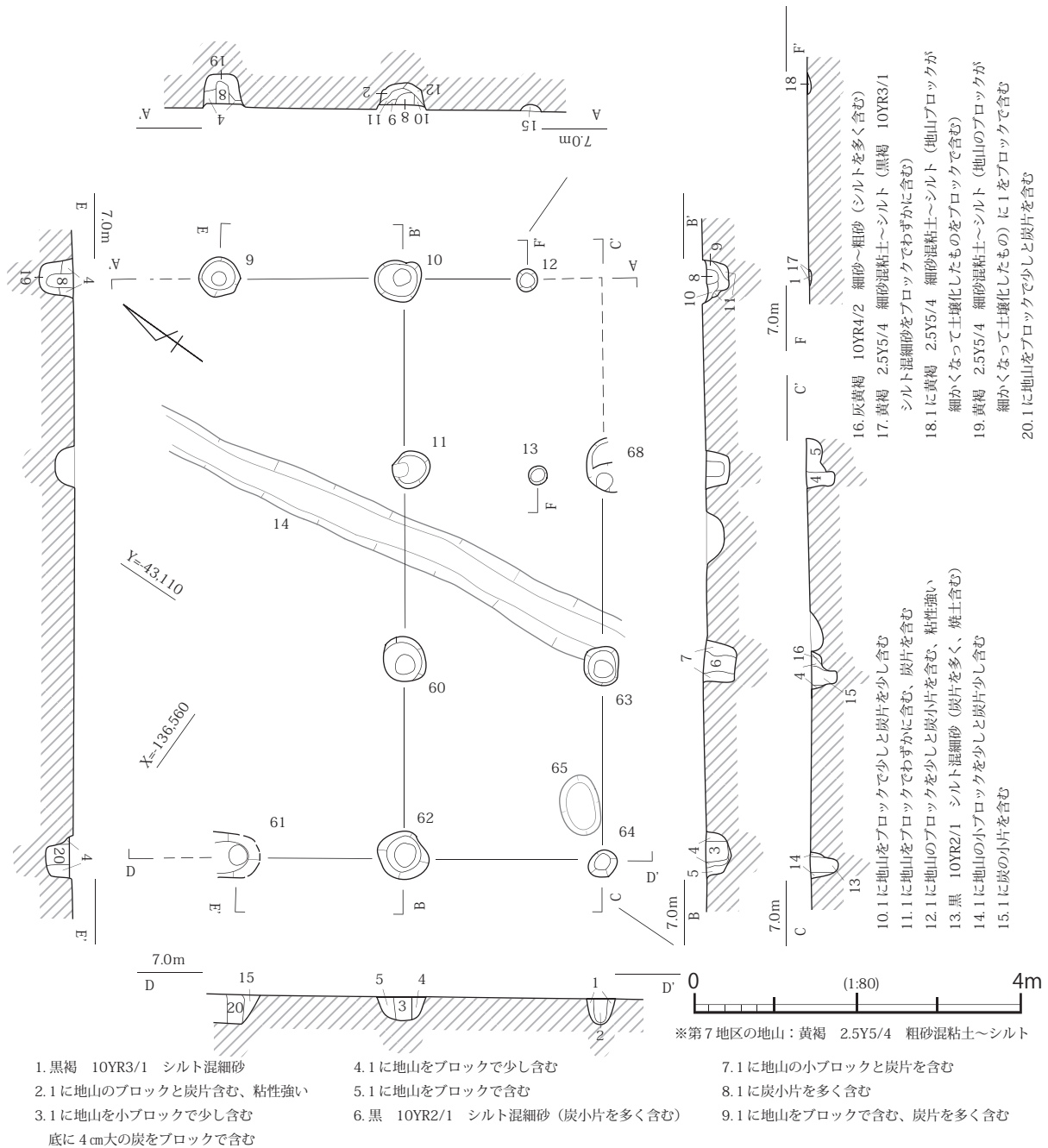


図80 第7地区 第2面 建物1 平・断面図

し、その間約60mの範囲にはピットも希薄な状況であった。一定の箇所には建物が建てられていたと考える。建物の他には溝を7条検出した。規模や標高に差があるものの、いずれも直線的に長くのびる特徴が見られる。

建物1と建物2・3の間に、ほぼ並行して走る5条の溝を検出した。

他に、古墳時代に遡る溝を2条(14溝、66溝)検出した。本調査の西側の調査区では、明らかに古墳時代と判る遺構は、遺物が出土したこの2条のみであった。また、第6地区から続く2溝を検出した。

### 建物1 (図79・80、図版21)

調査区の中央部に位置し、規模は7.2×4.6m以上、建物の主軸はN-55°-Eをとる。規模は桁



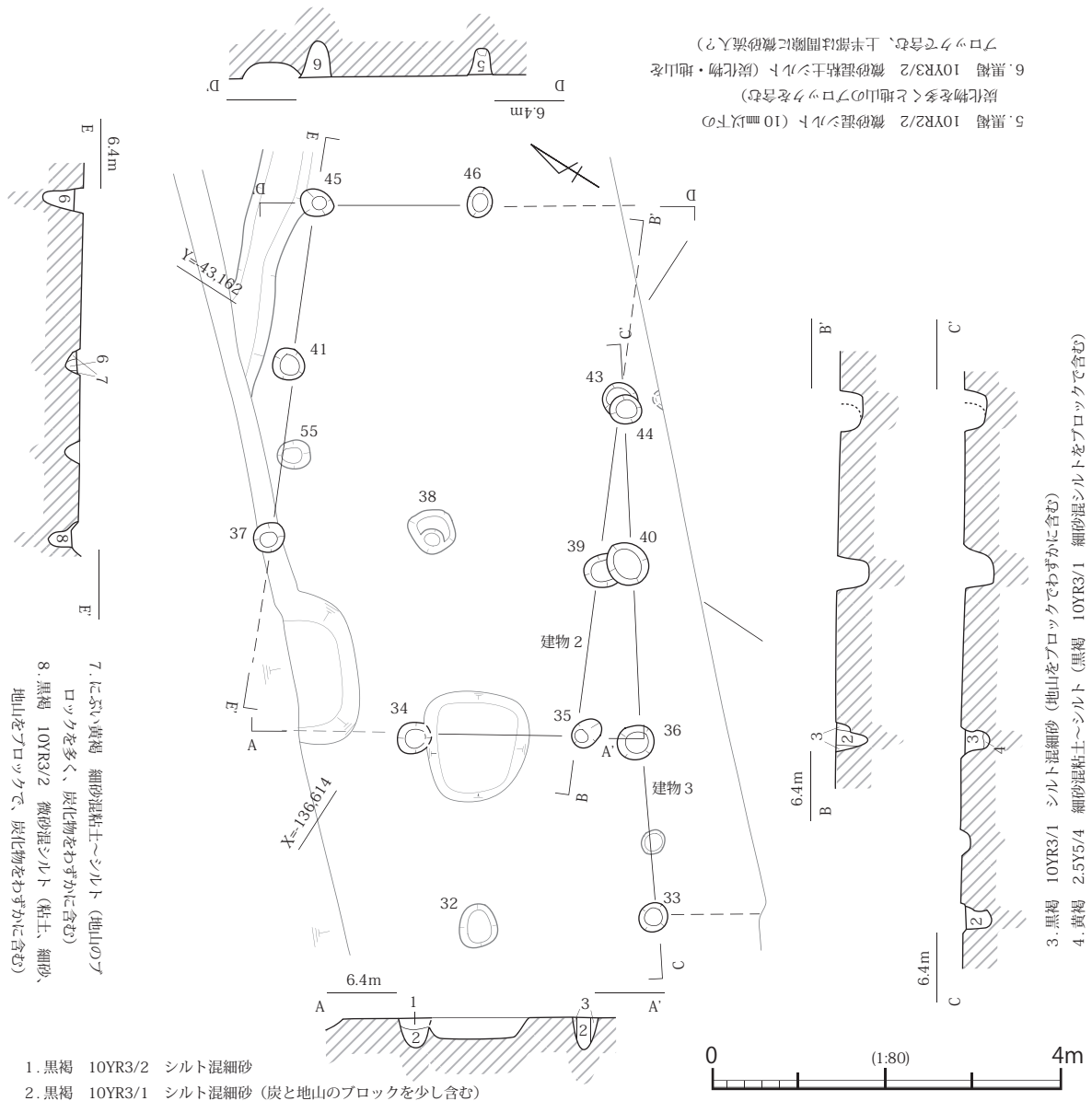


図81 第7地区 第2面 建物2・3 平・断面図

行3間、梁間2間以上である。柱穴は直径0.2~0.7m以上、深さは0.1~0.4mを測る。埋土は黒褐10YR3/1炭混じりの地山をブロックで少し含むシルト混細砂を主体とする。検出したピット全てに柱痕が認められた。直径0.10~0.18mを測る。10世紀頃の遺構と考える。

**建物2** (図79・81、図版22)

調査区南西側に位置し、建物の主軸はN-65°-Eをとる。規模は6.1×3.8mの桁行3間、梁間2間である。柱穴は直径0.3~0.4m、深さは0.2~0.5mを測る。埋土は黒褐10YR3/2地山をブロックで含む粘土～細砂等が入る。建物1に比べ柱穴が貧弱であることや、平面形が歪んでいることから別の建物に復元できるかもしれない。10世紀前半頃の遺構と考える。

**建物3** (図79・81、図版22)

建物2の南側に位置する。建物2の柱穴を攪乱することから、本建物が後出したことは明らかである。建物の主軸はN-55°-Eをとる。規模は桁行5.8m以上の3間以上であるが、梁間は調査区外への

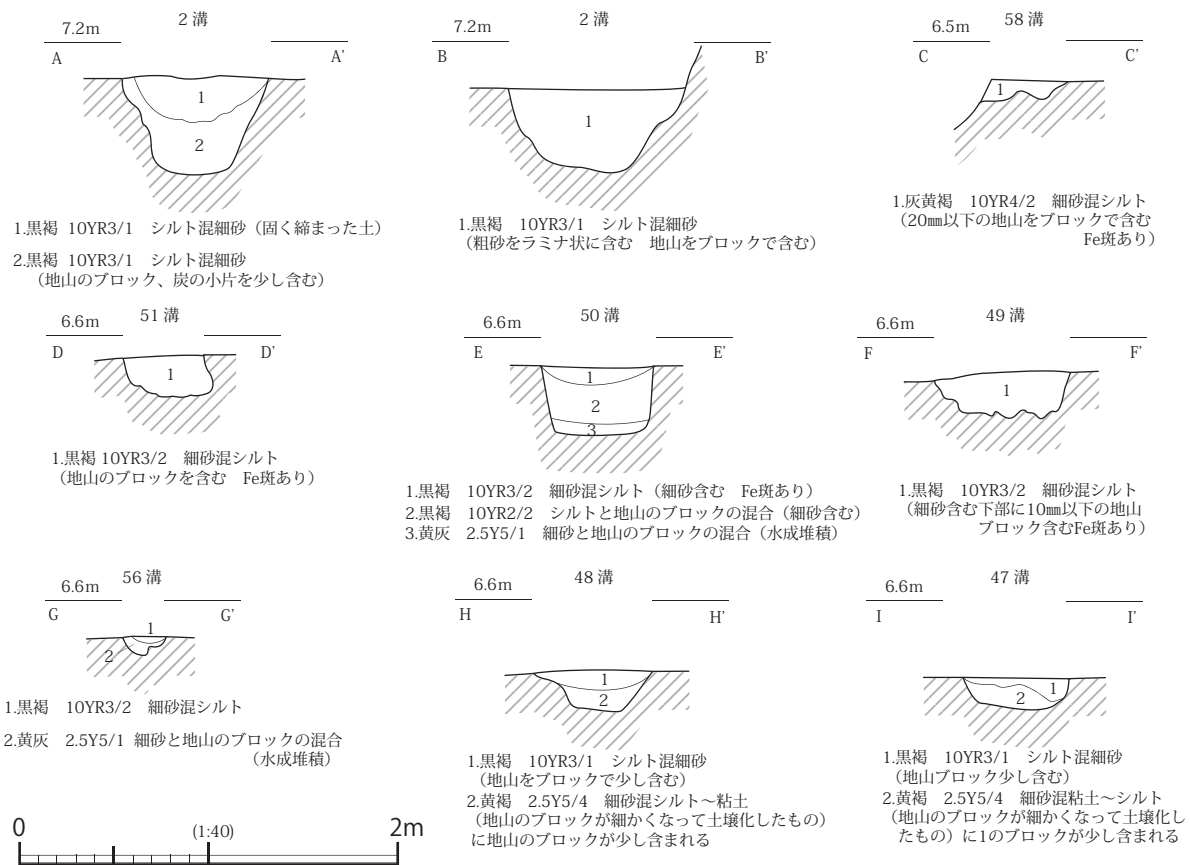


図82 第7地区 第2面 溝 断面図

び詳細は不明である。柱穴はほぼ1.9m間隔である。直径0.3～0.5m、深さ0.1～0.4mを測る。埋土は黒褐10YR3/1地山のブロックを少し含むシルト混細砂等が入る。

## 8 土坑 (図79、図版21)

調査区のほぼ中央に位置し、北半は調査区外となる。平面が長形状を呈し、長径1.5m以上、短径1.0m、深さ0.1mを測る。埋土は下層が黒褐10YR3/1シルト混細砂に地山のブロックを若干と炭小片を含む。上層は黒褐10YR3/1シルトを多く含む細砂～粗砂である。

## 2 溝 (図79・82、図版21)

調査区の東側で検出した溝であり、第6地区の2溝から続く。主軸はN-43°-Eをとり、南西端は調査区外にのびる。第6地区から第7地区にかけて検出した溝の全長は150m以上に達する。溝の幅は1m、深さ0.35～0.64mを測る。

2溝の周辺で、15ピットはじめ、直径0.5m前後を測るピットを十数基検出している。これらの具体的な用途は定かではないが、2溝に関連する遺構の可能性を考える。

## 15ピット (図79)

調査区の北東端に位置し、平面が楕円形を呈する。長径0.4m、短径0.3m、深さ0.2mを測る。埋土は下層が黒褐10YR3/1シルト混細砂に地山の小ブロックを含む。上層は黒褐10YR3/1シルト混細砂に地山の小ブロックを若干と炭片を多く含む。

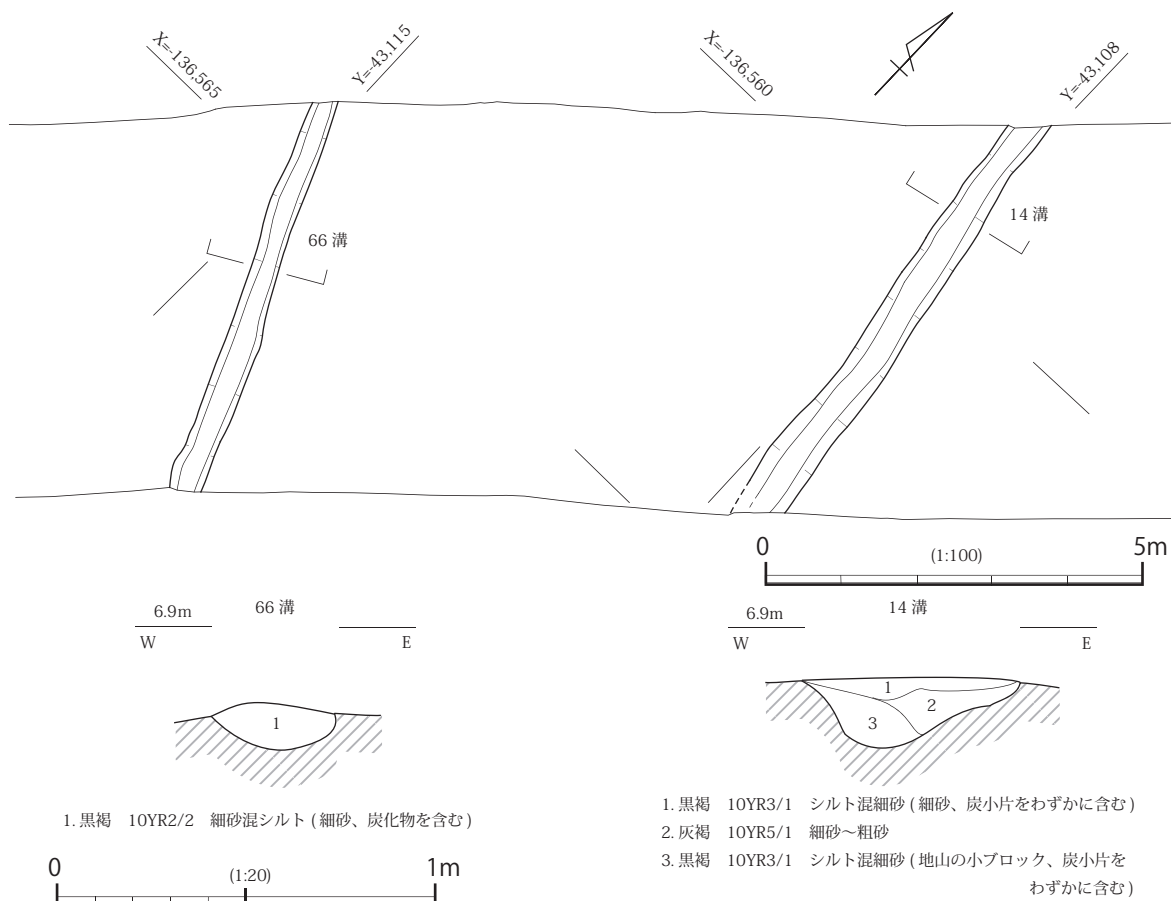


図 83 第 7 地区 第 2 面 14・66 溝 平・断面図

### 58 溝 (図 79・82)

前述の道路状遺構の下面に検出した溝である。29 畦畔の基盤層である第 5 層を除去すると、これに並行する溝が見つかった。西側は 54 溝に切られ、南側は攪乱を受けている。全体の形は不明であるが、残存する幅は 2 m、深さ 0.1 m 前後である。坪境の古段階の形状を示す遺構の可能性が考えられる。

### 49・50・51 溝 (図 79・82、図版 22)

並行する 3 本の溝を検出した。約 2 m 間隔で平行しながら、直線的にのびる、主軸は  $N-75^{\circ}-E$  をとる。埋土はいずれも黒褐色系の細砂混シルトの埋土が入る。

49 溝は検出長 10 m、幅 0.8 m、深さ 0.3 m を測る。溝の断面は、浅い船底状を呈し、底部には若干凹凸が見られる。50 溝は検出長 11 m、幅 0.8 m、深さ 0.4 m を測る。断面は上向きの「コ」の字状を呈し、並列する 3 本の溝の中では一番深く、かつ角をつける形で確りと掘削されている。

51 溝は中央よりやや南側に位置する。検出長は 10 m を測り、溝の両端部は調査区外にのびる。溝の幅は 0.6 m、深さは 0.2 m を測る。溝の断面は、浅くやや歪んだ「U」の字状を呈している。

### 56 溝 (図 79・82)

49 溝と 50 溝を調査区の西端でつなぐ小溝で、主軸は  $N-9^{\circ}-W$  をとる。溝の幅は 0.3 m、深さは 0.1 m を測る。

### 47・48 溝 (図 79・82、図版 22)

49～51 溝の南約 15 m 付近に、これらの溝とほぼ並行して走る溝 2 条を検出した。主軸は  $N-75^{\circ}-E$

をとり、ほぼ東西方向にのびる。48溝の幅0.45～0.7m、深さ0.1～0.2mを測る。47溝の幅0.3～0.6m、深さ0.2mを測り、48溝と比べると細い。断面はいずれも不整な逆台形を呈する。

#### 66溝（図79・83、図版22）

調査区のほぼ中央に位置し、主軸はN-25°-Wをとる。溝の幅0.3～0.5m、深さ0.1～0.2mを測る。6世紀初頭の須恵器杯等が多く出土した。

#### 14溝（図79・80・83、図版21）

66溝の北東に位置し、主軸はN-10°-Wをとり、ほぼ南北方向である。溝の幅0.45～0.65m、深さ0.1～0.2mを測る。

## 8. 第8地区の調査

### （1）遺構面の概要

調査区は第7地区の南西側に接しており、平面は「L」の字状を呈する。現地表面は標高8.1～8.8mを測る。層と遺構面の残りが良好で、各時代の遺構を検出した。第1面～第4面（近世～中世）では耕作溝や畦畔等が主で、耕作地が広がっていたと考えられる。第1面の標高は5.6～6.2m、第2面は5.5～6.1mを測る。

第5面では古代に属すると考えられる掘立柱建物や、今回の調査で最も古い時代の弥生時代中期後半の土坑を検出した。旧地表（遺構）面は下面ほど、南西に向かうにつれ標高が低くなる傾向がある。古代の遺物包含層（基本層序第5層相当）である黒褐色シルト系の層は北東から南西に向かって薄くなっている。

また、壁断面の検討により、旧東海道線軌道敷の存在が明らかとなった。特筆すべき点は、調査区の北西壁を中心に汽車土瓶やガラス瓶が多数出土したことである。周辺の機械掘削時には、他に磁器製弁当箱も出土している。弁当箱は鉄道の軌道敷と思われるバラス層の下にある黒い炭層から出土した。汽車土瓶は、それよりも下となる鉄道の軌道敷の裾部から出土した。

### 8 落込み

図84の第3面26井戸近辺の上面にあたる。軌道敷より古く第1面より新しい。北東から南西方向にのびる細長い攪乱で、長径8.2m以上、短径3.3m、深さ0.1mを測る。「寛永通宝」が出土した。

### （2）第3面の遺構（図84・85、図版24・25）

第3層を除去し、第3面を検出した。当面の標高は5.26～5.85mを測る。第3面では、耕作痕、畦畔の基底部、井戸、土坑群等を検出した。調査区の北側において、畦畔は3条確認した。検出時すでに凸部がほとんど削られていたが、周囲の土と異なる鉄分を多く含む赤褐色の土に変色しており、いずれも基底部の痕跡を確認することができた。畦畔、耕作痕共に、N-35°-W方向に軸をふっている。また、畦畔は確認できなかったが、第7地区と同様の段差もみられた。X=-136,650m、Y=-43,200m付近では、一部の地域だけに唐突にみられる谷地形的な流水堆積砂をはさみ、東面で耕作痕の方向に変化が認められたが、おそらく段差に沿って設けられた水路の氾濫堆積物と思われる。第8地区も第7地区と同様、北東側に向かって緩やかに下降する地形が看取されるため、段状の地形は棚田等の耕作に伴う土地利用のあらわれと思われる。

土坑群は、調査区の東側の畦畔3に沿って検出された。平面は隅円方形が多く、断面は「U」の字や上向きの「コ」の字状を呈するものが多い。埋土は灰黄色系のシルト～粗砂に地山のブロックが混じ

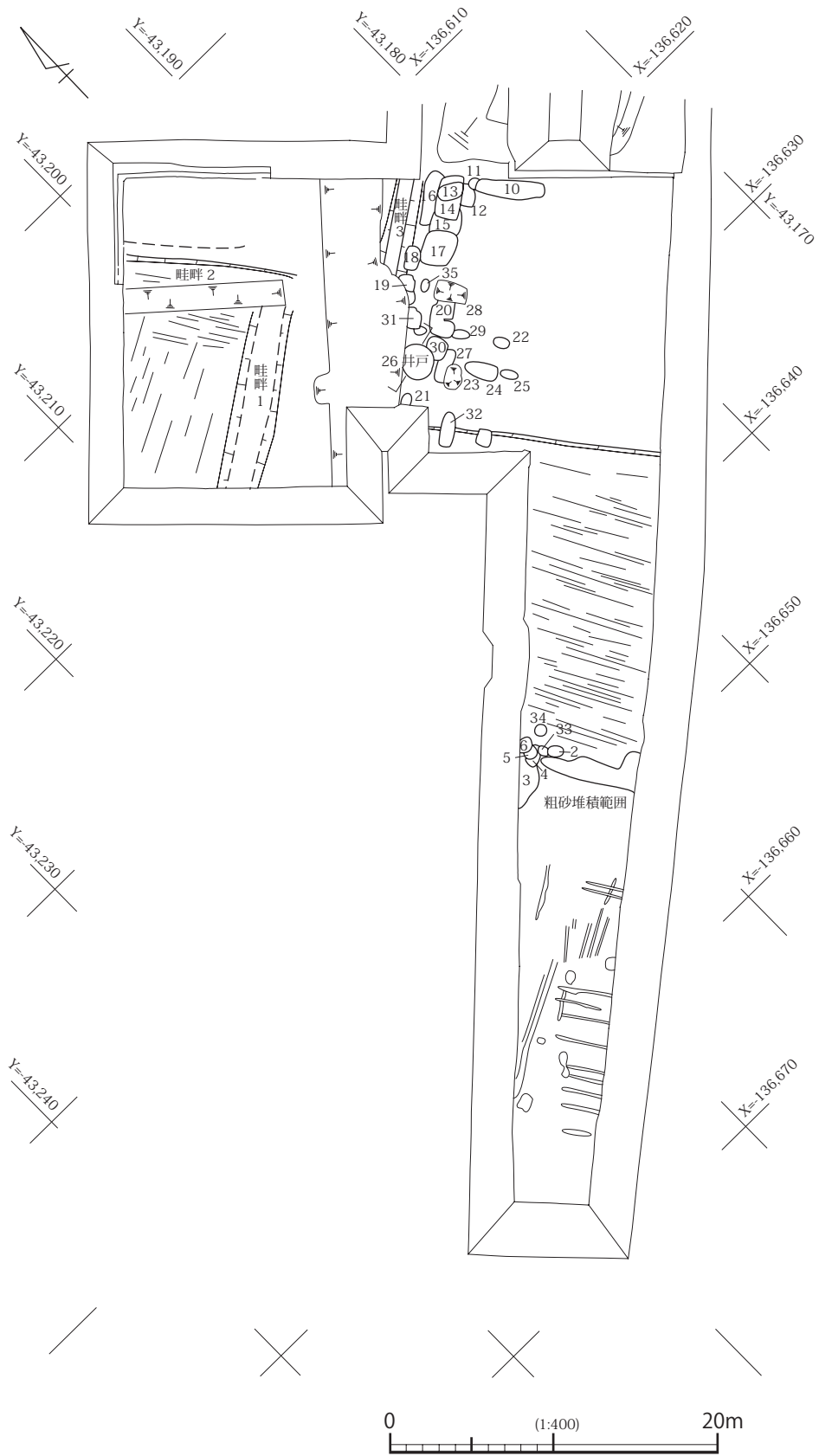


图 84 第 8 地区 第 3 面 全体图

る。土坑を掘削した後、短期間にて埋め戻しが行われたと考えられる。

出土遺物は、13世紀頃と16世紀頃に大別されるが、遺物が出土しない土坑も多く、時期が不明なものも多い。埋土は近似し、土色・土質による時期の判別も不可能であった。26井戸の他は遺構の性格も不明である。

## 2土坑 (図84・85)

調査区の中央より西側に位置する平面が長方形の土坑である。主軸は北西から南東へふる。北西に接する33土坑を切っている。長軸0.9m、短軸0.7m、深さ0.3mを測る。

## 10土坑 (図84・85、図版25)

主軸が北西から南東方向にのびる溝状の遺構である。長軸4.3m、短軸1.0m、深さ0.3mを測る。北側部分は11土坑を切っている。

## 13～15・17土坑 (図84・85、図版25)

これらの土坑は北東から南西方向に直線的に並ぶ形で位置し、連続して切り合う土坑である。

13土坑は14土坑の上層の一部を攪拌する平面が不定形の土坑である。長軸は2.0m、短軸は0.7m、深さ0.05mを測る。

14土坑は西側の15土坑を切る。平面は長方形を呈する。長軸2.7m、短軸1.5m、深さ0.3mを測る。

15土坑は西側を17土坑に、東側を14土坑によって切られている。一辺1.9mの方形と推察できる。深さ0.48mを測る。17土坑は東側が15土坑を切っており、一辺が1.9mの方形、深さ0.43mを測る。

## 18土坑 (図84・85、図版25)

南側が17土坑に接している。平面は隅円長方形である。規模は長径1.6m、短径1.0m、深さは0.4mを測る。

## 19土坑 (図84、図版25)

調査区の北東側に位置し、平面が方形を呈し、一辺は1.0mを測る。

## 20土坑 (図84・85、図版25)

南側が28、29土坑に接し、東側は攪乱を受け、全体の形は不明である。長軸は北東から南西方向に2.1m、短軸は1.1m、深さ0.58mを測る。

## 33土坑 (図84・85)

2土坑に南東側を切られている。平面が円形の土坑である。長軸0.6m以上、短軸0.6m、深さ0.23mを測る。

## 32土坑 (図84・85)

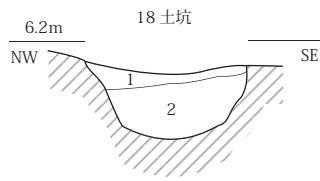
調査区の中央に位置する。平面は長楕円形を呈する。主軸は東北から西南方向にふる。長軸2.2m、短軸0.9m、深さ0.65mを測る。

## 畦畔1 (図84)

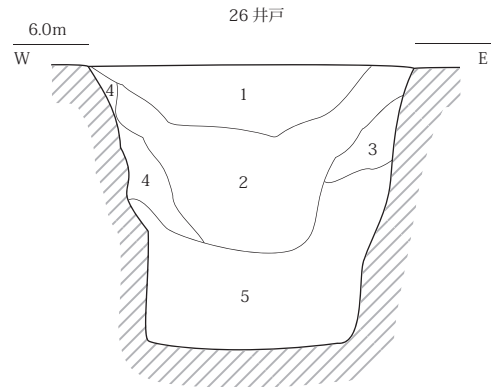
調査区の北に位置する。南西から北東方向にのびる。軸はN-55°-Eをとる。幅約1.6m、長さ約11mを測り、若干の高まりをもつ。

## 畦畔2 (図84)

調査区の北側に位置する。北西から南東へのびており、畦畔1と直交する。幅約1m、長さ約11mを測り、若干の高まりをもつ。

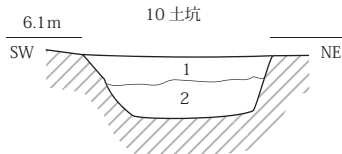


1. 灰オリーブ 5Y4/2 シルト混細砂～粗砂
2. 暗灰黄 2.5Y4/2 シルト多混細砂～粗砂  
(黒褐 10YR3/1 シルト混細砂のブロックを少し含む 炭片含む)

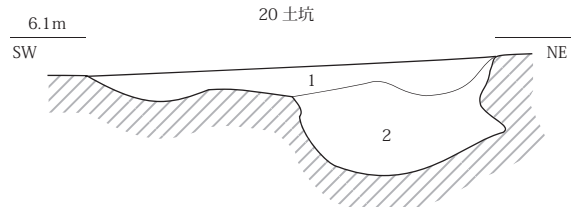


1. にぶい黄 2.5Y6/3 細砂～粗砂 (オリーブ黒 2.5Y3/1 粘土帯状に含む)
2. 暗灰黄 2.5Y4/2 シルト混細砂～粗砂  
(木片、3cm 大の礫含む 地山をブロックで少し含む)
3. 灰黄 2.5Y5/1 粘土混細砂～粗砂 (2のブロックで含む)
4. 2に にぶい黄 2.5Y6/3 細砂～粗砂
5. オリーブ黒 5Y3/2 粘土少混粗砂 (地山のブロックを若干含む)

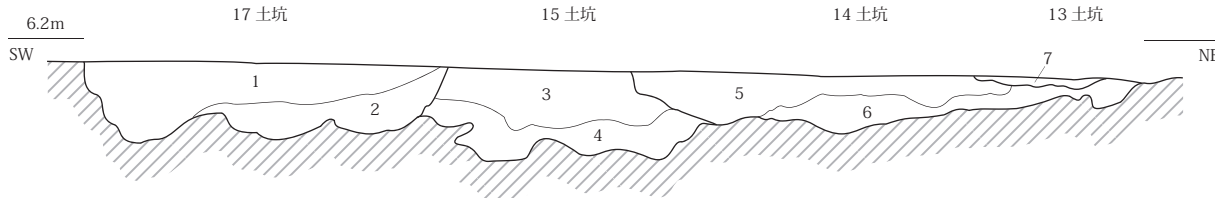
※第8地区の地山：黄褐 2.5Y5/4 粗砂混粘土～シルト



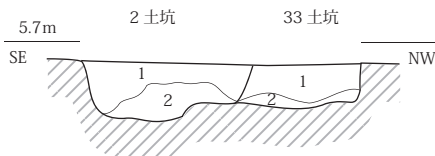
1. 灰黄褐 10YR4/2 シルト混細砂～粗砂  
(黄灰 2.5Y4/1 シルト多混粗砂をブロックで少し含む)
2. オリーブ黒 5Y3/2 シルト多混粗砂 (地山のブロックを少し含む)



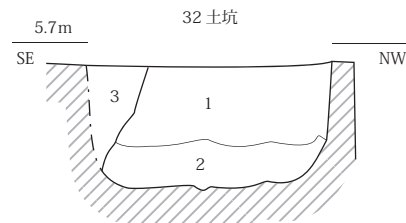
1. 黄灰 2.5Y4/1 シルト多混細砂～粗砂
2. 灰 5Y4/1 シルト混細砂～粗砂



1. 灰 5Y4/1 シルト多混細砂～粗砂
2. 灰オリーブ 5Y4/2 シルト混細砂～粗砂  
(暗灰黄 2.5Y5/2 細砂～粗砂のブロック、地山の小ブロックを少し含む)
3. 灰 5Y4/1 シルト混細砂～粗砂  
(オリーブ黒 5Y3/1 シルト混細砂～粗砂をブロックで含む 炭片含む)
4. オリーブ黒 5Y3/1 粘土混細砂～粗砂  
(地山をブロックで少し含む)
5. 黄灰 2.5Y4/1 細砂～粗砂  
(黄褐 2.5Y5/3 シルト混細砂～粗砂をブロックで含む 地山をブロックで若干含む)
6. 暗灰黄 2.5Y4/2 シルト混細砂～粗砂 (地山をブロックで含む)
7. にぶい黄 2.5Y6/3 細砂



1. 灰 5Y4/1 細砂混シルトと灰黄 2.5Y6/2 細砂がブロック状をなす
2. 黄灰 2.5Y5/1 粘土～シルトがブロック状をなす



1. 黄灰 2.5Y6/1 シルト～微砂 (上部に Fe 沈着 Fe 斑多い)
2. 灰 5Y4/1 細砂と細砂混シルト  
(ブロック状 30mm の礫わずかに含む)
3. 攪乱



図 85 第 8 地区 第 3 面 遺構 断面図



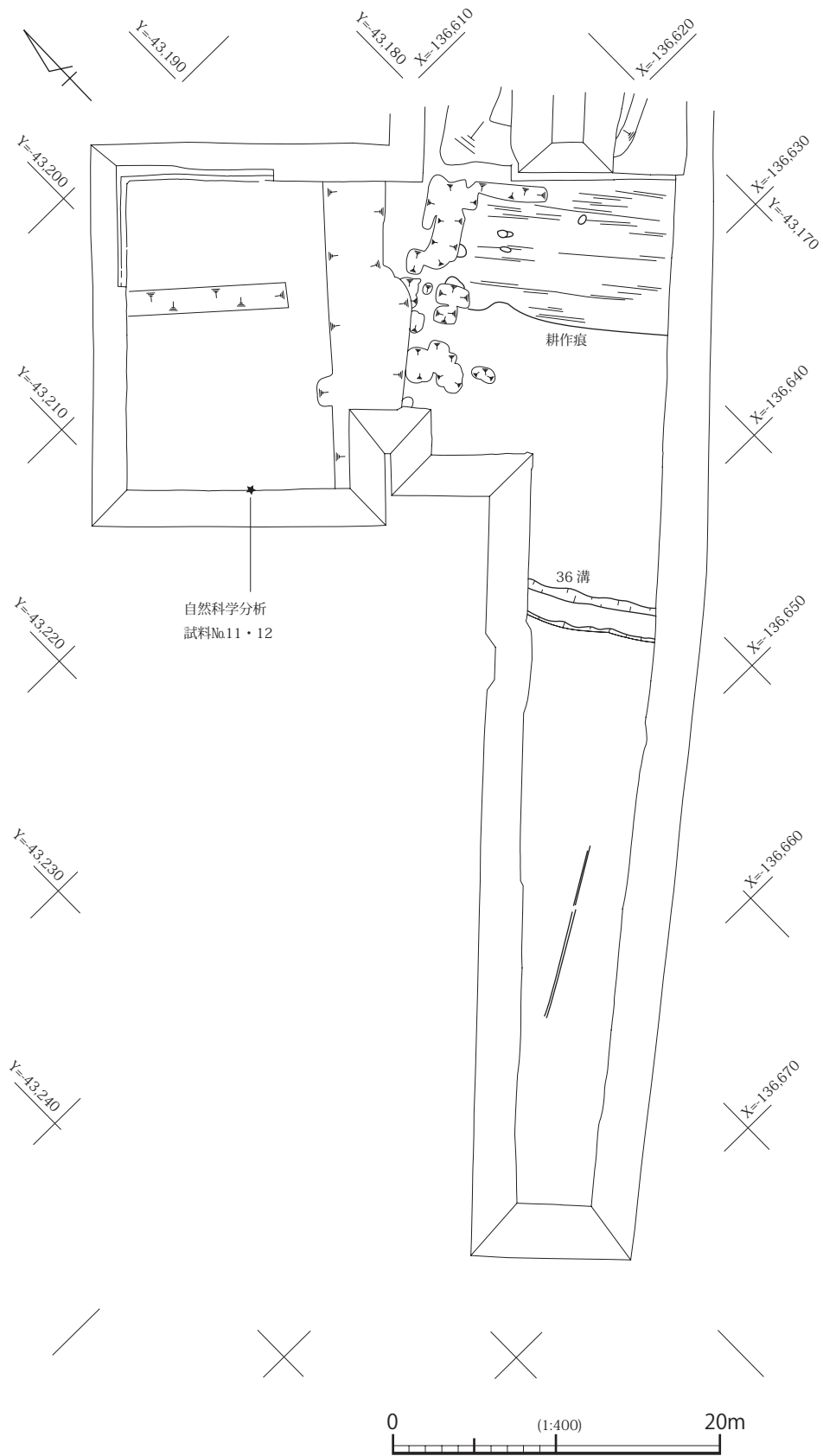


图 86 第 8 地区 第 4 面 全体图

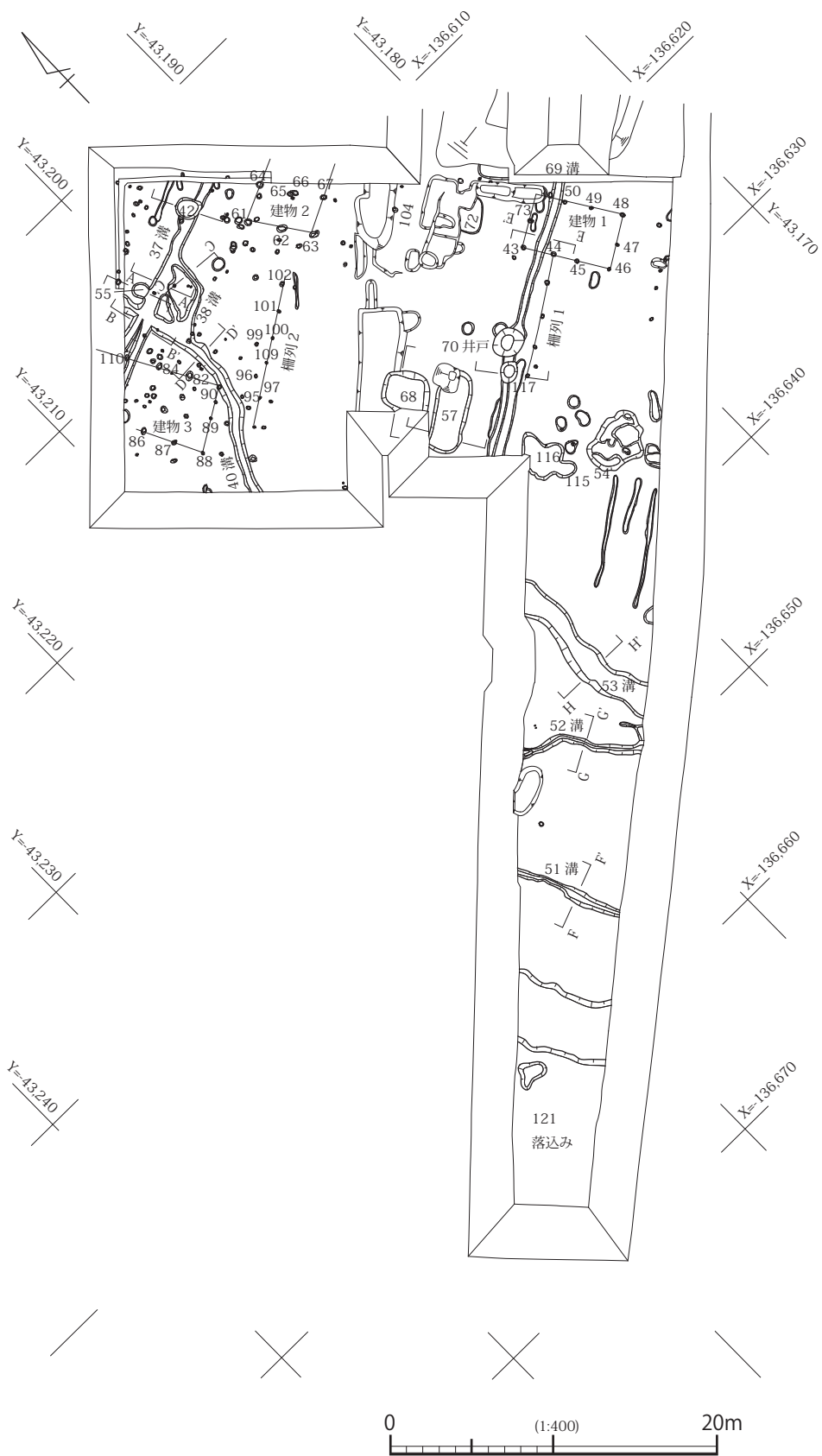


图 87 第 8 地区 第 5 面 全体图

### 畦畔3 (図84)

調査区の北東側に位置する。幅約1.8m、長さ約6mを測る。畦畔1と同様、若干の高まりをもつ。軸は畦畔1と同様であるが、直線状に並ばず、やや南西方向にずれている。

### 26井戸 (図84・85、図版25)

南端の土坑集中部のほぼ中央に位置し、北側は攪乱を受けている。平面が円形状を呈した素掘りの井戸である。直径約2m、深さ1.5mを測る。

#### (3) 第4面の遺構 (図86、図版24)

第4層の残存部が限られており、遺構面が確認できたのは部分的である。調査区の東側と、第8地区の北東端から $X = -136,635\text{m}$ 、 $Y = -43,190\text{m}$ 付近にて検出した段差までの範囲で、主に北西から南東方向にのびる耕作溝、土坑と段差を検出した。南西半は上面の耕作により攪拌されている。段差をはさみ南西側に南西から北東方向の耕作痕を1条検出した。段差をはさんで、異なる方向の耕作痕が広がっていた可能性が高い。当面は標高5.2~5.8mを測る。

#### (4) 第5面の遺構 (図87~94、図版25~27)

第5層を除去し、弥生時代~古代までの遺構を検出した。当面は標高5.1~5.8mを測る。古代の主な遺構は掘立柱建物、井戸、土坑、溝と多数のピットである。掘立柱建物及びピットは調査区の北よりに分布し、北西側の微高地上と北東端に集中して見られる。ピットの多さから建物の建て替えが行われた可能性が考えられる。

第7地区で検出した溝の延長線上に、当地区でも同様な溝が検出されているが、これらは井戸、土坑、ピットに切られており、当地区の古段階の遺構と思われる。当調査区は北東が高く南西に向かって低くなる地形を呈している。

多くの溝は当地区北側で検出している。東西方向に直線的に走る溝は、その方向性から第7地区で検出した47~51溝のいずれかにとりつく可能性が考えられる。

弥生時代の遺構は、 $X = -136,635\text{m}$ 、 $Y = -43,185\text{m}$ 付近に集中して検出された。いずれも土坑で、土壌化の弱い比較的砂礫を多く含む埋土であった。

### 建物1 (図87・88、図版25・26)

調査区の東側に位置する。建物の主軸は $N-31^\circ-W$ をとる。規模は $5.5 \times 3.4\text{m}$ の桁行3間、梁間2間である。柱穴の大きさは直径0.2~0.3mを測る。深さは0.2~0.4mを測る。柱痕が認められる柱穴から推定すると、柱材は直径0.1m程と考えられる。

### 柵列1 (図87・88、図版25)

建物1の西側から建物の主軸に対してほぼ直角に西側へのび、主軸は $N-57^\circ-E$ をとる。建物1と一連の遺構かと思われる。柵列の西端から建物の柱穴までの距離は7.6mを測る。柱穴の大きさは直径0.2~0.3mを測る。深さは0.1~0.2mを測る。

### 建物2 (図87・89、図版26)

調査区の北東側に位置し、遺構の東側は調査区外へのびる。桁行が東西方向だと仮定すると、建物主軸は $N-61^\circ-E$ である。規模は2.4m以上 $\times$ 4.0mの桁行が2間以上、梁間が2間である。柱穴の大きさは直径0.4~0.7mを測る。深さは0.1~0.4mを測る。64柱穴には、埋土下層の直上に焼けた根石が出土している。11世紀前半頃の遺構と考える。

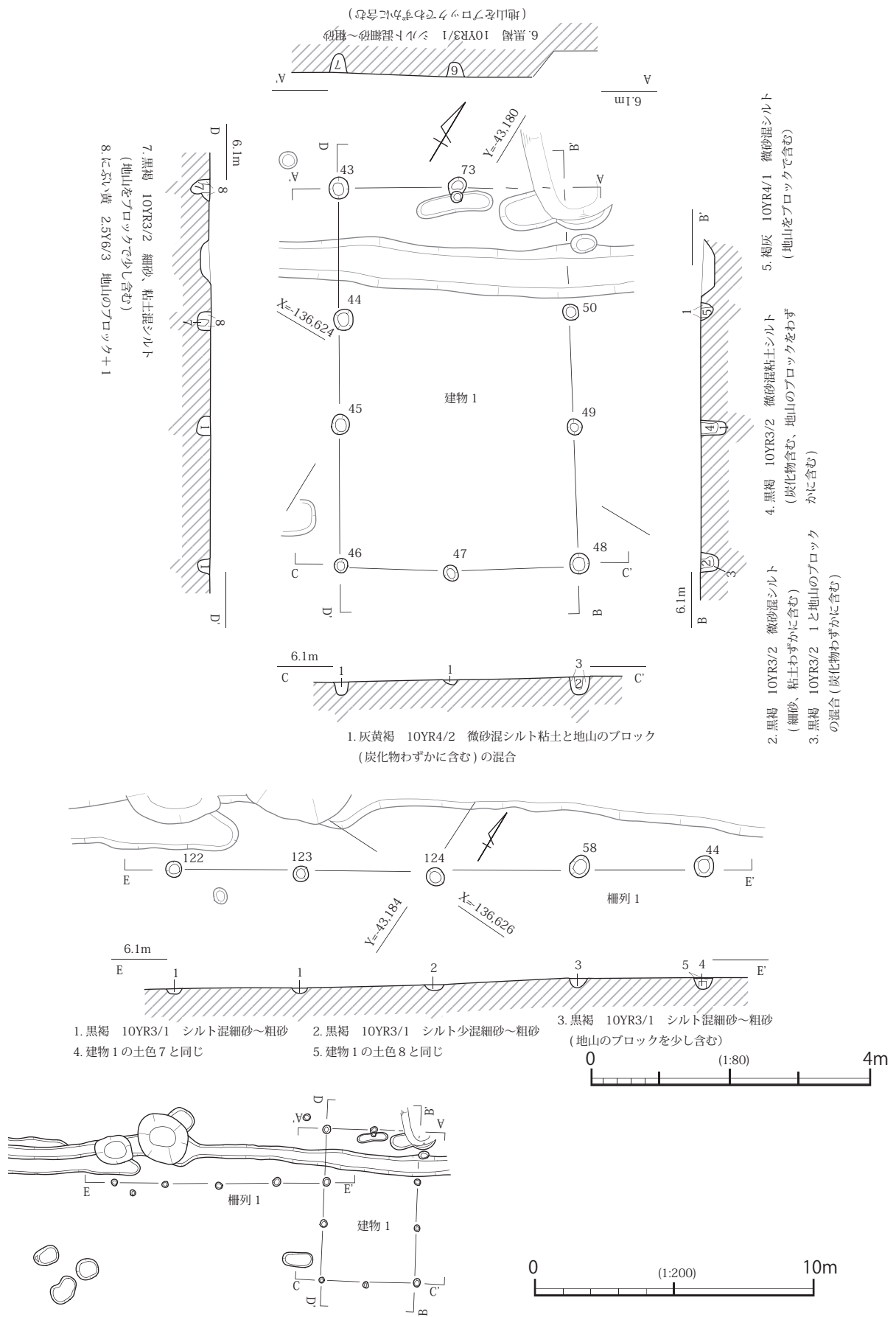


図88 第8地区 第5面 建物1、柵列1 平・断面図

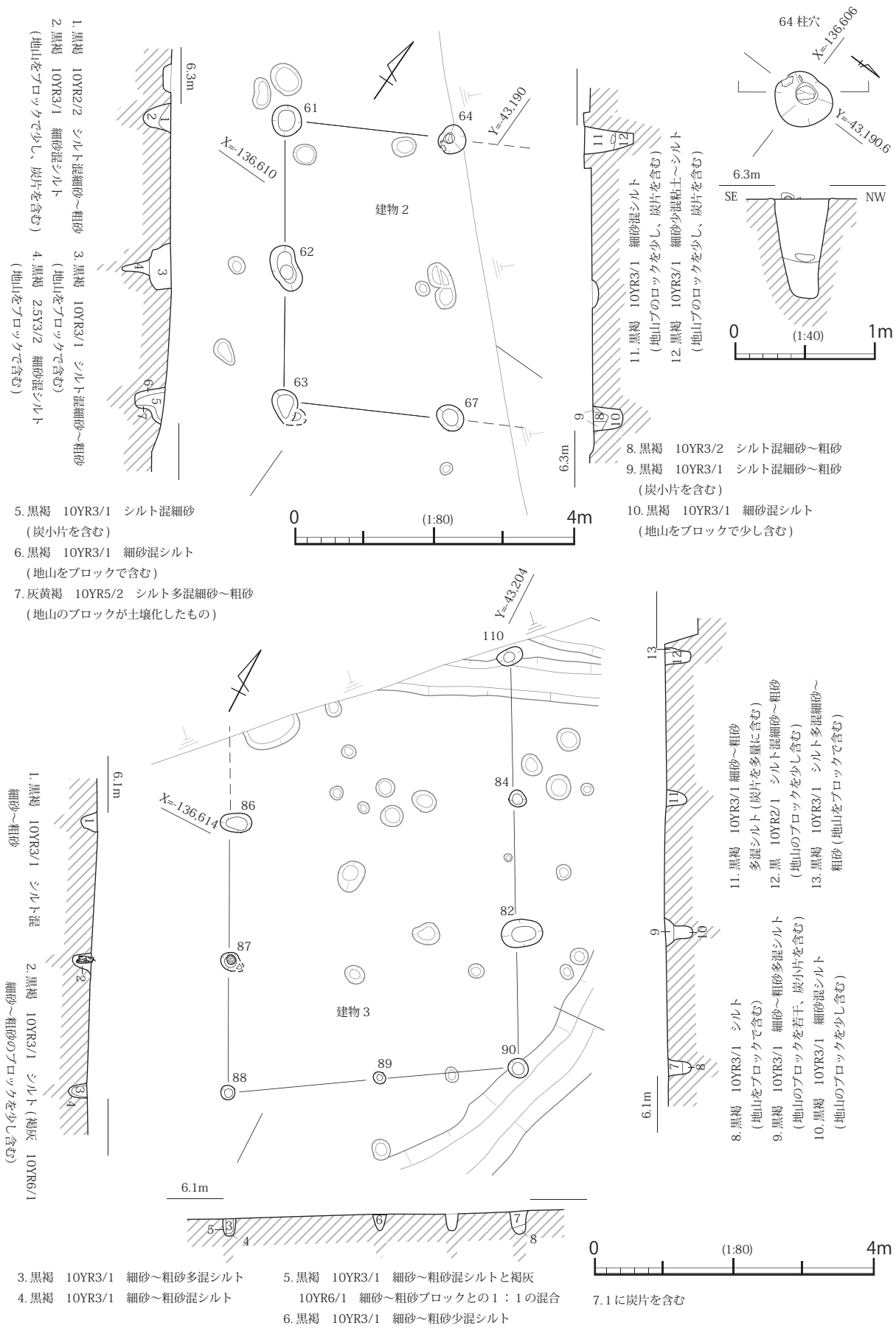


図 89 第 8 地区 第 5 面 建物 2・3 平・断面図

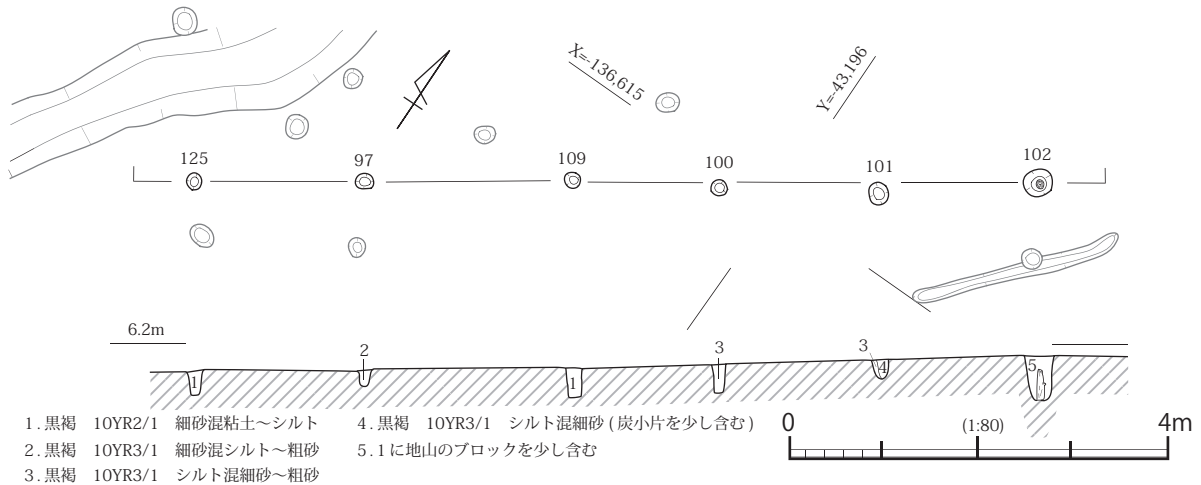


図90 第8地区 第5面 柵列2 平・断面図

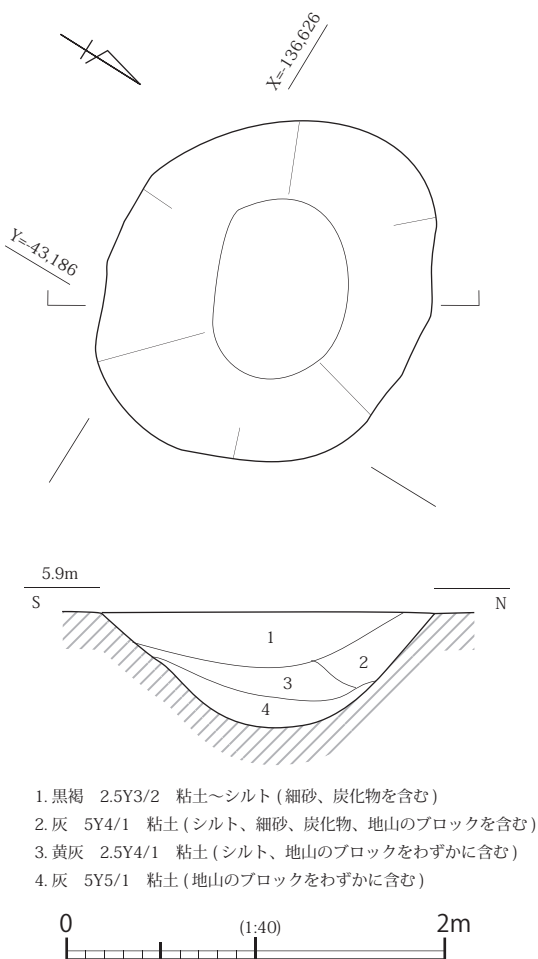


図91 第8地区 第5面  
70井戸 平・断面図

### 建物3 (図87・89、図版26)

調査区の北西に位置する。建物の主軸はN-27°-Wをとる。規模は5.9mないしはそれ以上×4.2mを測り、桁行は3間以上、梁間は2間である。柱穴の大きさは直径0.2~0.6mを測る。深さは0.2~0.4mを測る。87柱穴は柱材が残存していた。なお、当建物は37、40溝を切る。

### 柵列2 (図87・90)

建物3の南側に位置し、建物主軸に対して直交する柱列である。主軸はN-56°-Eをとる。建物3と一連のものか。柱穴の大きさは直径0.2~0.3mを測る。深さは0.2~0.5mを測る。102柱穴は柱材が残存していた。

### 104ピット (図87)

調査区の北東、建物1と建物2のちょうど中間に位置する。平面は楕円形状を呈する。長径0.4m、短径0.3m、深さ0.1mを測る。周辺部の攪乱が激しく、詳細は不明であるが、他のピットと掘立柱建物を構成した可能性も考えられる。土師器小皿が出土している。

### 70井戸 (図87・91、図版25・26)

柵列1の北側に位置し、調査区の東側を北東から南西方向に走る69溝を切る。平面が円形の素掘りである。底部は椀底状を呈する。規模は1.8×1.7m、深さ0.6mを測る。



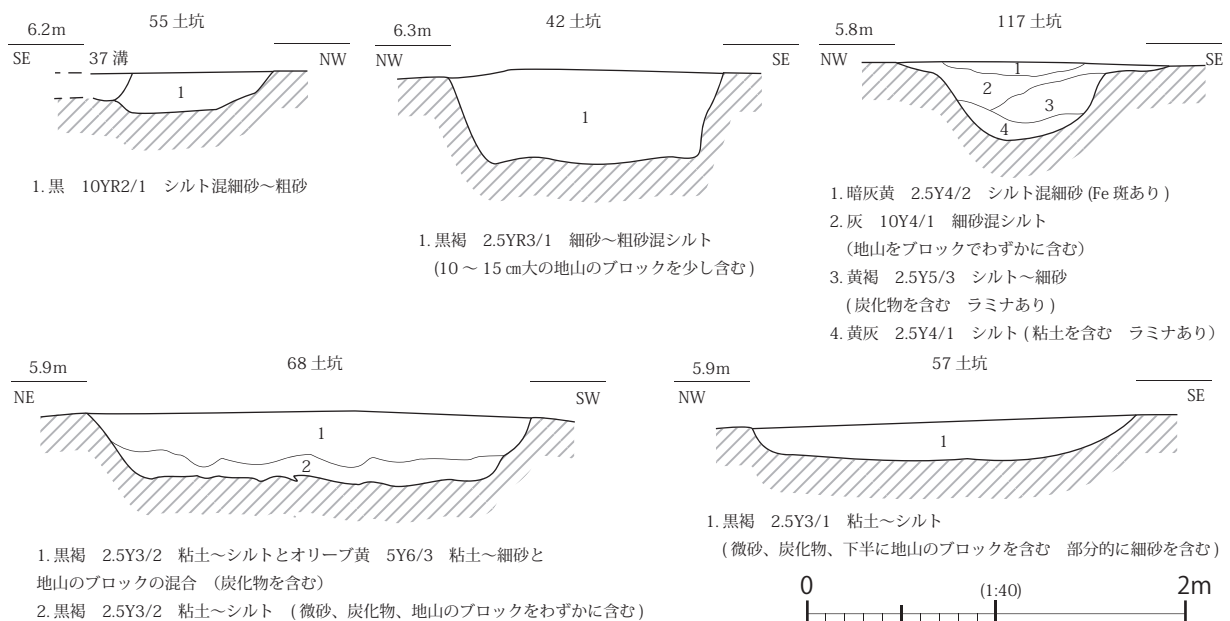


図92 第8地区 第5面 土坑 断面図

### 117土坑 (図87・92)

調査区の北東、70井戸の西側に位置し、平面は楕円形を呈し、長径1.4m、短径0.9m、深さ0.42mを測る。

### 55土坑 (図87・92)

調査区の北に位置する。平面は円形状を呈する。大きさは直径約1m、深さ0.22mを測る。黒色土器A類椀が出土している。

### 42土坑 (図87・92)

調査区の北側、55土坑の東側に位置する。平面は円形状を呈し、断面は台形を呈する。大きさは直径1.5m前後、深さは0.5mである。

### 68土坑 (図87・92)

117土坑の北側に位置し、西側は若干攪乱を受けている。平面は四角形状の長径2.8m、短径2.5m以上、深さ0.4mを測る。土師器杯片が出土している。

### 57土坑 (図87・92)

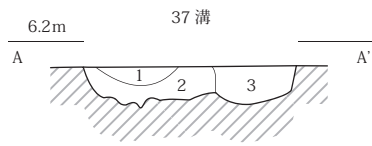
68土坑の南側に位置する。平面が隅円長形状を呈する。大きさは長径5.3m、短径2.1m、深さ0.2mを測る。黒色土器A類椀、須恵器鉢が出土している。

### 37・38・40溝 (図87・93、図版26)

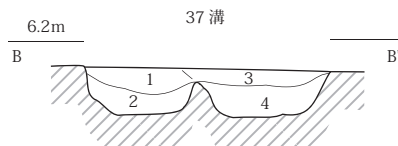
これらの溝は互いに接続もしくは交差するが、切り合い関係は認められなかった。よって、同時期に並存した可能性が高いと思われる。

37溝は調査区の北を東西方向で直線状に走り、主軸はN-72°-Eをとる。溝の幅は約1m、深さ0.2～0.25mを測る。両側とも調査区外へのびるが、第7地区で検出した49～51溝の延長線上にあたり、関連が示唆される。

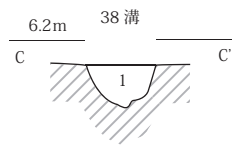
38溝は37溝中央付近から南へのび、さらに西へ屈折して40溝に接続する。溝の幅は0.5m前後、深さ0.23mを測る。



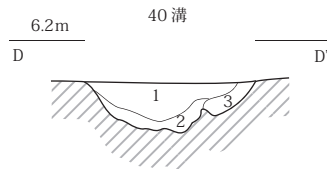
1. 褐灰 10YR4/1 シルト混細砂～粗砂  
(地山をブロックで少し含む)
2. 黒褐 10YR3/2 シルト多混細砂～粗砂  
(地山をブロックで若干含む)
3. 黒褐 10YR3/1 シルト混細砂～粗砂  
(地山をブロックで含む)



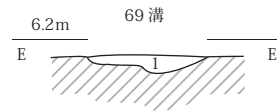
1. 灰黄褐 10YR4/2 シルト混細砂～粗砂
2. 黒 10YR2/1 細砂～粗砂多混シルト  
(褐灰 10YR6/1 細砂をブロックで少し含む)
3. 黒褐 10YR3/1 シルト混細砂～粗砂
4. 黒褐 10YR3/1 シルト混細砂～粗砂  
(褐灰 10YR6/1 細砂～粗砂をブロックで含む)



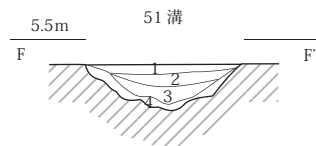
1. 黒褐 10YR3/2 シルト混細砂～粗砂  
(地山を小ブロックで少し、極粗砂を含む)



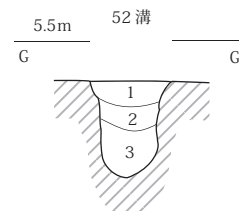
1. 黒 10YR2/1 シルト多混細砂
2. 黒 10YR2/1 シルト混細砂～粗砂 (地山をブロックで若干含む)
3. 黒褐 10YR3/2 シルト混細砂～粗砂 (地山をブロックで若干含む)



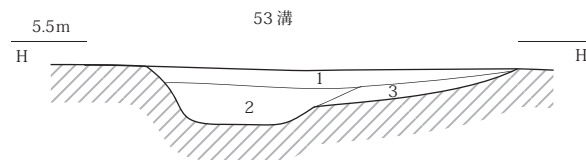
1. 褐灰 10YR4/1 細砂～粗砂多混シルト



1. 黒褐 10YR2/2 粘土～シルト (上半に Fe 沈着 微細炭化物をわずかに含む)
2. 黄灰 2.5Y4/1 粘土～シルト (Mn あり)
3. 黒 10YR2/1 粘土～シルトと微砂 (炭化物を含む)
4. 黄灰 2.5Y5/1 粘土～シルトと粗砂 (ブロック状に混合)



1. 褐灰 10YR4/1 シルト混粗砂
2. 黒褐 10YR3/1 シルト多混細砂～粗砂
3. 黒褐 10YR3/2 シルト  
(10～15cm大の地山のブロック、粗砂を含む)



1. 黒褐 10YR3/2 シルト混細砂～粗砂
2. 灰黄褐 10YR4/2 シルト含む細砂～粗砂 (地山をブロックで若干含む)
3. 灰黄褐 10YR5/2 細砂～粗砂

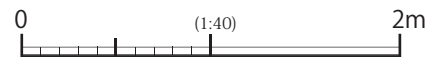


図 93 第 8 地区 第 5 面 溝 断面図

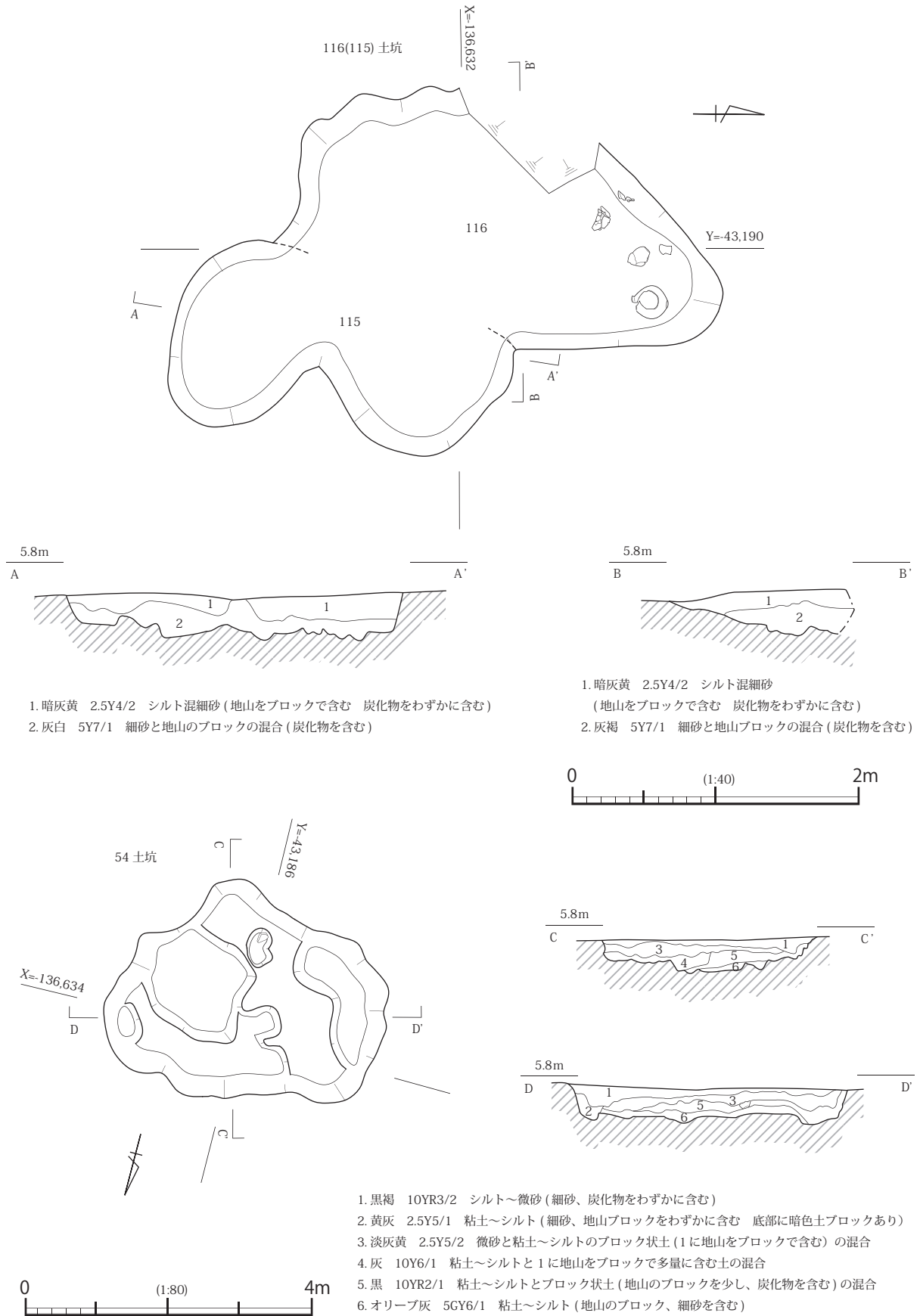


図94 第8地区 第5面 54・116 (115) 土坑 平・断面図

40溝は37溝や38溝と接続し、南西方向に走る。溝の幅は0.5～1 m、深さ0.27mを測る。等高線に沿った溝である。

#### 69溝 (図87・93)

調査区の東側に位置する。直線状に走り、主軸はN-59°-Eをとる。溝の幅は0.5～1 m、深さ0.08 mを測る。第7地区で検出した47、48溝の延長線上にあたり、関連が示唆される。

#### 51～53溝 (図87・93)

これらの溝は調査区の西側に位置し、おおむね北西から南東方向に走る。いずれも等高線に沿った溝である。

51溝はX=-136,655m、Y=-43,205m付近に位置する。軸はN-23°-Wをとる。残存長7.0m、幅0.8m、深さ0.25mを測る。

52溝は51溝よりも東側に位置し、北西から南東方向へ屈曲しながら走る。溝の幅0.5m前後、深さ0.5 mを測る。断面は「U」の字状を呈する。人為的な掘削による溝と考えられる。

53溝は調査区のおおむね中央を少し屈曲しながら、ほぼ南北に走る。底部の形状は2段になっている。残存長11.0m、幅2.0m前後、深さ0.3mを測る。両端とも調査区外へのびる。

#### 116 (115) 土坑 (図87・94、図版26)

調査区の中央北よりに位置し、不定形を呈する。長径3.5m、短径2.0m、深さ0.32mを測る。底部は凹凸が見られる。灰白系のシルト～細砂に地山をブロックで含む埋土がはいる。掘削後、短期間にて埋め戻されたと考えられる。弥生時代中期後半の土器が出土している。遺構検出当初は115土坑と116土坑に分かれる可能性を考えたが、埋土の観察ではその判別はつかなかった。

#### 54土坑 (図87・94、図版26)

116 (115) 土坑の南側に位置し、不定円形を呈する。長径4.0m、短径3.0m、深さ0.25mを測る。底部は凹凸が見られる。埋土は黒褐色、灰黄色系の粘土～シルトに地山をブロックで含み、少量の細砂が入る。掘削後、短期間にて埋め戻されたと考えられる。当土坑も116 (115) 土坑と同じく弥生時代中期後半の土器が出土した。

## 9. 第9地区の調査

### (1) 遺構面の概要

第9地区は今回報告の調査区の内、最も南西側に位置している。現地表面は標高7.8～9.8mを測る。操車場の盛土層以下の包含層は、北東側の調査区と比較してレベルが低く、当調査区の旧地形は低地であったことを示している。第1面～第4面(近世～中世)では鋤溝痕やそれらと並行する溝、段差が検出され、耕作地であったと考えられる。

第5面には、生痕が多数みられ、低湿地の様相を示していた。第8地区から第9地区にかけて、大きくは千里丘陵から派生する谷地形にあたりと考えられる。

他に、調査区北東側に張り出した凸部にて、北端の壁断面で操車場盛土層直下に、真砂土や礫で構成される操車場造成時の土とは異なる人為的な盛土層を検出した。この盛土層は調査区の向かい合う両壁面に対応する形で確認される(写真2、図11)。また、第8地区にても、旧東海道線軌道敷の存在を記したが、ちょうど、当地区の両壁断面を結んだ延長上にあたる。

今回の調査区の位置を明治44年(図78)の地図に重ね合わせた際、旧国鉄の東海道線がその北端を通っ

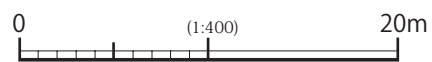
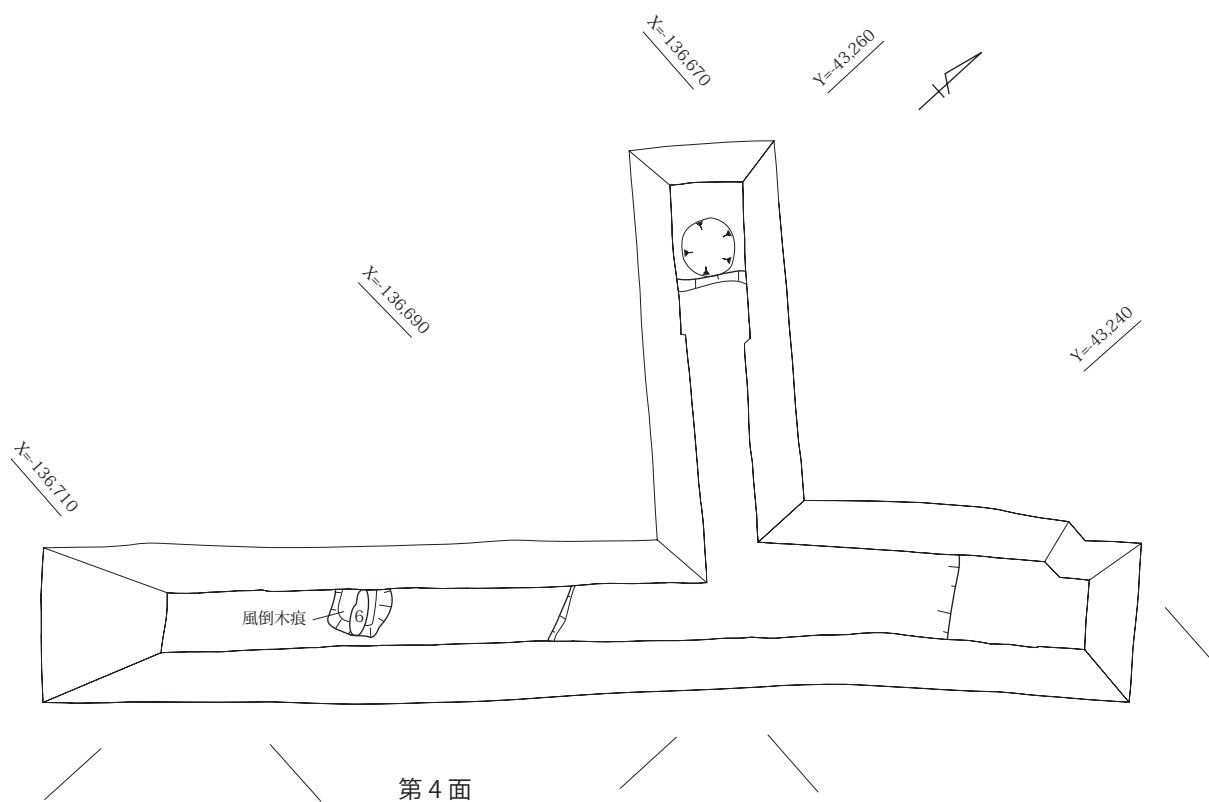
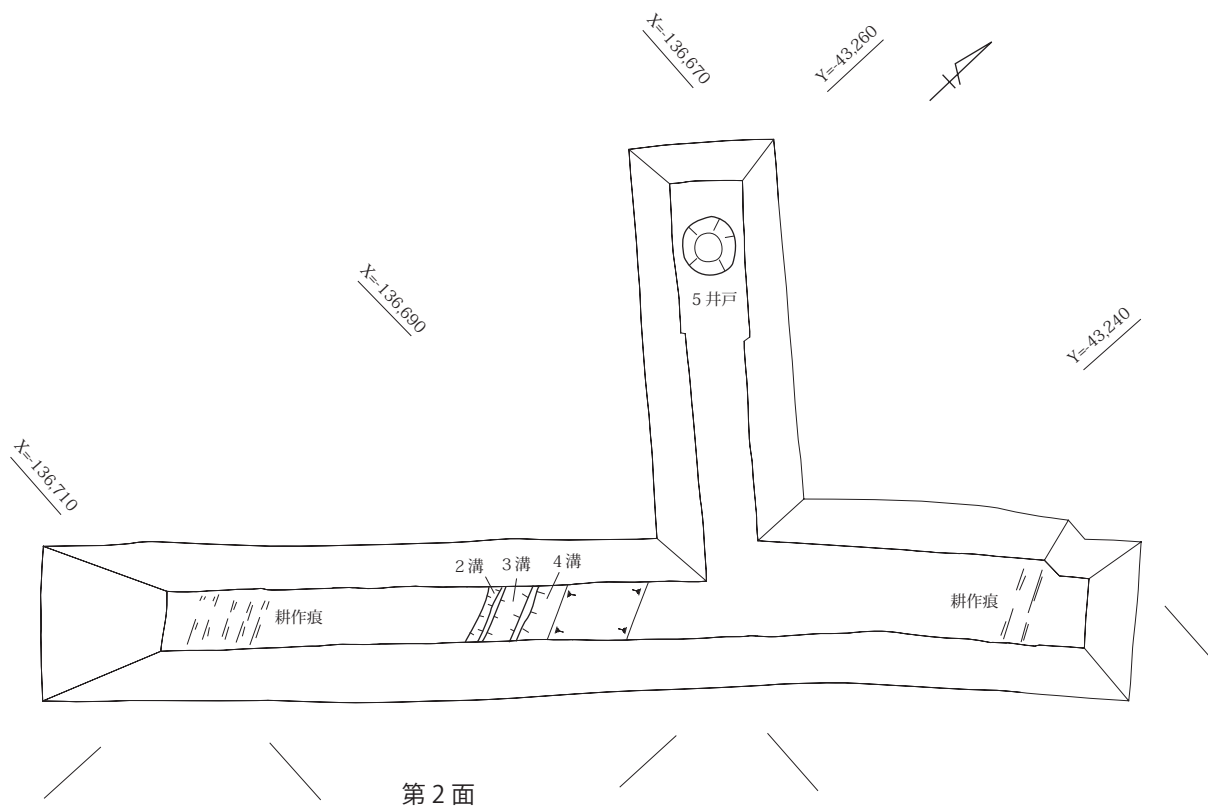


图95 第9地区 第2面·第4面 全体图

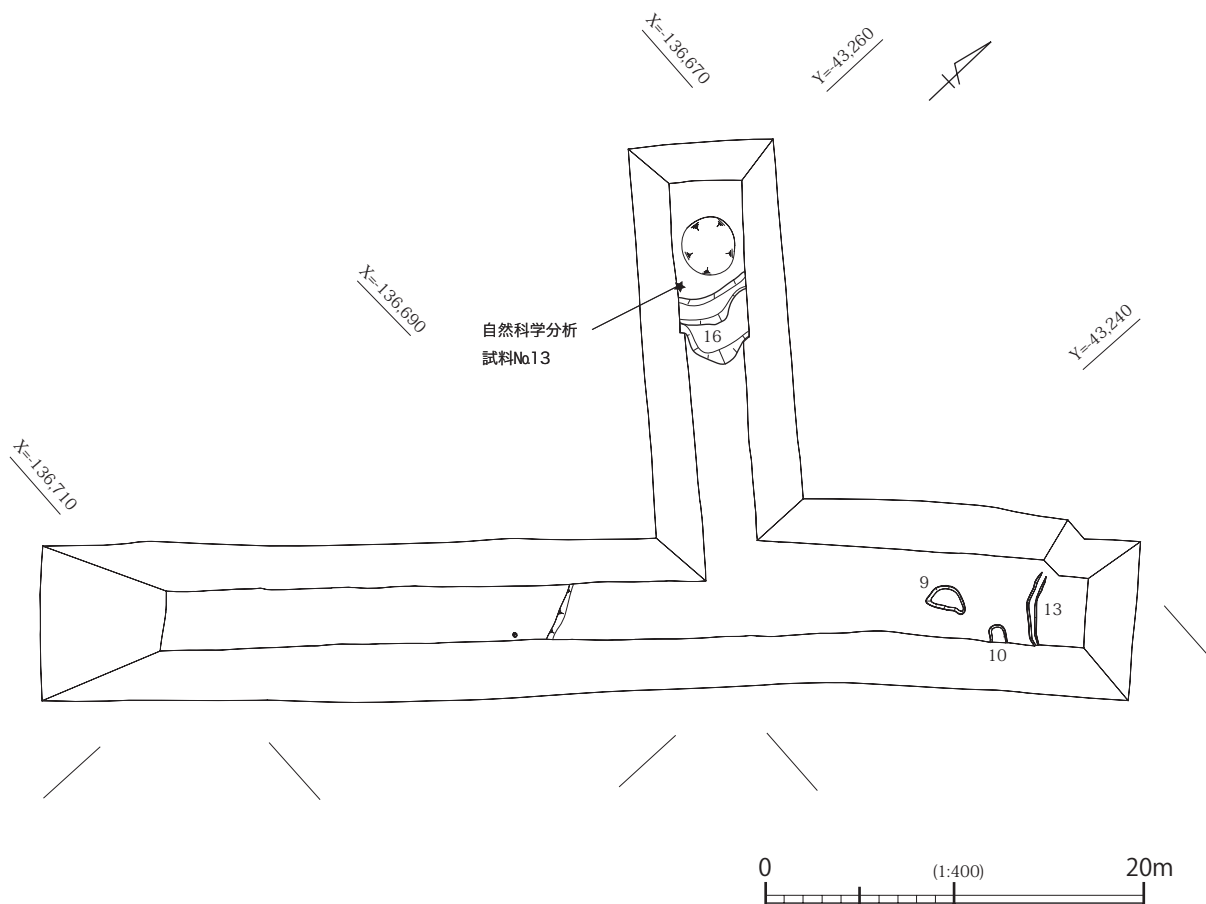


図96 第9地区 第5面 全体図

ていたと推定でき、これらの壁断面で観察できた盛土は、旧東海道線軌道敷の可能性が高いと考える。

(2) 第2面の遺構 (図95)

当面は標高5.35～5.9mを測る。井戸、溝と耕作痕を検出した。耕作痕はN-35°-W方向を軸にしている。溝も、軸がN-35°-W方向に走る。4溝の東肩から北東4mの範囲は後世の溝によって壊されているため、不明な点も多いが、2～4溝の位置する当調査区の中央部付近は、これよりも古い時代から操車場造成時までの間に、段差や溝が多数検出された地点であり、当面における溝もなんらかの区画の意味を持っていた可能性が考えられる。

5井戸は、直径約3mを測る。3段の桶状井筒を確認した。井戸の掘方からは古墳時代の須恵器片と備前焼かと思われる鉢の片口部分が出土している。井戸内からは主に近世の遺物が出土している。他に弥生時代の土器片や、古墳時代の須恵器、中世の瓦器、国産陶器、中国陶磁器等を含む。

(3) 第3面の遺構

耕作痕を部分的に確認した。上層の耕作の影響のため遺構の残存状態は悪く、全体を通してわずかな耕作の痕跡のみを検出するにとどまった。この面でも当調査区の中央部に向かって全体的に土地が低くなっていることを確認した。当面は標高4.9～5.7mを測る。

(4) 第4面の遺構 (図95)

第4面は、当調査区において、耕作地としての利用が確認できる最も古い面であった。耕作痕は第3面同様、部分的に残っていた。また、これらの耕作痕に並行し、調査区北東から南西方向に向かって低

くなる段差を、2箇所検出した。当面は標高4.7～5.65mを測る。

## 6土坑 (図95)

調査区南部で検出した土坑で、平面が楕円形状を呈し、長径2.4m、短径0.8mを測る。

### (5) 第5面の遺構 (図96、図版27)

第5層は調査区の北東端、北西端、南西端の微高地に部分的に残存しており、これを除去した第5面が見られる部分も当層直下に限られる。標高5.0～5.6m前後を測る。遺構としては、北東端に13溝と9土坑、10土坑を検出したのみであった。当面では有機物による変色や生痕が多数確認された。湿地化していたようである。他に、16流路、風倒木痕を確認した。

## 16流路 (図96、図版27)

北東側に張り出した凸部北西端にて幅3.7m、深さ0.5～0.7mを測る、砂礫で埋没していた16流路を検出した。

16流路下層の有機物を試料として、<sup>14</sup>C年代測定を行ったところ約8700年前、縄文時代早期中葉相当の実年代を得た。

珪藻分析では当時、内湾の海域とつながり、潮の干満による水の移動が主に行われるような性格を有した流路であったと推定された。また、花粉化石を抽出した結果、周辺はハンノキ属、カヤツリグサ科、イネ科の沼沢地に生育する植物が繁茂し、コナラ属コナラ亜属等の広葉樹林が広がっていたことを知り得た。(第IV章第1・3節参照)

第5面以下は人為的な遺構は見られない。遺構最終面の第4面、第5面の基盤となる層の一部で、褐灰色系のシルト混細砂～粗砂層が部分的に確認された。この層を除去した面は標高4.3～5.3mを測る。



### 第3節 平成21年度の調査

#### 1. 第1地区、第2地区の調査

平成21年度調査の第1地区、第2地区は平成19年度第2地区の南端に隣接するように位置する。幅約3.5mのJRの第二職員通路部をはさみ、南東側が第1地区、南西側が第2地区である。調査面積は、第1地区が約13㎡、第2地区が約27㎡である。

両地区に堆積した土層を分層したが、近接することもあり、層序にほとんど違いは認められず、検出した面も共通すると考えられる。よって、両調査区の基本層序、検出面はまとめて記述する。

**基本層序** (図97) 標高7.8m前後である。

両地区の地表面は、標高7.8m前後である。旧吹田操車場、東海道線を建設するに当たり、それ以前の旧耕作土の上に、直接盛土を行っている。盛土は、第1地区で1.5m前後、第2地区で1.6m前後の厚みで堆積する。旧耕作土及びその床土の下には近世の堆積層が2層、中世の堆積層が2層、古代の堆積層が1層、さらに地山と考える無遺物のシルト～砂礫層が堆積している。旧耕作土・床土層より下位の層の厚みは各々0.1m前後を測り、各地区ではほぼ水平に堆積する。両地区の土層堆積の順序は変わらないが、各層・面共に第2地区が相対的に標高は若干低い。なお、柱状模式図内の番号と以下の土色・

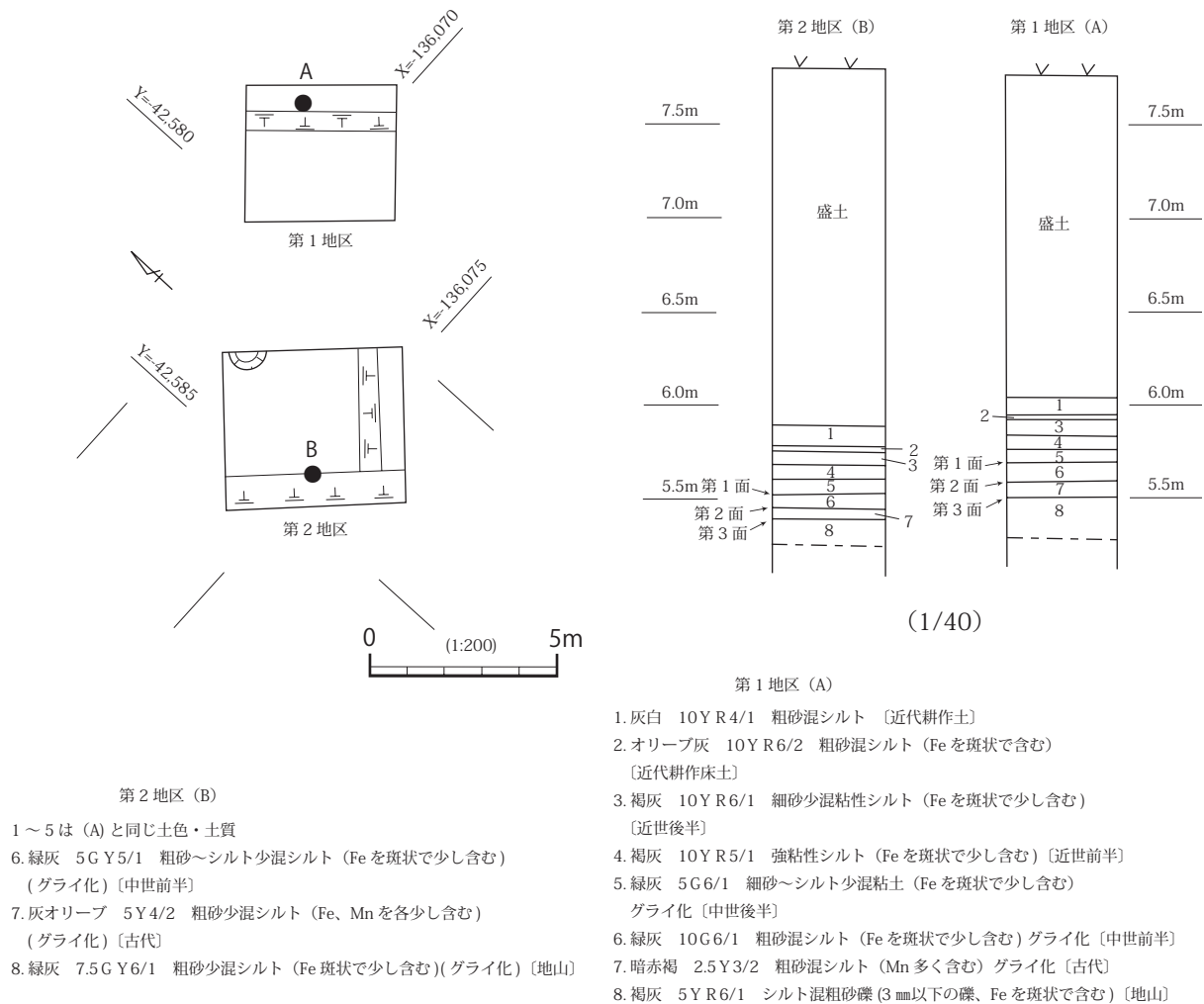


図97 平成21年度 第1・第2地区 平面図及び 層序柱状図

土質の説明における数字とは符合する。

**第0層** 旧吹田操車場、東海道本線の建設による盛土にて埋没した近代の耕作土及び床土である。耕土の1. 灰白10YR4/1粗砂混シルトと床土の2. オリーブ灰10YR6/2粗砂混シルトで構成されている。当地は盛土されるまで畝として使用されていたと考えられる。

この旧耕作土の直下には3. 4. 褐灰10YR6/1～10YR5/1 Fe斑を含む細砂少混粘性シルトが堆積する。2層に分けられたが、下層である4の方が色調は暗く、土質も粘りが強いことから、土壌化が進んでいると考えられる。

遺物は出土していないが、当調査区に隣接する平成19年度調査の第2地区における基本層序の第1層・第2層(図6)に近似し、これに対応すると考える。当層まで重機にて掘削した。

**第1層** 5. 緑灰5G6/1細砂～シルト少混粘土で形成される土層である。上層の3・4に近似した土質ではあるが、グライ化により緑化している。土師器片が出土している。平成19年度調査の第2地区における基本層序の第3層に近似し、これに対応すると考える。当層を除去し第1面を検出した。

**第2層** 6. 緑灰10G6/1・緑灰5G5/1細砂少混粘性シルトで形成される土層である。上層の5に近似した土質である。出土した遺物はない。平成19年度調査の第2地区における基本層序の第4層に近似し、これに対応すると考える。当層を除去し第2面を検出した。

**第3層** 7. 暗赤褐2.5Y3/2 Mnを多く含む粗砂混シルト(第1地区)や灰オリーブ5Y4/2 Fe、Mnを少し含む粗砂少混シルト(第2地区)で形成される土層である。Mnの含有が目立つ。第2地区の土層の方がグライ化がより強く、シルトの割合も多い。土師器片、須恵器片が出土している。平成19年度調査の第2地区における基本層序の第5層に近似し、これに対応すると考える。当層を除去し第3面を検出した。

**第3層以下** 8. 褐灰5YR6/1 Feを含むシルト混粗砂礫(第1地区)や緑灰7.5GY6/1 Feを含む細砂少混シルト(第2地区)で形成される。第2地区の方がグライ化がより強く、シルトの割合が多い。遺物の出土は認められなかった。

**第1面** 当面の標高は第1地区が5.70m前後、第2地区が5.55m前後である。攪乱にて表面が乱されている箇所が第1地区には多かった。遺構は検出されなかった。

**第2面** 当面の標高は第1地区が5.60m前後、第2地区が5.45m前後である。調査区外に出る直径推定0.95m、深さ0.2mを測る平面が円形と思われる土坑を1基検出した。埋土は黄灰2.5Y5/1粗砂混シルトである。遺物は出土しなかった。

**第3面** 当面の標高は第1地区が5.50m前後、第2地区が5.36m前後である。遺構は検出されなかった。(図版29)

## 小結

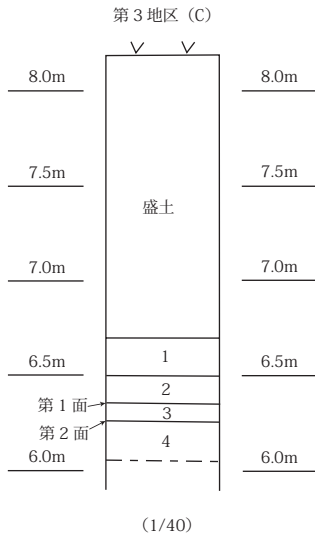
各面ともグライ化した層を基盤とし、斑鉄が多くみられる。第2面にて土坑を1基検出しているが、自然にできた窪地の可能性がある。土層が攪拌された形跡もない。草本類が繁茂する湿地状態が古代以降近世に至るまで続いた可能性が考えられる。

各層から出土した遺物の数は少なく、明確な堆積時期を確定し難いが、当調査区の北に接する平成19年度調査の第2地区と、各層の土質・色、堆積のレベルがほぼ対応する関係にあり、第1層が近世、第2層が中世後半、第3層が中世前半、第4層が古代に相当すると考えられる。また、当該地区で検出した第4面までの耕作地跡、第5面の掘立柱建物で構成される集落跡は、第1地区、第2地区共に検出し

なかった。

よって、今回の調査結果は、平成19年度にて検出した遺構の南縁部の範囲は、当該地区内に限りを持つことを示したといえる。

## 2. 第3地区の調査



1. 灰 N5/ と淡黄 2.5Y8/4 (地山の土)粗砂礫 (3mm以下)の混合シルト (近代耕作土)
2. 黄灰 2.5Y6/1 粗砂礫 (3mm以下)少混シルト (グライ化) (中世後半～近世初頭)
3. 灰 N6/ 粗砂少混シルト (地山の土少し混じる) (中世前半)
4. 明黄褐 10YR7/6 粗砂混シルト (地山)

図 98 平成 21 年度 第 3 地区  
層序柱状図

平成21年度第3地区は平成19年度の第4地区の東側約50mに位置する。調査面積は約80㎡である。

### 基本層序 (図98)

地表面は、標高8.2m前後である。他の調査区と同様に旧吹田操車場、東海道本線を建設するにあたり、それ以前の旧耕作土の上に、直接盛土を行っている。盛土は1.5m前後の厚みで堆積する。

柱状模式図内の番号と以下の土色・土質の説明における数字とは符合する。

**第0層** 旧吹田操車場、東海道本線の建設による盛土にて埋没した近代の耕作土である。1. 灰N5/ と淡黄2.5Y8/4粗砂礫の混合シルトで形成されている。当地は盛土されるまで畝として使用されていたと考えられる。当層まで重機にて掘削した。

**第1層** 旧耕作土の直下には2. 黄灰2.5Y6/1粗砂礫少混シルトが堆積する。瓦器、土師器皿、土師質羽釜、須恵器甕等が出土している。当層を除去し、第1面を検出

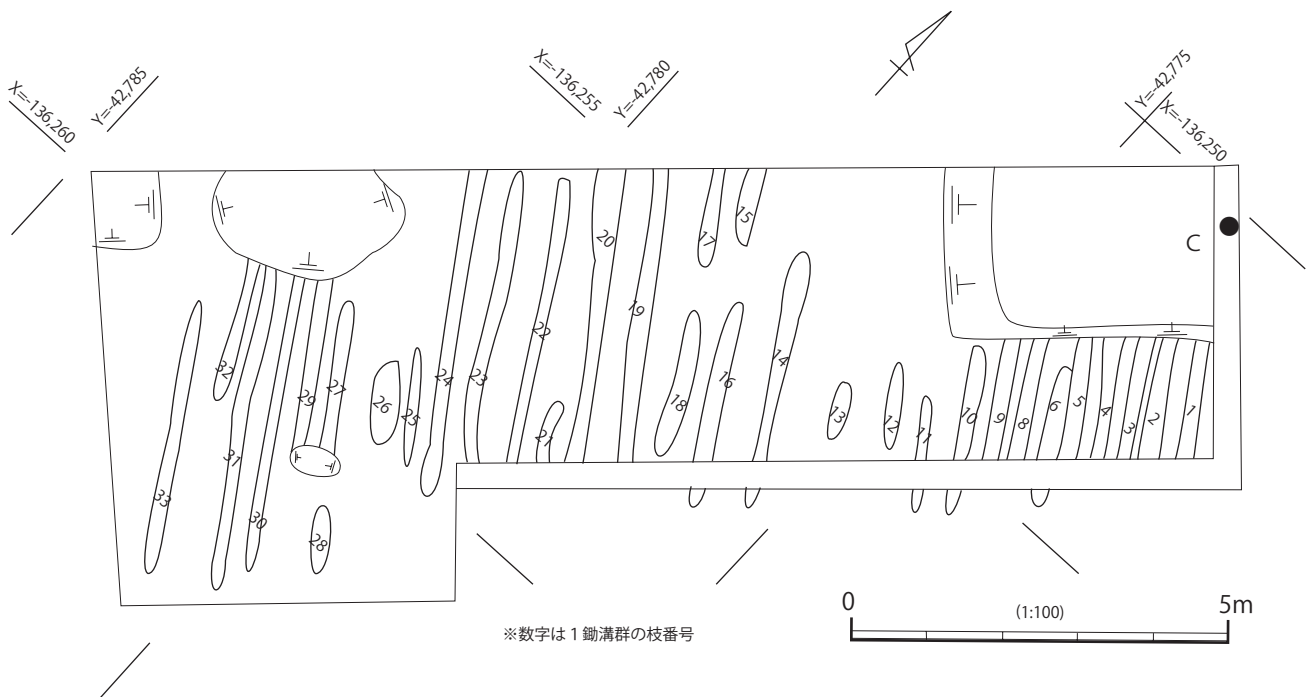


図 99 平成 21 年度 第 3 地区 第 1 面 全体図

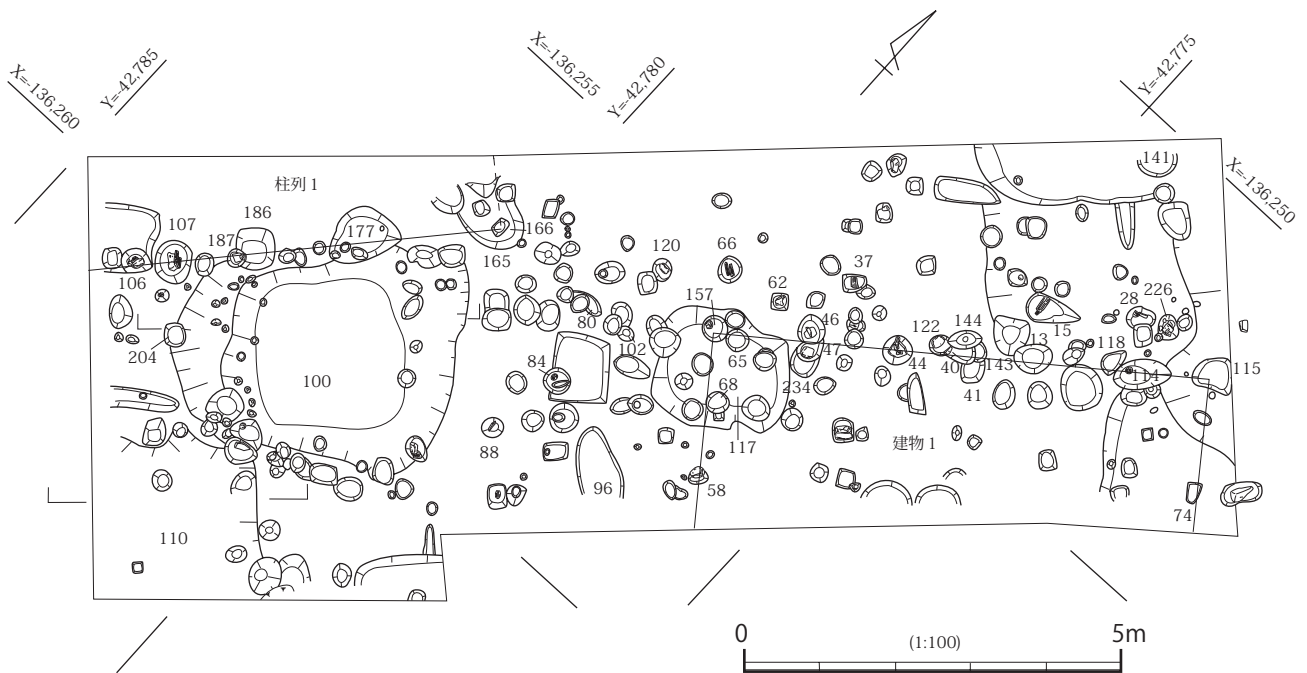


図100 平成21年度 第3地区 第2面 全体図

した。

**第2層** 3. 灰N6/粗砂少混粘性シルトに下層の土が少し混じり形成される土層である。瓦器、羽釜・甕等の瓦質土器、土師器片等、中世の遺物が多量に出土している。当層を除去し第2面を検出した。

**第3層** 4. 明黄褐10Y R7/6粗砂混シルトで形成される。遺物の出土は認められなかった。

**第1面** (図99、図版29)

当面の標高は6.5m前後である。調査区全面に幅0.2m程、深さ0.5cm前後を測る棒状の鋤溝群跡を検出している。軸はN-55°-Wをとる。埋土は灰白5Y7/1 Mnを含むシルト混粗砂が入る。遺物は土師器片、瓦器片、唐津焼椀片が出土した。

**第2面** (図100~104、図版30・31)

当面の標高は6.35m前後であり、平坦である。調査区全面にピット、土坑、溝等の遺構を多数検出している。遺構から主に中世前半の遺物が出土している。埋土は第3層(地山)のブロックを含む黄灰2.5Y5/1粗砂混シルトが入るものが多い。

**建物1** (図100・101、図版30・31)

74、115、114、13、40、44、46、157、68、58の各柱穴で構成される掘立柱建物である。調査区の中央北東側に位置する。桁行6間で6.5m、梁行2間以上で2.0m以上、主軸はN-54°-Eをとる。

74柱穴や68柱穴、58柱穴を梁間の柱痕と考え、調査区の南東側へのびるととらえた。各柱穴の平面は円形や楕円形を呈し、軸長や辺長は0.3~0.6mを測る。深さ0.2~0.7mを測る。埋土には、主に地山の土(黄5Y7/6~7/8細砂)を少し含む粗砂混シルトが入る。柱間は1.0~1.2mを測る。118、143、122、65、47の各柱穴は当掘立柱建物の柱跡と切り合う、もしくは接する関係を有する。これらは当建物に対し、補助的な役割を担う柱穴であった可能性が考えられる。114柱穴には柱が、44柱穴には根石と礎板

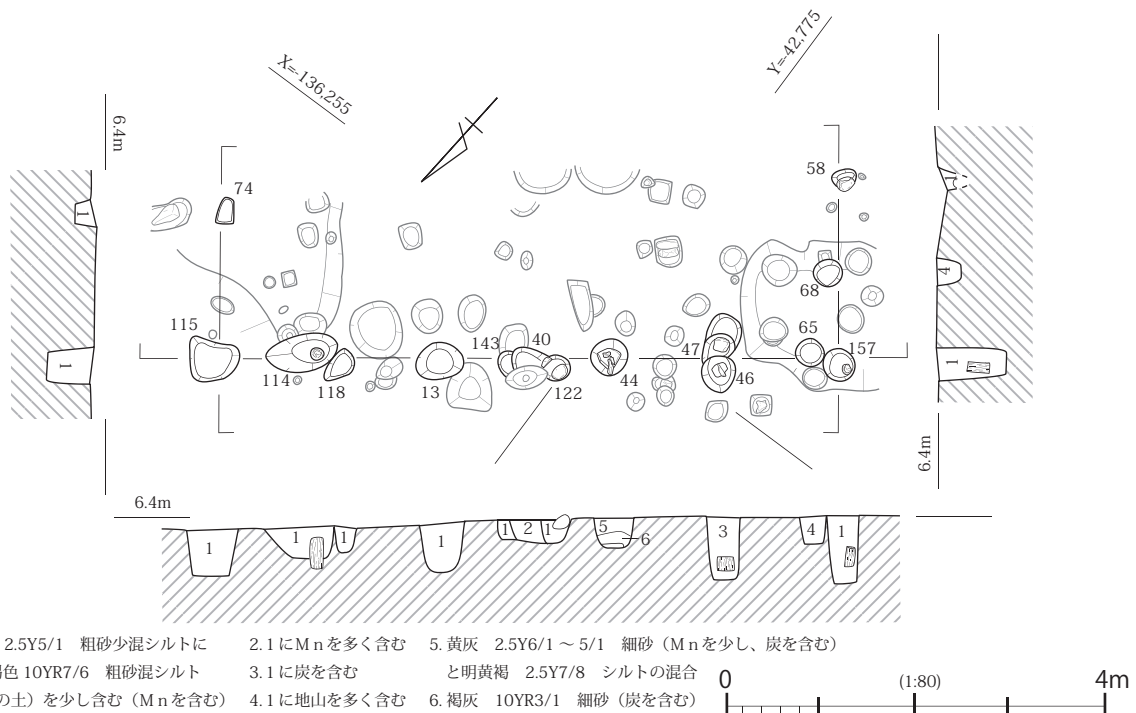


図101 平成21年度 第3地区 第2面 建物1 平・断面図

が、122柱穴には根石が残存していた。また、47柱穴には下駄が遺構の下方から出土しており、これは礎板として使用されていたようである。

#### 柱列1 (図100・102、図版30・31)

107、186、177、165の各柱穴で構成される柱列である。166柱穴は165柱穴の柱痕にあたりと考える。調査区の西端部に位置する。主軸はN-45°-Eをとる。各柱穴の平面は隅円方形や楕円形を呈し、軸長や辺長は0.3~0.9mを測る。深さ0.3~0.5mを測る。掘方の埋土には、主に地山の土を少し含む黄灰色系の粗砂混シルトが入る。柱根部分は相対的にやや黒く、粘性が強く土壌化が進んでいるものが多い。

柱間を1.6mと考えると、186柱穴と107柱穴の距離より、186柱穴と106柱穴の間隔に整合する。ただし、106柱穴は直径0.3~0.4m、深さ0.1mと規模が小さく、107柱穴の補助的な役割を担った可能性がある。106柱穴には根石が、107柱穴には根石と礎板が遺存していた。今回、柱列として報告したが、調査区外の北側へのび、掘立柱建物であった可能性も考えられる。

#### 15ピット (図100)

調査区の中央北東側に位置する。平面は楕円形状を呈し、長径0.8m、短径0.5m、深さ0.3mを測る。埋土は黄灰2.5Y5/1粗砂少混シルト (Mnと地山の土を少し含む) である。

#### 28ピット (図100)

調査区の中央北側に位置する。平面は隅円方形形状を呈し、長径0.4m、短径0.2m、深さ0.1mを測る。埋土は黄灰2.5Y5/1粗砂少混シルト (Mnと地山の土を少し含む) である。

#### 37ピット (図100、図版31)

調査区の中央やや北東に位置する。平面は方形形状を呈し、長辺0.4m、短辺0.3m、深さ0.3mを測る。埋土は黄灰2.5Y5/1粗砂少混シルト (Mnと地山の土、炭を少し含む) である。礎板を有する。



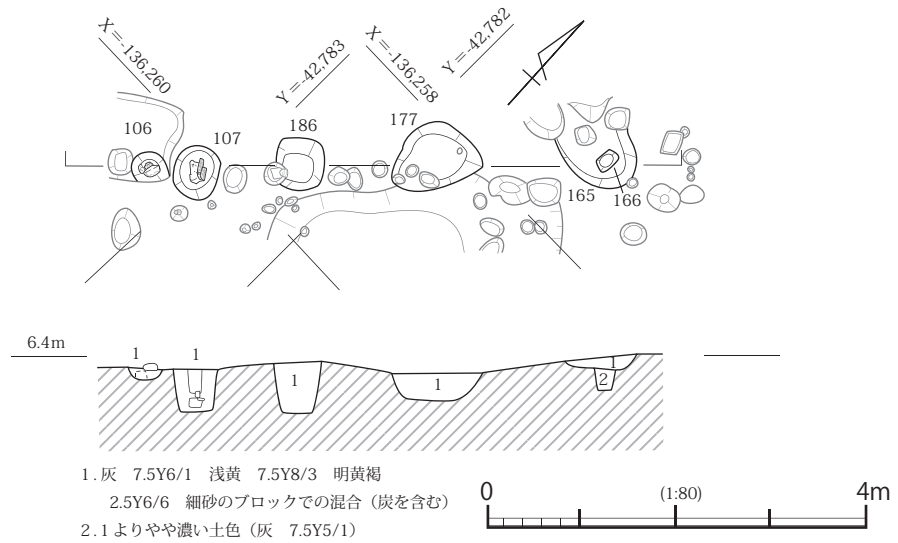


図 102 平成 21 年度 第 3 地区 第 2 面 柱列 1 平・断面図

### 66ピット (図100、図版31)

調査区の中央やや北側に位置する。平面は円形状を呈し、長辺0.5m、短辺0.4m、深さ0.4mを測る。埋土は地山の土を少し含む黄2.5Y8/8~7/8と灰白2.5Y7/1に黒褐2.5Y3/1~3/2細砂の混合が主体となる。

### 80ピット (図100)

調査区の中央やや南西に位置する。平面は楕円形状を呈し、長径0.5m、短径0.2m、深さ0.5mを測る。埋土は黄灰2.5Y5/1粗砂少混シルト (Mnと地山の土を少し含む) である。

### 84ピット (図100)

調査区の中央やや南西に位置する。平面は隅円方形を呈し、一辺0.4m、深さ0.5mを測る。埋土は黄灰2.5Y5/1粗砂少混シルト (Mnと地山の土を少し含む) である。柱根部は黄灰2.5Y5/1シルト~粗

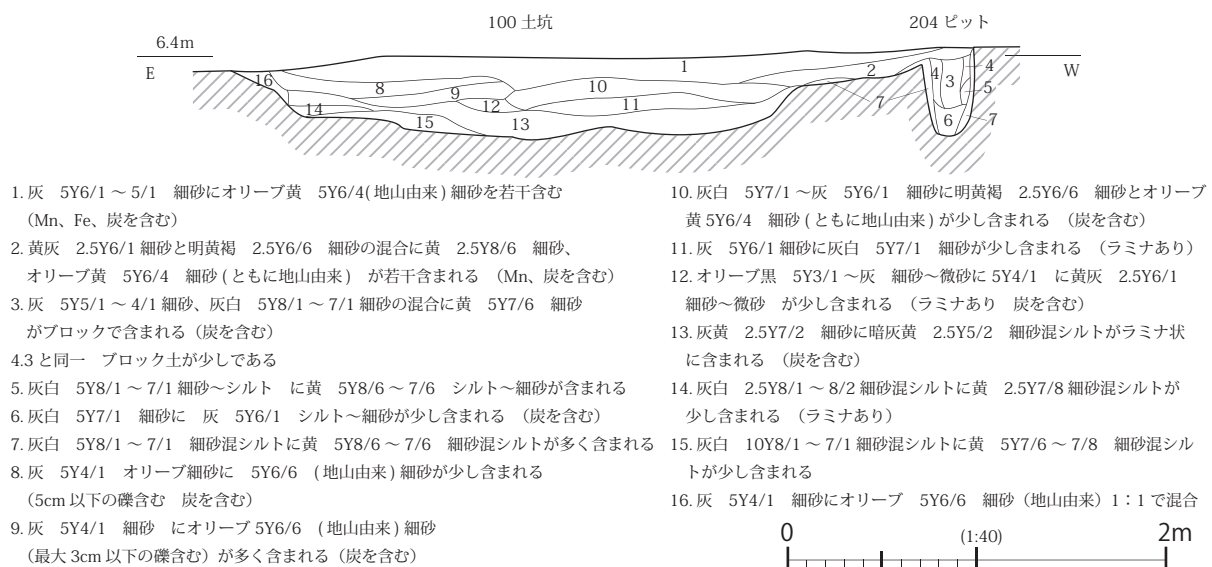


図 103 平成 21 年度 第 3 地区 第 2 面 100 土坑、204 ピット 断面図

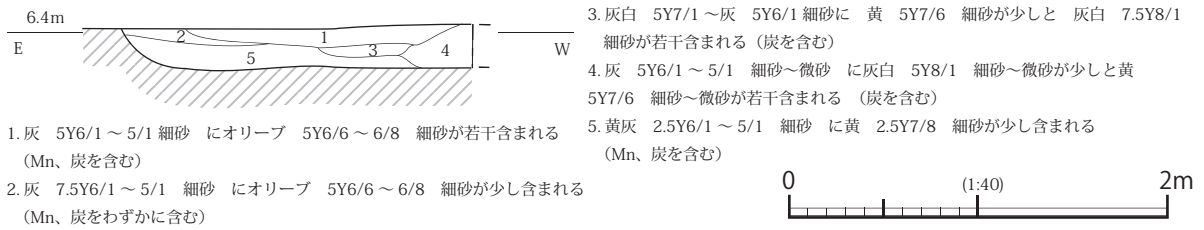


図 104 平成 21 年度 第 3 地区 第 2 面 110 土坑 断面図

砂に灰白2.5Y7/1シルト～細砂が少し入る。

#### 88ピット (図100)

調査区の中央やや南に位置する。平面は円形状を呈し、直径0.3m、深さ0.1mを測る。埋土は黄灰2.5Y5/1粗砂少混シルト (Mnと地山の土を少し含む) である。石と瓦が根石として使用されていた。南側は調査区外へのびる。

#### 96土坑 (図100)

調査区の中央南に位置する。平面は長細い楕円形状を呈し、長径1.0m以上、短径0.6m、深さ0.2mを測る。埋土は黄灰2.5Y5/1粗砂少混シルト (Mnと地山の土を少し含む) である。

#### 102ピット (図100)

調査区の中央に位置する。平面は楕円形状を呈し、長径0.2m以上、短径0.2m、深さ0.2mを測る。埋土は黄灰2.5Y6/1～5/1細砂に黄2.5Y7/8細砂が少し入る (Mnと炭含む) である。根石を有する。

#### 120ピット (図100、図版31)

調査区の中央やや北に位置する。平面は楕円形状を呈し、長径が0.3m、短径が0.3m弱、深さ0.3mを測る。埋土は柱痕には黄灰2.5Y5/1粗砂混シルト、掘方には灰白2.5Y7/1～6/1細砂 (地山の土をブロックで含む、炭含む) が入る。根石を有する。

#### 141ピット (図100)

調査区の北西端に位置する。平面は楕円形状を呈し、一部は調査区外へのびる。長径0.4m以上、短径0.2m以上、深さ0.4mを測る。埋土は黄灰2.5Y5/1粗砂少混シルト (Mnと地山の土を少し含む) である。

#### 204ピット (図103)

調査区の南西端中央に位置する。平面は円形状を呈し、直径0.3m、深さ0.4mを測る。100土坑に切られている。

#### 226ピット (図100)

調査区の中央北東端に位置する。平面は楕円形状を呈し、直径は0.3m前後、深さ0.5mを測る。埋土は黄灰2.5Y5/1粗砂少混シルト (Mnと地山の土を少し含む) である。

#### 100土坑 (図100・103、図版30・31)

調査区の西端に位置する。平面が隅円の台形状を呈し、長径約3.9m、短径約2.5m、深さ0.5mを測る。埋土は大きく2層に分かれるが、間層として地山の2次堆積土を薄くかむ。上層は灰5Y6/1～5/1細砂 (地山の土を少し含む) が主体であり、下層は灰黄2.5Y7/2細砂と暗灰黄2.5Y5/2細砂の互層が細かいラミナで入る。シルト～細砂が中心である。上層の土は埋め戻された可能性が高いと考える。上下



層の遺物の年代差は認められなかった。

土坑の縁辺部にはピットや杭跡が多数あり、当土坑に関係する柵及び土留め等の施設があった可能性が考えられる。当土坑からは中世前半の遺物が多数出土した。

掘立柱建物等の遺構の密集地にあること、遺構埋土が滞水性を示す細かいラミナが埋土の下方に認められること、遺物の量が多くかつ種類が多彩であること、柵列等遺構に付設される施設が考えられることから池であった可能性を考える。

#### 110土坑（図100・104、図版31）

調査区の南西端部に位置する。平面は方形状を呈し、長辺2.5m以上、短辺1.0m以上、深さ0.2mを測る。調査区外、南側へのびる。埋土は灰色～黄灰色系のMnや炭を含む細砂が主である。

#### 117土坑（図100）

調査区の中央に位置する。平面は方形状を呈し、長辺1.8m、短辺1.6m、深さ0.1mを測る。埋土は褐灰7.5YR6/1粗砂少混シルト（Mnと地山の土を少し含む）であり、他の遺構と若干異なる。当遺構を切るピットが多く、古い段階の遺構と考えられる。

#### 小結

第1面から鋤溝痕と考えられる幅10cm程の棒状の耕作跡がN-55°-Wの方向で、ほぼ全面に検出している。溝埋土出土の遺物は中世に帰属するものが大半であるが、唐津焼椀が出土しており、近世初頭の耕作地跡と思われる。

第2面では遺構の総数は約270基である。調査区全域にて直径または一辺が約20～50cmの柱跡を、密集した状態で検出している。柱跡には柱、根石、礎板が遺存するものもある。明確に規模が判る掘立柱建物は検出していないが、比較的規模の大きな建物が存在したものと思われる。

柱穴跡の多さから、掘立柱建物の建て替えが頻繁に繰り返され、建物が重複していると考えられる。直径5cm程の杭跡も多数みられる。

柱穴の他、数基の土坑を検出した。特に、調査区の南西端部に位置する100土坑からは、多量の遺物が出土した。

これらの柱穴・土坑からは土師器皿、瓦器椀、瓦質羽釜・甕、東播系須恵器鉢、中国陶磁器等が出土している。遺物は主に中世前半（13世紀後半から14世紀前半頃）に該当し、これらの遺構の時期を示すと考える。

## 第4節 平成19・20年度調査出土遺物

### 1. 第1地区出土遺物（図105～117、写真図版32～39）

縄文時代の石鏃から中世の遺物まで出土している。

図105の1～15は第2～3層出土である。1は須恵器の椀体部と思われるもので、口縁部寄りの凹線文間に円形竹管文が施され、体部下部には粗いカキメがみられる。内面には灰を被る。文様の特徴から、新羅焼の可能性が考えられる。2・3は灰釉陶器椀で、両方ともに貼付け高台である。2の見込みには圈線が1条薄く巡る。9世紀末～10世紀初頭の猿投窯産である。3の内底面には重ね焼の痕跡が残る。11世紀中頃の尾張産である。2・3共に胎土は砂っぽい、内面は滑らかである。4の緑釉陶器は硬質で、削り出しの円盤状高台である。高台を除いた内外面に灰オリーブ色の釉がかかる。見込みには圈線が1条薄く巡り、重ね焼痕かと思われるものが認められる。9世紀後半の小塩窯産である。

5は黒色土器A類椀である。口縁端部より少し下がった内面に凹線状の沈線が1条巡る。平安京Ⅲ古期か。体部内外面に密な横方向のヘラミガキが施されている。見込みは一定方向のヘラミガキが施され、底部外面はヘラミガキ状のものが認められるが、摩滅のため詳細は不明である。

6～10は中国陶磁器である。6は玉縁の白磁碗であり、Ⅳ－2類の13世紀第1四半期である。7は白磁碗体部内面に櫛状工具により施文されており、Ⅶ類の12世紀後半のものである。8は龍泉窯系青磁鎚連弁文碗の13世紀第4四半期である。9・10はⅤ類の白磁碗で、見込みに圈線が1条巡る。13世紀第1四半期のものである。

11は須恵器の有蓋土器である。鏝部分が残存し、鏝上面に横方向ハケ、下面には横方向のハケの後ヘラ削りが施されている。内面には青海波文の当て具痕が残る。これは陶邑の原山4号古墳出土骨蔵器と考えられているものに類似する。12は土師質羽釜である。口縁部は極短く直立した摂字型である。内外面にハケ調整が施されている。鏝部は貼付けられている。鏝下面より下方に煤の痕跡がある。

13は瓦質火舎であり、口縁部外面に四角いスタンプ文が連続して施文されている。奈良火鉢編年の浅鉢Ⅴ類の形に類似することから、14世紀後半から15世紀後半の時期であろう。

14は凸面に斜格子のスタンプ文のある平瓦である。凹面はヘラ削りが施されているが、粗い布目が僅かに残る。他の平瓦に比べて厚手である。

15は砥石である。長さ11.5cm、幅3.3cm、厚さ1.4cmを測り、表・裏面には使用による擦痕がある。きめの細かい仕上げ砥石で、石材は珪質頁岩であろう。

16～18は第3層出土である。16は須恵器杯である。底部欠損のため詳細は不明である。17は土師器杯である。体部外面に指押さへの痕が残る。平安京Ⅱ中期か。18は須恵器壺である。口縁部外面の凹線文の間に列点文が1帯施文されている。7世紀代のものか。器台脚部の可能性もある。

19～23は第3面のピット等から出土したものである。19は第3面出土の北宋銭「天聖元寶」、初鑄は1023年である。20は第3面70土坑出土の土師器杯である。胎土中に金雲母を含む。当遺跡の土師器胎土の特徴として、微粒金雲母と、きらきら光る石英砂粒を多く含む点があげられ、それを象徴する意味で金雲母を多く含むと文中で表現している。20は平城宮Ⅲ期か。21は第3面39ピット出土土師器皿である。口縁端部内面に沈線が1条巡る。胎土中には金雲母を含む。平城宮Ⅴ～Ⅵ期か。

22は第3面44土坑出土の緑釉陶器椀である。胎土は緻密で、硬質である。体部外面下部はヘラ削り、上半は回転ナデによる調整である。灰オリーブ色の釉がハケで全面に施釉されている。10世紀前半の篠

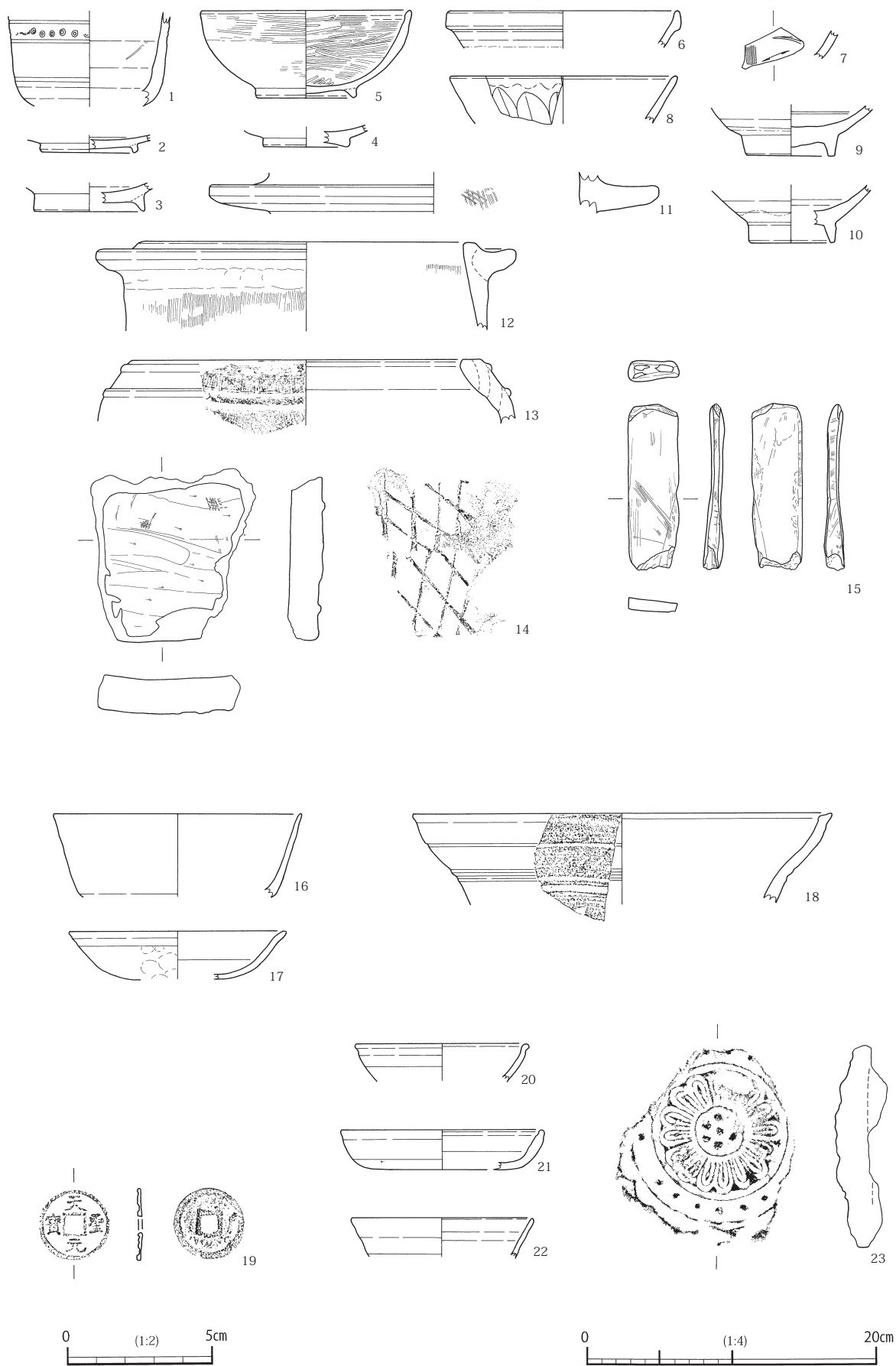


图 105 第 1 地区 第 1~3 层、第 3 面遗構 出土遺物

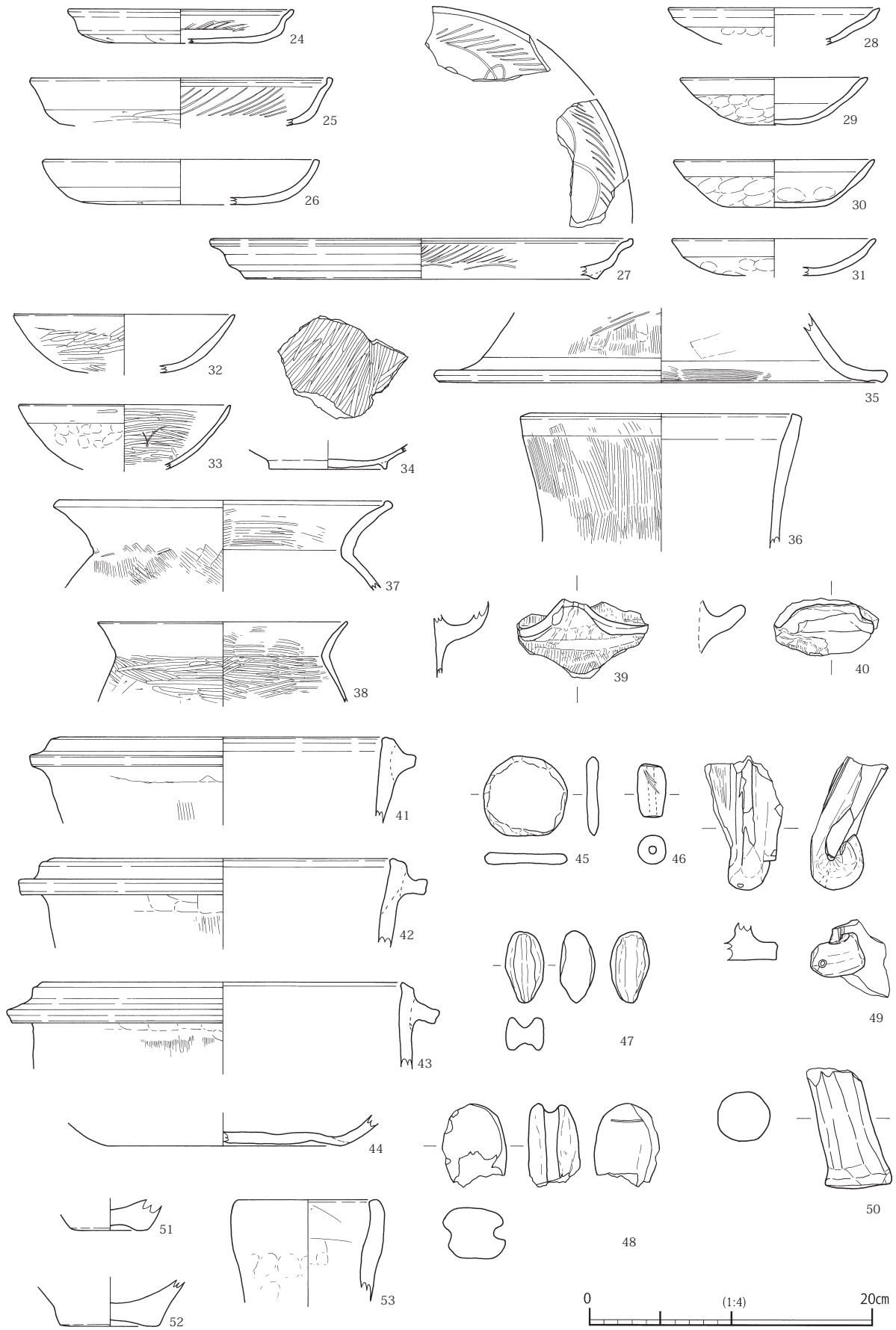


图 106 第 1 地区 第 4 层 出土遗物 (1)

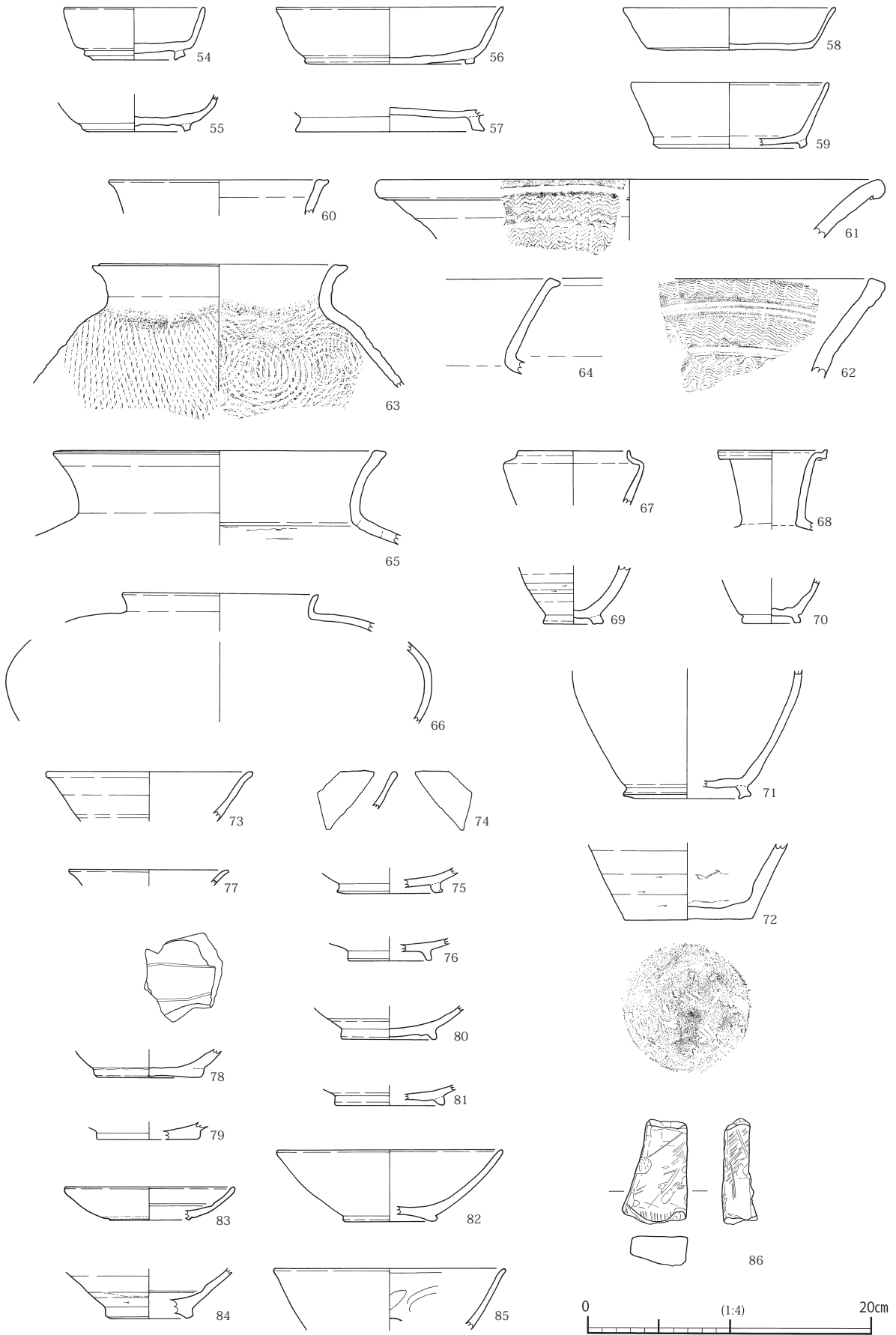


图 107 第 1 地区 第 4 层 出土遗物 (2)



窯産である。23は第3面61土坑出土の複弁蓮華文軒丸瓦であり、後期難波宮6303型式に似ている。

図106・107は第4層出土遺物である。弥生時代から平安時代の遺物が出土している。

図106の24～27は奈良時代の土師器皿である。24・25の口縁端部内面には沈線が1条巡り、底部外面はヘラ削り調整が施されている。25の胎土は緻密である。26は底部外面ヘラ削り調整で、胎土中に金雲母を多く含む。27は高台付の皿B（高台付の皿や杯には、器種にBを付加して以下に表記した）で口縁端部内面に1条巡る。内面底部には螺旋状暗文が施されている。これらの土師器皿は平城宮Ⅲ期の時期に該当すると思われる。28～31は平安時代の土師器椀である。平安京Ⅱ古期か。28は灰白色を呈し、緻密な胎土である。

32～34は黒色土器A類椀である。32は外面にヘラミガキが見られるが、他の2点は指押さえのみで、33の外面にはヘラ削りもみられる。34の底部内面には一定方向のヘラミガキが施されている。32が平安京Ⅱ中期の頃、他は平安京Ⅲ新期の頃か。32は被熱しており、外面に煤の付着がみられる。

35は平安京Ⅱ古期の土師器大型蓋か。胎土中に金雲母を多く含む。36は土師器甌である。時期は平安京Ⅰ中期か。37は土師器甕である。37は内面を板状のものでナデ調整している。

38は器壁の薄い黒色土器の甕で内面が黒く、外内面を横方向に丁寧にヘラミガキしている。38は胎土中に金雲母を多く含む、外面には煤の付着がみられる。平安京Ⅱ古期か。

39・40は土師器の鍋かと思われる把手である。平安時代初期のものかと考えられる。41～43は摂津型の土師質羽釜である。これらは口縁部を短く直立させ、口縁端部を内側に極僅かに拡張し、体部外面に縦方向のハケ調整を施したもので、胎土中に微粒金雲母を多く含む。10～11世紀のものと思われる。44は土師質羽釜の底部と推測する。底部外面にスサ状圧痕が1条あり、粘土紐巻き上げのような痕跡が認められる。胎土中には微粒金雲母を多く含む。

45は土師器の円盤であり、時期・器種など不明の体部破片再加工品である。46～48は土師質の土錘で、46が管状、残りが側面に溝を掘り込んだ有溝土錘である。46の胎土は緻密である。48は胎土中に微粒金雲母を多く含む。49は竈の裾部であり、焚口の左前部分に該当する。脚接地部分には直径2.5×3.5mmの穴があいている。50は縦方向にナデを施した土製支脚である。

51・52は上げ底状の弥生土器底部である。表面摩滅のため、詳細は不明であるが、中期に該当すると思われる。53は製塩土器である。体部に指押さえの痕がある。胎土中には2mm以下の砂粒を多く含む、外面は灰黄色、内面はにぶい黄橙色から橙色を呈する。形態的な特徴から、7～8世紀のものかと思われる。

図107の54～57は須恵器杯Bである。平城宮Ⅲ～Ⅳ期に該当すると思われる。56の底部外面にはヘラ先が当たって円形状に刺突が巡る。58は須恵器杯の底部外面に粘土紐巻き上げ痕が残り、平城宮Ⅴ～Ⅵ期かと思われる。59は須恵器杯Bの底部外面は回転ヘラ切り不調整の後に高台を貼付けており、平城宮Ⅶ期か。60は白くて緻密な胎土の須恵器で、外面にのみ灰釉がかかる。短頸壺の口縁部かと思われる。猿投窯産か。61は須恵器壺である。口縁部外面に2帯の波状文が施文されている。62は須恵器壺である。波状文が3帯施文されている。61・62ともに7～8世紀のものかと思われる。63は須恵器甕である。体部外面に粗い平行叩きが交差し、内面には同心円の当て具痕がみられ、平安京Ⅱ古期の時期に属する。64は外面に緑色および白色の自然釉のかかった緻密な胎土の須恵器甕である。内面には白い灰を被る。9～10世紀の東海系である。65・66は須恵器の横瓶である。時期は平安京Ⅱ古期と思われる。65は表面が灰白色、断面が灰黄色を呈し、砂粒を少し含むが硬質で白っぽい胎土であり、灰釉陶器のものとして

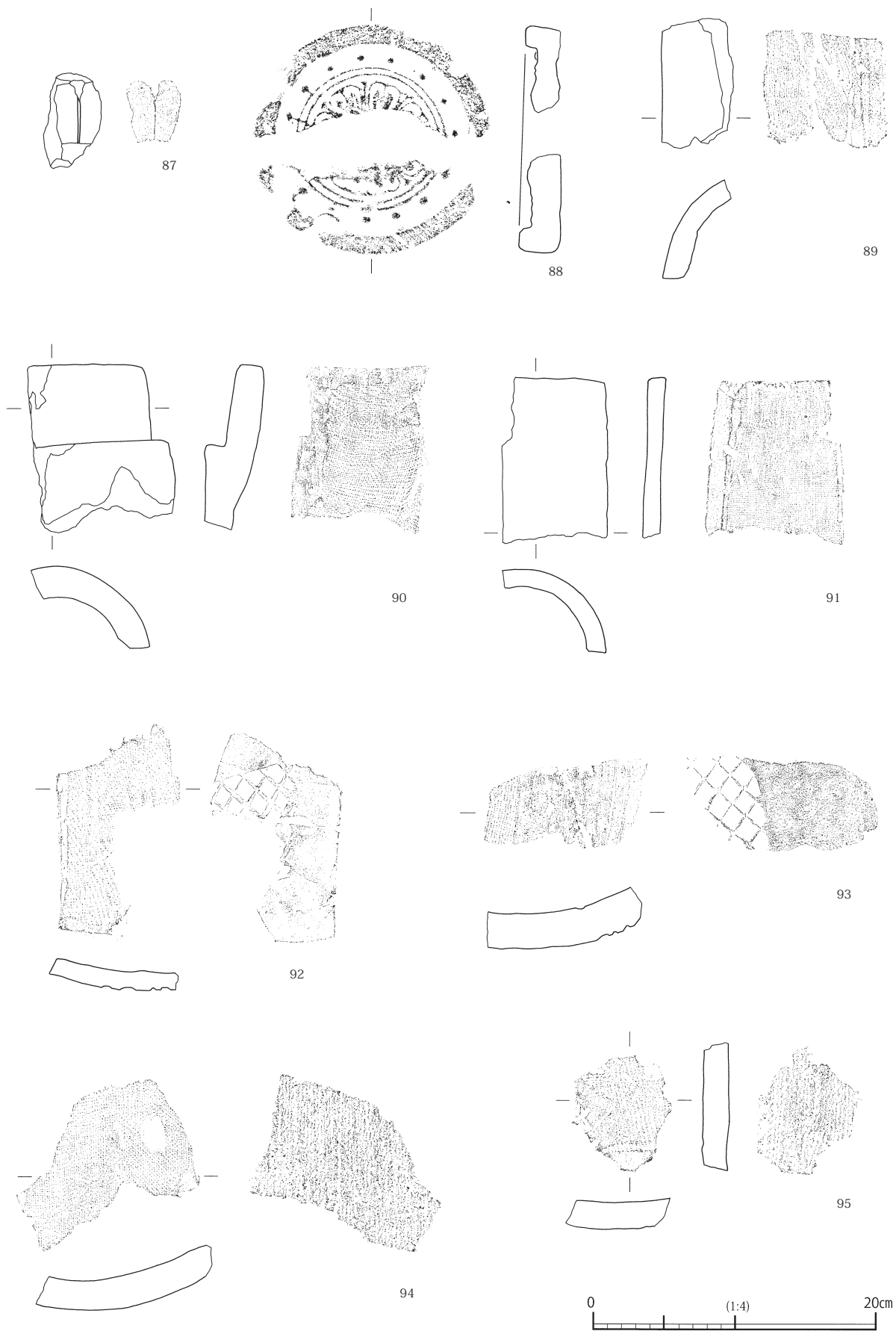


图 108 第 1 地区 第 4 层 出土遗物 (3)



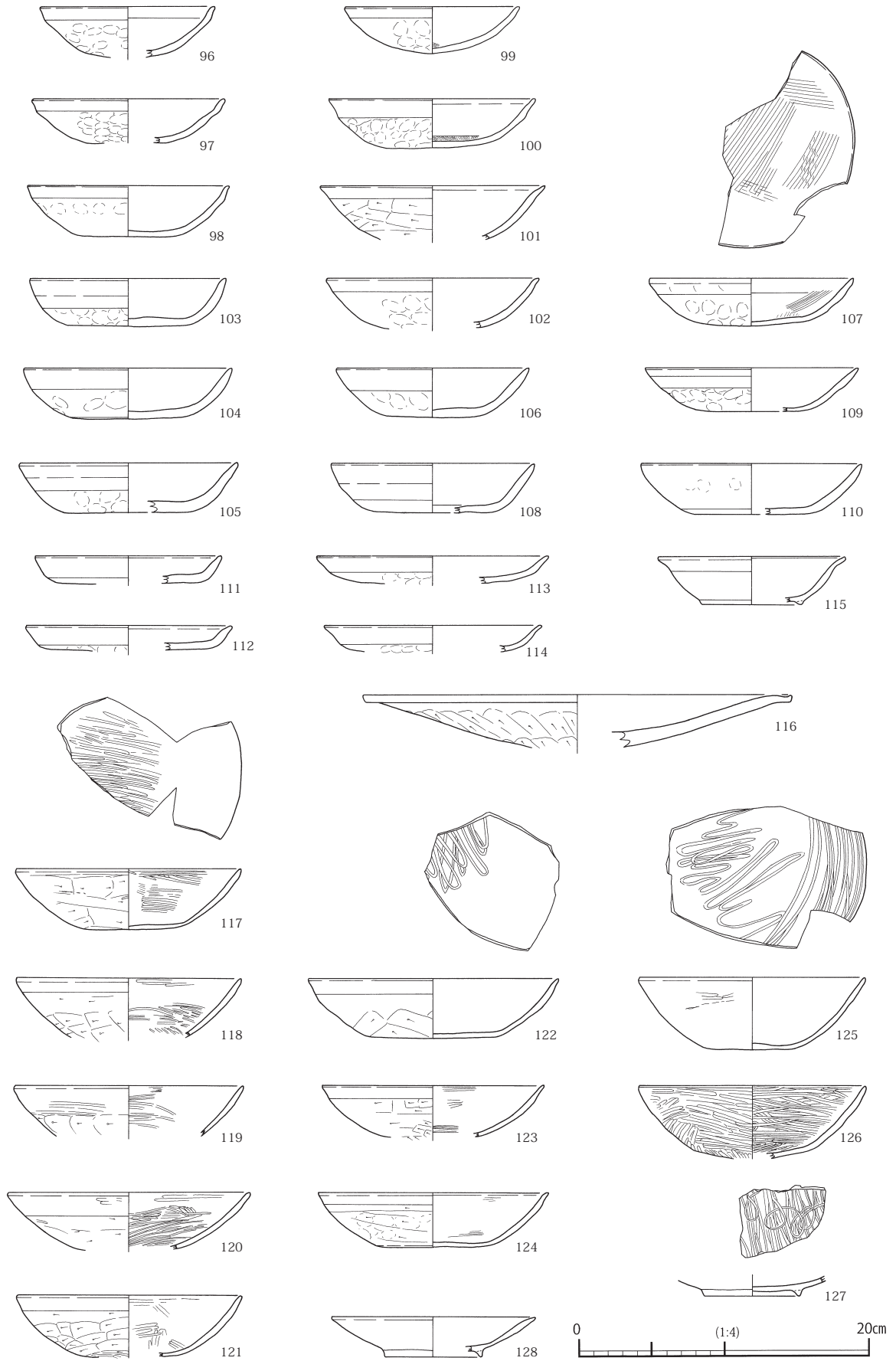


图 109 第 1 地区 第 5 面 土器集中部 出土遺物 (1)

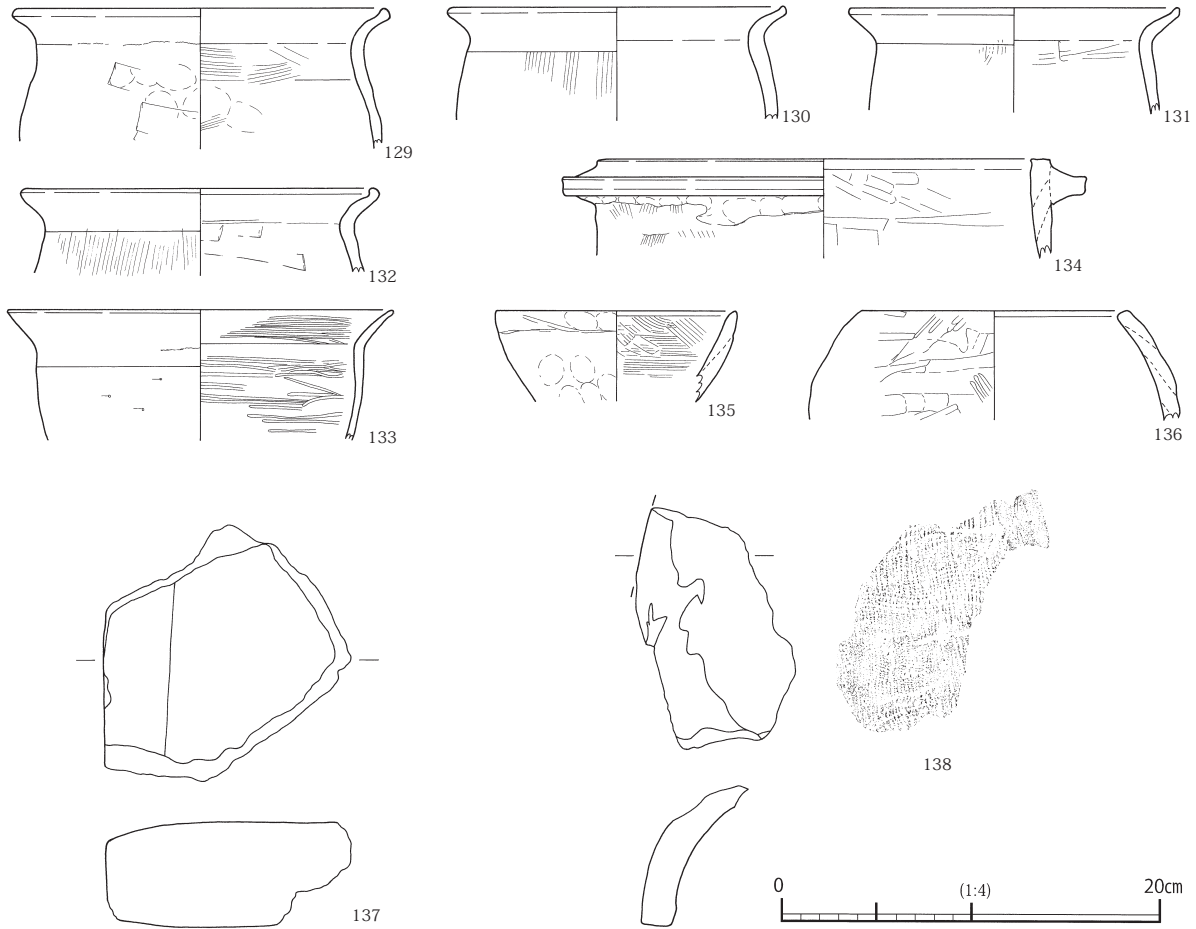


図 110 第 1 地区 第 5 面 土器集中部 出土遺物 (2)

いる。66は口縁部外面に灰を被っていない、有蓋であると考えられる。67～72は須恵器壺である。67は短頸壺の口縁部外面に灰を被っている。69の内面底部には白い付着物が認められる。70の底部外面には回転糸切り痕が残る。72の底部外面にはハケのちナデ調整の後に「×」のヘラ記号が線刻されている。いずれも平安京Ⅱ古～Ⅱ中期の範疇に収まるものと思われる。

73～76・81は灰釉陶器である。73は椀の体部外面下半がヘラ削り後回転ナデ調整を施されている。10世紀末から11世紀初頭の東海産である。74は輪花椀である。9世紀後半の猿投窯産である。75は貼付け高台で、見込みおよび畳み付けに重ね焼の痕跡を留めるが、見込みの一部表面は滑らかである。9世紀後半の猿投窯産である。76は底部外面に回転ヘラ削りの痕跡を残し、高台は貼付けである。76の見込みに重ね焼痕のような痕跡が認められるが、表面は滑らかである。9世紀末～10世紀初頭の東濃産である。81は底部外面に回転ヘラ削りの後回転ナデが施された貼付け高台である。見込みには直径1.3cmの砂目跡かと思われる痕跡がみられる。10世紀後半の美濃産である。75と81は硬質でサクツとした感じが一見した印象の胎土である。胎土は76が緻密であるが、それ以外は砂っぽい。

78は緑釉陶器を真似た円盤状高台の須恵器椀で、見込みに平行する2本の沈線が引かれている。10世紀のものである。78・80は硬質で砂っぽい胎土である。

77・79はやや砂っぽい胎土の緑釉陶器である。77は須恵器の生焼けに似る。口縁破損部に僅かな凹みが見られることから、輪花皿の可能性も考えられる。10世紀の東濃産である。79は表面の残りが悪い

が、軟質の緑釉陶器で、円板状高台の外・内面に僅かに釉が残る。9世紀中頃の洛北産である。

80は白色土器の椀底部で、削り出し輪高台である。ややクリーム色がかった灰白色を呈した10世紀前半の幡枝窯産である。

82は越州窯系青磁碗である。見込みには重ね焼の目跡が白く残る。口縁端部は釉が殆ど掛からず、釉は内外面ともに貫入がみられる。施釉前に下地を白泥塗りしている。畳み付けは滑らかである。残存状況はおよそ2分の1個体であり、越州窯系青磁碗ⅡD1a類の9世紀末～10世紀初頭のものと思われる。83は白磁皿で、見込みに圈線が1条巡る。Ⅷ-2類の12世紀前半のものである。84は白磁碗である。見込みに圈線が1条巡る。高台直上まで露胎である。Ⅵ類、12世紀第4四半期のものである。85は龍泉窯系青磁碗で内面に劃花文が彫られている。外面にピンホールがみられる。I2a類、13世紀第2四半期のものである。

86は砥石である。両端部を除く4面に研ぎ面がみられる。表面には軽く煤の付着がみられる。凝灰岩製か。第4層出土であるが、時期は不明である。他の遺物からみて、古代から中世の可能性がある。

図108は第4層出土瓦である。87は素弁蓮華文軒丸瓦の花弁1つが残る須恵質の軒丸瓦である。弁端は欠損して不明である。弁端側の両側を強く押さえた肉厚の弁は中央に稜がとおる。裏面は殆ど失われているが、極一部分が残り、厚さは約3cmである。88は複弁蓮華文軒丸瓦である。同一個体と考えられるものを上下に配した。吉志部瓦窯の軒丸瓦に類似する。外区の珠文には短い放射状の范傷が隣り合わせて2箇所みられる。外縁は1箇所潰れて珠文に接する。中房は欠損のため不明である。

89～91は丸瓦であり、89・91～94は須恵質である。凸面は主に横方向のナデ調整が施され、凹面にはやや粗い布目が残る。側面には面取りがみられる。89は凸面の一部に布目が残る。凹面がわ側面に軽く面取りが施されている。凹面には布の端の圧痕が残る。90は玉縁つきの丸瓦で、凹面の布目は玉縁部分まで及ぶ。凹面がわの上端と側面に面取りがみられる。91は行基葺きの丸瓦で、凹面がわ側面の面取りが極僅かである。凹面の布目は細かい。

92～95は平瓦である。92・93は須恵質で凸面に斜め格子叩き目があり、七尾瓦窯のものに類似する。92の凹面には布目が見られ、模骨痕が幅約3cmで認められる。凹面の布目は粗い。93の凹面には布目の後、縦方向のヘラ削りがみられ、92よりも厚手である。凹面の布目は粗い。軒平瓦の平瓦部分かと思われる。94・95は凸面に離れ砂の付着した縄叩き目、凹面にはやや粗い布目圧痕と砂の付着がみられる。95は被熱しており、凹面は浅黄橙色に変色している。94・95は平安時代終り頃から鎌倉時代のものと思われる。

図109・110は第5面土器集中部出土の土器である。96～116は土師器である。これらの土師器は胎土中に微粒金雲母を多く含む。96～110は杯である。96～98は口縁部の横ナデが強く体部との境に稜をなす。96・97・100・102～107・109は体部外面に指押さえの痕跡を留める。96～102・107・109は薄手、103～106・108・110は厚手である。薄手の101は体部外面に分割のヘラ削りを施しており、他の杯とは異なる。100の口縁部外面に粘土紐接合痕が残る。103・105・108～110は口縁部に横ナデを2段施している。103は底部外面に植物質の圧痕がみられる。99・100・107は内面にハケの痕跡が残る。104の底部外面にはハケのちナデ調整が施されている。105・106・108・110は底部を回転ヘラ切りしたような痕跡が認められる。111～114は皿である。111は口縁部と底部内面に煤が付着している。112は底部外面に粘土接合痕が残る。113は他の土師器胎土がざらついた手触りに対し、滑らかで緻密である。96～114の時期は平安京Ⅰ新～Ⅱ古期にあたるものと思われる。

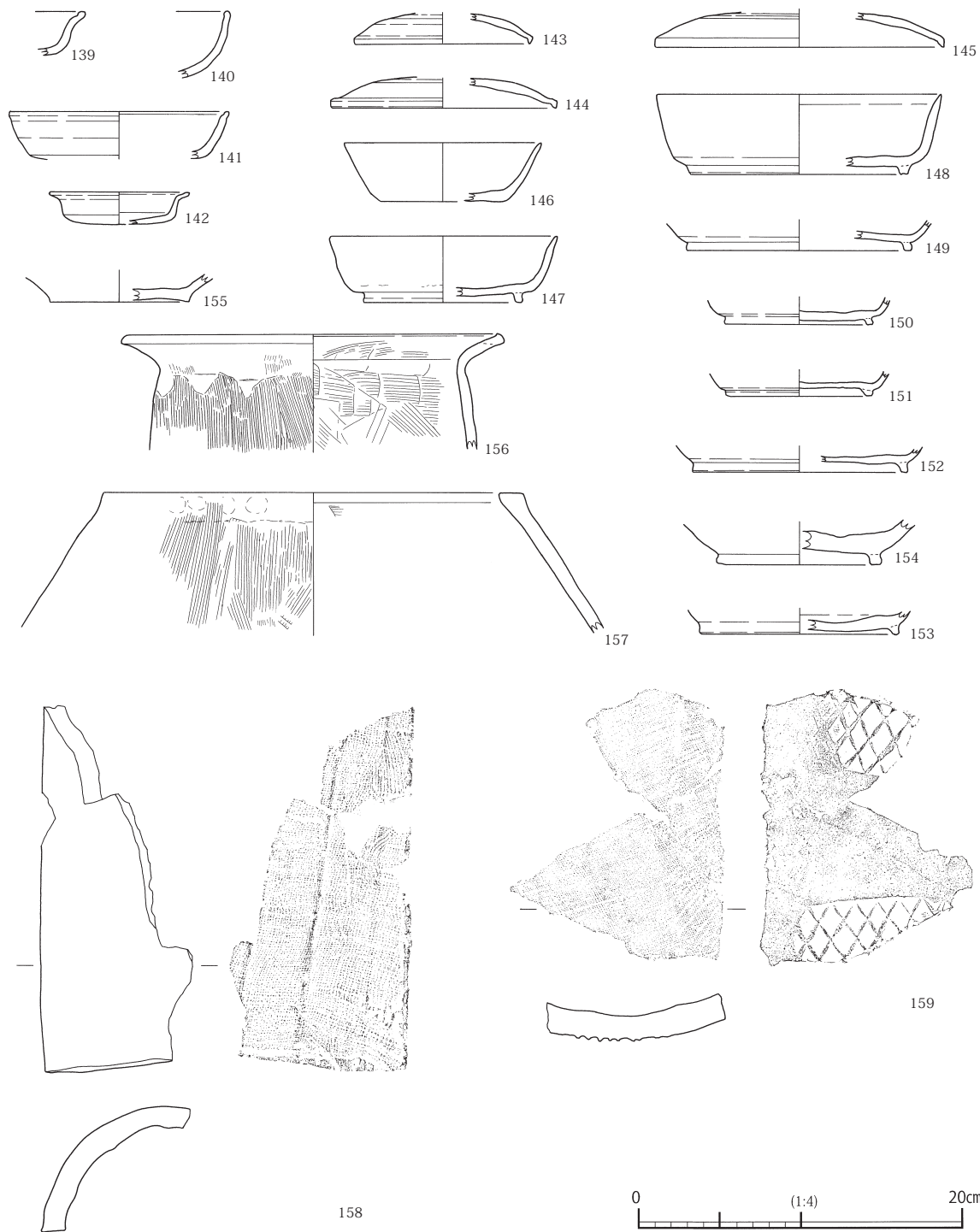


图 111 第 1 地区 盛土 (整地土) 出土遺物

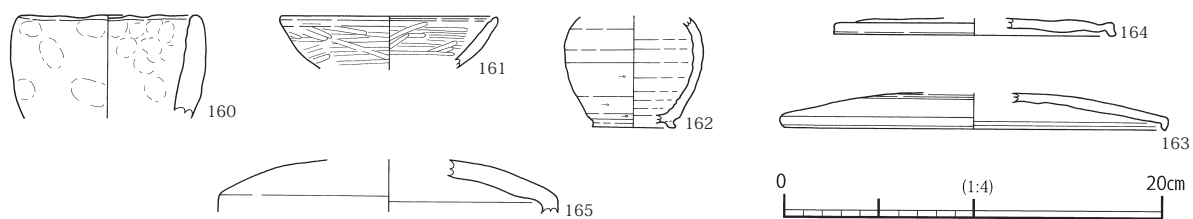


图 112 第 1 地区 第 5 面 321 土手状遺構他 出土遺物

115は高台付の杯Bであり、被熱している。口縁端を外反させ、端部を軽くつまみあげている。115は小片のため口径は不確実であるが、平安京Ⅱ中期かと思われる。116は高杯杯部である。口縁端がほぼ水平にのび、端部を上方につまみあげている。体部外面は放射状にヘラ削り調整されている。時期は平安京古期である。

117～128は黒色土器A類である。胎土中には微粒金雲母を多く含む。117～126が杯で、見込みには一定方向ないしジグザグ状の暗文がみられる。127は杯かと思われるもので、見込みに螺旋状暗文が施されている。128は杯である。調整は126の体部外面を分割ミガキ、底部外面を一方向ミガキ、内面にもヘラミガキを施している。126以外のものは体部外面をヘラ削り調整している。117・121・124・128は体部外面を分割してヘラ削りしており、118～120は体部外面をヘラ削りした後、僅かにヘラミガキを施している。125の内面にはハケの痕跡が残る。これらの黒色土器はいずれも平安京Ⅰ中～Ⅱ中期の範疇に該当すると思われる。

129～132は土師器甕である。129～132は外反する口縁の端部を僅かに上方へ拡張している。調整は129が外面を指押さえのち板状のものでナデ、内面は指押さえのち横方向のハケを施している。130は体部外面が縦方向のハケ、内面が横方向に粗いハケの後ナデである。131の体部外面は表面が剥落して不明であるが内面は横方向のハケの後ナデである。132は体部外面が粗い縦方向のハケ、内面が板状のもので横方向のナデである。いずれも胎土中には微粒金雲母を多く含む。133は内黒の黒色土器甕と思われるもので、体部外面は横方向にヘラ削り、内面は横方向にナデの後ヘラミガキが施されている。133の胎土中には微粒の角閃石、雲母を多く含む。134は口縁部が短く直立した摂津型の土師質羽釜である。129～134は平安Ⅱ古～Ⅲ古期に該当するものと思われる。

135は製塩土器である。体部外面に指押さえの痕跡、内面は横方向のハケ調整である。口縁端部寄り外面に粘土接合痕が残る。表面はピンク色を呈し、外面に顕著である。136は製塩土器か不明のものである。胎土中には微粒金雲母を多く含む。調整は外面が指押さえの後一部ヘラ状のものでナデ、内面が板状のものでナデられているようである。外面には外傾の粘土接合痕がみられる。外内面に薄く煤が付着している。137は瓦質の塼である。表面はヘラ削りにより整えられている。片面に側面に沿った幅広の面取りがみられる。138は丸瓦で、凹面側の側面は面取りが僅かにみられる。凸面はナデ調整され、凹面には粗い布目が残る。被熱しており、凸面は少し赤みを帯びる。これらの土器集中部出土遺物は概ね9～10世紀頃のものかと思われる。

図111は盛土（整地土）から出土した遺物である。139～142は土師器杯である。143～153は須恵器の杯および杯B、杯蓋である。153の須恵器杯Bの底部外面は回転ヘラ削り後、高台を貼り付けている。外面にはうっすらと灰を被り、緻密な胎土である。播磨産須恵器で、器種は皿か不明である。153は9世紀前半か。154は須恵器壺底部である。底部内面中央と外面に灰を被り、外底には窯壁の付着物がある。155は胎土が緻密で硬質の須恵器鉢で、底部は回転糸切りの円盤状高台である。他地域の須恵器である。9世紀前半のものか。156は土師器甕で、外内面にハケ調整が施されている。口縁端部は内上方へ僅かに肥厚する。157は土師器竈である。内面はハケのちナデ調整で、外面にはハケ目が残る。これらの土器類は153・155を除き、平城宮Ⅲ～Ⅳ期の時期にあたると思われる。158は須恵質の丸瓦である。凹面にやや粗い布目と幅3.5～4cm弱の模骨痕が残る。159は須恵質の平瓦である。凸面に格子状の叩き目が施され、凹面にはやや細かい布目と幅約4cmの模骨痕が残る。格子状叩きの平瓦は七尾瓦窯の瓦と類似する。



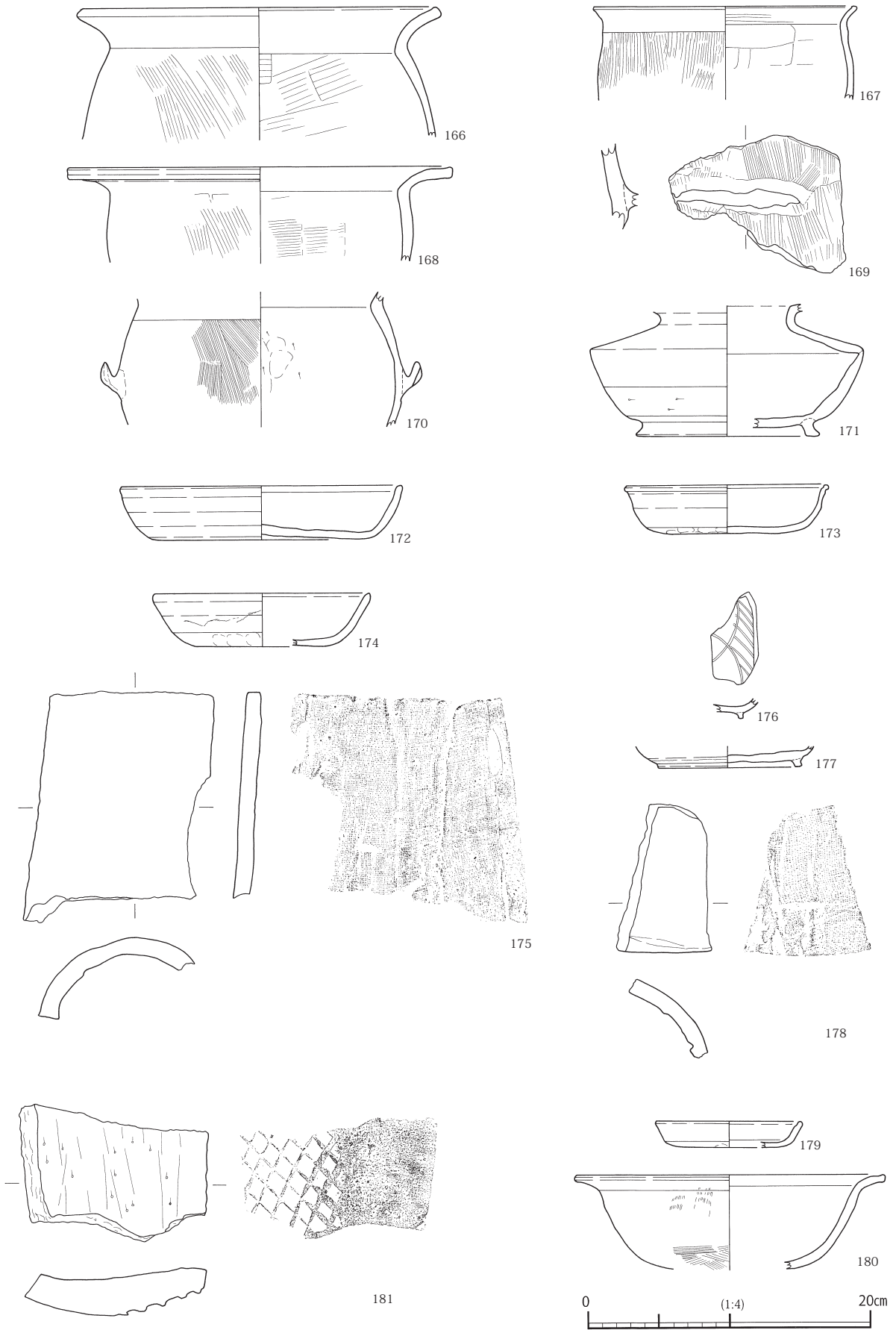


图 113 第 1 地区 第 5 面 北东部遺構群 出土遺物



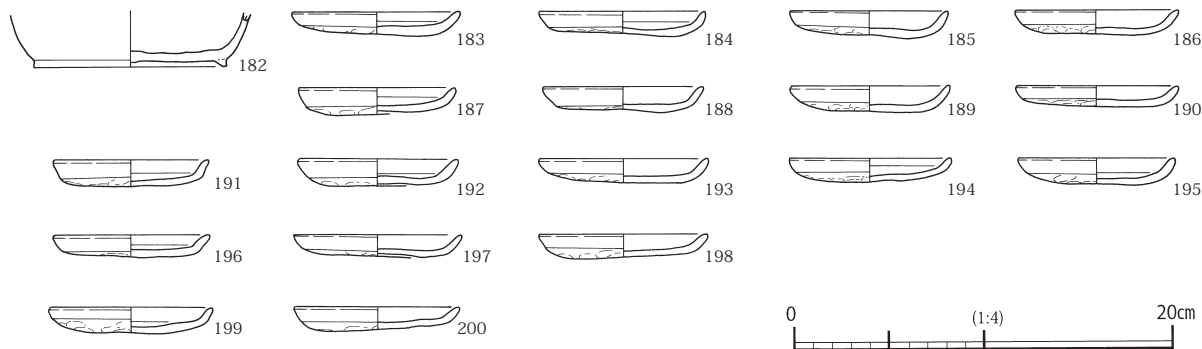


図114 第1地区 第5面 175土坑 出土遺物

図112の160は第5面321土手状遺構より出土の奈良時代と思われる製塩土器である。内外面は指押さえにより調整している。161は第5面210溝出土の土師器杯である。口縁端部内面に沈線が1条巡り、内外面ともにヘラミガキを施しており、黒色土器と同じ調整である。これは平安時代のもと思われる。162・163は第5面194井戸出土の須恵器である。162は壺、163は杯蓋である。内面に僅かに溶着痕がみられる。平安京I新期の時期であろう。164は第5面196土坑出土の須恵器杯蓋である。白っぽく、猿投窯の灰釉陶器に似た胎土であり、外面に灰を被る。時期は9世紀後半頃か。165は第5面258ピット出土の須恵器壺体部である。体部上半の外面に灰を被る。194井戸と同時期くらいと思われる。

図113は第5面北東部遺構群出土の遺物である。166～171は183土坑出土である。171の須恵器壺を除き、他は土師器である。166～168の口縁端部は内上方へ僅かに肥厚した甕である。167は胎土中に微粒金雲母を含む。土師器甕の外面はいずれもハケ調整である。内面は166・168がハケ、167はナデである。169・170は甕の把手と思われ、2点とも把手を貼り付けている。170の内面はヘラ削り後ナデである。183土坑出土遺物は平城宮Ⅲ～Ⅴ期の時期のものか。

172は184ピット出土の須恵器皿であり、底部外面は回転ヘラ削りの後ナデている。底部外面にはヘラ記号のような略平行する線が刻まれている。平城宮Ⅲ期頃か。

173～175は188土坑出土である。173・174は土師器杯である。173の口縁端部は外方へ屈曲し内面に沈線が1条巡る。底部外面調整は173が指押さえ、174は不調整である。2点は平城宮Ⅴ期と思われる。174は体部外面に粘土紐接合痕が残る。内面は被熱しピンク色に変色している。175は須恵質の丸瓦で、凹面側面の面取りは見られない。凹面はやや細かい布目で、幅約3cmの布の綴じ目痕が残る。

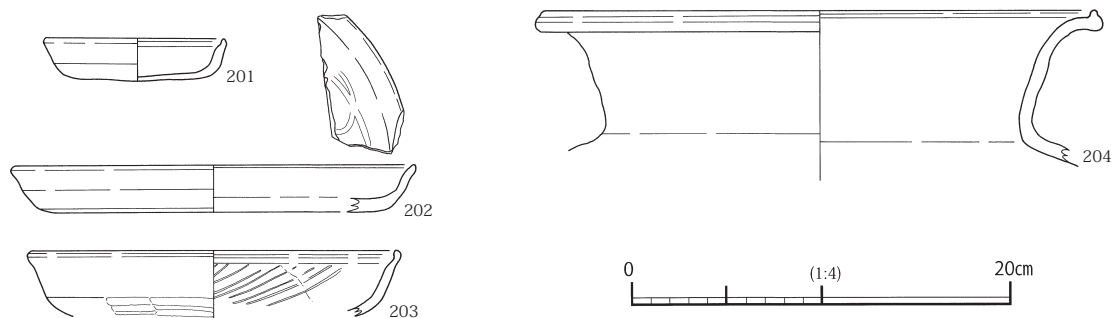


図115 第1地区 第5面 ピット 出土遺物

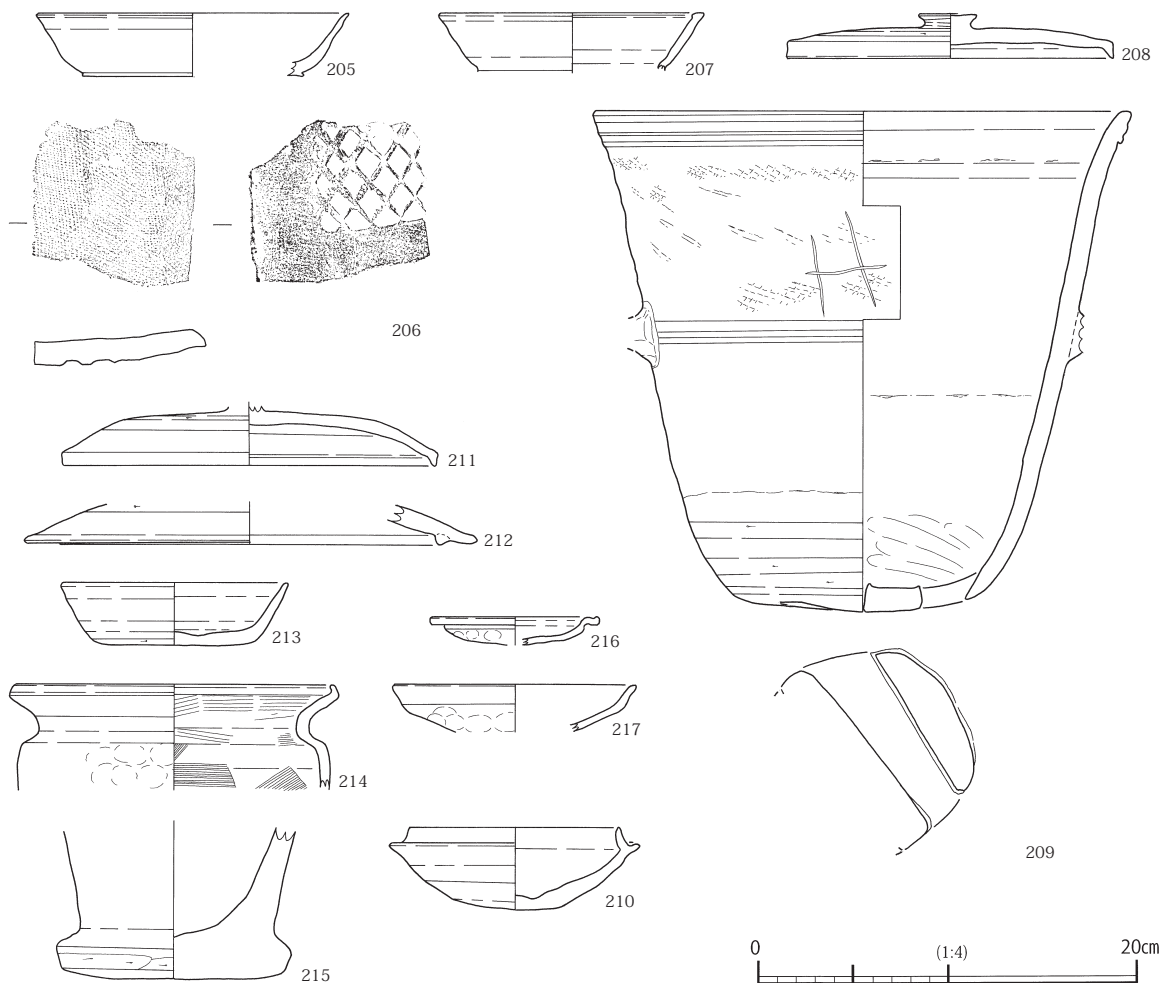


図116 第1地区 第5-2面 遺構 出土遺物

176~178は193土坑出土である。176は土師器皿の内面に放射状および螺旋状暗文が施されている。177は須恵器杯Bで、底部外面の回転ヘラ切り後のナデと内底面の不特定方向のナデ調整が雑である。176・177は平城宮Ⅲ期か。178は須恵質の丸瓦凹面に粗い布目および幅2.8cmの模骨の痕跡らしいものが残る。凸面がわ上方には火礫状のものが斜めないし横方向に残る。

179~181は252土坑出土である。179は土師器皿口縁端部内面に沈線を1条巡らせ、底部外面には粘土接合痕を留める。180は土師器盤で、口縁端部は上方に僅かに肥厚する。体部上半は剥落して不明であるが、下半にハケ目が残る。179・180は平城宮Ⅲ期の範疇にはいるものか。181は須恵質の平瓦で、凹面はヘラ削り、凸面は格子状叩きである。厚手で若干焼け歪みがある。凹面から側面にかけて全面に自然釉がかかっている。

図114は第5面175土坑出土の遺物である。182の須恵器杯Bを除き、他は全て土師器小皿である。182は底部外面を回転ヘラ切り後雑なナデ、内底面は雑な回転ナデである。182は平安京Ⅱ古期か。184~186・189・190・193・196~200は底部中央付近から口縁部に延びる粘土接合痕が残る。183・188は若干屈曲して底部寄りから口縁部にかけての粘土接合痕が残る。183・188は口縁部に沿うように粘土接合痕がみられる。土師器小皿は全て形態的な特徴から京都Ⅴ新期の12世紀後半のものと思われる。

図115は第5面ピット出土遺物である。201は261ピット出土土師器皿の口縁端部内面に沈線を1条

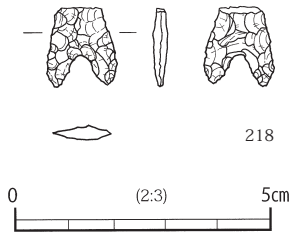


図117 第1地区 第5-2面直上  
出土遺物

巡らせたもので、外面の底部および体部に粘土接合痕がみられる。底部外面は指押さえ、ナデ調整である。202は246ピット出土土師器皿で、内面底部に螺旋状暗文が施されている。底部外面はナデ調整の後にヘラミガキが施されている。201・202は平城宮Ⅲ期の範疇のものか。203は240ピット出土土師器杯で、口縁端部内面に沈線が1条巡り、放射状暗文が体部に1段施されている。底部外面はヘラ削り後軽くヘラミガキが施されている。時期は平城宮Ⅲ期である。204は253ピット出土の須恵器壺である。平城宮Ⅲ～Ⅳ期の時期に該当すると思われる。

図116は第5-2面検出遺構出土遺物である。205・206は270溝出土である。205は須恵器の壺口縁部である。一見、土師器の二重口縁壺に似た口縁形態である。古墳時代のものか。206は須恵質平瓦の凸面に格子状叩きがある。凹面には幅3.5cmの模骨痕と粗い布目が残り、側面は軽く面取りがなされている。薄手である。凸面格子状叩きは七尾瓦窯の瓦に類似する。207は266溝出土土師器の布留式甕口縁部である。口縁端部内面の肥厚は扁平気味である。208は267土坑出土の須恵器杯蓋であり、胎土はやや白っぽく、外面に灰を被る。内面中央は一定方向のナデ調整を施している。平城宮Ⅳ期にあたる。

209・210は265井戸出土の須恵器である。209は甑で体部外面には「キ」の字が横向きになったようなヘラ記号がつけられている。体部中央には把手が貼り付けられているが、欠損しており詳細不明である。底部には楕円形状の透かしが3箇所穿たれていたと推定される。調整は体部外面上半を平行叩きのち横ナデ、体部下半は回転ヘラ削りを施している。210は杯身である。受け部に蓋口縁端部の溶着痕、外面には窯体か不明の溶着痕がみられ、杯部が厚手である。杯身は陶邑編年Ⅱ型式3～4段階、甑はそれと同時期位かと思われる。

211～215は268溝出土遺物である。214のみ土師器、他は須恵器である。211は杯蓋で、つまみは打ち欠かれ、内面には墨が付着し、その表面は摩滅し滑らかである。転用硯として使用されたものである。平城宮Ⅲ期にあたる。212は焼成がやや不良の杯蓋で外面が黒味を帯びることから、外面を上にして焼成したものと考えられる。213は杯で、底部外面を回転ヘラ切り後雑なナデ、内底面は一方向のナデ調整を施している。底部外周にひび割れがみられる。212・213は飛鳥Ⅲ～Ⅳ期に該当すると思われる。214は土師器甕の口縁端部をつまみあげた形態で、内面はハケ調整、外面は指頭圧痕を留める。奈良時代のものか。215はすり鉢で、内底面中央に8mm×2mm、深さ5mm位の窪みがみられ、その周辺の表面は滑らかである。底部外面は回転ヘラ切り痕が一部残るが、表面はかなり摩滅している。陶邑編年Ⅱ型式4段階と思われる。

216・217は263井戸出土の土師器皿である。216は「て」の字状口縁皿である。全体に薄いピンク色を呈し、被熱しているものと考えられる。217は胎土中に微粒金雲母を多く含み、体部外面には指頭圧痕を留める。216・217ともに時期は平安京Ⅳ新～Ⅴ古期か。

図117の218は第5-2面出土のサヌカイト製の凹基式石鎌である。先端部は欠損して不明である。表面は白く風化しており、基部の挟りが深いところから縄文時代中期から後期頃の可能性が考えられる。

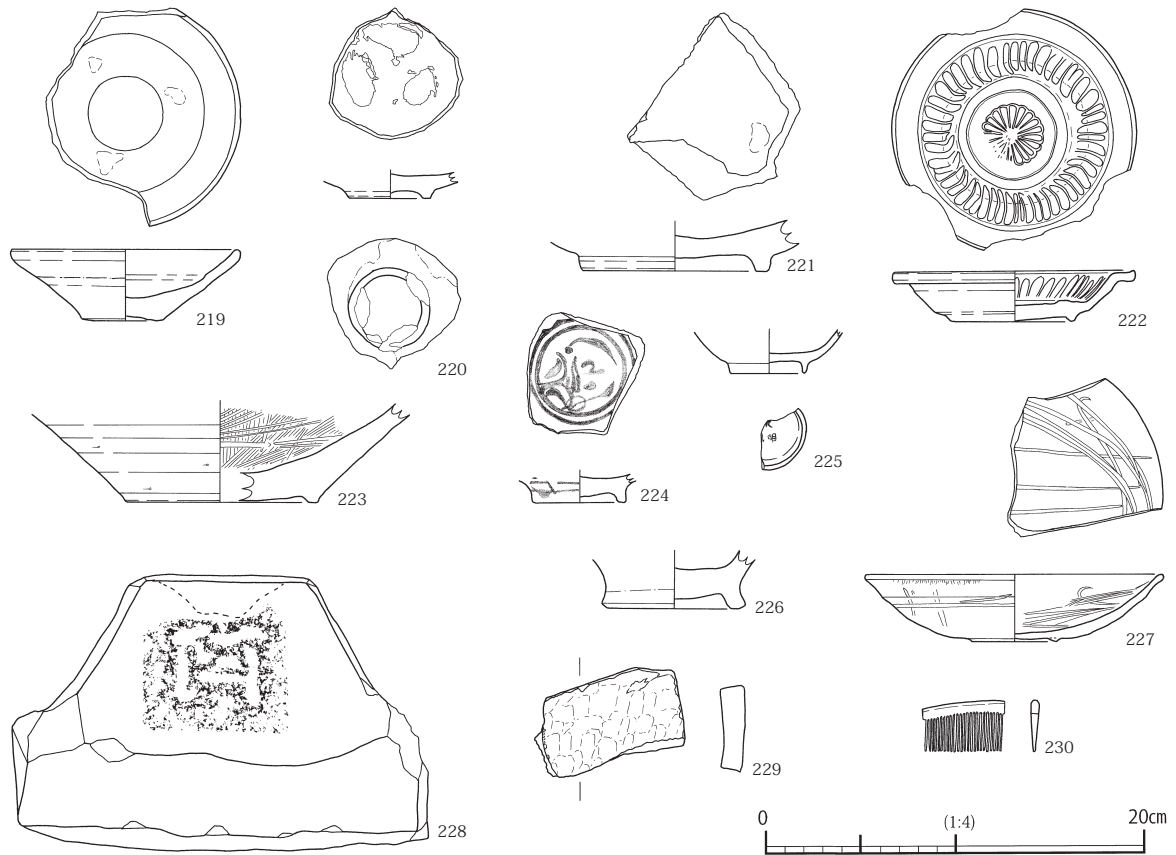


図 118 第2地区 第3面 15池 出土遺物

## 2. 第2地区出土遺物 (図118~124、写真図版40~42)

図118は15池出土遺物である。219~221は唐津焼である。いずれも削り出し高台で、轆轤の回転は逆時計回りである。219は見込みに胎土目のついた椀である。219の底部は輪高台上に1条の沈線が巡り、中央部は浅く削りだしている。17世紀第1四半期前半のものである。220は見込みに砂目のついた皿である。底部は輪高台で、高台内中央は兜巾高台のように僅かだが突出している。時期は17世紀第2四半期のものである。221は唐津焼盤底部で、胎土目の17世紀第1四半期のものである。222は瀬戸の灰釉皿で、菊花文がスタンプされている。見込みは環状に釉剥ぎされ、底部外面は削り出し高台である。轆轤の回転は時計回りである。欠損した後の口縁部内外や全体に煤が付着しており、火災にあったものと考えられる。16世紀後半の時期に当たる。223は唐津焼播鉢である。底部は轆轤回転が逆時計回りのヘラ削りにより、僅かに高台状をなす。円弧状の播り目の轆轤回転方向は逆時計回りである。かなり使い込まれ、表面は摩滅している。17世紀第1四半期前半のものである。224は漳州窯系青花碗である。見込みに草花文、高台直上に圈線が描かれている。畳み付けに粉殻状のものが付着している。16世紀末~17世紀初頭のものである。225は高台内面に「大明年製」と書かれた伊万里焼染付碗である。17世紀後半のものである。226は白磁四耳壺底部である。高台内面は無釉である。12世紀後半のものである。227は瓦器椀である。内面には見込みの平行暗文のあとで圈線状に疎らな暗文が施されている。外面の口縁部から体部にかけては極疎らなヘラミガキがみられる。和泉型Ⅲ-2期に該当する。228は五輪塔の笠部分の火輪である。頂部に風輪を固定させるための穴が浅く穿たれている。側面の1箇所には「阿」の字が刻まれている。16世紀のものである。229は中世の石鍋体部破片の2辺を研磨して平面四角形状にし

ており、温石として再利用されたものかと推測される。外面に煤が付着している。230は木製の櫛である。櫛の歯の間隔がやや狭いので梳き櫛と思われる。中世のものか。

図119は第3面、第3・4層出土の遺物である。231～233は第3面および第3層出土である。231は備前播鉢である。卸目が全面に付されておらず、口縁部の拡張が上方のみである点から15世紀前半のものである。232は福建省江上流窯系白磁皿である。割り高台で、胎土は粗い。15世紀後半のものである。233は灰釉陶器碗である。口縁部が僅かに外反し、体部は直線的である。外面体部下半はヘラ削りされている。胎土はやや砂っぽく、灰白色を呈する。10世紀後半の美濃産である。234～236は第4層出土である。234は瓦器碗である。見込みにジグザグ状の暗文が施されている。外面は指押さえ、ナデである。高台が退化しており、外面にミガキが無い点から、楠葉型Ⅲ-1期と思われる。235は青磁碗が火にかかり変色した体部である。内面に施文がみられる。青磁碗VかVI類か。13世紀初頭のものである。236は外面を黒色、内面を赤色に塗布した漆器碗である。外面には轆轤掛けの際できた幅3～9mmの削り面がみられる。16世紀頃のものと思われる。

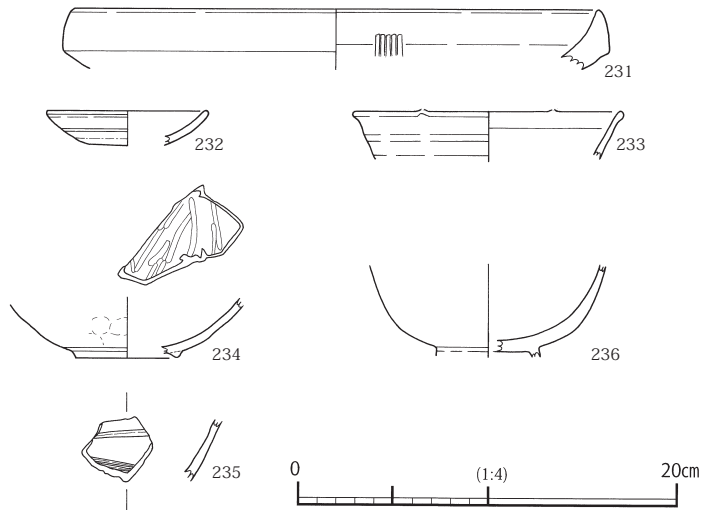


図119 第2地区 第3面、第3・4層 出土遺物

図120・121は第5面350井戸出土の遺物である。237～240は「て」の字状口縁の土師器小皿である。色調が全体に白っぽい、237は僅かに褐色、239は少し橙色を帯び、これらは被熱している可能性が考

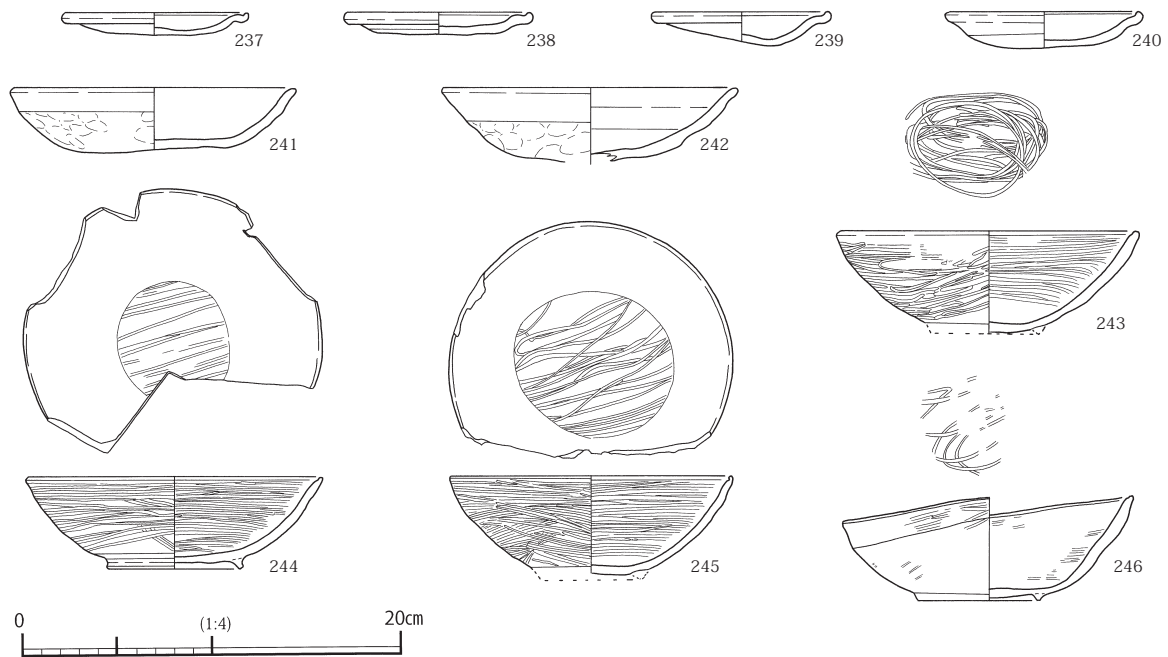
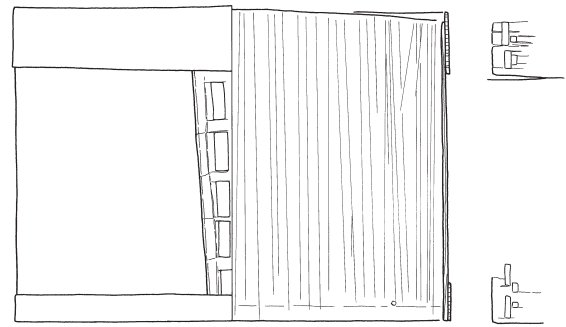
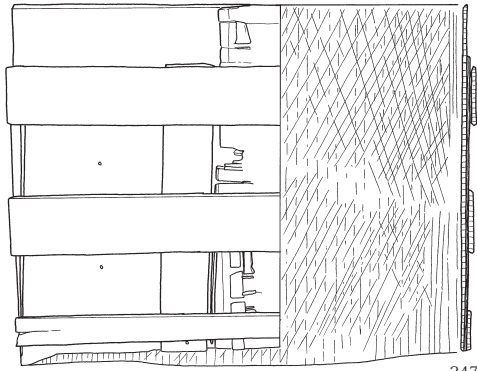
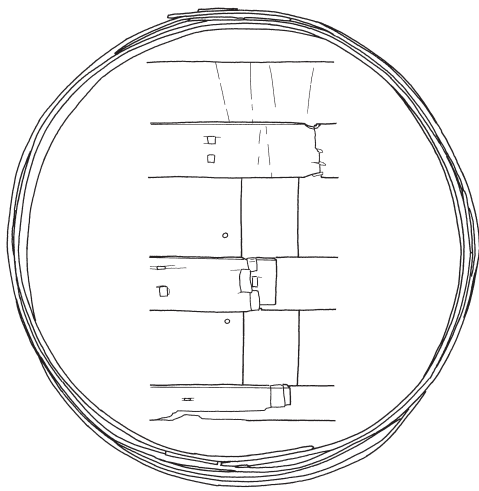


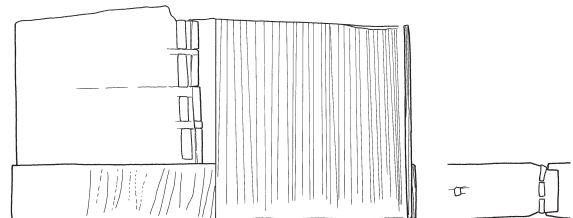
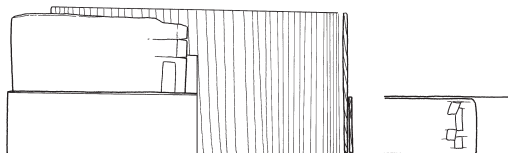
図120 第2地区 第5面 350井戸 出土遺物(1)





248

247



249

250

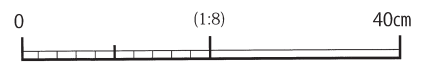


图 121 第 2 地区 第 5 面 350 井戸 出土遺物 (2)



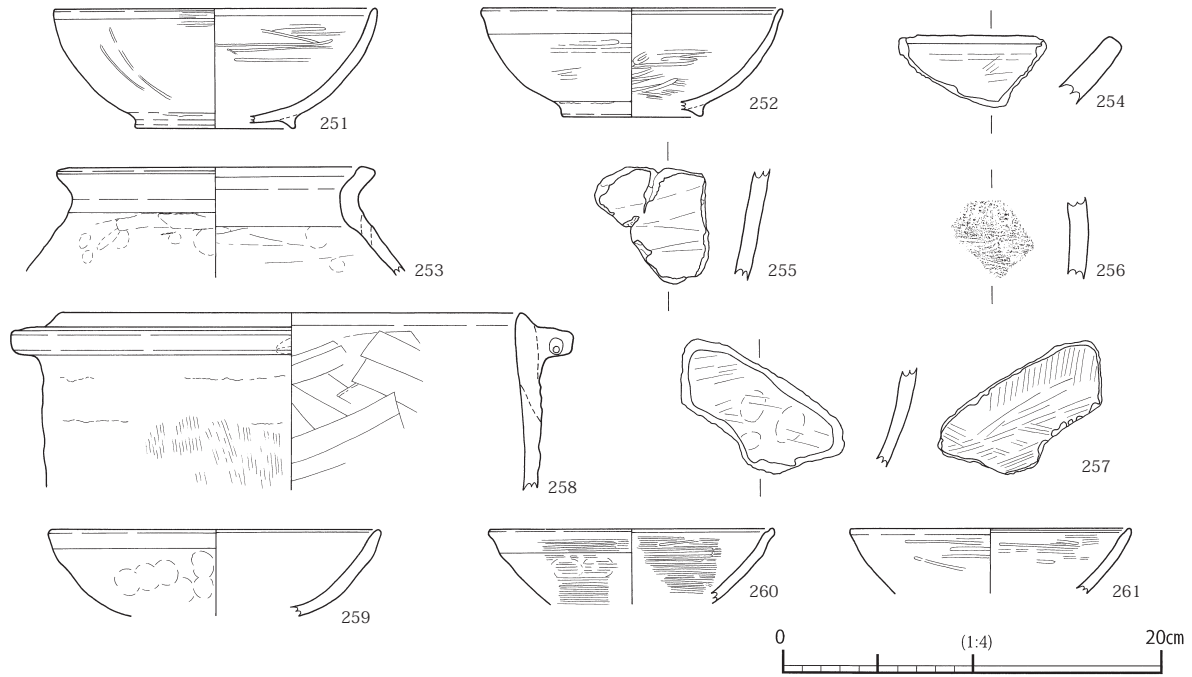


図 122 第 2 地区 第 5 面 建物 2、ピット 出土遺物

えられる。238・239の底部外面には粘土接合痕が残る。240の体部から口縁部にかけての屈曲は他に比べて緩い。241・242は土師器皿である。241の外面底部は指押さえのちへら状のもので一定方向にナデ調整を施している。外内面の約2分の1に煤が付着している。242は体部外面を指押さえ、ナデにより調整している。外面は表面の剥落した底部を除くと全面に煤が付着している。241・242は平安京IV新～V古期の時期に該当すると思われる。243～246は瓦器椀である。口縁端部内面には沈線が1条巡る。体部内外面ともに密なへらミガキが施されている。243～245の体部には4分割ミガキが認められる。243・246は見込みに楕円形状の暗文が施され、体部から口縁部にかけて圏線状のミガキが施されている。246は焼け歪みが著しい。244・245は見込みにジグザグ状の暗文の後、体部から口縁部にかけて圏線状のミガキが施されている。243・245の高台は欠損しており不明であるが、これらの瓦器椀は楠葉型I-3～II-1期のものかと思われる。

247～250は井戸枠として使用されていた曲物である。247は箍が上・中・下の3ヶ所にまかれている。内面のケビキは中央を境に上半、下半の2回に分けて施されており、方向は垂直と、さらに斜め格子状に施されている。外面には削りの痕跡が1.3～2.0cmの幅で認められる。下部は一部欠損している。釘孔が1ヶ所に残る。248は箍が上・下の2ヶ所にまかれ、内面のケビキは垂直方向に施されている。249・250は上部欠損したもので、箍が下の部分に残る。内面のケビキは垂直方向である。曲物の材はいずれもヒノキで、桜の皮で綴じている。

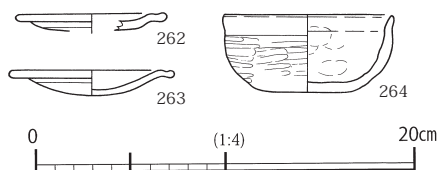


図 123 第 2 地区 第 5 面 110 土坑、121 溝 出土遺物

図122は第5面建物2、ピット出土遺物である。建物2では111・117柱穴から遺物が出土している。111柱穴では251・252の黒色土器A類椀、253の土師器甕、254の土師器不明口縁、255～257の製塩土器がある。251は「て」の字状土師器皿のように白っぽい胎土であるが、252の方は灰褐色を呈し、外面に煤が少し付着してい

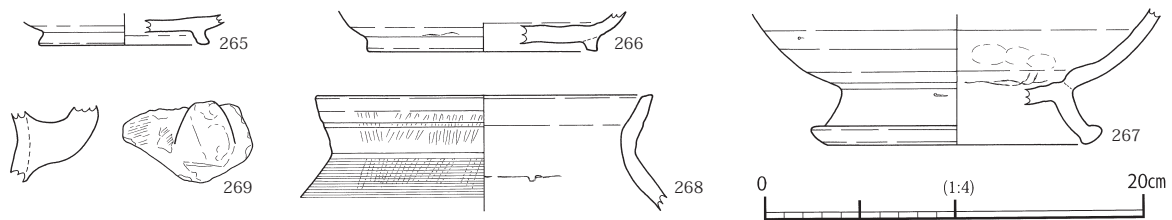


図124 第2地区 第5面 40落込み 出土遺物

る。252の口縁端部内面には沈線が1条巡る。253は外面を指押さえ、内面を指押さえの後板状のものでナデ調整を施しているが、頸部外面に粘土紐接合痕が残る。胎土中には微粒金雲母を多く含む。外面には煤が付着している。251～253は平安京Ⅱ中～新期のものか。254はにぶい黄褐色を呈し、かなり粗い砂粒を含み、製塩土器と似た胎土である。内・外面を横方向にナデ調整を施しているが、被熱によるものか外面の表面は荒れている。255は内外面ともに横方向の粗いナデ調整を施しているが、表面は被熱により荒れている。256・257は外面にハケ、内面にナデ調整が施されている。256の内面に煤の付着が認められる。258は117柱穴出土の土師質羽釜である。胎土中に微粒金雲母を多く含む。罅は欠損部から横方向の先窄まりに深さ約1cmの穴が開けられているが、罅欠損部に何かを差し込んで使用したものか。体部内面には煤が付着している。259・260は84ピット出土である。259は土師器碗のようににぶい黄橙色を呈するが、胎土がきめ細かく、口縁端部内面に沈線が1条巡ることから、焼成不良の瓦器碗が表面摩滅した可能性がある。260は瓦器碗である。260は段状口縁と幅狭のヘラミガキが蜜に施されている点から大和型のⅠ-D・Ⅱ-A期にあたるものかと思われる。261は85ピット出土の口縁端部内面に沈線が1条巡る瓦器碗である。内面は横方向のヘラミガキが蜜に、外面は分割ミガキが疎らに施されている。楠葉型Ⅱ-1期か。

図123は第5面遺構出土遺物である。262・263は110土坑出土の土師器小皿である。これらの口縁部は「て」の字状を呈し、体部外面に指頭圧痕がみられる。色調は浅黄橙色である。時期は平安京Ⅳ新～Ⅴ古期と思われる。264は121溝出土の黒色土器B類小型碗で、外面に横方向のヘラミガキが施されている。平安京Ⅳ中期頃か、11世紀後半のものかと思われる。

図124は第5面40落込み出土遺物である。265・266は須恵器杯Bである。265は底部外面を回転ヘラ削り、内底面を一定方向にナデ調整を施している。時期は平城宮Ⅰ～Ⅱ期にあたると思われる。266は底部外面を回転ヘラ切りした後不特定方向にナデ調整を施しているようである。266は平安京Ⅰ中期にあたると思われる。267は須恵器壺脚部であり、内面底部に直径約3cmの当て具状のものを押し当てた痕跡が残る。陶邑編年Ⅳ型式1段階か。268は須恵器の短頸壺であり、体部は叩きのちカキメ調整が施されている。陶邑編年Ⅳ型式1段階か。269は須恵器の甑か不明の貼付け把手である。外面にハケ調整が施されている。平城宮Ⅰ～Ⅱ期か。

### 3. 第3地区出土遺物

出土遺物は極少量で残存状態も悪く、図化および写真掲載はしていないが、以下に遺物概要を述べる。旧耕土層からは10～11世紀の摂津型羽釜、古代の須恵器甕体部、19世紀の伊賀信楽窯系の陶磁器体部片などが出土している。第1面7ピットからは黒色土器A類碗体部破片や土師器の甕体部と思われる破片

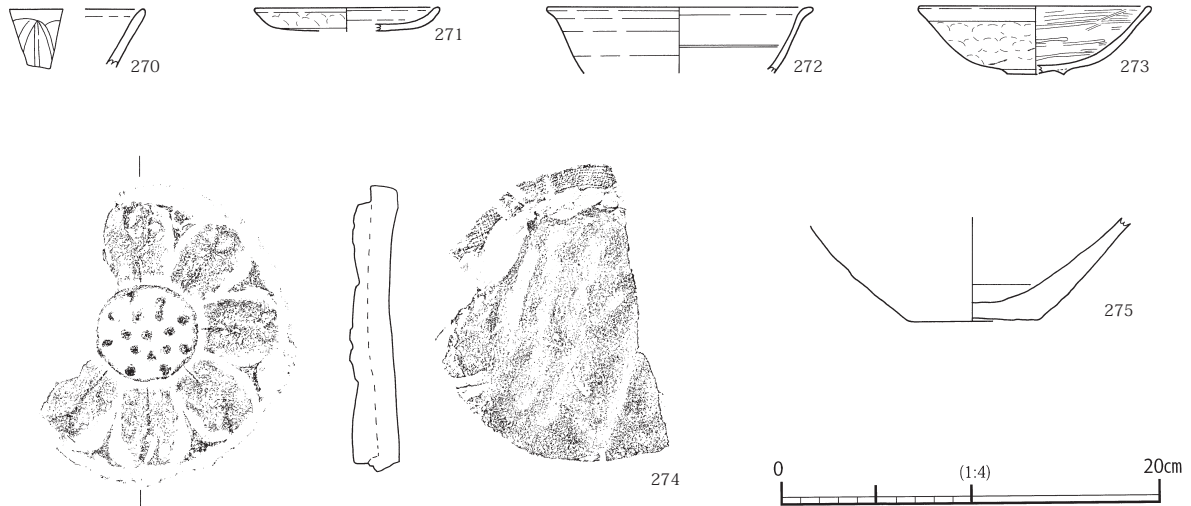


図 125 第 4 地区 出土遺物

が出土している。第 1 面 4 ピットからは黒色土器 B 類の器種不明体部破片が 1 点出土しているのみである。第 3 面からは弥生土器片が少量出土しており、そのうちの 1 点には叩きが施されており、後期の甕体部片と考えられる。

#### 4. 第 4 地区出土遺物 (図125)

図125は 4 地区出土遺物である。270は第 3 層出土の龍泉窯系青磁蓮弁文碗であり、I 5 b 古類の13世紀第 3 四半期のものである。271は第 4 面45ピット出土の土師器小皿である。外面は指押さえのちナデ調整であるが、口縁部の横ナデが弱く、指押さへの痕跡が残る。内面は被熱しているのか浅黄橙色を呈する。12～13世紀のものと思われる。

272・273は第 3 面10井戸出土である。272は中国白磁碗 V 類の13世紀初頭のものである。273は見込みに粗い平行の、内面の口縁から体部には粗い圈線状のヘラミガキ、外面には粘土紐接合痕が残り、指押さえ調整が施されている。高台の径は小さく、断面三角形状を呈している。外面の底部から体部にかけて一部炭素の吸着不良がみられる。和泉型瓦器碗Ⅲ-3期の13世紀前半に属する。

274は第 5 面26ピット出土の須恵質の素弁八葉蓮華文軒丸瓦である。蓮子は 1 + 7 + 8 である。蓮華文の弁端など、文様の突出部分に摩滅が著しい。外縁は打ち欠かれているが、外縁の剥落部分には丸瓦凹面の布目が転写して残る。文様のある面を裏返して根石の替わりに使用されており、裏面は摩滅してなめらかである。

275は溝状の攪乱層から出土した土師器か須恵器の生焼けか不明の底部であるが、胎土中に微粒金雲母を多く含み、色調が灰黄褐色を呈することから土師器と考えられる。表面は大部分剥落し詳細は不明であるが、一部にロクロ回転の痕跡が窺われる。被熱して赤変し、内外面には煤が付着している。

#### 5. 第 5 地区出土遺物

図化および写真掲載はしていないが、少量の遺物が出土している。側溝からは土師器皿、瓦器碗が出土しており、瓦器碗は13世紀後半、土師器小皿は13世紀に属すると思われる。包含層からは18世紀の染付碗、瓦器、土師器片が出土している。茶褐色包含層からは13世紀の東播系須恵器捏ね鉢、黒色土器 B

類、瓦器、土師器、14世紀の中国青磁碗、瓦質羽釜が出土している。第2層からは須恵器壺体部片が1点出土しており、沈線1条と波状文が1帯施文されており、5世紀後半のものと思われる。

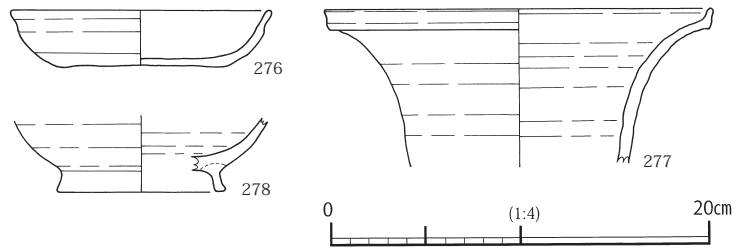


図126 第6地区 第1層 出土遺物

### 6. 第6地区出土遺物 (図126~130、写真図版43~45)

図126は包含層出土遺物である。276・277は第1層出土である。276は土師器皿である。口縁部は横ナデ、底部から体部にかけては指押さえ調整である。11~12世紀のものと思われる。277は灰釉陶器広口壺である。胎土は303と同じく、磁器のように緻密である。10世紀後半の東濃産である。278は包含層出土の緑釉陶器碗である。高台は貼付けの輪高台である。硬質で全面に深い緑色の釉が掛かっている。胎土はきめ細かく、やや砂っぽい。時期は10世紀前半の東海系である。

図127は第1面建物およびピット出土遺物である。279~282は建物2出土遺物であり、84・77・183・176柱穴出土遺物がそれに該当する。279は84柱穴出土の土師器皿である。口縁端部内面に沈線が1条巡り、外内面には橙色の化粧土の様なものが残る。平安京Ⅱ古期か。280は77柱穴出土の土師器皿である。口縁端部上面に沈線が1条巡る。外面には微かに橙色の化粧土状のものが残る。平安京Ⅰ中期か。281は183柱穴出土の土師器皿である。胎土はきめ細かく、手触りが滑らかである。平安京Ⅱ中期か。282は176柱穴出土の須恵器甕である。胎土中に石英、長石砂粒を多く含む。平安京Ⅰ新~Ⅱ古期か。いずれも、平安京Ⅰ~Ⅱ期の範疇の時期におさまるとされる。

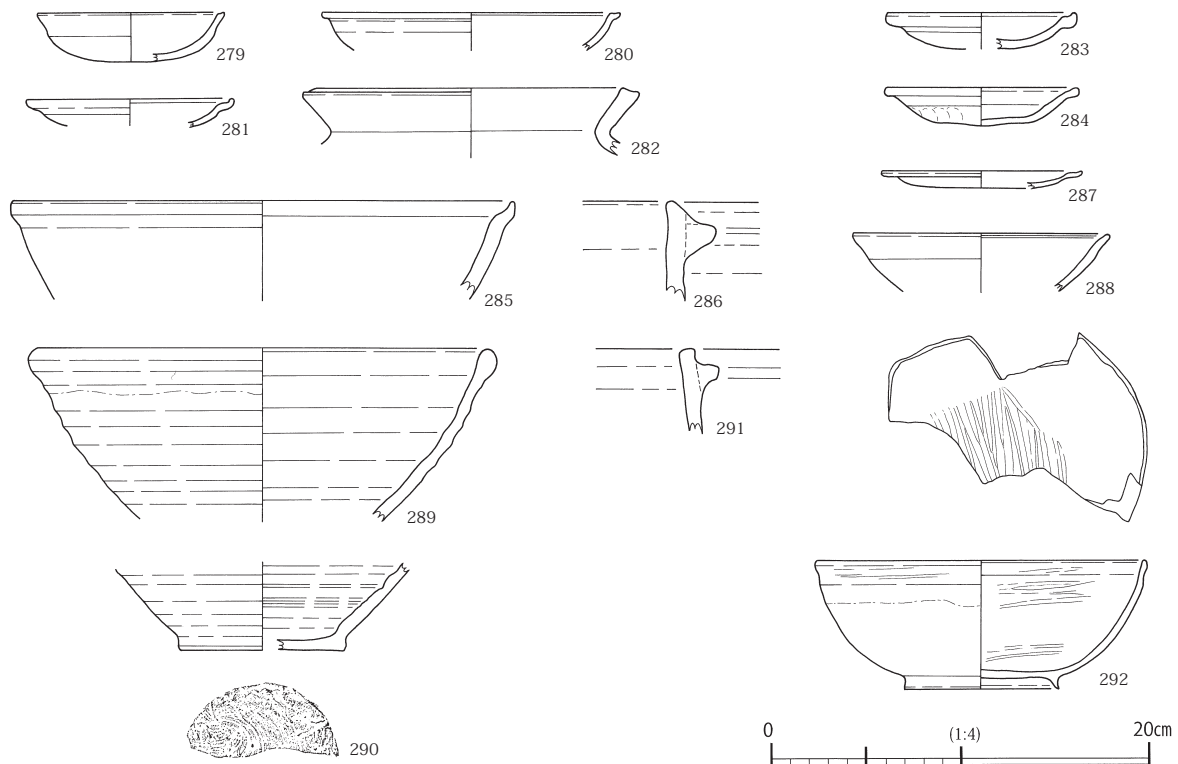


図127 第6地区 第1面 建物、ピット 出土遺物

283・284は建物4出土土師器皿である。283は47柱穴、284は356柱穴出土である。2点とも「て」の字状の口縁部形態で、胎土はきめ細かく、手触りは滑らかである。平安京Ⅳ新～Ⅴ古期に相当する。

285・286は建物5のうち、285は146柱穴、286は114柱穴出土である。285は須恵器鉢である。口縁端部内面を強くナデ、受け口状を呈する。胎土が緻密で黄灰色を呈することから、讃岐産か不明であるが、他地域産須恵器と考えられる。286は摂津型羽釜である。胎土中に微粒金雲母と石英を多く含む。時期は10～11世紀である。

287は192ピット出土の土師器皿である。表面は磨耗し、灰白色を呈するが、口縁端部内面に僅かに橙色の化粧土状のものが残る。時期は平安京Ⅲ新期か。288は37ピット出土の黒色土器B類碗である。表面の残存状態が悪く、詳細は不明である。平安京Ⅳ中期か。289は314ピット出土の須恵器鉢である。胎土は緻密である。焼成は不良で灰白色を呈している。篠窯の須恵器か。平安京Ⅳ中期か。290は292ピット出土の須恵器鉢で、底部外面に回転糸切り痕を留める。胎土は緻密であり、他地域産の須恵器と思われる。平安京Ⅳ中期か。291・292は116ピット出土である。291は土師質の摂津型羽釜、292は黒色土器A類碗である。292は底部内面に一定方向のヘラミガキを施している。体部外面はヘラ削り後ナデを施している。黒色土器は平安京Ⅱ新期か。写真図版45-453は76ピット出土の焼土塊である。

図128は6地区の遺構出土遺物である。293～300は3土坑出土である。293は「て」の字状口縁の土師器小皿、294は土師器皿で、両方ともに緻密な胎土である。293の底部外面には粘土紐接合痕がみられ、指押さえのちナデの後、ハケ状工具でナデている。293の口縁部内面の一部がピンク色をしているが、被熱したものか。2点ともに平安京Ⅳ中期に該当すると思われる。295は土師器碗で、器表面は荒れており、底部外面が一部赤変していることから、被熱していると考えられる。295は土師器皿などと同時期くらいか。296・297は黒色土器A類碗である。2点ともに被熱している。平安京Ⅲ新期の時期か。298は須恵器碗底部であるが、外面および見込み上部に一部自然釉が掛かっている。底部外面は回

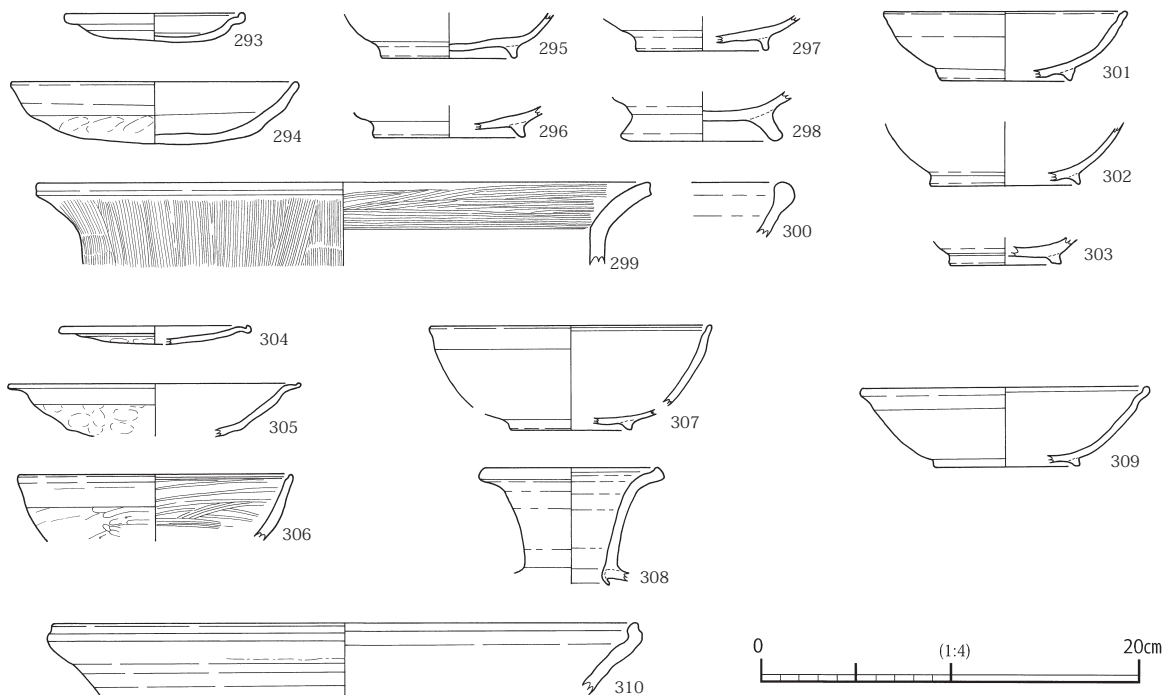


図128 第6地区 第1面 溝、土坑 出土遺物



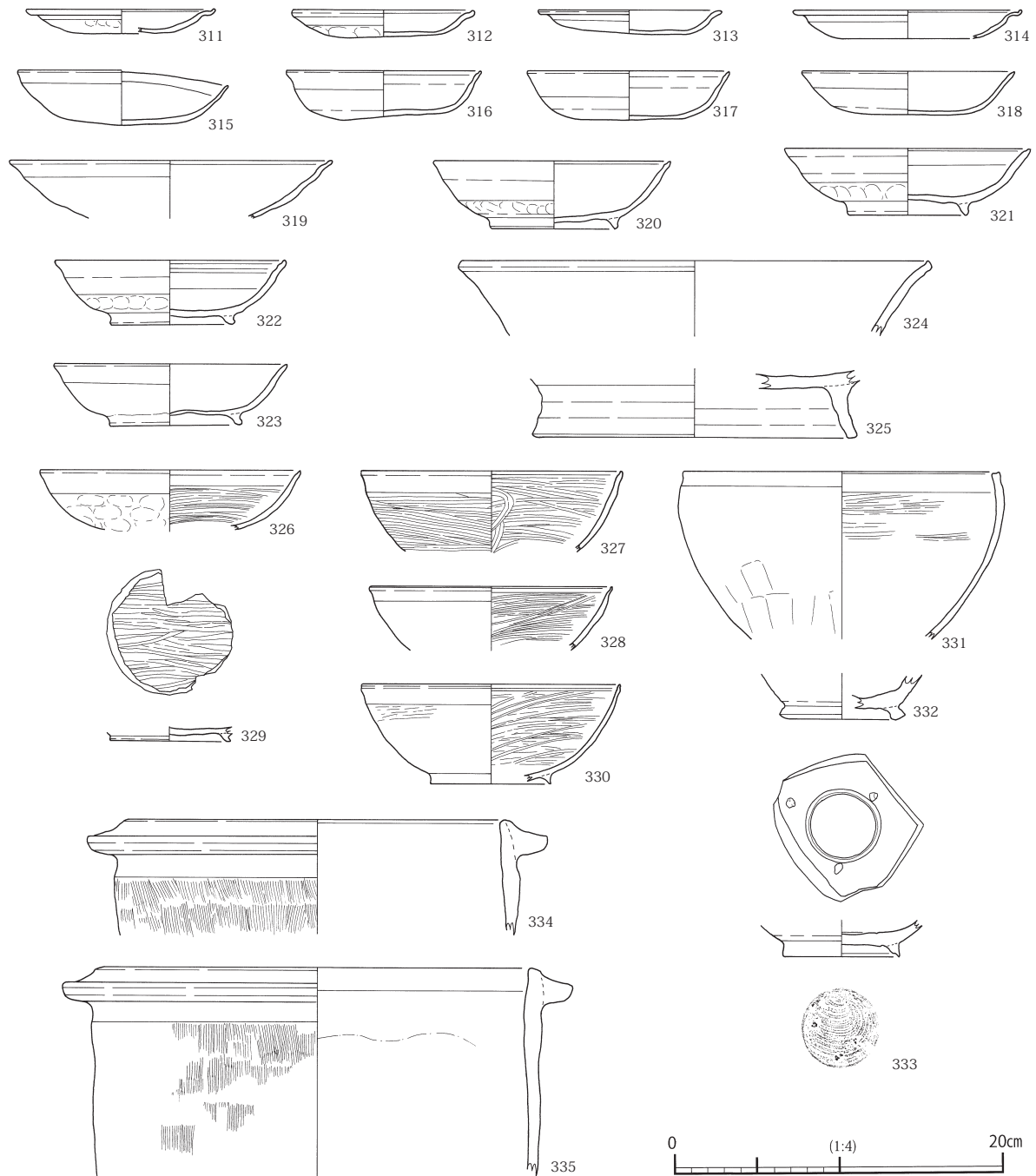


図 129 第6地区 第1面 61土坑 出土遺物

転へラ切り後軽くナデ、見込みは中央のみ一方向のナデ調整を施している。灰釉陶器の形を模した可能性も考えられる。9～10世紀のものと思われる。299は土師器甕である。胎土中に微粒金雲母を多く含む。外面には煤が付着している。10世紀前半のものか。300は須恵器鉢口縁部の玉縁状を呈したものである。胎土はきめ細かく、白っぽい生焼け状態で、東播系とは全く異なる。被熱しているのか、表面は斑状にピンク色をしている。篠窯の10世紀終りから11世紀初めのころか。これらの出土遺物より、3土坑は11世紀前半のものと考えられる。

301～303は121土坑出土遺物である。301は土師器碗であるが、黒色土器A類が被熱のため表面の炭素が飛んだ可能性が考えられる。302は黒色土器A類碗である。時期は301・302とともに平安京Ⅱ新期の



ころか。303は硬質の灰釉陶器碗である。貼付け高台で、見込みに重ね焼痕が残る。見込み・外面底部は無釉で、畳み付けは剥落後摩滅している。277と同じく磁器のような胎土である。10世紀前半の東濃産である。出土遺物からみて、121土坑は10世紀前半のものと考えられる。

304～306は269土坑出土土器である。304・305は土師器皿である。304は暗灰黄色を呈し、6mmのチャート礫を1粒含む。他の「て」の字状口縁の土師器皿の胎土とは異なる。305は灰白色の胎土に橙色の化粧土状のものが外面に認められる。ともに平安Ⅲ新～Ⅳ古に該当する。306は黒色土器A類碗である。口縁端部内面に沈線が1条巡る。外面には橙色の化粧土のようなものが認められ、一部が赤変している。平安京Ⅲ古期か。307・308は68土坑出土である。307は黒色土器B類碗で、口縁端部内面に沈線が1条巡る。体部外面には粘土接合痕が残る。胎土中に微粒金雲母を多く含む。表面は荒れており、調整は殆ど不明である。平安京Ⅳ古期か。308は須恵器壺である。口縁部内面、頸部外面の一部に灰を被る。平安京Ⅰ中期に該当する。309は309土坑出土の土師器杯Bであり、外面の一部に橙色の化粧土状のものが認められる。高台部分は若干ピンク色を呈しており、被熱の可能性が考えられる。口縁部直下の体部外面に粘土紐接合痕がみられる。平安京Ⅱ中期か。310は288溝出土の東播系須恵器鉢であり、12世紀代のものと思われる。

図129は61土坑出土遺物である。311～314は胎土中に微粒金雲母を多く含む、「て」の字状口縁の土師器小皿である。311は橙色の素地に灰白色の化粧土状のものをかけているようである。312～314は灰白色を呈し、きめの細かい胎土である。312の底部内面には白っぽい粘土が表面を薄く覆っている。311～314は平安京Ⅲ新～Ⅳ新期に該当すると思われる。315～319は土師器皿である。315の表面は剥落しているが、きめ細かい灰白色の胎土の表面には橙色の化粧土状のものが内面の一部に残る。315は一部被熱している。316はややざらついた微粒金雲母を多く含む灰白色の素地に橙色の化粧土状のものが残る。317は316と似た胎土であるが、表面は剥落して不明である。318はきめの細かい胎土に赤色粒を大量に含む。319はきめの細かい胎土で、微粒金雲母を多く含む。315～319は平安京Ⅲ新～Ⅳ古期か。

320～323は土師器杯Bである。320～322は口縁端部内面に沈線が1条巡る。320の外面、321の口縁部と底部外面には煤が付着している。322の口縁部外面は一部橙色を呈しているが、焼成時の発色によるものか考えられる。323は被熱によるものか表面が剥落して、口縁端部の沈線は不明である。323の胎土はきめが細かく、赤色粒を大量に含む。320～323は平安京Ⅱ中～新期頃か。324・325は赤色粒を大量に含むきめ細かい胎土であり、非常に酷似しているため、同一個体の可能性がある。324・325ともに表面が磨耗し詳細は不明であるが、内面にヘラミガキが施されていたようである。平安時代の盤とその高台と思われる。

326～330は黒色土器A類碗である。口縁端部内面に沈線が1条巡る。いずれも胎土中に微粒金雲母と赤色粒を大量に含み、外面は灰黄色～橙色であるが、327は灰黄褐色を呈する。326～330は平安京Ⅲ新期か。331は黒色土器A類鉢である。体部外面下半をヘラ削り調整を施している。平安京Ⅱ新～Ⅲ古期か。

332は須恵器壺高台であり、胎土はきめ細かく、灰色を呈し、底部外面に回転糸切り痕が残る。平安京Ⅰ中期か。

333は軟質の緑釉陶器碗であり、高台内面に回転糸切り痕を留め、貼付け輪高台は段状をなす。見込みには3箇所直径4～7mmのトチン跡がある。胎土はきめ細かく、釉はオリーブ色に茶色がかったような色合いである。高台内面には釉はかかっていない。10世紀中頃の近江産である。

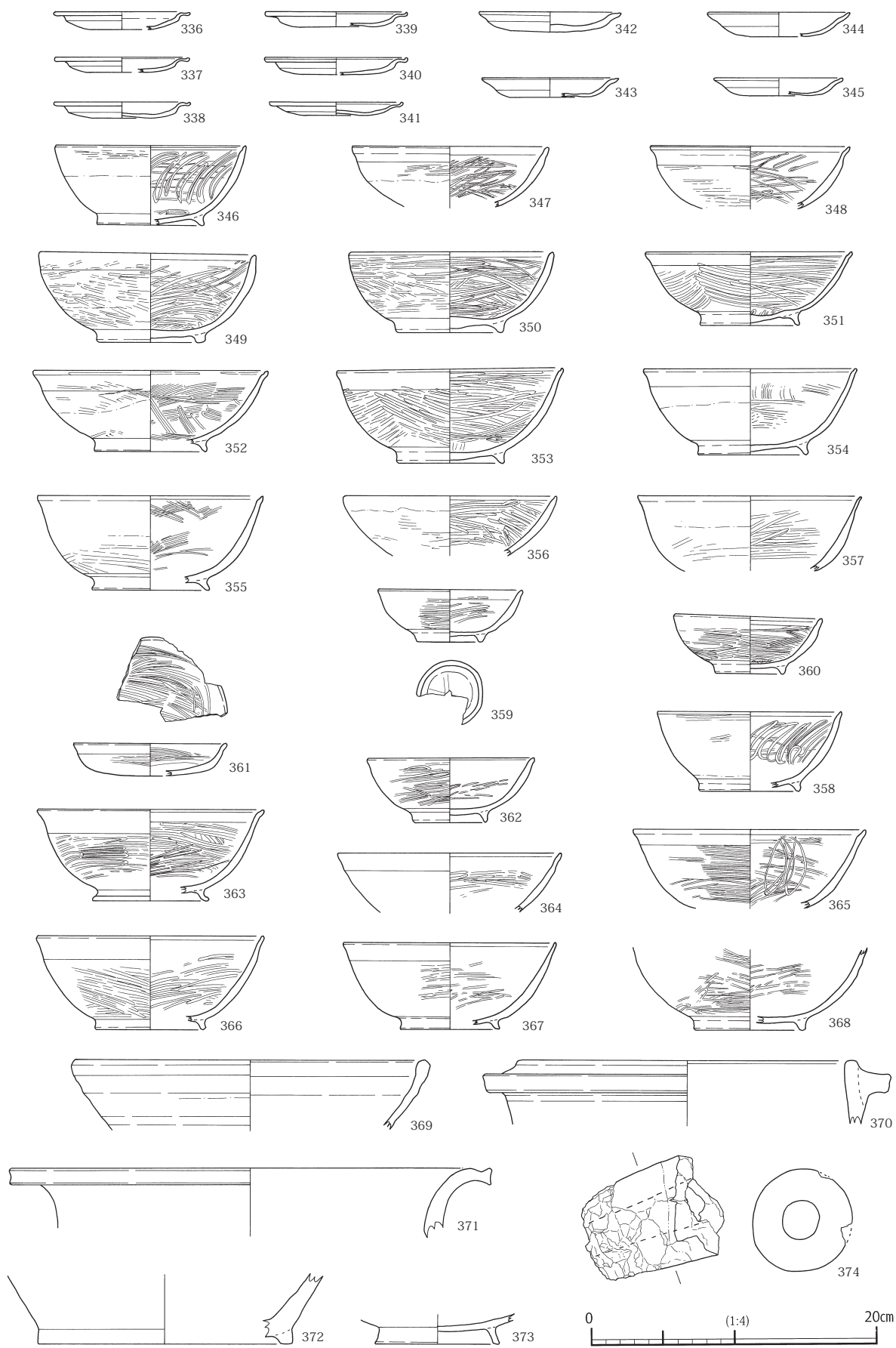


图 130 第6地区 第1面 22土坑 出土遗物

334・335は土師質の摂津型羽釜である。2点ともに微粒金雲母と赤色のチャートを大量に含む。10～11世紀のものである。出土遺物から61土坑は10～11世紀にかけての時期と推測する。

図130は22土坑出土遺物である。336～345は土師器皿である。342の胎土のみ粗く、他は緻密である。342の底部に粘土接合痕が残る。色調は342の外表面が一部灰色であるが、土師器皿全体に白色ないし灰白色を呈する。336・337・340・342・345の一部分はピンク色を呈し、被熱している可能性が考えられる。土師器皿は平安京IV古～中期に該当すると思われる。

346～358は黒色土器A類椀である。口縁端部内面には沈線または浅い窪みが1条巡るものが多いが、349・350・357は内傾した面をなす。体部外面は主に横方向のヘラミガキが施されており、分割のヘラミガキと思われるものは351・353・355、分割の可能性があるものは349・350である。347・349・350・352・353・356は外面にヘラミガキ前のヘラ削りの痕跡が認められる。見込みの暗文は残りの良いものではジグザグ状ないしは一定方向に施されている。352・355の内面にはヘラミガキ前のハケ目がみられる。358では横方向のヘラミガキの後で縦方向ないし楕円状のミガキが加えられている。外面の高台内にまでヘラミガキの及んでいるものは346・349・353・355である。352・355・357は外面が被熱している。黒色土器A類椀は平安京III新～IV古期か。

359・360は黒色土器B類小型椀である。外面を分割ミガキ、内面は横方向のヘラミガキであるが、分割ミガキの可能性がある。見込みは一定方向のヘラミガキである。359の外面高台内には線刻が認められる。361は黒色土器B類皿であり、表面が摩滅しており詳細不明であるが、ヘラミガキが底部外面にまで施されている。

362～368は黒色土器B類椀である。但し、364は体部下半の破損部表面が剥落しており若干土師器のように見える点から、黒色土器A類の可能性もある。外面には分割ミガキが施されており、363・365・366の外面にはヘラミガキ前のヘラ削りが認められる。内面のミガキは363～366で横方向の分割と思われるものが施されており、365では横方向のヘラミガキの後で縦方向ないし楕円状のミガキが加えられている。黒色土器B類は平安京III新～IV古期か。

369は須恵器鉢である。胎土は白っぽい外面の口縁部から体部上方にかけて黒く、重ね焼の痕跡と思われる。平安京IV中期か。370は摂津型土師質羽釜である。10～11世紀のものである。

371は須恵器甕で、外内面に少し灰を被っている。10世紀初め頃のものである。372は東海産の灰釉陶器と思われる壺高台である。高台は貼付けである。内面および底部を除く外面に薄く釉がかかっている。硬質で胎土は砂っぽい。373は灰釉陶器椀の貼付け輪高台である。高台は無釉である。底部外面は回転ヘラ削り、内面はロクロナデの後、ごく軽く主に一定方向にナデている。高台は高くハの字状に開く点から、O53窯式1型式か。

374は轆羽口である。直径5.6～7.5cm、孔の直径が2.3～3.3cm、残存長が9.8cmである。先端から黒、紫色、灰色、灰白色と変色している。22土坑出土遺物は須恵器などに時期の古いものが含まれるが、土師器、黒色土器などから、11世紀前半の時期にあたると思われる。

このほか、緑釉陶器椀が2点（写真図版45-451・452）出土しており、須恵質にうっすらと緑釉がかかっている。451は9世紀後半の山城産である。452の見込みには圈線が1条巡る。452は9世紀後半の京都産である。他に焼土塊が出土しており、胎土中にスサを含む（写真図版45-454）。轆の羽口が出土していることから、これらの焼土塊は炉壁の可能性が考えられる。

## 7. 第7地区出土遺物（図131、写真図版46）

図131は第7地区出土遺物である。375は第1層出土の中国白磁四耳壺である。時期は13世紀のものである。このほか第1層出土遺物には、灰釉陶器椀高台（写真図版46-455）、龍泉窯系青磁蓮弁文碗B類（写真図版46-456）、朝鮮王朝の黒い褐釉徳利底部（写真図版46-457）がみられる。455はきめ細かい胎土で、底部は貼付け輪高台である。見込みは滑らかである。9世紀後半の猿投産灰釉陶器である。456は14世紀第1四半期、457は16世紀のものである。

376は15ピット出土の土師器椀である。胎土中に微粒金雲母を多く含む。体部は指押さえ調整である。11世紀代のものか。377・378は1溝出土で、377は17世紀第2四半期の唐津焼溝縁皿である。378は丹波焼播鉢で、17世紀第1四半期前半のものである。379は2溝出土の土師器鍋か甕の口縁部である。口縁端部は上方に僅かに拡張している。8世紀頃のものか。380は8土坑出土の黒色土器A類鉢である。土師器鉢の器形に類例を求めると、9世紀代のもと思われる。

381・382は22池出土である。381は景德鎮窯系青花皿で、見込みには十字花文が描かれ、畳み付けは無釉である。16世紀後半のものである。382は巴文軒丸瓦である。範傷が珠文にかかってみられる。燻しがあまく、土師器の色を呈する。近世のもと思われる。

383～385は建物1の柱穴出土である。383・384が11柱穴、385は64柱穴出土である。383はロクロ土師器で、底部外面は回転糸切りの円盤状高台である。胎土は軟質で、時期は9～10世紀のものか。384は黒色土器A類椀で、平安京Ⅱ新期の時期に該当する。385は土師質の摂津型羽釜で胎土中には微粒金雲母を多く含む。10～11世紀のものである。

386～388は建物2柱穴出土遺物である。386は55柱穴出土の土師器杯である。きめが細かく、白っぽい胎土で、赤色粒を多く含む。387は37柱穴出土の土師器杯で、口縁端部内面に沈線が1条巡る。胎土中にはきめ細かく、赤色粒を多く含む。388は45柱穴出土の黒色土器A類椀である。口縁端部内面に沈線が1条巡り、見込みに一定方向にヘラミガキを施している。これら建物柱穴出土遺物は平安京Ⅱ新～Ⅲ古期の10世紀前半にあたる。

389は道路状遺構出土の土師質の摂津型羽釜である。被熱しているものか、全体に灰白色を呈する。10～11世紀のものである。390は58溝出土である。灰釉陶器椀で、胎土はきめ細かい。高台は貼付け輪高台である。10世紀初頭の東濃産である。

391～393は66溝出土の須恵器蓋杯である。391は蓋の稜が若干退化の兆候のみられるもので、口縁部端面は僅かに内傾した平坦面をなす。焼成不良の軟質で灰白色を呈する。392は杯身の口縁端部が段をなし、立ち上がりが高めで僅かに内傾する。392の底部外面に2条の平行したヘラ記号がみられる。393は杯身の口縁端部を丸く収めている。底部内面には回転ナデの後に軽く一方向のナデが施されている。外面全体に灰を被っている。陶邑編年Ⅰ型式4～5段階のものである。

394～398は14溝出土である。394～396は杯蓋、397は杯身、398は高杯脚である。杯蓋は全て口縁端部が段をなす。394の天井部は外面の回転ヘラ削りが雑で、焼成はやや不良である。394・395の天井部内面は回転ナデの後一定方向にナデている。396は天井部がやや厚めである。397は口縁端部の段が退化し、端部が丸みを帯びる。394～397の蓋杯は口径が大きく、蓋の稜の退化も進んでおり、杯身の立ち上がりが内傾していることから、66溝よりも時期が下る、Ⅱ-1～2段階である。398は脚の透かしの有無が不明である。

399は第2層出土の石庖丁である。石材は緑色片岩であると思われる。薄手で、右に配置した面は剥



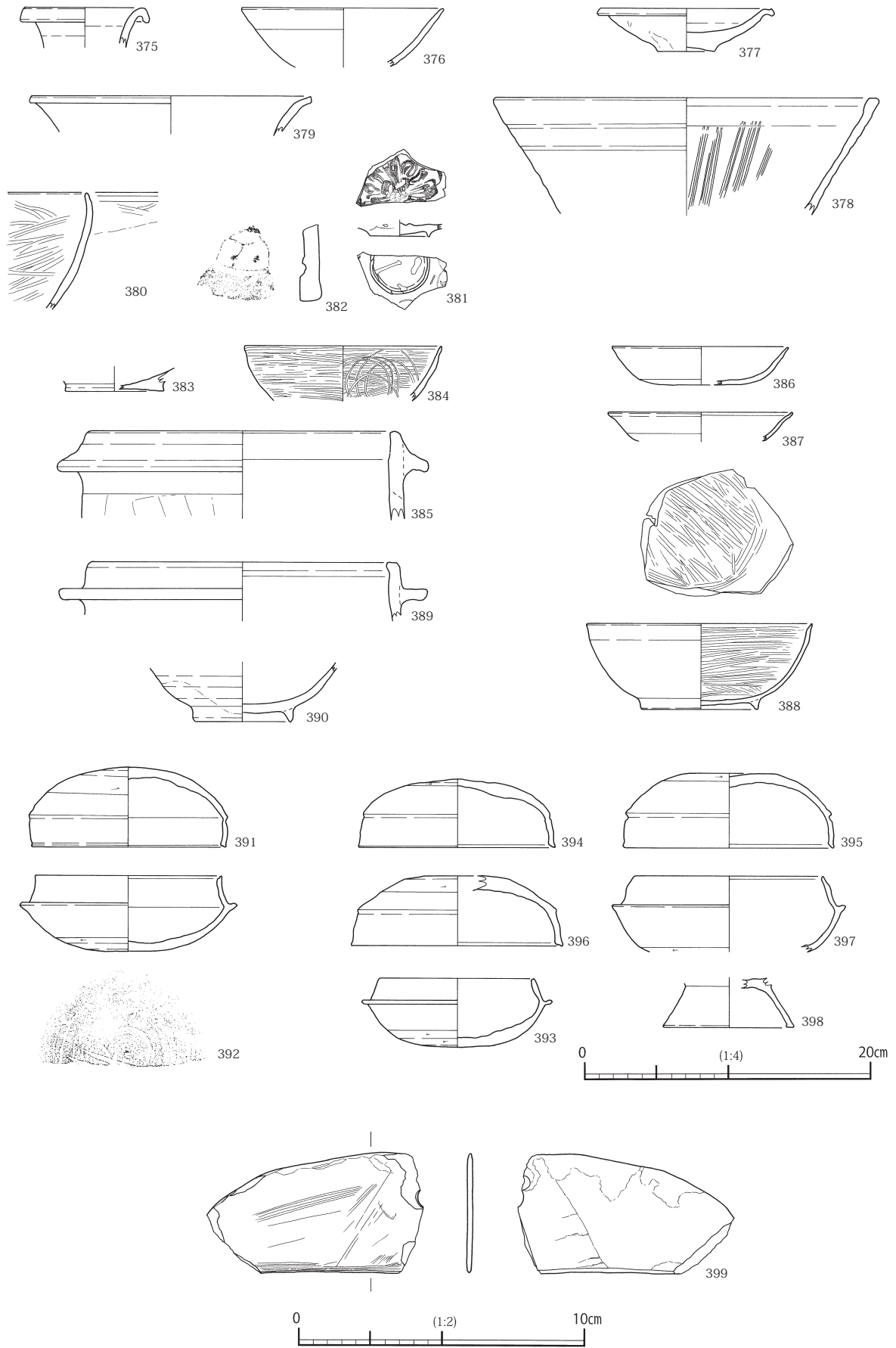


图 131 第7地区 出土遺物

離面を多く残す。左に配置した面には研磨痕が一部残るが、全体に摩滅しており、破損後の転用痕跡は認められない。

### 8. 第8地区出土遺物 (図132・133、写真図版47)

図132は8地区第1面、第2～4層、第3面検出遺構出土遺物である。400・401は第2～3層出土である。400は泥めんこである。浅黄橙色を呈し、胎土中に赤色粒、微粒金雲母を多く含む。大きさは残存高3.3cm、幅3.0cmを測る。底部の孔径は3mm、上部の孔径は1.5mmである。上部が欠損しているが、仏像が台座に立った形のようなものである。下面から上方に向かって孔が貫通している。近世のものである。401は初鑄が1408年の永楽通宝である。402は第1面8落込み出土の初鑄が1636年の寛永通宝である。裏は無文である。全体に錆びており、永の字の右側は割れている。

403は19土坑出土の全長5cmの犬形土製品である。灰白色を呈し、胎土はきめ細かい。足は欠損し、尾の表現が認められる。共伴遺物に中世から近世のものがみられることから推測して近世の可能性が考えられるものである。

404は20土坑出土の土師器小皿である。口径が小さく、近世のものかと思われる。

405は26井戸出土の景德鎮窯系青花皿である。碁笥底風の高台内に「大明成化年製」の文字がある。16世紀後半のものである。

406は26井戸出土かと思われる丸瓦である。斜めにカットされた玉縁の端面にスタンプ文がある。凹面には布目が残り、玉縁と側面に面取りがみられる。近世の丸瓦か。

407～412は第4層出土である。407は土師器小皿で、底部外面に粘土接合痕が残る。13世紀代のものと思われる。408は白磁皿IX1C類の口禿げである。13世紀第1四半期のものである。

409～411は緑釉陶器碗である。409は軟質の削り出し蛇の目高台であり、底部外面中央には釉が掛かっている。9世紀末の洛北産である。410は硬質の削り出し輪高台である。9世紀後半の京都産である。411は貼付け輪高台で、底部外面に釉は掛かっている。10世紀前半の篠窯産である。412は須恵器の把手付高杯か不明のものである。外面は軽く灰を被っている。古墳時代のものと思われる。

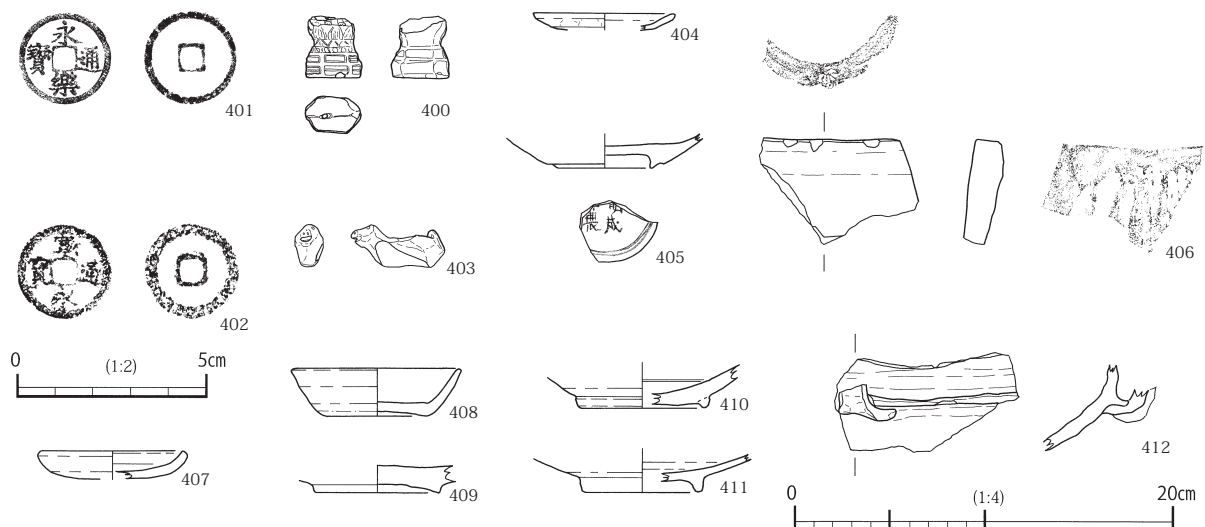


図132 第8地区 第1面、第2～第4層、第3面 遺構 出土遺物



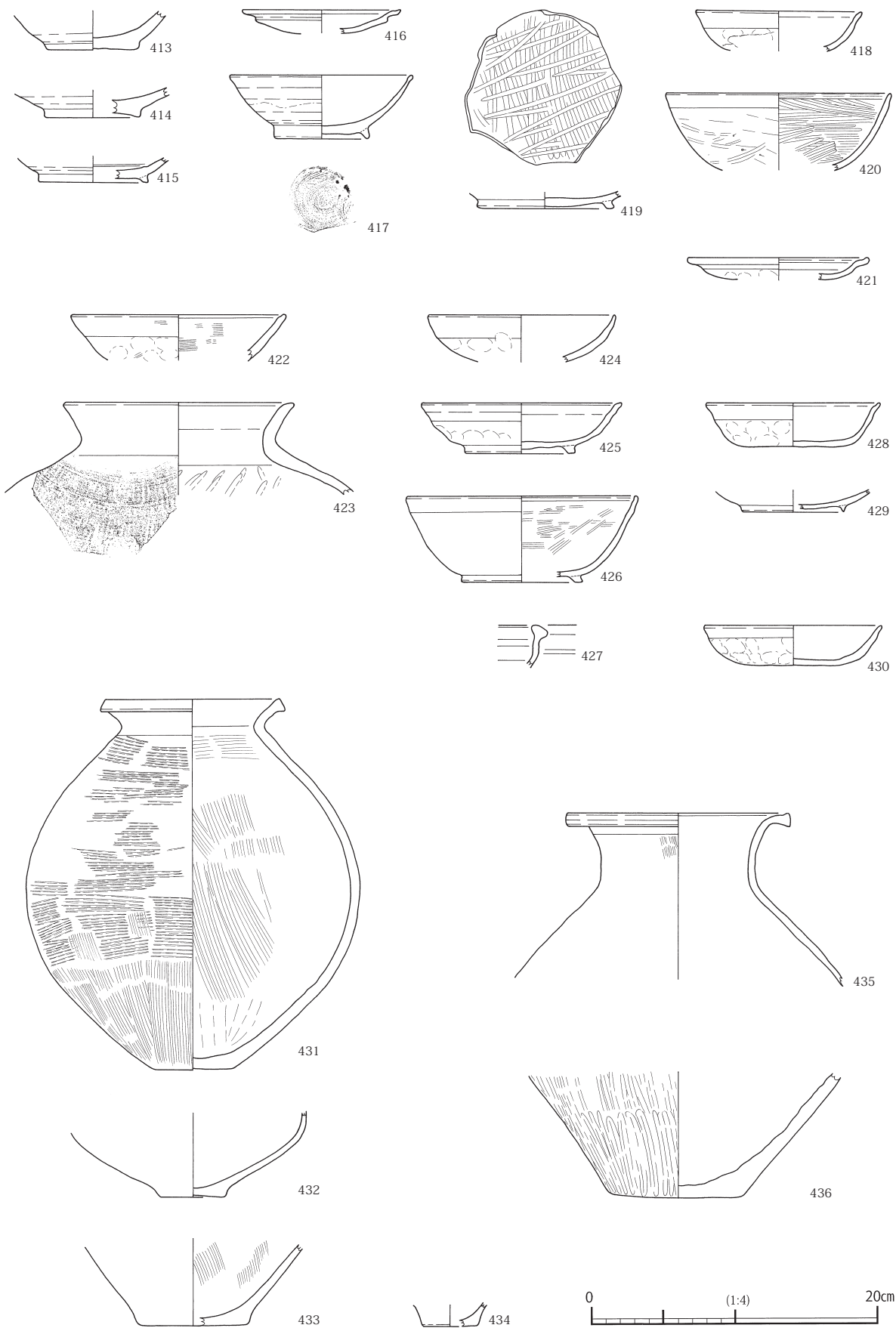


图 133 第8地区 第5層、第5面 遺構 出土遺物

図133は第8地区第5層、第5面遺構出土遺物である。413～415は第5層出土の緑釉陶器の椀である。413・414は削り出し円盤状高台である。413の高台外面底部に圏線が1条巡り、見込みと底部外面に殆ど釉が掛かっていない。胎土は軟質である。9世紀後半の幡枝産である。414は蛇の目状に削り出された円盤状高台で、底部外面には釉は少ない。胎土は軟質で、砂っぽい。9世紀半ばから後半の洛北産である。415は貼付け輪高台で、底部外面に釉が少ない。胎土は硬質である。10世紀前半の東濃産である。

416～420は建物2出土遺物である。416・417は64柱穴出土である。416は土師器小皿で、胎土中に微粒金雲母を多く含む。平安京IV新期か。417は灰釉陶器椀である。底部は回転糸切りの後、輪高台を貼付けている。見込みには僅かに重ね焼痕がみられる。胎土は粘りがあり、きめ細かい。10世紀初頭の東濃産である。418・419は62柱穴出土である。418は土師器杯で、平安京IV古期か。419は黒色土器A類椀である。見込みには直交する2方向のヘラミガキが施されている。底部外面には粘土紐接合痕が残る。平安京III古期か。420は63柱穴出土の黒色土器A類椀である。体部外面はヘラ削りの後横方向のヘラミガキが施されている。平安京III古期か。

421は104ピット出土の土師器小皿である。平安京III新期か。

422・423は70井戸出土である。422は瓦器椀で、口縁端部内面に沈線が1条巡る。外面は指押さへの痕跡が残るが、疎らなヘラミガキが施されている。内面のヘラミガキは横方向に蜜に施されている。422は楠葉型II-1～2期であろう。423は須恵器甕である。口縁と頸部の境に横ナデが強く施され、僅かに段をなす。体部外面を平行叩きの後横方向にカキメが施されている。内面は当て具痕が幅2～5mmの斜線状に残る。口縁部内面、体部外面に灰を僅かに被る。12世紀末頃のものと思われる。

424～427は57土坑出土である。424は土師器杯である。425は土師器の杯Bである。内面は橙色を呈し、被熱している。424・425は平安京IV古期か。426は黒色土器A類椀で、口縁端部内面に沈線が1条巡る。内面は分割ヘラミガキか、残存状況が悪く不明である。外面は表面が剥落し不明である。被熱によるものか、外面は一部橙色を呈する。平安京III新～IV古期か。427は須恵器鉢で、平安京II新～III古期である。

428・429は42土坑出土である。428は土師器杯、429は黒色土器A類椀で、高台下部は欠損している。ともに平安京IV古期か。430は68土坑出土の土師器杯である。外内面ともに橙色に変色しているが、被熱によるものと思われる。時期は平安京IV古期か。

431～434は116土坑出土の弥生土器である。431は頸の短い甕のような器形の壺である。体部上半は平行叩きのちハケ目、体部下部は下から上方向にヘラ削りのちハケを施している。内面は底部がナデ、それ以外はハケ目である。432は壺体部下半が残存する。残存状態が不良のため、調整は不明である。胎土中に角閃石を含む生駒西麓産である。433は甕体部下半と思われるものである。外面はヘラミガキか不明、内面はハケ調整である。434は黒斑のある甕底部かと思われるものである。これら116土坑出土土器はIV様式のものと思われる。

435・436は54土坑出土の弥生土器である。435は広口壺である。表面の残存状態は悪く、調整は不明である。436は甕の体部下半と思われるもので、外面にヘラミガキが施されている。内面は剥落して不明である。外面は被熱し、表面が一部剥落している。54土坑出土土器は116土坑出土土器とほぼ同時期のものと思われる。

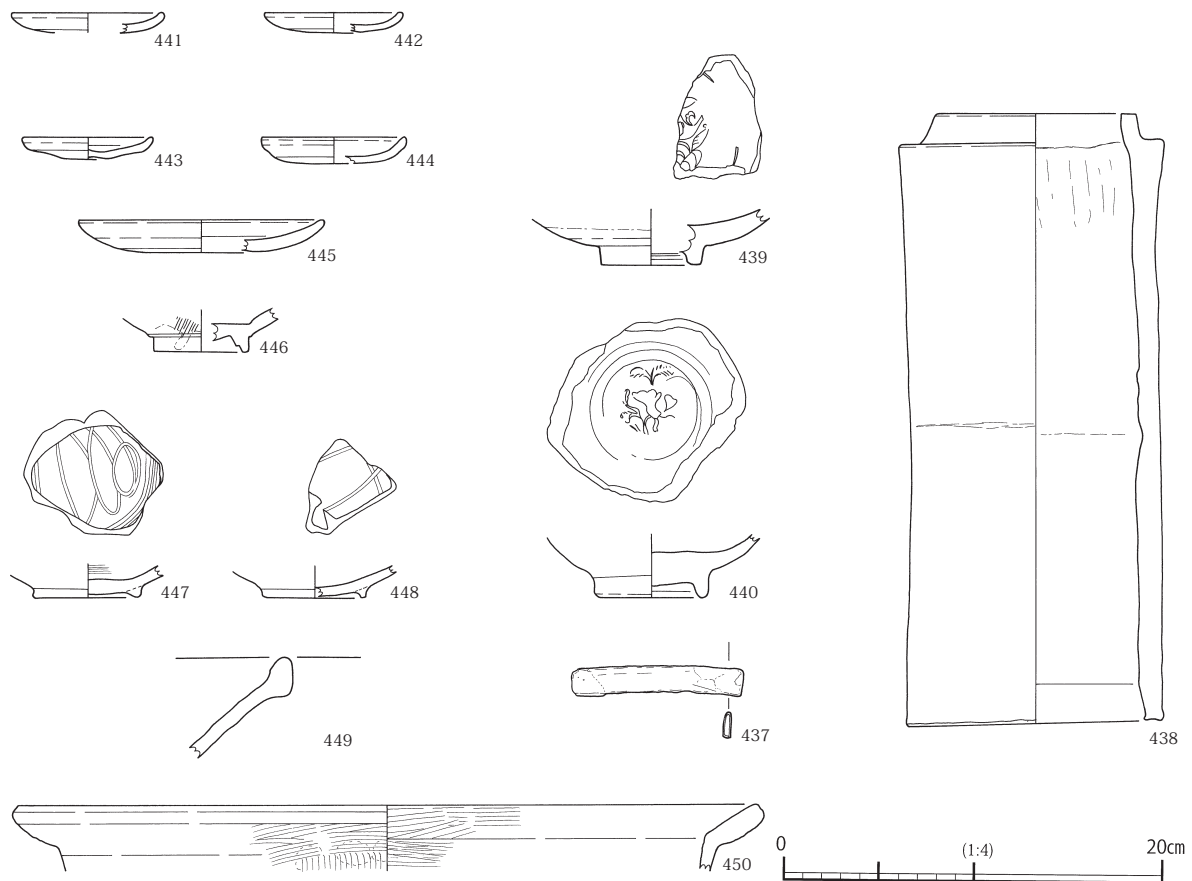


図 134 第9地区 出土遺物

### 9. 第9地区出土遺物 (図134、写真図版48)

図134は第9地区出土の遺物である。437は第1層出土の山金磨地棒小柄の柄部分である。全体に錆びており、時期は安土桃山時代以前である。残存長9.1cm、幅1.4cm、厚さ0.4cmを測る。

438は側溝出土の瓦質土管である。玉縁が短く、凹面広端面が幅狭い。近世に下る可能性がある。

439・440は第2層出土の中国白磁碗および青磁碗である。439の白磁碗はC類で、見込みに草花文が陰刻されている。14世紀のものである。440の龍泉窯系青磁碗見込みには印花文がみられ、内外には貫入が入っている。15世紀前半のものである。

441・442は第4面6土坑出土の土師器小皿である。12～13世紀のものと思われる。

443～450は第3層出土である。443～445は土師器皿である。時期は12～13世紀のものと思われる。446は同安窯系青磁碗である。外面に櫛描による施文がみられ、釉はつややかである。割れ口と外面に煤が付着している。13世紀第1四半期である。447・448は瓦器碗である。447は見込みに楕円形状のミガキを施している。2点ともに外面にミガキが無く、高台が退化している。楕葉型Ⅲ—1～2期のものと思われる。449は須恵器の鉢口縁部である。口縁部外面は黒く、口縁部内面に重ね焼の痕跡が残る。14世紀前半のものである。450は中世の土師質鍋口縁部である。

## 第5節 平成21年度調査出土遺物

### 1. 第1地区出土遺物

第1面直上から土師器細片、瓦器細片が各1点出土しているに過ぎず、詳細は不明である。

### 2. 第2地区出土遺物

第1面直上から土師器細片が2点、7世紀かと思われる須恵器蓋杯細片が1点、瓦器か不明の細片が1点出土しているが、詳細は不明である。第3層からは須恵器細片が少量出土している。それらは蓋杯細片1点、7～8世紀かと思われる壺体部片1点、外面を平行叩きのち横ナデ、内面に青海波文のある甕頸部細片が1点である。他に焼土の細片が1点みられる。

### 3. 第3地区出土遺物 (図135～137、写真図版49～51)

古墳時代から近世の遺物が出土している。

第1層、第1面直上および第1面鋤溝出土遺物には古代から近世の遺物が出土している(写真図版49)。519は第1面鋤溝群出土の唐津椀底部である。見込みは蛇の目釉剥ぎで、重ね焼の痕跡を留める。高台内面は、左回りに削られている。17世紀初頭のものである。520は第1層出土である。口縁部が玉縁状の中国白磁碗Ⅳ1 a類である。13世紀第4四半期前半のものである。

第2層からは中世の遺物が出土している(写真図版49—521～525)。521は瓦器椀である。口縁端部から少し下がった内面に沈線が1条巡る。内面の暗文はまばらで、高台は欠損して不明であるが、口径が小さめで、器高が低め、内面の暗文がまばらな点から、楠葉型Ⅲ—3ないしはⅣ—1期にあたり、13世紀後半に該当する。522の土師器皿は口径が9 cm前後の大きさで、底部から口縁部にかけてまるみをもって斜め上方に立ち上がり、底部外面は指押さえにより凹凸が著しい。13世紀半ば頃のものと思われる。523は東播系須恵器鉢の口縁部破片である。口縁端部が上方に拡張されている。口縁端部は黒色を呈する。口縁部の特徴から13世紀代に属する。524は瓦質羽釜である。短く直立した口縁部と短く水平に張り出した罅部をもつ。これも他の土器同様に13世紀代のもと考えられる。525は凝灰岩製の不明加工品である。三角形の2辺が薄く加工されており、片面の平面中央部は略直角に接する2面、裏面は割れ面よりなり、中央部に厚みを持つ。

図135は柱穴、ピットおよび96土坑出土遺物である。458・459は41ピット出土の瓦器椀である。内面にまばらな暗文が施され、459の高台は退化した紐状のものが貼り付けられている。器壁が薄く楠葉型のⅢ—3～Ⅳ—1期であろうと思われる。

460・461は建物1の114柱穴出土の瓦器椀である。460は口径が小型化し器高も低いことから、和泉型のⅣ—2期であろう。461は見込みに平行の暗文が施され、高台は退化している。和泉型のⅢ—3期と思われる。

写真図版49—526は114柱穴出土の瓦質脚である。先端部に向けて細く、接地部分で少し屈曲する。三脚付の瓦質羽釜口縁部が他の遺構から出土していることから、瓦質羽釜の脚の可能性はある。写真図版50—533の114柱穴出土の柱根は中央に木芯のある丸柱で、下端部は杭状に削り出されている。樹種はヒノキである。

462は建物1の47柱穴出土の瓦器椀である。これは口径がやや大きめで器高もやや高く、高台の径は

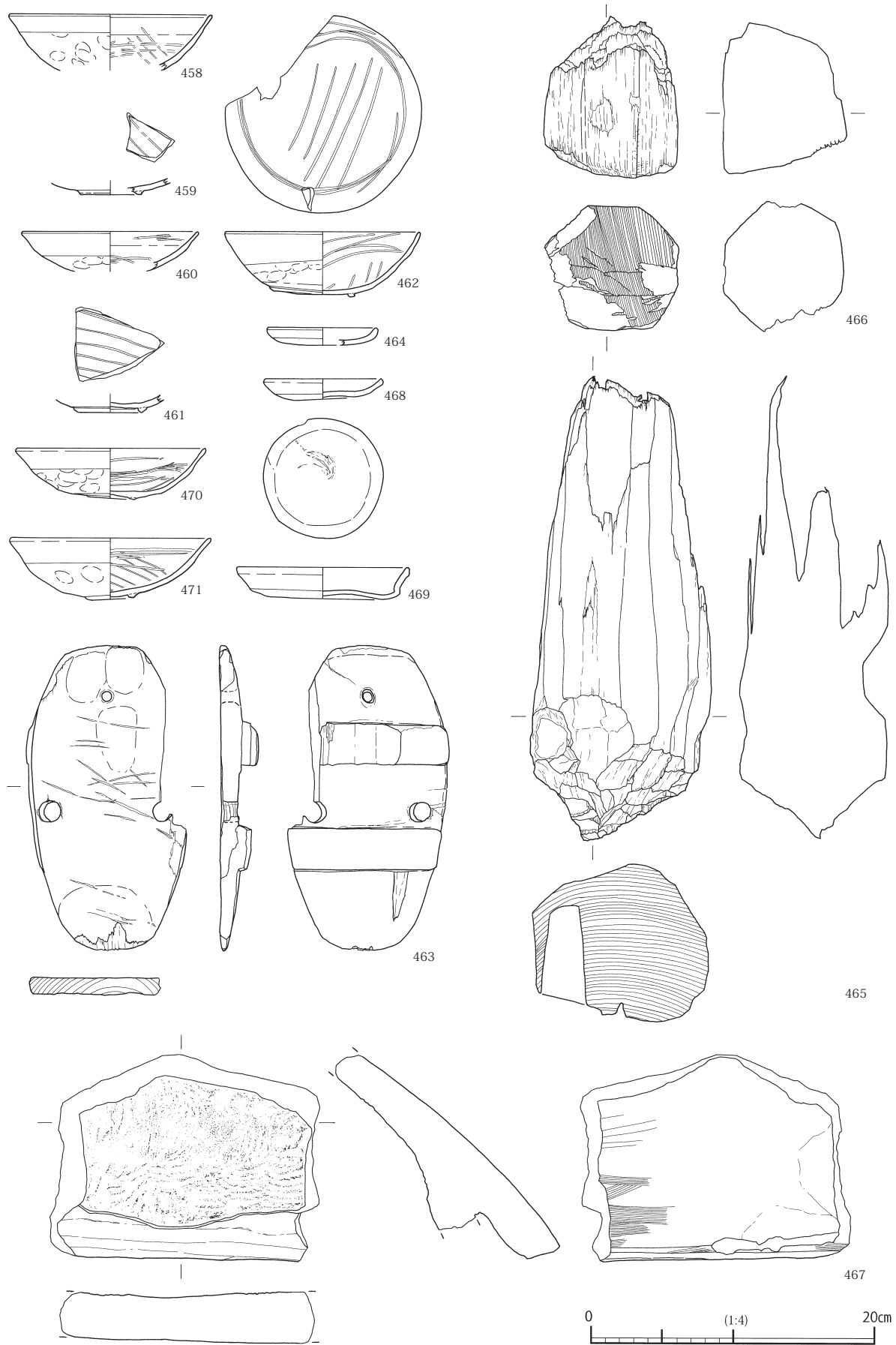


図 135 平成 21 年度 第 3 地区 第 2 面 柱穴、ピット、96 土坑 出土遺物

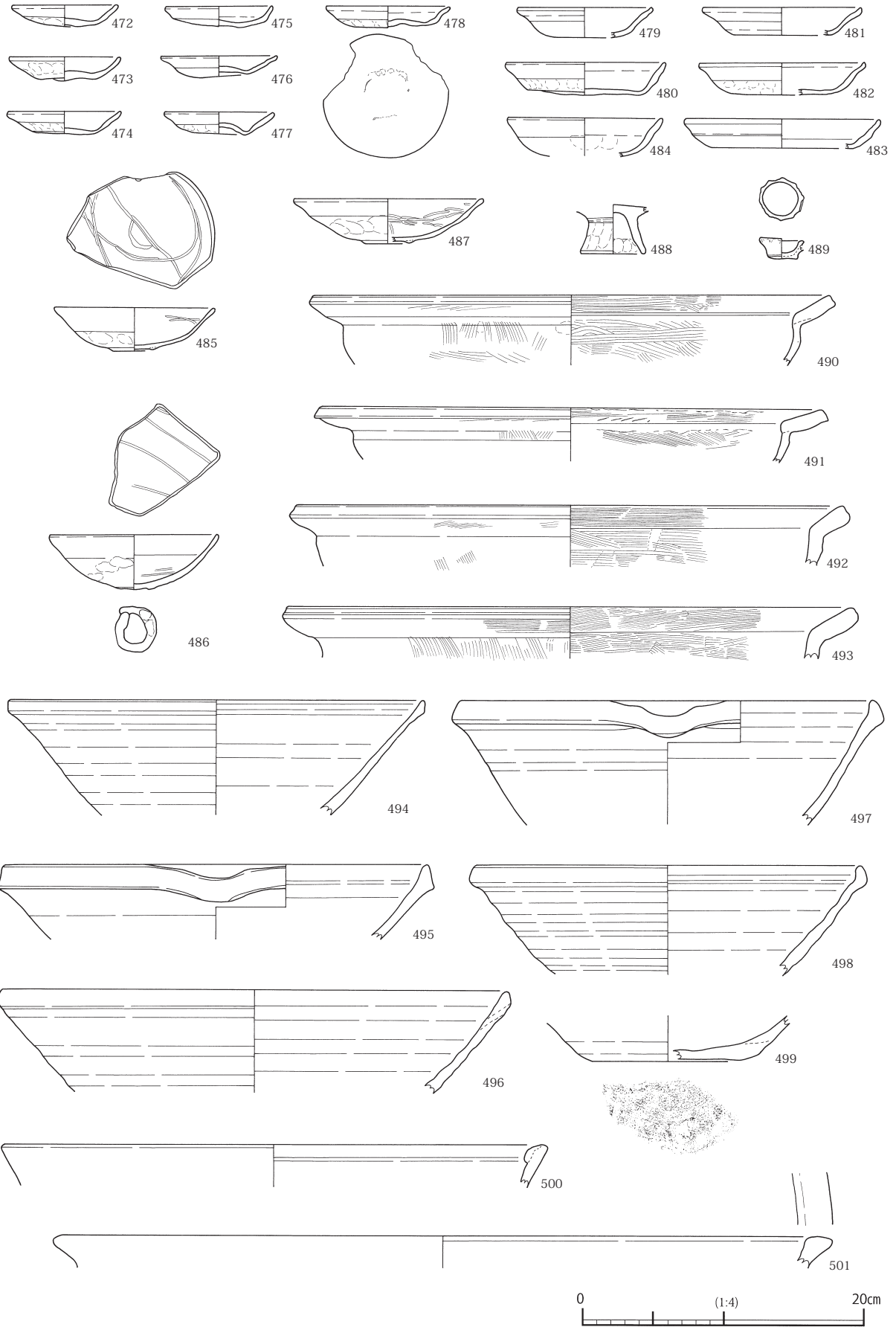


图 136 平成 21 年度 第 3 地区 第 2 面 100 土坑 出土遺物



大きめであるが中心からずれて紐状に退化した高台であること、内面の暗文が間隔の粗い平行で、口縁部内面の圈線状暗文が疎らである点から、和泉型Ⅲ-3期にあたりと考えられる。462は被熱しており、表面の炭素は一部を除いて飛んでおり、一部橙色に変色している。463は47柱穴出土の歯の部分も一体で造られた一木製連歯下駄である。台部分は鼻緒の穴を挟んで円い窪みと、やや幅広く楕円形状に窪んでいる部分があり、踵のあたる面にも窪みが認められることから、左足用であることが推測できる。また、踵側の片側に少し多めに歯の磨り減りがみられることから、重心がやや後ろにあって、足の外側に体重がかかった状態で、かなり履き古したもののようである。共伴する土器からみて、13世紀代のものと考えられる。

464は建物1の46柱穴出土の土師器小皿で、口縁端部を丸く収めている。破損部には煤の付着が認められる。13世紀代のものと思われる。

465は建物1の157柱穴出土の柱根である。断面形は多面体である。おそらく466同様、八角形状であったと推測する。下部に枝の空洞がみられ、下端部は杭状に削り出されている。芯を避けて多面体に加工しているようであるが、残存状況が悪く、詳細は不明である。465の樹種はヒノキである。

466は柱列1の106柱穴出土の柱根である。下端部は鋸を用いたかのように平坦で若干斜め方向に切り落とされている。この柱は残存状態が不良のため詳細は不明であるが、断面は八角形状を呈していたようである。年輪の観察からみて、芯は避けており、ミカン割りした材を加工したものであろう。柱幅は上方へむけて少し幅狭い。466の樹種はスギである。写真図版50-530・531の板材は106柱穴出土である。530が14×7cm、厚さ約1cm、531が13×8cm、厚さ約3cmの大きさで、薄い方の板材は片面が剥がれたような痕跡がある。柱根の礎板であった可能性がある。531の残存状態が良い部分の小口は鋸で挽いたように平坦である。樹種は530がスギ、531がコウヤマキである。

467は226ピット出土の須恵質陶棺蓋である。四注式陶棺の蓋で、身受け部分の先端は欠損している。外面にハケ目、内面に同心円状の当て具痕が残る。若干長軸方向に撓んでおり、器壁も少し薄くなっている。破損後に被熱して外面に煤の付着が著しい。根石の代わりに陶棺蓋の破片を割って利用した可能性が考えられる。226ピットからは他に写真図版49-529の石が1点出土している。扁平な石の片面に煤が多く付着している。陶棺破片同様、根石として用いられたものと思われる。

写真図版49-527は建物1の122柱穴出土の須恵器甕体部破片である。二つの破片が接合した。外面には粗い平行の叩き、内面には青海波の当て具痕が微かに残る程度まで丁寧にナデが施されている。平安時代の大甕の体部破片を根石代わりに用いた結果、破片中央から割れたものかと考えられる。写真図版49-528は88ピット出土の平瓦と思われるものである。器壁は平瓦同様の薄さで、両面に砂が付着している。胎土が518の陶棺と類似している。

写真図版50-532の15ピット出土の柱根は下端部が垂直に切り落とされ、一部に切り残しがみられる。おそらく鋸によって切断された痕跡であろうと思われる。532は466のように断面は八角形状を呈していたようであり、木芯を避けて加工されている。532の樹種はスギである。

468~471は96土坑出土遺物である。468・469は土師器皿、470・471は瓦器椀である。468の底部外面には中央から口縁部に向けての粘土接合痕がみられる。469は口径が約12cmで、少し上げ底状である。土師器皿は13世紀代のものであろう。470・471は器高が低めで高台が退化した瓦器椀で、見込みには疎らな平行の暗文が施されており、和泉型のⅣ-1~2期にあたる。

図136・137は100土坑出土遺物である。図137の507のみ110土坑出土である。

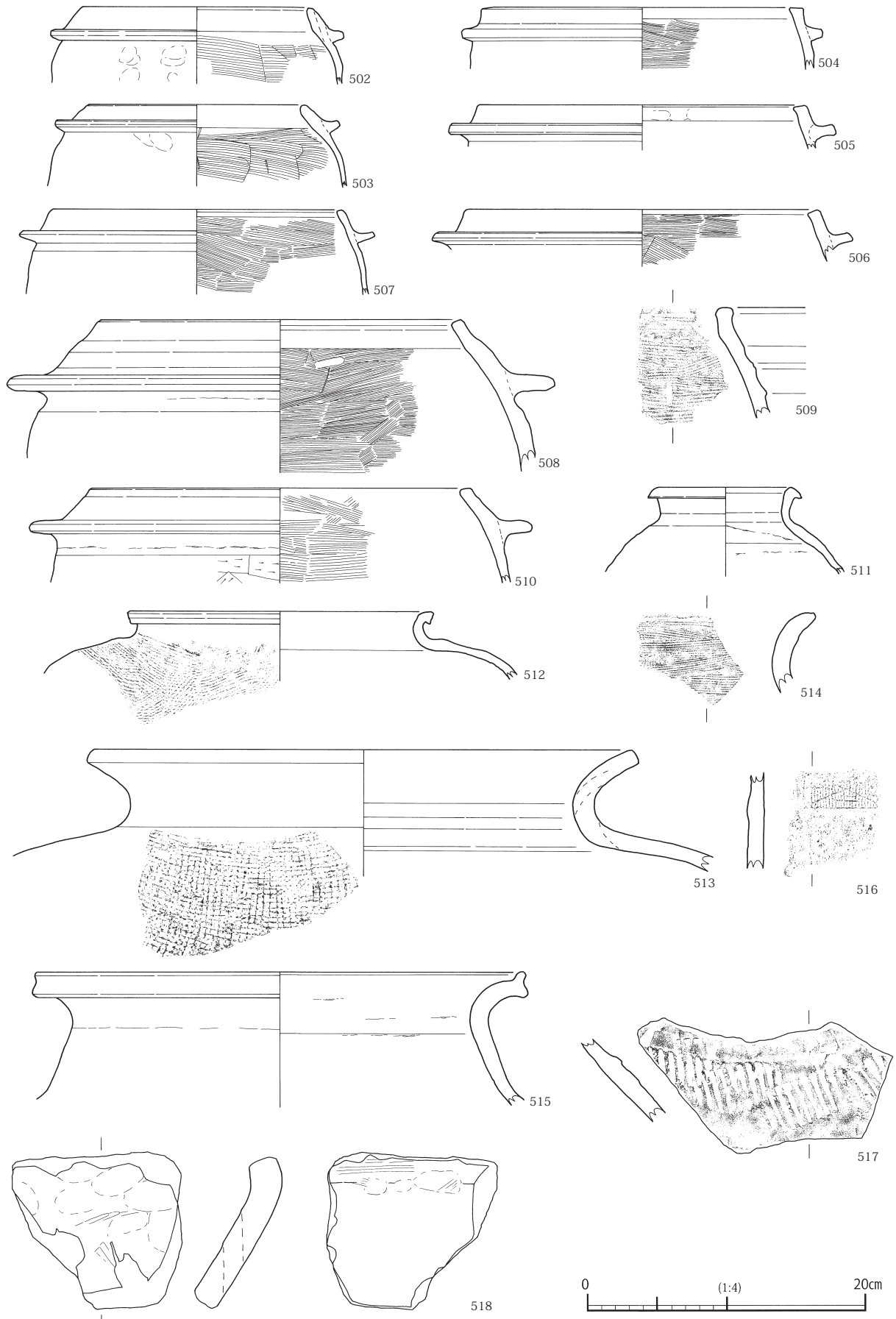


图 137 平成 21 年度 第 3 地区 第 2 面 100 土坑、110 土坑 出土遺物

472～483は土師器皿で、472～477が小皿、478・479が中皿、480～483が大皿である。476・477は底部中央の窪んだヘソ皿で、14世紀前半に属する。478の底部外面には粘土紐を巻き上げて作ったものか、輪状の粘土接合痕が残る。484の土師器は器高が深く、椀型と思われる。

485～487は高台の退化した器高の低い瓦器椀で、見込みの暗文は485・486が疎らな楕円形状か不明のもの、486が疎らな平行線状である。時期は487が和泉型Ⅳ－1～2期、485・486が楠葉型Ⅳ－1期か。488は土師器脚である。上部欠損し、器種は不明である。脚部は指押さえにより成形および調整を施す。

489は白磁の香合内の小皿が剥がれたものである。口縁部が花びら状につまみだされている。12世紀のものである。この他、輸入陶磁器には写真図版51－534に白磁碗Ⅳ2 C類底部、535の龍泉窯系青磁蓮弁文碗がみられる。時期は534が12世紀第3四半期、535が13世紀第4四半期のものである。

490～493は土師質鍋である。外面はハケの後ナデ、内面は粗い横ないし斜め方向のハケが施されている。外面には煮炊きに用いられた痕跡として煤が付着している。494～499は東播系須恵器鉢である。494～496の口縁端部が僅かに上方へ拡張したものと、497・498の明確に拡張したものがある。495・497に片口部分が残る。口縁端部外面は494を除き、黒味を帯びている。497・498の口縁部外面には重ね焼の溶着痕が僅かに認められる。また、497・498の体部内面は僅かに摩滅している。499は鉢底部である。底部外面に回転糸きり痕を留める。内面の摩滅痕は殆どみとめられない。500は口縁部内面に肥厚した瓦質鉢と思われるものである。胎土中に金雲母を多く含む。

501は口縁部が水平に内面側に肥厚した瓦質盤と思われる破片である。細片の為、口径は不確実で、下端破損部から外方へ屈曲するが、全体形は不明である。胎土中に金雲母を多く含む。

図137の502～506は瓦質羽釜である。502・503が三脚付のものである。写真図版51－536・537は瓦質羽釜の脚部である。504～506は口縁部が短く上方ないしやや内傾気味にたちあがり、罫が短めの摂津型瓦質羽釜である。507～510は土師質羽釜であり、口縁部外面の段は不明瞭である。内面はハケ調整、外面はヘラ削りが施されている。

511は須恵質壺である。512・513は須恵質甕である。512は外面にやや細い平行叩き、513は格子叩きがほどこされており、513は平安時代、512は14世紀のものと思われる。514は固く焼締まり、内面には横方向のハケが施された備前焼甕である。口縁部は焼成前のひび割れの痕がみられる。12世紀のものである。515・516は常滑焼甕である。515は口縁端部を上方に拡張した形態から6 a型式の13世紀第3四半期のものである。516は515と同一個体と思われる体部破片である。517は胎土が砂っぽい感じの渥美焼甕体部破片である。12世紀第3四半期のものである。518は須恵質の屋根形をした陶棺蓋頂部片である。少し薄手であるが、内面に指押さえの痕跡を留め、外面にはハケ調整が施されている。胎土は写真図版49－528の88ピット出土の瓦や、写真図版51－538の陶棺片と類似する。538は片面に長軸方向のハケ、裏面にナデ調整が施された須恵質の陶棺蓋破片である。

写真51－539は両面に砂付着の平瓦で、凹面下端部面取りが施されており、片面に煤が付着している。540は玉縁付丸瓦であり、凸面に縄叩き、凹面に布目を留める。写真図版51－541は焼土塊である。写真図版51－542は四角柱状の凝灰岩で1面に研磨と鋭いもので擦ったような線状痕がみられる。

図137の507、写真図版51－543・544は110土坑出土遺物である。507の土師質羽釜体部外面は指押さえ、内面は横ないし斜め方向のハケが施されている。543は瓦質甕である。体部外面下半が残存し、外面は平行叩き、内面は丁寧なナデ調整である。544は土師器竈の焚口右側接地部分である。外面は被熱し赤変している。外面は指押さえ、内面は斜め方向のハケによる調整が施されている。

## 第IV章 自然科学分析

### 第1節 放射性炭素年代測定

#### 1. はじめに

大阪府吹田市に位置する吹田操車場遺跡より検出された試料について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。

#### 2. 試料と方法

測定試料の情報、調製データは表1のとおりである。

通しNo. 2（PLD-11552）は第1地区の氾濫堆積上部（落込み310）より採取された炭化材である。炭化材の部位は不明である。通しNo.10（PLD-11553）は第7地区の2溝埋土より採取された有機質シルトである。通しNo.13（PLD-11554）は第9地区凸部の16流路埋土より採取された生材である。生材の部位は不明である。

試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS：NEC製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた<sup>14</sup>C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、<sup>14</sup>C年代、暦年代を算出した。

表1 測定試料及び処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-11552	地区：第1地区 採取地点：氾濫堆積上部 試料No.：通しNo. 2	試料の種類：炭化材 試料の性状：部位不明 状態：wet	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1N, 塩酸：1.2N） サルフィックス
PLD-11553	地区：第7地区 採取地点：2溝埋土 試料No.：通しNo. 10	試料の種類：有機質シルト 状態：wet	湿式篩分 106 μm 酸洗浄（塩酸：1.2N） サルフィックス
PLD-11554	地区：第9地区凸部 採取地点：16流路埋土 試料No.：通しNo. 13	試料の種類：生材 試料の性状：部位不明 状態：wet	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1N, 塩酸：1.2N） サルフィックス

#### 3. 結果

表2に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（ $\delta^{13}\text{C}$ ）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値、慣用に従って年代値、誤差を丸めて表示した<sup>14</sup>C年代、<sup>14</sup>C年代を暦年代に較正した年代範囲を、図138に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は年代値、誤差を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

<sup>14</sup>C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。<sup>14</sup>C年代（yrBP）の算出には、<sup>14</sup>Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した<sup>14</sup>C年代誤差（ $\pm 1\sigma$ ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の<sup>14</sup>C年代がその<sup>14</sup>C年代誤差内に入る確率が68.2%



であることを示すものである。

なお、暦年較正の詳細は以下の通りである。

#### 暦年較正

暦年較正とは、大気中の<sup>14</sup>C濃度が一定で半減期が5568年として算出された<sup>14</sup>C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の<sup>14</sup>C濃度の変動、及び半減期の違い（<sup>14</sup>Cの半減期5730±40年）を較正することで、より実際の年代値に近いものを算出することである。

<sup>14</sup>C年代の暦年較正にはOxCal4.0（較正曲線データ：INTCAL04）を使用した。なお、1σ暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された<sup>14</sup>C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に2σ暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は<sup>14</sup>C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。それぞれの暦年代範囲のうち、その確率が最も高い年代範囲については、表中に下線で示してある。

表2 放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果

測定番号	δ <sup>13</sup> C (‰)	暦年較正用年代 (yrBP±1σ)	<sup>14</sup> C年代 (yrBP±1σ)	<sup>14</sup> C年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
PLD-11552 試料No. : 通しNo. 2	-27.92±0.12	1716±20	1715±20	259AD (26.4%) 292AD <u>322AD (29.1%) 356AD</u> 366AD (12.7%) 381AD	<u>256AD (95.4%) 391AD</u>
PLD-11553 試料No. : 通しNo. 10	-27.74±0.13	2281±23	2280±25	<u>396BC (60.9%) 361BC</u> 271BC ( 7.3%) 263BC	<u>400BC (67.8%) 355BC</u> 289BC (27.6%) 232BC
PLD-11554 試料No. : 通しNo. 13	-30.16±0.22	7918±32	7920±30	6907BC ( 5.6%) 6887BC <u>6828BC (62.6%) 6688BC</u>	7028BC (15.9%) 6932BC 6920BC ( 9.5%) 6878BC <u>6848BC (69.9%) 6656BC</u>

#### 4. 考察

試料について、同位体分別効果の補正及び暦年較正を行った。2σ暦年代範囲に着目して結果を整理する。第1地区の氾濫堆積上部より採取された炭化材（通しNo. 2、PLD-11552）の暦年代範囲は、256-391calAD（95.4%）で、おおむね古墳時代前期に相当する。第7地区の2溝埋土より採取された有機質シルト（通しNo.10、PLD-11553）は、400-355calBC（67.8%）および289-232calBC（27.6%）で、春成（2004）や小林・春成（2006）に照らすと、弥生時代前期から中期に相当する。第9地区凸部の16流路埋土より採取された生材（通しNo.13、PLD-11554）は6848-6656calBC（69.9%）、7028-6932calBC（15.9%）、6920-6878calBC（9.5%）で、小林（2008）の推定値に照らすと、縄文時代早期中葉に相当する。

なお、部位不明の木材である通しNo. 2（PLD-11552）とNo.13（PLD-11554）は、内側の年輪の可能性もあるため、これら2点の年代値は木材の枯死・伐採年より古い可能性がある。特に、数十年差が問題となると思われる弥生時代に相当する通しNo. 2（PLD-11552）については、年代値の評価にあたってこの点を考慮する必要がある。

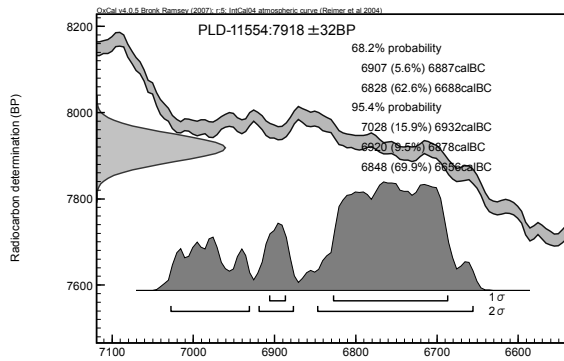
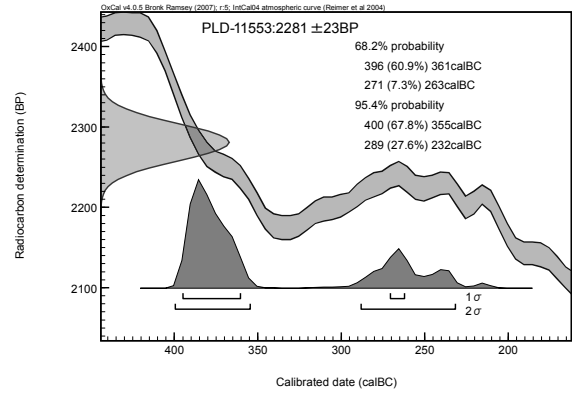
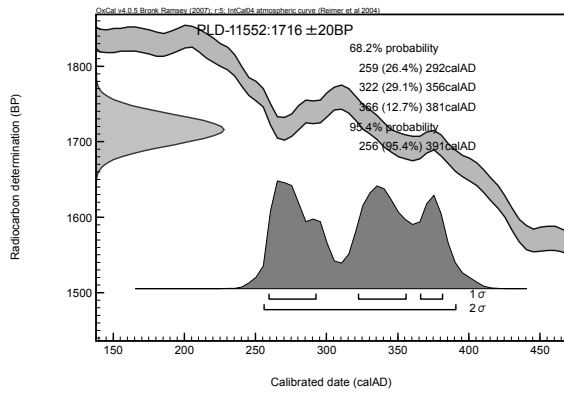


圖 138 曆年較正結果



## 第2節 花粉・珪藻・植物珪酸体分析

### はじめに

今回の分析調査では、第2地区および第8地区で認められた古代以前に形成された黒褐色を呈する腐植質堆積物形成期の古環境について検討することを目的として、珪藻分析・花粉分析・植物珪酸体分析を実施する。

### 1. 試料

試料は、第2地区の第5層（基本層序第5層）、第8地区の黒色土上層（同第4層）・下層（同第5層）から採取された合計3点である。堆積物の層相は、いずれも類似し、擾乱された腐植質砂質泥からなる。いずれの堆積物も発掘調査成果から古代以前に形成されたことが推定されている。

### 2. 分析方法

#### (1) 珪藻分析

試料を湿重で7g前後秤量し、過酸化水素水、塩酸処理、自然沈降法（4時間放置）の順に物理・化学処理を施して、珪藻化石を濃集する。検鏡に適する濃度まで希釈した後、カバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後、プリウラックスで封入して、永久プレパラートを作製する。検鏡は、光学顕微鏡で油浸600倍あるいは1000倍で行い、メカニカルステージでカバーガラスの任意の測線に沿って走査し、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に200個体以上同定・計数する（化石の少ない試料はこの限りではない）。種の同定は、原口ほか（1998）、Krammer（1992）、Krammer & Lange-Bertalot（1986, 1988, 1991a, 1991b）、渡辺ほか（2005）、小林ほか（2006）などを参照し、分類基準は、Round, Crawford & Mann（1990）に従う。なお、壊れた珪藻殻の計数基準は、柳沢（2000）に従う。

同定結果は、中心類（Centric diatoms; 広義のコアミケイソウ綱Coccosinodiscophyceae）と羽状類（Pennate diatoms）に分け、羽状類は無縦溝羽状珪藻類（Araphid pennate diatoms: 広義のオビケイソウ綱Fragilariophyceae）と有縦溝羽状珪藻類（Raphid pennate diatoms; 広義のクサリケイソウ綱Bacillariophyceae）に分ける。また、有縦溝類は、単縦溝類、双縦溝類、管縦溝類、翼管縦溝類、短縦溝類に細分する。各種類の生態性については、Vos & de Wolf（1993）を参考とするほか、塩分濃度に対する区分はLowe（1974）に従い、真塩性種（海水生種）、中塩性種（汽水生種）、貧塩性種（淡水生種）に類別する。また、貧塩性種についてはさらに細かく生態区分し、塩分・水素イオン濃度（pH）・流水に対する適応能についても示す。そして、産出個体数100個体以上の試料については、産出率2.0%以上の主要な種類について、主要珪藻化石群集の層位分布図を作成する。また、産出化石が現地性か異地性かを判断する目安として、完形殻の出現率を求める。堆積環境の解析にあたり、海水生種（真塩性種）～汽水生種（中塩性種）については小杉（1988）、淡水生種（貧塩性種）については安藤（1990）、陸生珪藻については伊藤・堀内（1991）、汚濁耐性については渡辺ほか（2005）の環境指標種を参考とする。なお、珪藻化石の生態性区分や環境指標種群の説明を表3に示す。

#### (2) 花粉分析

試料約10gについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛，比重2.3）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス（無水酢酸9：濃硫酸1の混合液）処理によ

表3 珪藻化石の生態性区分と環境指標種群

塩分濃度に対する区分 Lowe(1974)による		
海水生種	強塩性種	塩分濃度40.0%以上の高濃度海水域に生育する種
	真塩性種(海水生種)	塩分濃度40.0~30.0%に生育する種
汽水生種	中塩性種(汽水生種)	塩分濃度30.0~0.5%に生育する種
淡水生種	貧塩性種(淡水生種)	塩分濃度0.5%以下に生育する種
淡水生種の生態性区分		
塩分	貧塩好塩性種	少量の塩分がある方が良く生育する種
	貧塩不定性種	少量の塩分があってもこれに良く耐えることができる種
	貧塩嫌塩性種	少量の塩分にも耐えることができない種
	広域塩性種	淡水~汽水域まで広い範囲の塩分濃度に適応できる種
pH:Hustedt (1937-38)による	真酸性種	pH5.5以下の酸性水域に最適の出現域がある種
	好酸性種	pH7.0以下の水域に主として出現する種
	pH不定性種	pH7.0付近の中性水域で最も良く生育する種
	好アルカリ性種	pH7.0以上の水域に主として出現する種
	真アルカリ性種	pH7.0以上の水域にのみ出現する種
流水:Hustedt (1937-38)による	真止水性種	止水域にのみ生育する種
	好止水性種	止水域に特徴的であるが、流水域にも生育する種
	流水不定性種	止水域にも流水域にも普通に生育する種
	好流水性種	流水域に特徴的であるが、止水域にも生育する種
	真流水性種	流水域にのみ生育する種

主に海水域での指標種群(小杉,1988による)	
外洋指標種群(A)	塩分濃度が約35‰の外洋水中で浮遊生活するもの
内湾指標種群(B)	塩分濃度35~26‰の内湾水中で浮遊生活することからそのような環境を指標することのできる種群
海水藻場指標種群(C1)	塩分濃度35~12‰の海域で海藻(草)に付着生育することからそのような環境を指標することのできる種群
汽水藻場指標種群(C2)	塩分濃度12~4‰の汽水域で海藻(草)に付着生育することからそのような環境を指標することのできる種群
海水砂質干潟指標種群(D1)	塩分濃度35~26‰の砂底の砂に付着生育することからそのような環境を指標することのできる種群
汽水砂質干潟指標種群(D2)	塩分濃度26~5‰の砂底の砂に付着生育することからそのような環境を指標することのできる種群
海水泥質干潟指標種群(E1)	30~12‰の閉鎖性の高い塩性湿地など泥底の泥に付着生育することからそのような環境を指標することのできる種群
汽水泥質干潟指標種群(E2)	塩分濃度12~2‰の汽水化した塩性湿地などの泥に付着生育することからそのような環境を指標することのできる種群
淡水底生種群(F)	2‰以下の淡水域の底質の砂、泥、水生植物などに付着生育することからそのような環境を指標することのできる種群
淡水浮遊生種群(G)	塩分濃度2‰以下の湖沼などの淡水域で浮遊生活することからそのような環境を指標することのできる種群
河口浮遊生種群(H)	塩分濃度20~2‰の河口域で浮遊生活、あるいは付着生活することからそのような環境を指標することのできる種群
主に淡水域での指標種群(安藤,1990による)	
上流性河川指標種群(J)	河川上流部の峡谷部に集中して出現することから上流部の環境を指標する可能性の大きい種群
中~下流性河川指標種群(K)	河川中~下流部や河川沿いの河岸段丘、扇状地、自然堤防、後背湿地などに集中して出現することから、そのような環境を指標する可能性の大きい種群
最下流性河川指標種群(L)	最下流部の三角州の部分に集中して出現することから、そのような環境を指標する可能性の大きい種群
湖沼浮遊性種群(M)	水深が約1.5m以上ある湖沼で浮遊生活する種群で湖沼環境を指標する可能性の大きい種群
湖沼沼沢湿地指標種群(N)	湖沼における浮遊生種としても沼沢湿地の付着生種としても優勢に出現することから、そのような環境を指標する可能性の大きい種群
沼沢湿地付着生種群(O)	沼よりも浅く水深が1m前後で一面に水生植物が繁茂している沼沢や更に水深の浅い湿地で優勢な出現の見られることからそのような環境を指標する可能性の大きい種群
高層湿原指標種群(P)	ミズゴケを主体とした環境や泥炭が形成される環境に集中して出現することから、そのような環境を指標する可能性の大きい種群
陸域指標種群(Q)	水中でなく、多少の湿り気のある土壌表面、岩の表面、コケなど常に大気に曝された好気的環境(陸域)に集中して生育することからそのような環境を指標する可能性の大きい種群
陸域での指標種群(伊藤・堀内,1991による)	
陸生珪藻A群(RA)	陸生珪藻の中でも、分布がほぼ陸域に限られる耐乾性の高い種群
陸生珪藻B群(RB)	陸生珪藻A群に随伴し、陸域にも水中にも生育する種群
未区分陸生珪藻(RI)	陸生珪藻に相当すると考えられるが、乾湿に対する適応性の不明な種群

る植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、400倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、産出する全ての種類について同定・計数する。

結果は同定・計数結果の一覧表、および主要花粉化石群集の層位分布図として表示する。図中の産出率は、木本花粉が木本花粉総数を、草本花粉・シダ類孢子が総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として、百分率で出現率を算出してある。

### (3) 植物珪酸体分析

分析試料の乾燥重量を秤量した後、過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム、比重2.5）の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これをカバーガラス上に一定量を計り取り滴下・乾燥させた後、プリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）を、近藤（2004）の分類に基づいて同定・計数する。

結果は、堆積物 1 g あたりの植物珪酸体含量の一覧表として示す。その際、100個/g 以下は「<100」で表示する。各種類の含量密度は10の位で丸め（100単位にする）、合計は各分類群の丸めない数字を合計した後で丸めている。また、各種類の植物珪酸体含量とその層位的変化から稲作の様態や古植生について検討するために、植物珪酸体含量の層位的変化を図示する。

## 3. 結果

### (1) 珪藻分析

結果を表 4、図139に示す。珪藻化石の産出頻度は全般的に少ない傾向にあるが、堆積環境を検討する上で有意な量の珪藻化石が産出した。完形殻の出現率は約30%以下と化石の保存状態が悪い。産出分類群数は、合計で24属65分類群である。地区別に珪藻化石群集の特徴を述べる。

#### ・第2地区

第5層（試料9）は、淡水域に生育する水生珪藻（以下、水生珪藻と言う）が全体の約80%を占め優占し、好気的環境に耐性のある陸生珪藻が約20%産出する。産出する珪藻化石は保存状態が非常に悪く、大部分が壊れたり、溶解している。このような状況の中で、種レベルで同定ができた種類は、殻の丈夫な水生珪藻の *Amphora copulata*、*Eunotia pectinalis* var. *undulata*、*Aulacoseira granulata*、好気的環境に耐性のある陸生珪藻の *Hantzschia amphioxys*、*Eunotia praerupta* である。なお、保存が悪く種の同定に至らないものとしては、*Pinnularia* 属、*Eunotia* 属、*Stauroneis* 属、*Cymbella* 属、等が産出する。

#### ・第8地区

黒色土上層（試料11）と下層（試料12）は、第2地区試料と同様に珪藻化石の保存状態が悪い。産出種類の構成は、陸生珪藻が約50%と高率を占める。陸生珪藻では、耐乾性の高い陸生珪藻 A 群の *Hantzschia amphioxys* が約20%と多産し、同じく A 群の *Pinnularia borealis* 等を伴う。なお、上部の試料11では、陸生珪藻 A 群の *Luticola mutica* と *Amphora montana* も10%以上と多産する。水生珪藻としては、流水不定性の *Sellaphora laevisissima*、沼沢湿地付着生種の *Pinnularia acrosphaeria* 等が産出するほか、海水～汽水生種で内湾指標種の *Cyclotella striata*-*C. stylum* も低率ながら産出する。

表4 珪藻分析結果(1)

種 類	生態性			環境 指標種	調査地点・層位・試料番号		
	塩分	pH	流水		第2地区	第8地区	
					第5層	黒色土 上層	黒色土 下層
					9	11	12
Bacillariophyta (珪藻植物門)							
Centric Diatoms (中心型珪藻類)							
<i>Aulacoseira ambigua</i> (Grun.)Simonsen	Ogh-ind	al-il	l-bi	N,U	1	-	-
<i>Aulacoseira granulata</i> (Ehr.)Simonsen	Ogh-ind	al-il	l-bi	M,U	4	-	3
<i>Cyclotella striata-C. stylorum</i>	Euh-Meh			B	-	1	4
Araphid Pennate Diatoms(無縦溝羽状珪藻類)							
Araphidineae(無縦溝類)							
<i>Stauroneis venter</i> (Ehren.)H.Kobayasi	Ogh-ind	al-il	l-ph	S	1	-	-
Raphid Pennate Diatoms(有縦溝羽状珪藻類)							
Biraphid Pennate Diatoms(双縦溝羽状珪藻類)							
<i>Amphora copulata</i> (Kuetz.)Schoeman et R.E.M.Archibald	Ogh-ind	al-il	ind	U	7	1	-
<i>Amphora montana</i> Krasske	Ogh-ind	ind	ind	RA,U	-	22	1
<i>Cymbella tumida</i> (Breb.)Van Heurck	Ogh-ind	al-il	ind	T	-	1	-
<i>Cymbella</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		7	-	1
<i>Cymbopleura naviculliformis</i> (Auerswald)Krammer	Ogh-ind	ind	ind	O,U	-	1	-
<i>Encyonema silesiacum</i> (Bleisch)D.G.Mann	Ogh-ind	ind	ind	T	1	-	-
<i>Placoneis elginensis</i> var. <i>neglecta</i> (Krasske)H.Kobayasi	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	-	4	-
<i>Gomphonema angustatum</i> (Kuetz.)Rabenhorst	Ogh-ind	ind	ind	U	-	1	-
<i>Gomphonema angustum</i> Agardh	Ogh-ind	al-il	ind	T	-	1	-
<i>Gomphonema gracile</i> Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	l-ph	O,U	-	1	2
<i>Gomphonema parvulum</i> (Kuetz.)Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	U	1	2	-
<i>Diploneis ovalis</i> (Hilse)Cleve	Ogh-ind	al-il	ind	T	-	1	-
<i>Diploneis</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		4	-	1
<i>Navicula</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		2	-	-
<i>Craticula cuspidata</i> (Kuetz.)D.G.Mann	Ogh-ind	al-il	ind	S	-	1	-
<i>Craticula</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	3	-
<i>Stauroneis acuta</i> W.Smith	Ogh-ind	al-il	l-ph		2	3	2
<i>Stauroneis anceps</i> Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	T	-	2	1
<i>Stauroneis borrichii</i> (Pet.)Lund	Ogh-ind	ind	ind	RI	-	1	1
<i>Stauroneis obtusa</i> Lagerstedt	Ogh-ind	ind	ind	RB	-	2	-
<i>Stauroneis phoenicenteron</i> (Nitz.)Ehrenberg	Ogh-ind	ind	l-ph	O,U	-	2	1
<i>Stauroneis</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		9	5	5
<i>Frustulia vulgaris</i> var. <i>capitata</i> Krasske	Ogh-ind	al-il	ind		-	-	1
<i>Diadesmis confervacea</i> Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	RB,S	-	4	1
<i>Diadesmis contenta</i> (Grun.ex Van Heurck)D.G.Mann	Ogh-ind	al-il	ind	RA,T	2	3	-
<i>Luticola goeppertiana</i> (Bleisch)D.G.Mann	Ogh-hil	al-il	ind	S	-	1	-
<i>Luticola mutica</i> (Kuetz.)D.G.Mann	Ogh-ind	al-il	ind	RA,S	-	27	3
<i>Luticola paramutica</i> (Bock)D.G.Mann	Ogh-ind	ind	ind	RB	-	1	-
<i>Luticola ventricosa</i> (Kuetz.)D.G.Mann	Ogh-ind	ind	ind	RI,U	-	1	-
<i>Neidium alpinum</i> Hustedt	Ogh-ind	ac-il	ind	RA	1	-	1
<i>Neidium ampliutum</i> (Ehr.)Krammer	Ogh-ind	ac-il	l-ph		-	3	-
<i>Neidium hercynicum</i> A.Mayer	Ogh-ind	ac-il	ind	U	-	2	1
<i>Neidium</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		2	1	4
<i>Caloneis bacillum</i> (Grun.)Cleve	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	1	-	-
<i>Caloneis leptosoma</i> Krammer & Lange-Bertalot	Ogh-ind	ind	l-ph	RB	-	2	2
<i>Caloneis truncatula</i> (Grunow)	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	1	-
<i>Caloneis</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		3	1	1
<i>Pinnularia acrosphaeria</i> W.Smith	Ogh-ind	al-il	l-ph	O	-	5	1
<i>Pinnularia acrosphaeria</i> var. <i>undulata</i> Skvortzow	Ogh-ind	al-il	l-ph	O	-	1	-
<i>Pinnularia borealis</i> Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	RA,U	1	7	8
<i>Pinnularia</i> cf. <i>episcopalis</i> Cleve	Ogh-hob	ac-il	ind		-	-	7
<i>Pinnularia lata</i> (Breb.)Rabenhorst	Ogh-hob	ac-il	ind	RB	-	1	1
<i>Pinnularia macilenta</i> (Ehr.)Cleve	Ogh-hob	ac-il	l-ph		-	-	1
<i>Pinnularia neomajor</i> Krammer	Ogh-ind	ac-il	l-bi		-	1	-
<i>Pinnularia nodosa</i> Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	l-ph	O	-	2	-
<i>Pinnularia obscura</i> Krasske	Ogh-ind	ind	ind	RA	-	1	1
<i>Pinnularia schoenfelderi</i> Krammer	Ogh-ind	ind	ind	RB	1	4	-
<i>Pinnularia schroederii</i> (Hust.)Krammer	Ogh-ind	ind	ind	RI	2	9	6
<i>Pinnularia silvatica</i> Petersen	Ogh-ind	ind	ind	RI	-	1	-
<i>Pinnularia subcapitata</i> Gregory	Ogh-ind	ac-il	ind	RB,S	1	5	-
<i>Pinnularia subcapitata</i> var. <i>elongata</i> Krammer	Ogh-hob	ac-il	ind	RB	1	-	-
<i>Pinnularia subcapitata</i> var. <i>paucistriata</i> (Grun.)Cleve	Ogh-ind	ac-il	ind	O,U	-	1	-
<i>Pinnularia viridis</i> (Nitz.)Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	O,U	-	4	1
<i>Pinnularia</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		12	3	8
<i>Sellaphora laevissima</i> (Kuetz.)Mann	Ogh-ind	ind	ind	U	-	10	3
管縦溝類							
<i>Hantzschia amphioxys</i> (Ehr.)Grunow	Ogh-ind	ind	ind	RA,U	3	30	19
<i>Hantzschia amphioxys</i> var. <i>capitata</i> O.Muller	Ogh-ind	al-il	ind	RA	-	1	-
<i>Nitzschia amphibia</i> Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	S	-	2	-
<i>Nitzschia</i> cf. <i>perminuta</i> (Grun.)Peragallo	Ogh-ind	al-il	ind	RI,U	-	4	1
<i>Nitzschia</i> sp.	Ogh-unk	unk	unk		-	-	1
<i>Rhopalodia gibberula</i> (Ehr.)O.Muller	Ogh-Meh	al-il	ind	U	2	-	-
翼管縦溝類							
<i>Surirella minuta</i> Brebisson	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	-	6	-

表4 珪藻分析結果(2)

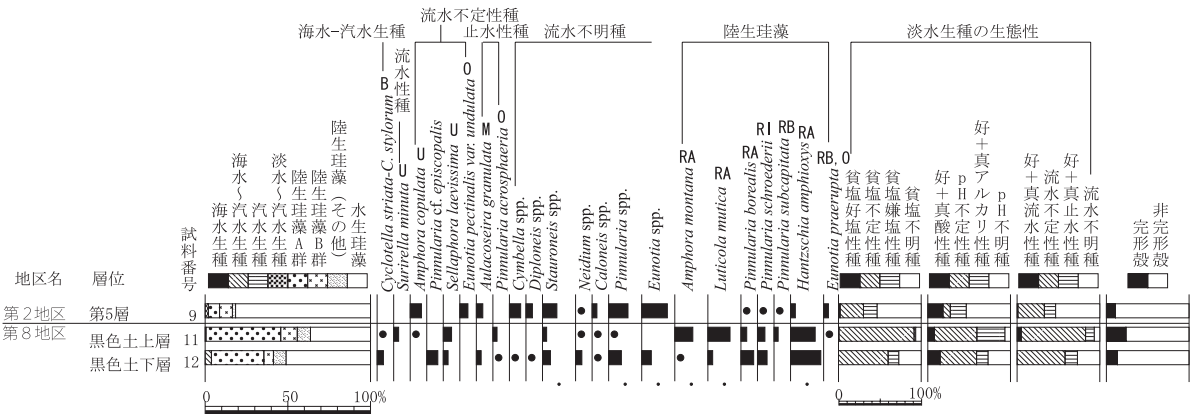
種類	生態性			環境指標種	調査地点・層位・試料番号		
	塩分	pH	流水		第2地区	第8地区	
					第5層	黒色土上層	黒色土下層
						9	11
短縦溝類							
<i>Eunotia flexuosa</i> (Breb.)Kuetzing	Ogh-hob	ac-il	l-ph	O	-	-	1
<i>Eunotia pectinalis</i> (Kuetz.)Rabenhorst	Ogh-hob	ac-il	ind	O,T	-	-	-
<i>Eunotia pectinalis</i> var. <i>undulata</i> (Ralfs)Rabenhorst	Ogh-hob	ac-il	ind	O	5	-	-
<i>Eunotia pectinalis</i> var. <i>ventralis</i> (Ehr.)Hustedt	Ogh-hob	ac-il	ind		1	-	-
<i>Eunotia praerupta</i> Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	l-ph	RB,O,T	3	1	-
<i>Eunotia praerupta</i> var. <i>bidens</i> (Ehren.)Grunow	Ogh-hob	ac-il	l-ph	RB,O,T	2	-	2
<i>Eunotia serra</i> Ehrenberg	Ogh-hob	ac-bi	l-bi	P	1	-	-
<i>Eunotia subarcuatoidea</i> Noerpel & Lange-Bertalot	Ogh-hob	ac-il	ind		2	-	-
<i>Eunotia veneris</i> (Kuetz.)De Toni	Ogh-hob	ac-il	ind	T	-	-	1
<i>Eunotia</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		16	-	6
海水生種					0	0	0
海水～汽水生種					0	1	4
汽水生種					0	0	0
淡水～汽水生種					2	0	0
淡水生種					101	200	100
珪藻化石総数					103	201	104

凡例

- H.R.: 塩分濃度に対する適応性      pH: 水素イオン濃度に対する適応性      C.R.: 流水に対する適応性  
 Euh-Meh : 海水生種-汽水生種      al-bi : 真アルカリ性種      l-bi : 真止水性種  
 Ogh-Meh : 淡水-汽水生種      al-il : 好アルカリ性種      l-ph : 好止水性種  
 Ogh-hil : 貧塩好塩性種      ind : pH不定性種      ind : 流水不定性種  
 Ogh-ind : 貧塩不定性種      ac-il : 好酸性種      r-ph : 好流水性種  
 Ogh-hob : 貧塩嫌塩性種      ac-bi : 真酸性種      r-bi : 真流水性種  
 Ogh-unk : 貧塩不明種      unk : pH不明種      unk : 流水不明種

環境指標種群

- B: 内湾指標種(小杉, 1988)  
 M: 湖沼浮遊性種, N: 湖沼沼沢湿地指標種, O: 沼沢湿地付着生種, P: 高層湿原指標種(安藤, 1990)  
 S: 好汚濁性種, U: 広域適応性種, T: 好清水性種(以上はAsai and Watanabe, 1995)  
 R: 陸生珪藻(RA:A群, RB:B群, RI:未区分、伊藤・堀内, 1991)



海水-汽水-淡水生種産出率・各種産出率・完形殻産出率は全体基数、淡水生種の生態性の比率は淡水生種の合計を基数として百分率で算出した。いずれも100個体以上検出された試料について示す。なお、●は2%未満の産出を示す。各分類群末尾の記号は次に示す環境指標種群を示す。B: 内湾指標種, M: 湖沼浮遊性種, N: 湖沼沼沢湿地指標種, O: 沼沢湿地付着生種, S: 好汚濁性種, U: 広域適応性種, T: 好清水性種, RA: 陸生珪藻A群, RB: 陸生珪藻B群, RI: 未区分陸生珪藻

図139 主要珪藻化石群集の層位分布

(2) 花粉分析

結果を表5、図140に示す。図表中で複数の種類をハイフオンで結んだものは、種類間の区別が困難なものを示す。なお、木本花粉総数が100個体未満のものは、統計的に扱うと結果が歪曲する恐れがあるので、産出した種類を+で表示するにとどめておく。全体的に花粉化石の保存状態が悪く、花粉外膜が破損・溶解している個体が多く確認された。

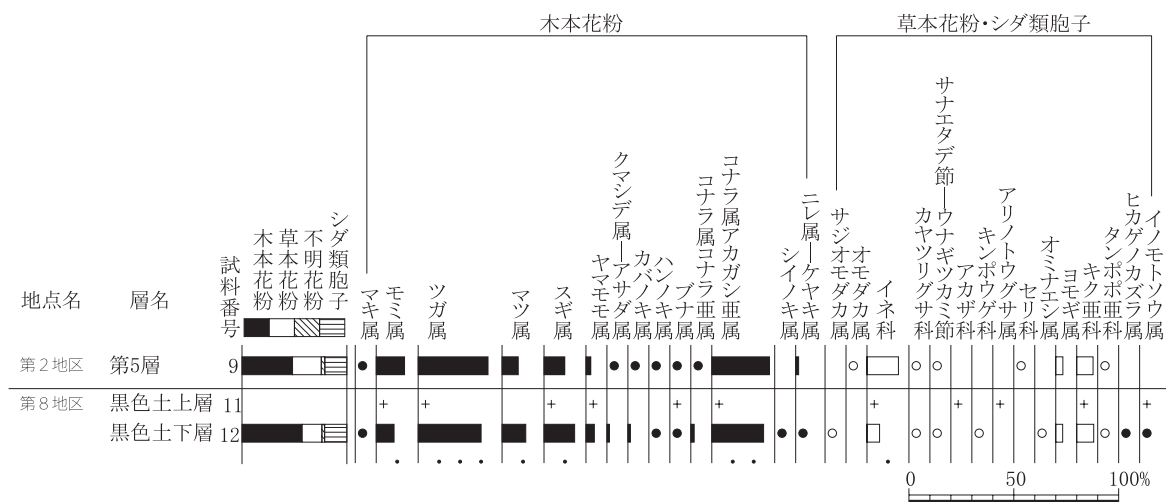


第2地区の第5層（試料9）および、表5 花粉分析結果

第8地区の黒色土下層（試料12）の2試料は、保存状態が悪いながらも花粉化石が豊富に産出した。群集組成はいずれも類似しており、木本花粉の占める割合が高い。花粉群集をみると、木本花粉ではツガ属、コナラ属アカガシ亜属が多産し、モミ属、マツ属、スギ属等も多く認められる。その他では、ヤマモモ属、コナラ属コナラ亜属、ニレ属一ケヤキ属も認められる。これに対し、草本花粉ではイネ科、キク亜科、ヨモギ属が多く認められるほか、少ないながらもサジオモダカ属、オモダカ属等の水生～湿地生植物に由来する花粉も検出される。

一方、第8地区の黒色土上層（試料11）においては、定量解析が行えるだけの個体数を得ることが出来なかった。わずかに産出した種類をみると、木本花粉ではモミ属、ツガ属、スギ属、ヤマモモ属、ブナ属、アカガシ亜属が、草本花粉ではイネ科、アカザ科、アリノトウグサ属、キク亜科が1～5個体認められる。

種類	調査地点・層位・試料番号		
	第2地区	第8地区	
	第5層	黒色土上層	黒色土下層
	9	11	12
木本花粉			
マキ属	2	-	1
モミ属	30	2	21
ツガ属	74	1	74
マツ属複雑管束亜属	1	-	-
マツ属(不明)	16	-	28
スギ属	22	1	36
ヤマモモ属	5	1	10
クマシデ属-アサダ属	2	-	3
カバノキ属	1	-	3
ハンノキ属	1	-	2
ブナ属	2	1	1
コナラ属コナラ亜属	2	-	4
コナラ属アカガシ亜属	61	5	61
シノキ属	-	-	1
ニレ属一ケヤキ属	3	-	2
草本花粉			
サジオモダカ属	-	-	1
オモダカ属	1	-	-
イネ科	67	1	25
カヤツリグサ科	2	-	1
サナエタデ節-ウナギツカミ節	1	-	2
アカザ科	-	2	-
キンポウゲ科	-	-	1
アリノトウグサ属	-	2	-
セリ科	3	-	-
オミナエシ属	-	-	1
ヨモギ属	15	-	14
キク亜科	35	2	34
タンポポ科	3	-	2
不明花粉	16	1	11
シダ類孢子			
ヒカゲノカズラ属	-	-	2
イノモトソウ属	-	1	1
他のシダ類孢子	97	25	88
合計			
木本花粉	222	11	247
草本花粉	127	7	81
不明花粉	16	1	11
シダ類孢子	97	26	91
総計(不明を除く)	446	44	419



産出率は、木本花粉は木本花粉化石総数、草本花粉・シダ類孢子は総数より不明花粉を除く数を基数として百分率で算出した。なお、●○は1%未満、+は木本花粉100個体未満の試料について検出した種類を示す。

図 140 主要花粉化石群集の層位分布



(3) 植物珪酸体分析

結果を表6、図141に示す。各試料からは植物珪酸体が産出するものの、保存状態が悪く、表面に多数の小孔（溶食痕）が認められる。

第2地区の第5層（試料9）では、植物珪酸体含量が約12.4万個/gである。その多くが、ネザサ節を含むタケ亜科であり、ヨシ属、コブナグサ属やススキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科など認められる。また、栽培植物であるイネ属に由来する短細胞珪酸体・機動細胞珪酸体も産出する。イネ属の含量は少なく、短細胞珪酸体が約200個/g、機動細胞珪酸体が約300個/gである。

第8地区の黒色土上層（試料11）では、植物珪酸体含量が約15.6万個/gである。第2地区の第5層（試料9）と同様に、ネザサ節を含むタケ亜科の産出が目立つ。また、タケ亜科とともにイネ属の産出も目立つ。イネ属由来の珪酸体は、葉部に形成される短細胞珪酸体・機動細胞珪酸体のほか、籾殻に形成される穎珪酸体も産出する。イネ属の含量密度は、短細胞珪酸体が約1.1万個/g、機動細胞珪酸体が約5,000個/g、穎珪酸体が約2,200個/gである。このほか、ヨシ属、コブナグサ属やススキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科も産出する。

また、黒色土下層（試料12）では、植物珪酸体含量が約17.6万個/gである。上部（試料9）と同様に、ネザサ節を含むタケ亜科が多産する。イネ属も産出するが、その含量密度は上部（試料11）より少

表6 植物珪酸体含量

種 類	調査地点・層位・試料番号		
	第2地区	第8地区	
	第5層	黒色土上層	黒色土下層
	9	11	12
イネ科葉部短細胞珪酸体			
イネ族イネ属	200	10,600	1,300
タケ亜科ネザサ節	9,200	9,300	15,500
タケ亜科	33,200	28,500	45,500
ヨシ属	800	1,300	900
ウシクサ族コブナグサ属	300	900	900
ウシクサ族ススキ属	1,800	2,400	2,600
イチゴツナギ亜科	300	1,600	700
不明キビ型	9,400	21,700	18,600
不明ヒゲシバ型	4,000	6,200	4,400
不明ダンチク型	5,300	7,500	6,800
イネ科葉身機動細胞珪酸体			
イネ族イネ属	300	5,100	200
タケ亜科ネザサ節	16,300	8,900	20,500
タケ亜科	29,900	33,400	40,900
ヨシ属	1,800	2,400	2,200
ウシクサ族	1,100	1,500	700
不明	10,300	12,200	13,800
珪化組織片			
イネ属穎珪酸体	-	2,200	400
合 計			
イネ科葉部短細胞珪酸体	64,600	89,900	97,000
イネ科葉身機動細胞珪酸体	59,700	63,500	78,200
珪化組織片	0	2,200	400
総 計	124,300	155,600	175,700

数値は含量密度(個/g)を示す。各種類の含量は、10の位で丸めている(100単位にする)。合計は各種類の丸めない数字を合計した後に丸めている。

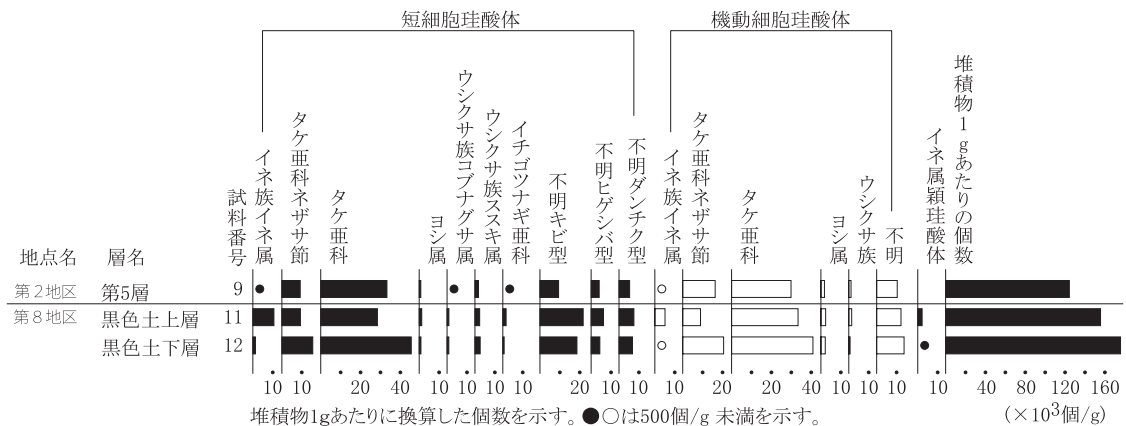


図 141 植物珪酸体含量の層位分布

なく、短細胞珪酸体が約1,300個/g、機動細胞珪酸体が約200個/g、穎珪酸体が約400個/gである。この他に、ヨシ属、コブナグサ属やススキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科などが産出する。

#### 4. 各地区の腐植質堆積物形成期の古環境

##### (1) 第2地区の第5層形成期

古代以前に形成された第5層は、見かけ上、塊状をなす擾乱された腐植質砂質泥からなる。本層から産出した珪藻化石は、いずれも保存状態が悪く破損しているものが多かった。珪藻は乾湿を繰り返すような場所では風化しやすいことが知られている。また、群集組成は、多産種が存在せず、流水性種・止水性種・陸生珪藻といった相反する生態性を示す種群からなる。このような群集組成は、混合群集と呼ばれており、河川の氾濫堆積物などで特徴的に認められることが確認されている(堀内・高橋・橋本, 1996)。以上の層相および珪藻化石の産状から、第5層は、土壌発達する時期が卓越する氾濫原の堆積環境で形成されたことが推定される。

第5層から産出する花粉化石は保存状態が悪く、花粉外膜が破損・溶解しているものが多く認められた。花粉化石は好気的環境下では風化することが知られている。また、花粉・シダ類胞子の風化に対する抵抗性は種類により異なり、落葉広葉樹に由来する花粉よりも針葉樹に由来する花粉やシダ類胞子の方が酸化に対する抵抗性が高いとされている(中村, 1967; 徳永・山内, 1971; 三宅・中越, 1998など)。今回の結果でも針葉樹花粉やシダ類胞子が多産していることから、得られた花粉化石群集は、分解に強い花粉が選択的に残存した偏った組成になっている可能性が高い。一方、植物珪酸体も保存状態が悪かった。植物珪酸体は、pH値の高い場所や、乾湿を繰り返す場所で風化しやすいことが指摘されている(江口, 1994, 1996)。また、種類によって溶解性に違いが認められることも確認されている(近藤・佐瀬, 1986)。このような花粉化石・植物珪酸体の保存状態は、上述の堆積環境とも同調的であり、いずれの群集も風化により偏った組成になっていることが窺える。このことを考慮しながら、調査区の前植生について検討する。

局地的な植生を反映する草本花粉の産状をみると、イネ科、ヨモギ属、キク亜科が比較的多産しており、水生植物はオモダカ属が僅かに産出しただけである。また、植物珪酸体では、自然堤防のような比較的乾いた、開けた場所に成育するネザサ節を含むタケ亜科が多産し、同様な場所に生育するススキ属を伴う組成を示した。湿地に生育するヨシ属も産出するが、含量密度は低率であった。

以上のことから、第5層形成期の調査地点ないしその周辺の高燥地にはイネ科・ヨモギ属などから草地在が広がっていたことが推定される。なお、タケ亜科の植物珪酸体は他のイネ科と比較して風化に強く、また生産量の多い点がかこれまでの研究から指摘されている(近藤, 1982; 杉山・藤原, 1986)。したがって、ネザサ節を含むタケ亜科は実際の植生より過大に評価されているものと判断される。また、植物珪酸体では、栽培植物のイネ属由来の珪酸体も僅かながら産出している。その含量密度は機動細胞珪酸体で200個/gと著しく少なく、土壌の母材となっている氾濫堆積物とともに二次堆積したものである可能性もあり、調査地点での稲作に由来するか否かは特定できない。

一方、第5層形成期の周辺の河川の氾濫の影響を受けない領域には、温帯針葉樹のツガ属、モミ属、マツ属、スギ属や、暖温帯性常緑広葉樹林の構成要素であるアカガシ亜属などからなる林分が存在したことが推定される。また、流路沿いの自然堤防から後背湿地にかけてはニレ属一ケヤキ属、クマシデ属一アサダ属等の落葉広葉樹が分布していた可能性がある。

## (2) 第8地区の黒色土上層・下層形成期

第8地区に累重する、古代以前に形成された黒色土上層・下層は、上記の第2地区の第5層と同様に、見かけ上、塊状をなす擾乱されている腐植質砂質泥からなる。この黒色土上層・下層から産出する珪藻化石の産状も第2地区第5層と類似しており、いずれの層準も保存状態が極めて悪く、流水生種、止水性種、陸生珪藻といった相反する環境を指標する種群からなる混合群集であった。これらのことから、第8地区の黒色土上層・下層も、基本的には第2地区第5層と同様に、土壌発達する時期が卓越する氾濫原の堆積環境で形成されたことが推定される。ただし、黒色土上層・下層の珪藻化石群集は、陸生珪藻の産状が目立つことから、多少堆積環境が異なり、第8地区の方が安定していた可能性がある。また、黒色土下層に比較して、上層では耐乾性の高い陸生珪藻A群が多産するようになることから、下層と上層形成期で堆積環境が多少異なり、上層形成期の方が、より好気的環境が支配的であったことが推定される。

以上の堆積環境と同調するように、黒色土上層・下層から産出する花粉化石・植物珪酸体は風化作用の影響を受けた保存状態の悪いものであった。特に黒色土上層では花粉化石の保存状態が著しく悪く、ほとんど産出せず、陸生珪藻の産状と良く対応している。したがって、黒色土上層・下層の花粉化石群集・植物珪酸体も偏った組成になっている可能性があり、この点を考慮して、当時の植生について検討する。

黒色土下層の花粉化石群集および植物珪酸体組成は、第2地区と良く類似することから、同様の植生が推定される。すなわち、調査地点近辺はヨモギ属やイネ科植物が生育する草地であったと思われる。また、河川の氾濫等の攪乱の影響を受けない領域には、温帯性針葉樹や常緑広葉樹などからなる林分が存在したことが推定される。

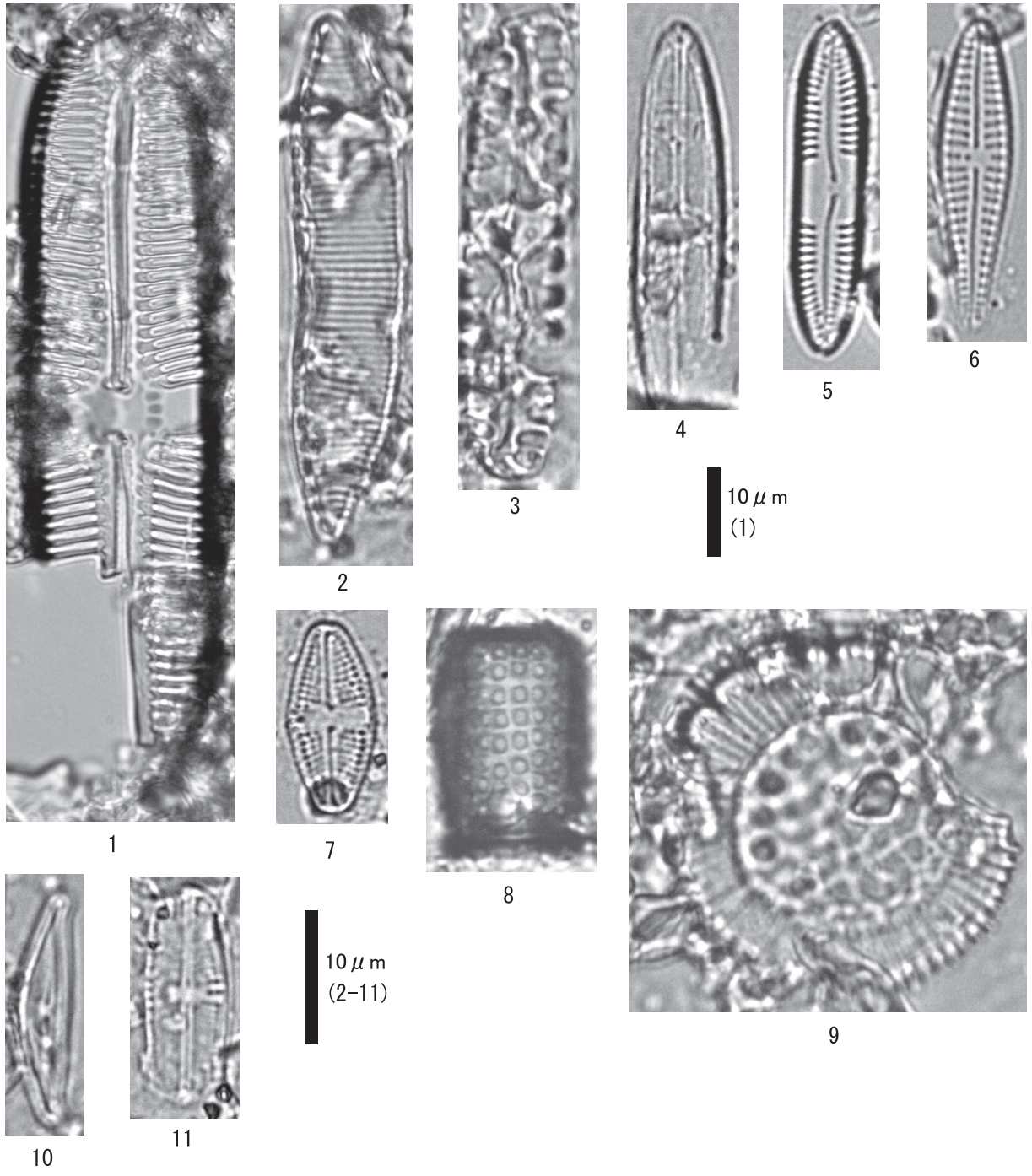
黒色土上層形成期も基本的には同様な草地が卓越する植生であったと推定されるが、花粉化石の保存状態が悪く、特定するには至らない。また、黒色土上層では栽培植物のイネ属の植物珪酸体が比較的多産した。イネ属の含量密度は、短細胞珪酸体が1.1万個/g、機動細胞珪酸体が5,000個/g、穎珪酸体が約2,200個/gであり、組織片も認められた。過去の水田跡（稲作跡）の調査では、一般にイネの植物珪酸体（機動細胞由来）が試料1g当り5,000個以上の密度で検出された場合、その場所で稲作が行われた可能性が高いことが指摘されている（杉山, 2000）。今回の黒色土上層のイネ属含量密度は、この値を上回っており、堆積層の層相も著しく擾乱された堆積物からなることを合わせ考えると、第8地区の黒色土上層形成期には調査地点において稲作が行われていた可能性が高い。

## 5. まとめ

今回の分析調査では、第2地区および第8地区で確認された古代以前の腐植質堆積物について珪藻・花粉・植物珪酸体分析を実施した。その結果、以下に示すことが明らかとなった。

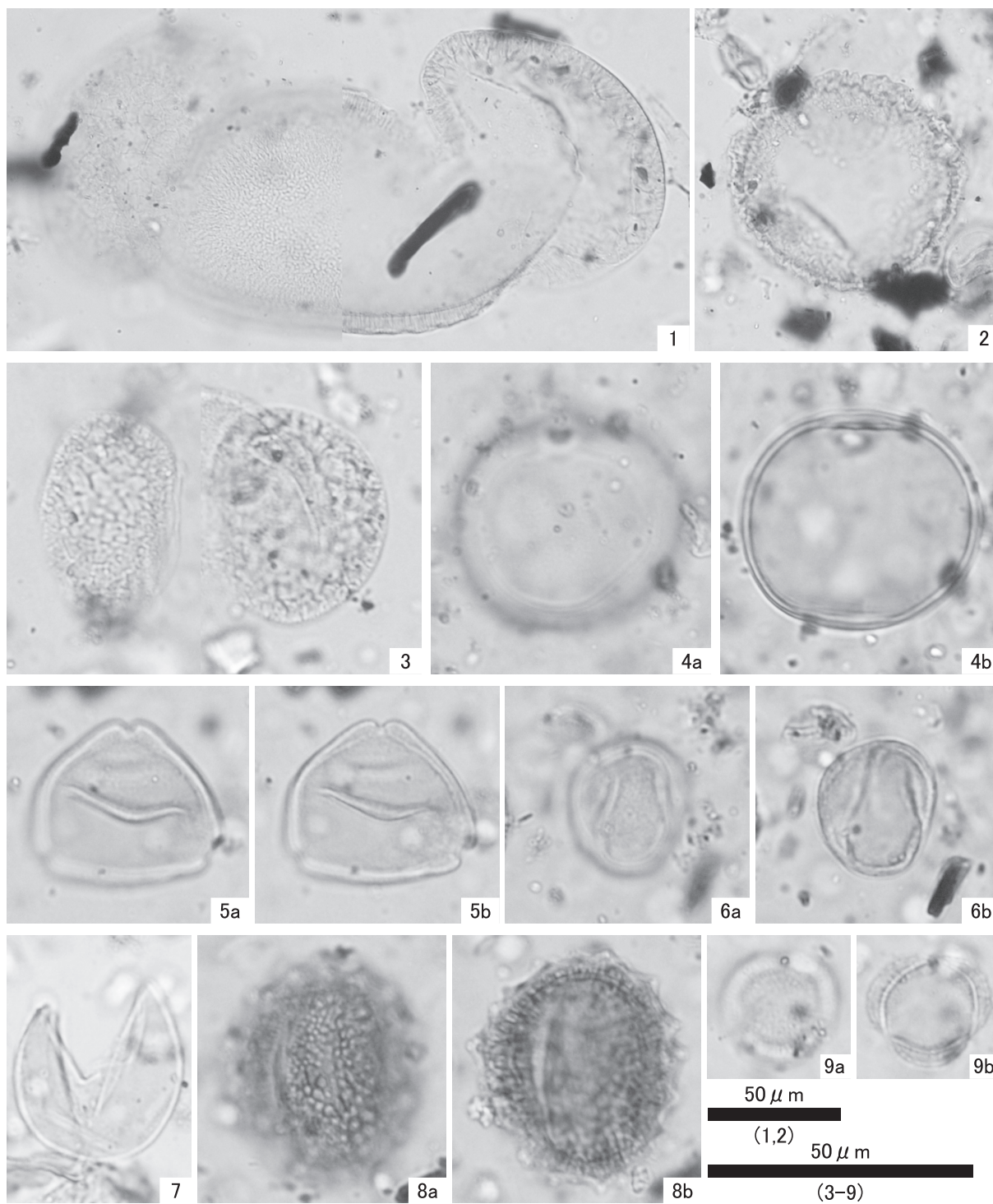
- 1) 第2地区および第8地区で確認された古代以前の腐植質堆積物は、いずれも類似する土壌発達する時期が卓越する氾濫原の堆積環境で形成されたことが推定される。
- 2) 土壌発達期の調査地点の植生は草地であった可能性が高く、河川攪乱の影響を受けない領域にはカシ類などの常緑広葉樹やスギ属・ツガ属などの温帯針葉樹からなる林分が存在した。
- 3) 第8地区の黒色土上層形成期には、調査地点で稲作が行われていた可能性が高い。





1. *Pinnularia* cf. *episcopalis* Cleve(第8地区,第5層下層;12)
2. *Hantzschia amphioxys* (Ehr.)Grunow(第8地区,第5層上層;11)
3. *Pinnularia borealis* Ehrenberg(第8地区,第5層下層;12)
4. *Neidium alpinum* Hustedt(第2地区,第5層;9)
5. *Pinnularia schroederii* (Hust.)Krammer(第2地区,第5層;9)
6. *Gomphonema parvulum* (Kuetz.)Kuetzing(第2地区,第5層;9)
7. *Luticola mutica* (Kuetz.)D.G.Mann(第2地区,第5層;9)
8. *Aulacoseira granulata* (Ehr.)Simonsen(第2地区,第5層;9)
9. *Cyclotella striata*-*C. stylorum*(第8地区,第5層下層;12)
10. *Amphora montana* Krasske(第8地区,第5層上層;11)
11. *Sellaphora laevissima* (Kuetz.)Mann(第8地区,第5層上層;11)

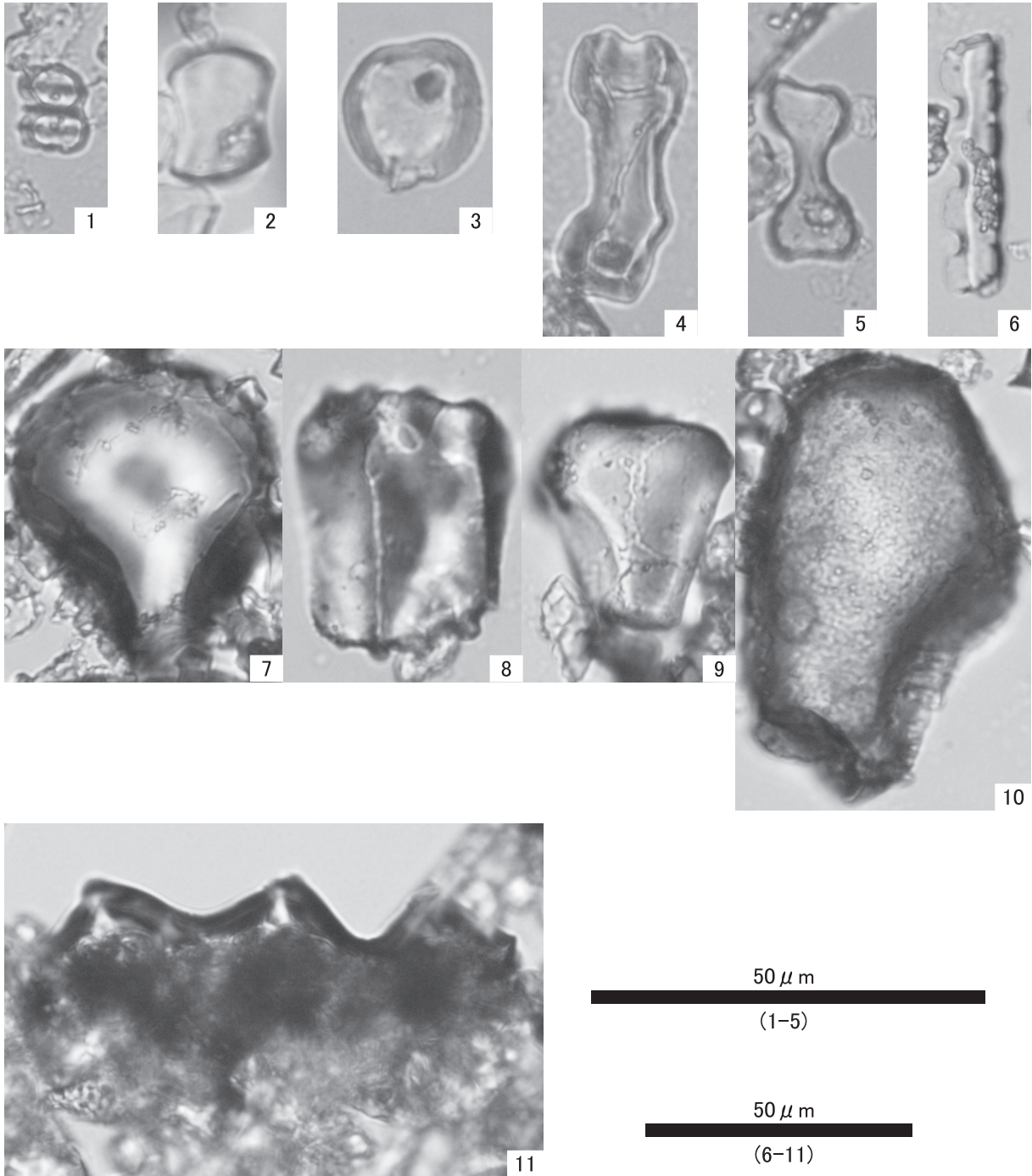
写真3 珪藻化石



- |                         |                           |
|-------------------------|---------------------------|
| 1. モミ属(第8地区;第5層下層,12)   | 2. ツガ属(第2地区;第5層,9)        |
| 3. マツ属(第8地区;第5層下層,12)   | 4. イネ科(第2地区;第5層,9)        |
| 5. ヤマモモ属(第8地区;第5層下層,12) | 6. コナラ属アカガシ亜属(第2地区;第5層,9) |
| 7. スギ属(第8地区;第5層下層,12)   | 8. キク亜科(第2地区;第5層,9)       |
| 9. ヨモギ属(第2地区;第5層,9)     |                           |

写真4 花粉化石





1. イネ属短細胞珪酸体(第8地区,第5層上層;11)
2. ネザサ節短細胞珪酸体(第2地区,第5層;9)
3. ヨシ属短細胞珪酸体(第8地区,第5層下層;12)
4. コブナグサ属短細胞珪酸体(第8地区,第5層上層;11)
5. ススキ属短細胞珪酸体(第8地区,第5層上層;11)
6. イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体(第8地区,第5層上層;11)
7. イネ属機動細胞珪酸体(第8地区,第5層上層;11)
8. ネザサ節機動細胞珪酸体(第2地区,第5層;9)
9. ウシクサ族機動細胞珪酸体(第8地区,第5層上層;11)
10. ヨシ属機動細胞珪酸体(第8地区,第5層下層;12)
11. イネ属穎珪酸体(第8地区,第5層上層;11)

写真5 植物珪酸体



## 第3節 花粉・珪藻分析

### I. 花粉分析

#### 1. はじめに

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。花粉などの植物遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

#### 2. 試料

分析試料は、第1地区の265井戸埋土から採取された試料5（古墳時代後期）、第7地区の2溝埋土から採取された試料10（古代以前）、第9地区凸部の16流路埋土から採取された試料13（縄文時代早期中葉）の計3点である。

#### 3. 方法

花粉の分離抽出は、中村（1973）の方法をもとに、以下の手順で行った。

- 1) 試料から1 cm<sup>3</sup>を採量
- 2) 0.5%リン酸三ナトリウム（12水）溶液を加え15分間湯煎
- 3) 水洗処理の後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去
- 4) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置
- 5) 水洗処理の後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸9：濃硫酸1のエルドマン氏液を加え1分間湯煎）を施す
- 6) 再び氷酢酸を加えて水洗処理
- 7) 沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成
- 8) 検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって300~1000倍で行った。花粉の同定は、島倉（1973）および中村（1980）をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン（-）で結んで示す。イネ属については、中村（1974, 1977）を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して同定しているが、個体変化や類似種もあることからイネ属型とする。また、この処理を施すとクスノキ科の花粉は検出されない。

#### 4. 結果

##### (1) 分類群

出現した分類群は、樹木花粉16、樹木花粉と草本花粉を含むもの2、草本花粉23、シダ植物孢子2形態の計43である。これらの学名と和名および粒数を表7に示し、花粉数が200個以上計数できた試料は、周辺の植生を復元するために花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを図142に示す。主要な分類群は

顕微鏡写真を示した。また、寄生虫卵についても観察したが検出されなかった。以下に出現した分類群を記載する。

〔樹木花粉〕

モミ属、ツガ属、マツ属複雑管束亜属、スギ、イチイ科ーイヌガヤ科ーヒノキ科、ハンノキ属、カバノキ属、クマシデ属ーアサダ、クリ、シイ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属ーケヤキ、エノキ属ームクノキ、カエデ属、ハイノキ属

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科ーイラクサ科、マメ科

〔草本花粉〕

ガマ属ーミクリ属、ヒルムシロ科、サジオモダカ属、イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、タデ属、タデ属サナエタデ節、アカザ科ーヒユ科、キンボウゲ属、アブラナ科、ベンケイソウ科、ワレモコウ属、ササゲ属、アリノトウグサ属ーフサモ属、セリ亜科、シソ科、ナス科、オミナエシ科、タンポポ亜科、キク亜科、オナモミ属、ヨモギ属

〔シダ植物孢子〕

単条溝孢子、三条溝孢子

(2) 花粉群集の特徴

1) 第1地区の265井戸埋土(試料5)

草本花粉の占める割合が高く、約65%を占める。草本花粉ではナス科、イネ科(イネ属型を含む)、ヨモギ属、シソ科、カヤツリグサ科、アカザ科ーヒユ科などの出現率がやや高い。樹木花粉ではコナラ属コナラ亜属を主に、スギ、シイ属などが出現する。

2) 第7地区の2溝埋土(試料10)

花粉密度が極めて低く、ほとんど検出されない。

3) 第9地区凸部の16流路埋土(試料13)

樹木花粉の占める割合が高く、約55%を占める。また、シダ植物孢子が約15%を占める。樹木花粉ではハンノキ属が高率に出現し、次いでコナラ属コナラ亜属が多い。草本花粉ではイネ科が優占し、カヤツリグサ科、ヨモギ属などが伴われる。

5. 花粉分析から推定される植生と環境

1) 第1地区の265井戸埋土

出現率のやや高いナス科、シソ科には栽培植物が含まれ、ササゲ属なども出現していることから、堆積地周辺にはこれらを作物とする畑が分布していたと考えられる。畑の周囲にはアカザ科ーヒユ科、ヨモギ属などが生育していた。畑作物の確認のために種実の洗い出しを行ったところ、カヤツリグサ科、タデ属、コナギ、コキンバイザサ、ナデシコ科、イヌホウズキ、ヒョウタン類などの種実が同定された。これによりナス科はイヌホウズキの可能性が高いと思われるが、シソ科は検出されなかったため言及出来ない。花粉の形態からシソ科はメボウキ属に近似する。メボウキ属にはバジルな

どが含まれるが、断定には至らなかった。またイネ属型が検出され水田の分布も示唆される。近隣にはコナラ属コナラ亜属、シイ属などの広葉樹と、スギなどの針葉樹が生育していたと考えられる。

## 2) 第7地区の2溝埋土

花粉密度が極めて低いことから、水流により淘汰され堆積しなかったか、常時乾燥しており花粉が分解されたことなどが推定される。このことから、季節によってかあるいは人為的に流れるような溝であった可能性が考えられる。

## 3) 第9地区凸部の16流路埋土

高率に出現するハンノキ属は、河辺林や湿地林を形成する性格を持つ。水生植物のカヤツリグサ科、イネ科も比較的多いことから、流路周辺はハンノキ属の湿地林とコナラ属コナラ亜属を主とする落葉広葉樹が分布し、湿地性雑草のカヤツリグサ科、イネ科や、湿地を好むシダ植物単条溝胞子が生育していたと考えられる。

## 6. まとめ

花粉化石を検討した結果、第1地区の265井戸の周辺は、ナス科、シソ科、アカザ科—ヒユ科、ヨモギ属、ササゲ属などが生育し、畑作が行われていたと推定される。栽培植物としては、ササゲ属、シソ科（メボウキ属？）などが検出された。第7地区の2溝は花粉がほとんど検出されず、水流による淘汰と乾燥が考えられ、季節的や人為的に流れるような溝であった可能性が示唆された。第9地区凸部の16流路周辺は低湿な状態であり、ハンノキ属やカヤツリグサ科、イネ科の沼沢地に生育する植物が分布していた。周囲にはコナラ属コナラ亜属などの落葉広葉樹も分布していた。

表7 吹田操車場遺跡発掘調査における花粉分析結果

分類群	学名	和名	第1地区	第7地区	第9地区凸部
			265井戸埋土	2溝埋土	16流路埋土
	Arboreal pollen	樹木花粉	5	10	13
	<i>Abies</i>	モミ属	2		5
	<i>Tsuga</i>	ツガ属	2		5
	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	マツ属複雑管束亜属	4		6
	<i>Cryptomeria japonica</i>	スギ	24	1	5
	Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae	イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	7		6
	<i>Alnus</i>	ハンノキ属	2		105
	<i>Betula</i>	カバノキ属	2		3
	<i>Carpinus-Ostrya japonica</i>	クマシデ属-アサダ	5		5
	<i>Castanea crenata</i>	クリ	1		6
	<i>Castanopsis</i>	シイ属	10		1
	<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ亜属	42	3	35
	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	36	1	
	<i>Ulmus-Zelkova serrata</i>	ニレ属-ケヤキ	1		5
	<i>Celtis-Aphananthe aspera</i>	エノキ属-ムクノキ	1		1
	<i>Acer</i>	カエデ属			1
	<i>Symplocos</i>	ハイノキ属			1
Arboreal・Nonarboreal pollen		樹木・草本花粉			
	Moraceae-Urticaceae	クワ科-イラクサ科	17		1
	Leguminosae	マメ科			1
Nonarboreal pollen		草本花粉			
	<i>Typha-Sparganium</i>	ガマ属-ミクリ属	1		
	Potamogetonaceae	ヒルムシロ科	1		
	<i>Alisma</i>	サジオモダカ属			1
	Gramineae	イネ科	51	2	57
	<i>Oryza type</i>	イネ属型	9		
	Cyperaceae	カヤツリグサ科	34		11
	<i>Polygonum</i>	タデ属			2
	<i>Polygonum</i> sect. <i>Persicaria</i>	タデ属サナエタデ節			2
	Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科-ヒユ科	20	5	1
	<i>Ranunculus</i>	キンボウゲ属			1
	Cruciferae	アブラナ科	5		2
	Crassulaceae	ベンケイソウ科	1		
	<i>Sanguisorba</i>	ワレモコウ属			1
	<i>Vigna</i>	ササゲ属	3		
	<i>Haloragis-Myriophyllum</i>	アリノトウグサ属-フサモ属	1		
	Apiioideae	セリ亜科	2		1
	Labiatae	シソ科	34		
	Solanaceae	ナス科	67		
	Valerianaceae	オミナエシ科	1		
	Lactucoideae	タンポポ亜科			1
	Asterioideae	キク亜科	11		4
	<i>Xanthium</i>	オナモミ属	1		
	<i>Artemisia</i>	ヨモギ属	42	1	16
Fern spore		シダ植物胞子			
	Monolate type spore	単条溝胞子	2	4	46
	Trilate type spore	三条溝胞子	6		4
Arboreal pollen		樹木花粉	139	5	190
Arboreal・Nonarboreal pollen		樹木・草本花粉	17	0	2
Nonarboreal pollen		草本花粉	284	8	100
Total pollen		花粉総数	440	13	292
Pollen frequencies of 1cm <sup>3</sup>		試料1cm <sup>3</sup> 中の花粉密度	7.5	1.1	2.6
			$\times 10^3$	$\times 10^2$	$\times 10^3$
Unknown pollen		未同定花粉	10	1	9
Fern spore		シダ植物胞子	8	4	50
Helminth eggs		寄生虫卵	(-)	(-)	(-)
Digestion rimeins		明らかな消化残渣	(-)	(-)	(-)
Charcoal fragments		微細炭化物		(+)	(+)



## II. 珪藻分析

### 1. はじめに

珪藻は、珪酸質の被殻を有する単細胞植物であり、海水域や淡水域などの水域をはじめ、湿った土壌、岩石、コケの表面にまで生息している。珪藻の各分類群は、塩分濃度、酸性度、流水性などの環境要因に応じて、それぞれ特定の生息場所を持っている。珪藻化石群集の組成は、当時の堆積環境を反映しており、水域を主とする古環境復元の指標として利用されている。

### 2. 試料

分析試料は、第1地区の265井戸埋土から採取された試料5（古墳時代後期）、第7地区の2溝埋土から採取された試料10（古代以前）、第9地区凸部の16流路埋土から採取された試料13（縄文時代早期中葉）の計3点である。

### 3. 方法

以下の手順で、珪藻の抽出と同定を行った。

- 1) 試料から1 cm<sup>3</sup>を採量
- 2) 10%過酸化水素水を加え、加温反応させながら1晩放置
- 3) 上澄みを捨て、細粒のコロイドと薬品を水洗（5～6回）
- 4) 残渣をマイクロピペットでカバーガラスに滴下して乾燥
- 5) マウントメディアによって封入し、プレパラート作成
- 6) 検鏡、計数

検鏡は、生物顕微鏡によって600～1500倍で行った。計数は珪藻被殻が200個体以上になるまで行い、少ない試料についてはプレパラート全面について精査を行った。

### 4. 結果

#### (1) 分類群

出現した珪藻は、真塩性種（海水生種）3分類群、真-中塩性種（海-汽水生種）2分類群、中-貧塩性種（汽-淡水生種）1分類群、貧塩性種（淡水生種）28分類群である。表1に分析結果を示し、珪藻総数を基数とする百分率を算定した珪藻ダイアグラムを図1に示す。珪藻ダイアグラムにおける珪藻の生態性はLowe（1974）や渡辺（2005）等の記載による。陸生珪藻は小杉（1986）、環境指標種群のうち海水生種から汽水生種は小杉（1988）により、淡水生種は安藤（1990）による。主要な分類群については顕微鏡写真を示した。以下にダイアグラムで表記した主要な分類群を記載する。

〔真塩性種〕

*Thalassiosira excentrica*, *Thalassiosira nidulus*, *Thalassiosira* spp.

〔真-中塩性種〕

*Cyclotella striata-stylorum*, *Melosira* sp.1

〔中-貧塩性種〕

*Rhopalodia gibberula*



〔貧塩性種〕

*Amphora copulata*, *Amphora fontinalis*, *Amphora montana*, *Aulacoseira canadensis*, *Aulacoseira* spp., *Caloneis molaris*, *Cyclotella ocellata*, *Cymbella amphioxys*, *Cymbella naviculiformis*, *Cymbella silesiaca*, *Diploneis parma*, *Eunotia minor*, *Frustulia vulgaris*, *Gomphonema globiferum*, *Gomphonema gracile*, *Gomphonema parvulum*, *Gomphonema* spp., *Gyrosigma* spp., *Hantzschia amphioxys*, *Navicula elginensis*, *Navicula mutica*, *Pinnularia appendiculata*, *Pinnularia borealis*, *Pinnularia microstauron*, *Pinnularia schroederii*, *Pinnularia subcapitata*, *Pinnularia viridis*, *Stephanodiscus* sp.1

## (2) 珪藻群集の特徴

### 1) 第1地区の265井戸埋土(試料5)

珪藻密度が低い。出現した分類群は貧塩性種(淡水生種)でほぼ占められ、わずかに真一中塩性種(海一汽水生種)の*Cyclotella striata-stylorum*が出現する。貧塩性種(淡水生種)では陸生珪藻の*Hantzschia amphioxys*, *Navicula mutica*, *Pinnularia borealis*、好止水性種で沼沢湿地付着生環境指標種群の*Aulacoseira canadensis*などがわずかに出現する。

### 2) 第7地区の2溝埋土(試料10)

珪藻密度が極めて低く、破片がわずかに検出されるのみである。

### 3) 第9地区凸部の流路埋土(試料13)

真一中塩性種(海一汽水生種)と貧塩性種(淡水生種)の占める割合が高く、それぞれ約40%を占め、これに真塩性種(海水生種)と中一貧塩性種(汽一淡水生種)が続く。真一中塩性種(海一汽水生種)で内湾環境指標種群の*Cyclotella striata-stylorum*が優占種であり、真塩性種(海水生種)で外洋環境指標種群の*Thalassiosira excentrica*, *Thalassiosira nidulus*, *Thalassiosira* spp.が伴なわれる。中一貧塩性種(汽一淡水生種)では*Rhopalodia gibberula*が低率に出現する。貧塩性種(淡水生種)では真・好止水性種の占める割合が高く、流水不定性種、陸生珪藻が続く。真・好止水性種では沼沢湿地付着生環境指標種群の*Aulacoseira canadensis*, *Eunotia minor*, *Gomphonema gracile*、真・好止水性種の*Aulacoseira* spp., *Cyclotella ocellata*が出現する。流水不定性種では*Stephanodiscus* sp.1, *Gyrosigma* spp.などが出現する。陸生珪藻では*Pinnularia borealis*, *Navicula mutica*, *Pinnularia schroederii*が低率に出現する。

## 5. 珪藻分析から推定される堆積環境

### 1) 第1地区の265井戸埋土

真一中塩性種(海一汽水生種)、貧塩性種(淡水生種)の陸生珪藻、好止水性種がわずかに出現する。井戸であるため、日当たりが悪く、光合成を行う珪藻は生育しにくかったと考えられる。真一中塩性種(海一汽水生種)で内湾環境指標種群の*Cyclotella striata-stylorum*は外部からもたらされたと考えられ、生活で使用された塩や、近隣の内湾の環境および海成層からもたらされたと推定される。陸生珪藻、好止水性種は井戸の壁面や水域にわずかに生育していたと考えられる。

## 2) 第7地区の2溝埋土

珪藻密度が極めて低く、破片がわずかに検出されるのみである。流水により珪藻が淘汰され堆積されなかったか、時期によって淀んだり、常時流れるのではなく人為的に短期間流すような溝であった可能性が考えられる。

## 3) 第9地区凸部の流路埋土

真一中塩性種（海一汽水生種）で内湾環境指標種群の*Cyclotella striata-stylorum*が優占し、真塩性種（海水生種）で外洋環境指標種群の*Thalassiosira excentrica*、*Thalassiosira nidulus*、*Thalassiosira* spp.が伴なわれる。標高が不明であるが、内湾の海域とつながり、満潮時に海水が遡上するような環境が考えられる。周囲に海成層が分布するなら移動化石の可能性もあるが、高率での出現であるため、直接的に環境を反映していた可能性が高い。真・好止水性種では沼沢湿地付着生環境指標種群の*Aulacoseira canadensis*なども出現しており、水草の生育する止水の環境も示され、水の停滞する様相が推定される。以上から、本流路は潮の干満により水が移動するような溝であったと推定される。

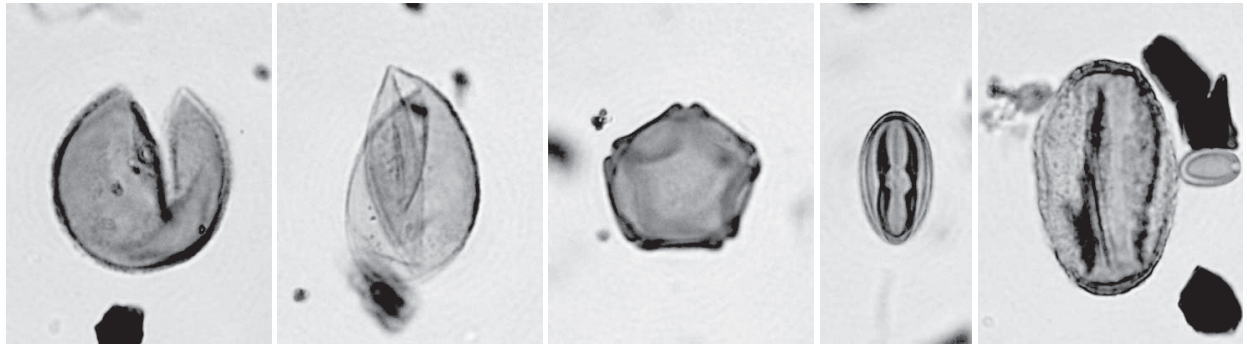
## 6. まとめ

珪藻化石を検討した結果、第1地区の265井戸は珪藻が極めて少なく、井戸内の日当たりが悪く、珪藻が生育しにくい環境であったことが示唆された。第7地区の2溝でも珪藻密度が極めて低く、通常は乾燥し、人為的に短期間流すような溝であった可能性が考えられた。第9地区凸部の16流路（試料13）は、真一中塩性種（海一汽水生種）で内湾環境指標種群の*Cyclotella striata-stylorum*が優占し、内湾の海域とつながり、潮の干満による水の移動が主に行われるような溝であったと推定された。

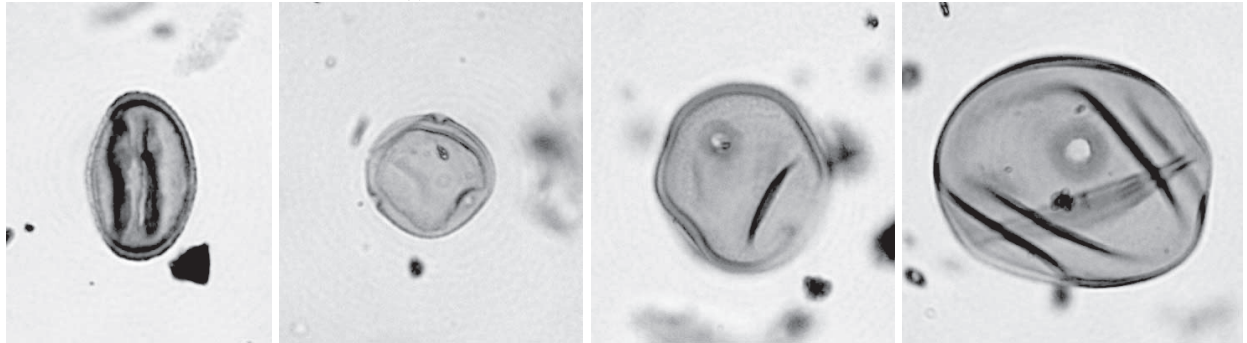
表8 吹田操車場遺跡発掘調査における珪藻分析結果

分類群	第1地区	第7地区	第9地区凸部
	265井戸埋土	2溝埋土	16流路埋土
	5	10	13
貧塩性種 (淡水生種)			
<i>Amphora copulata</i>			1
<i>Amphora fontinalis</i>			1
<i>Amphora montana</i>	1		
<i>Aulacoseira canadensis</i>	3		10
<i>Aulacoseira</i> spp.			4
<i>Caloneis molaris</i>	1		
<i>Cyclotella ocellata</i>			3
<i>Cymbella amphioxys</i>	2		
<i>Cymbella naviculiformis</i>	1		
<i>Cymbella silesiaca</i>	1		
<i>Diploneis parma</i>			1
<i>Eunotia minor</i>			3
<i>Frustulia vulgaris</i>			1
<i>Gomphonema globiferum</i>	1		
<i>Gomphonema gracile</i>	2		2
<i>Gomphonema parvulum</i>	2		
<i>Gomphonema</i> spp.	1		
<i>Gyrosigma</i> spp.			3
<i>Hantzschia amphioxys</i>	22		
<i>Navicula elginensis</i>			1
<i>Navicula mutica</i>	6		2
<i>Pinnularia appendiculata</i>	1		
<i>Pinnularia borealis</i>	3		3
<i>Pinnularia microstauron</i>	2		
<i>Pinnularia schroederii</i>			1
<i>Pinnularia subcapitata</i>	1		
<i>Pinnularia viridis</i>	1		
<i>Stephanodiscus</i> sp.1			7
中-貧塩性種 (汽-淡水生種)			
<i>Rhopalodia gibberula</i>			5
真-中塩性種 (海-汽水生種)			
<i>Cyclotella striata-stylorum</i>	5		38
<i>Melosira</i> sp.1			7
真塩性種 (海水生種)			
<i>Thalassiosira excentrica</i>			6
<i>Thalassiosira nidulus</i>			2
<i>Thalassiosira</i> spp.			3
合計	56	0	104
未同定	2	0	1
破片	41	14	89
試料 1 cm <sup>3</sup> 中の殻数密度	1.4	0.0	2.0
	×10 <sup>4</sup>		×10 <sup>4</sup>
完形殻保存率 (%)	-	-	54.1

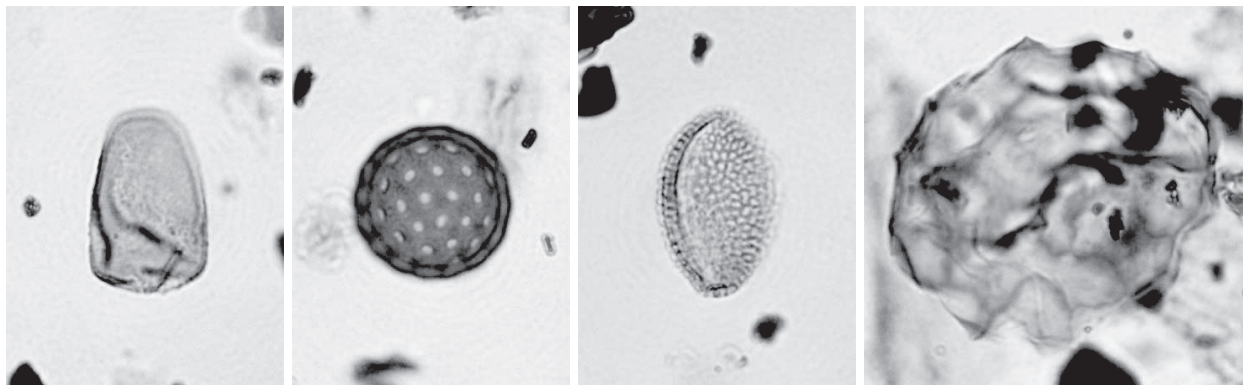




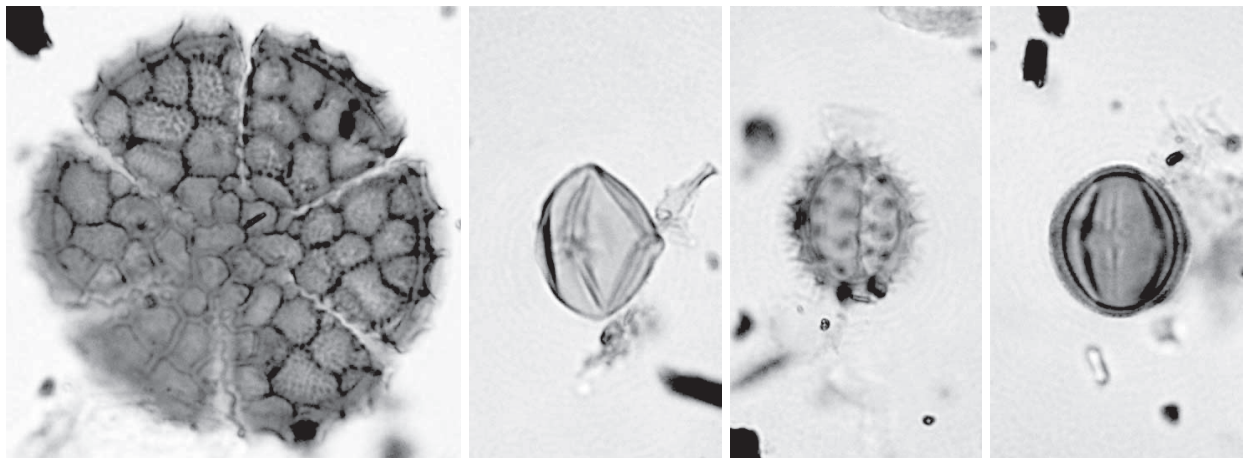
1 スギ 2 イチイ科-イヌガヤ科 3 ハンノキ属 4 シイ属 5 コナラ属コナラ亜属  
-ヒノキ科



6 コナラ属アカガシ亜属 7 クワ科-イラクサ科 8 イネ科 9 イネ属型



10 カヤツリグサ科 11 アカザ科-ヒユ科 12 アブラナ科 13 ササゲ属

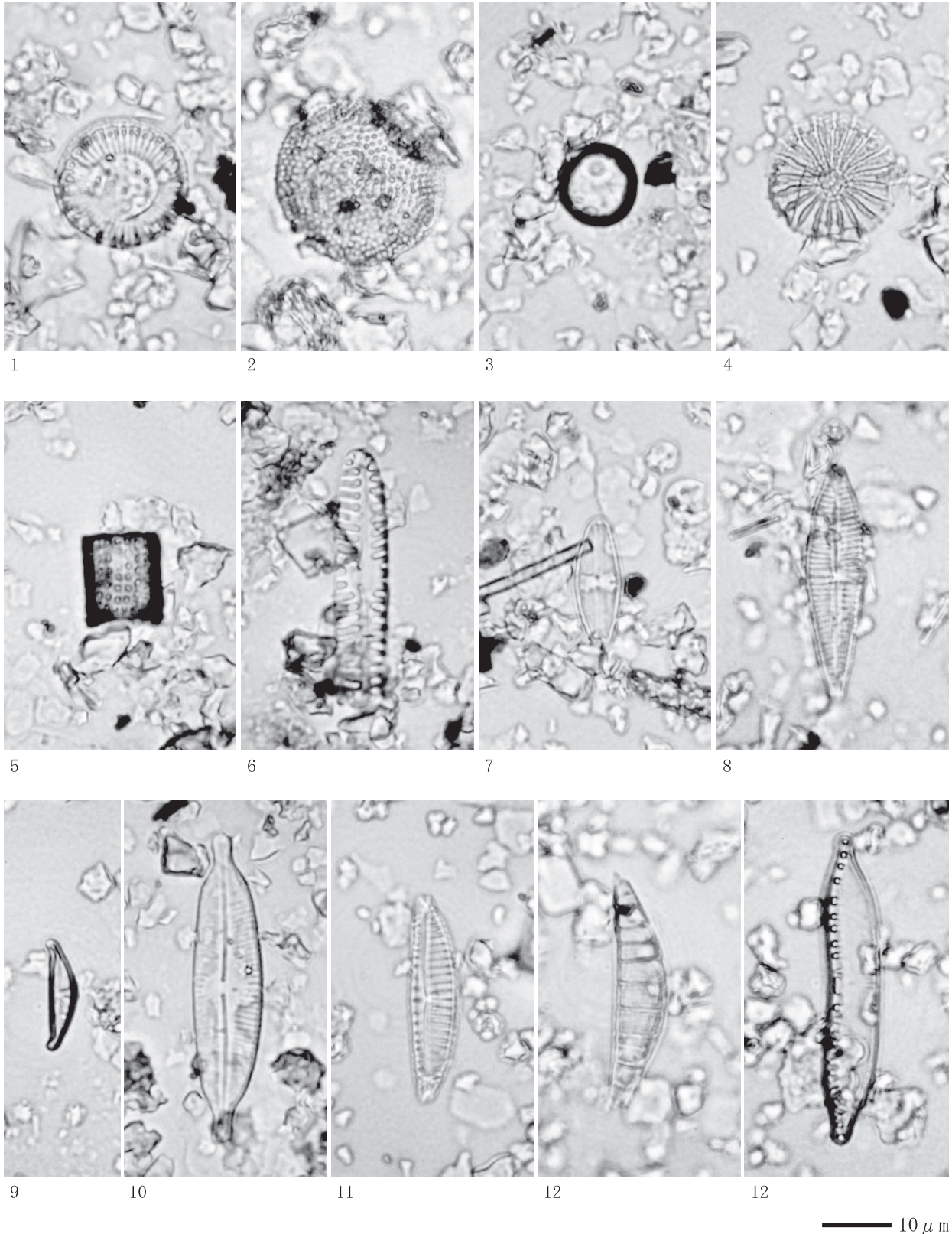


14 シン科 15 ナス科 16 キク亜科 17 ヨモギ属

— 10  $\mu$  m

写真6 吹田操車場遺跡発掘調査の花粉





1. *Cyclotella striata-stylorum* 2. *Thalassiosira excentrica* 3. *Melosira* sp.1 4. *Stephanodiscus* sp.1  
 5. *Aulacoseira canadensis* 6. *Pinnularia borealis* 7. *Navicula mutica* 8. *Gomphonema gracile* 9. *Amphora montana*  
 10. *Cymbella naviculiformis* 11. *Cymbella silesiaca* 12. *Rhopalodia gibberula* 13. *Hantzschia amphioxys*

写真7 吹田操車場遺跡発掘調査の珪藻



## 第4節 種実同定

### はじめに

今回の分析調査では、吹田操車場遺跡における古代の植物資源の利用状況に関する情報を得ることを目的として、古代の遺構等から出土種実類について大型植物遺体同定分析を実施する。

### 1. 試料

試料は、大型植物遺体（種実）同定分析試料5点である。各試料の詳細は、結果と共に表9に示す。

### 2. 分析方法

試料を双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて同定が可能な種実遺体を抽出する。現生標本および石川（1994）、中山ほか（2000）、谷城（2007）、辻（2008）等との対照から、種実遺体の種類と部位を同定し、個数を数えて表示する。登録番号1089仮番号13は、全量約0.8ccの殆どがヒデリコ近似種の果実であったため、ホタルイ属、コシンジュガヤ近似種、テンツキ近似種とカヤツリグサ科以外の種実は全て抽出し、ヒデリコ近似種は0.05cc（695個）の抽出、残り（ヒデリコ近似種主体）は容量の表示にとどめる。試料中に確認された種実以外の物質（炭化材など）は、プラス表示にとどめる。分析後は、種実遺体を種類毎に容器に入れて保管する。水分が多い試料は、70%程度のエタノール溶液で液浸する。

### 3. 結果

#### （1）各遺構における産状

分析結果を表9に、各遺構における種実遺体の産状を表10に示す。広葉樹2分類群（ナシ属、エゴノキ属）6個、草本23分類群（オモダカ科、ミズアオイ属、イネ、オオムギ、コムギ、ヒエ近似種、イネ科、コシンジュガヤ近似種、ホタルイ属、テンツキ近似種、ヒデリコ近似種、カヤツリグサ科、タデ属、ナデシコ科、マメ類、エノキグサ、メロン類、ヒョウタン類、シソ科、ナス近似種、ナス科、ノコギリソウ属、キク科）2248個+0.6cc、計2254+0.6cc個の種実、不明種実2個が検出された他に、木の芽、木材、炭化材、不明炭化物（木材組織が認められない、部位・種類共に不明の炭化物）、イネの穎を含む灰状物質、昆虫、礫・土粒などが確認された。

栽培種は、イネの穎と胚乳、オオムギの穎と胚乳、コムギの胚乳、マメ類の種子、ヒョウタン類の果実と種子、メロン類の種子のほか、栽培種の可能性があるヒエ近似種の胚乳、ナス近似種の種子が確認された。ヒョウタン類以外は全て炭化している。以下に、各遺構における種実遺体の産状を記す。

#### ・第1地区265井戸（登録番号572）

栽培種のヒョウタン類の果実4個と種子46個が検出された。果実は接合し1個体となる。

#### ・第6地区61土坑 焼土内（登録番号1086）

栽培種は、イネの穎8個、胚乳554個（93個穎付着）、イネ?の胚乳2個、オオムギの穎1個、胚乳139個（50個穎付着）、コムギの胚乳42個、ムギ類の胚乳84個、マメ類の種子11個、マメ類?の種子1個、計842個が検出された。その他に、草本のイネ科の果実1個、胚乳2個、ナデシコ科の種子1個が検出され、合計846個である。全て炭化している。

表9 大型植物遺体同定分析結果(1)

登録-仮番号	地区	遺構	層名	時代	分類群	部位	状態		個数	備考
							完形	炭化		
572	1	265井戸		古墳時代後期	ヒョウタン類	果実	完形		1	接合し1個体
							破片		3	
						種子	完形		46	
1086 - 2	6	61土坑	焼土内	10~11世紀	イネ	穎	破片	炭化	6	2個基部
						穎・胚乳	完形	炭化	65	
							破片	炭化	2	
						胚乳	完形	炭化	173	
						破片	炭化	13		
					オオムギ	穎・胚乳	完形	炭化	1	
						胚乳	破片	炭化	6	
イネ科	胚乳	完形	炭化	2						
	炭化材		炭化	1						
1086 - 3	6	61土坑	焼土内	10~11世紀	イネ	穎・胚乳	完形	炭化	1	
						胚乳	完形	炭化	1	
					オオムギ	穎	破片	炭化	1	2個集結
						穎・胚乳	完形	炭化	46	
							完形	炭化	55	
						胚乳	破片	炭化	8	
ムギ類	胚乳	完形	炭化	4						
イネ	胚乳	完形	炭化	3						
1086 - 4	6	61土坑	焼土内	10~11世紀	オオムギ	胚乳	完形	炭化	2	
					コムギ	胚乳	完形	炭化	5	
					ムギ類	胚乳	完形	炭化	3	
					イネ科	果実	完形	炭化	1	ヒエ近似種?
					マメ類	種子	完形	炭化	4	臍確認
						破片	炭化	2		
					マメ類?	種子	完形	炭化	1	
					昆虫		破片	炭化	2	
						不明炭化物		炭化	8	
1086 - 5	6	61土坑	焼土内	10~11世紀	イネ	穎・胚乳	完形	炭化	2	
						胚乳	完形	炭化	11	
					オオムギ	穎・胚乳	完形	炭化	1	
						胚乳	完形	炭化	6	
					コムギ	胚乳	完形	炭化	1	
						破片	炭化	1		
マメ類	種子	破片	炭化	1	アズキグループ(吉崎,1992)					
	不明炭化物		炭化	3						
1086 - 6	6	61土坑	焼土内	10~11世紀	イネ		破片	炭化	1	
							完形	炭化	10	
						穎・胚乳	破片	炭化	10	
						胚乳	完形	炭化	162	
						破片	炭化	98		
					オオムギ	胚乳	完形	炭化	9	
						破片	炭化	5		
					コムギ	胚乳	完形	炭化	34	
						破片	炭化	1		
					ムギ類	胚乳	完形	炭化	68	
						破片	炭化	9		
					ナデシコ科	種子	完形	炭化	1	
					マメ類	種子	完形	炭化	2	
						破片	炭化	2		
					炭化材			炭化	17	
木の芽			炭化	1						
灰状物質			+		イネ類確認					
不明炭化物			炭化	+						
炭化材			炭化	+						
炭化物			炭化	+	イネ類確認					
1086 - 7	6	61土坑	焼土内	10~11世紀						
1086 - 8	6	61土坑	焼土内	10~11世紀	イネ	穎	破片	炭化	1	
						穎・胚乳	完形	炭化	2	
					イネ?	胚乳	破片	炭化	2	
	炭化材		炭化	+						
1086 - 9	6	61土坑	焼土内	10~11世紀	イネ	穎・胚乳	破片	炭化	1	
					炭化材			炭化	+	
					不明炭化物			完形	炭化	1
1087 - 1	1	土器集中部	第5面	9~10世紀頃	イネ	胚乳	完形	炭化	3	
						破片	炭化	4		
					コムギ	胚乳	完形	炭化	1	
					マメ類	種子	破片	炭化	1	
					炭化材			炭化	+	
					不明炭化物			炭化	+	
礫・土粒				+						
1087 - 2	1	土器集中部	第5面	9~10世紀頃	ナン属	種子	破片	炭化	4	1個半分,3個接合し1個体
					エゴノキ属	種子	破片		1	
					イネ	胚乳	完形	炭化	6	
						破片	炭化	1		
					コムギ	胚乳	完形	炭化	1	
						破片	炭化	1		
					マメ類	種子	完形	炭化	3	
						破片	炭化	2	半分,接合し1個体	
炭化材			炭化	+						
昆虫				5						

表9 大型植物遺体同定分析結果(2)

登録-仮番号	地区	遺構	層名	時代	分類群	部位	状態	個数	備考	
1089-2	1	268溝	下層シルト	8世紀頃	イネ	穎	破片	炭化	1	
						穎・胚乳	完形	炭化	6	
						胚乳	完形	炭化	60	
					テンツキ近似種	果実	完形		1	
							破片		1	
						炭化材			炭化	2
不明炭化物			炭化	1						
1089-3	1	268溝	下層シルト	8世紀頃	イネ	胚乳	完形	炭化	14	
						破片	炭化	8		
					オオムギ	胚乳	完形	炭化	2	
					ムギ類	胚乳	破片	炭化	2	
					イネ科	果実	完形	炭化	1	
					コシンジュガヤ近似種	果実	完形		2	
					マメ類	種子	完形	炭化	1	臍欠損
							破片	炭化	2	
					ナス科	種子	破片	炭化	1	
					炭化材			炭化	1	
					不明炭化物			炭化	6	
					1089-4	1	268溝	下層シルト	8世紀頃	コムギ
ムギ類	胚乳	完形	炭化	1						
マメ類	種子	完形	炭化	1						
		完形	炭化	2						
メロン類	種子	完形	炭化	1						
昆虫				6						
1089-6	1	268溝	下層シルト	8世紀頃	ナシ属	果実	破片	炭化	1	
					イネ	胚乳	完形	炭化	6	
							破片	炭化	3	
					ヒエ近似種	胚乳	完形	炭化	1	
					コムギ	胚乳	完形	炭化	1	
					テンツキ近似種	果実	完形		18	
							破片		2	
					ヒデリコ近似種	果実	完形		10+	集合体あり
					タデ属	果実	完形		2	
					ナス近似種	種子	破片	炭化	3	
					炭化材			炭化	+	
					灰状物質				3	イネ類を確認
不明炭化物			炭化	6						
1089-7	1	268溝	下層シルト	8世紀頃	炭化材		炭化	+	種実確認されず	
					不明			2		
1089-10	1	268溝	下層シルト	8世紀頃	ナス近似種	種子	完形	炭化	32	
						破片	炭化	1		
1089-11	1	268溝	下層シルト	8世紀頃	ヒエ近似種	胚乳	完形	炭化	2	
					エノキグサ	種子	完形		1	
					シソ科	果実	完形		1	
					不明種実			炭化	2	
1089-12	1	268溝	下層シルト	8世紀頃	イネ科	胚乳	完形	炭化	3	
					ホタルイ属	果実	完形		3	
						破片			1	
					テンツキ近似種	果実	完形		81	一部白色化
					ヒデリコ近似種	果実	完形		41	
					カヤツリグサ科	果実	完形		3	
タデ属	果実	完形		6						
1089-13	1	268溝	下層シルト	8世紀頃	オモダカ科	種子	完形		1	
					ミズアオイ属	種子	完形		1	
					イネ	胚乳	完形	炭化	1	
					コシンジュガヤ近似種	果実	完形		1	
					ホタルイ属	果実	完形		1	
							破片		1	
					テンツキ近似種	果実	完形		205	約0.2cc
							破片		21	
					ヒデリコ近似種	果実	完形		664	約0.05cc
							破片		31	
					カヤツリグサ科	果実	完形		53	2種確認
					カヤツリグサ科 (ヒデリコ近似種主体)	果実	粒径0.5-1.0mm		約0.1cc	他カヤツリグサ科2種含む
							粒径0.25-0.5mm		約0.5cc	
					タデ属	果実	完形		2	
					ナデシコ科	種子	完形		1	
					ナス科	種子	破片	炭化	1	
					ノコギリソウ属	果実	完形		2	
キク科	果実	完形		1						
1088-1	1	268溝	上層・炭部内	8世紀頃	イネ	穎・胚乳	破片	炭化	1	
					炭化材			炭化	+	
					不明炭化物			炭化	+	
1088-2	1	268溝	上層・炭部内	8世紀頃	炭化材		炭化	+		
1088-3	1	268溝	上層・炭部内	8世紀頃						種実・炭化材なし

注)種実以外は、プラス表示にとどめる。

表 10 各遺構における種実遺体の産状

地区・遺構	層名	分類群	部位	出土量	備考		
第1地区 265井戸		栽培種	ヒョウタン類	果実	4個		
				種子	46個		
第6地区 61土坑	焼土内	栽培種	イネ	穎	8個		
				胚乳	554個	93個穎付着	
			イネ?	胚乳	2個		
			オオムギ	穎	1個		
				胚乳	139個	50個穎付着	
			コムギ	胚乳	42個		
			ムギ類	胚乳	84個		
			マメ類	種子	11個		
		マメ類?	種子	1個			
		その他	イネ科	果実	1個		
	胚乳		2個				
	ナデシコ科	種子	1個				
第1地区 土器集中部	第5面	栽培種	イネ	胚乳	14個		
			コムギ	胚乳	4個		
			マメ類	種子	6個		
		その他	ナシ属	種子	4個		
			エゴノキ属	種子	1個		
第1地区 268溝	下層シルト	栽培種	イネ	穎	1個		
				胚乳	107個	6個穎付着	
			オオムギ	胚乳	2個		
			コムギ	胚乳	4個		
			ムギ類	胚乳	3個		
			ヒエ近似種	胚乳	3個		
			マメ類	種子	6個		
			メロン類	種子	1個		
			ナス近似種	種子	36個		
			ナス科	種子	2個		
			その他	ナシ属	果実	1個	
				オモダカ科	種子	1個	
				ミズアオイ属	種子	1個	
		イネ科		果実	1個		
				胚乳	3個		
		コシンジユガヤ近似種		果実	3個		
		ホタルイ属		果実	6個		
		テンツキ近似種		果実	329個		
		ヒデリコ近似種		果実	746個	0.05cc	
		ヒデリコ近似種主体		果実	0.6cc		
		カヤツリグサ科		果実	56個		
		タデ属		果実	10個		
		ナデシコ科		種子	1個		
		エノキグサ		種子	1個		
		シソ科		果実	1個		
		ノコギリソウ属		果実	2個		
		キク科	果実	1個			
		上層・炭部内	栽培種	イネ	胚乳	1個	穎付着

・第1地区第5面土器集中部（登録番号1087）

栽培種のイネの胚乳14個、コムギの胚乳4個、マメ類の種子6個と、広葉樹のナシ属の種子4個、エゴノキ属の種子1個、計29個が検出された。エゴノキ属以外炭化している。

・268溝 下層シルト（登録番号1089）

栽培種は、イネの穎1個、胚乳107個（6個穎付着）、オオムギの胚乳2個、コムギの胚乳4個、ムギ類の胚乳3個、ヒエ近似種の胚乳3個、マメ類の種子6個、メロン類の種子1個、ナス近似種の種子36

個、ナス科の種子2個、計165個が検出された。全て炭化している。

その他は、広葉樹のナシ属の果実1個、草本のオモダカ科の種子1個、ミズアオイ属の種子1個、イネ科の果実1個、胚乳3個、コシンジュガヤ近似種の果実3個、ホタルイ属の果実6個、テンツキ近似種の果実329個、ヒデリコ近似種の果実746個(0.05cc)、ヒデリコ近似種主体の果実0.6cc、カヤツリグサ科の果実56個、タデ属の果実10個、ナデシコ科の種子1個、エノキグサの種子1個、シソ科の果実1個、ノコギリソウ属の果実2個、キク科の果実1個、計1163個+0.6ccが検出された。ナシ属、イネ科は炭化している。

・第1地区268溝 上層・炭部内(登録番号1088)

炭化した栽培種のイネの胚乳1個(穎付着)が検出された。

## (2) 種実遺体の記載

### <木本>

・ナシ属(*Pyrus*) バラ科

果実と種子が検出された。炭化しており黒色。破片は大きさ1.7cm程度。頂部、基部、果皮を欠損するが、中軸から端までの長さが最長で8mm確認されるため、完形個体は径1.6cm以上の偏球体と推定される。横断面は5心室と、1室に約1つの種子が入る状態、内果皮に囲まれた空隙が確認される。果肉は発泡しており、ナシ属特有の石細胞の有無は不明。種子は長さ6mm、幅3.5mm、厚さ1.5mm程度の薄い非対称広倒卵体。基部は斜切形で臍点が尖る。背面は丸みがあり、腹面は平ら。縁に低い稜がある。種皮表面は粗面。

・エゴノキ属(*Styrax*) エゴノキ科

種子の破片が検出された。灰黒褐色、完形ならば長さ0.8—1cm、径0.6cm程度の卵体で頂部から基部にかけて3本程度の縦溝と縦隆条が、基部に斜切形の臍がある。破片は大きさ4.2mm程度。種皮は硬く断面は柵状。表面には粒状網目模様がある。

### <草本>

・オモダカ科(*Alismataceae*)

種子が検出された。淡褐色、長さ1.2mm、幅0.7mm程度の倒U字状に曲がった円柱状で扁平。種皮は薄く膜状で柔らかい。表面には縦長の微細な網目模様が配列する。

・ミズアオイ属(*Monochoria*) ミズアオイ科

種子が検出された。淡灰褐色、長さ1.0mm、径0.5mm程度の楕円体。種皮は薄く透き通り、柔らかい。表面は状態が悪く不明瞭だが、10本程度の太い縦隆条と、その間に細い横隆条が密に配列する。

日本に分布するミズアオイ属は、ミズアオイ(*M. korsakowii* Regel et Maack)とコナギ(*M. vaginalis* (Burm.fil.) Presl var. *plantaginea* (Roxb.) Solms-Laub.)の2種があるが、実体顕微鏡下観察による区別は困難である。

・イネ(*Oryza sativa* L.) イネ科イネ属

胚乳と穎の破片が検出された。炭化しており黒色、一部の穎は灰化し白色を呈す。長楕円形でやや扁平。胚乳は長さ4—5.5mm、幅2.5—3.5mm、厚さ1.5mm程度。基部一端に胚が脱落した斜切形の凹部がある。表面はやや平滑で、2—3本の隆条が縦列する。表面に穎が付着する個体も確認される。

胚乳を包む穎(果)は、完形ならば長さ6—7.5mm、幅3—4mm、厚さ2mm程度。基部に斜切状円柱形の果実序柄と1対の護穎を有し、その上に外穎(護穎と言う場合もある)と内穎がある。外穎は5

脈、内穎は3脈をもち、ともに舟形を呈し、縫合してやや偏平な長楕円形の稲朶を構成する。破片は主に基部の果実序柄が確認される個体を抽出し、大きさ1—2mm程度。果皮は柔らかく、表面には顆粒状突起が縦列する。

・オオムギ (*Hordeum vulgare* L.) イネ科オオムギ属

胚乳と穎が検出された。炭化しており黒色、長さ5—7.5mm、径2—3mm程度のやや偏平な紡錘状長楕円体。両端は尖る。腹面は正中線上にやや太く深い縦溝があり、背面は基部正中線上に胚の痕跡があり丸く窪む。表面はやや平滑で、微細な縦筋がある。表面に穎が付着する個体も確認される。

・コムギ (*Triticum aestivum* L.) イネ科コムギ属

胚乳が検出された。炭化しており黒色、長さ2.5—3.8mm、径2.0—3.0mm程度の楕円体。腹面は正中線上にやや太く深い縦溝があり、背面は基部正中線上に胚の痕跡があり丸く窪む。表面はやや平滑。なお、頂部を欠損するなど遺存状態が悪く、オオムギとの判別が難しい個体をムギ類としている。

・ヒエ近似種 (*Echinochloa cf. utilis* Ohwi et Yabuno) イネ科ヒエ属

胚乳が検出された。炭化しており黒色、長さ2mm、幅1.5mm、厚さ1mm程度の半狭卵体で、背面は丸みがあり腹面はやや平ら。基部正中線上に、胚乳の長さの2/3以上を占める縦長で馬蹄形の胚の凹みがある。胚乳表面は粗面。

・イネ科 (Gramineae)

果実と胚乳が確認された。炭化しており黒色。果実は長さ2—2.5mm、径1.6—1.2mm程度。果皮表面は微細な網目模様がある。登録番号1086 (61土坑 焼土内) で確認された果実は、果皮表面が平滑で光沢があり、微細な縦長の網目模様が縦列している。ヒエ近似種の可能性がある。胚乳は径1—1.5mm程度の広卵—楕円体で背面は丸みがあり腹面は平ら。基部正中線上に胚の凹みがある。表面はやや平滑。

・コシンジュガヤ近似種 (*Scleria cf. parvula* Steud.) カヤツリグサ科シンジュガヤ属

果実が検出された。淡褐白色、長さ2.3mm、径1.8mm程度の広卵—楕円体。頂部は尖り、短い花柱基部が残る。基部は切形で基盤がある。基盤は3個の卵状三角形の裂片をつけ、裂片の先端は急に、鋭頭—鈍頭。破片は大きさ2mm程度で、基盤の裂片が残存する個体もみられる。果皮は核状で堅く、長楕円形の凹みによる格子状網目模様が縦列する。

・ヒデリコ近似種 (*Fimbristylis cf. miliacea* (L.) Vahl) テンツキ属

果実が多量検出された。淡-黒褐色、長さ0.6mm、径0.3mm程度の3稜状狭倒卵体。頂部は尖り、基部は切形。果皮表面は浅い横長の網目模様が縦列し、小突起が散在する。

・テンツキ近似種 (*Fimbristylis cf. dichotoma* (L.) Vahl) カヤツリグサ科テンツキ属

果実が検出された。淡-黒褐色、径1.0mm、厚さ0.5mm程度のやや偏平な広倒卵体で側面は両凸レンズ状。頂部は尖り、基部は切形。左右の縁は稜をなし、果皮表面には隆起する格子状の網目模様が配列する。

・ホタルイ属 (*Scirpus*) カヤツリグサ科

果実が検出された。黒褐色、径1.7mm程度の片凸レンズ状広倒卵体。頂部は尖り、基部は切形で刺針状の花被片を欠損する。背面正中線上は鈍稜。果皮表面は光沢があり、不規則な波状横皺状模様が発達する。

・カヤツリグサ科 (Cyperaceae)

果実が確認された。炭化しており黒色。形態が異なる複数種のうち、特徴的な2分類群をA, Bとし



ている。

- その他のカヤツリグサ科0.70.4 –10.5

果実は、長さ1.5mm、径1.2mm程度のレンズ状広倒卵体、頂部の柱頭部分はやや伸び、基部は切形。果皮表面は粗面-微細な網目模様がある。

- タデ属 (*Polygonum*) タデ科

果実が検出された。黒色、径1.7mm程度のやや偏平な広卵体。頂部はやや尖り、花柱を欠損する。果皮表面は粗面。

- ナデシコ科 (Caryophyllaceae)

種子が検出された。灰褐色、炭化個体は黒色。径0.8mm程度のやや偏平な腎状円形。基部は凹み、臍がある。種皮は薄く表面には瘤-針状突起が臍から同心円状に配列する。

- マメ類 (Leguminosae) マメ科

種子が検出された。炭化しており黒色、長楕円体。形態の異なる複数種を含む。長さ6.2mm、幅4mm、厚さ2.5mm程度の大型個体と、長さ2.7–4mm、径1.8–2.5mm程度の小型個体が確認された。登録番号1086仮番号4には、腹面の子葉合わせ目上に長さ4mm、幅1.5mm程度の細長い長楕円形の臍がある個体がみられる。登録番号1086仮番号5の子葉内面には、北大基準(吉崎, 1992)の「アズキグループ(幼根が臍の終わり程から急に立ち上がり、胚珠中央に向けて伸びる)」に該当する幼根や初生葉の状態が確認される。種皮表面はやや平滑で、焼け膨れ、表面が崩れているものもある。

- エノキグサ (*Acalypha australis* L.) トウダイグサ科エノキグサ属

種子が検出された。黒色、長さ1.7mm、径1.3mm程度の倒卵体。基部はやや尖り、Y字状の稜がある。種皮は薄く硬く、表面には細粒状凹点が密布する。

- ヒョウタン類 (*Lagenaria siceraria* Standl.) ウリ科ヒョウタン属

果実と種子が検出された。果実は1/2個体以上の完形1個、1/2個体未満の破片3個が確認され、接合し1個体となる。黄灰褐色、長さ6.4cm、径8.7cm程度の偏球体。果皮は厚さ4.5mm程度で断面は柵状、表面は平滑、内面は淡灰褐色で海綿状。頂部はわずかに尖り、果梗痕がある。基部は切形で、中央に径1cm程度の花おち痕がある。種子は、灰褐色、長さ1.5cm、幅7.5mm、厚さ1.5mm程度の偏平な倒皮針体。頂部は切形で角張り、基部は切形で臍と発芽口がある。種皮表面は粗面で、両面外縁部の幅広く低い稜に2本の縫線がある。

- メロン類 (*Cucumis melo* L.) ウリ科キュウリ属

種子が検出された。炭化しており黒色、長さ6.0mm、幅3.0mm、厚さ1.0mm程度の偏平な狭倒皮針形で頂部を欠損する。基部に倒ハの字形の凹みがある。種皮表面はやや平滑で、縦長の細胞が密に配列する。

- ナス近似種 (*Solanum cf. melongena* L.) ナス科ナス属

種子が検出された。炭化しており黒色、径2.5mm程度の偏平で歪な腎臓形。種子の基部はやや肥厚し、くびれた部分に臍がある。種皮表面には微細な星形状網目模様が臍から同心円状に発達する。なお、全体の大きさが不明の破片をナス科 (*Solanaceae*) としている。

- シソ科 (Labiatae)

果実が検出された。灰褐色、長さ1.7mm、径1.5mm程度の広倒卵体。基部は舌状に突出し、径0.2mm程度の大きな臍点がある。背面は丸みがあり、腹面の正中線は鈍稜をなす。果皮表面は粗面。

- ノコギリソウ属 (*Achillea*) キク科

果実が検出された。灰褐色、長さ1.7mm、幅1.0mm、厚さ0.5mm程度のやや扁平な広倒皮針体。頂部は切形で円形の臍がある。左右の縁に淡褐色の狭翼がある。果皮表面は粗面。

・キク科 (Compositae)

果実が検出された。淡褐色、長さ1.2mm、径0.4mm程度の線状長楕円体。頂部は切形で円形の臍があり、長さ1.2mm程度の冠毛が伸びる。果皮表面には毛が密生し、微細な網目模様と縦隆条がある。

#### 4. 考察

古墳時代後期とされている第1地区265井戸からは、栽培種のヒョウタン類の果実と種子が産出した。当時の本遺跡周辺域における食用や容器などの利用、生活残渣の廃棄や祭祀等への利用などが推定される。

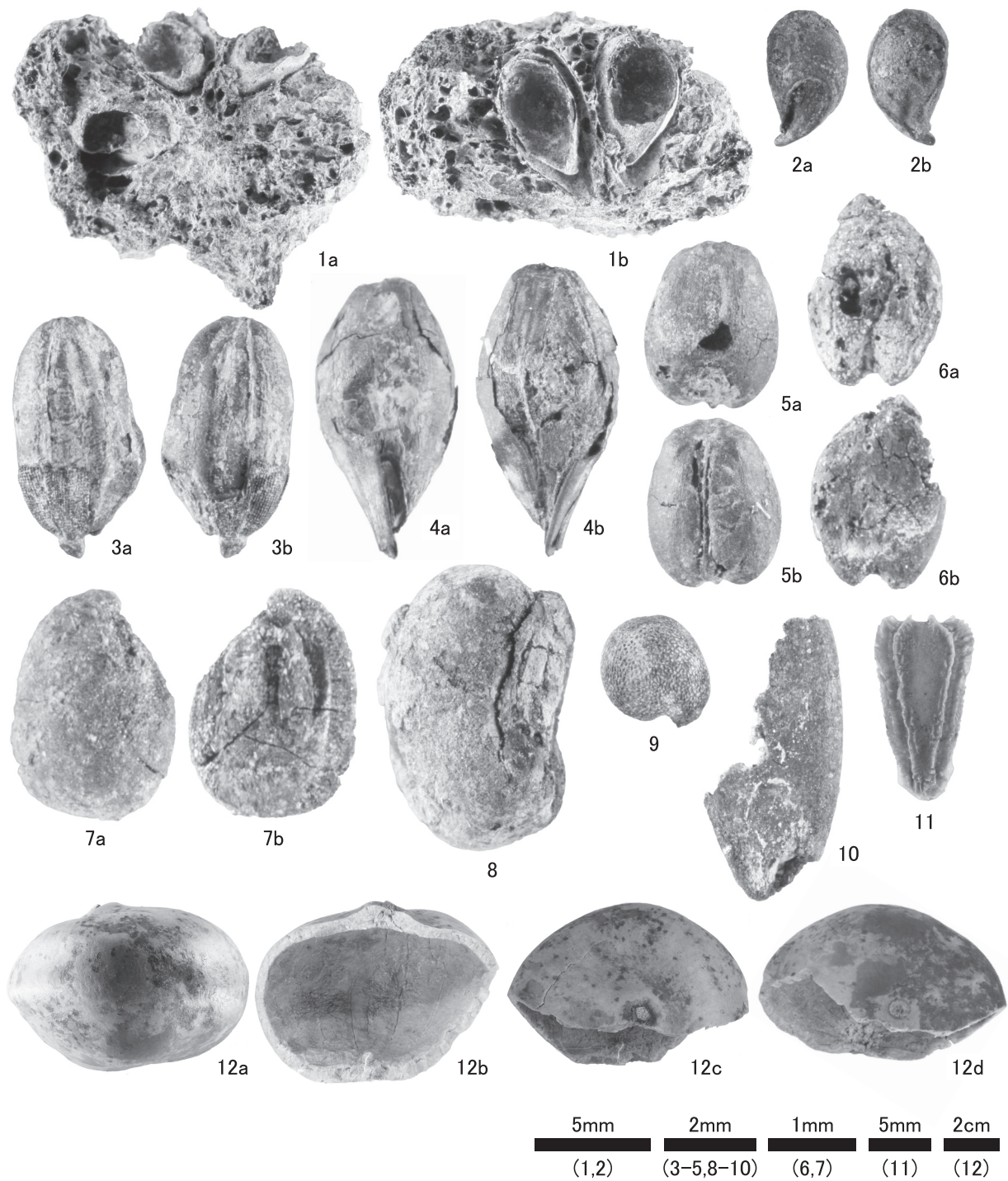
9～10世紀頃とされている第1地区第5面土器集中部や8世紀頃とされている第1地区268溝の下層シルトと上層・炭部内、10～11世紀頃とされている第6地区61土坑 焼土内から産出した種実遺体は、炭化した栽培種が多く確認された。炭化した材片やイネの穎を含む灰状物質なども産出することを合わせ考えると、生活残渣や燃料材として利用されたものの残渣であることが示唆される。

各遺構の産出分類群の構成をみると、第1地区第5面土器集中部は、炭化した栽培種のイネ、コムギ、マメ類と、炭化した広葉樹のナシ属の種子、広葉樹のエゴノキ属が確認された。穀類のイネ、コムギやマメ類は、当時の利用が推定される。ナシ属は人間が利用していたものに由来する可能性がある。落葉広葉樹のエゴノキ属は、周辺に生育していたものに由来すると推定される。

第1地区268溝の下層シルトは、ヒデリコ近似種をはじめ、コシンジュガヤ近似種、ホタルイ属、テンツキ近似種などの湿地に生育する草本のカヤツリグサ科を主体とする。このほか、炭化した栽培種のイネ、オオムギ、コムギ、マメ類、メロン類と、炭化した栽培種の可能性があるヒエ近似種、ナス近似種、炭化した広葉樹のナシ属の果実、草本のオモダカ科、ミズアオイ属、炭化したイネ科の果実、胚乳、タデ属、ナデシコ科、エノキグサ、シソ科、ノコギリソウ属、キク科の種実が確認された。上層・炭部内は、炭化した栽培種のイネが確認された。

これらの分類群のうち、栽培種以外は、生態性を踏まえると、当時の調査区周辺の湿地に生育していたと考えられる種類であり、何らかの過程を経て遺構内に混入したものと推定される。また、穀類のイネ、オオムギ、コムギ、ヒエ近似種や、マメ類、果菜類のメロン類、ナス近似種は、当時の利用が示唆される。ナシ属は、炭化した果実が産出し、第5面土器集中部でも炭化した種子が産出している。ナシ属は、奈良県平城京左京二条二坊・三条二坊の長屋王邸・藤原麻呂邸を囲む溝から未熟果を含む果実が多量産出し、平城京内での栽培が指摘されている(南木, 1995)。また、岩手県御所野遺跡の平安時代の竪穴住居址から炭化した果実が産出し、採取・利用が指摘されている(辻ほか, 2004; 辻, 2008)。これらの事例を踏まえると、本遺跡で産出した果実や種子も、当時利用されていたものに由来する可能性がある。

第6地区61土坑 焼土内は、炭化した栽培種のイネを主体とする。この他、炭化した栽培種のオオムギ、コムギ、マメ類と、炭化した草本のイネ科の果実、胚乳、ナデシコ科の種子が確認された。これらの分類群のうち、イネ科やナデシコ科は、調査区周辺に生育していたものに由来すると推定される。穀類のイネ、オオムギ、コムギやマメ類は、当時の利用が示唆される。イネとオオムギには穎が付着した胚乳が確認されることから、精米前の状態で火を受けたことが推定される。マメ類は、形態が異なる種子が確認されることから、複数の系統が利用されていた可能性がある。



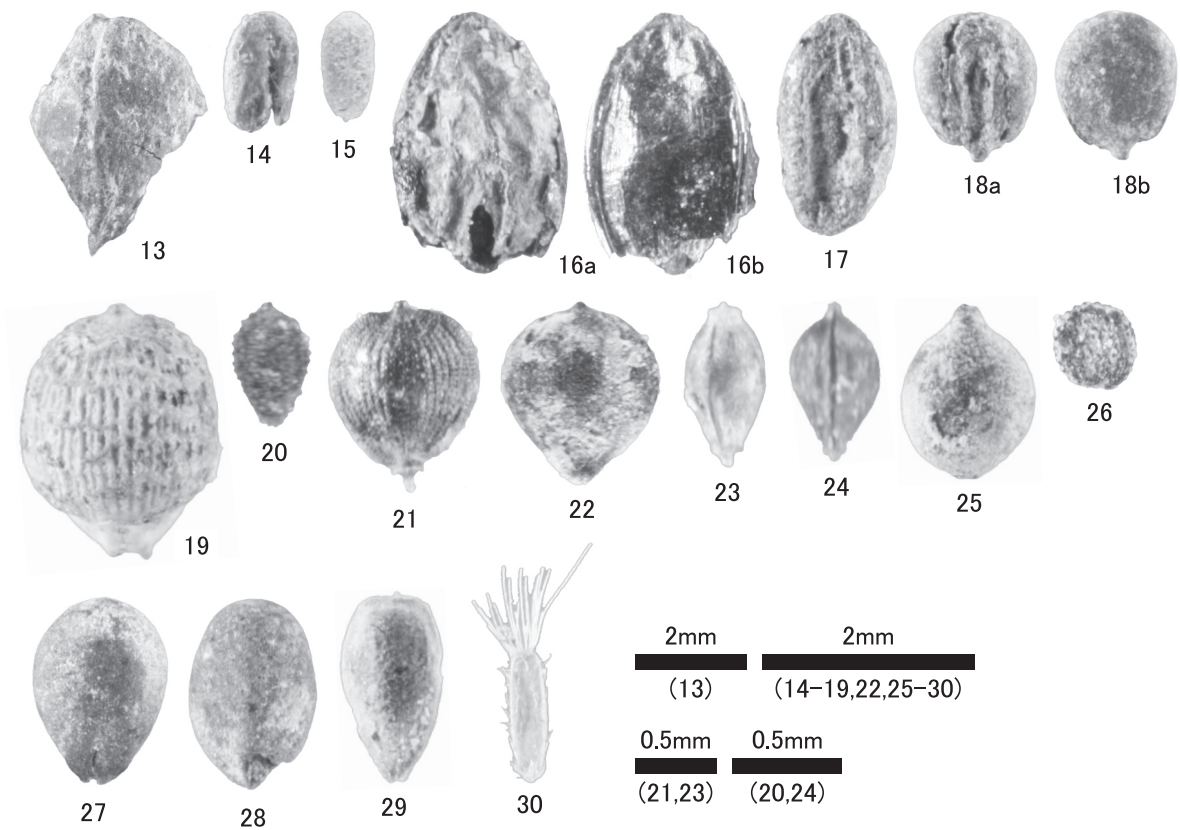
- 1. ナシ属 果実(268溝;下層シルト)
- 3. イネ 穎・胚乳(61土坑;焼土内)
- 5. コムギ 胚乳(61土坑;焼土内)
- 7. マメ類(アズキグループ) 種子(61土坑;焼土内)
- 9. ナス近似種 種子(268溝;下層シルト)
- 11. ヒヨウタン類 種子(265井戸)

- 2. ナシ属 種子(第5面土器集中部)
- 4. オオムギ 穎・胚乳(61土坑;焼土内)
- 6. ヒエ近似種 胚乳(268溝;下層シルト)
- 8. マメ類 種子(61土坑;焼土内)
- 10. メロン類 種子(268溝;下層シルト)
- 12. ヒヨウタン類 果実(265井戸)

※地区名は省略

写真8 種実遺体 (1)





- |                               |                              |
|-------------------------------|------------------------------|
| 13. エゴノキ属 種子(第5面土器集中部)        | 14. オモダカ科 種子(268溝;下層シルト)     |
| 15. ミズアオイ属 種子(268溝;下層シルト)     | 16. イネ科(ヒエ近似種?) 果実(61土坑;焼土内) |
| 17. イネ科 果実(268溝;下層シルト)        | 18. イネ科 胚乳(268溝;下層シルト)       |
| 19. コシンジュガヤ近似種 果実(268溝;下層シルト) | 20. ヒデリコ近似種 果実(268溝;下層シルト)   |
| 21. テンツキ近似種 果実(268溝;下層シルト)    | 22. ホタルイ属 果実(268溝;下層シルト)     |
| 23. カヤツリグサ科 果実(268溝;下層シルト)    | 24. カヤツリグサ科 果実(268溝;下層シルト)   |
| 25. タデ属 果実(268溝;下層シルト)        | 26. ナデシコ科 種子(268溝;下層シルト)     |
| 27. エノキグサ 種子(268溝;下層シルト)      | 28. シソ科 果実(268溝;下層シルト)       |
| 29. ノコギリソウ属 果実(268溝;下層シルト)    | 30. キク科 果実(268溝;下層シルト)       |
- ※地区名は省略

写真9 種実遺体 (2)

## 参考・引用文献

### 第1節 放射性炭素年代測定

- Bronk Ramsey, C. (1995) Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy: The OxCal Program. *Radiocarbon*, 37, 425-430.
- Bronk Ramsey, C. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal. *Radiocarbon*, 43, 355-363.
- 春成秀爾 (2004) 近畿・中国の実年代. 弥生時代の実年代, 学生社, 20-31.
- 小林謙一・春成秀爾 (2006) 近畿地方における年代測定の成果. 新弥生時代のはじまり第1巻 弥生時代の新年代, 雄山閣, 96-97.
- 小林謙一 (2008) 縄文時代の暦年代. 縄文時代の考古学2 歴史のものさし, 同成社, 257-269.
- 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の<sup>14</sup>C年代. 3-20.
- Reimer, P.J., Baillie, M.G.L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Bertrand, C.J.H., Blackwell, P.G., Buck, C.E., Burr, G.S., Cutler, K.B., Damon, P.E., Edwards, R.L., Fairbanks, R.G., Friedrich, M., Guilderson, T.P., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kromer, B., McCormac, G., Manning, S., Bronk Ramsey, C., Reimer, R.W., Remmele, S., Southon, J.R., Stuiver, M., Talamo, S., Taylor, F.W., van der Plicht, J. and Weyhenmeyer, C.E. (2004) IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26 cal kyr BP. *Radiocarbon*, 46, 1029-1058.

### 第2節 花粉・珪藻・植物珪酸体分析

- 安藤 一男, 1990, 淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用. 東北地理, 42, 73-88.
- 江口 誠一, 1994, 沿岸域における植物珪酸体の分布 千葉県小櫃川河口域を例にして. 植生誌研究, 2, 19-27.
- 江口 誠一, 1996, 沿岸域における植物珪酸体の風化と堆積物のpH値. ペトロジスト, 40, 81-84.
- Asai, K. & Watanabe, T., 1995, Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophilous and saproxenous taxa. *Diatom*, 10, 35-47.
- 原口 和夫・三友 清史・小林 弘, 1998, 埼玉の藻類 珪藻類. 埼玉県植物誌, 埼玉県教育委員会, 527-600.
- 古谷 正和, 1979, 大阪周辺地域におけるウルム氷期以降の森林植生変遷. 第四紀研究, 18, 121-141.
- Hustedt, F., 1937-1939, *Systematische und ökologische Untersuchungen über die Diatomeen-Flora von Java, Bali und Sumatra*. Archiv für Hydrobiologie, Supplement, 15:131-177, 15:187-295, 15:393-506, 15:638-790, 16: 1-155, 16:274-394.
- 堀内誠示・高橋 敦・橋本真紀夫, 1996, 珪藻化石群集による低地堆積物の古環境推定について. 一混合群集の認定と堆積環境の解釈一, 日本文化財科学会, 第13回大会研究発表要旨集, 62-63.
- 伊藤 良永・堀内 誠示, 1991, 陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用. 珪藻学会誌, 6, 23-45.
- 伊藤 良永, 2007, 珪藻分析の歩みと動向. PALYNO No. 5, パリノ・サーヴェイ株式会社出版刊行会, 61-66.
- 小杉 正人, 1988, 珪藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用. 第四紀研究, 27, 1-20.
- 小林 弘・出井 雅彦・真山 茂樹・南雲 保・長田 啓五, 2006, 小林弘珪藻図鑑. 第1巻, (株)内田老鶴圃, 531p.
- 近藤 鍊三, 1982, Plant opal 分析による黒色腐植層の成因究明に関する研究. 昭和56年度科学研究費(一般研究C)研究成果報告書, 32p.
- 近藤 鍊三, 2004, 植物ケイ酸体研究. ペトロジスト, 48, 46-64.
- 近藤鍊三・佐瀬 隆, 1986, 植物珪酸体分析, その特性と応用. 第四紀研究, 25, 31-64.

- Krammer, K., 1992, *PINNULARIA.eine Monographie der europäischen Taxa.BIBLIOTHECA DIATOMOLOGICA BAND26.* J.CRAMER, 353p.
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H., 1986, *Bacillariophyceae.1.Teil: Naviculaceae. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa. Band2/1. Gustav Fischer Verlag, 876p.*
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H., 1988, *Bacillariophyceae. 2 .Teil: Epithemiaceae, Bacillariaceae, Surirellaceae. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa.Band2/2. Gustav Fischer Verlag, 536p.*
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H., 1991a, *Bacillariophyceae. 3 .Teil: Centrales, Fragilariaceae, Eunotiaceae. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa.Band2/3. Gustav Fischer Verlag, 230p.*
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H., 1991b, *Bacillariophyceae. 4.Teil: Achnantheaceae, Kritische Ergaenzungen zu Navicula (Lineolatae) und Gomphonema. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa.Band2/4. Gustav Fischer Verlag, 248p.*
- Lowe, R.L, 1974, *Environmental Requirements and pollution Tolerance of Fresh-water Diatoms.* 334p. In Environmental Monitoring Ser.EPA Report 670/4-74-005. Nat. Environmental Res. Center Office of Res.Develop., U.S. Environ. Protect. Agency, Cincinnati.
- 前田 保夫, 1984, 花粉分析学的研究よりみた近畿地方の洪積(更新)世後期以降の植生変遷. 宮脇 昭(編著), 日本植生誌 近畿, 至文堂, 87-99.
- 三宅 尚・中越 信和, 1998, 森林土壌に堆積した花粉・胞子の保存状態. 植生史研究, 6, 15-30.
- 那須 孝悌, 1989, 活動の舞台: 概論. 永井 昌文・那須 孝悌・金 関恕・佐原 真(編著), 弥生文化の研究1 弥生人とその環境, 雄山閣出版, 119-130.
- 大阪文化財センター, 2007, 吹田操車場遺跡 C 3・C 4 トレンチ、C 5・C 6 トレンチの調査. 吹田操車場遺跡現地説明会資料 2, (財)大阪府文化財センター, 4 p.
- 中村 純, 1967, 花粉分析. 古今書院, 232p.
- 大阪文化財センター, 2008, 吹田操車場遺跡 B 5・C 9・導水路(東) トレンチの調査. 吹田操車場遺跡現地説明会資料 4, (財)大阪府文化財センター, 4 p.
- Round, F. E., Crawford, R. M. & Mann, D. G.1990, *The diatoms. Biology & morphology of the genera.* 747p. Cambridge University Press, Cambridge.
- 杉山 真二, 2000, 植物珪酸体(プラント・オパール). 辻 誠一郎(編著) 考古学と自然科学 3 考古学と植物学, 同成社, 189-213.
- 杉山 真二・藤原 宏志, 1986, 機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定—古環境推定の基礎資料として—. 考古学と自然科学, 19, 69-84.
- 徳永 重元・山内 輝子, 1971, 花粉・胞子. 化石の研究法, 共立出版株式会社, 50-73.
- Vos, P.C. & H. de Wolf, 1993, *Diatoms as a tool for reconstructing sedimentary environments in coastal wetlands; methodological aspects.*Hydrobiologica, 269/270, 285-296.
- 渡辺 仁治・浅井 一視・大塚 泰介・辻 彰洋・伯耆 晶子, 2005, 淡水珪藻生態図鑑. 内田老鶴圃, 666p.
- 柳沢 幸夫, 2000, II - 1 - 3 - 2 - (5) 計数・同定. 化石の研究法—採集から最新の解析法まで—, 化石研究会, 共立出版株式会社, 49-50.



### 第3節 花粉分析・珪藻分析

#### [花粉分析]

金原正明（1993）花粉分析法による古環境復原．新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法，角川書店，p.248-262.

島倉巳三郎（1973）日本植物の花粉形態．大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集，60p.

中村純（1967）花粉分析．古今書院，p.82-110.

中村純（1974）イネ科花粉について、とくにイネ（*Oryza sativa*）を中心として．第四紀研究，13，p.187-193.

中村純（1977）稲作とイネ花粉．考古学と自然科学，第10号，p.21-30.

中村純（1980）日本産花粉の標徴．大阪自然史博物館収蔵目録第13集，91p.

#### [珪藻分析]

Hustedt, F. (1937-1938) Systematische und ologische Untersuchungen über die Diatomeenflora von Java, Bali und Sumatra nach dem Material der Deutschen Limnologischen Sunda-Expedition. Arch.Hydrobiol, Suppl.15, p.131 - 506.

Lowe, R.L. (1974) Environmental Requirements and pollution tolerance of fresh-water diatoms. 333p., National Environmental Reserch.Center.

K. Krammer・H.Lange-Bertalot (1986-1991) Bacillariophyceae・1-4.

Asai, K.&, Watanabe, T. (1995) Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophilous and saproxenous taxa. Diatom, 10, p.35-47.

安藤一男（1990）淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復原への応用．東北地理，42，p. 73-88.

伊藤良永・堀内誠示（1991）陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用．珪藻学会誌，6，p.23-45.

小杉正人（1986）陸生珪藻による古環境解析とその意義—わが国への導入とその展望—．植生史研究，第1号，植生史研究会，p.29-44.

小杉正人（1988）珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用．第四紀研究，27，p. 1-20.

渡辺仁治（2005）淡水珪藻生態図鑑 群集解析に基づく汚濁指数 DAIPo, pH 耐性能．内田老鶴圃，pp.666.

### 第4節 種実同定

石川 茂雄，1994，原色日本植物種子写真図鑑．石川茂雄図鑑刊行委員会，328p.

南木 睦彦，1995，SD4750・5100・5300・5310 出土の大型植物遺体．平城京左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告書，長屋王邸・藤原麻呂邸の調査，奈良国立文化財研究所編，奈良県教育委員会 534-552.

中山 至大・井之口希秀・南谷 忠志，2000，日本植物種子図鑑．東北大学出版会，642p.

辻 圭子，2008，岩手県御所野遺跡から産出した平安時代のナシ属炭化果実．植生史研究第16巻第1号，25-27.

辻 誠一郎・辻 圭子・大松 しのぶ，2004，御所野遺跡出土の古代植物遺体群とその意義．御所野遺跡 I I 一戸町文化財調査報告書第48集，一戸町教育委員会，288-292.

谷城 勝弘，2007，カヤツリグサ科入門図鑑．全国農村教育協会，247p.

吉崎 昌一，1992，古代雑穀の検出．月刊考古学ジャーナル，No.355，2-14.

# 第V章 まとめ

## 第1節 遺構のまとめ

吹田操車場遺跡は昭和42年に発見されて以降、発掘調査が度々実施されてきた。過去の調査において直線状にのびる古墳時代前期の大溝、平安時代以降から連綿と続く耕作地跡、古墳時代後半から飛鳥・奈良時代にかけての群集土坑、飛鳥・奈良時代と平安時代の掘立柱建物等が検出されている。今回の調査にても、弥生時代以降の遺構を検出し、縄文時代以降の遺物が出土している。以下に、今回の発掘調査及び自然科学分析において、新たに判明した点をまとめておきたい。

第1地区では、最終面である第5-2層上位から縄文時代中～後期頃と思われる石鏃(218)が1点出土している。遺構が伴わず、当時の生活状態についての詳細は不明であるが、千里丘陵の縁辺部にあたる当地で、人々がすでに活動していたことを示唆するものとして興味深い。

第9地区の最終面において、16流路堆積内の炭化物を<sup>14</sup>C年代測定法にて分析したが、8700年前の縄文時代早期中葉という結果を得ることができた。また、流路内の植物化石の分析結果より、当時は低湿地であり、内湾の海域とつながる汽水域であったことも推定できた。

弥生時代の遺構や遺物は、中期後半を中心とした土坑群を第8地区において検出している。土坑の性格は定かではないが、中には全体を復元できる壺(431)が出土した116土坑もある。

この他に弥生時代中期の遺物が第1地区、第7地区の遺物包含層からも出土している。過去の調査においても、吹田市教育委員会によって弥生時代中期の遺物出土の報告<sup>注1)</sup>があり、当地にはまだ未発見の集落跡等が存在すると思われる。

古墳時代の遺構としては、第7地区にて約15mの間隔でほぼ並行して走る14溝、66溝を検出した。出土した杯身・蓋等(391~398)から6世紀初頭前後の遺構と考える。遺物は出土していないが、これらと同一の埋土を持つ溝として、第7地区47~50溝、第8地区37溝、69溝がある。これらの溝は、並行しながら直線的に走り、溝の規模も酷似している。周辺に同時期の遺構がほとんどみられないため、詳細は不明であるが、当時の土地開発の様相を窺うことができたことは興味深い。

古墳時代後期頃の明確な遺構は少ないが、第1地区では265井戸を検出している。須恵器甕(209)・杯身(210)と共に栽培種の瓢箪の種実が出土している。また、当井戸から出土した植物化石を分析した結果、井戸が日当たりの悪い場所に位置していたことや、周辺部にてササゲ属、シソ科等が生育していたであろうことが推定され、当時の畝作行為が看取できた。

他に、古墳時代の遺構の可能性のあるものに、第6地区から第7地区にまたがる上向きの「コ」の字状の断面を持つ2溝があげられる。ほぼ一直線にのびる溝は、検出長150mを測り、幅約1.0m、深さ約0.5mと、上述の各溝とは明らかに様相が異なる。須恵器と土師器のわずかな細片以外遺物の出土はほとんどなく、帰属時期の決定は難しいが、埋土は土壌化が強く黒色の粘土質であることや、平安時代(10~11世紀)の各遺構に切られていることから、古代以前の遺構であることは間違いない。

当溝は長大なことも特徴的であるが、上述の平安時代の遺構とは、方向が明らかに異なる。平安時代の遺構は主にN-35°-W前後の方向をとり、当地の条里型地割(N-33°-W)にほぼ沿うが、この溝はN-45°-Eに走り、当地の地形の起伏に左右されずに走っている。他に、ほぼ同様の方向で東西に

長く走る溝として、平成11年度の調査において、A地区溝A-19が検出されている。第4地区の調査で検出した87・88溝及び第5地区の5溝も同様の性格を有するかもしれない。

2溝の植物化石を分析した結果、通常は乾燥し、短期間にて人為的に流れるような溝であった可能性が指摘されており、季節性の高い灌漑行為に用いられていたことを示唆している。

また、当遺構の埋土に対し<sup>14</sup>C年代測定を行ったが、弥生時代前期から中期の結果がでている。黒色土であったので、炭化物を当然多く含むものとして試料としたが、実際は炭素の量が少なく、混入物に影響された可能性も考えられる。なお、平成11年度の溝A-19は古墳時代前期に帰属する遺構として報告されている。

現状では、これらの成果を総合的に勘案し、弥生時代以降、古代以前のいずれかにおける計画的な水利、灌漑事業に係る遺構とするのが妥当であろう。

次に、古代の様相であるが、多くの箇所にて当該期の遺構を検出している。以下に各地区での調査成果を集約し、若干の今後の課題を述べておく。

第1地区では7世紀から9世紀の遺物が主に見られる。10世紀を中心とする遺構、遺物が多い今回の調査の中では、比較的古い時期であることが特徴的といえる。

また、後期難波宮で使用された七尾瓦窯と同型式6303型式の軒丸瓦、同窯産と考えられる格子叩きのある平瓦、吉志部窯産の軒丸瓦、平瓦等も出土している。

古代の遺構面は調査区の北側を中心に第5面、第5-2面（第5-2面は古代以前の遺構を含む）の2面を検出した。柵列や溝、土坑、多数のピット等を検出した。第5面では北部東側で同面直上に人為的な盛土（整地土）を検出し、主に平安時代初頭の遺物が多数包含されていることが判った。

北部西側では蒲鉾形の321土手状遺構を検出した。その周辺部には遺構が集中し、炭化物の広がりをみた。250土坑と321土手状遺構は「L」の字状を呈する位置関係であり、312~316・319等の土坑を方形状にとり囲む形となる。また、この周辺には焼土・炭化物の広がりがみられた。

第5-2面では焼土、炭化物を多量に含む268溝を、上述の第5面の炭の広がりを除去して検出した。過大な評価は慎まねばならないが、これらの遺構群は、有機的な関連のある一連の遺構群とも考えられ、何かの製作工房に類する施設跡の可能性を提示しておきたい。

当調査区の南部域にも、これらの時期に相当すると考えられる遺構面を、第3面及びその下位面として検出している。ただし遺構から出土する遺物は少なく、明確な時期を確定するには至らなかった。

しかし、先述の6世紀後半頃の265井戸の存在や、包含層からの少なからぬ古墳時代後期の遺物の出土は、当地が古代の古い段階から日常の生活域として使用されていた可能性を示すと考える。

第2地区では10世紀を中心とした集落を確認した。南西部の微高地上では掘立柱建物3棟、柵列4列を検出した。残念なことに、近世初頭に築かれたと思われる15池により北側の大半は削平を受けたと考えられる。調査区の北東部は水田域であったと思われる。

当地区では12世紀初頭に帰属する350井戸のような遺構も存在する。第1地区162溝からも、初期の瓦器片が出土している。これらから第1地区及び第2地区の集落が長く続いた可能性がある。ただし、当地では包含層出土の遺物を含めても11世紀後半以降の遺物は非常に少なく、集落が存続したとしても縮小傾向にあったものと思われる。

第4地区も、10世紀前後に集落が営まれたと考えられる。調査区が狭いこともあり、2列の並行する柵列しか検出していないが、他にもピットは多数存在し、周辺に掘立柱建物があった可能性が高い。





しかし古墳時代後期の井戸や、当井戸内試料による花粉分析から、当時の畠作の可能性を得たことや、7～8世紀の包含層からの遺物の少なからざる出土は、集落の初現を当該期に遡らせる可能性をも示唆する。また、同地区及び隣接する第2地区では11～12世紀の遺構をみることが出来る。狭い範囲においても、集落の移動や分化がみられるようである。6地区や7・8地区のような11世紀前半にてほぼ終焉を迎える集落との違いは、今後の課題であろう。

古代の生活域は第1地区、第2地区や第6地区から第8地区に見られるように、旧の自然地形を利用し、主に微高地上は居住地として、低地部は耕作地として使用していたようである。

これら古代以前の遺構面（第5面）を広範囲に覆う土壌化層に関して、植物化石を抽出し分析を試みた。その結果、植生の基本は草地であり、常緑広葉樹林や温帯針葉樹林の存在していたことが判った。また、これらの土壌は氾濫原の堆積環境にて形成されたことも判った。第2地区と第8地区という1km近く離れた箇所での試料採取であったが、植生及び土壌形成において同様の傾向を得られたことから、同一の環境に当時の集落が形成されたことが判明した。

古代の集落が廃絶した後、平安時代の終わり頃から中世の初め頃には耕地の開発が進んだ。低地部は埋められ、微高地部は削られて平坦化し、広範囲に水田や畠が拡大した。中世前半に至ると、当地の多くが耕作地もしくは湿地化していたようである。

ただし、部分的に集落域として残る地区もあったようで、第4地区では第4面にて中世前半の井戸や浅いピットを数基検出し、近隣の21年度調査の第3地区においても、掘立柱建物を含む多数のピットや土坑を検出した。当地で検出した掘立柱建物は、柱跡が大形であった。ピットの数の多さから、建物が頻繁に建て替えられたようである。当地区では出土する遺物も多量であり、調査範囲が狭く断定はできないが、集落の中でも中心部に近い可能性が考えられる。

中世後半以降になると、耕地化がますます進み、一帯はほとんど耕作域となったようである。第2地区にみられる15池や井戸も耕作に関係する遺構である。

第8地区の黒色土上層（中世）では、土壌に含有する植物化石を分析した結果、稲作が行われていたことが明らかとなった。

その後、近代初頭まで長く耕作地として利用されていたが、明治時代には東海道本線が敷かれ、大正時代に入ると巨大な吹田操車場として大きく変貌することとなった。

注1) 吹田市都市整備部・吹田市教育委員会 2004年 『吹田操車場遺跡—市営岸部中住宅建替工事に伴う発掘調査報告書—』

注2) 前田洋子1983年「大阪上町台地検出の屋瓦資料」『摂河泉文化資料 第31号』

近畿大学 大脇潔先生から当軒丸瓦が近江地方に南滋賀廃寺他、類似例が多いこと、連弁の先端部の折り返しに新羅の瓦の影響が考えられること等をご教示いただいた。

## 第2節 出土遺物のまとめ

今回の調査において縄文時代以降の様々な遺物が出土した。その中でも特徴的なものを以下に述べる。古くは縄文時代中～後期頃と考えられる凹基式石鏃が1点、第1地区の包含層より出土した。

弥生時代では弥生時代中期後半の土器が第8地区54・116土坑より、石庖丁が第7地区第2層より出土した。これまでは吹田市教育委員会が平成14年度に調査した地区で、谷状地形に堆積した層などから弥生土器が出土した例があるが、土坑からの出土は今回が初めてである。このことにより、吹田操車場遺跡の南西部分において弥生時代の遺構及び遺物の存在が明らかとなった。

古墳時代以降の遺物として須恵器では、地元産と思われるもの以外に播磨や篠窯のものが含まれていた。

瓦類では七尾瓦窯、吉志部瓦窯で焼かれたと推定される軒丸瓦等が出土している。その中でも吉志部瓦窯産と思われる軒丸瓦に範傷がみられた。製作痕跡では、平瓦および丸瓦に模骨痕と思われる幅約3cm前後の板状の窪みが凹面に認められた。

瓦以外の特筆すべき遺物では、陶棺、古代の製塩土器、越州窯系青磁碗、硯に転用された須恵器蓋、灰釉陶器や緑釉陶器、白磁の合子などが挙げられる。

陶棺は中世のピットから出土したもので、四注式陶棺の蓋破片である。陶棺は千里須恵器窯址群や、以前の吹田操車場跡遺跡の調査などからも出土しており、当地域の性格を示す特徴的な遺物として存在する。吹田操車場跡遺跡内における陶棺の出土地点の分布状況をみると、遺跡の中央よりやや南西寄りに偏っている。

製塩土器は内外面を指押さえやナデ、ないしは外面または内面にハケ調整を施したものである。既往の調査も含めると、製塩土器の出土分布状況は吹田操車場遺跡でも凡そ中央部にまとまった形で分布する。

越州窯系青磁碗は第1地区第4層から出土している。ほぼ2分の1個体が残存する。当遺跡での越州窯系青磁は今回の調査で初めて出土した。

須恵器杯蓋を転用した硯は第1地区268溝から出土したが、既往の調査ではA地区より灰釉陶器碗を転用した硯が出土している。他に、吹田市教育委員会の平成20年度調査においても飛鳥時代の円面硯が同一個体で出土している例があげられる。

灰釉陶器、緑釉陶器の破片はその殆どが遺物包含層からの出土である。灰釉陶器、緑釉陶器は特に第1地区と第8地区での出土が目につき、出土傾向に偏りがみられる。灰釉陶器は京都産よりも東海地方を産地とするものが比較的多い。また、白色土器が第1地区の包含層から1点出土している。

第1地区第5面の土器集中部より出土の平安時代の土師器では杯内面にハケ目の残るものが幾つか認められた。土師器杯の外面調整ではヘラ削りによるものは少なく、指押さえにより表面を整えているものが多い。

輸入陶磁器では特徴的なものとして白磁の合子があげられる。これは内に3つの小皿が入った形態のもので、その中の小皿が一つだけ残存する。約200m南西に位置する試掘の12トレンチからも合子は出土しており、互いの出土地点に近いことから、宗教施設のような特殊な遺構が近くに存在した可能性が考えられる。

中世の日常雑器である瓦器碗では、和泉型、楠葉型がみられ、図化したものの中では楠葉型のものが



若干多く、大和型の可能性があると思われる瓦器碗は1点だけである。

その他の遺物として、鞆羽口が第6地区22土坑より出土しており、焼土塊や被熱した土器もみられることから、平安時代の終り頃にこの周辺で鍛冶か何かが行われた可能性が考えられる。また、試掘調査の15トレンチでは焼土塊と鞆の羽口、平成21年度調査の第3地区からは焼土塊が出土しており、両者の地点は約50m位の近くにあり、いずれも中世土器が共伴している。これらの地点は当遺跡の中で南西側に偏っている。

平成21年度調査の第3地区からは建物柱穴から柱根がいくつか出土している。柱材には断面形が円形のものと同角形（八角形状）のものがみられた。柱の根元の形状が断面円形状のものは杭状に削られているのに対し、多角形の場合は平坦に鋸で切断されたような痕跡を有す。柱根の直径は10cm前後である。柱穴出土の共伴する遺物から、13世紀後半～14世紀の時期であろうと思われる。

自然科学分析において種実について分析したところ、古墳時代の第1地区265井戸や平安時代の第6地区61土坑、平安時代の第1地区第5面土器集中部から栽培種の種実が確認された。これらのことから、古墳時代の建物遺構は検出されていないが、近くに人が住んで植物を栽培していたことは明らかであり、平安時代に至っては建物遺構の検出や日常雑器の出土とともに、生産域が近くに存在したことを裏付ける要素が示されたと考えられる。

以上のことから、吹田操車場遺跡では縄文時代の石鏃1点だけの出土とはいえ、縄文時代から連綿と人々が生活してきた痕跡が明らかとなった。そして、越州窯系青磁碗や灰釉・緑釉陶器、白磁合子など他地域からの搬入品が比較的多くみられる傾向からは、物資の流通が夥しいことが窺われた。これらは当遺跡が淀川や山陽道に近い地理的な立地条件も影響していると思われる。

表 12 遺物一覧表 (1)

遺物 番号	挿図 番号	図版 番号	年度	地区	遺構面	遺構 番号	遺構種類	層名	遺物種類	備考
1	105	32	19・20	1				第2～3層	須恵器椀	
2	105	32	19・20	1				第2～3層	灰釉陶器椀	
3	105	32	19・20	1				第2～3層	灰釉陶器椀	
4	105	32	19・20	1				第2～3層	緑釉陶器椀	
5	105	32	19・20	1				第2～3層	黒色土器A類椀	
6	105	32	19・20	1				第2～3層	白磁碗	
7	105	32	19・20	1				第2～3層	白磁碗	
8	105	32	19・20	1				第2～3層	青磁碗	
9	105	32	19・20	1				第2～3層	白磁碗	
10	105	32	19・20	1				第2～3層	白磁碗	
11	105	32	19・20	1				第2～3層	須恵器有蓋土器	
12	105		19・20	1				第2～3層	土師質羽釜	
13	105		19・20	1				第2～3層	瓦質火舎	
14	105	32	19・20	1				第2～3層	平瓦	
15	105	32	19・20	1				第2～3層	砥石	
16	105		19・20	1				第3層	須恵器杯	
17	105		19・20	1				第3層	土師器杯	
18	105		19・20	1				第3層	須恵器壺	
19	105	32	19・20	1	第3面				「天聖元寶」銭	北宋銭
20	105		19・20	1	第3面	70	土坑		土師器杯	
21	105		19・20	1	第3面	39	ピット		土師器皿	
22	105	32	19・20	1	第3面	44	土坑		緑釉陶器椀	
23	105	32	19・20	1	第3面	61	土坑		複弁蓮華文軒丸瓦	
24	106		19・20	1				第4層	土師器皿	
25	106		19・20	1				第4層	土師器皿	
26	106		19・20	1				第4層	土師器皿	
27	106	33	19・20	1				第4層	土師器皿B	
28	106	33	19・20	1				第4層	土師器椀	
29	106		19・20	1				第4層	土師器椀	
30	106	33	19・20	1				第4層	土師器椀	
31	106		19・20	1				第4層	土師器椀	
32	106		19・20	1				第4層	黒色土器A類椀	
33	106		19・20	1				第4層	黒色土器A類椀	
34	106		19・20	1				第4層	黒色土器A類椀	
35	106	33	19・20	1				第4層	土師器大型蓋か	
36	106	33	19・20	1				第4層	土師器甑	
37	106		19・20	1				第4層	土師器甕	
38	106	33	19・20	1				第4層	黒色土器甕	
39	106	33	19・20	1				第4層	土師器鍋把手か	
40	106	33	19・20	1				第4層	土師器鍋把手か	
41	106		19・20	1				第4層	土師質羽釜	
42	106		19・20	1				第4層	土師質羽釜	
43	106	33	19・20	1				第4層	土師質羽釜	
44	106		19・20	1				第4層	土師質羽釜か	
45	106		19・20	1				第4層	土師器円盤	
46	106	33	19・20	1				第4層	土師質土錘	
47	106	33	19・20	1				第4層	土師質土錘	
48	106	33	19・20	1				第4層	土師質土錘	
49	106	33	19・20	1				第4層	竈	
50	106	33	19・20	1				第4層	土製支脚	
51	106		19・20	1				第4層	弥生土器	
52	106		19・20	1				第4層	弥生土器	
53	106		19・20	1				第4層	製塩土器	
54	107		19・20	1				第4層	須恵器杯B	
55	107		19・20	1				第4層	須恵器杯B	
56	107		19・20	1				第4層	須恵器杯B	

表 12 遺物一覧表 (2)

遺物番号	挿図番号	図版番号	年度	地区	遺構面	遺構番号	遺構種類	層名	遺物種類	備考
57	107		19・20	1				第4層	須恵器杯B	
58	107		19・20	1				第4層	須恵器杯	
59	107	34	19・20	1				第4層	須恵器杯B	
60	107	34	19・20	1				第4層	須恵器短頸壺か	
61	107	34	19・20	1				第4層	須恵器壺	
62	107	34	19・20	1				第4層	須恵器壺	
63	107		19・20	1				第4層	須恵器甕	
64	107		19・20	1				第4層	須恵器甕	
65	107		19・20	1				第4層	須恵器横瓶	
66	107		19・20	1				第4層	須恵器横瓶	
67	107		19・20	1				第4層	須恵器短頸壺	
68	107	34	19・20	1				第4層	須恵器壺	
69	107	34	19・20	1				第4層	須恵器壺	
70	107	34	19・20	1				第4層	須恵器壺	
71	107		19・20	1				第4層	須恵器壺	
72	107		19・20	1				第4層	須恵器壺	ヘラ記号
73	107	34	19・20	1				第4層	灰釉陶器椀	
74	107	34	19・20	1				第4層	灰釉陶器椀	
75	107	34	19・20	1				第4層	灰釉陶器椀	
76	107	34	19・20	1				第4層	灰釉陶器椀	
77	107	34	19・20	1				第4層	緑釉陶器椀	
78	107	34	19・20	1				第4層	須恵器椀	緑釉陶器の真似
79	107	34	19・20	1				第4層	緑釉陶器椀	
80	107	34	19・20	1				第4層	白色土器	
81	107	34	19・20	1				第4層	灰釉陶器椀	
82	107	34	19・20	1				第4層	青磁碗	越州窯系
83	107	34	19・20	1				第4層	白磁皿	
84	107	34	19・20	1				第4層	白磁碗	
85	107	34	19・20	1				第4層	龍泉窯系青磁碗	
86	107	33	19・20	1				第4層	砥石	
87	108	35	19・20	1				第4層	素弁蓮華文軒丸瓦	
88	108	35	19・20	1				第4層	複弁蓮華文軒丸瓦	
89	108		19・20	1				第4層	丸瓦	須恵質
90	108	35	19・20	1				第4層	丸瓦	須恵質
91	108	35	19・20	1				第4層	丸瓦	須恵質
92	108		19・20	1				第4層	平瓦	須恵質
93	108	35	19・20	1				第4層	平瓦	須恵質
94	108		19・20	1				第4層	平瓦	須恵質
95	108		19・20	1				第4層	平瓦	
96	109		19・20	1	第5面		土器集中部		土師器杯	
97	109		19・20	1	第5面		土器集中部		土師器杯	
98	109		19・20	1	第5面		土器集中部		土師器杯	
99	109		19・20	1	第5面		土器集中部		土師器杯	
100	109		19・20	1	第5面		土器集中部		土師器杯	
101	109		19・20	1	第5面		土器集中部		土師器杯	
102	109		19・20	1	第5面		土器集中部		土師器杯	
103	109		19・20	1	第5面		土器集中部		土師器杯	
104	109		19・20	1	第5面		土器集中部		土師器杯	
105	109		19・20	1	第5面		土器集中部		土師器杯	
106	109		19・20	1	第5面		土器集中部		土師器杯	
107	109		19・20	1	第5面		土器集中部		土師器杯	
108	109	36	19・20	1	第5面		土器集中部		土師器杯	
109	109		19・20	1	第5面		土器集中部		土師器杯	
110	109		19・20	1	第5面		土器集中部		土師器杯	
111	109		19・20	1	第5面		土器集中部		土師器皿	
112	109		19・20	1	第5面		土器集中部		土師器皿	
113	109		19・20	1	第5面		土器集中部		土師器皿	
114	109		19・20	1	第5面		土器集中部		土師器皿	
115	109		19・20	1	第5面		土器集中部		土師器杯B	
116	109		19・20	1	第5面		土器集中部		土師器高杯	
117	109		19・20	1	第5面		土器集中部		黒色土器A類杯	
118	109		19・20	1	第5面		土器集中部		黒色土器A類杯	
119	109		19・20	1	第5面		土器集中部		黒色土器A類杯	
120	109		19・20	1	第5面		土器集中部		黒色土器A類杯	
121	109		19・20	1	第5面		土器集中部		黒色土器A類杯	
122	109		19・20	1	第5面		土器集中部		黒色土器A類杯	
123	109		19・20	1	第5面		土器集中部		黒色土器A類杯	
124	109	36	19・20	1	第5面		土器集中部		黒色土器A類杯	
125	109		19・20	1	第5面		土器集中部		黒色土器A類杯	
126	109		19・20	1	第5面		土器集中部		黒色土器A類杯	
127	109		19・20	1	第5面		土器集中部		黒色土器A類杯か	

表 12 遺物一覧表 (3)

遺物番号	挿図番号	図版番号	年度	地区	遺構面	遺構番号	遺構種類	層名	遺物種類	備考
128	109		19・20	1	第5面		土器集中部		黒色土器A類杯	
129	110	36	19・20	1	第5面		土器集中部		土師器甕	
130	110	36	19・20	1	第5面		土器集中部		土師器甕	
131	110	36	19・20	1	第5面		土器集中部		土師器甕	
132	110	36	19・20	1	第5面		土器集中部		土師器甕	
133	110	36	19・20	1	第5面		土器集中部		黒色土器甕	
134	110	36	19・20	1	第5面		土器集中部		土師質羽釜	
135	110	36	19・20	1	第5面		土器集中部		製塩土器	
136	110		19・20	1	第5面		土器集中部		製塩土器か	
137	110		19・20	1	第5面		土器集中部		瓦質磚	
138	110		19・20	1	第5面		土器集中部		丸瓦	
139	111		19・20	1			盛土(整地土)		土師器杯	
140	111		19・20	1			盛土(整地土)		土師器杯	
141	111		19・20	1			盛土(整地土)		土師器杯	
142	111		19・20	1			盛土(整地土)		土師器杯	
143	111		19・20	1			盛土(整地土)		須恵器杯蓋	
144	111		19・20	1			盛土(整地土)		須恵器杯蓋	
145	111		19・20	1			盛土(整地土)		須恵器杯蓋	
146	111	36	19・20	1			盛土(整地土)		須恵器杯	
147	111	36	19・20	1			盛土(整地土)		須恵器杯B	
148	111		19・20	1			盛土(整地土)		須恵器杯B	
149	111		19・20	1			盛土(整地土)		須恵器杯B	
150	111		19・20	1			盛土(整地土)		須恵器杯B	
151	111		19・20	1			盛土(整地土)		須恵器杯B	
152	111		19・20	1			盛土(整地土)		須恵器杯B	
153	111		19・20	1			盛土(整地土)		須恵器杯B	
154	111		19・20	1			盛土(整地土)		須恵器壺	
155	111	36	19・20	1			盛土(整地土)		須恵器鉢	
156	111	36	19・20	1			盛土(整地土)		土師器甕	
157	111	36	19・20	1			盛土(整地土)		土師器竈	
158	111	36	19・20	1			盛土(整地土)		丸瓦	須恵質
159	111	36	19・20	1			盛土(整地土)		平瓦	須恵質
160	112	36	19・20	1	第5面	321	土手状遺構		製塩土器	
161	112		19・20	1	第5面	210	溝		土師器杯	
162	112		19・20	1	第5面	194	井戸		須恵器壺	
163	112		19・20	1	第5面	194	井戸		須恵器杯蓋	
164	112		19・20	1	第5面	196	土坑		須恵器杯蓋	
165	112		19・20	1	第5面	258	ピット		須恵器壺	
166	113	37	19・20	1	第5面	183	土坑		土師器甕	
167	113	37	19・20	1	第5面	183	土坑		土師器甕	
168	113		19・20	1	第5面	183	土坑		土師器甕	
169	113	37	19・20	1	第5面	183	土坑		土師器甕把手	
170	113	37	19・20	1	第5面	183	土坑		土師器把手付甕	
171	113		19・20	1	第5面	183	土坑		須恵器壺	
172	113		19・20	1	第5面	184	ピット		須恵器皿	へラ記号?
173	113	37	19・20	1	第5面	188	土坑		土師器杯	
174	113	37	19・20	1	第5面	188	土坑		土師器杯	
175	113	37	19・20	1	第5面	188	土坑		丸瓦	須恵質
176	113	37	19・20	1	第5面	193	土坑		土師器皿	
177	113		19・20	1	第5面	193	土坑		須恵器杯B	
178	113	37	19・20	1	第5面	193	土坑		丸瓦	須恵質
179	113	37	19・20	1	第5面	252	土坑		土師器皿	
180	113	37	19・20	1	第5面	252	土坑		土師器盤	
181	113	37	19・20	1	第5面	252	土坑		平瓦	須恵質
182	114		19・20	1	第5面(第4面か)	175	土坑		須恵器杯B	
183	114	38	19・20	1	第5面(第4面か)	175	土坑		土師器小皿	
184	114		19・20	1	第5面(第4面か)	175	土坑		土師器小皿	
185	114		19・20	1	第5面(第4面か)	175	土坑		土師器小皿	
186	114		19・20	1	第5面(第4面か)	175	土坑		土師器小皿	
187	114		19・20	1	第5面(第4面か)	175	土坑		土師器小皿	
188	114	38	19・20	1	第5面(第4面か)	175	土坑		土師器小皿	
189	114		19・20	1	第5面(第4面か)	175	土坑		土師器小皿	
190	114	38	19・20	1	第5面(第4面か)	175	土坑		土師器小皿	
191	114		19・20	1	第5面(第4面か)	175	土坑		土師器小皿	
192	114		19・20	1	第5面(第4面か)	175	土坑		土師器小皿	
193	114	38	19・20	1	第5面(第4面か)	175	土坑		土師器小皿	
194	114		19・20	1	第5面(第4面か)	175	土坑		土師器小皿	
195	114		19・20	1	第5面(第4面か)	175	土坑		土師器小皿	
196	114		19・20	1	第5面(第4面か)	175	土坑		土師器小皿	
197	114		19・20	1	第5面(第4面か)	175	土坑		土師器小皿	
198	114	38	19・20	1	第5面(第4面か)	175	土坑		土師器小皿	

表 12 遺物一覧表 (4)

遺物 番号	挿図 番号	図版 番号	年度	地区	遺構面	遺構 番号	遺構種類	層名	遺物種類	備考
199	114	38	19・20	1	第5面 (第4面か)	175	土坑		土師器小皿	
200	114		19・20	1	第5面 (第4面か)	175	土坑		土師器小皿	
201	115	39	19・20	1	第5面	261	ピット		土師器皿	
202	115		19・20	1	第5面	246	ピット		土師器皿	
203	115		19・20	1	第5面	240	ピット		土師器杯	
204	115		19・20	1	第5面	253	ピット		須恵器壺	
205	116		19・20	1	第5-2面	270	溝		須恵器壺	
206	116	39	19・20	1	第5-2面	270	溝		平瓦	須恵質
207	116		19・20	1	第5-2面	266	溝		土師器甕	布留式
208	116		19・20	1	第5-2面	267	土坑		須恵器杯蓋	
209	116	39	19・20	1	第5-2面	265	井戸		須恵器甌	ヘラ記号
210	116	39	19・20	1	第5-2面	265	井戸		須恵器杯	
211	116	39	19・20	1	第5-2面	268	溝		須恵器杯蓋	転用硯
212	116		19・20	1	第5-2面	268	溝		須恵器杯蓋	
213	116		19・20	1	第5-2面	268	溝		須恵器杯	
214	116		19・20	1	第5-2面	268	溝		土師器甕	
215	116		19・20	1	第5-2面	268	溝		須恵器すり鉢	
216	116		19・20	1	第5-2面	263	井戸		土師器皿	
217	116		19・20	1	第5-2面	263	井戸		土師器皿	
218	117	39	19・20	1	第5-2面直上				石鏃	サスカイト
219	118	40	19・20	2	第3面	15	池		唐津焼椀	
220	118	40	19・20	2	第3面	15	池		唐津焼皿	
221	118		19・20	2	第3面	15	池		唐津焼盤	
222	118	40	19・20	2	第3面	15	池		瀬戸灰釉皿	
223	118		19・20	2	第3面	15	池		唐津焼播鉢	
224	118	40	19・20	2	第3面	15	池		漳州窯系青花碗	
225	118	40	19・20	2	第3面	15	池		伊万里染付碗	
226	118		19・20	2	第3面	15	池		白磁四耳壺	
227	118		19・20	2	第3面	15	池		瓦器椀	
228	118	40	19・20	2	第3面	15	池		石製五輪塔	火輪
229	118	40	19・20	2	第3面	15	池		温石か	石鍋転用
230	118	40	19・20	2	第3面	15	池		木製櫛	
231	119		19・20	2				第3面及び 第3層	備前焼播鉢	
232	119		19・20	2				第3面及び 第3層	白磁皿	
233	119		19・20	2				第3面及び 第3層	灰釉陶器椀	
234	119		19・20	2				第4層	瓦器椀	
235	119		19・20	2				第4層	青磁碗	
236	119		19・20	2				第4層	漆器椀	
237	120	41	19・20	2	第5面	350	井戸		土師器小皿	
238	120		19・20	2	第5面	350	井戸		土師器小皿	
239	120	41	19・20	2	第5面	350	井戸		土師器小皿	
240	120	41	19・20	2	第5面	350	井戸		土師器小皿	
241	120	41	19・20	2	第5面	350	井戸		土師器皿	
242	120		19・20	2	第5面	350	井戸		土師器皿	
243	120		19・20	2	第5面	350	井戸		瓦器椀	
244	120		19・20	2	第5面	350	井戸		瓦器椀	
245	120		19・20	2	第5面	350	井戸		瓦器椀	
246	120	41	19・20	2	第5面	350	井戸		瓦器椀	
247	121	41	19・20	2	第5面	350	井戸		曲物	井戸枠
248	121	41	19・20	2	第5面	350	井戸		曲物	井戸枠
249	121	41	19・20	2	第5面	350	井戸		曲物	井戸枠
250	121	41	19・20	2	第5面	350	井戸		曲物	井戸枠
251	122		19・20	2	第5面	111	柱穴 (建物2)		黒色土器A類椀	
252	122		19・20	2	第5面	111	柱穴 (建物2)		黒色土器A類椀	
253	122		19・20	2	第5面	111	柱穴 (建物2)		土師器甕	
254	122	42	19・20	2	第5面	111	柱穴 (建物2)		土師器不明	
255	122	42	19・20	2	第5面	111	柱穴 (建物2)		製塩土器	
256	122	42	19・20	2	第5面	111	柱穴 (建物2)		製塩土器	
257	122	42	19・20	2	第5面	111	柱穴 (建物2)		製塩土器	
258	122	42	19・20	2	第5面	117	柱穴 (建物2)		土師質羽釜	
259	122		19・20	2	第5面	84	ピット		瓦器椀か	
260	122		19・20	2	第5面	84	ピット		瓦器椀	
261	122		19・20	2	第5面	85	ピット		瓦器椀	
262	123		19・20	2	第5面	110	土坑		土師器小皿	
263	123		19・20	2	第5面	110	土坑		土師器小皿	
264	123	42	19・20	2	第5面	121	溝		黒色土器B類小型椀	
265	124		19・20	2	第5面	40	落込み		須恵器杯B	
266	124		19・20	2	第5面	40	落込み		須恵器杯B	

表 12 遺物一覧表 (5)

遺物番号	挿図番号	図版番号	年度	地区	遺構面	遺構番号	遺構種類	層名	遺物種類	備考
267	124		19・20	2	第5面	40	落込み		須恵器壺	
268	124		19・20	2	第5面	40	落込み		須恵器短頸壺	
269	124		19・20	2	第5面	40	落込み		須恵器甗把手か	
270	125	42	19・20	4				第3層	龍泉窯系青磁碗	
271	125		19・20	4	第4面	45	ピット		土師器小皿	
272	125	42	19・20	4	第3面	10	井戸		白磁碗	
273	125		19・20	4	第3面	10	井戸		瓦器椀	
274	125	42	19・20	4	第5面	26	ピット		素弁八葉蓮華文軒丸瓦	須恵質
275	125		19・20	4				攪乱層	土師器か	ロクロ回転
276	126	43	19・20	6				第1層	土師器皿	
277	126	43	19・20	6				第1層	灰釉陶器広口壺	
278	126	43	19・20	6				第1層	緑釉陶器椀	
279	127		19・20	6	第1面	84	柱穴(建物2)		土師器皿	
280	127		19・20	6	第1面	77	柱穴(建物2)		土師器皿	
281	127		19・20	6	第1面	183	柱穴(建物2)		土師器皿	
282	127		19・20	6	第1面	176	柱穴(建物2)		須恵器甗	
283	127		19・20	6	第1面	47	柱穴(建物4)		土師器皿	
284	127		19・20	6	第1面	356	柱穴(建物4)		土師器皿	
285	127		19・20	6	第1面	146	柱穴(建物5)		須恵器鉢	
286	127	43	19・20	6	第1面	114	柱穴(建物5)		土師質羽釜	
287	127		19・20	6	第1面	192	ピット		土師器皿	
288	127		19・20	6	第1面	37	ピット		黒色土器B類椀	
289	127	43	19・20	6	第1面	314	ピット		須恵器鉢	
290	127	43	19・20	6	第1面	292	ピット		須恵器鉢	
291	127	43	19・20	6	第1面	116	ピット		土師質羽釜	
292	127		19・20	6	第1面	116	ピット		黒色土器A類椀	
293	128	43	19・20	6	第1面	3	土坑		土師器小皿	
294	128	43	19・20	6	第1面	3	土坑		土師器皿	
295	128		19・20	6	第1面	3	土坑		土師器椀	
296	128	43	19・20	6	第1面	3	土坑		黒色土器A類椀	
297	128		19・20	6	第1面	3	土坑		黒色土器A類椀	
298	128		19・20	6	第1面	3	土坑		須恵器椀	
299	128		19・20	6	第1面	3	土坑		土師器甗	
300	128		19・20	6	第1面	3	土坑		須恵器鉢	
301	128	43	19・20	6	第1面	121	土坑		土師器椀	黒色土器A被熱?
302	128	43	19・20	6	第1面	121	土坑		黒色土器A類椀	
303	128	43	19・20	6	第1面	121	土坑		灰釉陶器椀	
304	128	43	19・20	6	第1面	269	土坑		土師器小皿	
305	128	43	19・20	6	第1面	269	土坑		土師器皿	
306	128	43	19・20	6	第1面	269	土坑		黒色土器A類椀	
307	128		19・20	6	第1面	68	土坑		黒色土器B類椀	
308	128	43	19・20	6	第1面	68	土坑		須恵器壺	
309	128	43	19・20	6	第1面	309	土坑		土師器杯B	
310	128		19・20	6	第1面	288	溝		須恵器鉢	
311	129		19・20	6	第1面	61	土坑		土師器小皿	
312	129	44	19・20	6	第1面	61	土坑		土師器小皿	
313	129	44	19・20	6	第1面	61	土坑		土師器小皿	
314	129		19・20	6	第1面	61	土坑		土師器小皿	
315	129	44	19・20	6	第1面	61	土坑		土師器皿	
316	129	44	19・20	6	第1面	61	土坑		土師器皿	
317	129	44	19・20	6	第1面	61	土坑		土師器皿	
318	129	44	19・20	6	第1面	61	土坑		土師器皿	
319	129		19・20	6	第1面	61	土坑		土師器皿	
320	129	44	19・20	6	第1面	61	土坑		土師器杯B	
321	129		19・20	6	第1面	61	土坑		土師器杯B	
322	129	44	19・20	6	第1面	61	土坑		土師器杯B	
323	129	44	19・20	6	第1面	61	土坑		土師器杯B	
324	129		19・20	6	第1面	61	土坑		土師器盤	
325	129		19・20	6	第1面	61	土坑		土師器盤	
326	129		19・20	6	第1面	61	土坑		黒色土器A類椀	
327	129	44	19・20	6	第1面	61	土坑		黒色土器A類椀	
328	129		19・20	6	第1面	61	土坑		黒色土器A類椀	
329	129		19・20	6	第1面	61	土坑		黒色土器A類椀	
330	129	44	19・20	6	第1面	61	土坑		黒色土器A類椀	
331	129		19・20	6	第1面	61	土坑		黒色土器A類鉢	
332	129		19・20	6	第1面	61	土坑		須恵器壺	
333	129	44	19・20	6	第1面	61	土坑		緑釉陶器椀	
334	129	44	19・20	6	第1面	61	土坑		土師質羽釜	
335	129	44	19・20	6	第1面	61	土坑		土師質羽釜	
336	130		19・20	6	第1面	22	土坑		土師器皿	
337	130		19・20	6	第1面	22	土坑		土師器皿	



表 12 遺物一覧表 (6)

遺物 番号	挿図 番号	図版 番号	年度	地区	遺構面	遺構 番号	遺構種類	層名	遺物種類	備考
338	130		19・20	6	第1面	22	土坑		土師器皿	
339	130	45	19・20	6	第1面	22	土坑		土師器皿	
340	130		19・20	6	第1面	22	土坑		土師器皿	
341	130		19・20	6	第1面	22	土坑		土師器皿	
342	130		19・20	6	第1面	22	土坑		土師器皿	
343	130	45	19・20	6	第1面	22	土坑		土師器皿	
344	130		19・20	6	第1面	22	土坑		土師器皿	
345	130		19・20	6	第1面	22	土坑		土師器皿	
346	130		19・20	6	第1面	22	土坑		黒色土器A類碗	
347	130		19・20	6	第1面	22	土坑		黒色土器A類碗	
348	130		19・20	6	第1面	22	土坑		黒色土器A類碗	
349	130		19・20	6	第1面	22	土坑		黒色土器A類碗	
350	130	45	19・20	6	第1面	22	土坑		黒色土器A類碗	
351	130		19・20	6	第1面	22	土坑		黒色土器A類碗	
352	130		19・20	6	第1面	22	土坑		黒色土器A類碗	
353	130	45	19・20	6	第1面	22	土坑		黒色土器A類碗	
354	130		19・20	6	第1面	22	土坑		黒色土器A類碗	
355	130		19・20	6	第1面	22	土坑		黒色土器A類碗	
356	130		19・20	6	第1面	22	土坑		黒色土器A類碗	
357	130		19・20	6	第1面	22	土坑		黒色土器A類碗	
358	130		19・20	6	第1面	22	土坑		黒色土器A類碗	
359	130		19・20	6	第1面	22	土坑		黒色土器B類小型碗	
360	130	45	19・20	6	第1面	22	土坑		黒色土器B類小型碗	
361	130		19・20	6	第1面	22	土坑		黒色土器B類皿	
362	130		19・20	6	第1面	22	土坑		黒色土器B類碗	
363	130		19・20	6	第1面	22	土坑		黒色土器B類碗	
364	130		19・20	6	第1面	22	土坑		黒色土器B類碗	
365	130		19・20	6	第1面	22	土坑		黒色土器B類碗	
366	130		19・20	6	第1面	22	土坑		黒色土器B類碗	
367	130		19・20	6	第1面	22	土坑		黒色土器B類碗	
368	130		19・20	6	第1面	22	土坑		黒色土器B類碗	
369	130	45	19・20	6	第1面	22	土坑		須恵器鉢	
370	130	45	19・20	6	第1面	22	土坑		土師質羽釜	
371	130		19・20	6	第1面	22	土坑		須恵器甕	
372	130	45	19・20	6	第1面	22	土坑		灰釉陶器壺	
373	130	45	19・20	6	第1面	22	土坑		灰釉陶器碗	
374	130	45	19・20	6	第1面	22	土坑		轆羽口	
375	131	46	19・20	7				第1層	白磁四耳壺	
376	131	46	19・20	7	第1面	15	ピット		土師器碗	
377	131	46	19・20	7	第1面	1	溝		唐津焼溝縁皿	
378	131	46	19・20	7	第1面	1	溝		丹波焼播鉢	
379	131		19・20	7	第1面	2	溝		土師器鍋か甕	
380	131	46	19・20	7	第1面	8	土坑		黒色土器A類鉢	
381	131	46	19・20	7	第1面	22	池		景德鎮窯系青花皿	
382	131		19・20	7	第1面	22	池		巴文軒丸瓦	
383	131	46	19・20	7	第2面	11	柱穴(建物1)		土師器碗か	ロクロ土師器
384	131		19・20	7	第2面	11	柱穴(建物1)		黒色土器A類碗	
385	131	46	19・20	7	第2面	64	柱穴(建物1)		土師質羽釜	
386	131		19・20	7	第2面	55	柱穴(建物2)		土師器杯	
387	131		19・20	7	第2面	37	柱穴(建物2)		土師器杯	
388	131		19・20	7	第2面	45	柱穴(建物2)		黒色土器A類碗	
389	131	46	19・20	7	第2面		道路状遺構		土師質羽釜	
390	131	46	19・20	7	第2面	58	溝		灰釉陶器碗	
391	131	46	19・20	7	第2面	66	溝		須恵器杯蓋	
392	131		19・20	7	第2面	66	溝		須恵器杯	
393	131	46	19・20	7	第2面	66	溝		須恵器杯	
394	131		19・20	7	第2面	14	溝		須恵器杯蓋	
395	131		19・20	7	第2面	14	溝		須恵器杯蓋	
396	131		19・20	7	第2面	14	溝		須恵器杯蓋	
397	131		19・20	7	第2面	14	溝		須恵器杯	
398	131	46	19・20	7	第2面	14	溝		須恵器高杯	
399	131	46	19・20	7				第2層	石庖丁	
400	132		19・20	8				第2～3層	泥めんこ	
401	132	47	19・20	8				第2～3層	「永楽通宝」銭	
402	132		19・20	8	第1面	8	落込み		「寛永通宝」銭	
403	132	47	19・20	8	第3面	19	土坑		犬形土製品	
404	132		19・20	8	第3面	20	土坑		土師器小皿	
405	132	47	19・20	8	第3面	26	井戸		景德鎮窯系青花皿	「大明成化年製」
406	132		19・20	8	第3面	26	井戸		丸瓦	

表 12 遺物一覧表 (7)

遺物番号	挿図番号	図版番号	年度	地区	遺構面	遺構番号	遺構種類	層名	遺物種類	備考
407	132		19・20	8				第4層	土師器小皿	
408	132		19・20	8				第4層	白磁皿	
409	132	47	19・20	8				第4層	緑釉陶器碗	
410	132	47	19・20	8				第4層	緑釉陶器碗	
411	132	47	19・20	8				第4層	緑釉陶器碗	
412	132	47	19・20	8				第4層	須恵器高杯か	
413	133	47	19・20	8				第5層	緑釉陶器碗	
414	133	47	19・20	8				第5層	緑釉陶器碗	
415	133	47	19・20	8				第5層	緑釉陶器碗	
416	133		19・20	8	第5面	64	柱穴(建物2)		土師器小皿	
417	133	47	19・20	8	第5面	64	柱穴(建物2)		灰釉陶器碗	
418	133		19・20	8	第5面	62	柱穴(建物2)		土師器杯	
419	133		19・20	8	第5面	62	柱穴(建物2)		黒色土器A類碗	
420	133		19・20	8	第5面	63	柱穴(建物2)		黒色土器A類碗	
421	133		19・20	8	第5面	104	ピット		土師器小皿	
422	133		19・20	8	第5面	70	井戸		瓦器碗	
423	133		19・20	8	第5面	70	井戸		須恵器甕	
424	133		19・20	8	第5面	57	土坑		土師器杯	
425	133	47	19・20	8	第5面	57	土坑		土師器杯B	
426	133		19・20	8	第5面	57	土坑		黒色土器A類碗	
427	133		19・20	8	第5面	57	土坑		須恵器鉢	
428	133		19・20	8	第5面	42	土坑		土師器杯	
429	133		19・20	8	第5面	42	土坑		黒色土器A類碗	
430	133	47	19・20	8	第5面	68	土坑		土師器杯	
431	133		19・20	8	第5面	116	土坑		弥生土器壺	
432	133	47	19・20	8	第5面	116	土坑		弥生土器壺	
433	133		19・20	8	第5面	116	土坑		弥生土器甕	
434	133		19・20	8	第5面	116	土坑		弥生土器甕	
435	133	47	19・20	8	第5面	54	土坑		弥生土器広口壺	
436	133		19・20	8	第5面	54	土坑		弥生土器甕	
437	134	48	19・20	9				第1層	小柄	
438	134	48	19・20	9				側溝	瓦質土管	
439	134	48	19・20	9				第2層	白磁碗	
440	134	48	19・20	9				第2層	龍泉窯系青磁碗	
441	134	48	19・20	9	第4面	6	土坑		土師器小皿	
442	134	48	19・20	9	第4面	6	土坑		土師器小皿	
443	134	48	19・20	9				第3層	土師器皿	
444	134	48	19・20	9				第3層	土師器皿	
445	134	48	19・20	9				第3層	土師器皿	
446	134	48	19・20	9				第3層	同安窯系青磁碗	
447	134	48	19・20	9				第3層	瓦器碗	
448	134	48	19・20	9				第3層	瓦器碗	
449	134	48	19・20	9				第3層	須恵器鉢	
450	134	48	19・20	9				第3層	土師質鍋	
451		45	19・20	6	第1面	61	土坑		緑釉陶器碗	
452		45	19・20	6	第1面	63	土坑		緑釉陶器碗	
453		45	19・20	6	第1面	76	ピット		焼土塊	
454		45	19・20	6	第1面	61	土坑		焼土塊	
455		46	19・20	7				第1層	灰釉陶器碗	
456		46	19・20	7				第1層	龍泉窯系青磁碗	
457		46	19・20	7				第1層	朝鮮王朝褐釉徳利	
458	135	49	21	3	第2面	41	ピット		瓦器碗	
459	135	49	21	3	第2面	41	ピット		瓦器碗	
460	135	49	21	3	第2面	114	柱穴(建物1)		瓦器碗	
461	135	49	21	3	第2面	114	柱穴(建物1)		瓦器碗	
462	135	49	21	3	第2面	47	柱穴(建物1)		瓦器碗	
463	135	50	21	3	第2面	47	柱穴(建物1)		木製下駄	
464	135	49	21	3	第2面	46	柱穴(建物1)		土師器小皿	
465	135	50	21	3	第2面	157	柱穴(建物1)		柱根	ヒノキ材
466	135	50	21	3	第2面	106	柱穴(柱列1)		柱根	スギ材
467	135	49	21	3	第2面	226	ピット		須恵質陶棺蓋	
468	135		21	3	第2面	96	土坑		土師器皿	
469	135		21	3	第2面	96	土坑		土師器皿	
470	135		21	3	第2面	96	土坑		瓦器碗	
471	135		21	3	第2面	96	土坑		瓦器碗	
472	136		21	3	第2面	100	土坑		土師器小皿	
473	136		21	3	第2面	100	土坑		土師器小皿	
474	136		21	3	第2面	100	土坑		土師器小皿	
475	136		21	3	第2面	100	土坑		土師器小皿	
476	136	51	21	3	第2面	100	土坑		土師器小皿	
477	136	51	21	3	第2面	100	土坑		土師器小皿	

表 12 遺物一覧表 (8)

遺物 番号	挿図 番号	図版 番号	年度	地区	遺構面	遺構 番号	遺構種類	層名	遺物種類	備考
478	136		21	3	第2面	100	土坑		土師器皿	
479	136		21	3	第2面	100	土坑		土師器皿	
480	136	51	21	3	第2面	100	土坑		土師器大皿	
481	136		21	3	第2面	100	土坑		土師器大皿	
482	136		21	3	第2面	100	土坑		土師器大皿	
483	136		21	3	第2面	100	土坑		土師器大皿	
484	136		21	3	第2面	100	土坑		土師器椀	
485	136		21	3	第2面	100	土坑		瓦器椀	
486	136	51	21	3	第2面	100	土坑		瓦器椀	
487	136	51	21	3	第2面	100	土坑		瓦器椀	
488	136		21	3	第2面	100	土坑		土師器脚	
489	136	51	21	3	第2面	100	土坑		白磁香合	
490	136		21	3	第2面	100	土坑		土師質鍋	
491	136		21	3	第2面	100	土坑		土師質鍋	
492	136		21	3	第2面	100	土坑		土師質鍋	
493	136		21	3	第2面	100	土坑		土師質鍋	
494	136		21	3	第2面	100	土坑		須恵器鉢	
495	136		21	3	第2面	100	土坑		須恵器鉢	
496	136		21	3	第2面	100	土坑		須恵器鉢	
497	136		21	3	第2面	100	土坑		須恵器鉢	
498	136		21	3	第2面	100	土坑		須恵器鉢	
499	136		21	3	第2面	100	土坑		須恵器鉢	
500	136		21	3	第2面	100	土坑		瓦質鉢か	
501	136		21	3	第2面	100	土坑		瓦質盤か	
502	137	51	21	3	第2面	100	土坑		瓦質羽釜	
503	137		21	3	第2面	100	土坑		瓦質羽釜	
504	137		21	3	第2面	100	土坑		瓦質羽釜	
505	137	51	21	3	第2面	100	土坑		瓦質羽釜	
506	137	51	21	3	第2面	100	土坑		瓦質羽釜	
507	137	51	21	3	第2面	110	土坑		土師質羽釜	
508	137		21	3	第2面	100	土坑		土師質羽釜	
509	137		21	3	第2面	100	土坑		土師質羽釜	
510	137		21	3	第2面	100	土坑		土師質羽釜	
511	137		21	3	第2面	100	土坑		須恵質壺	
512	137	51	21	3	第2面	100	土坑		須恵質甕	
513	137	51	21	3	第2面	100	土坑		須恵質甕	
514	137		21	3	第2面	100	土坑		備前焼甕	
515	137		21	3	第2面	100	土坑		常滑焼甕	
516	137		21	3	第2面	100	土坑		常滑焼甕	
517	137		21	3	第2面	100	土坑		渥美焼甕	
518	137	51	21	3	第2面	100	土坑		須恵質陶棺蓋	
519		49	21	3	第1面	1-11	鋤溝群		唐津焼椀	
520		49	21	3				第1層	中国白磁碗	
521		49	21	3				第2層	瓦器椀	
522		49	21	3				第2層	土師器皿	
523		49	21	3				第2層	須恵器鉢	
524		49	21	3				第2層	瓦質羽釜	
525		49	21	3				第2層	石製不明加工品	
526		49	21	3	第2面	114	柱穴(建物1)		瓦質脚	
527		49	21	3	第2面	122	柱穴(建物1)		須恵器甕	
528		49	21	3	第2面	88	ピット		平瓦か	
529		49	21	3	第2面	226	ピット		根石	
530		50	21	3	第2面	106	柱穴(柱列1)		板材(礎板か)	スギ材
531		50	21	3	第2面	106	柱穴(柱列1)		板材(礎板か)	コウヤマキ材
532		50	21	3	第2面	15	ピット		柱根	スギ材
533		50	21	3	第2面	114	柱穴(建物1)		柱根	ヒノキ材
534		51	21	3	第2面	100	土坑		白磁碗	
535		51	21	3	第2面	100	土坑		龍泉窯系青磁碗	
536		51	21	3	第2面	100	土坑		瓦質羽釜脚	
537		51	21	3	第2面	100	土坑		瓦質羽釜脚	
538		51	21	3	第2面	100	土坑		須恵質陶棺蓋	
539		51	21	3	第2面	100	土坑		平瓦	
540		51	21	3	第2面	100	土坑		丸瓦	
541		51	21	3	第2面	100	土坑		焼土塊	
542		51	21	3	第2面	100	土坑		砥石	
543		51	21	3	第2面	110	土坑		瓦質甕	
544		51	21	3	第2面	110	土坑		土師器竈	

# 写 真 图 版





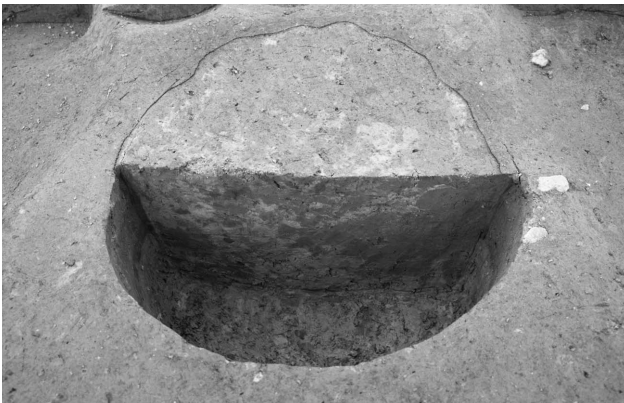
1. 第3面 全景 (北西から)



2. 第3面 北部 土坑群 (西から)



3. 60土坑 (南東から)



4. 58土坑 (南から)

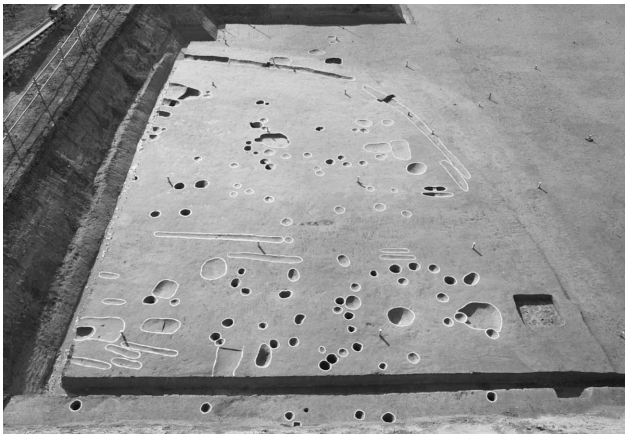


5. 61土坑 (南から)





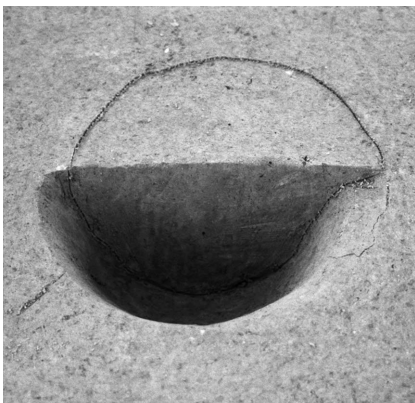
1. 第3面 全景（東から）



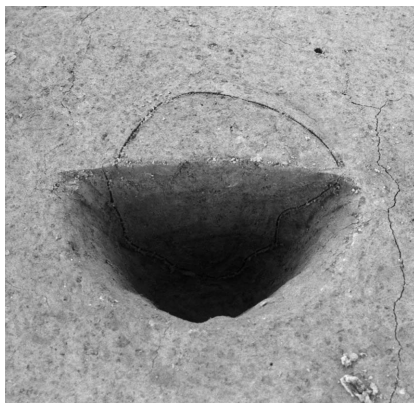
2. 第3面 南部遺構群（南東から）



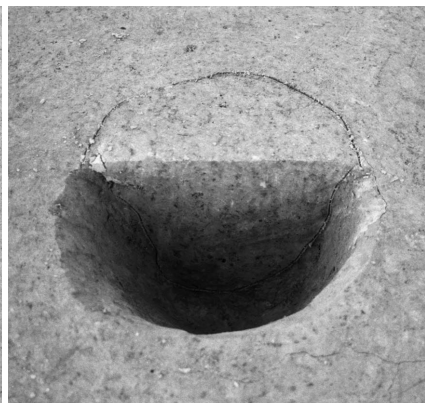
3. 40溝 断面（南から）



4. 第3面 21ピット（南東から）



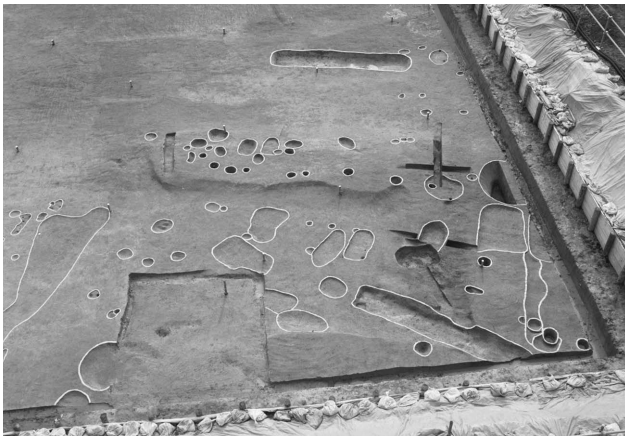
5. 第5面 14ピット（西から）



6. 第5面 19ピット（南東から）



1. 第5面 北部 全景 (西から)



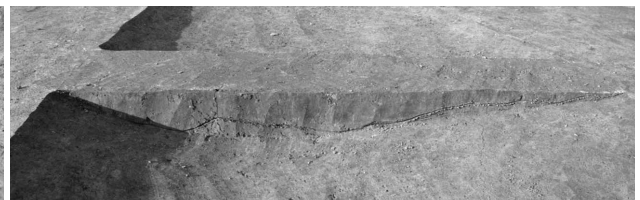
2. 第5面 北西部遺構群 (北西から)



3. 第5面 254溝 (南西から)



4. 第5面 211ピット (南から)



上 5. 第5面 250土坑 (南から)



下 6. 第5-2面 266溝 (南西から)





1. 第5面 北部 全景（北東から）



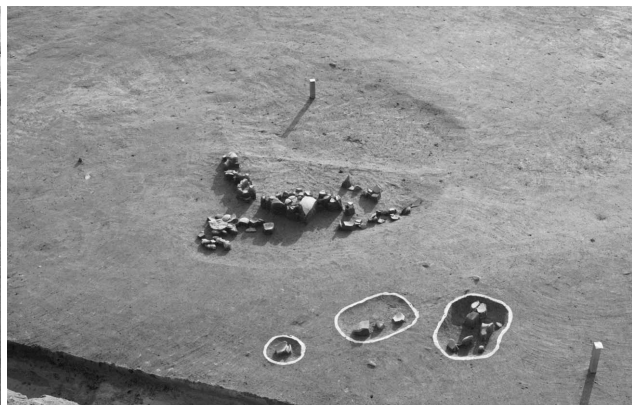
2. 第5面 北東部遺構群（南東から）



3. 175土坑 土師器皿出土状況（南から）



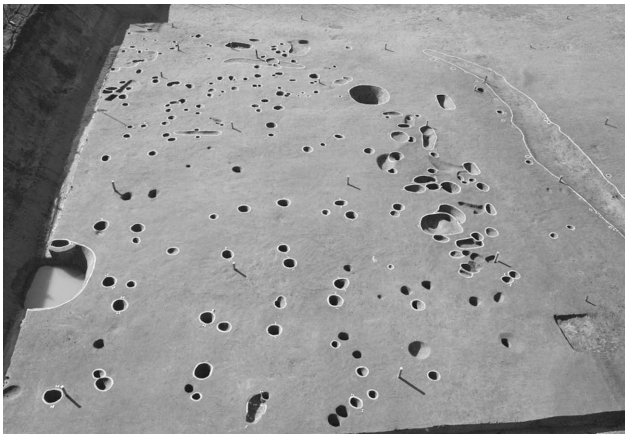
4. 第5面 北東部遺構群（北から）



5. 第5面 北東部遺構群（北西から）



1. 第5-2面 南部 全景 (北から)



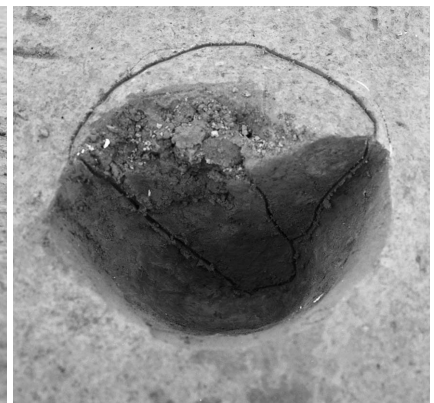
2. 第5-2面 南部遺構群 (南西から)



3. 131井戸 (南東から)



4. 162溝 断面 (北東から)



5. 87ピット (南から)



1. 第5-2面 北部 全景 (西から)



2. 第5-2面 北部遺構群 全景 (東から)



3. 275土坑 (北東から)



4. 266溝 検出状況 (南西から)



5. 270溝 断面 (西から)





1. 265井戸 (南から)



2. 265井戸 遺物出土状況  
(南から)



3. 263井戸 (南東から)





1.268溝 南壁断面（南から）



2.268溝 北壁断面（南から）



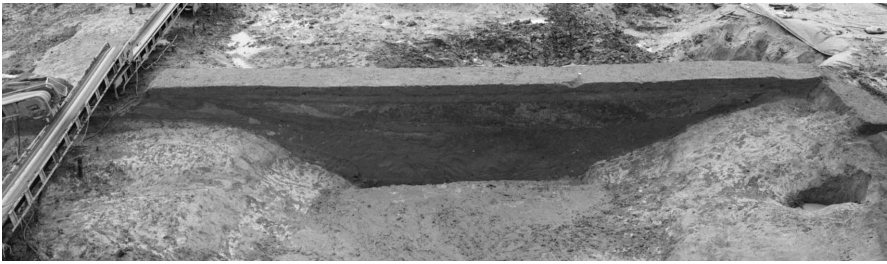
3.308土坑 断面（南西から）



1. 第3面 耕作痕（南から）



2. 第4面 耕作痕（南西から）



1. 15池 西断面（北西から）



2. 15池 中央断面（北西から）



3. 15池 東断面（北西から）



4. 15池 獣骨出土状況



5. 15池 五輪塔火輪出土状況





1.31井戸 断面（北東から）



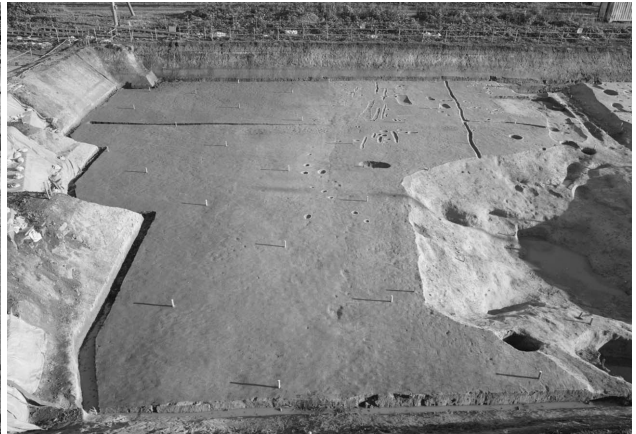
2.30井戸 断面（北東から）



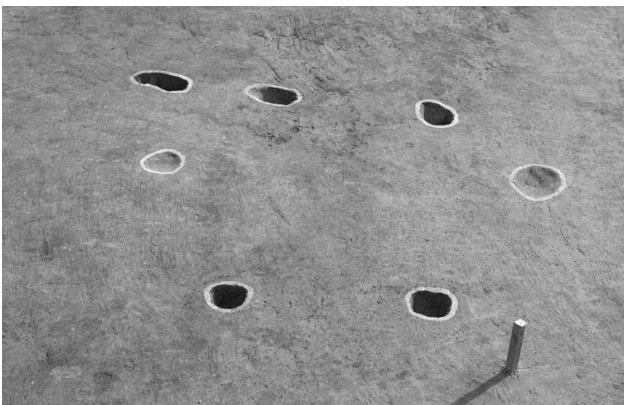
1. 第5面 全景 (南から)



2. 第5面 東部 全景 (北西から)



3. 第5面 東部 全景 (北西から)



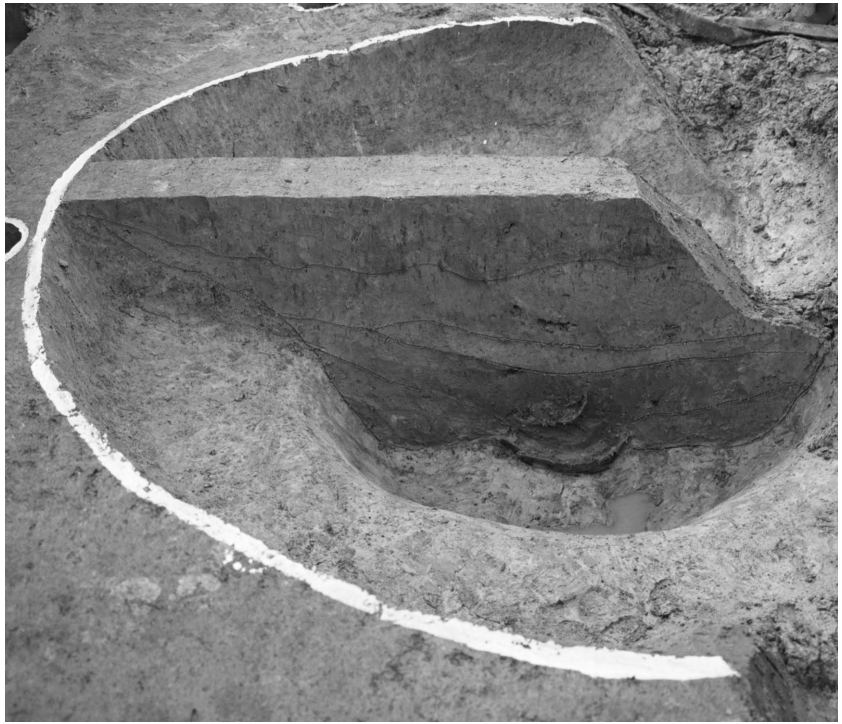
4. 第5面 北端部ピット群 (北西から)



5. 第5面 西部 全景 (北西から)



1. 第3面 拡張部 全景（北西から）



4. 第5面 350井戸 断面（北東から）



2. 第3面 拡張部 全景（南東から）



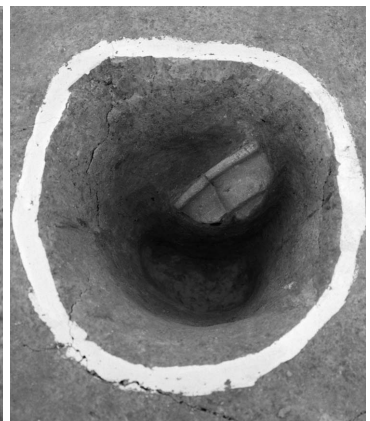
5. 第5面 350井戸 曲物出土状況（北東から）



3. 第5面 拡張部 全景（北西から）



6. 第5面 建物2 117柱穴 遺物出土状況



7. 第5面 建物2 117柱穴 遺物出土状況（南東から）





1. 第3地区 第1面 全景  
(南東から)



2. 第4地区 第2面 全景  
(南東から)



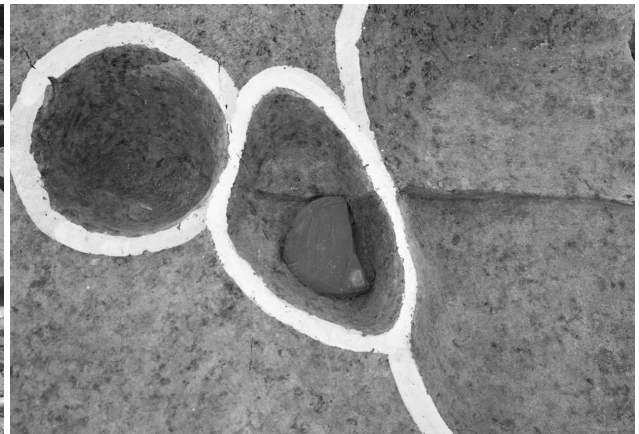
3. 第4地区 第3面 全景  
(西から)



1. 第5面 全景（北東から）



2. 第4面 全景（北西から）



3. 第5面 26ピット 軒丸瓦出土状況（北東から）



4. 第5面 87溝 断面（北東から）



5. 第5-2面 88溝（北東から）



1. 第4面 全景 流路埋没状況  
(東から)

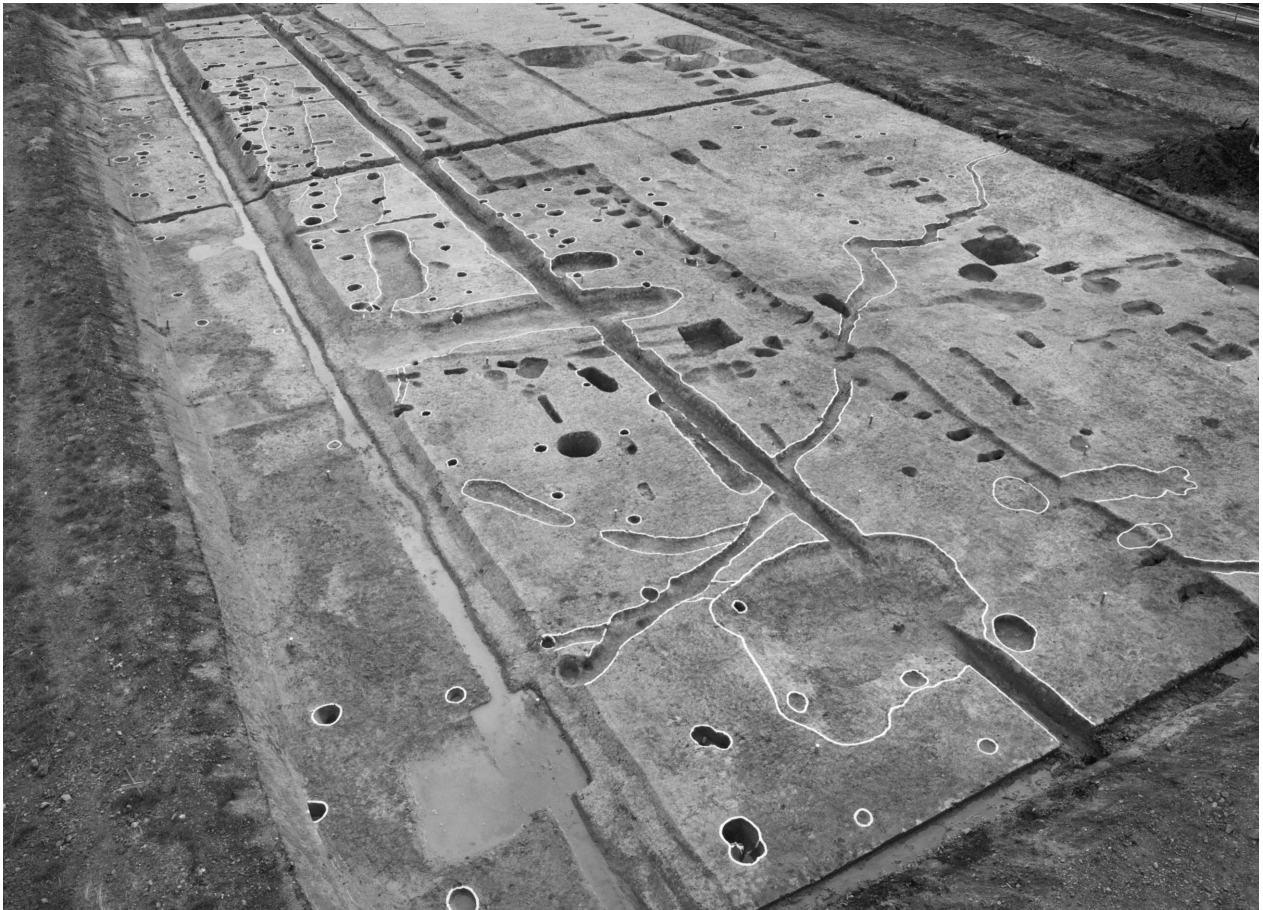


2. 第5面 全景 (南東から)



3. 第5面 8流路 断面  
(南西から)





1. 南半 全景 (東から)



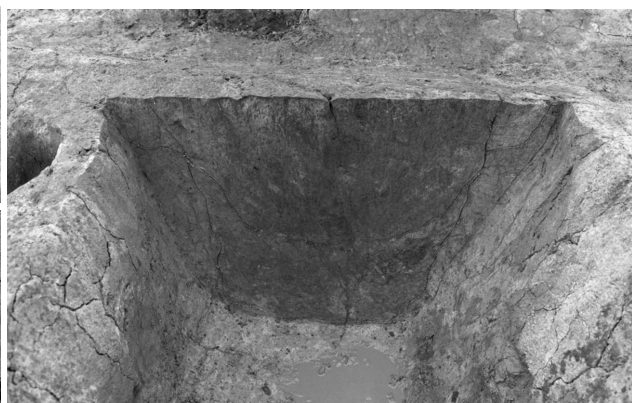
2. 61土坑、建物2・3周辺 (北東から)



3. 359土坑 遺物出土状況 (南東から)



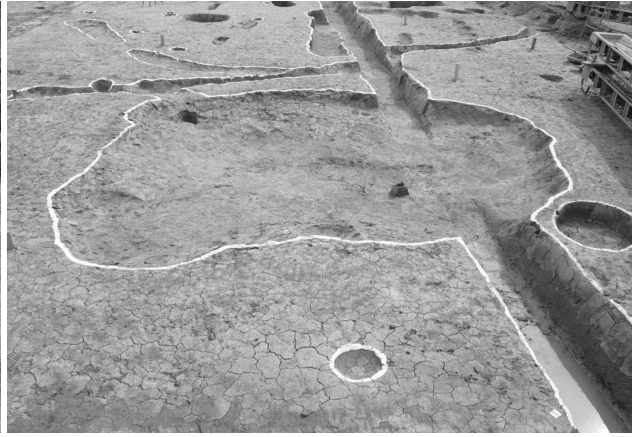
上 4.2溝 (右)、288溝 (左) 断面 (北東から)  
下 5.26溝 断面 (南東から)



6.2溝 断面 (南西から)



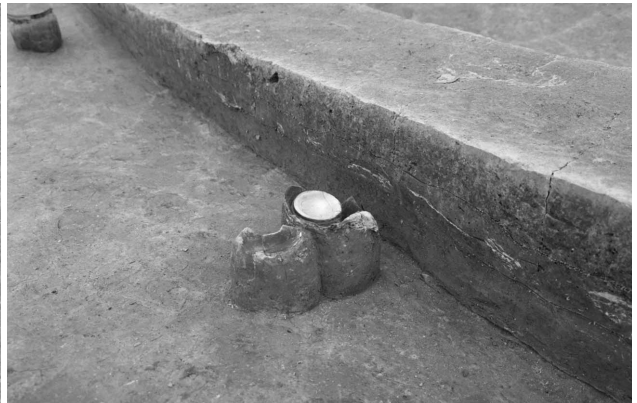
1. 建物1 (南西から)



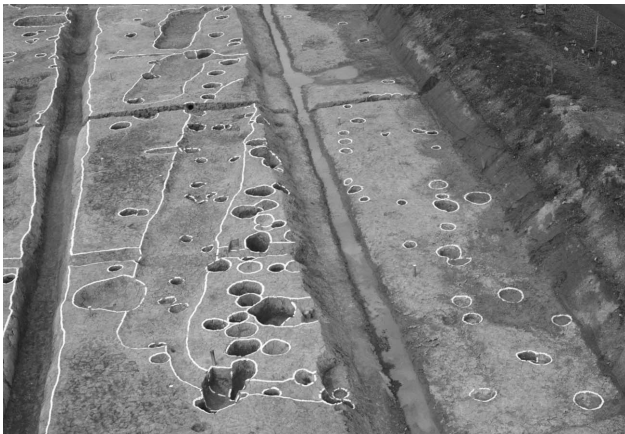
2. 22土坑 (北東から)



3. 建物5 114柱穴 断面 (南東から)



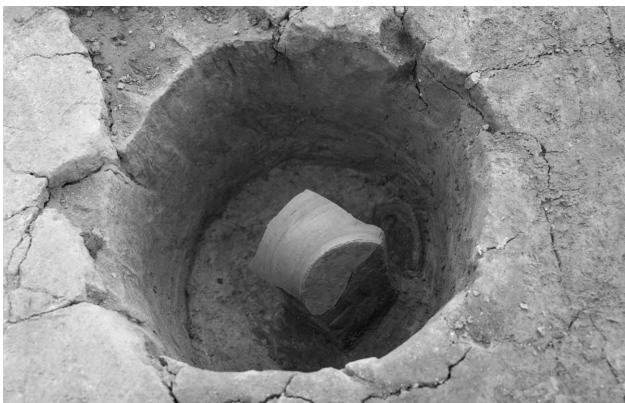
4. 22土坑 断面 (北西から)



5. 建物2、3土坑 (南西から)



6. 229土坑、231・230ピット 断面 (南東から)



7. 292ピット 遺物出土状況 (東から)



8. 建物2 93・95柱穴、94ピット (右)、229土坑 (左)  
遺物出土状況 (南東から)





1.61土坑 遺物出土状況  
(南から)



2.61土坑 遺物出土状況  
(南から)



3.61土坑 遺物出土状況  
(南東から)



1. 北半部 全景（北東から）



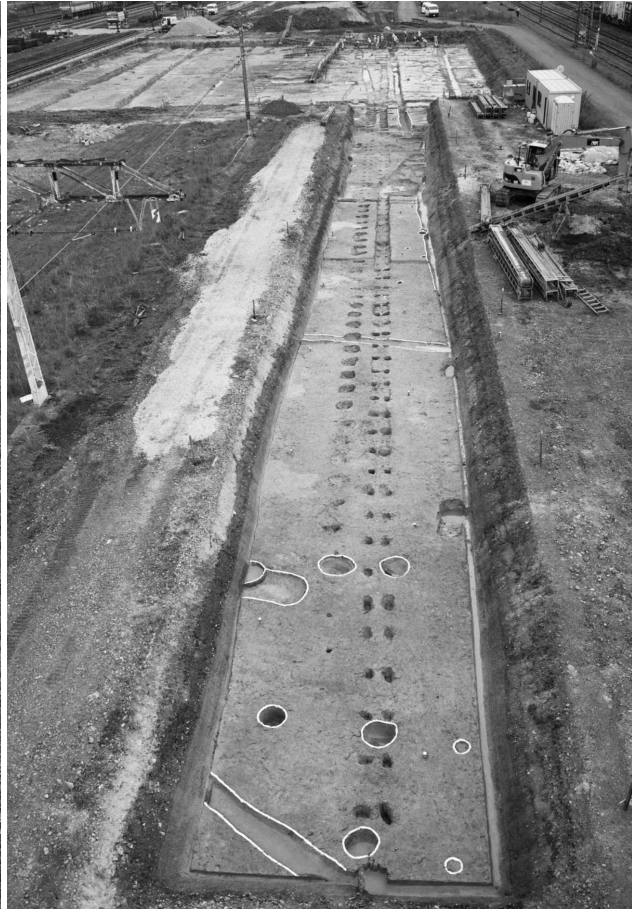
2. 379池（南から）



3. 375流路（南東から）



1. 西半 全景 (北東から)



2. 第2面 東半 全景 (南西から)



3. 第2面 建物1 (南から)



4. 建物1 60柱穴 断面 (南東から)



5. 建物1 61柱穴 断面 (南西から)



6. 第2面 2溝 断面 (北東から)





1. 第2面 西半 全景 (南から)



上 2.66溝 (東から)



下 3.49・50・51溝 検出状況 (南から)



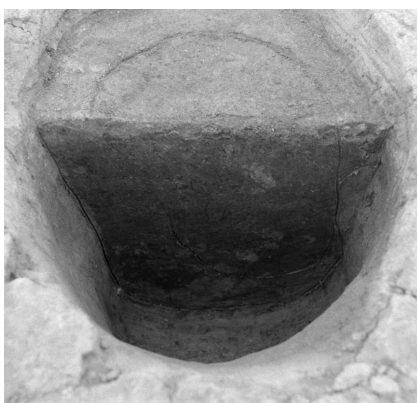
4. 47・48溝 (東から)



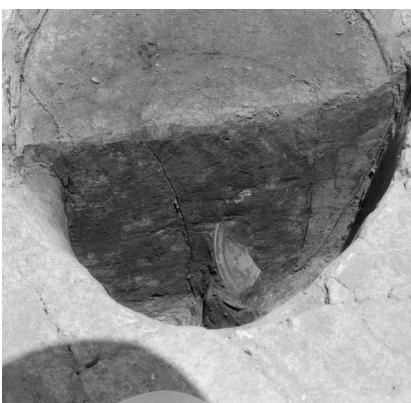
5. 建物2 (南から)



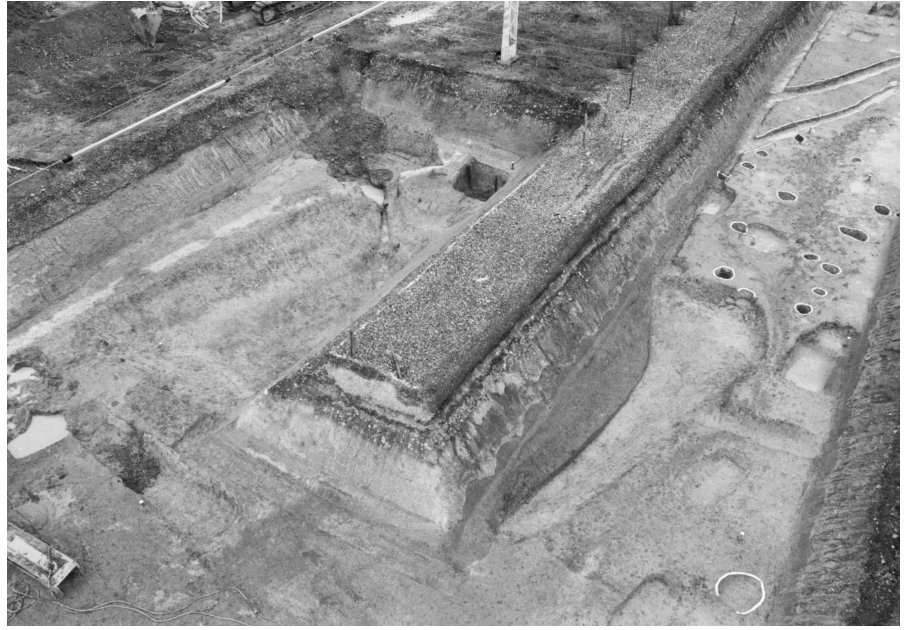
上 6.47溝 断面 (西から)  
下 7.48溝 断面 (東から)



8. 建物3 36柱穴 断面 (南から)



9. 建物3 40柱穴 断面 (南東から)



1. 第1面 22池周辺（南から）



2. 22池 貯水施設（南から）



3. 22池 断面（南東から）





1. 第7地区 第1面 耕作痕（南から）



2. 第7地区 第1面 道路状遺構上面（南西から）



3. 第7地区 第1面 1~3畠状遺構（南西から）



4. 第7地区 道路状遺構下面（南西から）



5. 第7地区 第1面 下面 鋤溝群（東から）



6. 第8地区 第3面 北半 耕作痕（鋤溝）  
検出状況（南西から）



7. 第8地区 第3面 耕作痕（畝間溝）検出状況（東から）



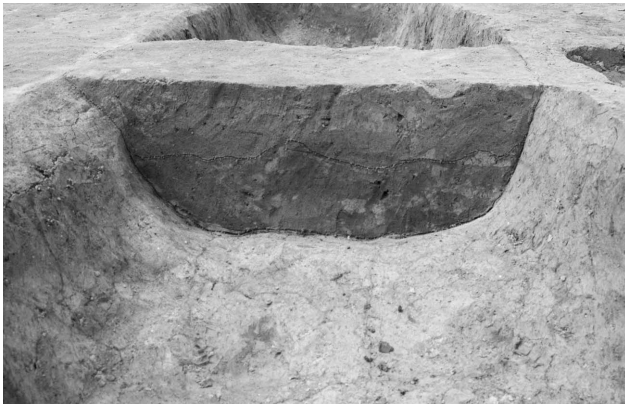
8. 第8地区 第4面 南半 耕作痕（鋤溝）  
検出状況（南東から）



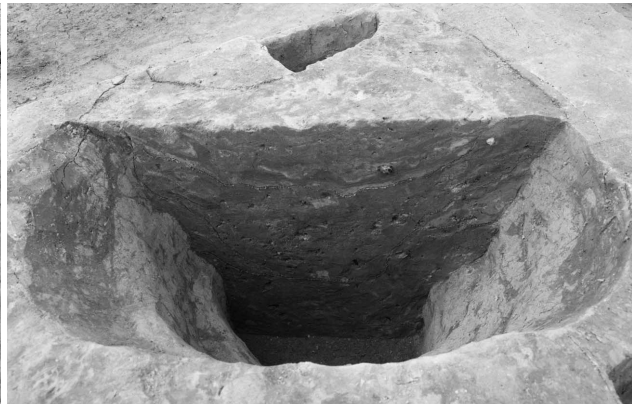
1. 第3面 土坑群 (南西から)



2. 30土坑 (南東から)



3. 10土坑 断面 (南西から)



4. 26井戸 (南東から)



5. 第5面 全景 (南東から)

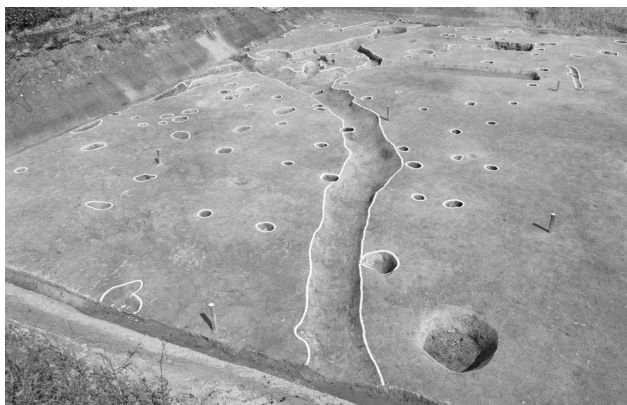




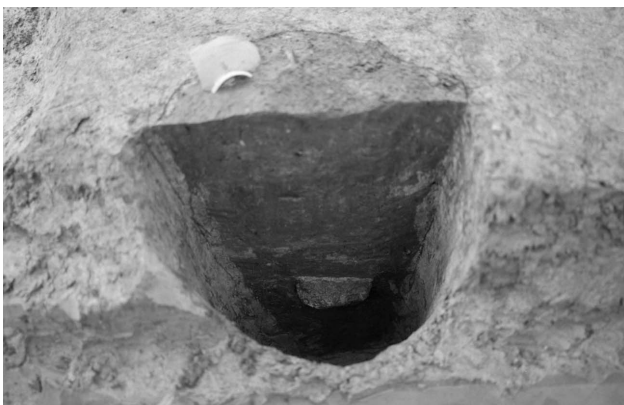
1. 建物1 (南東から)



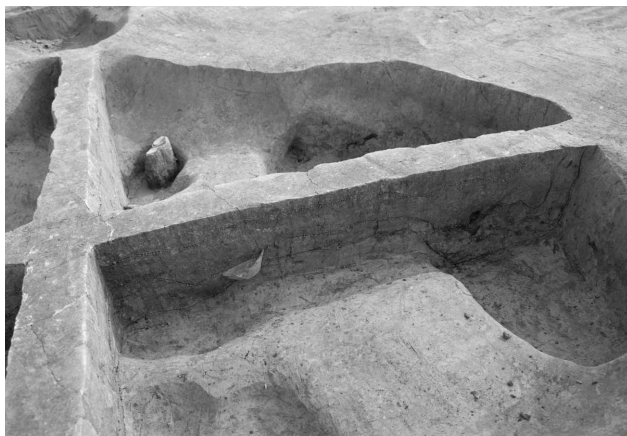
2. 建物2 (東から)



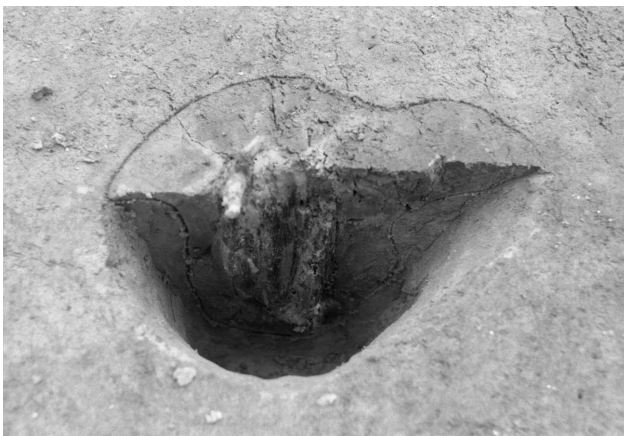
3. 建物3、40溝 (南から)



4. 建物2 64柱穴 断面 (北東から)



5. 54土坑 西側断面 (北から)



6. 建物3 87柱穴 (南西から)



7. 116土坑 遺物出土状況 (南東から)



上 8.70井戸 断面 (東から)



下 9.37・40溝 断面 (西から)



1. 第8地区 第5面 西半  
(東から)



2. 第9地区 第5面 (北東から)



3. 第9地区 第5面 凸部  
(南東から)



1. 第1地区 北東壁



2. 第1地区 南東壁



3. 第2地区 南西壁



4. 第4地区 北東壁



5. 第6地区 北西壁、380井戸



6. 第7地区 南西壁(西から)

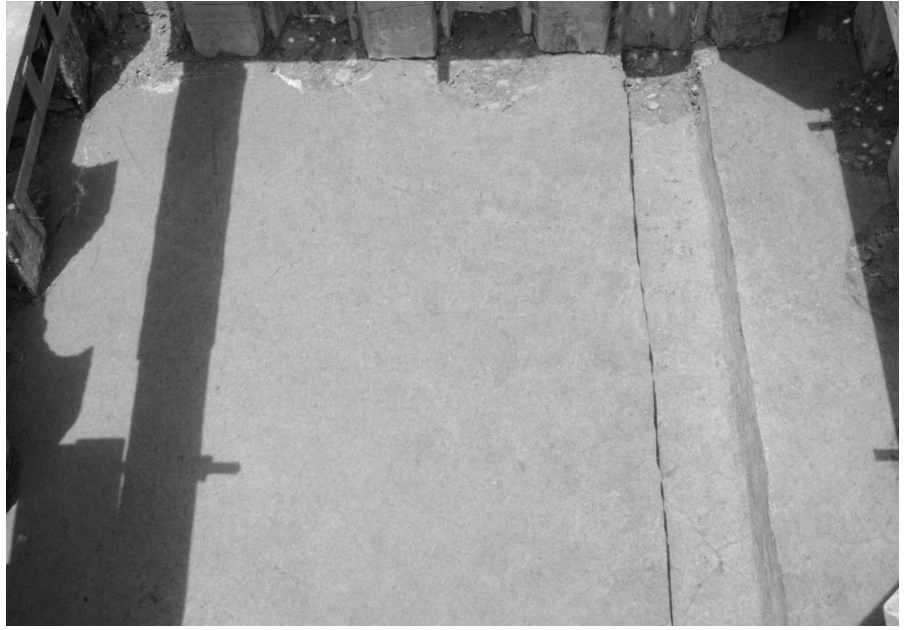


7. 第8地区 南東壁



8. 第8地区 南東張り出し部壁





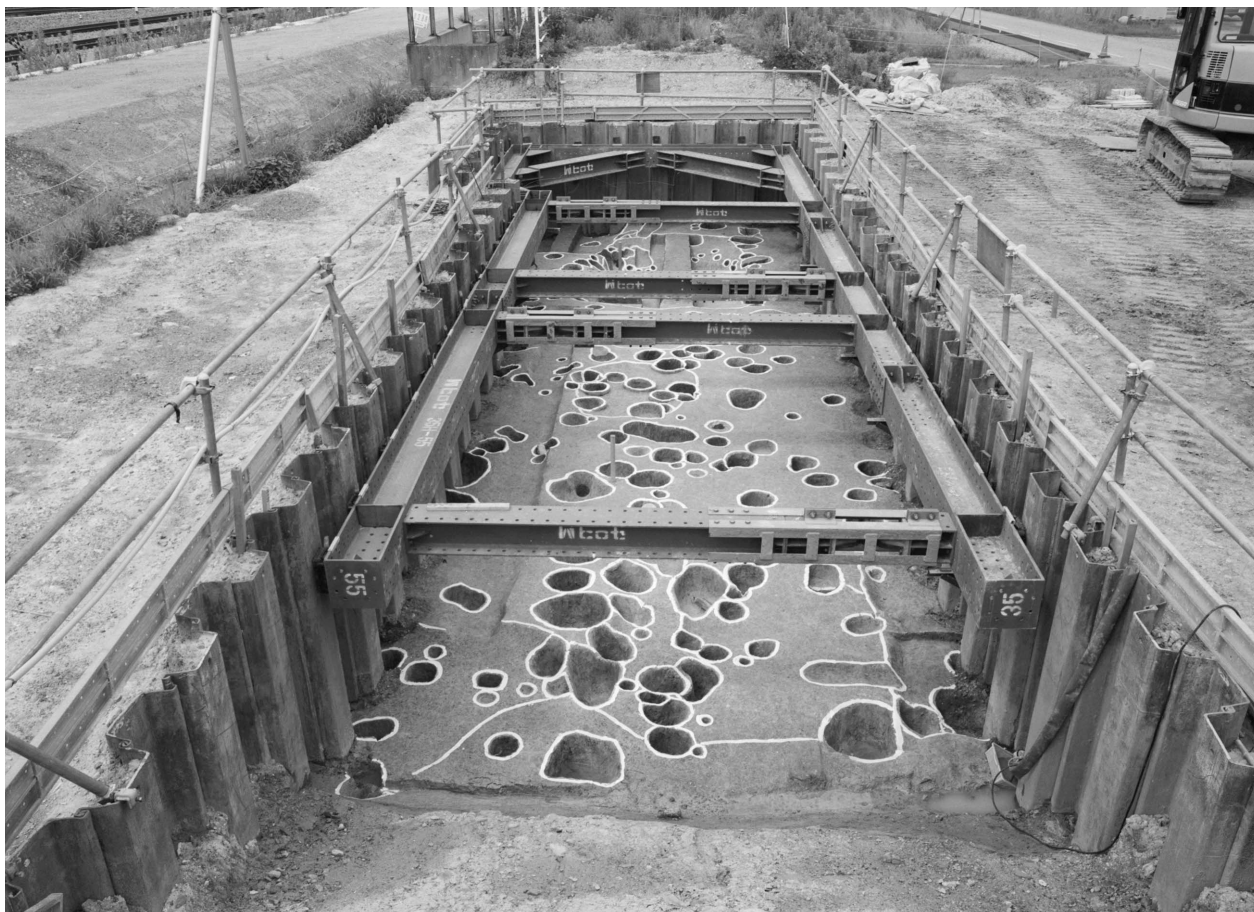
1. 第1地区 第3面（南東から）



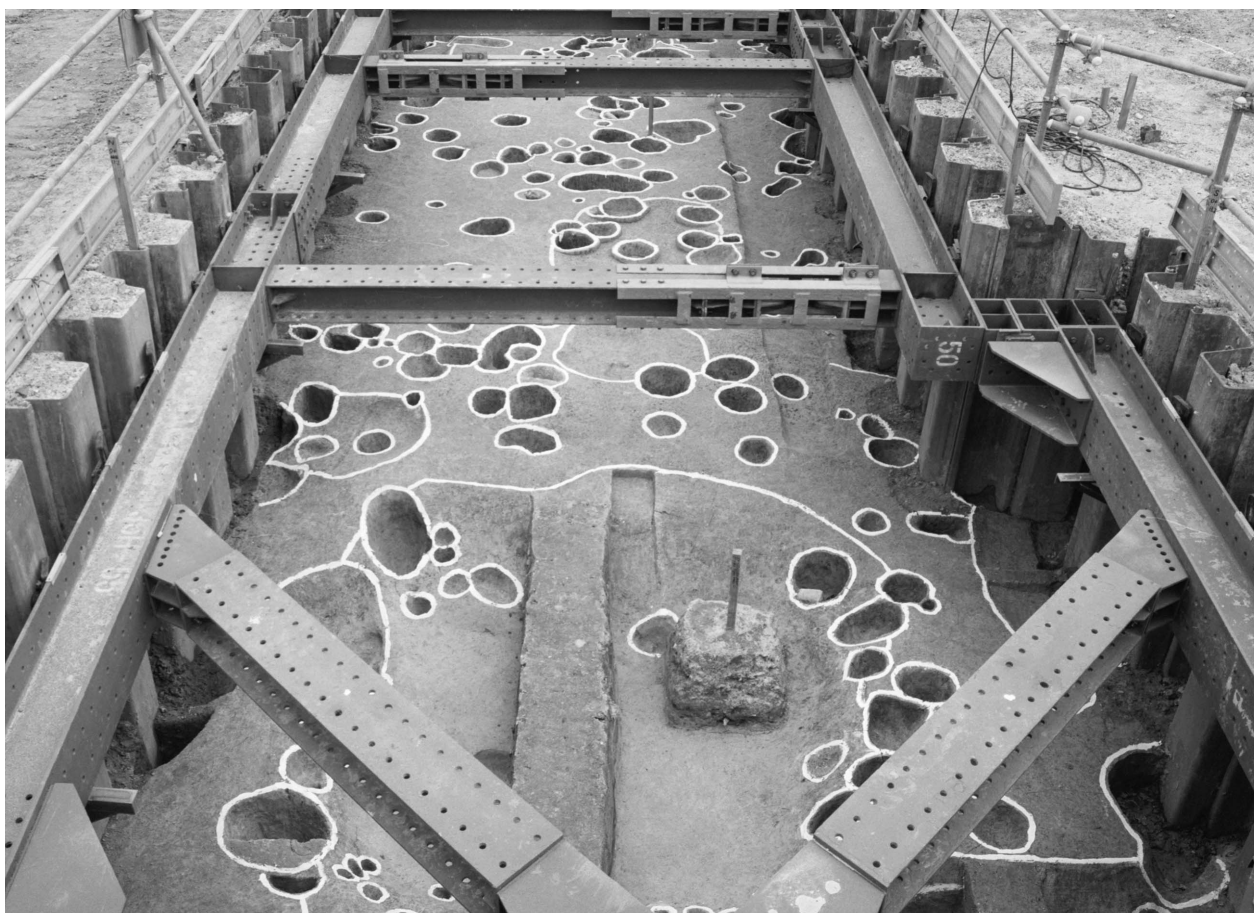
2. 第2地区 第3面（南西から）



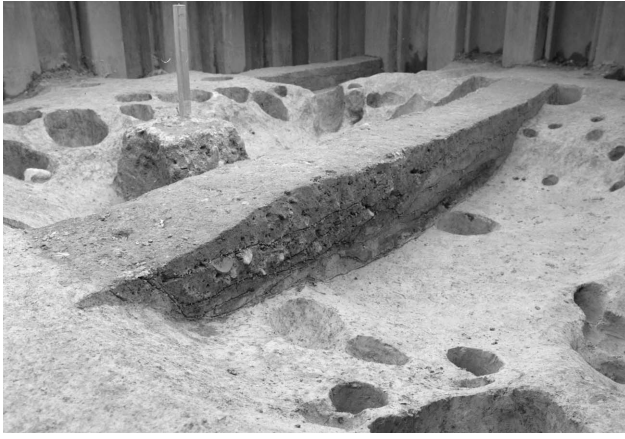
3. 第3地区 第1面（南西から）



1. 第2面 全景（北東から）



2. 第2面 全景（南西から）



1.100土坑（北から）



2.110土坑（北西から）



3.46・47柱穴（北東から）



4.107柱穴（北東から）



5.62ピット（北東から）



6.120ピット（西から）

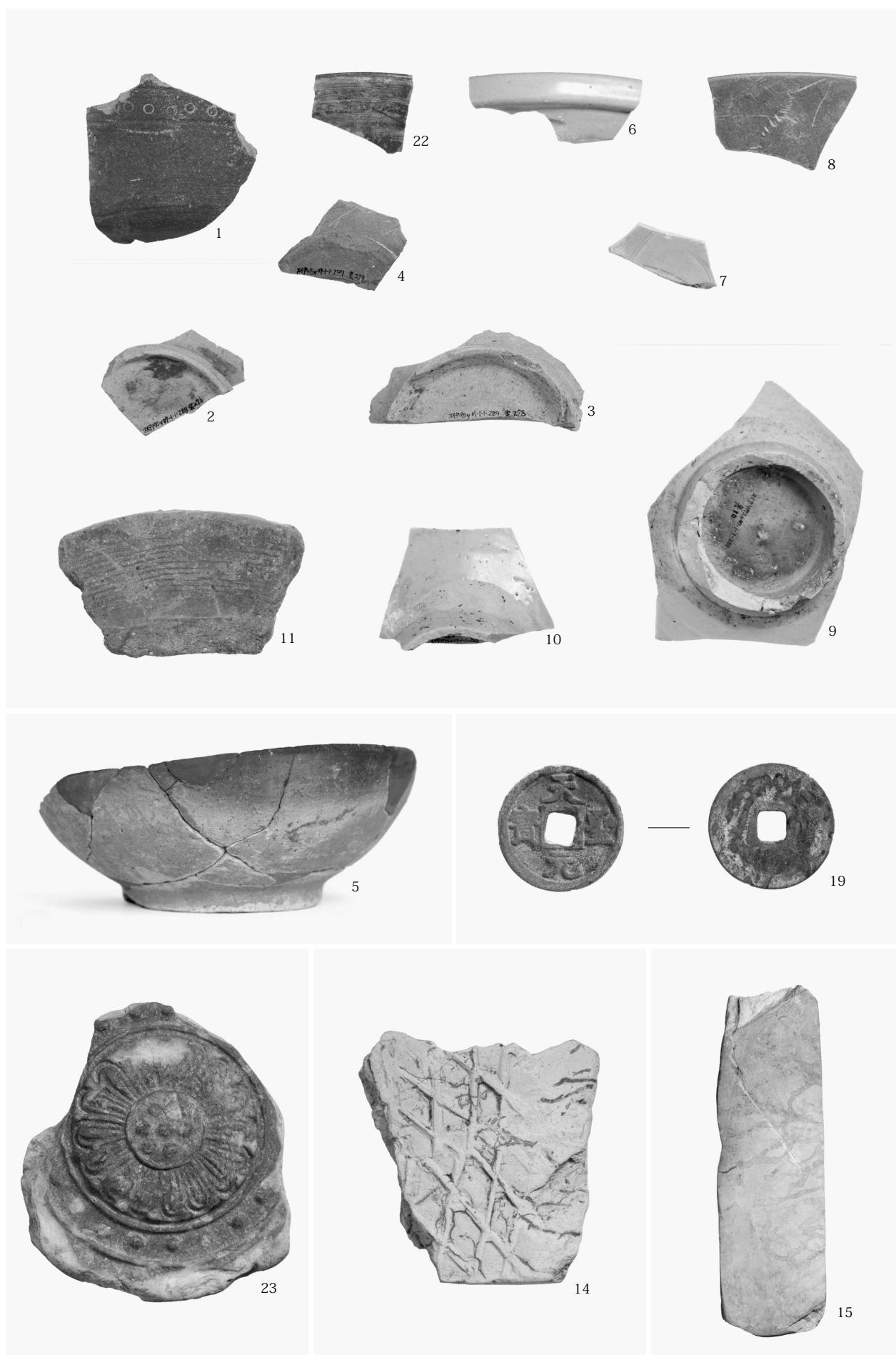


7.66ピット（北東から）

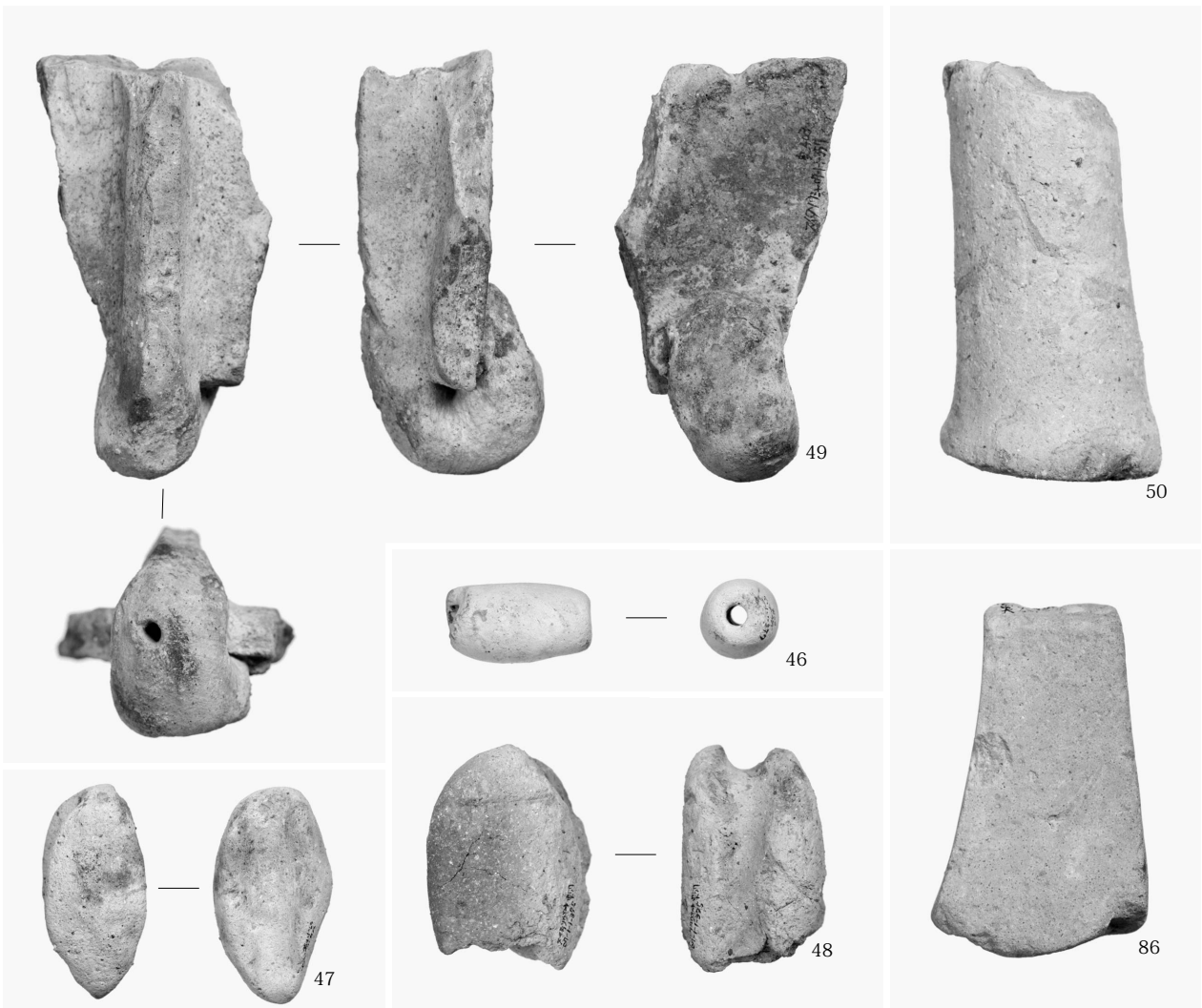
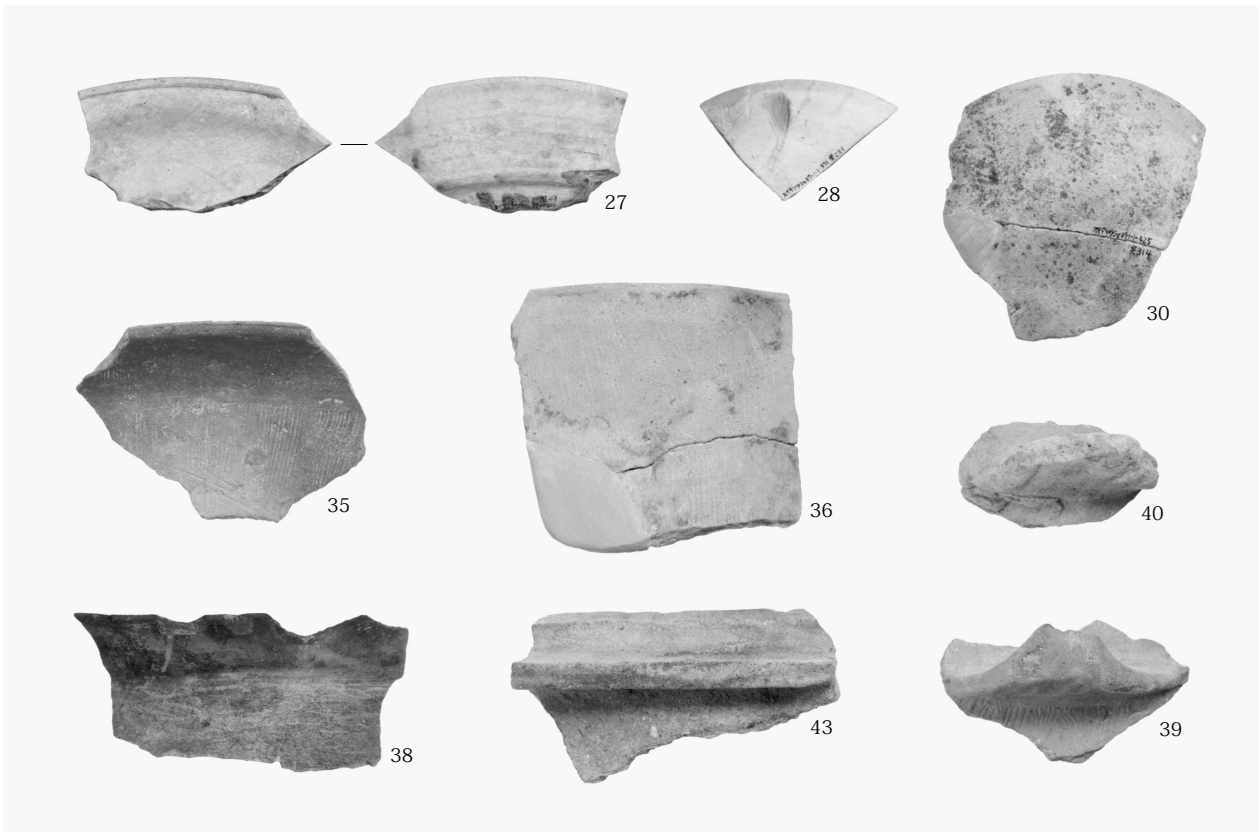


8.37ピット（北東から）



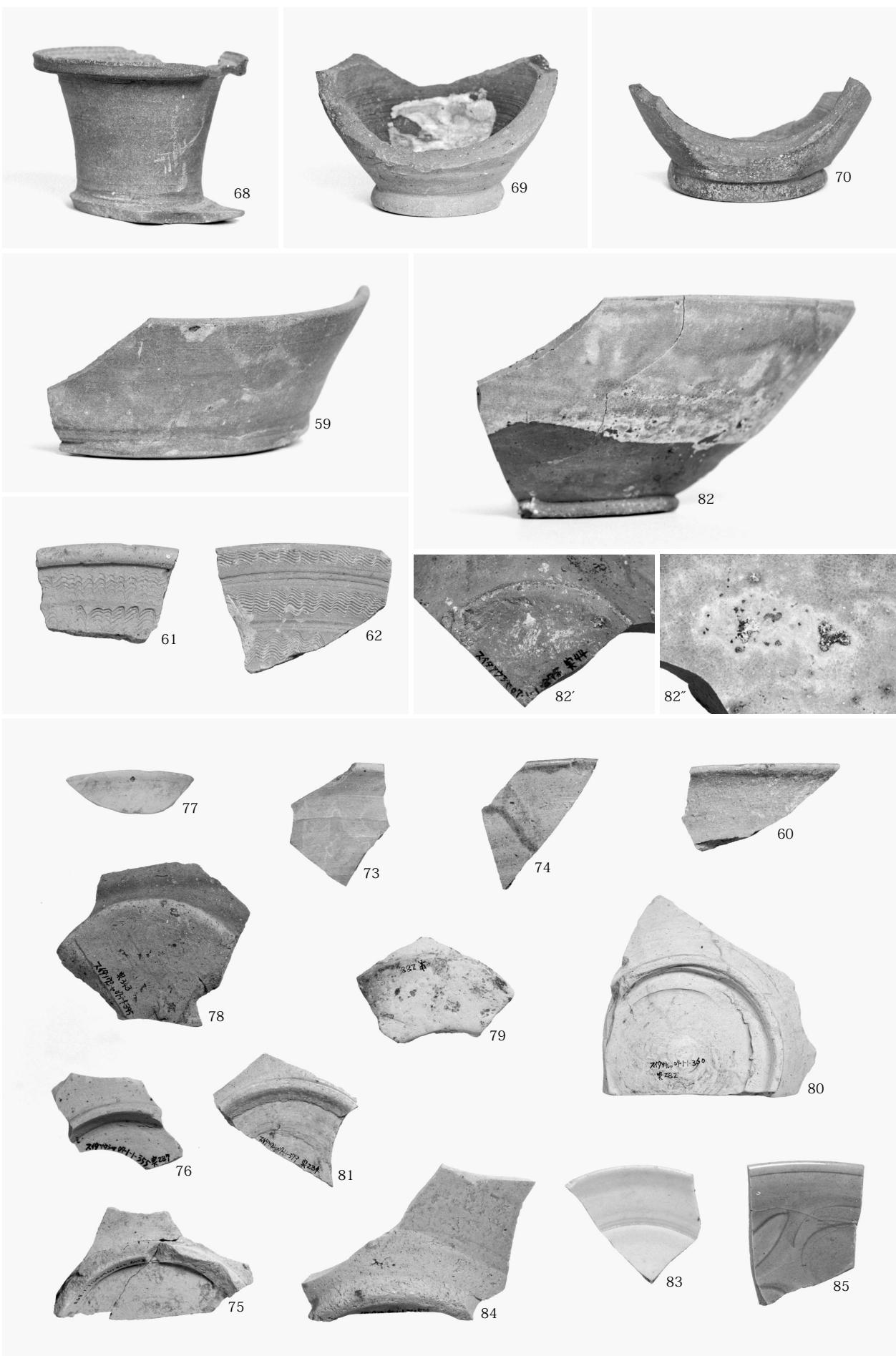


第2～3層、第3面遺構 出土遺物

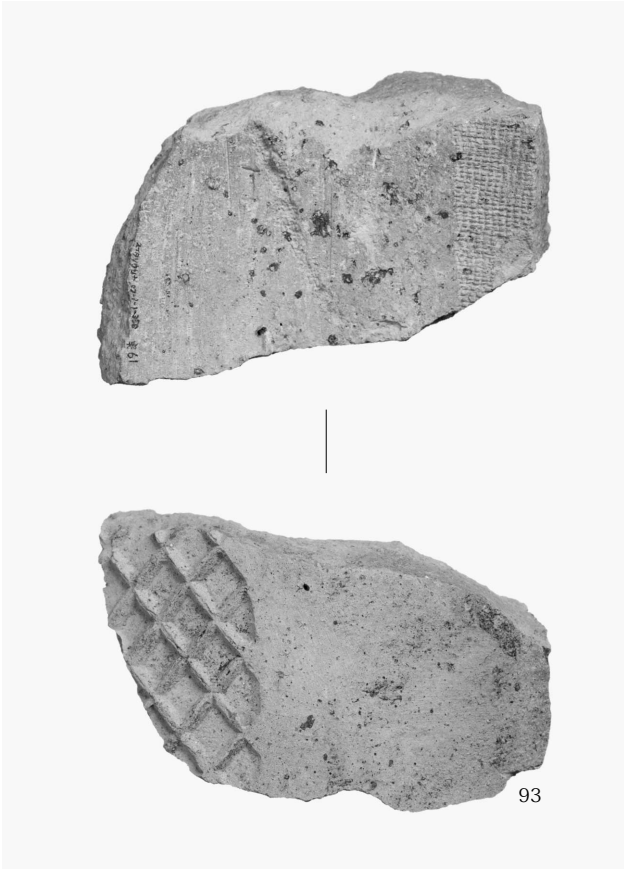
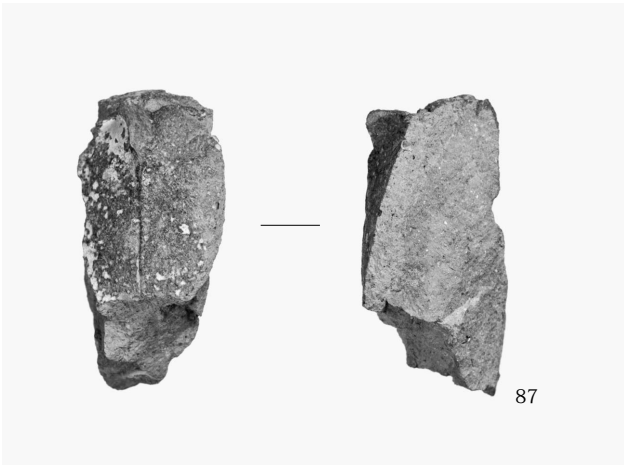


第4層 出土遺物(1)

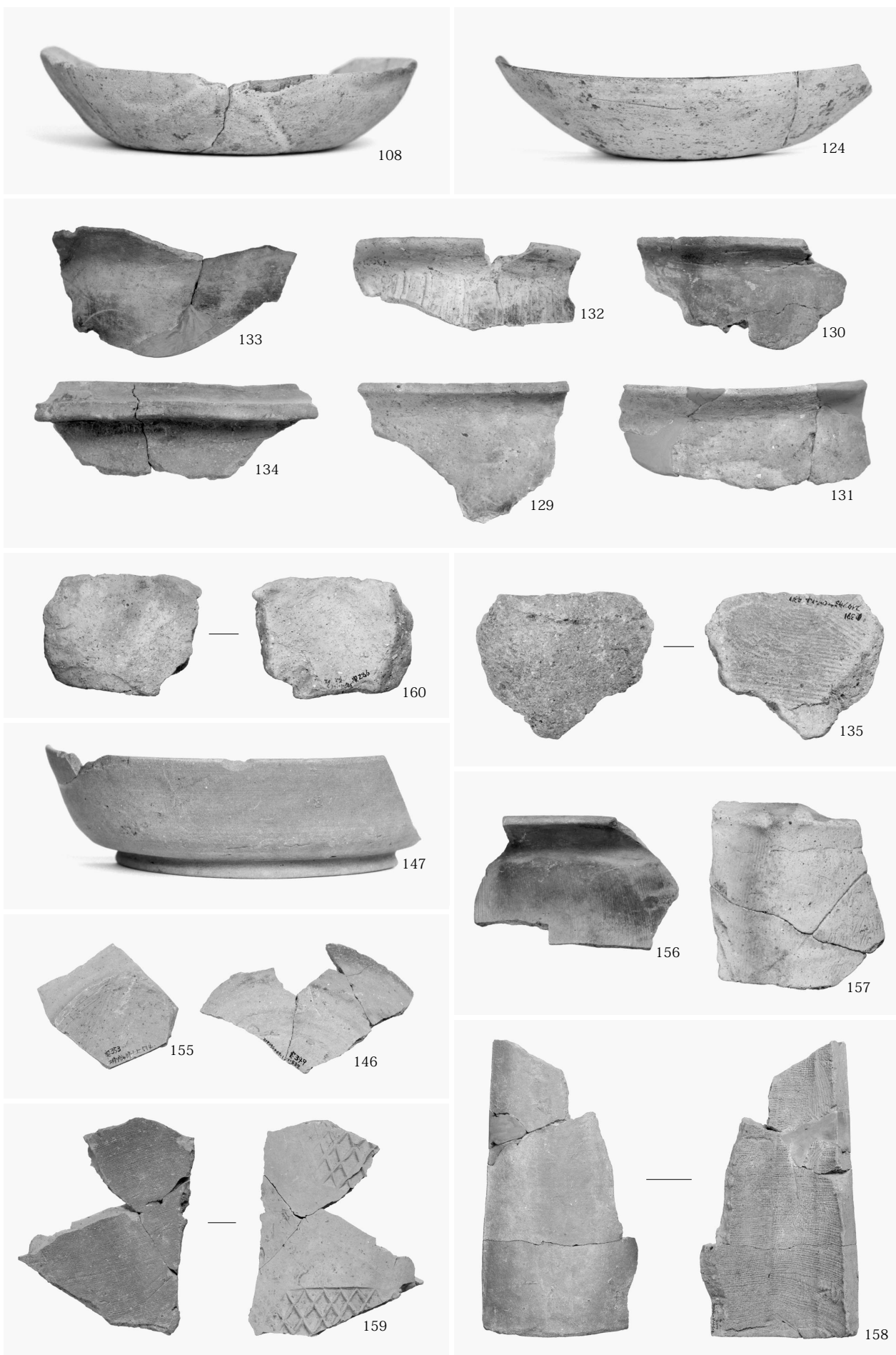




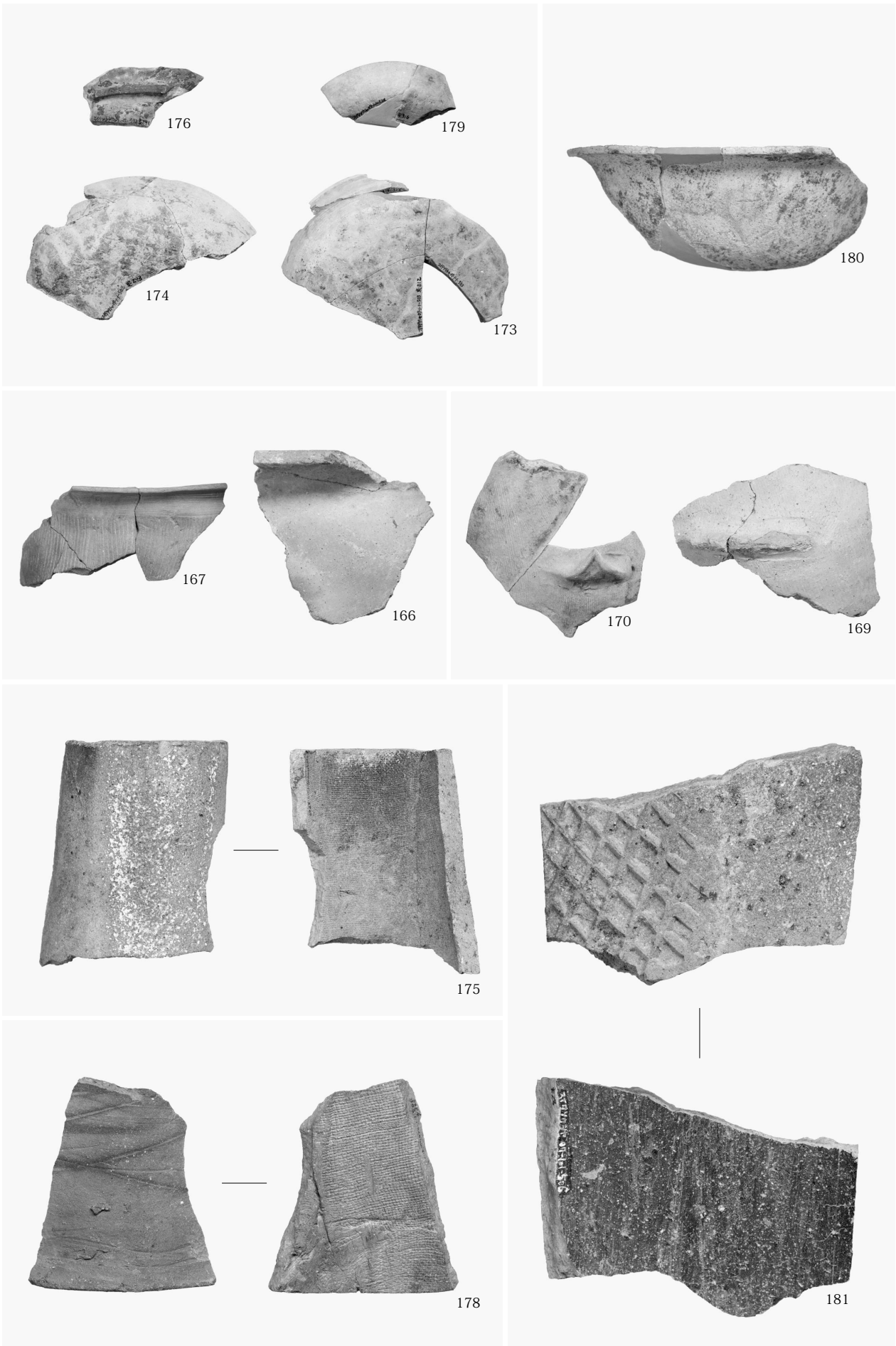
第4層 出土遺物(2)



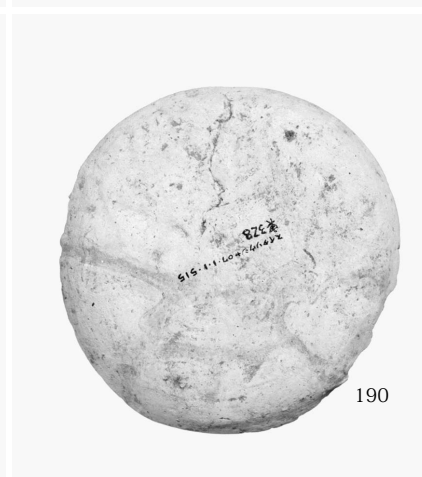
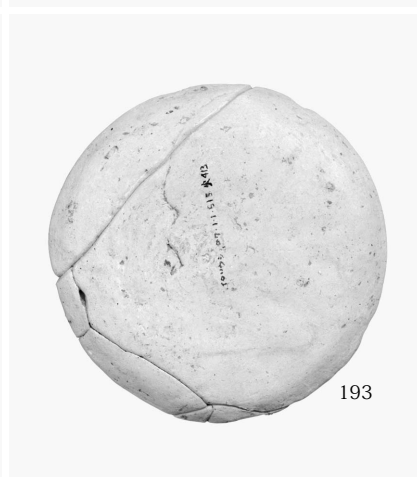
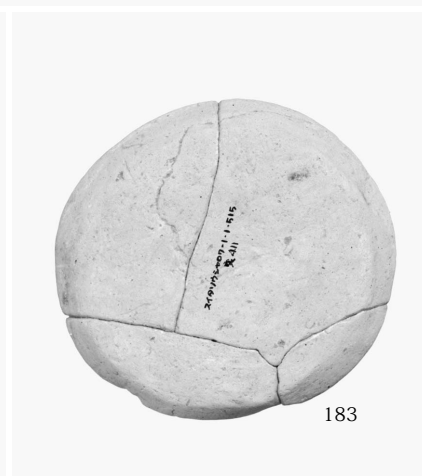
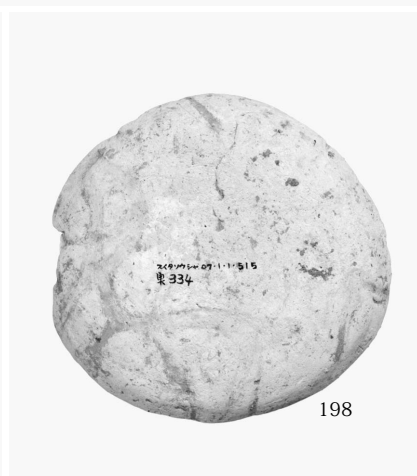
第4層 出土遺物(3)



第5面 321土手状遺構他 出土遺物

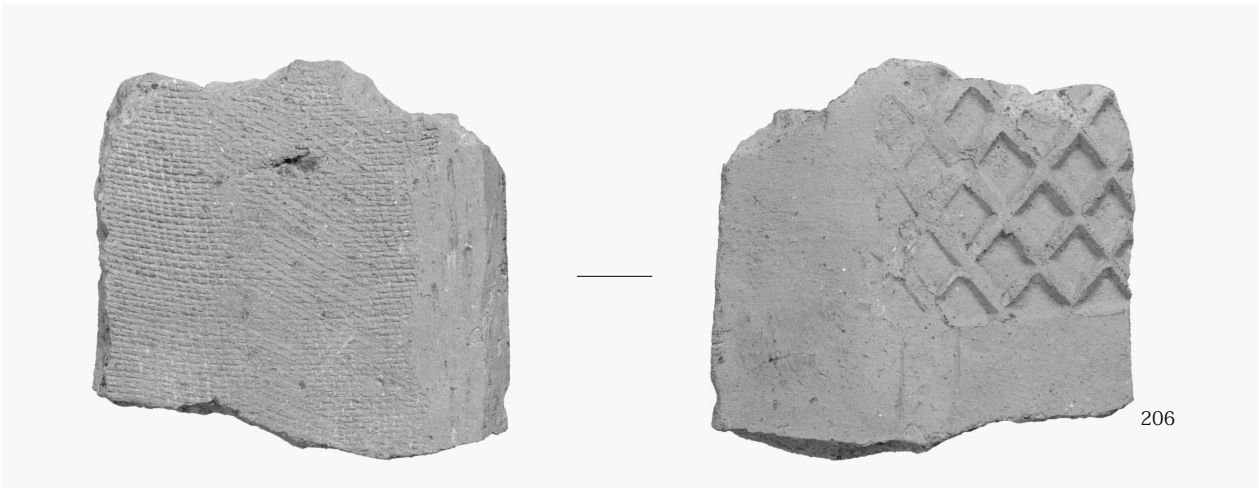
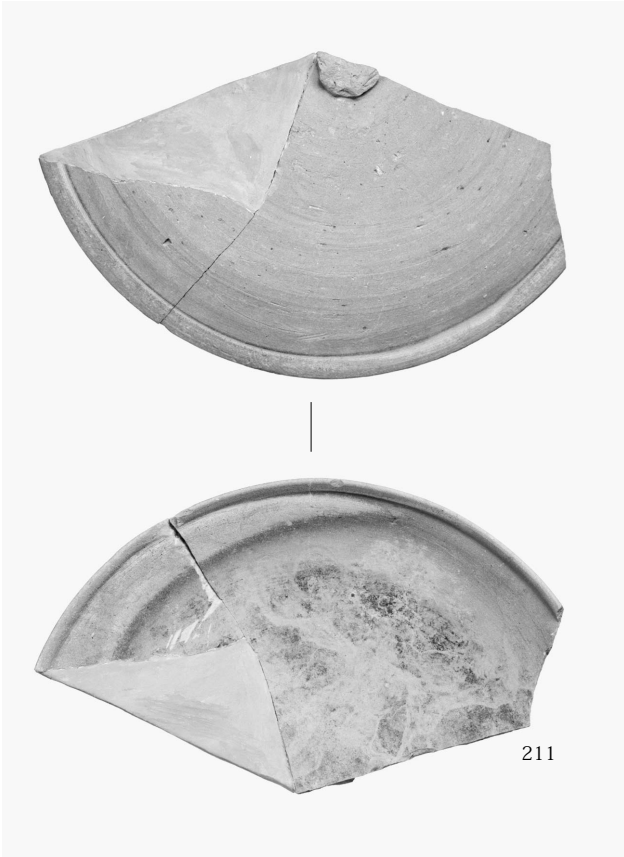
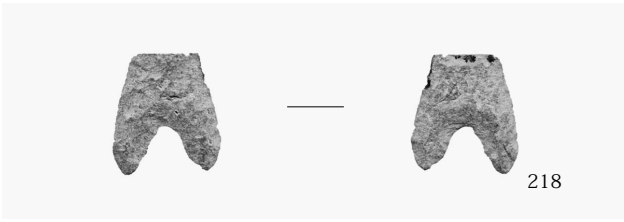


第5面 北東部遺構群 出土遺物

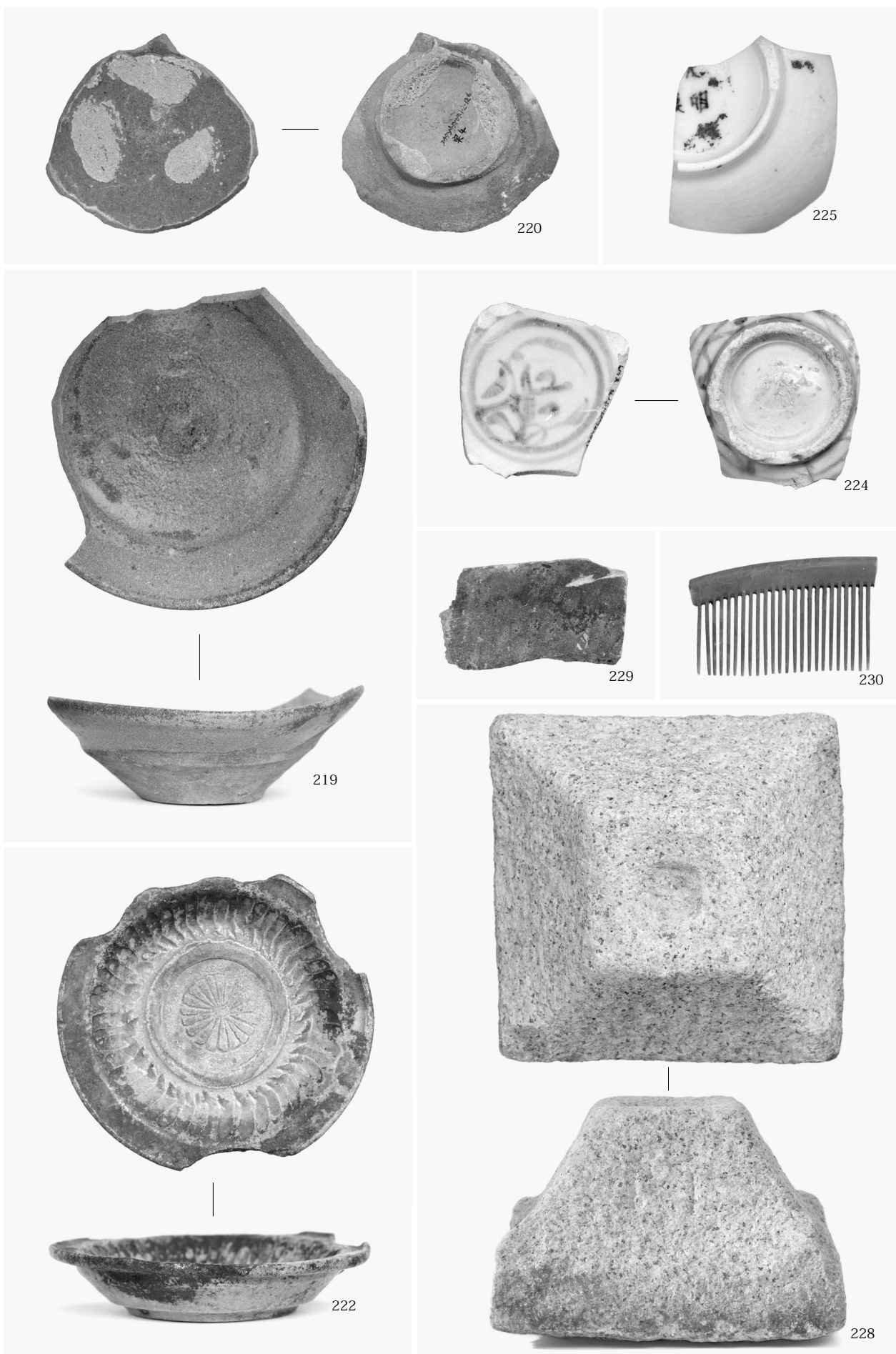


第5面 175土坑 出土遺物



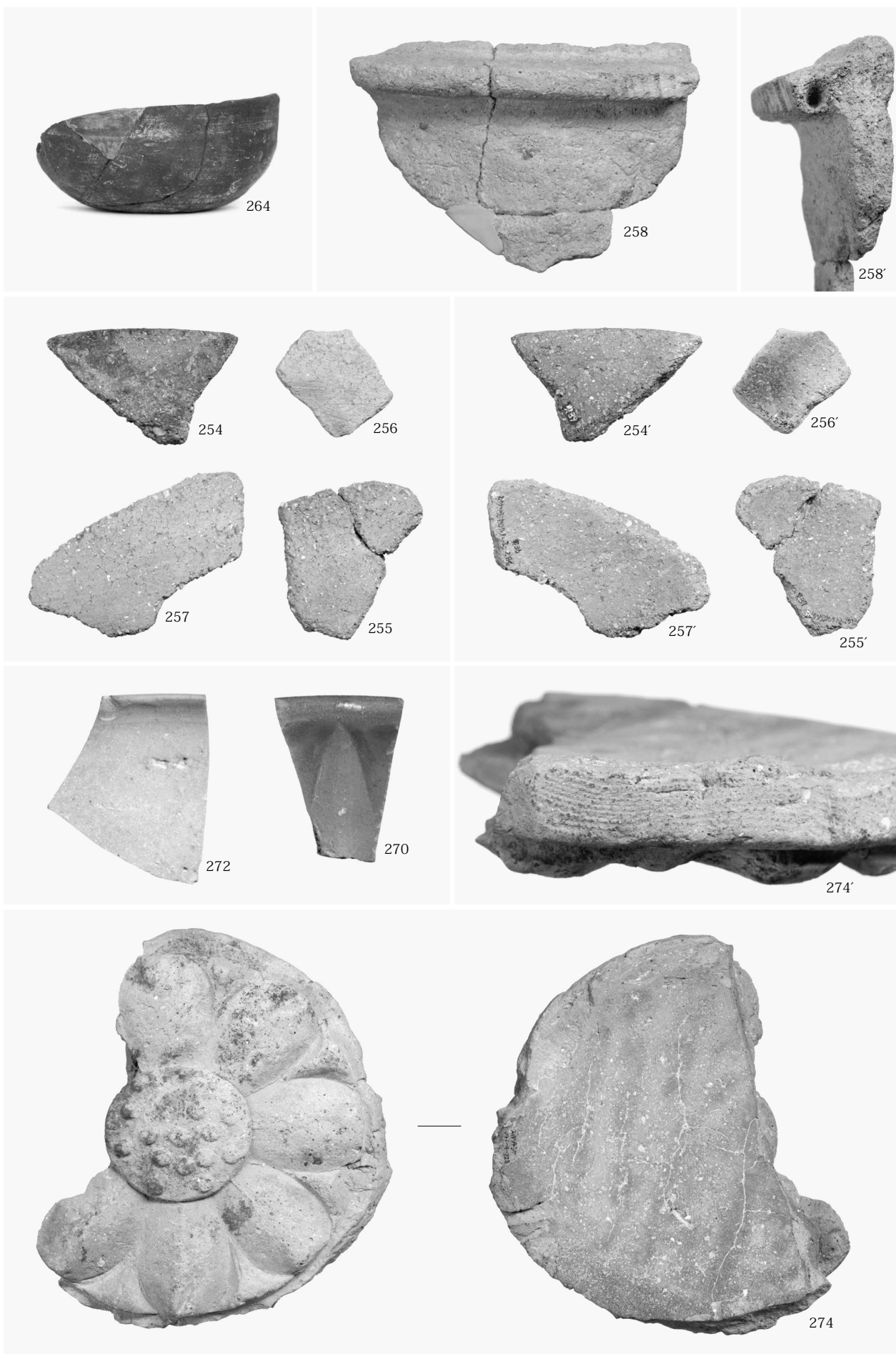


第5面・第5-2面 遺構、第5-2面直上 出土遺物

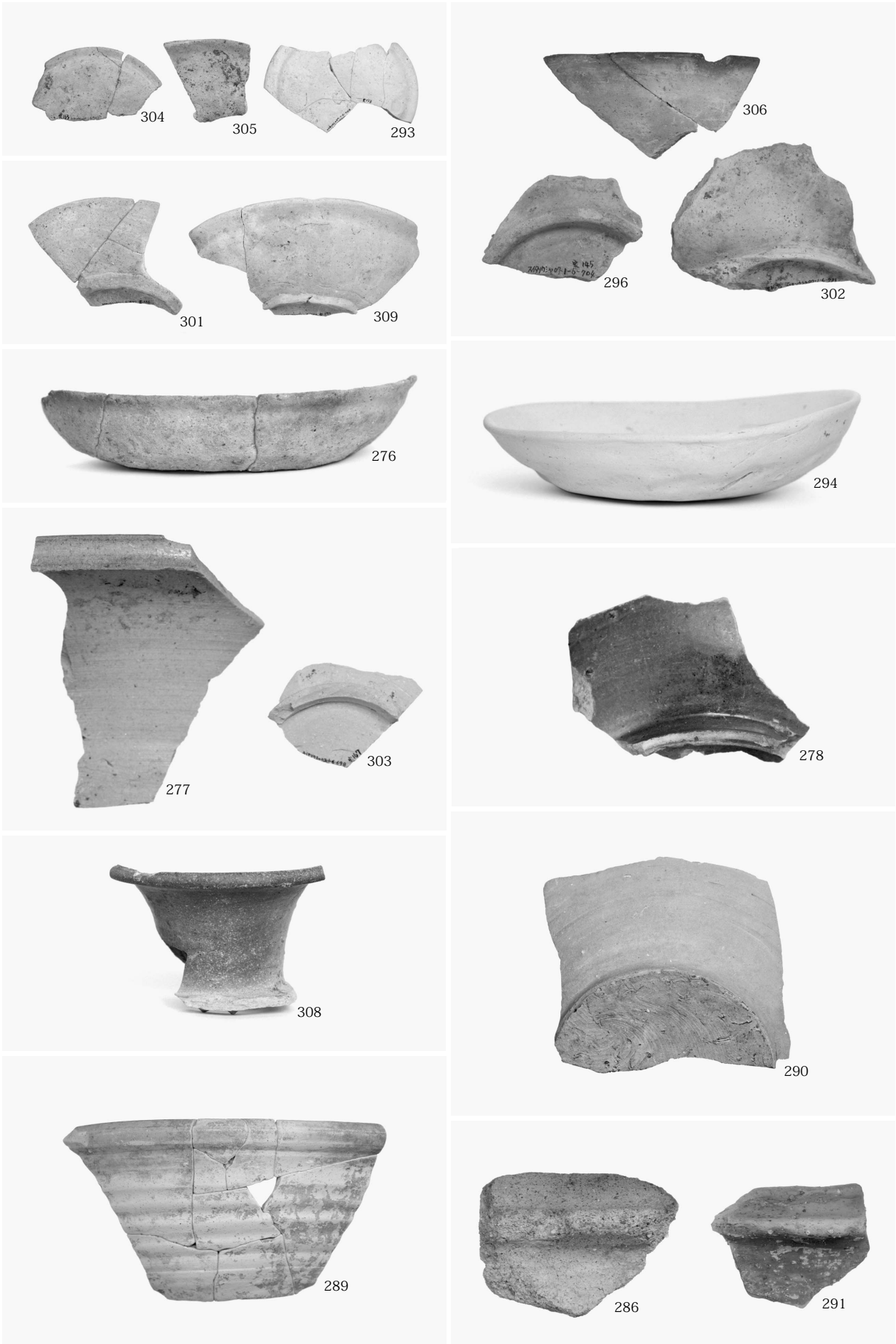


第3面 15池 出土遺物





第2地区 第5面 建物他、第4地区 出土遺物



第1面 遺構、包含層 出土遺物

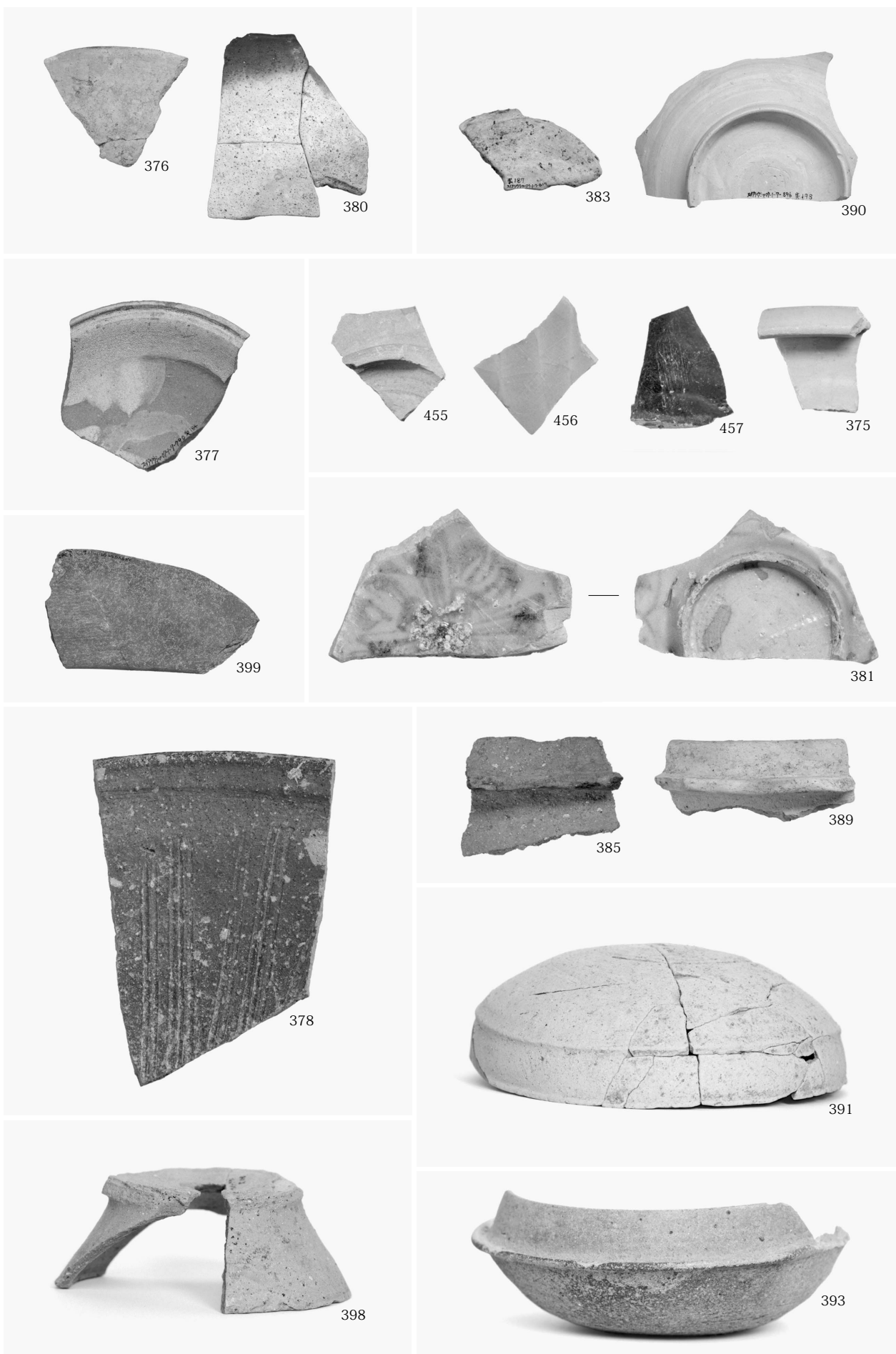




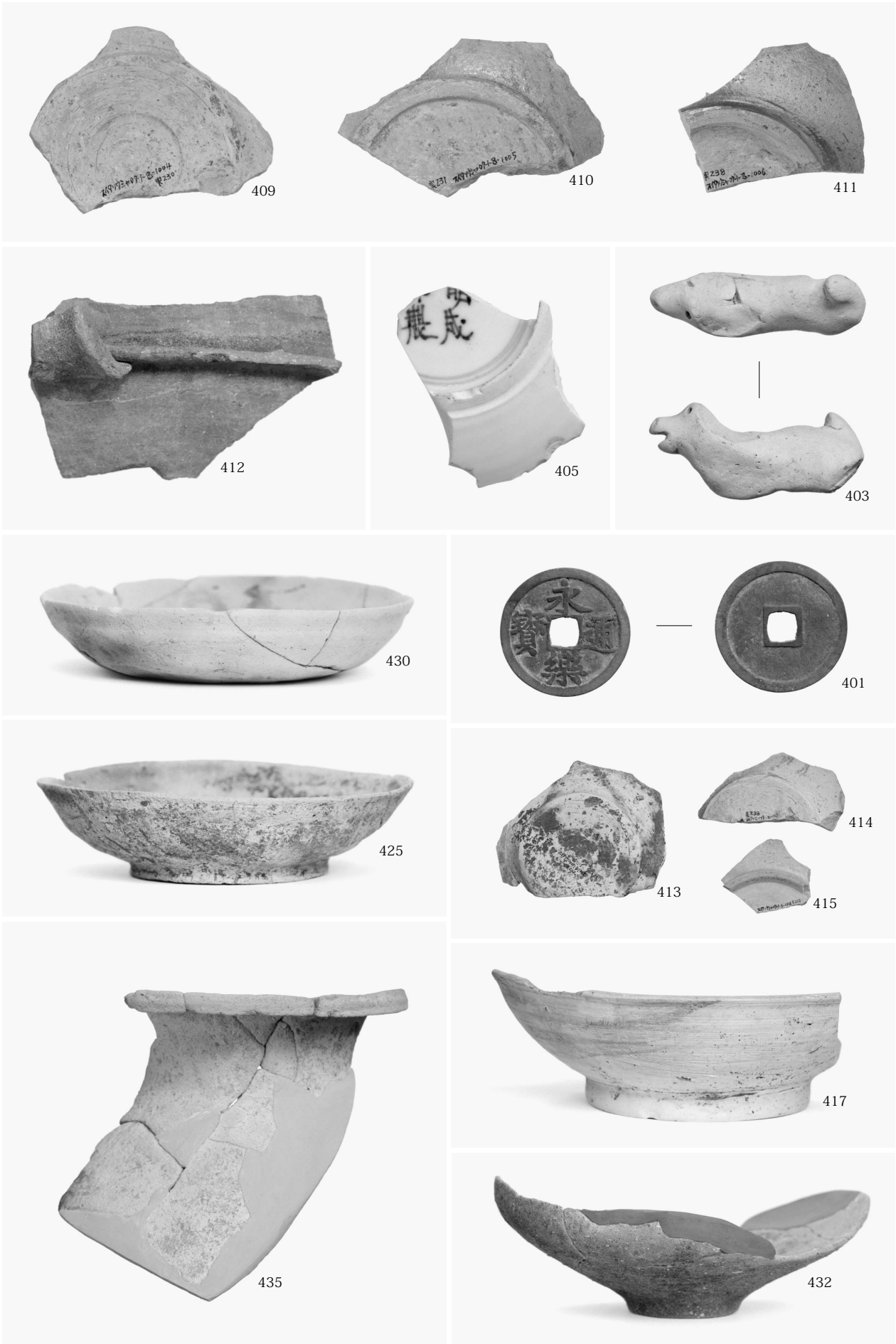
第1面 61土坑 出土遺物



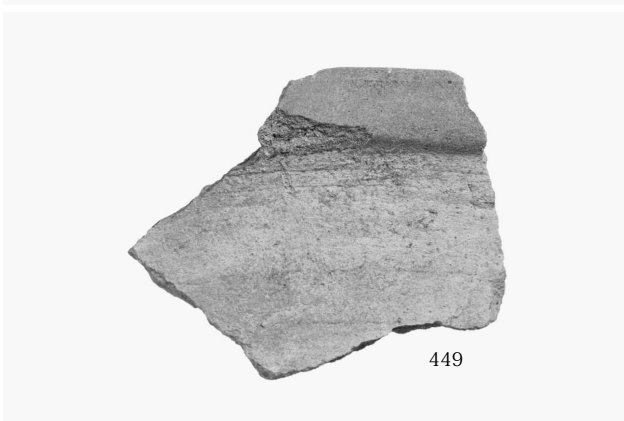
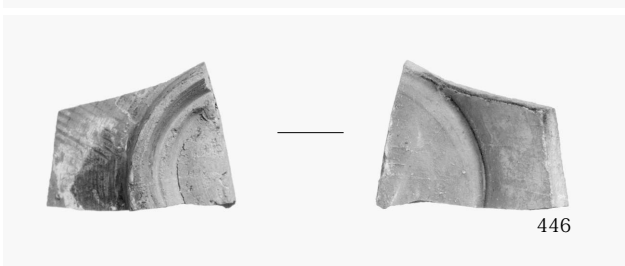
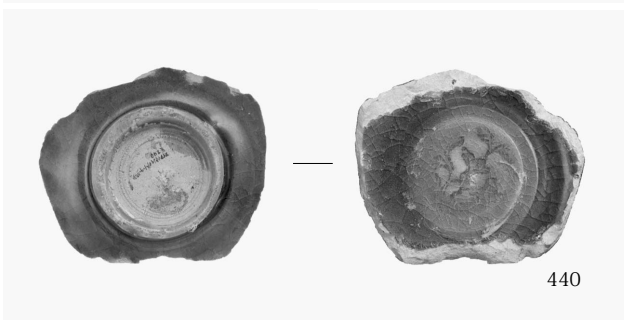
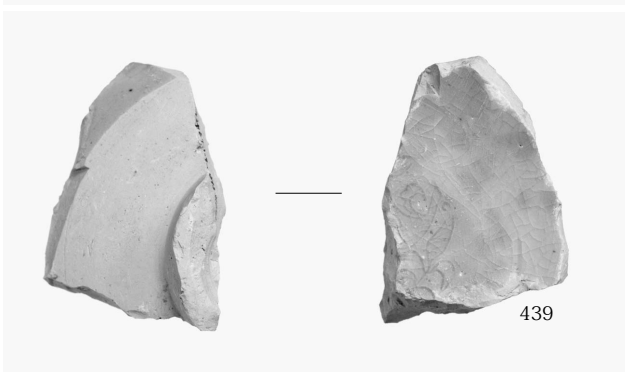
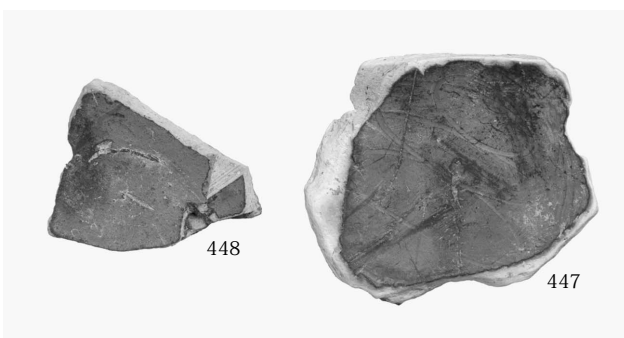
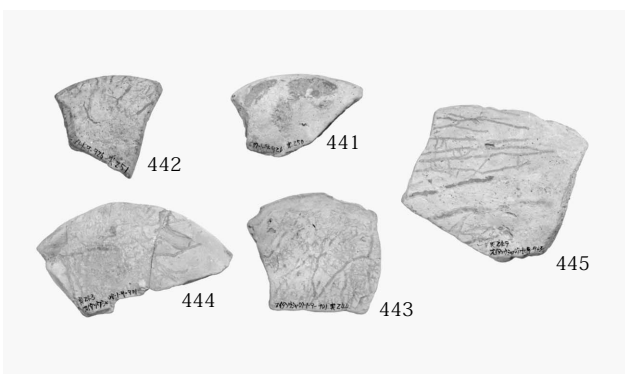
第1面 22土坑他 出土遺物



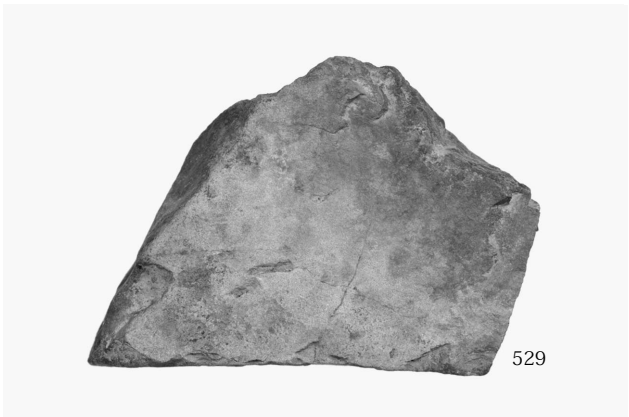
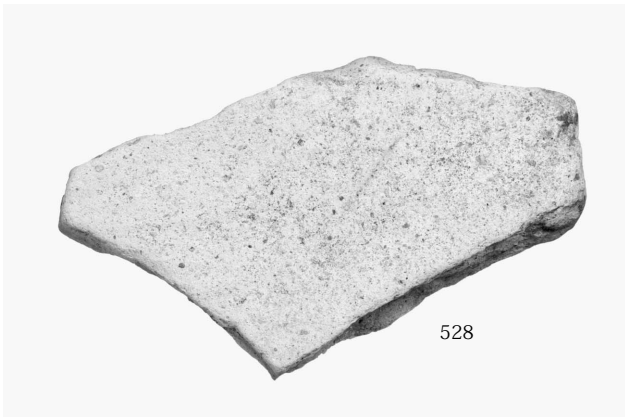
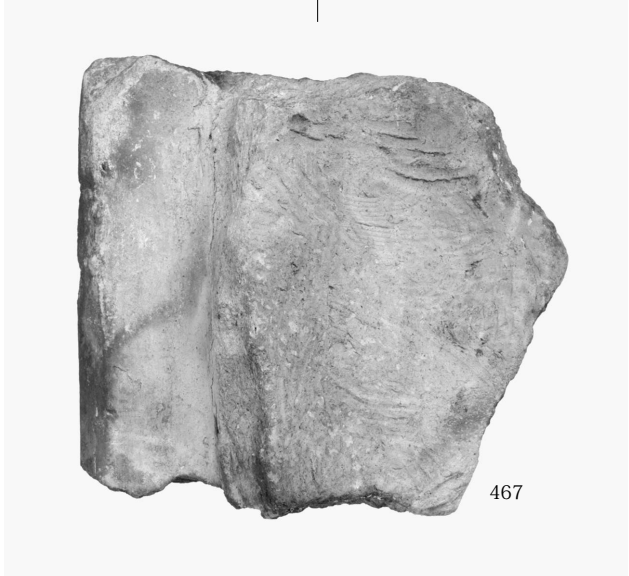
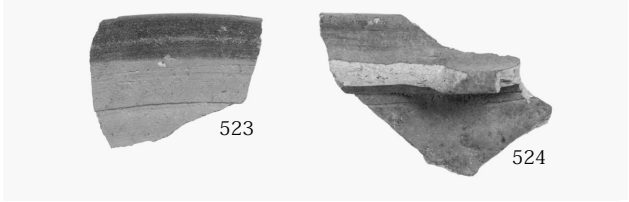
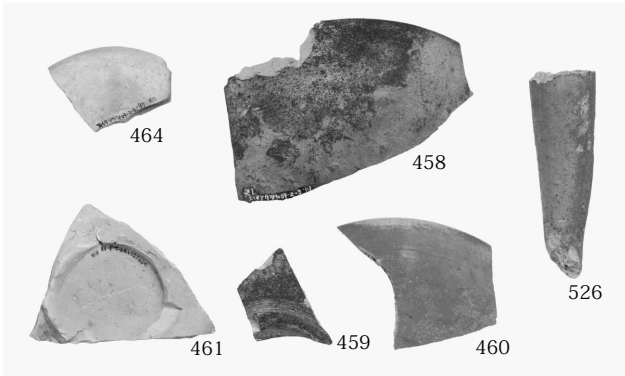
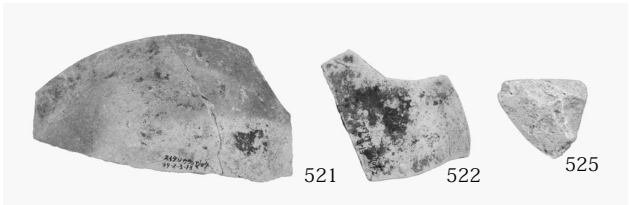
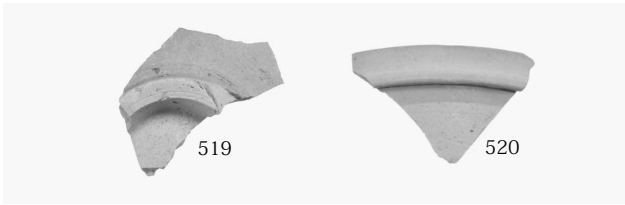
出土遺物



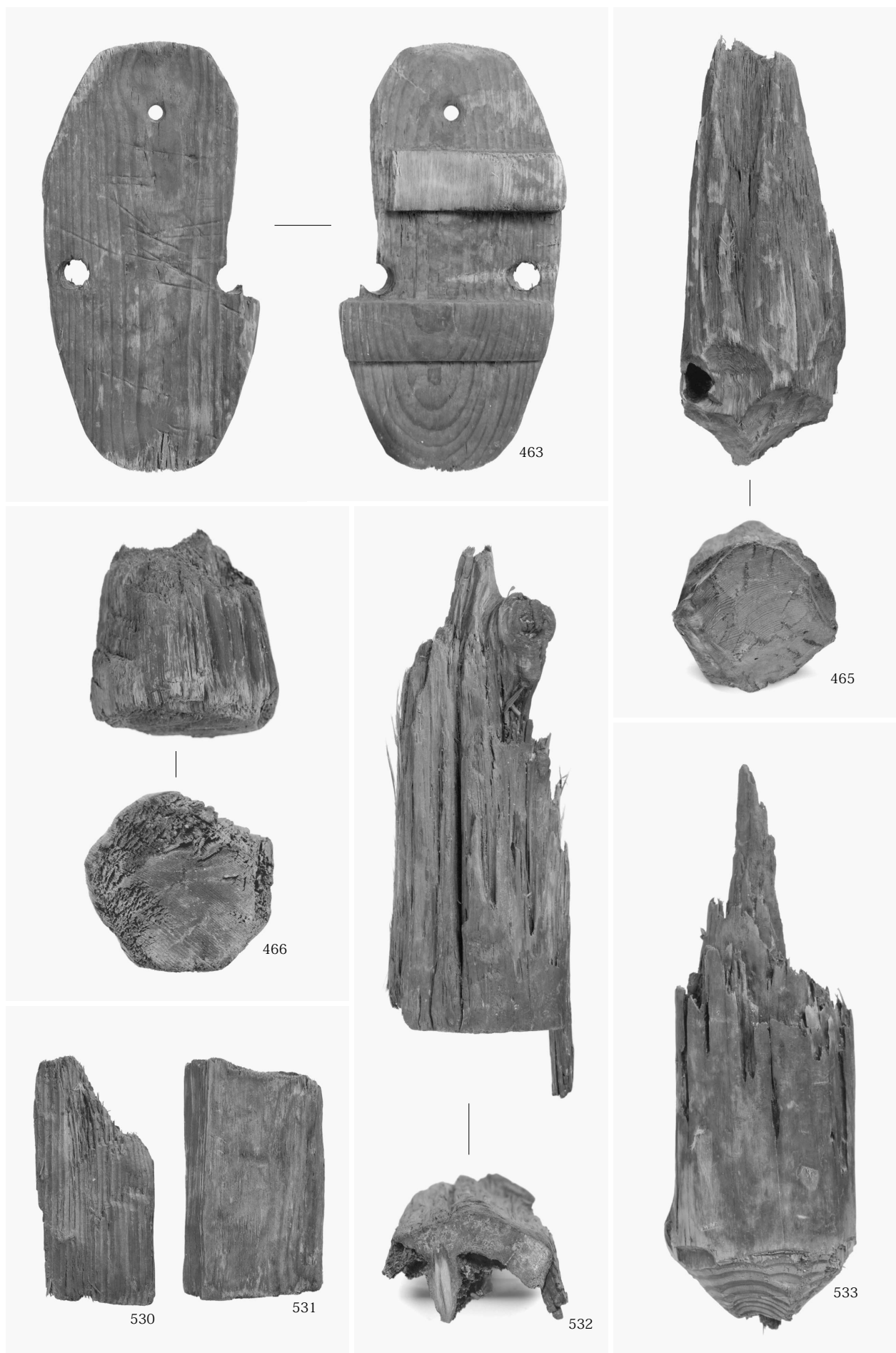
出土遺物



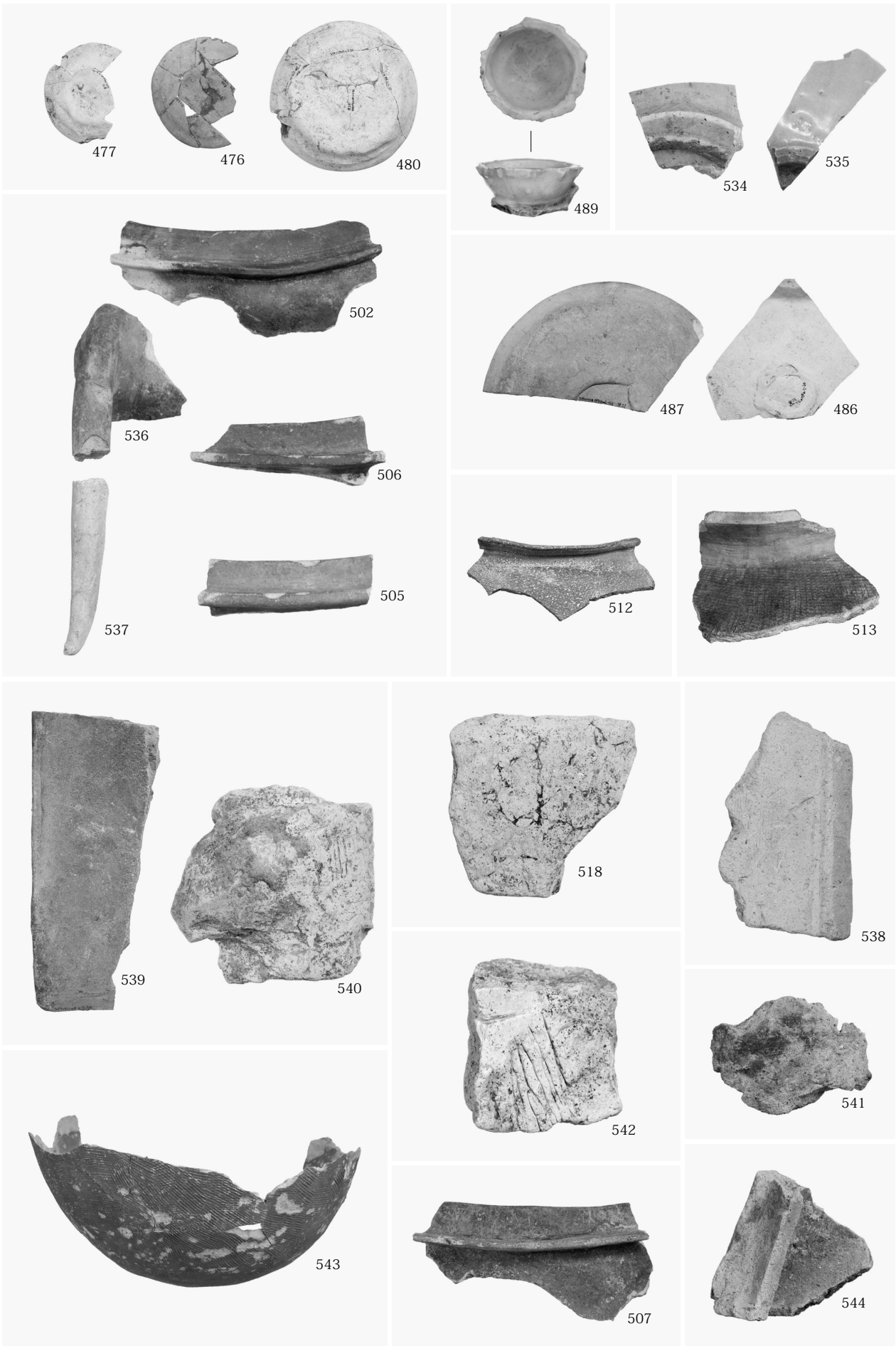




鋤溝群、第1層、第2層、柱穴（建物1）、ピット 出土遺物



柱穴（建物1）、柱穴（柱列1）、ピット 出土遺物



100土坑、110土坑 出土遺物



# 報告書抄録

ふりがな	すいた そうしゃじょう いせき よん						
書名	吹田操車場遺跡 IV						
副書名	吹田(信)基盤整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
巻次							
シリーズ名	(財)大阪府文化財センター調査報告書						
シリーズ番号	第201集						
編著者名	岡本圭司・亀井 聡・赤松佳奈・村上富喜子						
編集機関	(財)大阪府文化財センター						
所在地	〒590-0105 大阪府堺市南区竹城台3丁21番4号 Tel 072-299-8791						
発行年月日	2010年3月31日						
ふりがな	ふりがな	コード		緯度・経度	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号			m <sup>2</sup>	
すいたそうしゃじょういせき 吹田操車場遺跡	おおさかふすいたし 大阪府吹田市 しばたちょうほかちない 芝田町他地内	27205	73	北緯 34° 46' 00" ~ 34° 46' 25" 東経 135° 31' 38" ~ 135° 32' 06"	2007. 05. 01 ~ 2008. 11. 30 2009. 05. 07 ~ 2009. 07. 14	9366 m <sup>2</sup> 120 m <sup>2</sup>	吹田信号場基盤 整備工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項
吹田操車場遺跡	集落	弥生時代	土坑		弥生土器		
	集落	古墳時代	溝、井戸		須恵器		
	集落 田畑	奈良時代~ 平安時代	土坑、掘立柱建物、柵列、 土坑、溝		須恵器、土師器・緑釉陶器・ 灰釉陶器・輸入陶磁器・瓦		七尾瓦窯産と同型式瓦、吉志部瓦窯産 と同型式瓦、越州窯系碗、須恵器杯蓋 の転用碗、陶棺片
	集落 田畑	鎌倉時代~ 室町時代	掘立柱建物、井戸、土坑、溝、 畦畔		瓦器・土師器・須恵器・瓦質 土器・輸入陶磁器・瓦		
	田畑	中世~近世	池、井戸、耕作溝、畦畔		瓦器・土師器・須恵器・瓦質 土器・輸入陶磁器・瓦		
要約	<p>平成19・20年度調査の第1地区からは縄文時代の石鏃、第8地区からは弥生時代中期の土坑を検出した。第1地区の古墳時代後期の井戸からは栽培種の瓢箪類の果実や種子が出土した。</p> <p>同第6・第7地区からは平成11年度調査で検出された古代以前の直線的にのびる溝と同様の遺構を検出した。</p> <p>同第2・第6~8地区からは平安時代の掘立柱建物、柵列、溝等で構成される集落跡を検出した。古代には微高地上を居住域とし、低地部を耕作地として利用していたことがわかった。集落の廃絶後の平安時代の終り頃から中世初め頃にかけて耕地化が進み、中世から近世は、周辺一帯が広大な水田、畠地であった。</p> <p>平成21年度調査では、中世の掘立柱建物等が検出された。</p>						



(財)大阪府文化財センター調査報告書 第201集

## 吹田操車場遺跡Ⅳ

吹田（信）基盤整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

発行年月日／2010年3月31日発行

編集・発行／財団法人 大阪府文化財センター  
大阪府堺市南区竹城台3丁目21番4号

印刷・製本／株式会社 中島弘文堂印刷所  
大阪府大阪市東成区深江南2丁目6番8号